

ISSN 0918-9904

横尾墳墓群(中・近世墓)発掘調査報告

研究紀要第18-2号

2009(平成21)年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道間・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和60年度（現地調査：昭和60年7月1日～昭和61年2月27日）に実施した横尾墳墓群（所在地：松阪市伊勢寺町字横尾）の発掘調査に伴う出土品及び記録類を再整理し、その成果をまとめたものである。
- 2 現地調査は三重県教育委員会が主体となり、文化課主事の宮田勝功と田阪仁が担当した。報告書作成の各種作業には三重県埋蔵文化財センター職員があたり、執筆者名は文末に記した。
- 3 この報告書の作成にあたり、遺物洗浄・実測・トレース・写真撮影のほか、パソコンでの各種処理作業等、これまでにさまざまな室内整理作業には下記の方々のご協力を得た。(敬称略・五十音順)
足立純子、有川芳子、石橋秀美、伊藤裕偉、稲本賢治、井村浩子、江尻健、大川操、大西友子、奥山由美、小倉靖子、柿原清子、角正淳子、角谷泰弘、河北秀実、菊池淳子、楠純子、小坂宣広、小林佳代子、近藤豊美、須賀幸枝、鈴木美智子、孝久由希子、竹内英昭、竹田憲治、田中久生、谷久保美知代、田村陽一、中川明、中川章代、新田洋、野崎栄子、野田修久、浜崎佳代、平井治代、廣田洋子、堀さや子、松本春美、森貴子、山上由香、山崎恒哉、山本紀子、脇葉輝美。
- 4 当該遺跡の現地調査、遺物整理作業等に当たり、多数の方々からご指導、ご助言をいただいた。主な方々のみ記して謝意を表することをご了解願いたい。(敬称略・五十音順)
赤羽一郎、井上喜久男、磯部克、伊藤久嗣、柴垣勇夫、白石太一郎、田中琢、藤沢典彦、藤沢良祐、水野正好、山折哲雄（研究会座長・当時）、（故）山村宏、吉井敏幸。
- 5 なお、人骨の鑑定を京都大学靈長類研究所教授（当時）の江原昭善先生に、また焼成土壤焦土の熱残留磁気測定を富山大学の広岡公夫先生に依頼し、今回はその調査結果を旧稿のまで付篇として収録させていただいたことをお断りしておきたい。
- 6 当該遺跡の調査概要是『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』『同概報Ⅲ』（1986年、1987年、三重県教育委員会編）の他、『歴史手帖』（14巻11号、1986年、名著出版）、及び『佛教藝術』（182号、1989年、毎日新聞社）等にも投稿したが、本書を以って最終報告とする。
- 7 本書で報告した発掘調査記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書で使用の遺構表示記号は下記のとおりとする。遺構実測図作成には日本道路公団の工事用杭を用い、調査担当者の測量に基づき国土座標を算出した。調査対象地域は第VI系に属す。方位の表示は座標北を用い、標高は上記工事用中心杭を基準とした。
なお、文中に用いた略記号等は下記のとおりである。
S D : 溝（周溝）、 S K : 土抗（壙）、 S X : 出土人骨ないし納骨墓坑、 P : ピット
(川原石を用い方形または円形に圍む配石区画を一単位とする墓を、現地調査時には S R 番号で表記したが、旧称を廃して1号墓、2号墓、のように表記した。また、一般的には「土抗」を用い、墓には原則「土壤」を用いた。)

目 次

調査日誌抄	1
I. 前言	3
II. 遺跡の立地	3
III. 基本的層序	4
IV. 遺構篇	4
(一) 調査区の設定について	4
(二) 各地区的特徴	4
(三) A 地区の遺構	5
(四) B 地区の遺構	36
(五) C 地区の遺構	43
V. 遺物篇	46
(一) 石器	46
(二) 土器	47
(三) 金属製品	52
(四) 石製品・石塔類	53
(五) その他	57
VI. まとめ	57
(一) 縄文人の痕跡	57
(二) 経塚の可能性	58
(三) 土坑群の出現と性格	58
(四) 火葬施設SK 558と点火次第	60
(五) 配石区画墓の初現	62
(六) 配石区画墓の納骨形態	62
(七) 「土饅頭」と埴丘状特殊遺構	63
(八) 墓群と石塔の関係	64
(九) 横尾埴墓群の存続期間（推考）	65
VII. 文献資料篇	67
(一) 荒井勘之丞『寄墓日記』について	67
(二) 女男坂と国分尼寺跡	68
(三) 複数村による「惣墓所」	69
IX. 附篇（1）	70
三重県・横尾埴墓群出土の火葬人骨について	70
X. 附篇（2）	72
横尾埴墓群の考古地磁気測定	72

挿図目次

第1図 西南日本の過去2,000年間の考古地磁気 永年変化と横尾墳墓群A地区の 考古地磁気測定結果 74	第27図 B地区部分遺構平面図 103
第2図 西南日本の過去2,000年間の考古地磁気 永年変化と横尾墳墓群B地区の 考古地磁気測定結果 74	第28図 C地区全体遺構平面図 104
第3図 横尾墳墓群遺跡位置図 77	第29図 C地区全体遺構平面区割り図 105
第4図 遺跡地形図 78	第30図 C地区部分遺構平面図 106
第5図 調査前地形測量図（A地区） 79	第31図 C地区部分遺構平面図 107
第6図 調査前地形測量図（B地区） 80	第32図 C地区部分遺構平面図 108
第7図 調査前地形測量図（C地区） 81	第33図 C地区部分遺構平面図 109
第8図 A地区上層遺構平面図区割り図 82	第34図 A地区個別遺構実測図 110
第9図 A地区上層全体遺構平面図 83	第35図 A地区個別遺構実測図 111
第10図 A地区上層部分遺構平面図 85	第36図 A地区個別遺構実測図 112
第11図 A地区上層部分遺構平面図 86	第37図 A地区個別遺構実測図 113
第12図 A地区上層部分遺構平面図 87	第38図 A地区個別遺構実測図 114
第13図 A地区上層部分遺構平面図 88	第39図 A地区個別遺構実測図 115
第14図 A地区上層部分遺構平面図 89	第40図 A地区個別遺構実測図 116
第15図 A地区上層部分遺構平面図 90	第41図 B地区墳丘墓土層断面図 117
第16図 A地区上層部分遺構平面図 91	第42図 B・C地区個別遺構実測図 118
第17図 A地区下層全体遺構平面図 92	第43図 石鎚ほか遺物実測図 119
第18図 A地区下層遺構平面区割り図 93	第44図 須恵器ほか遺物実測図 120
第19図 A地区下層部分遺構平面図 94	第45図 三筋壺ほか遺物実測図 121
第20図 A地区下層部分遺構平面図 95	第46図 山茶碗ほか遺物実測図 122
第21図 A地区下層部分遺構平面図 96	第47図 和鏡ほか遺物実測図 123
第22図 A地区下層部分遺構平面図 97	第48図 土師器鍋ほか遺物実測図 124
第23図 B地区全体遺構平面区割り図 98	第49図 土師器皿ほか遺物実測図 125
第24図 B地区全体遺構平面図 99	第50図 刀子ほか遺物実測図 126
第25図 B地区部分遺構平面図 101	第51図 鉄釘ほか遺物実測図 127
第26図 B地区部分遺構平面図 102	第52図 古銭拓影ほか遺物実測図 128
	第53図 空風輪石塔実測図 129
	第54図 火・水輪石塔実測図 130
	第55図 地輪石塔実測図 131
	第56図 一石五輪塔ほか実測図 132

*第10～16、19～22、25～27、30～33図は縮尺1：100である。

挿表目次

第1表 各墓域ごとの人骨保存状況	71	第15表 A地区検出 土坑群一覧	150
第2表 人骨保存状況 (各墓域間における比較)	71	第16表 B地区 土坑群一覧	155
第3表 性・年令別分類表	71	第17表 C地区検出 土坑群一覧	161
第4表 A地区 SK570の磁化測定結果	75	第18表 出土遺物観察表 繩文時代の遺物	165
第5表 A地区 SK501の磁化測定結果	75	第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物	165
第6表 A地区 SK567の磁化測定結果	75	第20表 出土刀子類観察表	178
第7表 A地区 SK568の磁化測定結果	75	第21表 出土鉄釘観察表	179
第8表 A地区 SK558の磁化測定結果	75	第22表 出土錢貨観察表	180
第9表 A地区 SK581の磁化測定結果	75	第23表 石塔計測部位凡例	185
第10表 B地区 SK668の磁化測定結果	75	第24表 A地区組立式五輪塔一覧表	186
第11表 B地区 SK608の磁化測定結果	75	第25表 A地区三輪一石・ 二輪一石五輪塔計測値一覧	204
第12表 横尾墳墓群の考古地磁気測定結果	75	第26表 A地区一石五輪塔計測値一覧	209
第13表 A地区検出 配石区画墓一覧表	133	第27表 B地区石塔計測値一覧	212
第14表 B地区検出 特殊遺構 (墳丘状盛土遺構)	150		

写真目次

第1図 A地区・B地区の全体航空写真	217	第9図 B・C地区出土繩文遺物、 A地区出土転用藏骨器など	225
第2図 A地区調査前全景（南から）、 A・B地区全景斜め写真	218	第10図 A地区出土山茶碗、常滑産甕、 土師器鍋、皿類など	226
第3図 A地区上層遺構全景（南から）、 A地区北尾根テラス状墓域	219	第11図 A地区出土土師器皿類、和鏡、 常滑大甕、刀子など	227
第4図 A地区残存墓道の一部、 山頂部182号墓付近、13号墓ほか	220	第12図 古銭、人骨、石英、貝がら及び 組立式五輪塔の空風輪各種	228
第5図 A地区58号墓、220号墓、351号墓ほか 各種配石区画墓など	221	第13図 組立式五輪塔の各種火輪	229
第6図 A地区406号墓、413号墓、423号墓、 243号墓ほか	222	第14図 組立式五輪塔の各種水輪	230
第7図 A地区土壤SK531、火葬施設SK558、 B地区墳丘A・墳丘Bなど	223	第15図 組立式五輪塔の各種地輪	231
第8図 B地区墳丘C、土坑群、 C地区土坑SK788、SK828など	224	第16図 三輪一石・二輪一石及び 各種一石五輪塔	232
		第17図 宝篋印塔相輪部及び笠部、石仏、 現地説明会風景ほか	233

調査日誌抄

昭和60年(1985年)

- 7月1日 (月) 晴 土工部門委託業者入札決定。現地打ち合せ。調査作業方法の協議、確認。
地元自治会等挨拶 (4日まで)。
- 4日 (木) 晴 現地アバウト事務所設置。
- 5日 (金) 晴 調査前遠景写真撮影。
- 8日 (月) 晴 安全作業等注意事項指示。伐開清掃開始。地形測量基本杭設置。
- 10日 (水) 一時雨 図面No.5平板測量了。
- 13日 (土) 晴 図面No.4平板測量了。
- 16日 (火) 晴 図面No.1平板測量了。道路公団(名古屋)新任課長他4名視察。
- 18日 (木) 猛暑 図面No.2平板測量了。地区杭設置(東西A~U、南北5~60)。
- 19日 (金) 嘘大雨 図面No.7平板測量了。
- 23日 (火) 晴 パーリング37-設置。図面No.6平板測量了。
- 24日 (水) 晴 A・B地区伐開清掃終了。両地区全景写真撮影。A地区北斜面作業用足場設置。A地区土壠削、配石区画道構査出開始。刀子、人骨等出土。
- 26日 (金) 晴 作業安全管理厳重注意。危険区域設定。五輪塔取上げ開始。
- 27日 (土) 晴 図面No.8平板測量了。
- 29日 (月) 晴 A地区L17で藏骨器出土。
- 30日 (火) 猛暑 文化庁記念物黒崎直氏ほか3名視察。
- 31日 (水) 晴 図面No.9・10平板測量了。
- 8月2日 (金) 晴 図面No.11平板測量了。
- 6日 (火) 雨 個別道構平面図作成、写真撮影開始。文化課長他7名視察。
- 9日 (金) 一時雨 C・B・Cテレビ映画社5名打合せ来訪。
- 19日 (月) 晴 図面No.12平板測量了。
- 20日 (火) 晴 図面No.13平板測量了。C・B・Cテレビ映画社現場撮影。
- 8月21日 (水) 一時雨 A地区25%配石区画道構査出了。国立歴史民俗博物館白石太一郎氏ほか3名視察。
- 22日 (木) 晴 図面No.14・15平板測量了。
- 23日 (金) 晴 A地区N19で和鏡出土。
- 24日 (土) 晴 A・B・C地区調査前地形測量全て終了。
- 27日 (火) 晴 A地区で津日配石遺構、五輪塔、人骨等墨々検出。毎日新聞記者取材。
- 29日 (木) 曇 抜根作業開始。
- 9月3日 (火) 晴 A地区遺構検出。五輪塔採取続行。B地区にトレンチ調査入れる。
- 4日 (水) 晴 道路公団松阪事務所副所長視察。
- 5日 (木) 晴 A地区L16で石垣、多数の五輪塔を検出。
- 10日 (火) 晴 B地区埴丘状遺構にセクション設定。
- 11日 (水) 晴 NHK取材。一志都社会教育主事会見学。元興寺文化財研究所吉井敏幸氏、藤沢典彦氏視察。
- 12日 (木) 曇 道路公団名古屋支局課長他視察。B地区調査区域設定、重機導入抜根・表土剥削、道構査出開始。航空撮影準備協議。
- 20日 (金) 晴 A地区残土処分開始。
- 21日 (土) 曇 セスナ機による航空撮影。
- 26日 (木) 晴 B地区埴丘状遺構断面図作成開始。
- 27日 (金) 曇 田坂・宮田は静岡県磐田市一ノ谷中世墓群発掘調査現場を視地見学。
- 10月1日 (火) 晴 奈良大学教授水野正好氏視察。A地区東側斜面にトレンチ。
- 2日 (水) 晴 B地区埴丘状遺構断面図終了。
- 8日 (火) 晴 A地区航空測量用杭打ち。A地区埴丘状遺構断面割り、断面図作成開始。
- 10月14日 (月) 晴 奈良大学助手植野氏、県教育委員会秘書課長・文化課長他視察。
- 15日 (火) 晴 京都府精華町教育委員会社会教育課長他4名視察。
- 18日 (金) 晴 横原考古学研究所調査課長泉森岐氏視察。
- 21日 (月) 晴 毎日新聞記者取材。
- 22日 (火) 晴 每日新聞記者取材。三重大学教授八賀晋氏他4名視察。B地区土壤断面図作成開始。
- 23日 (水) 晴 一宮市教育委員会岩野見司氏ほか3名視察。

			名視察。
24日(木)	晴	B地区土壤断面図終了。県内埋蔵文化財担当者はか53名視察。	7日(火) 晴 A・B地区調査後現況地形測量開始。
25日(金)	晴	道路公团松阪事務所長他3名視察。 B地区土壤セクション撤去。	11日(土) 晴 地形測量図面No.1終了。
29日(火)	雨	対航空測量業者現地説明会。	14日(火) 晴 地形測量図面No.2終了。
11月1日(金)	晴	三重大学名誉教授服部貞蔵氏ほか5名視察。	19日(土) 晴 C地区表土除去開始。
8日(金)	晴	A・B地区写真撮影。道路公团名古屋建設局次長ほか3名、県土木部長他視察。航測業者営業課長ほか現地下見。	20日(月) 晴 地形測量図面No.3終了。
9日(土)	晴	A・B地区写真撮影。	21日(火) 晴 地形測量図面No.4終了。C地区遺構検出、繩文時代早期土器(押し型文)破片出土。
11日(月)	晴	航測業者事前打合せ。航測用ロープ等設置。	22日(水) 曇雪 地形測量図面No.5終了。
12日(火)	曇	A・B地区清掃。写真撮影。	25日(土) 晴 委託業者との最終打合せ。
13日(水)	晴	強風のため航測撮影不可。15日に延期。	2月6日(木) 晴 C地区遺構検出、遺構掘削・埋土除去作業終了。
14日(木)	晴	A・B地区写真撮影。	7日(金) 晴 C地区清掃作業。
15日(金)	晴、強風	航測撮影再度延期。	8日(土) 晴 C地区写真撮影開始。
16日(土)	曇	航測撮影敢行。午後発掘成果現地説明会開催、130名参加。	12日(水) 晴 C地区地形測量用杭設定。
19日(火)	晴	配石区画構造の石搬去作業開始。	13日(木) 晴 C地区調査後現況地形測量開始。
20日(水)	晴	松阪市役所建設部長ほか2名視察。	17日(月) 晴 C地区地形測量終了。
25日(月)	晴	A地区下層遺構検出開始。	18日(火) 雪 C地区だめ押し調査。
26日(火)	晴	A地区下層土壤個別図面作成及び遺物取上げ開始。	21日(金) 小雪 A・B地区土工部門委託業務完了現地検査実施。
29日(金)	晴	A地区下層遺構写真撮影開始。B地区土壤図面補足作業。	25日(火) 晴 C地区写真撮影終了。
12月3日(火)	晴	B地区だめ押しトレンチ調査。	26日(水) 晴 静岡県埋蔵文化財センター平野吾郎、佐野五十三氏現地視察。
5日(木)	晴	B地区埴丘状遺構断面割り調査、C地区確認トレンチ調査開始。	27日(木) 晴 C地区遺構レベル測量完了。
12日(木)	晴	C地区確認トレンチ調査終了。	3月19日(水) 晴 現場アドバイス事務所撤去。現地調査終了。
18日(水)	晴	B地区埴丘状遺構断面図作成、及び埴丘基底部調査終了。	3月30日(日) 晴 静岡県磐田市で開催のシンポジウム「中世墳墓を考える」(同実行委員会主催)に参加・報告(田坂仁)。
19日(木)	晴	A地区下層遺構検出だめ押し作業開始。	8月29日(土) 国立歴史民俗博物館共同研究会「日本における基層信仰の研究」(座長山折哲雄教授)で調査概要報告(田坂仁)。
25日(水)	晴	A・B地区写真撮影開始。	12月3日(水) 晴 1年以上を経て悪条件ながら、熱残留磁気測定用サンプルの採取・測定を富山大学広岡公夫教授に依頼した(新田洋ほか現地同行)。
27日(土)	晴	C地区土工部門委託業者決定。(年末始休業)	平成2年 11月28日(水) 京都大学塗長類研究所の江原昭善教授による出土人骨の鑑定。(補助員奥山由美)
昭和61年(1986年)			
1月6日(月)	晴	C地区土工部門委託業者現地打合せ。	

I. 前言

既に、『近畿自動車道第8次区間（久居～勢和間）の発掘調査報告書』第1分冊（1989年3月）および第2分冊1・2（1990年3月）において、（1）調査に至る経緯、（2）調査及び整理方法、（3）調査体制等の具体的な詳述がある（1～6頁）。当該横尾墳墓群（中世墓群）の発掘調査もその一環に含まれており、（1）～（3）は他と変るところがない。紙幅の都合上、ここには重複を避け省略に従う。

II. 遺跡の立地

当該遺跡を取り巻く「位置と歴史的環境」も、既に上記第1分冊の1（13～19頁）、および第2分冊の1（7～10頁）と2（7～8頁）に、河瀬信幸、田村陽一、新田洋の三氏がそれぞれ過不足なく詳述している。これも両書に譲ることにして、ここでは横尾墳墓群の立地のみを簡略に記述する。

当該遺跡の所在地は松阪市伊勢寺町字横尾という。JR松阪駅から西南西方向へ直線距離にして約6.25km離れた山頂にある。松阪市丹生寺町で、国道166号線に沿った阪内川にかかる三郷橋を渡り、北西方向に走る県道丹生寺一志線（松阪第二環状線）で嬉野方面に向かう途中の左手山中にある。

三郷橋から約2km、松阪市岡山町（旧県道沿いの五輪岬の手前約520m付近）で、左手の山道に入つて坂道を登る。なだらかな山道を進むこと約250m程で分岐点に達し、右折してクランク状の坂道を経て、尾根筋上の山道を約380m程登ると、標高119.7mの山頂に出た（近畿自動車道により消滅した）。ちょうど西側に聳える堀坂山（標高757m）の尾根筋の一つが、堀坂川の右岸で東方に向かって葉脈状に分岐しながら延びるが、その最先端部のひとつに位置する。概ね北緯34°33'26"、東経136°28'23"付近である。

伊勢富士と呼ばれる堀坂山と觀音岳を開析してV字型の谷間をつくった堀坂川は、東流して平野部に開口し、扇状地を形成した。当該遺跡の北東側麓に位置する伊勢寺はその扇頂部に拓かれた集落である。川は集落を貫流して三瀬川に合流し、伊勢湾に注ぐ。川の左岸には伊勢寺魔寺跡があり、奈良・平安時代から栄えた地域であった。当地域には物部神社

や、三輪大神を勧請したと思われる大神神社なども近隣にあって（註1）、阿坂（アザカ）とも隣接する歴史的に重要な地域であった。当遺跡の西方約500mには伊勢寺城跡があり、『勢陽五鉢遺響』などは「小管備後守住ス又後ニ久瀬五郎左衛門尉住セリ」といい、中世城館には違いないが、北畠氏の配下にあつた危急時の跡跡であろう。

從つて、永禄12（1569）年の織田軍による南伊勢侵攻に際し、それを迎え撃つた北畠具教が本拠を渥山城（津市美杉町多氣）から松阪の大河内城に移したこともあり、至近距離にある伊勢寺城にもいち早く攻撃の手がのびたと想像できる。当山B・C地区に累々とあった火葬土坑は、そういう時代背景をも考慮してみておく必要がある（註2）。

山頂（A地区）から東方伊勢湾への眺めは素晴らしい、眼下に伊勢平野を望み、晴天には知多半島、渥美半島や伊良子岬・神島までも眺望することができた。恐らく中世墓が造られた当時ならば、富士山をも遠望できたに違いない。當中世墓群は、当初からその見晴らしのよい山頂付近～東斜面を中心で造成された。そして、背後の堀坂山それ自体が、広く南勢地域の農耕民から信仰を集めた神名備山であったと思う。山頂には今も近世の石造經塚が建っている。この山の形は眺める場所により大きく異なるが、南勢櫛田方面から眺めたときが最も秀麗な円錐形に見え、しかも、春分の日の頃には觀音岳との間に太陽が沈む（奈良の二上山をふと思わせた）。南勢地域の漁民たちが山見にも使った富山である。當中世墓群の死者たちはそういう山の一枝脰に葬られたのであつた。

註1　式内社研究会編『式内社調査報告』第六巻、東海道1、1990年、伊勢国飯高郡647頁～656頁（小林裕八執筆）。勧請の時期は不明だが、三輪神の地方への分配・勧請が「およそ六世紀から七世紀中葉ころまでに行われた現象」とする見解がある（前田晴人著『三輪山』学生社、2006年、第二章34頁参照）。

註2　安岡親義著、倉田正邦校訂『勢陽五鉢遺響』(4) 三重県郷土資料刊行会、1977年、120頁。平松令三監修『三重県の地名』平凡社、1983年、539頁。

III. 基本的層序

A地区とB・C地区では、遺構の検出状況も異なり、出土遺物にも差異があった。

A地区では、表土直下に配石区画遺構が密集して検出され、それらを除去した後、場所によって約0.4～0.8m掘下げた下層で土坑群（火葬土坑・土塙墓）を検出した。基本的な層序は①表土：黒褐色腐植土、②包含層：淡黄褐色、③地山：淡橙褐色土で構成される。

B・C地区では、特殊な墳丘遺構を除けば、A地区のような配石区画遺構は皆無で、概ね表土直下に近いところから累層とした火葬土坑群を検出した。基本的な層序は①表土：暗褐色腐植土、②包含層：暗黄褐色土、③地山：淡橙褐色土となるが、表土から地山（遺構検出）面までは浅く、平均的に約0.2m前後であった。

IV. 遺構篇

（一）調査区の設定について

当該遺跡の範囲は、地形測量図（第5～7図）から判るように、標高120.0～109.0mにおよぶ山頂部から尾根筋部分のほぼ全域にわたる。今回の緊急調査対象地内だけに限定しても、当該遺跡の面積はおよそ5,600m²に及ぶ。遺跡の範囲は更に道路計画線区域外へも延びると推測できた。

現地には、現存の山道（幅員約2m）がながらかなS字状に走る。雜木類、排出土・石類等の場外搬出に効率を上げる目的で動力機械を導入したため、山道の機能を最後まで温存して調査区から除外した。その山道を基準（境界線）に、発掘調査区を大きく3地区に分けた。北側からA地区、B地区、C地区と命名し（第8図）、調査計画の立案等にもこの区分を用いた。

（二）各地区の特徴

【A地区：配石区画墓と土坑】地表面は当初から多数の川原石と石塔類に覆われていた。川原石を用いた配石区画遺構（第9図・第13表）は、規模の大小はあるが、概ね0.25～0.35m大の川原石を用いて方形や円形状に区画したもので、これを墓の一単位として配石区画墓と呼称する。川原石と五輪塔類を除去した後に、下層（場所により地表から約0.3～0.8

m下）で比較的規模の大きい土坑群を検出した。両者が重複して機能的に一体となる例はむしろ稀で、出土遺物の違いなどからも、下層で検出した大半の土坑群と上層の配石区画墓群とは、基本的に別個の遺構で、それ自体が當世墓の変遷を物語る。中には、火葬土坑を伴い、かつ方形周溝を巡らした配石区画墓（方形周溝墓）もあり、その形態は単一ではない。

【A地区：テラス状造り出し】北方向に分岐して延びる尾根筋の右側（東）斜面全体は、6段のテラス状に造り出されていた（写真第3図下）。崩落もあったが、各テラスの現存幅はおよそ2～6mあり、そこに配石区画墓を築いていた。

【B地区：墳丘状遺構】尾根筋に沿って畳々と続く火葬土坑群と墳丘状の特殊な遺構がある。A地区のような配石区画墓ではなく、石塔類の出土も遙かに少ない。調査区北側（A地区との境界）に偏して大型の墳丘状遺構が1基あった。うち2基は明らかに土坑群より後出であった。いずれも墳丘上に石列や階段状遺構を残し、462号墓（墳丘B）のように埋納施設を有する例もあった。B地区土坑群の平均的規模はA地区的土坑群に比して小ぶりで、焼土や炭化物、古鉄や鉄針等の伴出が顕著であった。

【C地区：縄文時代の遺物】引き続き尾根筋に沿つてB地区と同様の土坑群を連続的に検出した。唯一、B地区と異なる点は、墳丘状遺構ではなく、石塔類の出土が皆無であったことと、縄文時代（早期以降）の遺物が少量ながら出土したことである（第43図・第18表）。

以上、基本的にA地区とB・C地区との相違は、遺構形態の面だけではなく、石塔類の多寡・有無にもある。大量の石塔類がA地区に集中し、B地区での出土が極めて少なかったのは、江戸時代後期の人為的な移転（註3）を考慮してもなお、両地区が果たした機能的特徴（性格の違い）の反映であろう。

註3 後掲の荒井勘之丞『寄墓日記』を参照されたい。

(三) A 地区の遺構

① : 全体を、 a) 北尾根支群(第一～第六テラスから東側中央斜面)、 b) 西部域、 c) 山頂部と東尾根筋、 d) 南・東城斜面、の4ブロックに分けて記述する(第13表)。② : 形状的に異なる墳丘状遺構は区分し、③ : 想定される墓道についても言及したい。

はじめに検出した配石区画墓群を「上層検出遺構」とし、航空測量後にそれらを除去した後に、その下層で検出した土坑群を以て「下層検出遺構」とした。(「上部遺構」や「下部遺構」)にすると、上下の遺構がすべて一对のものだと誤解される恐れがあり、また、「上部構造」「下部構造」という、本来は史的唯物論の概念で用いる学術用語を無節操に使用することを回避したからである)。

[上層検出遺構]

① 配石区画墓群(1～460号墓)

原位置を保たない、川原石や石塔類が立雖の余地なく散乱していた。現地では、石塔類を探上げる際に、一単位の墓と考えた配石区画墓に通し番号(SR)を付けたが、同時平行の分担作業であったため、重複や欠番を生じる結果をもたらした。可能な限りグリット順に遺構番号を新規に付けなおした(第13表・第9～16図)。

配石区画墓内から普遍的に人骨が出土したわけではない。人骨の出土しない墓は多数あった。墓と墓との間から出土する場合も多々あり、配石区画墓内でも、中央部からの出土は案外稀で、片隅に偏在することが比較的に多かったし、場所によっては石と石との間から出土する例もある、その理由は分からぬ。配石区画墓の総数や墓域の全体規模の大きさに比して、蔵骨器の出土は少ない(当稿では「骨蔵器」の用語は用いず、「蔵骨器」に統一したことをお断りする)。

a) 北尾根支群(1～108号墓)

調査区の最北端部に位置するグリッドT10・11からM19及びN19のグリッドに至る急峻な斜面に造り出された6段のテラスは、標高がおよそ108.0m付近から119.0m前後の範間にあり、比高差は約11.0mに達する。

テラス状造り出し部分の第1段目は標高108.0～109.4m前後、第2段目は標高109.4～110.6m前

後、第3段目は標高111.8～112.4m前後、第4段目は標高113.6～115.0m前後、第5段目は標高115.4～116.0m前後、第6段目は標高115.4～119.0m前後に、それぞれ位置する。また、各テラス間相互の比高差は、1段→2段;最大でも1.5m、2段→3段;約2.0m前後、3段→4段;約2.5m、4段→5段;約1.5m前後、5段→6段;約2.0～3.0m前後であった。

テラス幅の最も狭い所は2～3mと狭隘で、斜面や裾部には上段から崩落した多数の五輪塔のほか、川原石が集積・散乱していた。ここで確認得た総墓数は108基を数える。

【第一テラス】(1～11号墓・第13表、第10図)

1号墓 平面形状は方形。長辺1.2×短辺1.0m、約0.3m大の川原石を用いる。最北端に位置し、区画内から地輪A0753～4や火輪A0456を採取。墓域は更に北方向に標高を下げつつ調査区外に延びる。その雑木林の中で墓と思しき墳丘1基を確認していたが、その後、何者かによって盗掘を受けたのが悔やまれる。

2号墓 1号墓の南西側に接する。3号墓西辺から約0.3m大の石が東西方向に4個並び、現状でのプランは台形。空風輪A0242～3、空風火輪A0793、火輪A0440～3、水輪A0548、地輪A0671、一石五輪塔A0946、相輪A1042、宝鏡印塔基礎部A1048を採取(台座かも)。それが宝鏡印塔の原位置を示すものかどうかは不明である。

3号墓 方形で、1.2×1.0mと推定できる。区画内からの出土遺物はない。

4号墓 方形と想定するも規模は不明。一石五輪塔の地輪部と思しき破片を採取した。

5号墓 方形。約0.3m大の川原石を全面に敷き詰めた状態。推定規模は1.2×1.1mで、出土遺物はない。

6号墓 完全な形を留めないが、約0.45m大の川原石を用い、ほぼ1.0×1.0mの方形と推定した。遺物はない。

7号墓 一部重複する9号墓より古く、規模は不明だが、方形プランと推定。南辺に偏して人骨S X 146が出土したが、蔵骨器は伴わない。地面に直接埋めたか、有機質の容器であったために腐蝕してのこらなかつたかである。當世墓ではそういう例がたいへん多かった。

8号墓 やや小規模で0.7×0.6m。7号墓の区画

南西角に取付く形でできた後出の墓である。出土遺物はなし。

9号墓 やや円形に近いが、 $1.0 \times 0.7\text{m}$ 以上の方形。東側は崩落。7号墓の東辺を少し侵食する形で出来た後出の墓である。出土遺物はなかった。

10号墓 8号墓の南側約9mの所にあり長方形。 $1.5 \times 1.1\text{m}$ 。区画中央部に 0.4m 大の扁平な石がある。地輪A0755を採取。土壌SK474(IV類)を伴う墓であった。

11号墓 10号墓に連続する方形墓、 $1.2 \times 1.0\text{m}$ 。空風輪A0236を採取。下層で土壌SK475(IV類)を検出した。11号墓に伴う一体の遺構である。

【第二テラス】(12~28号墓、第13表・第10図)

12号墓 二重方形を呈する。外区画は $2.1 \times 1.7\text{m}$ 、内区画は $1.2 \times 1.0\text{m}$ であった。火輪A0427を採取し、埋土中から土師器小皿の破片(269~272)が出土した(第19表)。

13号墓 やや石が動いているが、本来 $2.0 \times 1.5\text{m}$ の長方形墓とみる。3ヶ所で人骨SX82・SX83・SX84を検出した。SX82だけは14世紀前半代の土師器鍋(104)を藏骨器にしていた。他は藏骨器を持たない。埋土中から15世紀後葉~16世紀前葉頃の土師器小皿破片(273~275)が出土しており、当墓への納骨には少なくとも2時期を考慮する必要があると考える(第19表・遺構第34図・遺物実測第48図・写真第4・10図)。

14号墓 少なくとも東辺は完全に崩落し、正確な形状・規模は不明で、出土遺物もなかった。

15号墓 やや小さい方形で、 $0.9 \times 0.8\text{m}$ 。相輪A1039と一石五輪塔A0939を採取した。

16号墓 配石区画が遺らないので規模等は不明ながら、2ヶ所で人骨SX85・SX91が出土した。藏骨器はない。

17号墓 東側の大半が崩落し原形を留めないが、一边が 1.2m 内外の方形墓と推定。3ヶ所から人骨SX86・SX87・SX89が出土した。いずれにも藏骨器はなかった。

18号墓 15号墓に隣接した $0.7 \times 0.7\text{m}$ の方形墓。区画内で、宝瓶印塔笠部破片、水輪A0542を採取した。

19号墓 $0.2 \sim 0.3\text{m}$ 程の川原石を敷詰めた径 0.8m の円形墓。地輪A0752を採取した。

20号墓 $1.2 \times 0.8\text{m}$ の長方形墓。2ヶ所から人骨SX88・SX148が出土。前者から13世紀後半代の土師器鍋破片(98)が出土した。区画内から空風輪A207~8を採取した。

21号墓 $1.4 \times 1.4\text{m}$ の方形墓で、珍しく区画中央部から人骨SX90が出土したが藏骨器はない。空風輪A0211~2を採取した。当墓の南側 1.5m 地点からも人骨SX147と13世紀末~14世紀末葉頃の土師器小皿破片(116)が出土した。

22号墓 19号墓の東に隣接する $1.4 \times 0.9\text{m}$ の長方形墓。区画の南隅で人骨SX93を検出したが、藏骨器はない。

23号墓 19号墓同様に $0.25 \sim 0.3\text{m}$ 大の川原石を敷詰めた、 $1.5 \times 0.9\text{m}$ の長方形墓。出土遺物はない。

24号墓 $2.0 \times 1.0\text{m}$ の空閑地のほぼ中央部で人骨SX92を検出したが、藏骨器はない。規模不明の長方形墓とした。

25号墓 24号墓に南接する小規模な長方形墓。ほぼ $1.0 \times 0.8\text{m}$ の規模と推定した。出土遺物はなかった。

26号墓 24号墓に東接した $1.3 \times 1.3\text{m}$ の方形墓。区画中央部付近に 0.3m 大の川原石を据える。遺物はなかった。

27号墓 26号墓に南接した $1.3 \times 1.2\text{m}$ の方形墓。

28号墓 25号墓に南接した $1.3 \times 1.3\text{m}$ の方形墓。

【第三テラス】(29~37号墓、第13表・第10図)

29号墓 当テラス最北に位置する。もとの形をのこさず正確な形状・規模は不明。空風輪A0196~A0200、水輪A0539~A0541を採取。石塔は崩落か人為的な集積の可能性もある。

30号墓 29号墓に東接。北東側が崩落。 $1.4 \times 1.0\text{m}$ の長方形墓と推定。31号墓の北辺を共用した後出の墓である。

31号墓 本来 $2.0 \times 1.6\text{m}$ の長方形墓と推定。南西隅で人骨SX94を検出するも、藏骨器は確認できなかつた。30号墓・32号墓より先行する墓。

32号墓 北西側の配石を欠くが径 0.7m の円形墓。中心部に 0.3m 大の川原石を据える。31号墓の南辺区画の一部を共用して出来た後出の墓である。

33号墓 32号墓に南接する $1.5 \times 1.3\text{m}$ の長方形墓。区画の北辺に偏して人骨SX178を検出したが、藏骨器は残存しない。埋土から15世紀後葉~16世紀初

頃頃の土師器小皿破片(268)が出土している。空風輪A0082~3、地輪A0603~A0607を採取した。

34号墓 32号墓の南西にあり、形状・規模は不明。33号墓との西接地点で人骨S X80を検出した。藏骨器はない。水地輪A0905、地輪A0658を採取。埋土中から14世紀末~15世紀前葉頃の土師器小皿破片(239)が出土。恐らくはそれ以降の築造ではないかと類推する。

35号墓 33号墓に南接する1.1×1.0mの方形墓。

36号墓 東辺側の配石は遺らないが、35号墓に南接する1.8×1.0mの長方形墓。出土遺物はなかった。

37号墓 原形をよく留めた1.3×1.0mの長方形墓。空風輪A0201~4、空風火輪A0860、一石五輪塔A0938を採取。上段テラスからの崩落も多い。埋土から15世紀後葉~16世紀前葉頃の土師器小皿破片(267)が出土。当墓はそれ以降の築造か。南側に同規模の墓がもう一基あったかも知れない。

【第四テラス】(38~46号墓、第13表・第10~11図)

38号墓 長径1.9×短径1.2mの楕円形状の墓。長方形の可能性もある。地輪A0653を採取した。

39号墓 北東辺が崩落し遺らないが、復元した規模1.5×1.0mの長方形墓。当墓の周囲から空風輪A0229~A0230、空風火輪A0792・A0864、一石五輪塔A0944・A0961・A0996を採取したが、人為的・無作為に集積された可能性が強い。

40号墓 38号墓の南西に接する、1.5×1.5mの方形墓。空風輪A0191~A0192・A0255、火輪A0425、一石五輪塔A0993を採取した。

41号墓 40号墓に東接し、北東辺を39号墓の西辺と平行する形に取って、規模1.5×1.2mの長方形墓に復元した。出土遺物はない。

42号墓 41号墓の南東側2mのところにある。1.4×1.3mの方形墓と推定。出土遺物はない。

43号墓 42号墓の南東に接続。テラス縁辺部が崩落し原形を留めず。1.0×0.9mの方形墓と推定。空風火輪A0863、水地輪A0885、一石五輪塔A0934・A0943を採取した。

44号墓 東側の大半が崩落し原形を留めない。西辺は現状で1.0mあるので、規模はそれに近い方形墓と推定。西側隅の土中から人骨S X171を検出。藏骨器はない。

45号墓 テラス縁辺部の北・東・南三方に崩落があり、原形を留めない。推定規模を1.5×1.3mと復元した。

46号墓 45号墓と同様、原形を留めない。2.0×1.2mの長方形墓と推定。空風輪A0220、火輪A0434、地輪A0666~A0668を採取。地輪A0667とA0668の2基は南北方向に並び、それに西接して土師器皿細片(時期不明)が出土した。

【第五テラス】(47~61号墓、第13表・第11図)

47号墓 北東辺は遺らないが、2.0×1.0mの長方形墓と推定する。空風輪A0216~A0218を採取した。

48号墓 47号墓に南接する一辺1.0mの方形墓と推定。45号墓の区画西側の右列に西接して13世紀末頃~14世紀後葉頃の土師器皿(127)が出土した。出土した遺物の年代観の差異から、49号墓に先行すると推定した。

49号墓 48号墓に西接した1.0×0.8mの長方形墓。15世紀前葉~中葉頃の土師器小皿(237)が出土。48号墓より後出の墓と推定。15世紀後葉頃までには築造されたか。

50号墓 ほぼ1.1×1.0mの方形墓。火輪A0432を採取した。

51号墓 50号墓の区画西辺を共用した一辺1.0mの方形墓。空風輪A0219を採取。49号墓と接する区画の外で、人骨の一部が地面に突刺した状態で出土。上段からの崩落かも知れない。

52号墓 50号墓・51号墓の南東に隣接した1.4×1.3mの方形墓。水輪A0553、地輪A0740を採取した。

53号墓 52号墓の東側に張出した1.3×1.2mの方形墓と推定。一石五輪塔A1002、地輪A0741~A0742を採取。配石列の切り合(前後)関係からみて52号墓より後出の墓である。

54号墓 52号墓と55号墓の間隙を利用した後出の墓で、規模は0.9×0.6m。出土遺物はない。

55号墓 1.2×1.0mの方形墓と推定。出土遺物はない。

56号墓 55号墓の南側に隣接。1.2×1.0mの方形墓。空風火輪A0791を採取。約0.15~0.2m掘下げたところで土壤S K486(IV類)を検出したが何も出土せず、両者の関係も確定できなかつた。

57号墓 56号墓の東側に隣接するが、崩落で原形

を留めない。西辺は1.0m。一石五輪塔A1003・A0962～A0963などを採取した。

58号墓 56号墓との間に約0.3mの通路あり。1.2×1.1mの方形墓。中央部に0.15m内外の川原石4個を用いた小区画がある。それを、351号墓や411号墓にも見られる石引いの納骨施設の類例と判断した。

59号墓 58号墓に東接する1.3×1.0mの長方形墓と推定。一石五輪塔A0995を採取。山茶碗の小破片も出土した。

60号墓 58号墓の南東側で約50cmの通路を挟む、1.2×1.0mの方形墓。東半分は少し崩落している。下層土坑SK484（II A類）とは別の遺構である。

61号墓 60号墓に南接する。崩落で原形は留めぬが、少なくとも1.2×0.8mの長方形墓と推定した。遺物はない。

【第六テラス】（62～83号墓、第13表・第11図）

62号墓 テラスの最北にあり、北接する斜面側は下段（第四テラス）の40号墓に向けて崩落する。方形又は長方形墓。南西辺は1.2mあり、西接する墓道側に並ぶ石列のため二重の区画にも見える。概ね中央部に近い位置から人骨SX95が出土したが、蔵骨器はない。空風輪A0188～A0189、火輪A0122、水輪A0536、空風（火）輪A0857～A0858を採取した。

63号墓 62号墓の東に隣接。北・東辺が崩落のため正確な規模は不明ながら、現状で1.8×1.5mの長方形墓と推定。

64号墓 63号墓に南接。1.8×1.6mの方形墓。

65号墓 2.5×1.4mの長方形墓。62号墓と同じ理由で区画の西辺だけ二重石列になる。区画配石の前後関係からみて、63号墓・64号墓・66号墓・67号墓に先行する墓と推定。区画中央部東寄りから人骨SX97が出土。蔵骨器は伴わない。空風輪A0185～A0187、地輪A0737、一石五輪塔A0935・A1006（空風火輪のみ）、相輪A1037を採取した。

66号墓 67号墓と同様の墓間通路部分に、65号墓の南辺石列に取付く形で増築された1.7×1.4mの長方形墓。後半69号墓の割り込みにより区画の東南部分に現状変更を受けた。空風輪A0178を採取した。

67号墓 東側が崩落するが、64号墓と70号墓の間の通路を転用した1.4×0.9mの長方形墓。空輪A0008（梵字入り）、空風輪A0179～A0180、地輪A

0615を採取した。

68号墓 西接する墓道側の配石が遺らず、南側に崩落もあり、全容は不明。1.5×1.5m前後の方形墓と推定。区画中央南寄りで人骨SX96が出土したが、蔵骨器はない。空風輪A0173～A0175、空風火輪A0856、火輪A0413、地輪A0736を採取。地輪A0736は区画配石に転用された可能性がある。

69号墓 66号墓・68号墓・70号墓の間の空隙を利用して造った後出の梢円形墓。長径1.0×短径0.6m。このため、先行する上記3ヶ墓の配石列には現状変更があった。出土遺物はない。

70号墓 東辺側崩落のため正確な規模は不明。西辺側は1.3mで、区画中央部に0.3m大の川原石を3個使い囲むような空間がある。58号墓、351号墓、411号墓にも見られる納骨用の施設と推定。土坑SK467（II B類）と平面上は部分重複の関係にあるが、別遺構。因みにこの東側斜面で人骨SX267と土師器小碗の破片（85）が出土した（第19表・第47図）。

71号墓 70号墓に南接する1.5×1.0mの長方形墓。火輪A0415を採取。当墓に近接して空風輪A0181～A0183、火輪A0416も採取した。

72号墓 68号墓・71号墓間の通路を利用した後出の長方形墓。規模は1.5×0.7m。出土遺物はない。

73号墓 68号墓との間、南北幅約3m×東西幅約2mの規模で崩落があり、正確な形状・規模は不明。対面する120号墓・122号墓と同様に、墓道に沿う約1.0m四方の方形墓と推定。水地輪A0882、地輪A0735を採取。この地輪は明らかに区画用配石に転用されていた。東側斜面の下で人骨SX262と土師器小皿破片（266）を検出した。

74号墓 73号墓に南接する約1.1×1.0mの方形墓。一石五輪塔A0970を採取した。

75号墓 西接する墓道側にやや張出した1.2m四方の方形墓。火輪A0331を採取した。

76号墓 75号墓の東から南側にかけて約5m程度、比高差約0.6～1.0mの低いテラスが分岐する。当墓はその低いテラス上にある。区画の東辺が崩落するが、一辺1.0mの方形墓と推定。空輪A0005、空風輪A0061・A0273、水輪A0503、水地輪A0874～A0875、A0893、地輪A0584～A0585、A0612、一石五輪塔A0920～A0921を採取。上段からの崩落かど

うか、判別するのは困難だった。

77・78号墓 75号墓の南東側へ幅約0.6mの通路を隔てて77号墓・78号墓・80号墓が連接立地する。77号墓・78号墓は2.4×1.5mの長方形区画の中央部を仕切り、各々1.5×1.2m規模に二分される。区画の一部に0.7～0.8m大の川原石を使用する。前者で一石五輪塔A0919を、後者では空風（火）輪A0808～A0810、一石五輪塔A1004を採取した。

79号墓 77号墓・78号墓の西側で、0.3m幅の墓道を隔てる。1.4×1.3mの方形墓と推定。北尾根筋を登ってきた墓道は、この79号墓の北（手前）で左右に分岐する。

80号墓 1.4×1.3mの方形墓。人骨S X101、古銭（銭3）一枚、山茶碗小破片（52）が出土し、265号墓で出土の山茶碗の破片と接合した。12世紀中葉以降のものと推定。空風輪A0066・A0076、空風火輪A0811、火輪A0349、地輪A0595、一石五輪塔A0922・A0926・A0968・A0980、相輪A1025を採取。78号墓の南辺の石列を共用した後出の墓であろう。

81号墓 東側が大きく崩落するが、1.0m内外の方形墓と推定。下層土坑SK482（II B類）と重複する（第35図）。

82・83号墓 79号墓の南東側で、両脇を墓道に挟まれた墓。前者は1.4×1.3mの、後者は1.1×0.9mの方形墓と推定。82号墓では想定区画の南辺際に偏して人骨S X79と古銭（銭6）が1枚出土した。埋土中から15世紀前葉頃のものかと思える、おろし皿破片（66）が出土した。82号墓はそれ以降の築造と推測される。83号墓から出土の遺物はない。

【東側中央斜面】（84～108号墓、第13表・第12図）

84・85号墓 第六テラスの80号墓から0.8～1.0m低く、第五テラスの60号墓より約0.8～1.0m高い所から更に南東方向に延びるテラスがある。そのテラスの西端で、東斜面では一番奥まった位置にある墓。前者は全容不明で、1.2×0.9m前後の長方形墓と推定。後者は1.2×1.1mの方形墓で、地輪A0744～5を採取した。0.4m大の扁平な川原石の直上にあつた地輪A0745は原位置を保っていた可能性がある。当墓周辺からも、空風火輪A0771～2、火輪A0341～2、水輪A0492～3、地輪A0586～7、一石五輪塔A0923等を採取した。

86号墓 区画北辺を欠失するが84号墓に南接する1.2×1.1mの方形墓と推定。区画中央部から人骨S X81が出土し、地輪A0613・A0746のほか、宝鏡印塔基礎部A1047を採取した。藏骨器はない。

87号墓 86号墓に南接。1.5×1.2mの長方形墓。区画中央からやや北寄りで人骨S X168が出土し、空風輪A0063～4、A0274・A0276、空風（火）輪A0814、火輪A0336～7、水地輪A0876、地輪A0747、一石五輪塔A0976～7などを採取した。やはり藏骨器はなかった。

88号墓 86号墓～87号墓の西側にあり、形状・規模は不明。完形品ではないが12世紀中葉～13世紀前葉頃の常滑産窯（39・第45図、写真第9図）と人骨S X76が出土し、その南側で古銭（銭5）「熙寧元寶」1枚が出土した。埋土中から14世紀後葉頃の天目茶碗破片（67）も出土し、196号墓から出土の同破片と接合した。当墓はそれ以降の築造と考える。また、S X76の近くで常滑産窯（74）も出土した。15世紀中葉～後半代に比定。当墓には2時期あるか、またはもう1つ別の墓があったかも知れない。火輪A0340、水輪A0487、相輪A1023～4、宝鏡印塔（星屋）笠部A1045を採取した。

89号墓 88号墓に南接し、87号墓に西接する墓で規模・形状は不明。想定区画の南東隅に当たる所で地輪A0751を採取し、その直下から人骨S X153が出土した。当地輪は原位置を保つと推定。藏骨器はない。納骨と石塔の関係を知る希少例で、372号墓にも類例がある。水輪A0489も採取した。

90号墓 89号墓に西接する1.3×1.1mの長方形墓。火輪A0348、一石五輪塔A0979を採取。先に79号墓の北で分岐した墓道は81号墓の西から南下し、この90号墓の西辺に沿いつつ、更に南西方向へと続いている。

91号墓 87号墓に南接する1.6×0.9mの長方形墓。地輪A0748～9を採取。それらは区画用配石に転用された可能性がある。

92号墓 89号墓・90号墓に南接し、墓道に沿う2.0×1.4mの長方形墓。古銭（銭4）「天祐通寶」が1枚出土した。空風輪A0065、水輪A0490・A0496、地輪A0591・A0600、一石五輪塔A0925を採取した。同一地点に重なっていた水輪A0496と地輪A0600と

は、材質、法量、形態などからみて、セット関係を想定し得る希少な遺物である（第24表）。

93号墓 92号墓に南接。一辺1.5m四方の方形墓。2ヶ所から人骨S X72・S X102が出土した。前者には破片ながら14世紀末～15世紀初頭頃の伊勢型土師器鍋（105・第48図）と炭化物とを伴う。それ以降の築造と推定。後者には人骨以外の遺物は認められなかつた。

94号墓 93号墓に南接。1.9×1.5mの長方形墓。区画北辺の外側に接して空風輪A0073～5、火輪A0347、水輪A0495を採取した。

95・96号墓 94号墓に東接し南北に並ぶ。前者は1.5×1.3m、後者は1.4×1.0mの長方形墓。共に遺物はない。

97号墓 94号墓に南接。長径2.0×短径1.6mの梢円形ないし隅丸方形墓。100号墓との間を通る幅約0.5mの岐道は、更に東側の98号墓・99号墓へと通じる。

98・99号墓 前者を一辺1.2m四方の方形墓と推定、後者は1.5×1.2mの長方形墓。98号墓では区画北辺部に当たる配石の直上から人骨S X103が出土した。両墓は東中央斜面で標高が最も低い位置にあり、97号墓・100号墓との比高差約1.6m、山頂部にある182号墓との比高差は約4.0mである。採取した空風火輪A0773と水地輪A0877は一体の五輪塔となる（第25表）。経筒外容器筒身破片の一部（29）がこの埋土からも出土した（第19表・遺物第44図・写真第9図）。

100号墓 周溝S D874を伴う方形の配石区画墓で、区画の規模は1.8×1.7m。周溝・墳丘は東側崩落のため3方面のみが残存。S D874の溝幅は0.6～1.7mと不規則で、深さ約0.3m。周溝を含む全体規模は5.1m×3.0m以上になる。盛土のほぼ中央部下層で重複する土壙SK514（Ⅲ類）とは一体の遭構で、本来は方形周溝墓である（遭構第39図）。土壙SK514の底部から13～14世紀代の青磁碗（63）が1点出土した。当墓は横尾では比較的に古い段階の墓だと思う。周溝と土壙を伴う同形態の墓は、221号墓や243号墓にもある。

101号墓 100号墓の南角に接する、1.9×1.1mの長方形墓。刀子（鉄参考38）が出土した。墓道に沿い配列される94号墓・97号墓・100号墓・105号墓等とは区画の石列方位を違え、102号墓等と同様に遼

和感がある。埋土から出土した青磁碗破片（64）は、105号墓から出土の破片と同一個体であった。100号墓より後に築造の墓であると推測する。

102・103号墓 規模は各々1.1×1.0m、1.0×0.9mの方形墓。共に101号墓の長辺を共用して造られ、遺物はないが、101号墓より後に追加築造された墓であろう。

104号墓 1.1×0.9mの長方形墓。101号墓の南東角に取付く配石区画の状況から、101号墓より後出の墓と推定した。

105号墓 100号墓の南側1.5mの所にある1.8×1.5mの長方形墓。その南西辺に沿い100号墓方向からの通路があったが、後に101号墓の出現で部分閉鎖を受けたと推測する。101号墓と同じ青磁碗破片（64）の一部が出土した。

106号墓 104号墓と石列方向を揃えた1.1×1.0mの方形墓。105号墓の南角に取り付く。遺物はない。

107号墓 105号墓の東側1.0mの所にある1.9×1.5mの長方形墓。14世紀初頭～前葉頃の和鏡「蓬莱千鳥鏡」（76）が出土した（遺物第47図・写真第11図）。区画の北東辺外から13世紀中葉頃の山茶碗（55）や土師器小皿破片（参考15）も出土し、同北東付近では空風輪A0079、水輪A0498を採取した。

108号墓 107号墓の南辺に後から取付いた1.7×1.4m内外の長方形墓と推定した。出土遺物はなかつた。

（b）西部域（109～181号墓、第13表・遭構第11・13図）

グリッドO10～P10から南のI16までの、面積的には最も狭い範囲である。109号墓から181号墓に至る73基が分布する。遭構数は最少で、一部は北から尾根筋を登って来る墓道沿いのエリアを含む。山頂付近の中央部分に平坦な空閑地（L15・M15）がある。西端部は急峻な谷に向かい崩落が特に著しかつた。I14・15グリッドは一段低い平坦地が造り出され、川原石を敷き並べた区画がL字状に配置される。J15グリッドには大きな台状の石（1.2×1.0m）が据えられていた。現代の土葬墓地にもある棺台（埋葬前に、担ぎ手が棺を逆時計回りに3回まわしたあとその上に安置し、導師がひと回向する）にも似ているが、ここで見つかった石は表面に相当火を受けた痕跡が顕著で、かつてその石上で火葬が行われたこ

とは明白であった（土坑SK478及びまとめ参照）。

109号墓 最北端にあり、全面に0.1～0.2m大の川原石を敷詰め、中央部に箱状の空間を作る。納骨用の龕みである。石を敷き詰める類例に5号墓・19号墓・23号墓などがある。現状で一辺0.9m四方の方形墓（遺構第35図）。遺物はない。

110号墓 109号墓の東4mの所にある。111号墓の区画北辺に取付く後出の墓で、1.3×1.2mの方形墓である。水地輪A0883、一石五輪塔A0959を採取した。

111号墓 0.4～0.5m大の石を使う。110号墓に先行する一辺1.3mの方形墓。空風（火）輪A0859、水地輪A0889～A0890・A0911、一石五輪塔A1012等を採取した。

112～116号墓 当該尾根筋を貫通する幹線墓道の西側に沿って並んだと思われる5墓の墓だが、殆ど原形をとどめず、形状・規模などは不明である。出土遺物もない。

117号墓 106号墓の角で西方向に分岐する幅0.6m内外の墓道があり、その一番奥の左手に位置する。1.4×1.3mの方形墓と推定。区画中央部に据わる0.4m大の平坦な石は、85号墓の場合と同様、直上に五輪塔を設置した可能性がある。

118号墓 117号墓の北東に接する1.1×1.0mの方形墓。近接の121号墓・124号墓とは0.2～0.3m幅の墓間通路で隔てられる。出土遺物はなかった。

119号墓 117号墓に東接する1.5×1.4mの方形墓。下層で検出の火葬土坑SK466は当墓とは別の遺構である。

120号墓 119号墓に東接し、区画配石は動いているが1.7×1.3mの長方形墓。区画のほぼ中央部にある0.3m大の川原石を挟み東西2ヶ所から人骨SX68とSX98が出土した。蔵骨器はみられなかった。

121号墓 120号墓の南角に接し、1.5×1.3mの長方形墓で、やや楕円状にも見える。119号墓との間に幅0.2mの通路がある。空風輪A0172、空風（火）輪A0855を採取した。下層の火葬土坑SK466は当墓とは別の遺構である。

122号墓 120号墓に南接し、121号墓に東接する1.2×1.1mの方形墓。火輪A0410、地輪A0731～4を採取した。このうち3基の地輪A0731～3は区画中央部ではほぼ南北に一列に並ぶ。これらがもし原位

置を保つものならば、墓道に沿う区画東辺側が当墓の正面になる可能性が高い。

123号墓 118号墓の西側にあり、北半分は崩落している。現状で1.0m内外の方形墓と推測する。遺物はなかった。

124号墓 分岐した通路を挟み、118号墓の南側にある。1.7×1.2mの長方形墓。125号墓の北角を侵食する形で築造された後出の墓。117号墓や120号墓などと同様に、区画中央部に平坦面を持つ0.4m大の川原石が据わる。人骨の出土はなかった。東接の空闊地で空風輪A0168～71等を採取した。

125号墓 124号墓に先行する本來1.5×1.2mの長方形墓。区画中央部に平坦面を持つ0.6m大の川原石が据わり、地輪A0728～9を採取。区画東辺で東西に並ぶ4基の地輪A0724～A0727は区画用の配石に転用された可能性もある。

126号墓 125号墓の南西にある径1.2mの円形墓。西端部は崩落して残らない。遺物はなかった。

127号墓 126号墓の南東に接し、現状では0.8×0.6mと小規模な長方形墓である。遺物はなかった。

128号墓 126号墓・127号墓の南東にあり、1.4×1.3mの方形墓。区画の中央部で人骨SX41が出土。また、やや東に偏して0.3m大の川原石が3個集積され、その石の間からも人骨SX172が出土。いずれにも蔵骨器はない。類例は405号墓にも見られた。空風輪A0086、火輪A0407を採取した。

129号墓 128号墓に北接、1.8×1.6mの長方形墓。124～125号墓などのように、区画中央部に平坦面をもつ0.4m大の川原石が据わる。北に偏して人骨SX67が出土したが、蔵骨器はない。平面上は下層土坑SK472（II A類）が重複するが、両遺構の関係は不明であった。

130号墓 129号墓に北接。一辺1.8m四方の方形墓と推定。中央部に0.3m大の平らな川原石が据わり、2ヶ所で人骨SX70・SX71が出土したが、蔵骨器はなかった。火輪A0411～2・A0454、地輪A0730を採取した。埋土中から15世紀前葉頃の常滑窯窶の小破片（73）や16世紀代の土師器小皿破片（263）が出土した。区画東隅の下層に一部分重複する土坑SK473（II A類）があり、焼土や灰化物を検出した。

131号墓 129号墓に東接する1.8×1.5mの長方形

墓と推定復元。区画内で人骨 S X66・S X69が対角線上に離れて出土。共に藏骨器はみられない。水輪 A0504を採取した。下層で人骨 S X254が出土し、14世紀後葉以降に比定される土師器小皿（216）を作出したので、当該131号墓はそれよりも後代の築造でなければならない。

132号墓 131号墓に南接し、128号墓には東接する1.4×1.0mの長方形墓。区画の北隅から人骨 S X99が出土。藏骨器はない。区画の中央部に地輪 A0722～3が南北に並ぶ。下層で人骨 S X252を検出し、その埋土から13世紀末～14世紀中葉頃の土師器小皿の小破片（152）が出土。当墓はそれより更に後代の築造と推定する。

133号墓 132号墓に南接して並列する。推定1.5×1.2mの長方形墓。想定区画の東隅に偏して人骨 S X64が出土した。藏骨器は認められなかった。

134号墓 132号墓に東接する推定1.3×1.2mの方形墓。想定区画の南西隅に偏して人骨 S X65が出土した。藏骨器はない。火輪 A0353、水輪 A0505を採取した。

135号墓 同じく133号墓に東接する一辺1.2m四方の方形墓と推定。区画北隅に偏して人骨 S X63が出土したが、やはり藏骨器は見当らなかった。

136号墓 127号墓の南西側にある1.5×1.0mの長方形墓。空風（火）輪 A0853～4や地輪細片などを採取した。

137号墓 136号墓に南接する1.2×1.0mの長方形墓。一石五輪塔 A0933を採取した。

138号墓 137号墓に南接する。形状も規模も不明。一辺1.0m以上の方形墓を想定。空風火輪 A0790、一石五輪塔 A0991・A0951・A0955の3点を採取した。A0951は区画配石の一部を構成するが、137号墓での転用かも知れない。

139号墓 石列の残存状況から最大幅2.2×1.6mの長方形墓を想定するが、2区画（1.6×1.1m×2）の可能性もある。埋土から15世紀前半で比定しめる常滑産甕（72）の破片の一部が出土したので、それより後代の築造と判断した。

140号墓 139号墓から空闊地を挟み、1.5m南にある一辺約1.2m四方の方形墓と推定。区画中央部に据わる0.4m大の川原石の下部から人骨 S X57が出土。

藏骨器はない。地輪 A0716は配石の一部として転用された可能性もある。

141号墓 139号墓の東角に接する1.3×1.1mの長方形墓で、区画全面に0.2～0.3m大の石を敷き並べるのは、109号墓等にも共通する。空風火輪 A0777、火輪 A0354、地輪 A0721を採取した。

142号墓 141号墓に南接・並列する1.3×1.1mの長方形墓。空風（水）輪 A0822～3、水輪 A0506、地輪 A0717～20を採取。4基の地輪は概ね原位置を保つ可能性もある。平面上は下層土坑 S K470（II A類）と重複するが、別の遺構である。

143号墓 140号墓・142号墓・144号墓に挟まれた一辺0.6m四方の方形墓。墓間通路の一部を転用した後出の墓。下層で検出の土坑 S K470は142号墓にも跨って重複し、当墓とは別の遺構である。

144号墓 外側1.3×1.1mの長方形墓の内側に0.6×0.5mの内部区画をもつ。人骨はない。二重区画になる例は他に12号墓や401号墓にもある。規模は違うが、納骨用の内部施設の例は、58号墓、351号墓、411号墓などに見られる。

145号墓 幅約0.2mの通路を挟んで144号墓に東接する1.3×0.8mの長方形墓。相輪 A1036、一石五輪塔 A0950を採取。一石五輪塔は区画用配石への転用である。埋土中から、土師器小皿破片（255）、土師器鍋破片（110・参考14）が出土した。16世紀前半以降の築造と推測される。

146号墓 145号墓に先行した1.3×1.0m規模の長方形墓と推測。区画南辺の石列は本来当墓のもので、後から145号墓が取付く。埋土から12世紀後葉～13世紀初頭頃の山皿（参考9）が出土した。それより後代の築造と推定する。

147・148号墓 前者は1.4×1.0mの長方形墓で、後者はそれに北隣する規模不明の墓。後者で空風輪 A0090を採取。

149号墓 140号墓に南接する1.5×1.3mの長方形墓。148号墓との間に幅0.3～0.4mの通路あり。風輪 A0013、一石五輪塔 A1009を採取。埋土から15世紀中葉～後葉頃の土師器小皿破片（169～170）が出土。それより後代の築造と推定。

150号墓 140号墓に西接する1.2×1.1mの方形墓と推定。平坦面を持つ0.5～0.6m大の川原石が区画

中央部に据わるが、人骨はなかった。同様に平らな石を据える例は、10号墓、85号墓、117号墓、120号墓、124号墓・125号墓、129号墓、140号墓、173号墓、187号墓、204号墓等にもある。標準的な形態は、その石の直下に納骨をし、直上に五輪塔を据えたと考える。21号墓などはその石自体が失われた可能性がある。

151号墓 149号墓の区画南辺に取付く後出の墓で、その規模は $1.1 \times 0.6\text{m}$ 、空風（火）輪A0824、火輪A0356を採取した。人骨などはなかった。

152号墓 147号墓の南東にある $1.5 \times 1.5\text{m}$ の方形墓。区画中央部から人骨S X156・157が隣接して出土。前者では13世紀後半代の土師器鍋破片（97）が、後者からは14世紀末～15世紀前葉頃の土師器小皿破片（168）が出土した。当墓の納骨には2時期を考慮すべきかも知れない。

153号墓 149号墓・151号墓・154号墓・155号墓に囲まれた空間を利用した $0.7 \times 0.5\text{m}$ の長方形墓。空風輪A0089を採取。埋土中から15世紀後葉～16世紀前半代の土師器小皿小破片（246～248）が出土。それ以降の築造と推定する。

154号墓 152号墓・157号墓の区画の一辺を共用した $1.2 \times 1.0\text{m}$ の長方形を呈する後出の墓。157号墓の区画北辺の石をややずらして造成する。埋土から15世紀後葉～16世紀末葉頃の土師器小皿破片（249）や16世紀中葉頃の土師器鍋小破片（111）が出土した。当墓は152号墓より新しく、16世紀後半代の築造ではないかと推測する。

155号墓 144号墓と154号墓の間にある $0.8 \times 0.8\text{m}$ の方形墓。空（風）輪A0300、地輪A0714、を採取。区画に東接して一石五輪塔A0958、火輪A0355も採取した。

156号墓 152号墓の南で、K15基準点に接する径 0.8m の円形状の墓。157号墓に先行するとは思えない。

157号墓 先行する152号墓・160号墓・173号墓の一辺を共用した $2.0 \times 1.3\text{m}$ の長方形墓。後に154号墓の造成に際し、区画北辺に少し現状変更を受けた。地輪A0643を採取。埋土中に渥美座破片（49）を含み、配石の前後関係から、152号墓・160号墓・173号墓より後の築造と推定される。

158号墓 形状・規模は不明。157号墓の区画東辺

外で人骨S X58が出土したので、別の区画墓とした。藏骨器はない。地輪A0715を採取した。

159号墓 158号墓の北に残骸と思われる区画配石の一部を残す。想定区画内から空風輪A0165を採取した。埋土から14世紀末～15世紀前葉頃の土師器鍋破片（109）や12世紀後葉～13世紀前葉頃の経筒外容器筒身の破片（21）が出土。これを踏まえ、当墓は15世紀前半代以降の所産と推定する。

160号墓 157号墓の南東。 $1.6 \times 1.2\text{m}$ の長方形墓。区画する石の配列構造から、157号墓・161号墓に先行し、173号墓よりは後出と推測。区画中央部から人骨S X60が出土したが、藏骨器はない。埋土から14世紀前半代の土師器鍋（99）の口縁部小破片が出土。それより後の築造としか言えない。地輪A0641を採取した。

161号墓 160号墓の区画東辺の一部を共用する径 1.0m の円形状墓。160号墓より後出の墓。砥石（78）が出土した。16世紀代のものではないかと推測する。

162号墓 161号墓の北東側に配石区画の一部を残す。現状は 1.2m 。形状・規模は不明。173号墓・160～162号墓はほぼ東西方向の墓道（幅 $0.4 \sim 0.5\text{m}$ ）の北側に沿って並ぶ墓であったと思う。

163号墓 147号墓の南側。 $1.1 \times 0.7\text{m}$ の長方形墓。空風輪A0091～2、地輪A0713を採取。地輪は原位置を保つ可能性がある。経筒外容器筒身破片（20）がこの埋土からも出土した。当墓の築造はそれより遡ることはない。

164号墓 163号墓の東南側に接する。規模・形状は不明。想定区画の中央部で地輪A0642を採取した。

165号墓 163号墓の南側で、径 1.0m の円形状墓。埋土中から15世紀前半代の常滑座彫小破片（88・90）や13世紀後葉～14世紀代の片口鉢の破片（51）が出土。当墓は15世紀後半以降の築造かと推測する。

166号墓 165号墓の東側に $1.2 \times 1.1\text{m}$ の墓を想定。想定区画内で東西方向に並ぶ水地輪A0878、空（風）輪A0277、水輪A0507、相輪破片A1038などを採取した。

167号墓 166号墓に西接する $1.0 \times 0.8\text{m}$ の方形墓。空風輪A0166、火輪A0406、一石五輪塔A0932を採取した。

168号墓 167号墓の西辺に平行して接する。配石

区画は1.0m分だけ残るが、全体の規模・形状は不明である。

169号墓 167号墓の南にある径1.0mの円形墓。近接して空風輪A0093など3点の石塔を採取した。

170号墓 166号墓に南接する1.2m内外の方形墓と推定。想定区画の中央部で地輪A0712を採取した。

171号墓 K15基準点の南側に残る石列を以て方形墓があつたと推測。規模等は不明で、遺物もない。

172号墓 170号墓の東側に残る石列と出土人骨S X61の存在から、1.7×0.9mの長方形墓を推定。空風火輪A0788を採取した。藏骨器はない。

173号墓 172号墓の東側で、1.9×1.5mのやや大型の長方形墓。平坦面を持つ0.5～0.6m大の川原石が区画中央部に据わるが人骨はなかった。区画中央部に石を据える形態の類例は、10号墓、85号墓、117号墓、124・125号墓、129号墓、140号墓、150号墓、187号墓、204号墓などがある。火輪A0401等を採取した。

174号墓 1.3×1.3mの方形墓と推定。火輪A0359、水地輪A0888、地輪A0707を採取した。

175号墓 174号墓に西接。1.2×1.2mの方形墓。空風輪A0094、水輪A0508、地輪A0616、空風火輪A0779、水地輪A0887、一石五輪塔A0928を採取。上からの崩落もある。

176号墓 1.0×0.9mの方形墓。平坦面を持つ0.6m大の川原石を据え、全体が石敷きの状態で、石の面を揃えていた。空風輪A0095、火輪A0360、風火輪A0780、空風火輪A0781、(水)地輪A0899、相輪A1032などを周辺で採取した。

177号墓 176号墓に西接。1.1×0.9mの方形墓。近接して空風輪A0164、火輪A0403を採取した。

178号墓 177号墓に西接。1.0×0.9mの方形墓。空風火輪A0778、水地輪A0879や火輪A0358、地輪A0614を区画前方（南側）付近で採取した。

179号墓 L字形の角に当たる1.1×0.9mの方形墓。原形をとどめる良好な火輪A0357を近くで採取した。

180号墓 179号墓に南接。1.0×0.9mの方形墓。近接して(水)地輪A0909を採取した。

181号墓 180号墓に南接。1.1×0.9mの方形墓。空(風)輪A0278・A0291、地輪破片A0640等を採

取した。

c) 山頂部と東尾根筋 (182～261号墓、第13表および遺構第13～16図)

最も標高の高い山頂部とそこから東方向へ続く尾根筋一帯の配石区画墓をまとめる。明確に境界線は引けないが、凡そグリッドL15からP27に及ぶ範囲で、形態や規模等の点で特異な墓の多いエリアであった。総数は80基を数える。

182号墓 調査前の標高は約120mと遺跡中で最も高位置にあった。配石区画の規模は、平面上3.5×3.2mの方形を呈す。北(西)側の約半分近くが後世の土取り等(註4)で壊されるが、南(東)面は5ないし6段の石垣が残り、区画内には約0.9mの高さに盛土が残る。区画中央部には0.3～0.4m大の川原石が径1.4mの円形状に中心部を圍むように並び、露出していた(第13図・36図)。この石囲いの中心部から人骨片S X59が出土。盛土内からは常滑産大甕の破片(86)や甕の破片(73・91)なども出土した。大甕は12世紀後半代に、甕は15世紀前葉頃に比定される。共に、接合可能な他の破片が複数ヶ所から出土しております。確証はないが、甕の大きさからみて本来は当墓に付随の遺物ではないかと考える。

南接する183号墓と併せると、全体規模で4.7×3.5mにもなる大区画は、石列の方向が周囲と異なる特異な存在。その区画東辺は184号墓の区画東辺と約35度の角度をなす。即ち当墓は、概ね等高線に沿って築造された先行墓を削閉してその上に造成されたと言える。その時期は上記の甕類が一つの推定基準にはなるが、生産地の編年観をそのまま墓などの築造年代に当てはめることは出来ず、伝世期間を考慮する必要がある。屋根があったかどうかは不明だが、機能としては所謂「納骨堂」のような施設を想定している。184号墓・185号墓・192号墓・194号墓等はその際に削閉された墓の残骸とみた(第13図)。

盛土を除去する過程で、多数の川原石、古鉢(銭11～14)や各種の陶器片等が出土した。周辺から出土の破片と接合の結果、経筒外容器簡身が少なくとも6個体分があり、他に外容器の蓋、常滑産甕(69・87)、渥美産甕、白磁碗(参考12)、山茶碗(53・参考5)、片口鉢(45・51)などの破片もある。それ自体が当中世墓の長年月にわたる変遷を物語るととも

に、かつて経塚が営まれた時代のあったことを強く印象づけた。

盛土除去後に、 1.6×1.0 mのコの字状の石列と径 0.6 m、深さ 0.56 mのピットも検出したが、それらが経塚に伴う遺構か否かは明らかにし得なかった。当墓では空風（火）輪A0871、一石五輪塔A0975（火水地輪）、（水）地輪A1013、地輪A662～3、A0765等を採取した。

183号墓 182号墓に南接付随する長方形区画で、規模は 3.5×1.5 m。数段の石垣の下に多数の石塔類が積み置かれていた。この区画自体は墓とは思えず、182号墓の附属施設の印象が強い。但し、区画東南辺際で人骨S X281が、また263号墓との境界に近い西辺際では古銭（銭1）「洪武通寶」一枚が出土した。藏骨器はない。いずれも削閉前の先行墓に伴う遺物と推測する。埋土中より片口鉢破片（45）、経筒外容器簡身破片（20・23・29）が出土した。また、積み置かれた石塔は、空風輪A0256～7・A0302、火輪A0459～A0467、水輪A0556～A0564、地輪A0570～A0573・A0759～A0764・A0958、相輪A1011など、計33点であった（写真第4図）。

184号墓 182・183号墓の築造により削閉を受け、それに東接する形で直角三角形状に残る。本来の規模を 1.8×1.2 mに復元可能。182号墓で出土したもっとも新しい遺物（73・91）が15世紀前葉頃に比定されるので、当墓は少なくともそれ以前に遡ると推定する。区画東南端の2ヶ所から人骨S X3・SX7が出土した。共に藏骨器はなく、後者からは判読不能な古銭（銭15）と山茶碗小破片が出土した。火輪A0458、地輪A0574・A0757を採取した。

185号墓 182・183号墓に削閉を受け、形状・規模は不明。人骨S X73及び土師器鍋破片（108）、経筒外容器簡身破片（23）が出土した。土師器鍋（108）は14世紀末～15世紀前葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造と推測する。

186号墓 残存度が悪く、形状・規模等は判然としない。人骨S X2は出土したが藏骨器はない。SX2で14世紀中葉～後葉頃の土師器小皿破片（151）が伴出し、また埋土中からは13世紀中葉代の山茶碗破片（参考3）が出土した。当墓は14世紀末頃以降に出現した可能性がある。空風輪A0025を採取し、近

接地で相輪A1029などを採取した。

187号墓 185号墓に東接した 1.4×1.1 mの長方形墓。全面石敷きで、その間から土師器や常滑窯の細片は出土したが、人骨はない。区画中央部に石（0.4m大）を据えるのは、173号墓や204号墓ほかいくつもの類例がある。

188号墓 形状・規模は不明だが、187号墓の区画北東辺を共用した小規模な後出墓と推定。刀子（鉄参考35）が1点だけ出土している。

189号墓 184号墓の北東にある。区画用配石の一部が欠失するが 1.6×1.2 mの長方形墓と復元。区画石列が平行する184号墓等とは同時期で、182号墓・183号墓に先行する墓の一つと推測する。（空）風（火）輪A0813のほか、宝鏡印塔笠部破片も採取した。

190号墓 189号墓の東南側に接した 1.6×1.2 mの長方形墓。区画内をほぼ東西に石列が走り、189号墓との間は幅0.3m内外の通路に見える。その狭い通路のような空間から人骨S X7が出土した。藏骨器はない。埋土中から12世紀中葉～後葉頃の山茶碗底部破片（参考2）が出土した。当墓は当然のことながら、それよりも後代の築造である。

191号墓 190号墓に東接。 1.7×1.3 mの長方形墓。区画中心部を外れた3ヶ所から人骨S X4・SX5・SX6が出土。藏骨器はない。人骨SX6は下顎骨で、区画北東辺の配石中でやや墓道側にはみ出た状態の石の下から出土。それは、平坦面を内に向かって2個の石で上下から挟むような形で埋もれていた。通常の埋葬とするには疑問がある。

192号墓 194号墓に西接、182・183号の築造により削平を受けた。現状で 1.2×0.9 mの長方形墓に復元出来る。

193号墓 192号墓に東接する 1.1×1.0 mの方形墓。区画石の配列方向が近似するため、184号墓等と同様、182号墓・183号墓に先行した墓と推測。空風（火）輪A0806、地輪A0582を採取した。

194号墓 183号墓に削平され原形を留めず。現状で 1.3×1.3 mの方形墓と推定。区画北東端で人骨SX282が出土。その出土地点には 0.6×0.5 mの石囲みがあり、空闊地を転用した後代の墓の可能性を考慮すべきかもしれない。

195号墓 193号墓に東接した 1.3×1.1 mの方形墓。

中央部や南寄りで人骨 S X144が出土した。藏骨器はない。空風輪A0027～8・A0266、火輪A0315、水輪A0474、地輪A0756などを採取した。

196号墓 194号墓の東南で1.9×1.1mの長方形墓。区画西寄りの地点で人骨 S X77が出土した。藏骨器はない。埋土中から土師器小皿破片(181～5)、常滑産窯破片(91)、天目茶碗破片(68)が出土した。空輪A0002、風輪A0011、空風輪A0031・A0265・A0296～7などを採取した。

197号墓 196号墓の東南に接した1.5×1.4mの方形墓。2ヶ所から人骨 S X100・S X104が出土。196号墓に近いS X104は、地面に穿たれた径0.25m、深さ0.14mの穴から多量の人骨が出土した。かつては有機質のものに収めて納骨したものであろう。火輪A0313、地輪A0578を採取した。

198号墓 197号墓の北東で、1.5×1.2mの長方形墓。人骨小破片 S X173や土師器細片が出土したが、混入の可能性が高い。地輪A0579を採取した。

199号墓 198号墓に北接、1.3×1.2mの方形墓。土師器細片、陶器細片が埋土から出土するが器種・時期は不明。近接して相輪A1026等宝篋印塔の部品破片などを採取した。下層土壤 S K504(Ⅲ類)とは別の造構である。

200号墓 正確な形状・規模の確定は難しいが、2.2×2.0mの方形墓を想定した。区画東辺側の縁辺部で人骨 S X75を検出。藏骨器はない。埋土中から、土師器皿小破片(113)や13世紀前葉代の山皿小破片(参考11)などが出土。当墓はそれ以降の築造と推定。隣接の188号墓より後出の可能性もある。

201号墓 東・南側斜面崩落のため形状・規模は不明だが、一辺1.7m前後の方形墓を推定。埋土中から土師質円筒状容器の底部破片(30・31)や経筒外容器筒身破片(29)が出土した。空風輪A0071～0072、火輪A0346を採取した。

202号墓 198・199号墓の東南に接する2.7×1.5mの長方形墓。区画北東端で宝篋印塔屋根部破片 A1044、相輪A1027～8など、宝篋印塔の部品ばかりを採取したのが特徴である。

203号墓 197号墓に東接、202号墓に西接する1.3×1.1mの方形墓。197・202号墓の区画配石の一辺を共用した後出の墓と推定。地輪A0576～0577などを

採取した。

204号墓 203号墓に更に東接した1.1×1.0mの方形墓。平坦面を持つ0.45m大の石を残すが、そのすぐ北隅で人骨 S X78が出土した。藏骨器はない。採取した地輪A0634～0635は当山では珍しく非砂岩系の石材であった。平坦面をもつ石を据えた類例は、173号墓や187号墓など多数ある。

205号墓 195号墓の東南側で、2.5×1.9mの長方形墓。石列方位の相違から、182・183号墓築造以前のものと思われる、区画長辺の石列が明瞭。水輪A0555を採取した。

206号墓 205号墓の東南側で区画の配石列を描える1.8×1.7mの方形墓。火輪A0317、地輪A0580・A0674を採取。平面上は下層土坑 S K510(I B類)と重複する。

207号墓 204号墓に東接し、206号墓に北接する1.7×1.3mの長方形墓。区画中央部から西寄りで人骨 S X9及び刀子(鉄2)が出土。藏骨器はない。水輪A0554、地輪A0575を採取した。

208号墓 202号墓の東南にある1.7×1.2mの長方形墓。3ヶ所から人骨 S X1・S X174・S X175が出土した。北東端の人骨 S X1には藏骨器はない。南西側の人骨 S X174は14世紀代の常滑産壺(46)に収まり、小刀(鉄12)が伴出した。中央の人骨 S X175は14世紀中葉頃の常滑産三筋壺(47)に収まり、刀子(鉄1)が伴出した。一石五輪塔A0989を採取した。当墓は上記常滑三筋壺を指標とし、14世紀中葉以降半代に築造されたと推定する。

209号墓 208号墓の東にあり区画北辺を欠失するが、推定2.0×1.8mの方形墓。水輪A0476・A0528を採取した。

210号墓 209号墓に南接する一辺1.6mの方形墓。出土遺物はなかった。

211号墓 206号墓から幅0.2～0.3mの墓道(分岐した通路)を間に挟んで東南側にある、2.0×1.7mの長方形墓。出土遺物はない。区画の石列の方向が面を描いて一致するので、205・206号墓とほぼ同時期に存在したと推測する。

212号墓 210号墓と211号墓の間には本来幅0.5m前後の墓道(分岐した通路)が走るが、その空間を転用した後出墓である。人骨 S X150が出土した。藏

骨器はない。

213号墓 211号墓の東南に接する径1.5mの円形
状墓。出土遺物はない。

214号墓 213号墓の北側にある。210号墓との間に
幅0.5mの通路を挟む。規模1.3×1.2mの方形墓である。

215号墓 幅0.2～0.3mの通路を挟み214号墓の東
に接する、1.1×1.0mの方形墓である。

216号墓 区画用配石の大半を失うが、通路を挟み
215号墓の南側に接する1.6×1.3mの長方形墓である。

217号墓 215号墓の東南側0.5mの所にある、1.3
×1.2mの方形墓。平面上は下層土壙S K525(Ⅲ類)
がほぼ重複するが、別の遺構と考える。

218・219号墓 217号墓の東側2mの所にあり、
共に大半の区画用配石を散逸するが、前者を1.0×0.8
m、後者を一辺0.9m内外の、それぞれ方形墓と推定
した。出土遺物はない。

220号墓 219号墓の南側3mの所にある。区画の
配石に乱れや欠失部分がある。最大で2.7×2.5mの
規模と推定。想定区画内に高さ約0.3mの埴丘状盛土
が残る。区画の中心部を外れた北寄りに偏して人骨
S X176が出土。骨は12世紀末～13世紀初頭の渥美
産壺(40)を藏骨器として納められ、13世紀前葉～
中葉頃の山茶碗(56)を蓋にしていた。藏骨器の周
囲は炭化物と焼土の混在した土に覆わっていた。盛
土上から出土の土師器皿破片(136)は後代の混入と
考える。13世紀後半でその築造時期を求めるこ
とも可能ではないかと思う(遺構第35図参照)。

221号墓 220号墓の北側約4mの所にある。2.1×
2.1mの方形墓だが、外側に周溝S D875～876がめ
ぐる方形周溝墓。配石区画内に高さ0.26～0.34mの
埴丘状盛土が残る。周溝の幅は0.6～0.85m、深さ0.3
～0.4m、西側に幅が僅か0.1mほどの陸橋部を残す。
周溝の東側は227号墓の周溝S D877に切られている
ため、221号墓は227号墓より古い(遺構第21図)。周
溝S D876の埋土からロクロ土師器皿底部破片(36・
37)が出土した。他に遺物がないため、当墓はそれ
以降の築造と位置づけるしかない。盛土の下層で火
葬土坑S K533(ⅠB類)を検出し、刀子(鉄04)が
出土した。火葬土坑をそのまま墳墓にしたものであ
る。土坑と一緒にとなった方形周溝墓の形態は100号墓
や243号墓にもある。これは當中世墓群の初期段階に

おける典型的な墳墓形態を示している。

222号墓 220号墓の東にあり、0.5～0.6m大の川
原石を何個も使う堅牢な造りで、一辺1.8m四方の方
形墓。空風輪A0136を採取した。下層に火葬土坑
S K546(ⅠA類)が重複していた。人骨等の出土は
ない(遺構第14図)。

223号墓 222号墓の北側で、下層に土壙S K547
(IV類)を伴う一辺1.2m内外の配石墓であったと推
定。空風火輪A0798は区画用配石の一部に転用され
た可能性がある。人骨等の出土はなかった。

224号墓 221号墓と223号墓の中間にも、一辺1.3
m前後の方形墓を推定した。想定区画中央部に径約
0.5mの小規模な土坑を検出したが、遺物等はなかっ
た(遺構第12図)。

225号墓 222号墓の東側にある1.2×1.1mの方形
墓。人骨等の遺物はない。区画南西隅の配石に転用
された水地輪A0892を採取。墓はこの石塔より新し
い(遺構第16図)。

226号墓 225号墓の北東3mにある。区画北西
側の配石は散逸したが、2.0×1.8mの方形墓を想定。
区画に東接して刀子(鉄17)が出土したほか、水地
輪A0881も採取した。

227号墓 下記②墳丘状遺構で報告する。(28頁)

228号墓 222号墓から幅0.6mの通路を挟んだ南
東側にある。1.7×1.6mの方形墓。南接の383号墓に
先行する。空風(火)輪A0841～2、火輪A0375を採
取した(遺構第14図)。

229号墓 228号墓と230号墓との墓間通路を転用
した後出の墓で、規模は概ね1.7×0.9mである。人
骨S X62と土師器小皿破片(222)が出土した。藏骨
器はない。土師器小皿(222)は14世紀末～15世紀
前葉頃に比定した。当墓はそれ以降の所産と考え
る(遺構第14図)。

230号墓 0.5～0.6m大の石を使う堅牢な造りで、
一辺1.8m四方の方形墓。区画の北西に偏して0.4m
大の川原石が据わり、下から人骨S X52が出土した。
藏骨器はない。空風輪A0135を採取。平面上は下層
土壙S K555(Ⅲ類)が重複する。区画石列の共有関係
から推して397号墓に先行する墓である(遺構第16図)。

231号墓 230号墓に東接する1.9×1.4mの長方形
墓。区画西寄りで0.45m大の川原石の下から人骨S X

53が出土した。藏骨器はない（遺構第16図）。

232・233号墓 230号墓から約0.3mの通路を挟み北側に続く小規模な2基の墓。前者は1.1×1.0m、後者は一辺1.3mの方形墓。後者で空風火輪A0785を採取した。いずれも人骨などは残っていなかった（遺構第16図）。

234号墓 230号墓・231号墓の東にある。2.0×1.9mの方形墓。区画内に高さ約0.36mの墳丘状盛土を残す。梵字入りの水輪A0513を採取。これは238号墓で採取した空風輪A0120とセット関係を想定出来る。人骨等はない。平面上、下層の火葬施設SK558（I A類）の約半分が重複するが、これは当墓とは別の遺構で、後に詳述する（34頁）。

235・236号墓 下記②墳丘状遺構で報告する（28～29頁）。

237号墓 236号墓の隣にあるが、形状・規模は不明で、半楕円形状の土坑と0.3～0.6m大の川原石3個が検出された。

238号墓 234号墓の南隣にある1.5×1.4mの方形墓。239号墓に先行する墓。梵字入りの空風輪A0120を採取。これは、234号墓の水輪A0513とセット関係になる可能性が高い。

239号墓 238号墓と240号墓に挟まれた1.8×1.7mの方形墓。238・240号墓より後出の墓。中央部に0.6m大の石が据わるが、遺物はなかった。

240号墓 239号墓に東接する。区画用の石に0.6～0.9m大の石を使用した1.9×1.5mの堅牢な長方形墓。区画内に高さ0.4～0.42mの墳丘状盛土を残す。空風輪A0121を採取。平面上、下層土坑SK568（I A類）が重複する。239号墓より先行するが、後述243号墓の周溝の一部が当墓の下に埋没しているので、それよりは新しい（遺構第16図及び第38図）。

241号墓 240号墓に取付く2.2×1.0mの長方形墓。243号墓より新しい。火輪A0370、地輪A0623を採取した。

242号墓 241号墓の東隣にある1.3×0.9mの長方形墓。遺物はない。やはり243号墓より新しい。

243号墓 地形測量時から高さ約0.5mの墳丘状の盛土が顕著だった。配石区画の規模は2.5×2.4m。区画内部の盛土の下で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.2m、四隅を突出させた、ムササビ形状の火葬土坑SK570（I B類）を検出した。対角線上の距離は1.8

×1.7m。土坑の掘形は焼土で赤く、理土中には炭化物と少量の人骨SX177が混入していた。配石を除去し、周辺全体を0.04～0.3m程掘削する過程で周溝SD879を検出。幅0.5～1.0m余（底部幅0.4～0.6m）、深さ0.25m前後の溝が東・南・西側三方に巡り、北（谷）側に開く。火葬土坑SK570の三方に周溝を掘り、方形状に盛土しつつ配石区画を築造した後に、供養塔（卒塔婆か石塔かは不明）を建てたと推測される（個別遺構第38図）。主体部を示す土坑と墓域を示す周溝とを伴う点は、上記100号墓・221号墓にも類例があった。形態上は方形周溝墓と言うべく、規模や時期差などを無視すれば、類例は県内外にある（註5）。

244～246号墓 いずれも243号墓の区画東辺に接して造られた後出の墓。3者の規模・形状はそれぞれ1.3×1.3mの方形墓、長径1.1×短径0.6mの楕円形墓、1.9×1.6mの長方形墓とする。3者で最も新しい245号墓は両者の間に割込むように造られ、全面石敷きで、人骨SX169が出土したが、藏骨器はない。244号墓で空風輪A0029、水輪A0475を、246号墓で空風輪A122を採取した（遺構第16・38図）。

247号墓 248号墓に北接する。配石散逸で規模・形状は不明。現状では2.0×1.0m分だけ復元可能。南側に偏して人骨SX128が出土し、空風（火）輪A0840、火輪A0369を採取した。藏骨器はない。

248号墓 247号墓の南辺に接する一辺1.2mの長方形墓。区画配石の配置状況から見て、247号墓に先行する墓だろう。遺物等はなかった。

249号墓 248号墓の東に続く。配石列が一部乱れるが、最大で3.2×1.8mの長方形墓。区画の南辺を共用する414・443号墓に先行する墓。土師器の高台付碗底部破片（80）、小皿破片（235）が出土した。

250号墓 幅約0.3mの墓間通路を隔て249号墓の東に並ぶ。3.0×1.8mの長方形墓。区画内に高さ0.4～0.44mの墳丘状盛土が残る。地輪A0681を採取。下層土坑SK594（II A類）が重複する。

251号墓 249号墓から4m北方にある。1.2×1.2mの方形墓。下層土坑SK579（IV類）が概ね重複する。

252～256号墓 251号墓の南東側に散らばるように5基ある。本来は配石列の方向を描えていたと推測され、250・257号墓等の規制を受け一定の墓域を構成した可能性もある。いずれも、一辺がおおむね

1.2～1.0m規模の方形墓である。遺物等はなかった。

257号墓 幅0.2～0.3mの墓間通路を隔て250号墓の東側にある。2.7×1.9mの長方形墓。区画内に高さ約0.3mの埴丘状盛土を残すのみ。遺物はない。

258号墓 257号墓との間に0.4～0.5m幅の通路を隔てた、一辺1.5mの方形墓。遺物はない。

259号墓 258号墓との間に0.4m幅の通路を隔てる。0.9m四方の方形墓。遺物はない。

260・261号墓 259号墓に続く方形の墓。前者は1.6×1.2m、後者は1.0×1.0mで、共に遺物はない。総じて、これら尾根筋上に展開した配石区画墓の石は比較的大きく、立派で、石列方位も似通っており、ほぼ同じ時期に並立存在した可能性があったかも知れない。

註4 荒井勘之丞『古墓日記』に、「古墓の土を持ち来りて」と見ゆ。

註5 兵庫県教育委員会編『宝林寺北遺跡』(兵庫県文化協会、1987年)にも、中世墓としての方形周構墓が報告されている。

d) 南・東側斜面（262～460号墓、第13表および
遺構第13図～第16図参照）

グリッド名 I 16～J 16からN 26～O 26に及ぶエリアで、調査A地区のおおむね西側から東方向に広がる南斜面（第9図）を扱う。墓数や検出遺構状況から見て、当世墓群で一番の配石区画墓密集地帯である。本来は墓間通路と思しき空閑地からも人骨が出土する利用頻度の高い墓域もあった。

特にグリッド名 L 24～M 24・25の地帶は、遺構が混ぜんとして不明瞭な点が多い。本来はあったはずの納骨場所に対する一定のルールが最早崩れたか、或いは墓の上に重ねて墓を造ったかとさえ思えるほど石の重複した（それは後世の現状変更の結果かも知れないが）特異な墓域もあった。

262号墓 162号墓と182号墓の間にある。形状・規模は不明だが、2.0×1.1mの長方形墓と推定。160号墓～162号墓の南東側を南北方向に走る通路に面していたと推測する。古銭（銖2）「永楽通寶」が1枚だけ出土した。

263号墓 262号墓に南接する1.5×1.4mの方形墓と推定。区画東隅から人骨 S X 55が出土。藏骨器な

し。南側（183号墓西端）で古銭（銖1）「洪武通寶」が1枚出土した。

264号墓 263号墓から幅0.4mの墓間通路を隔てた南西側にある。1.5×1.1mの長方形墓。区画中央のやや北よりから人骨 S X 56が出土。藏骨器なし。埋土から14世紀後葉～15世紀初頭頃の常滑産窓の小破片（87）が出土（同個体の別の破片は182号墓からも出土）。当墓の築造時期はこの窓（87）より新しいと考える。

265号墓 264号墓に東接。配石に移動があり判然とせぬが、人骨 S X 145の出土を以て墓の存在を推定した。藏骨器はない。埋土から12世紀中葉頃の山茶碗小破片（52）が出土したので、当墓はそれより後の築造である。同一個体の破片は80号墓からも出土した。

266号墓 192号墓の南西側に接したと思われ、出土した人骨 S X 10・S X 142・S X 143のうち、少なくとも S X 10と S X 143は当墓のものと判断した。S X 142と S X 143の中間で鉄釘（鉄52）が出土。S X 142は267号墓に伴う可能性もある。いずれも藏骨器はない。埋土から土師質円筒状容器底部破片（30・31）、常滑産片口鉢破片（45）、経筒外容器筒身破片（29）が出土した。土師質円筒状容器底部破片（30・31）の同一個体で別の破片が201号墓から、常滑産片口鉢破片（45）の別破片が182・183号墓から、また経筒外容器筒身破片（29）の別破片が99号墓、182・183号墓、201号墓などからも出土している。相輪A 1017も採取した。当墓は14世紀代以降の築造と推定する。

267・268号墓 幅0.2m前後の墓間通路が北西から南東方向に僅かに残るため、その左右に面する墓を想定。266号墓に南接する267号墓の規模は不明。先記の人骨 S X 142は当墓のものかも知れない。空（風）輪A 0299を採取した。268号墓は1.5×1.2mの長方形墓と推定。水地輪A 0903・相輪A 1018を採取した。

269～272号墓 268号墓の西側にはほぼ東西方向に連なる。前2者は共に1.1×1.1mの長方形墓。269号墓は270号墓の北西辺に取付いた後出墓。後2者は残存度が悪いが、271号墓は1.5×1.1mの長方形墓、272号は1.3×1.3mの方形墓で、ここでは地輪A 0639を採取した。これらの規模や区画配石の並ぶ方位は192・193号墓、195号墓などとよく似ている。

273号墓 271号墓の南西側に接する $1.2 \times 1.1\text{m}$ の方形墓。141号墓や187号墓などと同様に全面に石を敷詰める。区画中央南よりで14世紀前半代と思える土師器鍋（102）と人骨S X 8及び刀子（鉄27）が出土。鍋の上に 0.28m 大の平坦な川原石（厚み 0.11m ）を蓋石として置き、藏骨器に転用された鍋（102）は潰れていた（遺構第34図）。刀子（鉄27）は渦巻き状に曲げられていた。鍋に埋納するためコンパクトに変形したもので、副葬品における形態化の姿を見る。蓋石の上に五輪塔を据えれば、典型的な中世墓の一形態となる。当墓の西側通路で火輪A0323・A0398を採取した。

274～278号墓 273号墓の南側にある。5基のうち276号墓を除く4基はいずれも径 $1.0 \sim 1.4\text{m}$ の円形墓、276号墓は $1.3 \times 1.1\text{m}$ の方形墓であろう。275号墓では区画石の間から人骨S X 151が出土、またその 0.3m 西側で刀子（鉄16）が出土した。円形状に一番よく石が潰っていたのは277号墓だが、遺物はなかった。

279～281号墓 277号墓の北側にある。279号墓は277号墓との間に幅 $0.2 \sim 0.3\text{m}$ の墓間通路を挟む一辺 0.9m 前後の方形墓で、区画北辺の石列を欠く。水輪A0478などを採取した。280号墓はその東側の集石部分で、 $1.1 \times 0.9\text{m}$ の長方形墓と推定。281号墓は更にその北の円形状墓で、径約 1.1m 。いずれも遺物はなく、築造時期は不明。両墓の間は狭い墓間通路の可能性がある。

282～284号墓 281号墓、283号墓、285号墓に挟まれたL字状の空間はもともと幅約 $0.4 \sim 0.5\text{m}$ の墓間通路であった。その空闊地の2ヶ所から人骨S X 11とS X 162とが出土した。S X 162から15世紀中葉頃の土師器羽釜破片（94）が、またS X 11からは16世紀代の土師器羽釜破片（93）がそれぞれ伴出。ともに墓間通路を転用した後出の墓と判断し、282号墓、284号墓とした。前者で空（風）輪A0289、空風（火）輪A0851、水輪A0529を、後者では空（風）輪A0272、水地輪A0873、相輪A1043を採取。両墓に先行する283号墓は $1.5 \times 1.1\text{m}$ の長方形墓で、遺物はない。下層土坑S K500（II B類）の大半が重複するが、両者の関係は不明であった。

285号墓 284号墓に先行する $2.1 \times 1.9\text{m}$ の長方形墓で、一石五輪塔A0990を採取した以外に遺物はな

く、築造時期は不明。北東側の205号墓との間に幅 $0.5 \sim 0.7\text{m}$ の幹線墓道の一つを形成したであろう（写真第4図）。

286～290号墓 280号墓の南側にあり、283号墓の区画東辺の石列に方位を描いていたと推定。最もよく遭る286号墓は $1.2 \times 1.1\text{m}$ の方形墓。287・288号墓はそれぞれ一辺が 1.0m と 0.9m の方形墓。後者で空風輪A0033・A0290を採取。289号墓は288号墓の区画の一部を共用した後出の墓と推定。290号墓は、向い側の291号墓に墓道を挟んで対面する位置にあつた。火輪A0453・地輪A0638を採取した。以上5基からは人骨の出土はなかった。

291号墓 幅 0.2m 程の墓間通路を挟み、290号墓の東側にあった。形状・規模は不明だが、 1.0m 前後の方形墓。想定区画の南西に偏した2ヶ所から人骨S X 12・S X 13が出土した。後の直上には蓋石として扁平な石が据えてあつた。かつてはその直上に五輪塔を据えていた可能性が高い。

292・293号墓 幅約 0.2m の通路を挟み、286号墓～290号墓と向い合う。前者292号墓は一部を欠失するが、径 1.5m の円形状墓で全面石敷きである。埋土中にロクロ土師器皿底部破片（33）が混入していた。空風輪A0034・A0035を採取。後者293号墓は通路側と東側の区画石を一部残すだけだが、一辺が 1.5m 前後の方形墓と推定。空風輪A0032、火輪A0324を採取した。

294～297号墓 294号墓は293号墓に北接する一辺 1.3m の方形墓。空風輪A0158を採取。285号墓の東辺を利用して取付く後出の295号墓は $2.4 \times 1.8\text{m}$ の長方形墓。空風輪A0057、空風（火）輪A0805を採取。294号墓と297号墓に挟まれた空闊地を利用した後出の296号墓は $1.5 \times 0.9\text{m}$ の長方形墓と推定。（空）風輪A0251を採取。279号墓は295号墓に南接するも区画石列を共用せずに造られた $1.3 \times 1.2\text{m}$ の方形墓。東側の墓間通路で空風輪A0056、水輪A479を採取。これら4基からも人骨等は出土しなかった。

298・299号墓 前者は297号墓の南側にあり、区画石を一部欠くが $1.4 \times 1.1\text{m}$ の長方形墓と推定。その東側の299号墓は一辺 1.3m の方形墓。共に遺物はない。両墓の区画石列は294～297号墓等のそれと方位が異なり違和感がある。寧ろ317・318号墓～211・

215号墓などと近い方位を示し、等高線の変化によるか、ないしは墓地經營における勢力圏の違いなどを反映する可能性があるかも知れない。

300～306号墓 7基を一群の墓と見たい。幅0.2～0.3mの通路を挟み292号墓の東にある300号墓は、1.2×1.1mの方形墓。区画中央部から人骨S X161が出土し、火輪A0396を採取した。藏骨器はない。これに東接する301号墓は一辺0.1m前後の方形墓で、人骨はなく、空風輪A0157を採取。南側配石区画の半分を欠失する302号墓は一辺1.0m程度の方形墓で、区画中央部に平坦面を持つ0.5m大の川原石が据わるが、人骨の出土はなかった。扁平な石が据わる類似例には、173号墓、187号墓、204号墓などがある。300号墓に隣接する303号墓は径1.1mの円形状墓であろう。やはり人骨はない。その東の304号墓は現状で一辺0.9m四方の方形墓、これも人骨ではなく、地輪A 0581を採取。それに東接する305号墓は1.0×0.9mの方形墓。区画南辺際で人骨S X14が出土したが藏骨器はない。最も東にある306号墓は、302号墓との境界が不明瞭だが、一辺1.1m前後の方形墓と推定。人骨はないが、空風輪A0036、火輪A0321のほか、5個体の地輪A0700～A0704を採取。このうち地輪A 0702～A0704の3個体は区画用の配石（東辺）に転用された可能性が高い。

307号墓 295・297号墓との間に0.5～0.6m幅の墓道を挟み、211号墓との間に墓道を造った長方形墓と推定。規模は2.1×1.4mと推定。遺物はなかった。

308号墓 307号墓に東接する0.9×0.6mの長方形墓。307号墓と310号墓との墓間通路を転用したと推定する。

309号墓 308号墓の北にあり、区画配石の一部を欠失するが、1.3×1.3mの方形墓とした。213号墓、313号墓との間に通路を形成する。出土遺物はない。

310号墓 309号墓の南東に接するが区画石を共用しない1.5×1.3mの方形墓。人骨はなく、水輪A 0480、（水）地輪A0908を採取した。

311号墓 310号墓と312号墓に挟まれた空闊地に後から造られた、一辺1.1m程度の方形墓。墓間通路を画すL字状の列石までを含むと1.6×1.1mの長方形墓になる。空風輪A0150を採取。302号墓ほかにもあったような平坦面をもつ0.4m大の石をここでは2

個据える。人骨はなかった。

312号墓 315号墓の区画石の西辺に取付く形で後に造られた1.1×1.0mの方形墓。遺物はない。313号墓、316号墓との間にそれぞれ狭い通路を形成する。南側の墓間通路で空風輪A0151、（水）地輪A0900を採取した。

313号墓 311・312号墓の北側にあるも、区画石の共用関係はない。径1.8mの円形状墓と推測。区画配石の切り合い関係からみて、315号墓より後出の可能性が高い。

314号墓 区画石の残存状況から、315号墓の北辺を共用する2.0×1.0m以上の長方形墓があったと推定。遺物はない。

315号墓 312～314号墓に先行し、0.6～0.7m大の石を用いた1.9×1.8mの方形墓。下層に重複の土坑S K521（I A類）はやや特異な土坑で、底部全面が灰で覆われていた（第15表）。

316号墓 315号墓のやや南西側にある1.3×1.2mの方形墓。東接の331号墓とも区画石を共用せず、独立性をもつ。人骨はなく、空風（火）輪A846～7、地輪A0627を採取した。

317号墓 316号墓の西側約3mにあり、308号墓と318号墓とに挟まれている。310号墓の区画南西角部、318号墓の区画北辺を共用した一辺1.3m前後の方形墓と推定。人骨はなく、火輪A0391だけを採取した。

318号墓 現状で2.4×1.1mの長方形墓。東西両短辺の際で人骨S X15とS X16とが出土。共に藏骨器はない。後者S X16は平坦面を持つ0.3m大の石の間に埋納される。類似例には120号墓、129号墓、140号墓、204号墓、230号墓、319号墓、335号墓などがある。空風輪A0155、火輪A0319、地輪A705を採取した。区画配石の切り合い関係から、319号墓よりは後出で、317号墓や320号墓には先行した可能性が高い。

319号墓 長径2.0m、短径1.0mの長楕円形。区画石の切り合い関係からみて、318・320号墓には先行すると推定。区画内の北西に偏して、平坦面を持つ0.3m大の石が据わり、その直下から人骨S X105が出土。藏骨器はない。下層土壤S K519（III類）が概ね重複するが、別の遺構である。

320号墓 318号墓の区画南辺を共用せず、南接する。復元して約1.3×1.2mの方形墓と推定。4ヶ所

から人骨 S X38及びS X106～S X108が出土。蔵骨器はない。いずれも区画縁辺部からの出土で、特にS X108は318号墓の区画石との隙間から出土し、納骨のあり方に疑問がある。空（風）輪A0267、空風輪A0039、地輪A0680を採取した。

321号墓 320号墓同様、これも318号墓の区画南辺を共用せず、南接する。復元して一辻1.3m四方の方形墓。人骨はなく、火輪A0318を採取。先の320号墓と一体の長方形墓であった可能性もあるが、採らず。

322号墓 320号墓の区画南辺、327号墓の区画西辺をそれぞれ共用する、一辻1.0m前後の方形墓。区画中央部から人骨 S X170が出土した。蔵骨器はない。

323～325号墓 321号墓の区画南辺を共用する324号墓と322号墓との間に323号墓を想定し、一辻1.0m内外の方形墓とした。地輪A0699を採取。324号墓は一辻1.2m前後。火輪A0395、水輪A0524を採取。平面上、下層土壌 S K515（Ⅲ類）と重複するが、別の遺構である。322・323号墓の南側に一辻1.3mの325号墓を想定。想定区画の北東隅で人骨 S X29が出土。蔵骨器はない。一石五輪塔A0931を採取した。

326号墓 316号墓の南隣にある1.2×1.1mの方形墓。どの墓とも区画の一辻を共用せず独立性を保つ。遺物はない。

327・328号墓 新旧関係の明白な墓。まず一辻1.8m四方の327号墓が出来、その区画内に一辻0.8m四方の小さな328号墓が後から出来た。前者327号墓に人骨は遺らないが、後者の区画中心部からは人骨 S X28が出土。蔵骨器はない。前者で空（風）輪A0270を、後者で空風輪A0040、火輪A0452、（水）地輪A0886、一石五輪塔A1000を採取。但し、火輪A0452以下の3点は328号墓の造成時に他より集めて区画用の配石に転用したものであることが一目瞭然であった。後者の後代性を示す。

329・330号墓 幅0.2m足らずの墓間通路を隔て327号墓の南隣に2基が並ぶ。区画配石の半分以上を失い規模は不明だが、現状で前者329号墓は一辻が1.1m、後者は1.6mあった。前者では空風（火）輪A0849、地輪A0632～0633を採取した。共に人骨等の出土はなかった。

331～335号墓 J～K20地区内にこの5基が整然と一列に並ぶ。不定形な334号墓を除き他4基の規

模はそれぞれ順に、1.5×1.2m、1.2×1.2m、1.2×1.2m、1.7×1.2mである。区画用配石の大きさ・並べ方・残存度からみて332号墓が他の4基に先行しただろう。217号墓や315号墓と区画用配石の配列方向が揃っており、墓の造成に何らかの規制が働いたことを予想させる。335号墓には区画南辺寄りに平坦面を持つ0.4m大の川原石が据わり、その直下から人骨 S X25が出土した。蔵骨器はない。平らな川原石の据わる類例は318号墓・319号墓などのほか、比較的多い。また、相輪A1019も採取した。335号墓以外の4基には人骨はなかった。

336・337号墓 338号墓の南隣に鉤状の石列が残り、その短辺が2列残っていることから、335号墓の南隣にも336号墓があったと想定。336号墓の一辻は1.5m、337号墓の一辻を2.0mと推定。後者では2ヶ所から人骨 S X26・S X27が出土したが、蔵骨器はなかった。

338号墓 337号墓の北隣にあり、335号墓の区画東辺を共用する。1.6×1.0mの長方形墓。区画南西隅で人骨 S X24が出土。蔵骨器はない。空風輪A0051、相輪A1020を採取。本来は315号墓方面から真っ直ぐ斜面を下つて335号墓の所で左に曲がる墓間通路に当たっていたかも知れない。

339号墓 1.0×0.9mの方形墓。人骨の出土はなく、空風輪A0050を採取した。

340号墓 315号墓方面へ通じる幅0.2m弱の通路を隔て339号墓の北に隣接する。区画石の一部が動いているが1.2×1.1mの方形墓。下層で人骨 S X232と刀子（鉄20）を検出したが蔵骨器はない。これは当墓の埋葬人骨であろう。空風輪A0041・A0042・A0141・A0146を採取した。

341号墓 340号墓のすぐ北隣にある。0.8m大の石を含む配石区画の規模は1.2×1.2m。区画の南東に偏して2ヶ所から人骨 S X17・S X152が出土。蔵骨器はない。空風輪A0044～A0045、地輪A0626を採取した。

342・343号墓 幅0.2mの墓間通路を隔て、341号墓に北接する342号墓は、1.3×1.1mの方形墓で、343号墓の区画南西角を共用する。後者343号墓は一辻1.4mの方形墓で、区画配石の切合い関係から342号墓に先行したと推定。339号墓から342号墓までの

4基は、相互に配石区画の一辺を共用せずして築造され、通路を挟んだ反対側の331～335号墓とは対照的に独立形態を保つ。通路を挟み、同じ方向に並んでいても、築造背景は異なり、ここでは通路がひとつの「小墓域」を画する機能を有した可能性をもあろう。

344号墓 343号墓と349号墓、353・352号墓とに挟まれた $1.0 \times 0.9\text{m}$ の方形墓。墓間通路であった空閑地を墓に転用したと推測する。上記の4ヶ墓より新しい墓である。

345～348号墓 通路を隔て、343号墓の北側に隣接して4基がかかる。いずれも人骨はない。345号墓は343号墓とは区画石を共用せず独立存在し、 $1.5 \times 1.3\text{m}$ の方形墓。346号墓は $1.5 \times 1.1\text{m}$ 、347号墓は $1.5 \times 1.2\text{m}$ の長方形墓。両者は345号墓の区画北辺を共用したと推測する。最も原形を留める348号墓は $1.4 \times 1.3\text{m}$ の方形墓で、346号墓はこの区画西辺をも共用した。平面上は下層土壇SK532(Ⅲ類)個別遺構第40図)と概ね重複する。

349・350号墓 幅 0.5m の墓間通路を隔て、348号墓の南に位置する349号墓は $1.4 \times 1.2\text{m}$ の方形墓で、下層土壇SK530(Ⅳ類)が概ね重複。この東に接する350号墓は $1.6 \times 1.3\text{m}$ の長方形墓。やはり下層土壇SK543(Ⅳ類)が重複するが、いずれも人骨等ではなく、それぞれ別の遺構であろう。

351号墓 350号墓に南接する $1.6 \times 1.4\text{m}$ の長方形墓。区画中央部に扁平な5個の川原石を箱状に組み $0.4 \times 0.4\text{m}$ の空間を造る(個別遺構第34図、写真第5図)。類例は58号墓や411号墓にもあり、納骨施設と判断した。人骨の出土はない。

352号墓 351号墓に西接する $1.4 \times 1.1\text{m}$ の長方形墓。堅牢な349号墓の区画南辺を共用して造られた後出の墓。平面上、下層土壇SK529(Ⅳ類)と重複するが、別の遺構である。いずれも人骨等の出土はなかった。

353号墓 352号墓に西接する一辺 1.2m の方形墓。人骨はない。該墓の区画南辺に沿い東西方向に走る幅 0.2m 内外の墓間通路は、342号墓から371号墓に(あるいは当初は382号墓にまで)至る約 $7 \sim 8\text{m}$ 余の間を繋ぎ、小規模な墓域を画する機能を持ったと推測する。

354～357号墓 上記通路の南側に沿って東西に

並ぶ4基の墓の規模は、それぞれ順に $1.4 \times 1.3\text{m}$ 、 $0.8 \times 0.8\text{m}$ 、 $1.0 \times 0.6\text{m}$ 、 $1.5 \times 1.2\text{m}$ である。いずれも人骨の出土はない。354号墓で火輪A0390のほか、セット関係にある空風輪A0254・火輪A0451・水輪A0552・地輪A0698を採取。355号墓では火輪0385、地輪A0697を採取した。半壊状態の空風火輪が区画用配石の一部に転用されていた。この点からも355・356号墓は354・357号墓に挟まれた墓間通路を転用した後出の墓と考えるのが妥当である。

358～360号墓 上述4基の墓の区画南辺を共用しつつ東西に並ぶ。これら3基の規模はそれぞれ、 $1.4 \times 1.3\text{m}$ 、 $1.3 \times 0.9\text{m}$ 、 $1.5 \times 1.2\text{m}$ である。358号墓の区画東辺の石の際から人骨SX22が出土し、地輪A0696を採取した。藏骨器はない。360号墓では(空風(火)輪A0807、地輪A0694を採取。両墓の間に挟まれた359号墓は、墓間通路(空閑地)を転用した後出の墓と推測する。遺物はなかった。

361～363号墓 359号墓に南接する361号墓は梢円形を呈し、長径 1.5m 、短径 0.6m である。墓間通路を転用した後出の墓と推定。区画東端部で人骨SX21が出土。藏骨器はない。362・363号墓は共に配石区画の南半部を欠き、現存の一辺は各々 1.5m と 1.3m である。362号墓では2ヶ所から人骨SX23・SX48が出土し、空(風)輪A0287を採取した。藏骨器はない。後者では空風(火)輪A0845を採取した。

364号墓 幅 0.2m の通路を挟み363号墓の東側にある。一辺 1.4m 程の方形墓と推定。区画西端で、14世紀前半代の土師器鍋(103)を藏骨器として人骨SX20と鉄釘(鉄53)等が出土した。鍋の直上に 0.4m 大的の川原石を蓋にして据えてあった(個別遺構第37図)。

365号墓 364号墓の東隣にある。一辺 1.5m の方形墓と推定。区画西隅に近い2ヶ所から人骨SX18・SX149が出土。藏骨器はない。空輪A0003、空風輪A0053、火水地輪(一石五輪塔)A0988などを採取した。

366号墓 367号墓の区画南辺に接する $1.2 \times 0.5\text{m}$ の長方形墓と推定。本来367・368号墓、372号墓の各区画南辺に沿って幅 0.2m 内外の東西通路があり、その一部を区切り、367号墓の南辺を共用する形で造られた後出墓である。人骨SX19が出土し、地輪A

0695を採取した。藏骨器はない。

367・368号墓 357号墓の東側に続く2基。前者は1.4×1.3mで出土遺物はなく、後者は1.5×1.3mの方形墓で、空風（火）輪A0844を採取した。いずれも平面上は下層土壙SK541（IV類）・SK542（III類）がそれぞれに重複するが、共に一体の墓ではなく別構造である。368号墓と372号墓に挟まれた隙間からも人骨SX165が出土。こういう所属不明の人骨が随所に出土するのが、A地区の南東斜面域の特徴でもあった。

369～371号墓 368号墓の北隣にある。369号墓と371号墓の2基は、先行してあった370号墓の区画石をそれぞれ共用して後から築造された。370号墓の区画には0.7m大の石も使われ、規模は1.6×1.4m。その区画南辺に半分ずつ取付く369・371号墓は、各々2.0×1.4m、1.4×1.1mの長方形墓。前者で空風（火）輪A0844を採取。平面上370号墓の下層には土壙SK545（III類）が、369・371号墓には土壙SK544（IV類）が重複する。370号墓と371号墓の境界に接する通路内で人骨SX50が出土、藏骨器はない。後後に墓間通路の片隅に納骨をした一例で、所属不明の人骨である。

372号墓 368号墓の東隣にあり、371号墓に南接する。一边1.4mの方形墓。空輪A0142・A0271、空風輪A0142～3、火輪A0386、地輪A0691～2等を採取。地輪A0691は原位置を保ち、その直下で厚さ0.06mの扁平な石（0.26m大）を検出。更にその直下から人骨SX160が出土した（個別遺構第34図）。地輪直下に納骨された典型的な例で、類例は89号墓もある。納骨穴は径0.16m、深さ0.06mで、有機質の容器に収骨し埋納したと推測。区画左半には0.4m大の扁平な石が2個据わり、その間からも人骨SX31が出土。埋土から土器小皿小破片（192）が出土したが、藏骨器はない。類例は318・319号墓、335号墓などにもある。当墓には平面上、下層土壙SK548（IV類）が重複するが、別の遺構である。

373～376号墓 幅0.2m前後の墓間通路を隔て372号墓の南側にある。365号墓に東接する373号墓は1.5×1.3mの方形墓。地輪A0679を採取。376号墓は残存する石を繋いで1.6×1.3mの長方形墓に復元。両墓間の通路を塞ぐ374・375号墓は、一边が0.5m前

後の方形墓。後者375号墓で採取した地輪A0693は区画用の配石に転用された可能性が高い。いずれも人骨等の出土はなかった。

377～382号墓 通路を挟み372号墓の南隣にある377号墓は、373号墓と区画の一辺を共用して東接する1.4×1.1mの長方形墓。その東南角に取付く378号墓は、現状で1.1×1.0mの方形墓。区画西端近くに平坦面を持つ0.35m大の石があり、意外にも人骨SX32はその石の直上から出土。通常の埋納とは思えず、無論藏骨器はない。よく似た出土例は98号墓でも経験した。埋土から出土の土器小皿破片（252～254）は、15世紀後葉から16世紀前半代にかかると思われ、378号墓はそれ以降の築造と推定。379号墓は一边1.2m程度の方形墓と推定。火輪A0389を採取した。377号墓の区画東辺に取付く380号墓は372号墓の南東隣にあり、1.4×1.0mの長方形墓。更に北方向に並ぶ381・382号墓は、それぞれ1.2×1.1m、1.5×1.4mの方形墓。平面上は下層土壙SK549（I B類）、SK551（III類）がそれぞれ重複するが、別の遺構である。

383号墓 228号墓の区画南辺に取付く2.6×1.8mの長方形墓。区画西側の通路に近い配石際と228号墓に近い北東隅の2ヶ所から人骨SX49・SX51が出土。藏骨器はない。人骨が区画隅から出土して、中心部からは何も出ない理由がよく解らない。南側の382・384号墓とは区画配石を共用せず独立し、397号墓が区画東辺に取付く状況から、造墓の新旧関係は、228号墓→383号墓→397号墓（382号墓・384号墓）の順であったことはほぼ確実である。

384～388号墓 382号墓に東接の384号墓は1.3×1.2mの方形墓。空風輪A0144、火輪A0387を採取。0.15m程度の細い通路を挟み384号墓の南側にある385号墓は1.2×0.8m、更に通路を挟み南側に隣接の386号墓は1.1×1.0mで、共に出土遺物はない。386号墓に南接する387号墓は1.5×1.3mで、区画中央部と北東隅の2ヶ所から人骨SX30・SX140が出土した。藏骨器はない。388号墓の規模・形状等は不明だが、一边1.0m前後の規模はあったと推測する。

389～398号墓 尾根筋上の230号墓から南側へ斜面を下って連なる10基。最南端の389・390号墓は区画南半の配石を欠失するが、共に1.3×1.2m前後の

方形墓。前者389号墓で火輪A0382を採取。391号墓は 1.4×1.2 mの方形墓で、空風輪A0134を採取。西側の386号墓との間に通路を挟み独立はするが、393・394号墓の区画石列に取付いて増設された新しい墓である。392号墓は 1.2×1.0 mの方形墓で、空風輪A0133を採取。391・394号墓と区画石列を共用するが、東接の401号墓からは独立する。393号墓は395号墓の区画南辺に取付く 1.4×1.3 mの方形墓で、391号墓に先行する墓である。400号墓の区画配石西辺を利用した394号墓は 1.7 m四方の方形墓である。395号墓は 1.3×0.9 mの長方形墓。393号墓に先行するとと思われ、384号墓との間に幅 0.3 mの墓間通路が走る。空風輪A0145、火輪A0388、水輪A0520を採取した。396号墓は 1.6×0.9 mの長方形墓。隣接395号墓も含め、本来は通路であったと推測。397号墓は 1.8×1.6 mの方形墓で、383号墓の東辺に取付く後出の墓である。埋土から土師器小皿小破片(256)が出土した。15世紀後葉～16世紀初頭頃より以降の築造と推定した。以上の10基ではいずれも人骨の出土はなかった。

399～401号墓 399号墓は 1.7×1.5 mの長方形墓だが、区画の南東隅がL字形に凹む形状は、先行する407号墓の区画北西角に規制を受けた結果である。人骨S X194が15世紀前半代の常滑産甕(70)を藏骨器として出土、当墓はそれ以降の築造と考える。平面上は下層土坑S K568(ⅠA類)が重複するが、別の遺構である。幅 $0.2 \sim 0.3$ mの通路を挟み407号墓に西接する400号墓は 2.4×1.5 mの長方形墓で、399号墓の区画南辺に取付いた後出の墓。区画東南端の2ヶ所から人骨S X35・S X123が出土。藏骨器はない。空風輪A0131、火輪A0377、水輪A0515～6を採取。当墓の区画に取付いた後出墓が391・396号墓になる。従って、区画配石の切合い関係から周囲の新旧関係を示すと、407号墓→399号墓→400号墓→394号墓→396号墓の順となる。幅 0.3 mの通路を挟み400号墓の南隣にある401号墓は二重の方形区画であった。内側 1.0×0.9 m、外側 1.6 m四方の方形墓。埋土から出土の土師器小皿小破片(201)は、15世紀中葉～後葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造であろう。火輪A0381を採取。重複する下層土坑S K562(Ⅲ類)は別

の遺構である。

402号墓 401号墓の南側 2 mの所にあり、その間を幅 0.2 m程の通路で繋ぐ。一辺 1.5 mの方形墓。遺物はなかった。

403号墓 401号墓から下りてきて402号墓の北でL字に曲がる墓間通路を転用した長径 $1.4 \times$ 短径 0.8 mの楕円形墓。402号墓より後出の墓。遺物はなかった。

404号墓 上記L字状通路の内側角にある。 1.2×1.1 mの方形墓。区画東南端隅で人骨S X134が出土。藏骨器はない。北接する405号墓の区画南辺に取付くため、当墓の方が後出と判断した。

405号墓 1.9×1.2 mの長方形墓。区画中心からやや東にずれて $0.1 \sim 0.2$ m大的川原石が数個円形状に集積され、その中心部から人骨S X121が出土。藏骨器はない。同じタイプは128号墓や406号墓にある。空風輪A0132を採取した。本例とはやや異なるが、数個の扁平な川原石を箱状(直方体状)に組み合わせた納骨施設を有する墓は58号墓、351号墓、411号墓などに類例がある。当墓は幅 $0.2 \sim 0.3$ mの墓間通路を隔てて401・406号墓からは一定の独立性を保つ一方、区画の南・東辺には404号墓、424・425号墓が配石を共用して取付形に配置構成される。従って、当墓はこの小墓域の中心をなす可能性がある(写真第5図)。

406号墓 通路を挟み405号墓の北隣に位置し、400号墓と区画の一辺を共用する。 1.9×1.3 mの長方形墓。区画東側に偏して前記405号墓の場合と同じく $0.1 \sim 0.3$ m大的石の集積があり、人骨S X122が出土。藏骨器はない。空風輪A0130、火輪A0380、空風(火)輪A0869を採取。下層に火葬土坑S K567(ⅡA類)がほぼ重複。その火は北隣407号墓の南側石列を焼いていた。419号墓との間に通路内の3ヶ所で人骨S X33・S X125・S X155の出土をみた。406・419号墓の築造より後代の納骨と考える。S X33に伴出の土師器小皿小片(257)は、16世紀前半代に比定できる。従って、406・419号墓の築造は当然16世紀後半より以前になる。

407・408号墓 前者は一辺 1.2 mの方形墓、後者は 2.1×1.5 mの長方形墓。相互に区画の一辺を共用する。前者で空風輪A0129、火輪A0379、地輪A0689を採取。地輪は区画中心部に据わる。南に隣接

した406号墓の下層で検出の火葬土坑SK567より先行する墓である。後者では、区画の西北隅寄りで人骨SX126が出土し、その側で水輪A0518、地輪A0688を採取。藏骨器はない。この埋土中から土師器鍋破片(107)が出土、14世紀末～15世紀初頭頃に比定される。408号墓はそれ以降の築造と考えた。外接する墓間通路の石の間からも人骨SX124が出土したが、理由が判らない。ある時期に、當中世墓群への納骨規制に変容が生じた可能性もある。

409号墓 239号墓と408号墓とに挟まれた空闊地(墓間通路)に、239・240号墓の区画石列の一部を巧みに利用して造られた $1.5 \times 0.8m$ の長方形墓。遺物はなかった。

410号墓 240・408号墓に挟まれた墓間通路に、411号墓の区画西角を侵食しつつ造られた後出の墓で、長径1.0m、短径0.8mの不整形を呈す。人骨SX127が出土した。藏骨器はなかった。

411号墓 410号墓に一部侵食を受けたが、本来は一辺1.4mの方形墓。区画東端に0.3m大の川原石5個を箱状に組み合わせた納骨施設がある(58号墓や351号墓にも類例)。しかし人骨SX228はその箱状石組に北接した外側で出土。埋土中からは完形品に近い土師器皿(137)・小皿(224)が出土した。共に15世紀前葉～中葉頃のもので、当墓の築造もそれに比較的近いと推測する(写真第6図)。この他、区画南西端部でも人骨SX233が刀子(鉄09)などを伴って出土しており、同一区画内部に納骨が複数回行なわれたと解釈できる。藏骨器はなく、空風輪A0114・A0116・A0253を採取した。

412号墓 411・413号墓の境界で、墓間通路を転用。413号墓の区画北西角を侵食した径0.7m程の楕円形墓。人骨SX54が出土。藏骨器はない。埋土中に土師器鍋破片(106)が混じる。それは14世紀末～15世紀初頭頃に比定可能かも知れない。当墓築造はそれ以前ではあり得ない。

413号墓 419号墓の区画北東角に取付く。外画 $1.5 \times 1.2m$ の長方形墓。内側に更に $0.9 \times 0.9m$ の区画を持ち、その中央に約0.3m大の石が据わる。ほぼ中央部で地輪A0687を採取したが、それは内側区画の西辺の一部を構成していた。外側区画の北西・南西端部の2ヶ所に分れて人骨SX36およびSX37が出土。

藏骨器はない(写真第6図)。

414～418号墓 幅 $0.1 \sim 0.15m$ の通路を挟み413号墓の東から南側へ逆L字状にめぐる5基。最東端にある414号墓は $1.5 \times 0.8m$ の長方形墓。区画全体を石敷きに造るのは302号墓に継いで10例目。空風輪A0118、地輪A0678・A0686を採取。隣接の415号墓は $1.5 \times 1.1m$ の長方形墓。区画中央の東寄から人骨SX43が出土し、空風輪A0108、火輪A0365を採取。南接する416号墓は $1.3 \times 1.2m$ の方形墓。これも区画全面が石敷きで、中央部と区画南西端の2ヶ所から人骨SX110・SX141が出土。後者では土師器小皿破片(223)が出土した。空風輪A0103～A0105、水輪A0511、地輪A0677を採取。東接する411号墓との間の通路内からも人骨SX44が出土。417号墓は一辺1.2mの方形墓。区画東南端寄りの3ヶ所から人骨SX42・SX111・SX112が出土。SX42からは完形品の土師器小皿(259)が出土。15世紀中葉～後葉頃に比定した。概ねそれに近い時期の築造と推定。火輪A0366を採取した。417号墓より後出の418号墓は、419号墓との間の墓間通路を転用した $0.9 \times 0.5m$ の長方形墓で、区画南西端部で人骨SX40が出土し、空風(火)輪A0838を採取した。なお、413号墓との間の区画石の間でも3ヶ所から人骨SX129・SX130・SX131が出土。とりわけこの一带は納骨密集地帯の觀が強い。上述の人骨にはどれにも藏骨器はない。

419号墓 418号墓に西接、 $1.8 \times 1.2m$ の長方形墓。区画中央部の2ヶ所から人骨SX45・SX46が出土。空風輪A0113、火輪A0368を採取した。火葬土坑SK577(I A類)が一部重複するが、別の構造である。当墓は413・418・420号墓に先行する。408号墓との間の通路を転用したようで、2ヶ所から人骨SX124・SX151が出土。いずれにも藏骨器はなかった。

420号墓 419号墓に南接する一辺1.4mの方形墓。3ヶ所に分散して人骨SX115・SX116・SX117が出土した。藏骨器はなかった。

421・422号墓 前者は418号墓同様に、墓間通路を区切り墓に転用したもので、 $1.2 \times 0.9m$ の長方形墓。人骨SX113が出土、藏骨器はない。空(風)輪A0286、空風(火)輪A0839を採取。後者は $1.1 \times 0.8m$ の楕円に近い長方形墓。地輪A0676を採取した。

423号墓 420・428号墓の墓間通路を区切って転用した後出の墓。規模は $1.4 \times 0.4m$ と狭く、 $0.2m$ 内外の石を円形に組んだ、径 $0.2m$ 余の納骨空間がある(写真第6図)。人骨は3ヶ所から出土したが、S X 47だけがその丸い穴からで、他の人骨 S X 114・S X 164は違う場所からの出土である。いずれも藏骨器はない。空輪A0007を採取した。

424・425号墓 共に405号墓の東側と東南側に取付く後出の墓。前者は $1.7 \times 0.8m$ 、3ヶ所から人骨 S X 39・S X 118・S X 119が出土。S X 118からは土師器小皿破片(208)が出土した。区画北辺の配石の間からも人骨 S X 34が出土したが、当墓への埋納骨かどうか不明。406号墓と419号墓との墓間通路からも人骨 S X 120の出土がある。425号墓は $1.2 \times 0.9m$ 、区画中央に平坦面を持つ径 $0.4m$ 大的石が据わるが、直下での人骨の検出はなかった(写真第6図)。本来はその上に五輪塔を設置したであろう。こういう石の据わる例は4319号墓ほかに20数例を数える。空風輪 A0115～A0117、地輪 A0622を採取。南側の区画外で人骨 S X 133が出土。上記いずれの場合にも藏骨器はなかった。

426号墓 425号墓と430号墓との間の空閑地を転用した $1.3 \times 0.9m$ の長方形墓。425号墓に接する区画北寄りの配石上で前記人骨 S X 133を検出した。後代性を示す。

427・428号墓 前者は426号墓の東にある長径 $1.5m$ 、短径 $1.2m$ の楕円形墓。後者は前者の北東に接続し、長径 $1.3m$ 、短径 $1.1m$ の楕円形墓。共に遺物はなかった。

429号墓 428号墓の南にあり、 $2.2 \times 1.4m$ の長方形墓と想定した。区画の南西端隅から人骨 S X 132が出土し、土師器小皿破片(212～215)も出土。火輪 A0416を採取した。土師器小皿は15世紀中葉～後葉頃に比定でき、当墓はそれ以降の築造かと推測する。

430号墓 426号墓の南にあり、現山道の開鑿により削除を受けた。規模は $1.9 \times 1.4m$ 以上と推定。区画のやや東側に偏して小石($0.05m$ 内外)の集積があった(個別遭構第35図)。精査したが、どの石にも墨書き絵はなかった。

431・432号墓 427号墓に南接する。前者は墓間通路を区切って $1.5 \times 0.8m$ の長方形墓とした。後者

は現山道開鑿で削除を受けたため規模は不明だが、 $1.6 \times 0.7m$ 以上と推定。共に遺物等はなかった。

433～439号墓 区画配石の状況から一群の墓域と想定する7基。433号墓は少なくとも3面を墓間通路に囲まれた一辺 $1.2m$ の方形墓。空(風)輪 A0284、空風(火)輪 A0837、相輪 A1034を採取。埋土中から瀬戸産灰釉花瓶破片(50)が出土。434号墓は433号墓の区画北辺に半円状に取付く後出の墓。長径 $0.8m$ 、短径 $0.5m$ 。435号墓は433号墓と436号墓との間の通路を区切り転用した $0.9 \times 0.6m$ の長方形墓。人骨 S X 136が出土、藏骨器はなく、空風輪 A0836を採取。436号墓は $1.3 \times 1.2m$ の方形墓で、人骨 S X 135が出土。当墓の埋土からは土師器小皿破片(225～231)が出土した。436号墓の区画北辺を共用する437号墓は $1.5 \times 1.4m$ の方形墓で、埋土から土師器小皿破片(260)が出土。地輪 A0621などを採取。当墓と434号墓との間にある438号墓は径 $1.1m$ の円形墓で、火輪 A0364を採取。これに接しつつ437号墓の区画西端角に取付く439号墓は、一辺 $0.6m$ の方形墓で、人骨 S X 137が出土したが、藏骨器はなかった。

440号墓 437号墓と441号墓との間の通路を仕切り、437号墓の区画北端角に瘤のように取付く。 $0.7 \times 0.5m$ の方形墓。埋土から完形の土師器小皿(265)が出土した。16世紀前葉～後葉代に比定でき、ほぼその時期に築造の可能性が大きい。

441・442号墓 437号墓と443号墓に挟まれて並立し、 $1.2 \times 1.1m$ の区画を2分する。前者は $1.2 \times 0.6m$ 、後者は $1.1 \times 0.5m$ である。遺物はない。なお、441号墓と415・416号墓との配石間の通路からも人骨 S X 44が出土。所属不明の人骨で、もちろん藏骨器もなかった。

443号墓 先述249号墓の区画南辺を共用して取付く後出の443号墓は、 $2.0 \times 1.2m$ の長方形墓。埋土を削りつつ下層遭構を検出する作業段階で、12世紀後半代の常滑産三筋壺(42)を藏骨器とした人骨 S X 193が出土し、瓦器小碗(41)を蓋に転用していた(個別遭構第37図)。三筋壺、瓦器碗はともに、12世紀後半～12世紀末(ないし13世紀初頭)を中心とする時期に属する(遺物第45図・写真第9図)。通常、出土遺物の年代とそれが副葬された墓の築造との間にタイムラグを考慮すべきで、口縁部を欠く三筋壺に

はそれなりの伝世期間があったはずである。また瓦器碗にしても、藏骨器の蓋に転用されるまでは時間的経過を考慮する必要がある。日常雑器だから伝世しないと思うのは現代人の臆測に過ぎない。当墓の築造を13世紀前葉ないし前半代まで下げて今は考えておくが、墓の位置関係から見ると、それでも古すぎるという印象があり、場合によっては13世紀後半から14世紀代にも下る可能性もある。

444・445号墓 前者は443号墓と445号墓との間の通路を区切り転用した後出の墓。規模 0.6×0.4 mの不整形。遺物はない。後者は、 1.0×0.9 mの方形墓で、空風（火）輪A0826、空風火輪A0782、水地輪A0880、地輪A0617～A0618、一石五輪塔A0952～0953、A0984、A1010、などを採取した。

446～449号墓 437号墓に東接する一群の墓。446号墓は、447号墓と449号墓との区画配石の交点を南角とした 1.0×0.8 mの方形墓と推定。空風輪A0996～0997を採取した。447号墓は $0.4 \sim 0.5$ m大の石に囲まれた 1.0×0.7 mの長方形墓。埋土から土師器小皿破片(262)が出土した。地輪A0619を採取。本来は墓間通路だった可能性が高い。448号墓は現在の山道開墾により削平を受けたが、 1.7×0.9 m以上の規模を想定。区画南西端から人骨S X138が出土し、土師器小皿破片(261)を伴出。15世紀後葉～16世紀初頭頃に比定しうる。空風（火）輪A0833～A0835、水輪A0510、一石五輪塔A0986を採取。この一石五輪塔は区画配石に転用された可能性がある。449号墓は448号墓の区画配石の一部を共用して北側に後から取付いた 1.0×0.9 mの方形墓。遺物はなかった。

450～455号墓 450号墓は、幅 0.3 mの通路を挟み449号墓の北にある 1.4×1.2 mの方形墓。区画南寄りから人骨S X139が出土。藏骨器はない。空（風）輪A0301、空風火輪A0795～A0797、地輪A0683～A0684、一石五輪塔A0949等を区画配石に転用し、造墓時期の後代性を示す。北接する451号墓は、 1.4×1.2 mの方形墓で、（空）風火輪A0783、地輪A0620～A0682を採取。地輪A0682は区画配石に転用された可能性がある。250号墓の南側にある452号墓は 1.3×0.7 m。遺物はない。極めて残存度の悪い453～455号墓の想定規模は順に、 0.8×0.5 m以上、 1.5×1.2 m、 1.2×0.6 m以上とした。453号墓では

火輪A0361を、454号墓では空風輪A0099・A0280・A0281、空風火輪A0827・A0784・A0828、水輪A0509、一石五輪塔A0929・A0985・A1011などを採取した。455号墓の地輪A0685は区画配石の一部に転用されていた。

456～458号墓 257号墓の南側の一群。456号墓は 1.0×0.9 m、457号墓は 0.7×0.6 m、458号墓は 1.0×1.0 m。いずれも人骨ではなく、456号墓で空風輪A0101～A0102・A0282、空風火輪A0830～A0832などを採取。一部は区画配石に転用されていた。また、458号墓では阿弥陀仏浮彫石A1049を1点採取した（遺物第52図・写真第17図）。

459・460号墓 257号墓の区画南辺に取付く459号墓は 1.3×1.1 mと推定される。460号墓は 1.4×1.1 mの長方形墓と推定。約 0.26 mの盛土状の高まりを認め得る。出土人骨はなく、空風輪A0248・A0298、火輪A0447～A0448、水輪A0550、一石五輪塔A0999ほかを採取した。

② 墳丘（無配石・盛土のみ）状遺構

227号墓 226号墓の北隣にある長径約 2.5 m、短径約 2.0 mの楕円形状墳丘墓。高さ約 0.4 mの盛土が残る。盛土の周間に幅 $0.8 \sim 1.0$ m、深さ $0.3 \sim 0.45$ mの周溝SD877が巡る。遺物はなく、時期は不明。この周溝は、221号墓の周間に掘られた周溝SD875～876を切っており、221号墓より新しい。

235号墓 226号墓の南、234号墓の東隣にある。径約 2.0 m余を測る円形状の墳丘墓である。高さ約 0.36 mの盛土が残る。12世紀後半代の渥美産壺（43）を藏骨器とした人骨S X205が、刀子（鉄参考36）を副葬品として出土した。約 0.25 m大の扁平な石（厚さ約 0.1 m）を蓋にしていた。他に地輪A0675を採取。本墓の築造時期は、渥美産壺（43）を指標にしてそれ以降になるが、早ければ12世紀末以降～13世紀前半代以降と想定しておきたい。

236号墓 235号墓の東にある。長径約 3.5 m、短径約 2.5 mの楕円形状墳丘墓。高さ 0.3 mの盛土が残る。幅 $0.5 \sim 1.2$ m、深さ $0.35 \sim 0.65$ mの周溝SD878が巡る。周溝内から15世紀中葉～後葉頃と思しき土師器小皿の破片（238）が出土しているので、溝の埋没はそれ以降のことかと思う。この周溝SD878は、前記227号墓の周溝SD877を更に切っているため、新

旧関係は221号墓→227号墓→236号墓の順に新しくなる。主部からの出土遺物がなく、221号墓の築造時期も決定しがたく、新旧関係しか判らない。

③ 推定幹線墓道

A地区の460基に及ぶ墓群が最初から存在したわけではないが、最終的にその墓域へ至る墓道には、三方面からのアプローチが考えられる。1) 調査区西側からの道、2) 調査区北側尾根筋からの道、3) 調査区東側B～C地区方面からの道、である。

1)と3)は現在の山道と一部重複する。前者は現・伊勢寺町を通る県道合ヶ野松阪線の横瀧方面から平林池を経て来る山道で、調査区I 14地点、即ち181号墓～179号墓の西側に至るが、現状では進入後の経路が不明瞭だった。後者(3)は、県道丹生寺一志線の五輪峠や岡山町、西野町方面から調査区東側の尾根筋を登って来る現道と重なり、B地区の461号墓(墳丘A)、463号墓(墳丘C)の側を通つてA地区的257・258号墓～459・460号墓辺りへ至る(途中で伊勢寺町方面からC地区東側に達する山道が接続している)。2)は伊勢寺町井闇地区から向側池の据を登つてきて、調査区S～T 10地点、1・2号墓、12号墓の北側に至る道である。就中、2)及び3)の利用頻度は高かったであろうと考える。

以下に、2)の経路でA地区へ進入した後の、主要な幹線墓道を辿つておきたい(遺構第10図～16図)。

左手に1・2号墓を見ながら、幅0.7m内外の溝状に掘り込んだ斜面を登ること約30mで、両側に二重の石列が残る地点に至る。右手に120・122号墓、左手に73～75号墓が並ぶ。この間の比高差は約7.5m(途中、右側尾根上墓地や左側の各テラスへと通じる墓道が分岐する)。前方正面に見える79号墓の手前が大きな分岐点になる。

その分岐点で道を右手に取り、131号墓との間を抜けると平坦な空間に出る。正面にやや小高い182号墓(先に「納骨堂」と推定)があり、一つはやや南西に折れて162・262号墓の間を通り174～181号墓等の墓域へ至る。これは主に西部斜面、山頂部及び南・西側斜面の墓域へ至る幹線墓道と考える。

79号墓手前の分岐点で、今度は道を左手に取り77・78号墓との間を抜け、81号墓の南でややクランクした後、左手に伊勢湾を望みながら、90～97号墓

が並ぶ南側に沿つて進むと、217号墓のある尾根筋上に出る。これが、主に東部斜面、中央尾根筋から南・東斜面の墓域等へ至る幹線墓道であろう。217号墓の手前で右折して、210号墓と214号墓に挟まれた墓間通路をL字にとって西行すれば、182・183号墓(推定納骨堂)へも容易に行けた。斜面に築造の墓地は等高線に平行に造られるため、217号墓のある中央尾根筋上から南斜面の墓域へは幾つかに分岐する墓道が比較的整然と残っていた。分岐したのちの箇々の墓間通路については、必要に応じ本文中に述べてきたのでここでは省略に従う。

墓道とは言え、全てが一定の幅員・形態で構成される訳ではない。墓を区画する配石列の上を歩いても行く所である。実際、かつて伊賀上野市長田の西蓮寺(天台宗真盛派)境内の墓地で実見した所では、斜面の密集した墓域になると、川原石で区画された墓相互の間に隙間はなく、一人がやっと通れるほどの、幅0.2m前後の石列がそのまま通路として機能していた(その後実施された同寺墓地改修・整備事業以降の状況は未見である)。西蓮寺墓所(註6)とは時代は異なるが、今回の遺構検出結果を見れば、同様の状況は横尾塙墓群にも、とりわけ南・東斜面の配石区画墓が密集する地帯にもあったのであり、それを前提に遺構編でその都度言及した。

なお、A地区で火葬も埋葬もした時期はともかく、後のB～C地区の存在・機能を考えると、少なくとも上記2)と3)のルートは併存して使用されたと考えるべきであろう。その場合には、3)は主に遭体火葬時の、1)や2)は主として墓参時に使用されるルートとして機能した時代があったのではないだろうか。

註6 上野市遺跡調査会、上野市教育委員会編『西蓮寺墓所発掘調査報告』1993年。

[下層検出遺構]

④ 土坑(土壙)群(第15表・遺構第17～22図)

當中世墓で検出した土坑数は、A地区で135基、B地区で168基、C地区で106基、計409基に上る。因みに遺構規模の平均値は、全体では長径1.05m、短径0.76m、深さ0.27mだが、A地区的土坑の平均値は長径1.19m、短径0.83m、深さ0.26mに対し、B地

区の場合は長径 0.94m、短径 0.70m、深さ 0.23m、また C 地区では長径 1.01m、短径 0.73m、深さ 0.32m であった。

平均規模でみると、A 地区土坑群の平面形は他に比してやや大きく、B 地区ではやや小さい傾向にある。深さにおいては C 地区の土坑群がやや卓越している。C 地区では縄文時代の遺物が出土しているので、何らかの関連を考慮すべきかも知れないが、縄文時代の土坑として明確に認識できるものはなかつた。なお、P12 地区の S K465 を北端とする A 地区の土坑群にあっても、L24～P24 ライン以南で密集して検出したのは小規模なものが多く、形態的にも B 地区土坑群との連続性を認め得る。葬送儀礼の何らかの変容がそういう違いに反映されていると思う。

注：以下土坑（壙）群の報告文中に並記する三つの数値は、それぞれの法量、即ち長径・短径・深さを順に表す。

S K465～467 異丸長方形に近い S K465 は 1.2 m、0.9m、0.17m で、遺物はなく、時期も不明である。S K466 は 1.6m、0.6m、0.15m の長楕円形。掘形の肩や壁面に沿って強い火を受け赤く焼け縮った土が帯状（以下焼土帯と略称する）に遺る。埋土に多量の炭化物が混在し、少量の人骨 S X179 が出土した。火葬土坑と考える。S K467 は 1.1m、1.1m、0.2 m の異丸方形。埋土中に焼土と炭化物が混在し、底部から土師器小皿（160～162）が 3 枚出土した。その皿は 14 世紀後半から 15 世紀初頭までのものであろう。ほぼその時期に当該土坑で火葬した後に、そこをそのまま墓として造成した火葬墓の可能性もあるのではないかと想像した。

S K468～473 基準杭 K15 の東側 4 m の所にある S K468 は 1.0m、0.8m、0.13m。切合い関係から S K480 より古い。平面上 145 号墓と 155 号墓との境目に当たる。S K469 は 0.5m、0.4m、0.16m と小さく、炭化物を含む埋土中から人骨 S X182 が出土。S K470 は 1.8m、1.3m、0.1m で、西斜面の側を開く不整形椭円。3ヶ所から人骨（S X196～198）が出土。すぐ北隣の S K471 は 2.2m、1.3m、0.18m で、掘形に焼土帯が遺る。埋土に炭化物が混じり、底部には火を受けて焼けた 0.3 ～ 0.4m 大の川原石が 2 個あった。人骨は遺らず、火葬土坑の可能性が高い。S K472 は 1.4m、0.8m、0.15m で、埋土中に焼土と多

量の炭化物を含み、人骨 S X264 が出土した。大半が 129 号墓と重複する。S K473 は 0.6m、0.4m、0.14 m と小さく、焼土と炭化物だけを検出した。時期不明の火葬土坑と考えた。

S K474～475 共に、北尾根支群第一テラスの 10 号墓・11 号墓の直下にそれぞれ重複し、両区画墓と一体となる土壤で、前者は 0.95m、0.6m、0.17m、後者は 1.0m、0.6m、0.16m の楕円形。出土遺物はなく、時期は不明である。

S K476～479 西部域ブロックの南西端で、一段低い平坦地に 174 号墓以下の 8 基が L 字型に並ぶ（第 13 図）。S K476 は 175・176 号墓と一部重複しつつ、8 基の墓群に囲まれる位置にあり、2.8m、1.6m、0.21 m の二等辺三角形状を呈す。埋土中から焼土・炭化物・人骨片 S X183 を検出。底部中央に 0.4 × 0.2m 大の川原石が 1 個遺る。規模からみても土壤墓とは考えがたく、ここで何處か茶毬に付した可能性が高い。埋土中から 15 世紀後半代の常滑産窯の N 字口縁破片（75）が出土した。当該土坑はそれ以降の火葬土坑であろう。174～181 号墓の被葬者の何人かはここで火葬された可能性もある。S K477 は 斜面に穿たれている。1.5m、1.0m、0.25m で 遺物はなく、時期不明。S K478 は 1.7m、1.3m、0.05 ～ 0.1m の土坑。中に、長辺 1.0m、短辺 0.6m、高さ 0.6m 大の石が 2 個、平坦面を据えて据えてある（高熱によりひび割れで 2 個になった可能性が高い）。土坑というより厳密にはその石を据えるための掘形である。石は相当に火を受けて焼けており、立面には煤も付着していた。この石の上に棺桶（又は有機質のもので包んだ亡骸）を安置し可燃物で覆い茶毬に付した火葬施設である。埋土からは多量の炭化物に混じり、焼土や人骨片 S X109、釘 2 本（鉄 46・47）が出土した。当初からの機能であったかどうか確認はないが、石は繰返し使われる「火葬用の棺台」になったであろう。東隣の S K479 は 1.4m、0.85m、0.44m で、概ね 173 号墓と重複し、埋土中に焼土と炭化物が混入するのみで、時期は不明だが、173 号墓造成以前の火葬土坑である。

S K480～481 S K480 は 1.1m、0.8m、0.23m で、埋土中に炭化物が混じる以外は何もなかった。切合い関係から S K468 や S K481 より新しい。平面上 145

号墓とは重複するが、別の造構である。S K481は1.4m、1.3m、0.2mで、埋土中に炭化物が少量混じりものの、焼土・焼石等は検出されず、古錢（銭10「嘉祐元寶」か？）と刀子（鉄14）が出土。これを副葬品とした土壙墓であろう。

S K482～483 斜面崩落で平面馬蹄形にしか造らぬが、切合い関係からS K496より後出の土坑S K482は1.6m、1.2m、0.18mで、埋土には炭化物が混入し、土師器小破片（皿か？）が出土した。土壙墓と推測（個別造構第35図）。S K483は1.75m、1.0m、0.35mで、出土遺物はない。

S K484～486 北尾根支群の第五テラスにある土坑で、S K484は0.5m、0.5m、0.2m、S K485は0.7m、0.5m、0.17m、いずれも埋土中に焼土・炭化物の混入があり人骨片（S X184・S X185）が出土した。S K486は東側が崩落して造らぬが、規模は1.4m、1.25m、0.21mで、出土遺物ではなく、平面上は概ね56号墓と重複する。

S K487～493 S K487は2.2m、1.0m、0.41mで、掘形に焼土帯の遺る長楕円形の土坑。埋土中に焼土や炭化物、火を受けた川原石などが混在し、人骨片S X234のほか、土師器皿（130）や小皿（171～178）が計9枚出土した。火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓と考える。完形の小皿（171～173）には15世紀中葉前後の時期を与える。S K488～490は前述182号墓の盛土除去後の検出による。S K488は0.6m、0.45m、0.31m、S K489は0.8m、0.7m、0.48m、S K490は0.5m、0.4m、0.42mと平面形は小さいものの比較的深い。いずれも出土遺物ではなく、時期は不明。経塚との関連性も考慮すべきかも知れない。S K489は182号墓の中心部にあたる。S K491は1.1m、1.0m、0.21mの不整形で、地輪A0766が出土した。S K492は1.5m、0.7m、0.25mの不整形で人骨S X246が出土したが、時期は不明。S K493は1.1m、0.6m、0.15mの不整形で、人骨S X247及び刀子（鉄参考42）が出土した点からみて、時期不明の土壙墓したい。

S K494～496 平面上191号墓と重複するS K494は0.9m、0.55m、0.33mで、埋土中に炭化物を含み、人骨S X219と14世紀中葉～後葉ころの完形の土師器皿（122）が出土した。少なくとも14世紀後半

代頃に築造の土壙墓と推測する。S K495は1.0m、0.9m、0.59mで、埋土中から山茶碗破片（12世紀中～後葉）やロクロ土師器皿破片（38）が出土しており、12世紀後半以降に築造の土壙墓と推測。S K496は1.5m、0.8m、0.52mで先述S K482より古く、出土遺物はない（個別造構第35図）。

S K497～499 南斜面のS K497は1.0m、0.9m、0.23m。底部で0.15～0.25m大の石に囲まれて土師器皿（器種不明）と鉄釘2本（鉄48・49）及び鍵金（鉄22）が出土。土壙墓とした（個別造構第40図）。S K498は1.05m、1.05m、0.16mで、平面形状は隅丸三角形の土坑。底部に0.2～0.3m大の川原石が間隔を置いて2個据わり、15世紀中葉～後葉ころの完形の土師器皿（165）が出土した。ほぼその時期に近い土壙墓である。S K499は1.3m、1.1m、0.5m。底部から土師器皿（皿？）と刀子（鉄8）が1本出土した。時期不明の土壙墓を考えた。

S K500 2.0m、1.5m、0.75mの土坑。埋土中に焼土・炭化物が少量混じり、13世紀前葉～中葉の山茶碗破片（54）が出土したので、それ以降の火葬土坑と推測。火を受けた0.2m大の川原石が掘形底部西辺に沿って一列に四個並ぶ。人骨S X186も出土。平面上は、おおむね283号墓と重複するものの、別個の造構である。

S K501～504 S K501は、1.45m、1.3m、0.32mで、厚い焼土帯を遺す火葬土坑である。多量の炭化物と共に人骨S X187と和鏡小破片が出土した。和鏡は熔解・屈曲している。熱残留磁化測定結果では950年±150年と出ているが、出土遺物からは時期は決めがたい。南隣のS K502は0.85m、0.65m、0.08mと小規模で、埋土中から炭化物に混じり人骨片S X188が出土した。S K503は0.9m、0.5m、0.12mの不整形椭円で、埋土中から14世紀末～15世紀前葉の土師器皿の破片（186）が出土した。それより後に築造された土壙墓であろう。S K504は1.55m、1.1m、0.34mの隅丸長方形で、埋土から14世紀中葉～後葉の土師器皿の破片（119）が出土したので、それ以降の造墓だろうが、重複する上層の199号墓と上一体の造構になる可能性もある。

S K505～507 S K505は1.0m、0.8m、0.27mで東南辺掘形に焼土帯が遺る。切合い関係からS K

506より古い。埋土中に炭化物を含み、人骨 S X294、土師器小碗（84）、刀子（鉄05）1点が出土した。小楕（15世紀後半代）とほぼ同時期相当の火葬墓であろう。S K506は1.2m、1.1m、0.24mで、掘形に焼土帯が遺る。切合い関係からS K505より新しく、埋土中に炭化物を含むと共に、0.5mの間隔を置き底部2ヶ所から人骨 S X159・S X295が出土したが、火葬土坑が重複した可能性もある。前者S X159には刀子（鉄3・鉄11）が2本副葬されていた。上層にはほぼ重複する292号墓と一体の遺構になる可能性もある。S K507は1.2m、0.85m、0.73mの土坑。埋土中に炭化物が混じり、人骨 S X189と完形の土師器小皿（166）が出土した。この小皿（15世紀前葉～中葉代）とほぼ同時期の土壙墓であろう。

S K508～510 平面上307号墓と重複するS K508は1.0m、0.8m、0.15m、またS K509は1.2m、1.05m、0.17mで、共に出土遺物はない。206号墓と重複のS K510は1.65m、1.5m、0.11mで、掘形に厚い焼土帯が遺る。埋土中から多量の炭化物に混じり人骨片 S X191も出土した。底部に焼けた0.2m大の石が一個のこり、刀子（鉄13）が出土した。206号墓は火葬土坑S K510の直上に造られたのではないかと推測できる。時期は決めがたいが、S K487・S K501と等間隔に並ぶのは偶然ではないかも知れない。

S K511～513 207号墓の下層遺構であるS K511は0.45m、0.4m、0.15mと小規模で、人骨片 S X167と刀子（鉄24・鉄参考32）が2本伴出した。207号墓の埋納遺物である。S K512は1.3m、0.5m、0.21mで、多量の炭化物に混じって人骨片 S X192が出土し、S K513は0.5m、0.5m、0.16mで出土遺物はなく、共に時期不明の土壙墓とするしかない。

S K514 100号墓に伴う下層遺構で、東側の斜面が崩落したため三方しか遺らないが、現状で2.3～2.6m×1.2m以上になる墳丘の中心部下層にある方形土坑である。その規模は1.72m、0.7m、0.56mで、三方に溝S D874が残る。見晴らしのよい場所に築かれた方形周溝墓である。当該土壙の底部から13～14世紀代の完形の青磁碗（63）が1点出土した。この墓は、遅くとも14世紀後半以降には出現した可能性がある（個別遺構第39図・遺物第46図）。

S K515～519 S K515は1.05m、0.75m、0.3

mで、13世紀末～14世紀末葉頃の土師器皿と小皿の破片（117・150）が出土した。少なくともそれ以降に築造の土壙墓である。S K516は2.0m、1.15m、0.3mで、出土遺物はない。S K517は1.3m、1.1m、0.17m。埋土中に焼土・炭化物が顕著で、人骨片 S X207が出土したが、築造時期の手がかりを欠く火葬墓。S K518は0.7m、0.5m、0.17mと小規模で、出土遺物のない時期不明の土壙墓である。S K519は1.35m、1.1m、0.39mで、底部から刀子（鉄6）が出土した。これも時期不明の土壙墓とするしかない。

S K520～521 S K520は1.0m、0.8m、0.23mで、底部北東側から刀子（鉄07）が出土した時期不明の土壙墓。当該土壙墓から南側へ約0.4mの地点で7世紀末～8世紀初頭の小型の須恵器甕（17）と7世紀末～8世紀前半頃の須恵器杯蓋（14）が出土した。前者（17）には人骨 S X158が充満していた。平面上、甕の出土位置は311号墓と316号墓との境界に据わる0.4m大の石のほぼ直下に当たる。S K521は1.6m、1.3m、0.11mで、掘形に厚い焼土帯が遺り、埋土中に焼土・炭化物を含む。底部全面は敷詰めたような灰に覆われていた。灰には縫織目が明瞭に遺り、あたかも一枚の筵が灰と化してそのまま理もれたかのような状況であった。灰を除去すると、2ヶ所から人骨 S X190及びS X286が出土した。あるいは、葬儀に際して棺桶はなく、亡骸を筵に包んで現地に運び、荼毘に付したあと、最後にその筵を焼き捨てて墓にしたかとも推測できる。時期は不明ながら、印象的な火葬墓であった。

S K522～526 S K522は1.1m、0.8m、0.26mで遺物はない。216号墓とほぼ重複している。S K523は1.15m、0.9m、0.08mで、位置的には217号墓と313・314号墓との間の通路直下に当たっている。S K524は1.4m、1.2m、0.17mで、刀子（鉄10）が一点出土した。同じく刀子（鉄参考37）が出土したS K525は1.3m、0.9m、0.23mで、共に時期不明の土壙墓である。S K526は1.0m、0.8m、0.3mで、出土遺物はなく、これも時期不明の土壙墓を考えるしかない。

S K527～528 S K527は1.0m、0.65m、0.2mで、切合い関係からS K528より古い。埋土中から7世紀末～8世紀前半の須恵器杯蓋の破片（15）と8世紀

前葉～中葉頃の須恵器杯蓋破片（16）が、底部からは刀子（鉄19）が出土した。時期不明の土壙墓。前者の蓋破片（15）はB地区SK613出土の破片と接合できた。SK613で火葬した遺骨をSK527に葬った、というのも可能性の一つか。SK528は1.25m、1.2m、0.26mで、掘形の肩から壁面にかけて固く焼き結った焼土が帯状に巡る。埋土中に炭化物を含み、底部から人骨片SX195と火を受けて焼けた0.3m大の石が出土した。明らかに火葬土坑で、埋土中から出土の土師器小皿破片（167）は15世紀前葉～中葉のものゆえ、それ以降の火葬土坑と推定する。

SK529～532 SK529は1.1m、1.0m、0.21mで、掘形の切り合関係からSK530より新しい。SK529より古いSK530は1.4m、0.95m、0.34mで、平面上は概ね349号墓と重複する。共に遺物はなく、時期不明の土壙墓とする。SK531は1.1m、0.95m、0.38mで、埋土中に炭化物を含み、土師器皿（131）等6枚が出土した。皿は14世紀末～15世紀前葉頃のもので、ほぼその時期の火葬墓と想定した。SK532は1.35m、1.0m、0.3mで、13世紀中葉～後半頃の完形の山茶碗（58）が出土した。従って13世紀後半以降（遅くとも13世紀末～14世紀初頭頃）の土壙墓であろう。平面上ほぼ重複するが、一応348号墓とは別の遺構としておく。

SK533 221号墓と一体の遺構。1.8m、1.55m、0.29mで掘形に焼土帯が巡る。埋土中に炭化物が混じり、人骨片SX199と刀子（鉄04）が1本出土した。当該土壙は南側に狭い陸橋部を持つ幅0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mの周溝SD875～SD876を伴う方形周溝墓である。両周溝は隣接する227号墓の周溝SD877に切られており、それより古い。周溝を含む全体の規模は約3.5×3.4mと推定できる。墓毘に付した火葬土坑SK533を中心に、周溝・盛土・配石区画によって一単位の墓を建造した。周溝埋土からロクロ土師器皿破片（36・37、11～12世紀代）が出土。造墓は当然それ以降になるが、伊勢湾を眺望する見晴らしのよいこの位置には、当山でも比較的早い段階に中世墓が出現したであろう。

SK534～536 J21地区にある3基。SK534は1.05m、0.7m、0.08mと浅いが、掘形に焼土帯を持ち、底部から人骨片SX287が出土した。火葬土坑と考

える。SK535は0.8m、0.65m、0.21mで、鉄釘片（鉄50・51）の出土はあるが、焼土や炭化物などは一切なく、火葬土坑か否か不明。埋土中から15世紀中葉頃の土師器皿破片（128～129）が出土。それ以降に築造の土壙墓としたい。SK536は0.75m、0.55m、0.22mで、出土遺物が一切なく、時期不明の土壙墓としておく。

S K537～542 SK537は掘形に焼土帯を遺す不整形火葬土坑で、1.35m、0.68m、0.17mである。人骨片SX163が出土。SK538の平面形はSK537に類似し、1.2m、0.6m、0.16m。掘形に焼土帯を遺し、埋土中からは炭化物と人骨片SX166が出土。火葬土坑の可能性が高い。SK539も掘形に焼土帯を遺す火葬土坑で、1.2m、0.95m、0.44m。埋土中に炭化物が混じり、人骨片SX200が出土した。底部に0.3m大の焼石が2個並ぶ。切り合関係からSK540より新しい。SK539より古いSK540は1.3m、0.8m、0.42mで、焼土帯や炭化物等は一切ない。埋土中に15世紀後葉～16世紀初頭頃の土師器小皿小破片（251）が混じており、それ以降に築造の土壙墓と推測。SK541は1.2m、0.7m、0.34m、SK542は1.5m、0.85m、0.35mで、後者の底部からは刀子2本（鉄26・鉄参考41）が出土するが、共に時期不明の土壙墓とするしかない。切り合関係から前者SK541の方が新しい。

SK543～547 SK543は1.1m、1.0m、0.23m、SK544は1.59m、0.9m、0.34m。いずれも遺物ではなく、時期不明の土壙墓。SK545は1.2m、0.65m、0.5mで、14世紀末～15世紀前葉ころの土師器皿の破片（132～134）が複数出土した。概ねその時期に近い土壙墓と推定。SK546は0.6m、0.5m、0.08mとやや小規模だが、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に多量の炭化物を含む。人骨片SX201も出土し、底部には0.1m×0.08m大の川原石が1個遺る。火葬土坑である。SK547は1.25m、0.9m、0.25mで、遺物ではなく、時期不明の土壙墓としておく。

SK548～552 SK548は1.0m、0.7m、0.5mで、遺物はなく、時期不明。SK549は1.35m、1.3m、0.35mで、焼土帯や多量の炭化物のほか、人骨片SX202も出土したので火葬土坑である。ただ、15世紀前葉～中葉ころの土師器小皿（193～196）4枚の出土もあ

り、火葬後その直上に造墓した可能性がある。SK550は1.6m、1.2m、0.23mで、埋土中に焼土・炭化物が混じる。人骨SX220が出土したので火葬墓かと推定。SK551は1.4m、1.0m、0.5mで、底部に0.2～0.4m大の川原石が5個置っていたが、火葬した形跡はない。13世紀末～14世紀前葉の土師器皿の破片(121)が埋土に混入しており、それ以降の土壌墓と考える。SK552は0.85m、0.8m、0.53mで、底部から刀子(鉄40・鉄参考39)が2本出土した、時期不明の土壌墓であろう。

SK553～557 SK553は0.95m、0.6m、0.4mで、遺物はない。SK554は1.0m、0.85m、0.3mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に多量の炭化物を含む。人骨SX180と刀子(鉄15)が1点、14世紀中葉～後葉ころの土師器小皿破片(218～221)4個体分出土した。火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓と推定。14世紀末までに築造された可能性もある。平坦面を持つ0.8×0.5m大の石が近接して据わる。亡骸を一時安置した石かも知れない。SK555は1.2m、0.85m、0.32mで、火葬の形跡はない。13世紀末～14世紀前葉頃の土師器皿の破片(123～124)が2個体分出土したので、それ以降に築造した土壌墓である。SK556は1.6m、1.0m、0.2mで、掘形は火を受けて焼土化する。埋土中に炭化物と僅かに焼土が混じり、13世紀後半代の土師器鍋破片(96)も出土した。それ以降に築造した火葬土坑である。SK557は1.3m、1.05m、0.21mで、人骨SX245と14世紀中葉～後葉ころの土師器小皿の破片(153)が出土した。それ以降に築造した土壌墓であろう。

SK558 当遺跡中で最大級の本格的な火葬施設。2.8m、1.5m、0.55mで、通気孔や溝を穿つ(個別遺構第39図)。掘形は火を受けて赤く焼き固まり、埋土中に炭化物や人骨片SX203が混在した。一定期間を火葬施設として機能したもので、平面形状はB地区のSK606もこれに類似する。長岡京跡や奈良県谷畠遺跡などに類例が知られ(註7)、前者で考察された『古事略儀』(註8)の火葬次第を彷彿とさせる。葬送儀礼に精通した墓型の存在も予想される遺構。因みに、熱残留磁化測定結果では、1230±70年という数値を得ている。初期段階の火葬専用土坑と予想され、收骨後は例えばSK514やK53などの比較的早

期の墓に葬った可能性がある。

SK559 1.4m、1.0m、0.18mで馬蹄形に東側を開く。掘形に焼土帯を持ち、埋土中に炭化物を含むも人骨等はない。直上に237号墓を想定したが、周溝SD878の内側にあるので、236号墓に伴う火葬土坑と想定する余地もある。

SK560～567 SK560は1.25m、0.85m、0.24mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中に焼石と炭化物が混入するため火葬土坑とした。底部に0.3m、0.2m、0.11mの小穴がある。SK561は0.85m、0.5m、0.3mで、14世紀後葉～15世紀前葉頃の土師器小皿(197～199)3枚が完形のまま出土した。ほぼ同時期に近い土壌墓と考える。SK562は0.9m、0.65m、0.27mで、埋土から14世紀末～15世紀中葉頃の土師器皿破片(135)、小皿の破片(200)が出土。それ以降の時期に築造した土壌墓である。15世紀中葉～後葉ころの土師器小皿(209～211)が完形品で3枚出土したSK563は0.9m、0.7m、0.26mで、その小皿とほぼ同時期の土壌墓と推定。SK564は0.4m、0.4m、0.06mと小規模だが、掘形に焼土帯が遺る火葬土坑で、埋土に炭化物を含む。SK565は0.5m、0.5m、0.17mで、遺物なし。SK566は1.3m、1.1m、0.31mで、掘形の東半分に焼土帯が遺り、埋土中に焼石も混じる。底部から鉄釘(鉄54)が出土。恐らくは木製の棺を焼いた時期不明の火葬土坑である。SK567は1.4m、1.25m、0.32mで、全面が真っ赤に焼けていた。火は407号墓の南側区画石列にも及んでいた。埋土中に焼土・炭化物・人骨片SX204が混入。熱残留磁化測定結果によるならば、13世紀後半～14世紀後半ころの火葬土坑になる。407号墓はそれより古い。

SK568 1.9m、1.6m、0.21mで、掘形の東半分に焼土帯が遺る。底面は広範囲に薙灰(敷き詰めて焼いた感じ)に覆われ、火葬土坑であったことは明らか。底部に薙灰を検出したのは先述のSK521と似ている(写真第7図)。熱残留磁化測定結果では、1240±50年と比較的に古い。当該土坑の上層で概ね重複する399号墓からは15世紀後半代の常滑産甕(70)が人骨SX194を伴って出土しており、単純に比較すれば、両者は別の遺構であろう。

SK569～570 SK569は1.15m、1.0m、0.2mで、埋土中に多量の炭化物と少量の焼土が混じる。時期

不明の火葬土坑だが、243号墓の周溝S D879の掘形切っているので、それよりは新しい（遺構第22図）。掘形に焼土帯が遺るS K570は243号墓の主体部にあたる。1.0m、0.6m、0.25mの四隅に突出形通気孔を持つ方形の火葬土坑で、僅かに人骨片S X177が出土した。熱残留磁化測定の結果は、 1140 ± 70 年（11世紀後葉～13世紀前葉）と古いが、計測者は数十年から百年後へずれる可能性も指摘している（附篇2参照）。周溝S D879を巡らせ、盛土と配石区画をして243号墓を築いた。土坑内と周溝から14世紀中葉～後半代と思える土師器小皿の破片（154～157）が出土。暫定的に14世紀代の火葬墓としておく。S K569がS K570（243号墓）の周溝を切るため、S K570（243号墓）の方がS K569より古いことは、すでに述べた。

S K571～579 狹い範囲に密集し、かつ掘形に焼土帯を遺す土坑が多い。S K571は0.9m、0.8m、0.32mで、焼土帯・焼石が遺り、人骨片S X208が出土した火葬土坑。S K572は1.2m、0.5m、0.21mで掘形に焼土帯を遺し、人骨片S X209と14世紀末～15世紀中葉頃の土師器小皿（202～207）6枚分がほぼ完存状態で出土した。概ねその時期の火葬土坑をそのまま墓にした火葬墓である。S K573は1.0m、0.7m、0.17mで、これも掘形に焼土帯が遺る。埋土中に焼石・炭化物が混じり、人骨片S X210が出土。火葬土坑を墓としたもの。S K575は1.2m、0.6m、0.38mで、焼土帯・焼石が遺り、人骨片S X212が出土した。S K576は0.85m、0.6m、0.13mで、埋土中に焼土・焼石が混入し、人骨片S X213が出土した。焼土帯は遺らないが埋土構成遺物から火葬土坑とした。S K577は1.2m、0.55m、0.33mで、掘形に焼土帯が遺り、埋土中から炭化物・人骨片S X292が出土した。S K574・578・579からは焼土帯や焼石・炭化物等を検出せず。S K574は1.25m、0.55m、0.4mで、底部から0.3m大の川原石が1個出土したのみ。422号墓と434号墓の境目下層に当たるS K578は0.9m、0.75m、0.39mで、人骨片S X240だけが出土。東端に離れたS K579は0.75m、0.4m、0.18m。いずれも出土遺物がなく、時期不明の土壙墓である。

S K580～585 S K580は0.85m、0.45m、0.18mで人骨片S X214のみが出土。掘形に焼土帯が遺るS K581・582・584は火葬土坑である。それぞれ順に、

1.1m、0.7m、0.2mの楕円形、0.9m、0.7m、0.23mの隅丸方形、1.0m、0.6m、0.18の隅丸長方形を呈す。S K581からは焼石・人骨片S X206が、S K582・584からは焼石・炭化物・人骨片S X211・S X224が出土した。切り合関係から、S K581はS K582より新しい。S K583は0.8m、0.7m、0.18mで、埋土中から焼土・焼石・炭化物と人骨片S X225が出土。遺物の内容から火葬土坑と考える。埋土中から14世紀前半代の山茶碗底部破片（参考6）と14世紀末葉～15世紀中葉頃の土師器皿破片（138）が出土したので、15世紀中葉以降には焼造されたと推定。焼石が出土したS K585は1.4m、0.75m、0.29mで、埋土中から15世紀中葉～後葉頃の土師器小皿の破片（232）が出土したので、それ以降に焼造の火葬墓と考える。切り合関係から、S K581はS K582より新しく、S K582はS K581・584よりも古い。S K583はS K584よりも古い。

S K586～592 S K592以外は全て掘形に焼土帯を持ち、かつ相互に切合った結果、溝状に連結した状態になった。S K586は1.7m、0.4m、0.17mで埋土中に焼石・炭化物を含み、人骨片S X241が出土。S K588より新しい。S K587は0.9m、0.5m、0.2mで埋土中に炭化物・人骨片を含む。S K588より古く、S K588は1.4m（推定）、0.4m、0.2mで、炭化物のほか人骨片S X242が出土。S K586より古く、S K587・589より新しい。S K589は0.8m、0.5m、0.2mと推定。焼石・炭化物のほか人骨片S X223が出土。S K590より古い火葬土坑である。S K590は0.8m、0.5m（推定）、0.2mで、焼石のほか人骨片S X222が出土。S K589・591より新しい。S K591は1.0m、0.5m、0.2mで、焼石・炭化物のほか人骨片S X221が出土。S K590より古い。S K592は1.0m、0.55m、0.41mで、埋土中から焼土・炭化物のほか14世紀末～15世紀前葉頃の完形の土師器皿（236）が出土した。それとほぼ同時期の火葬墓ではないかと考える。

S K593 1.7m、0.75m、0.53mで、北半側の掘形に焼土帯が遺り、焼石や炭化物が出土、南半側は一段と深く掘下げた底部の周間に石が並び、14世紀末～15世紀前葉頃の土師器皿の破片（125）と人骨片S X215が出土した。本来機能の異なる2つの土坑が1つになったものか。南半側の構造は経験を妨

拂とさせる石があった（個別遺構第40図）。

S K594～595 250号墓と重複のS K594は0.65m、0.5m、0.16mで、人骨片S X229だけが出土した。S K595は0.95m、0.55m、0.2mで、炭化物のほか人骨S X243が出土した。共に時期不明の火葬墓としておく。

S K596～599 S K596とS K599には掘形に焼土帯が遺る。前者は0.75m、0.3m、0.15mで遺物はなく火葬土坑である。後者S K599は0.6m、0.6m、0.31mで、焼石と人骨片S X231のほか、13世紀末～14世紀初頃ころの土器器皿の破片（126）や14世紀中葉～後葉の土器器皿の破片（158・159）が出土。14世紀後半以降の火葬土坑とする。S K597及びS K598には掘形に焼土帯はないが、共に埋土中に燒土塊を含み、S K597からは人骨片S X230が、S K598からは焼石・炭化物が出土した。火葬墓であったかと思う。総じてS K571からS K599に至る土坑群には、A地区にあっては規模や形状、焼土帯の有無などの点でやや異質なタイプが多かった。形状・機能的にはむしろB地区の土坑群に連なる同質のものと認識する。いわばB地区型土坑群の初期段階のものはこれから始まったと考える（第22図）。

註7 (財)長岡京市埋蔵文化財センター編『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1985年。白石太一郎、田坂正昭「櫛原町萩原・谷畠中世墓の調査」(『青陵』No.24、福原考古学研究所、1974年所収)、森郁夫「日本各地の墳墓 近畿」(『新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓』雄山閣、1982年所収)。

註8 統群書類從完成会『群書類従』第29集雜部、1982年。

(四) B地区の遺構

A地区との境界線とした山道に近いB地区北西端部には、調査前の地形測量段階から大小4ヶ所に盛土状の微高地部分があると目視できた。後にそれらを墳丘A・B・C・Dと命名（通称）したが、改めてA地区の遺構番号に統けて通番号を付す。より残存度の良い461号墓（墳丘A）、462号墓（墳丘B）は当遺跡中では特異な遺構である。ただB地区には土坑群が優越的で、それはC地区へも連続する。A地区に普遍だった配石区画墓もここでは皆無で、検出した土坑の大半が比較的小規模（平均規模94×70

×23cm）な火葬土坑である点は、火葬（土壤）墓を含むA地区的土坑群（平均規模119×83×26cm）とは対照的であった。時期差や社会的背景の差異を反映した結果ではないかと予想している。

⑤ 墳丘状遺構（第14表・第25・41図）

461号墓（墳丘A） 上記山道に南接し、4ヶ所の墳丘状遺構では最北端に位置する。平面形状は隅丸方形で、墳丘部の規模は約4.0×4.0m、高さ約0.8m。裾部に幅約0.3～0.6m、深さ約0.15～0.3mの周溝SD880が巡るが、東側中央部に幅約1.2mの陸橋部を残す。この陸橋部から墳丘部への斜面には川原石を用いた階段（幅0.8m、4段と推定）があった。周溝から空風輪B1061が1点、西側の周溝底部からは宝篋印塔の相輪部B1140が1点出土した。墳丘中央部には断面形で幅0.62～0.74m、深さ0.22mの土坑状の窪みが遺る。本来ここには例えれば大甕などが埋納されていた可能性もある（個別遺構第41図・写真第7図）。また、時期差はあるが、形態的類例に、長岡京跡右京第130次S X13002、出雲崎百塚遺跡1号塚、妻波古墓、尾座中世墓群第58A号、京都大学理学部遺跡B E29区S X 1などがある（註9）。本例を「貴所」と呼ぶ「火葬塚」に比定し得るかどうかが解らないが、遠く都の宗教文化の影響が当地にも及んでいた可能性はあるろう。

462号墓（墳丘B） 墳丘Aの東隣にあり、平面形状は隅丸方形である。墳丘部の規模は7.1×5.5m、高さ0.9m。裾部で北・東・西の三方に幅約0.44～1.7m、深さ0.2～0.52mの周溝SD881が巡り、谷側（南側）に開く。墳頂部には、中心をややずれて土坑S K610があり、15世紀後半～16世紀初頃の常滑大甕（92）が底部を欠いた状態で埋納されていた。内部からは空（風）輪B1054、地輪B1069と古錢（銭23）「熙寧元寶」1枚が出土した。人骨はなかった。墳丘の南側縁辺部には石列が約4m分残存していた。本来は方形状に石列があったかも知れない。また、周溝内北西隅部には石塔類を集積したこところがあった。大甕（92）が例えば50年あまりも伝世すれば、16世紀後半ころの築造と考えることもできる。461～462号墓はA地区的182～183号墓と並び、当中世墓群における何らかの画期を示す特殊な施設であったと、想像する。

463号墓（墳丘C） 残存度は良くないが、平面形状は $4.8 \times 3.6\text{m}$ の隅丸方形である。墳丘状盛土の北側縁辺部に、東西方向に石列が長さ約2.8mにわたり残存する。盛土の高さは現状で約0.3mに過ぎず、出土遺物もない。盛土除去後に下層からB地区に普遍的な土坑4基（SK605～SK608）を検出した。この墳丘状盛土は、それら土坑の廃絶後に出来たより新しい築成だが、性格や機能は不明である。

464号墓（墳丘D） 現在の山道により約半分ほどが削平を受ける。平面形状は $4.0 \times 3.0\text{m}$ の隅丸方形として認識できる。墳丘西端部に約1.5m分だけ石列が残っていた。上記463号墓（墳丘C）の場合と同様、墳丘直下で6基の土坑を検出した。従って、463号墓（墳丘C）、464号墓（墳丘D）は、それら土坑群より後に新たに築造されたものである。それに引き替え、下層に土坑のなかった461号墓（墳丘A）、462号墓（墳丘B）は、463～464号墓（墳丘C・D）より古く、周囲の土坑群よりも先に存在した可能性がある。周囲の土坑群は墳丘A・Bを避けて分布するし、SK611・619・623などは位置的にも明らかに墳丘Bより後代性を示している。

註9 (財)長岡市埋蔵文化財センター『長岡市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1985年。新潟県教育委員会『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲崎百塚』1984年、鳥取県東伯郡大栄町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室『妻波古墓』1985年、熊本県教育委員会『尾塙・熊本県下益城郡城南町尾塙中世墓群の調査一』1973年、京都大学埋蔵文化財センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』1978年。

⑥ 土坑群（第16表、遺構第23～27図）

B地区の土坑群は、標高およそ115.2～111.2m、南北間距離にして凡そ60mの間の南向き斜面において検出した。

前記A地区と同様、並記する3つの数値は、各土坑の法量即ち長径・短径・深さを表すものとし、また、掘形の肩や壁面に沿って強い火を受け、赤く焼け締つた土が帶状に燃えるのを焼土帶と略称する。

SK600 461号墓（墳丘A）から西へ9m離れた所にある。1.0m、0.65m、0.22mで、掘形に焼土帶が遺り、埋土中から焼石・炭化物・人骨細片SX216

が出土。火葬土坑である。近接して、経筒外容器簡身破片(20)の一部、土師器鍋小破片(95)のほか、(空)風火輪B1076なども出土した。簡身破片(20)は182号墓などで出土した破片と接合した。

SK601～604 道路際で検出のSK601は0.88m、(0.8m)、0.16mで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片SX217を含む。SK602は(1.0m)、0.94m、0.27mで埋土中に焼土・炭化物を含む。SK603は0.5m、0.36m、0.2mとやや小規模だが、埋土に焼土・炭化物を含み、人骨細片SX218、15世紀中葉ころの土師器皿の破片(139)が出土した。その南側0.8mの地点で空風火輪B1073・B1083を採取した。SK604は0.92m、0.52m、0.18mで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片SX226を含む。以上4基はいずれも時期不明の火葬土坑で、茶毬に付した後はA地区に埋葬したはずである。

SK605～608 4基は共に463号墓（墳丘C）の下層で検出したので、463号墓に先行する土坑。SK605は1.0m、0.7m、0.2mで、埋土中に焼土・炭化物・人骨細片SX227を含み、火を受けて焼けた土師器皿(140)が伴出した。皿(140)は14世紀末～15世紀前葉頃に比定される。皿は必ずしも納骨時の副葬品とは限らない。SK606は1.9m、0.85m、0.21mで、形態的にA地区的火葬施設SK558と同じである。掘形に焼土帶が遺り、焼石や多量の炭化物に混じり人骨細片SX235のほか、相輪B1138や空風(火)輪B1085が出土した。A地区が墓で徐々に密集して火葬場所に不足したため、SK558の代替施設として新たに造成されたものであろう(61頁)。SK607は1.0m、0.75m、0.24mで、掘形に焼土帶がのこり、埋土中に炭化物と人骨細片SX236が混入していた。SK608は0.9m、0.8m、0.33mで、やはり掘形に焼土帶が遺り、焼石・炭化物・人骨細片SX237が出土。熱残留磁化測定ではA.D. 1370年+60年、-370年の結果を得ている。これを一案として15世紀前半代の火葬土坑とすれば、463号墓（墳丘C）の築成は少なくともそれ以前に遡ることはあり得ない。

SK609 462号墓（墳丘B）から南側へ4m離れた斜面にあり、0.8m、0.6m、0.4mで、遺物は皆無だった。

SK610 既述のように462号墓（墳丘B）の墳頂部にある土坑で、0.96m、0.88m、0.45m。常滑産大甕

(92) が底部を欠失した状態で埋納され、内部から古銭（銭23）、空（風）輪B1054・地輪B1069が出土した。近接地点でも古銭（銭22）を採取した。当該土坑は上記の要を埋納する掘形である。被葬者一人の墓というより、182号墓のように納骨堂のような施設を考えた方が妥当ではないか、織田軍の南伊勢侵攻と関わりを持つのではないかとも思う。

S K611 462号墓（墳丘B）の周溝斜面で検出の土坑で、0.8m、0.7m、0.31m。内部に0.3～0.4m大的川原石が2個埋まっていたが、遺物は皆無である。462号墓より新しい。

S K612 0.35m、0.34m、0.20mと小規模。土坑内に空風輪を欠いた一石五輪塔B1127が直立し、直下に根石があった。火葬土坑とは思えない。土坑周囲には空風（火）輪B1097～1099、（空風）火輪B1100等が集積してあった。

S K613～618 6基の土坑が二列縱隊に並び、そのうち4基（S K615～618）を464号墓（墳丘D）の盛土直下で検出。S K613は0.75m、0.4m、0.22mで炭化物・人骨細片S X238、須恵器杯蓋破片（15）が、S K614は1.0m、0.65m、0.23mで焼石、炭化物、人骨細片S X239がそれぞれ出土した。S K615は1.0m、0.55m、0.35mで掘形に燒土帶が遺り、焼石、炭化物、人骨細片S X244が出土した。S K616は0.9m、0.6m、0.12mで、掘形に燒土帶が遺り、焼石や炭化物はあるが人骨片はない。S K617は0.8m、0.75m、0.3mで、掘形に燒土帶が遺り、焼石と人骨細片S X248が出土。S K618は0.75m、0.55m、0.29mで埋土中から焼土、焼石、炭化物に混じり人骨細片S X249が出土した。少なくともS K615～618の4基は464号墓（墳丘D）に先行する火葬土坑である。

S K619～626 462号墓（墳丘B）の南脇にあるS K619は0.7m、0.6m、0.18mで、16世紀前半代の土師器皿（144）小皿（276～278）破片と宝篋印塔屋根部B1144が出土した。火葬墓の可能性も排除できない。S K620～622の3基はそれぞれ0.6m・0.4m・0.23m; 0.6m・0.38m・0.2m; 0.7m・0.7m・0.16mで、S K622はやや歪な形である。共に出土遺物はない。462号墓（墳丘B）の周溝掘形上端から斜面にかかるS K623は0.45m、0.4m、0.41mと小規模だが、埋土中から土師器皿片と古銭（銭208・2098）「□

宋元寶」他2枚が出土した。銭貨は熔解付着しており、火葬土坑の可能性が高い。六文銭の類であろう。S K624は0.6m、0.6m、0.38mで、埋土中より熔解付着のため判読不能の古銭（銭210～212）3枚と常滑産大甕口縁部破片（92）などが出土したが、その破片が462号墓（墳丘B）の土坑S K610に埋納の常滑産大甕口縁の一部分であるのは興味深い。後代性を示す火葬土坑である。S K625は0.7m、0.6m、0.32mで、掘形内部から水地輪B1106、一石五輪塔の地輪部B1121及び火水地輪部B1122～1124等の石塔類のみが出土し、異質な土坑という印象を持った。S K626は0.9m、0.75m、0.5mで、埋土から炭化物と白磁碗小破片（参考13）が出土した。

S K627～632 S K627は1.13m、0.64m、0.23mで、焼石と炭化物のみ出土。S K628は1.35m、0.6m、0.22mで、焼土と炭化物に混じり人骨細片S X250が出土した。S K629は0.74m、0.72m、0.19m、またS K630は0.93m、0.57m、0.24mで、共に焼土、炭化物に混じり人骨S X251、S X253がそれぞれ出土。S K631は0.73m、0.67m、0.22m、S K632は1.1m、0.75m、0.2mで、いずれも焼土、焼石、炭化物のほか、人骨細片S X255、S X256がそれぞれ出土した。前者の場合は底部に0.3m大的川原石が2個あった（個別遺構第42図）。火葬時の通気用かと想像する。後者は464号墓（墳丘D）に先行する火葬土坑である。

S K633～636 S K633とS K634は共に人骨細片S X257、S X258のみが出土した。前者は0.9m、0.23m、0.25mで掘形に焼土帶が遺る火葬土坑である。後者は0.9m、0.7m、0.25mで464号墓（墳丘D）に先行する。S K635とS K636からは炭化物と人骨細片S X259、S X260が出土した。前者は1.0m、0.4m、0.23m、後者は1.1m、0.45m、0.21mである。

S K637～640 S K637は0.7m、0.4m、0.1mで遺物はない。S K638は1.15m、0.5m、0.15mで、埋土中に焼土と炭化物の混入があった。S K639、S K640は共に焼土、炭化物のほか人骨細片S X261、S X263がそれぞれ出土し、前者は1.0m、0.75m、0.25mで掘形に焼土帶が残る。後者は1.16m、1.05m、0.3mであった。共に時期不明の火葬土坑である。

S K641～643 S K641とS K643に焼土ではなく、

焼石・炭化物及び人骨細片（S X265、S X266）がそれぞれ出土。前者は1.02m、0.64m、0.25mで、16世紀代の完形の土師器小碗（83）が出土（遺物第47図）。ほぼ同時期の火葬土坑と想定。この小碗を供獻具として、火葬に際し何らかの回向・儀礼があつたと推測する。後者S K643は0.76m、0.56m、0.22mである。S K642は0.73m、0.77m、0.3mで、人骨はなく焼土・焼石・炭化物が出土。時期不明の火葬土坑である。

S K644～647 S K644は0.8m、0.72m、0.33mで、掘形に焼土帯を遺し、炭化物だけが出土した火葬土坑。S K645は0.84m、0.75m、0.25mで、埋土中から焼土・炭化物・人骨細片S X268が出土した。S K646は0.9m、0.55m、0.25mで、掘形に焼土帯を遺し、焼石・人骨細片S X269が出土した。共に火葬土坑であろう。S K647は1.1m、0.6m、0.24mで、遺物は皆無のため、性格は不明である。

S K648～654 S K648は0.76m、0.56m、0.25m、S K654は0.85m、0.66m、0.2mで、共に炭化物と人骨細片（S X270、S X274）だけの出土である。S K649は0.74m、0.64m、0.24mで掘形に焼土帯を遺し、埋土中から炭化物・人骨細片S X271のほかクロト師器皿の小破片（34）の出土を見た。S K650・651、S K653の埋土には焼土・焼石・炭化物が混入する。平面三角形状のS K650は0.7m、0.5m、0.13m、それより後出のS K651は1.0m、0.6m、0.25mで、この両土坑からは僅かに人骨細片（S X272、S X273）も見られた。S K653は0.8m、0.63m、0.3mで骨片はない。S K652は0.9m、0.73m、0.27mで焼石と多量の炭化物が出土した（個別遺構第42図）。いずれも時期不明の火葬土坑である。S K654は0.85m、0.66m、0.2mで少量の炭化物と骨片S X274だけが出土。火葬墓の可能性もあるかも知れない。

S K655～659 S K655、S K656からは共に焼土・炭化物・人骨細片（S X275、S X276）が出土。前者は0.8m、0.64m、0.3mで掘形に焼土帯を遺し、底部から鉄釘（参88）も1本出土した。後者は0.8m、0.65m、0.25mである。S K657は1.15m、0.95m、0.28mで焼土・炭化物のみが出土。掘形に焼土帯の遺るS K658は0.9m、0.66m、0.3mで炭化物・人骨細片S X277が出土した。S K659は0.83m、0.7m、0.26

mで埋土中に焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X278が混在した。いずれも時期不明の火葬土坑としたい。

S K660～664 S K660は0.85m、0.78m、0.26m、焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X279が出土。S K661は0.98m、0.78m、0.28mで、焼土と多量の炭化物に混じり僅かな人骨細片S X280が出土した（個別遺構第42図）。S K662は1.42m、0.8m、0.22mで、焼土・炭化物・人骨細片S X283のほか古錢（銭61～63）「景德元寶」など3枚が出土した。S K663は0.64m、0.58m、0.17mで焼石・炭化物・人骨細片S X284が出土。S K664は0.9m、0.7m、0.3mで焼土・炭化物だけが出土した。全て火葬土坑と考えて間違いない。

S K665～668 やや南端に離れたS K665は1.0m、0.7m、0.25mで何も遺物を認めず。S K666は1.0m、0.88m、0.3mで掘形に焼土帯を遺し、焼石・炭化物・人骨細片S X285の他に鉄釘（鉄56）が1本出土した。明らかに火葬土坑である。埋土中に炭化物しかなかったS K667は0.7m、0.68m、0.27mである。S K668は0.95m、0.78m、0.25mで、掘形に焼土帯を持ち、炭化物と人骨細片S X288が出土した（個別遺構第42図）。火葬土坑である。熱残留磁化測定の結果はAD1210年±140年とやや幅がある。

S K669～675 S K669・670・671の3基は相互に重複する。その切合い関係からS K669が最も古く、S K671が最も新しい。S K669は1.0m（推定）、0.76m、0.2mで、焼土・炭化物・人骨細片S X289が出土、S K670は0.84m、0.8m（推定）、0.1mで炭化物のみを検出。S K671は1.22m、1.02m、0.17mで掘形に焼土帯を遺し、底部全面が赤く焼け固まり、炭化物と人骨細片S X290が出土した。S K672は0.6m（推定）、0.6m、0.19mで炭化物のみが出土、切合い関係からS K673より古い。S K673は2.4m、1.4m、0.25mと大型で、焼石・炭化物・人骨細片S X291のほか鉄釘（鉄78）も1本出土した。S K674は0.95m、0.6m、0.2mで、焼石・炭化物・人骨細片S X293が出土。S K675は0.9m、0.6m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X296が出土した。これらはいずれも火葬土坑である。

S K676～680 S K676は1.12m、0.95m、0.3mで、焼土・炭化物・人骨細片S X297が出土。底部

に間隔を置いて向い合う石は火葬する棺底部への通気用と推測。S K677は1.18m、0.76m、0.29mで掘形に焼土帯を遺し、炭化物・人骨細片S X298が出土。向い合う石が底部に遺る。S K678は0.9m、0.85m、0.2mで、底部中央に0.38m、0.35m、0.1mの穴を穿つ。穴の掘形に火を受けた0.1m大の石5個、0.23m大の石1個が遺る。炭化物・人骨細片S X299が出土した。S K679は0.55m、0.48m、0.2mと小規模。掘形や底部には火を受けた石(0.2~0.32m大)が5個遺る。併せて炭化物も出土。S K680は0.8m、0.72m、0.25mで、焼土・炭化物・人骨細片S X300が出土。底部に0.15~0.3m大の石が5個遺るが、火を受けた痕跡は不明瞭であった。

S K681~686 S K681は1.0m、0.5m、0.25mで炭化物・人骨細片S X301及び古銭2枚(錢199・200)「咸平元寶」及び「永樂通寶」が出土した。S K682は0.84m、0.75m、0.20mで、炭化物・人骨細片S X302と共に古銭(錢55~59)「皇宋通寶」ほか5枚、及び鉄釘3本(鉄69・70・参考90)が出土した(個別遭構第42図)。東側0.3~0.4m地点でも古銭17枚(錢24~錢40)が遭構外出土した。S K683は0.8m、0.6m、0.2mで炭化物・人骨細片S X303及び鉄釘(参考91)1本が出土した。S K684は0.8m、0.78m、0.11mで炭化物・人骨細片S X304が出土。S K685は0.9m、0.8m、0.2mで、焼石・炭化物・人骨細片S X305が出土。底部に4個の石(0.1~0.2m大)が一列に並ぶ。S K686は0.64m、0.54m、0.28mで炭化物・人骨細片S X306が出土した。全て火葬土坑と考えている。

S K687~691 S K687は0.46m、0.44m、0.15mと小規模で、炭化物のみが出土した。S K688は0.76m、0.75m、0.25mで焼石・炭化物・人骨細片S X307が出土し、底部には6個の石(0.1~0.15m大)が遺る。S K689・690は切合い関係から前者が古く後者が新しい。前者は0.74m、0.7m(推定)、0.28mで、底部に径0.15m程のピットがある。炭化物だけが出土。後者は1.15m、0.65m、0.25mで、掘形に焼土帯が遺り、底部全面も赤く焼け縮った状態で、炭化物・人骨細片S X308が出土した。S K691は0.8m、0.65m、0.28mで、炭化物・人骨細片S X309が出土し、底部に石が2個(0.1~0.15m大)遺る。

これらも全て火葬土坑であろう。

S K692~702 これら11基の土坑からは全て炭化物と人骨細片(S X310~S X320)が出土し、S K691・697では炭化物が特に著しかった。焼土を検出し得たのはS K692だけだが、S K693・697・699・701の4基からは焼石が出土した。鉄釘(鉄71・参考90)はS K693とS K694で出土した。前者は1.1m、0.95m、0.25m、後者は1.1m、1.0m、0.15mで、底部及び掘形付近に石(0.15~0.2m大)が6個遺る。また、古銭(錢213~216)「皇宋通寶?」ほか4枚が出土したS K699は0.8m(推定)、0.72m、0.2mで、切合い関係からS K698より新しい。同じく切合い関係にある土坑S K700・701の場合、前者は後者よりも新しい。共に底部に0.2m大の石が間隔を置いて据わる。底部に石(0.25~0.3m大)を据えるのは他にS K692・696・702等である。いずれも時期不明の火葬土坑とする。

S K703~708 これら6基からも全て炭化物と人骨細片(S X321~326)が出土した。S K704とS K705では、切合い関係から前者の方が新しい。その規模は0.85m、0.65m、0.18mで、古銭(錢197~198)「元豐通寶」ほか2枚が出土。後者は1.2m、0.85m、0.35mとやや大きい。同じくS K706とS K707の場合、前者は後者より新しく、その規模は0.77m、0.87m、0.18mで、焼石のほか、古銭(錢107~118)「天聖元寶」など12枚が出土した(個別遭構第42図)。後者は0.88m(推定)、0.86m、0.3mで、古銭(錢119~125)「開元通寶」ほか7枚と鉄釘(鉄57~68)・^{335.00}銅金(鉄30)が出土した。S K708は1.05m、1.0m、0.25mで、底部に遺る石(約0.2m大)は火を受け焼けていた。これら火葬土坑には複数回の使用も考慮すべきで、中には鉄釘を用いた棺に収められた亡骸もあつたことが判る。

S K709~715 この7基からも全て炭化物・人骨細片(S X327~333)が出土した。S K709以外の6基は相互に重複し合い、切合い関係にある。S K710はS K711とS K713を切り、S K712はS K711を切るもS K714に切られる。S K714はS K712・713・715の3基を切る。S K713はS K710・714に切られるもS K711を切る。従って、6基の間では、S K710・714が新しく、S K711・715が古いが、双方と

もそれぞの新旧関係は不明。炭化物の多いS K710は0.76m、0.62m、0.15mで、底部には石(0.35m大)も遺り、鉄釘(鉄73)1本が出土した。同じく底部から鉄釘(鉄72)が出土したS K714は1.06m、0.66m、0.18mで、やはり底部に石(0.2m大)が遺る。S K709・712・715からは焼石が出土した。いずれも火葬土坑である。

S K716～718 S K716は1.05m、0.85m、0.15mで焼石・炭化物・人骨細片S X334が出土し、底部に0.25m大の川原石が2個据わる。S K717は抜根で東側掘形が一部崩れたが、0.7m、0.65m、0.18mで、埋土中から焼土・炭化物・人骨細片S X335が出土した。S K718は1.1m、0.65m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片S X336のほか、底部から鉄釘(鉄79)が1本出土した。すべて火葬土坑である。

S K719～721 S K719は1.0m、0.9m、0.32mで埋土中から焼土・炭化物・人骨細片S X337が出土した。底部に川原石(0.1～0.2m大)が4個遺り、径0.4mの小穴を穿つ。S K720は0.95m、0.8m、0.3mで、焼石・炭化物の他、鉄釘(鉄74～77)が4本出土した。底部に川原石(0.3m大)が3個据わる(個別遺構第42図)。S K721は0.9m、0.5m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片S X338が出土、底部に川原石(0.2m大)が2個遺る。いずれも時期不明の火葬土坑である。

S K722～724 S K722・723は重複し、切合い関係から前者は後者より古く、その規模は1.1m、0.7m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片S X339が出土した。後者は1.1m、1.0m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片S X340と古銭(鉄53・54)「洪武通寶」ほか2枚が出土。底部に0.2m大の石が遺る。S K724は1.2m、0.63m、0.35mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片S X341が出土し、底部に遺る3個の石(0.1m大)に火を受けた痕跡があった。共に火葬土坑である。

S K725～730 相互の切合い関係で見ると、S K725はS K726より新しく、S K726はS K725・727より古い。S K727はS K726・729より新しく、S K729はS K727より古い。S K730はS K728より新しい(S K727とS K728の切合はない)。6基のうち新しい方に属すS K725は0.9m、0.76m、0.26mで、焼

石・炭化物・人骨細片S X342のほか、判読不能の古銭(鉄127～132)6枚が出土した。S K727は1.0m、0.46m、0.2mで、掘形に焼土帯を遺し、焼石・炭化物・人骨細片S X343及び古銭(鉄48～51)「皇宋通寶」ほか4枚が出土した。S K730は0.94m、0.5m、0.23mで、炭化物・人骨細片S X346が出土し、底部に2個の石(0.2m大)が据わる。古い方に属すS K726からは炭化物だけが出土した。S K728・729は共に炭化物・人骨細片(S X344・345)が出土し、前者には焼石も認められた。

S K731・732 切合い関係から前者は後者より新しく、その規模は0.92m、0.58m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X347のほか古銭(鉄52)「永樂通寶」が1枚出土した。底部に石(0.15～0.25m大)が2個遺る。後者S K732からは炭化物と人骨細片S X348だけが出土した。

S K733～735 切合い関係からS K733はS K734より新しく。前者の規模は1.24m、0.8m、0.23mで、炭化物と多量の人骨細片S X349及び、古銭(鉄41～47)「開通元寶(開元通寶)」他7枚が出土した。後者は0.96m、0.66m、0.17mで、炭化物と人骨細片S X350が出土。両土坑の底部には大小の石(0.1～0.3m大)が計18個不規則に散在した。やや北に離れたS K735は1.24m、0.84m、0.14mで、焼石・炭化物・人骨細片S X351が出土。底部に2個の石(0.3～0.35m大)が間隔を置いて据わる。いずれも火葬土坑と考える。

S K736～738 S K736は1.05m、0.85m、0.2mで、炭化物と古銭(鉄60)「皇宋通寶」が1枚出土。底部壁際の3ヶ所に長径0.2m内外の半円形小穴を穿つ。通気孔か。S K737は外側が1.3m、1.1m、0.5mで、内側に0.85m×0.55m大の土坑が二重にある(個別遺構第42図)。焼土・炭化物・人骨細片S X352及び古銭(鉄68～73)「景德元寶」ほか6枚が出土した。S K738は0.85m、0.65m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片S X353が出土、底部に3個の石(0.15～0.2m大)が遺る。共に火葬土坑である。

S K739・740 切合い関係から、前者は後者より新しく、その規模は1.18m、0.8m、0.2m。後者は0.9m(推定)、0.68m、0.1m。共に炭化物・人骨細片(S X354・355)がそれぞれ出土した。火葬土坑とし

ておく。

S K 741～744 重複する S K741と S K742とは切合い関係から前者が後者より古く、その規模は0.7m、0.6m（推定）、0.23mで、焼石・炭化物が出土。後者 S K742は0.98m、0.66m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X356及び古銭（銭105～106）「永樂通寶」ほか2枚が出土。S K743と S K744の場合は、前者が後者を切るため新しく、その規模はそれぞれ1.32m、0.98m、0.32mと1.8m（推定）、1.1m、0.2mである。前者 S K743からは焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X357及び古銭（銭133～151）「開元通寶」ほか19枚が出土し、併せて土師器皿・小皿（143・279）の破片が出土した。それが15世紀後葉～16世紀初頭頃に比定できるので、それ以降の火葬土坑と推定。後者 S K744からも焼石・炭化物・人骨細片 S X358及び古銭（銭160～184）「祥符元寶」他25枚と鉄釘（鉄80）1本が出土した。S K744はS K751（後述）にも切られるため、それよりも古い火葬土坑である。

S K 745～747 S K745は1.02m、0.72m、0.2mで焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X359が出土した。抜根により西側掘形が大きく崩れた S K746は0.82m、0.66m（推定）、0.18mで、多量の炭化物・人骨細片 S X360が出土した。切合い関係から S K747より新しい。S K747は1.04m、0.74m（推定）、0.2mで、焼土・多量の炭化物・人骨細片 S X361及び古銭（銭185～189）「天祐通寶」ほか5枚が出土した。掘形の一部を S K748が切るため、それより古い火葬土坑である。

S K 748～751 この4基も相互に重複し切合う。S K748は1.2m、0.76m、0.23mで、底部に幅0.2m余、長さ0.7m、深さ0.1m余の溝を穿つ。焼土・多量の炭化物・人骨細片 S X362及び古銭（銭190～191）「永樂通寶」ほか2枚、土師器小皿破片（280）が出土。それを16世紀前半代に比定した。切合い関係から S K749より古く、S K747・750より新しい。S K749は1.45m、1.1m、0.3mで、内側に更に0.9m、0.7m、0.4mの穴がある（個別遺構第12図）。焼石・炭化物・人骨細片 S X363及び古銭（銭86～103）「元豐通寶」ほか18枚、16世紀前半代の土師器小皿小破片（281）も出土。S K748より新しい。S K750は1.1

m、0.72m、0.15mで、焼土・炭化物・人骨細片 S X364が出土した。S K748やS K751より古い。S K751は1.06m、0.78m、0.2mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X365及び古銭（銭152～159）「淳化元寶」ほか9枚が出土。底部に5個の石（0.15～0.2m大）を方形状に配置する。S K744やS K750より新しい。一定範囲内に複数の火葬土坑が重複して穿たれた事実は、葬送儀礼における地域社会の規制（村の旋）など、何らかの事情を反映しているかも知れない。

S K 752～756 S K752は0.84m、0.76m、0.16mで古銭（銭207）「永樂通寶」が1枚だけ出土した。S K753は0.88m、0.86m、0.22mで、焼土・炭化物・人骨細片 S X366が出土した。底部東側に大小7個の石（0.1～0.4m大）が集積。S K754は1.02m、0.82m、0.2mで、焼土・炭化物・人骨細片 S X367が出土した。底部中央に1個と掘形の下端に沿って10個の石（0.06～0.22m大）が円形状に遺っていた。棺の形状に合わせた通気用の措置か。S K755と S K756とは重複し、後者は前者を切るゆえ新しい。前者の規模は1.0m、0.84m、0.19mで、炭化物・人骨細片 S X368及び古銭（銭96）「永樂通寶」が1枚出土。後者 S K756は1.0m、0.78m、0.15mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X369が出土した。底部に2個の石（0.2～0.3m大）が向合って遺る。いずれも火葬土坑である。

S K 757～760 S K757は三重穴で、外側は0.88m、0.86m、0.2m、その中に0.72m、0.6m、0.1mの穴があり、更にその中に0.38m、0.32m、0.1mの小穴を穿つ。炭化物のみが出土し、小穴掘形付近に2個の石（0.15～0.2m大）が遺る。S K758は1.46m、0.72m、0.25mで、炭化物・人骨細片 S X370が出土した。S K759は樹木抜根で掘形は大きく崩れたが1.3m（推定）、0.8m、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X371が出土した。S K760はやや小規模で0.6m、0.54m、0.15m、焼土・炭化物だけが出土した。

S K 761～767 S K761は0.96m、0.6m、0.18mで、炭化物・人骨細片 S X372が出土。S K762は0.6m、0.5m、0.15mと小規模で、炭化物・人骨細片 S X373及び古銭（銭64～67）「永樂通寶」ほか4枚が出土。S K763と S K764は切合い関係から前者が古く、後者が新しい。前者は0.8m（推定）、0.76

m、0.2mで、炭化物及び古銭（銭201～206）「永楽通寶」ほか6枚が出土。後者は0.8m（推定）、0.8m、0.2mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片SX374が出土。底部に3個の石（0.1～0.15m大）が遺る。調査区壁際で検出のSK765は1.25m、0.7m、0.2mで焼石・炭化物・人骨細片SX375が出土した。SK766は1.0m、0.95m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片SX376及び古銭（銭74～85）「洪武通寶」ほか12枚、鉄釘（参考92）1本が出土。これを六文銭の倍数とすると、二度使われた火葬土坑かも知れない。底部に2個の石（0.2～0.3m大）が向合って遺る。SK767は1.3m、0.95m、0.16mで、内部に更に0.5m、0.4m、0.13mの小穴を穿つ。炭化物・人骨細片SX377の他に、15世紀中葉～後葉に比定した土師器皿破片（141～142）・小皿破片（244）、及び鉄釘（鉄81～87）が出土した。15世紀後半以降の火葬土坑と推測する。

（五）C地区の遺構

⑦ 土坑群（第17表、遺構第28図～第33図）

C地区の土坑群は全部で106基ある。標高111.2～107.6mの間の南東向き斜面に分布するが、より標高の高い尾根筋側に偏在しつつ、南北距離にして約84mにわたる広範囲で検出した。基本的に火葬土坑が主体だが、遺物として縄文早期の深鉢破片や石鐵等が出土したのはC地区だけの特徴で、あるいは中世の火葬土坑ばかりではない可能性もあった。ただ、現地調査では、明確に縄文時代の遺構として特定できるものはなかった。当初、遺構の有無や拡がりを探るため、調査区壁際で幅約0.6mのトレンチを入れたため、その痕跡を残す。

前記A・B地区と同様、文中に並記する三つの数値は、各土坑の法量即ち長径・短径・深さを表す。

SK768～773 SK768は0.6m、0.6m、0.17mで、出土遺物を認めず。炭化物のみが出土したSK769とSK770の規模は、前者は1.2m、0.5m、0.25mだが、後者は0.45m、0.4m、0.38mと小規模な土坑。SK771は1.15m、0.8m、0.15mで、焼石・炭化物・人骨細片SX378が出土した。SK770に近接のSK772は0.75m、0.65m、0.45mで、炭化物・人骨細片SX379が出土した。SK773は0.9m、0.65m、0.2mで、内部に更に0.4m、0.35m、0.07mの小穴を穿つ。焼

石・炭化物・人骨細片SX380が出土した。SK769～772の周囲0.2～1.5mの範囲にサヌカイト剥片（8点）の出土があった。

SK774～778 やや南西端に離れてあるSK774の規模は0.75m、0.6m、0.45mで、遺物はない。底部に0.2×0.16m大の川原石が1個遺る。埋土中に炭化物のみを検出したSK775とSK776は、前者が0.6m、0.4m、0.37m、後者は0.6m、0.5m、0.3mであった。SK777は0.75m、0.6m、0.4mで、炭化物・人骨細片SX381が出土。SK778は1.0m、0.8m、0.47mで、炭化物・人骨細片SX382及び土師器皿破片（245）、石鐵（5）が出土した。SK775～778の周囲（0.3～2.0mの範囲）でもサヌカイト剥片（5点）の出土があった。

SK779～785 SK779は1.05m、0.8m、0.58mで、炭化物・人骨細片SX383が出土。掘形に北接してサヌカイト剥片（1点）も出土した。SK780は1.8m、1.0m、0.47mで、焼石・炭化物・人骨細片SX384が出土した他、縄文土器細片の混入もあった。切り合関係からSK784より古い。SK781は0.85m、0.8m、0.42mで、炭化物のみ検出。SK782は0.5m、0.5m、0.15mと小規模で、炭化物・人骨細片SX385が出土し、切り合関係からSK783より古い。SK783は1.2m、1.1m、0.5mで、焼石・炭化物・やや多い人骨細片SX386及び古銭（銭237～238）「永楽通寶」ほか2枚と鉄釘（参考99）1本、更にサヌカイト剥片（1点）の混入がみられた。切り合関係からSK785より古く、SK782より新しい。同じくサヌカイト剥片が混入していたSK784は0.8m、0.65m、0.4mで、焼石・炭化物・人骨細片SX387及び古銭（銭247）「熙寧元寶？」1枚が出土。切り合関係からSK780より新しい。SK785は1.5m、1.1m、0.5mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片SX388が出土。切り合関係からSK783より新しい火葬土坑である。

SK786～795 やや小規模なSK786とSK787は、前者が0.65m、0.6m、0.33m、後者は0.6m、0.45m、0.1mである。焼石・炭化物・人骨細片（SX389～390）の出土は両者に共通し、後者では焼土の混入もあった。重複するSK788とSK789は、前者が1.75m、1.0m、0.18m、後者は0.85m、0.65m、0.28mで、切り合関係から後者SK789の方が新しい。前

者からは焼土・焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X 391、及び15世紀後葉～16世紀初頭頃の土師器小皿破片（283）が出土し、後者でも焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X 392が出土した。S K 790は0.9m、0.5m、0.45mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 393、及び判読不能の古銭（銭257～260）4枚が出土した。S K 791は1.4m、0.8m、0.37mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 394、及び古銭（銭245～246）「永楽通寶」2枚が出土した。「く」字状に湾曲する土坑 S K 792は1.45m、0.5m、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 395が出土。切合い関係からS K 793より古い。S K 793は1.1m（推定）、0.5m、0.25mで、炭化物・人骨細片 S X 396が出土。S K 794より古くS K 792より新しい。S K 794は1.35m、0.8m、0.3mで、多量の炭化物と人骨細片 S X 397、及びサヌカイト剥片が混入すると共に、底部には0.2m大の川原石があった。S K 793より新しい。S K 795は0.85m、0.6m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 398が出土した。全て火葬土坑である。

S K 796～799 C地区土坑群の中で唯一掘形に焼土帯を遺すS K 796は、1.1m、0.9m、0.35mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 399の他、理土中にサヌカイト剥片も混入していた。当該土坑の西側0.5～2.0mの範囲内でもサヌカイト剥片が5点出土した。S K 797は0.7m、0.65m、0.4mで、炭化物・人骨細片 S X 400が出土。重複するS K 798とS K 799は、切合い関係から前者S K 798が古くS K 799が新しい。前者は0.9m、0.8m、0.45mで、炭化物・人骨細片 S X 401が出土。後者は0.9m、0.85m、0.47mで、焼土・炭化物・人骨細片 S X 402が出土した。

S K 800～803 S K 800は1.65m、1.2m、0.4mで、少量の焼土・炭化物・人骨細片 S X 403が出土し、底部に0.3～0.4m大の川原石が2個置る。S K 801～803の掘形を切るため、その3基より新しい。S K 800より古い3基はそれぞれ、S K 801が0.75m（推定）、0.65m、0.42m、S K 802が0.85m（推定）、0.75m、0.3m、S K 803が0.8m（推定）、0.75m、0.27mで、共に炭化物・人骨細片（S X 404～406）が出土した。S K 803の掘形は次のS K 804にも切られるため、それよりも古い。

S K 804～807 S K 804は1.6m、1.0m、0.48mで、

焼石・炭化物・人骨細片 S X 407及び古銭（銭224～228）「皇宋通寶」ほか5枚と土師器小破片が出土した。切合い関係からS K 803・805・806より新しい。S K 804に先行するS K 805・806は、前者が1.0m（推定）、0.75m、0.3mで、炭化物・人骨細片 S X 408を、後者は1.2m（推定）、0.6m、0.25mで、少量の焼土・炭化物・人骨細片 S X 409を、それぞれ埋土中に包含していた。S K 806より新しいS K 807は1.0m、0.7m、0.3mで、多量の炭化物・人骨細片 S X 410及び古銭（銭229～236）「天聖元寶」ほか8枚が出土した。

S K 808～810 調査区東壁際で検出のS K 808は1.05m、0.8m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X 411及び判読不能の古銭（銭239～244）6枚が出土。同じく壁際のS K 809は0.9m（推定）、0.75m、0.25mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片 S X 412及び土師器破片が出土。S K 810は0.8m、0.5m、0.3mで、炭化物・人骨細片 S X 413が出土した。

S K 811～815 S K 811は1.1m、0.7m、0.23mで、埋土中から焼土・焼石・炭化物が出土したが、人骨は確認できなかつた。S K 812は0.9m、0.85m、0.25mで、焼土・人骨細片 S X 414が出土した。S K 813・814は重複による切合い関係から、前者が後者より新しい。前者S K 813は0.7m、0.55m、0.33mで、炭化物のみが出土した。後者S K 814は1.2m、0.85m、0.42mで、炭化物・人骨細片 S X 415が出土した。S K 815は0.8m、0.85m、0.4mで、炭化物のみが出土した。これら火葬土坑の周縁からもサヌカイト剥片（9点）を採取した。

S K 816～821 S K 816はS K 806・807に切られており、それらよりも古い。規模は1.2m（推定）、0.65m、0.32mで、炭化物・人骨細片 S X 416が出土した。S K 817は1.2m、0.75m、0.45mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片 S X 417が出土した。S K 818は1.15m、1.1m、0.3mで、炭化物・人骨細片 S X 418及び古銭（銭269～281）「天聖元寶」ほか13枚が出土。S K 819～821の3基相互の切合い関係からみてS K 819が最も古く、S K 821が最も新しい。S K 819は1.0m、0.75m（推定）、0.45mで、炭化物・人骨細片 S X 419が出土。S K 820は1.6m（推定）、1.0m（推定）、0.33mで、多量の炭化物と人骨片 S X 420が出土。S K 821は1.0m（推定）、0.6m（推定）、0.45mで、

多量の炭化物・人骨細片 S X421が出土した。

S K822～826 5基は相互に重複し、複雑な切合関係にある。S K822は1.5m（推定）、1.1m（推定）、0.5mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X422が出土し、S K823・824より古い。S K823は1.1m、0.8m、0.38mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X423及びサヌカイト剥片が出土。S K822より新しい。S K824は1.4m（推定）、0.8m（推定）、0.4mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X424が出土。S K822・826より新しく、S K825より古い。S K825は1.65m（推定）、0.9m、0.43mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X425及びサヌカイト剥片が出土した。S K824より新しい。S K826は1.3m（推定）、0.85m（推定）、0.22mで、炭化物・人骨細片 S X426及び古銭（銭286～291）「景祐元寶」ほか6枚が出土した。底部壁際には0.3m大の川原石が1個遺る。S K824～825・S K829よりも古い火葬土坑である。

S K827～830 S K827は1.0m、0.75m、0.32mで焼石・炭化物が出土した。S K828は0.8m、0.7m、0.3mで、焼石・炭化物及び土師器皿破片（145～147）と土師器小皿破片（282）が出土した。これら皿類を15世紀後葉～16世紀初頭に比定した。S K829は前記S K826より新しく、0.8m、0.8m、0.25mで、焼石・炭化物・多量の人骨片 S X427及び判読不明の古銭（銭261）1枚、土師器細片が出土。ここに焼石は、赤く焼けた0.43m大的もので、底部壁際には遺っていた。S K830は1.0m、0.7m、0.38mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X428及び土師器細片が出土した。

S K831～835 この5基も調査区壁際で相互に重複し切り合う。S K831は1.4m、0.9m、0.3mで、焼石・多量の炭化物と人骨細片 S X429及び古銭（銭248～253）「祥符元寶」ほか6枚、土師器細片、鉄釘（鉄98）1本が出土した。S K832やS K833より新しい。S K832は1.4m（推定）、0.5m、0.18mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X430が出土。S K831より旧く、S K833より新しい。S K833は1.3m（推定）、0.7m（推定）、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X431及び古銭（銭284～285）「至和通寶」ほか2枚と鉄釘（参考100）1本が出土。S K831やS K832より古く、S K834より新しい。S K834は0.9m（推定）、0.8m（推

定）、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X432及び古銭（銭267）「元豐通寶」1枚が出土した。S K833より古くS K835より新しい。S K835は1.6m（推定）、0.9m（推定）、0.17mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X433及び古銭（銭263～266）「開通元寶（開元通寶）」ほか4枚、土師器皿（148～149）2枚と刀子（鉄25）1本等が出土した。S K834よりも古い。

S K836～840 S K836は0.6m、0.6m、0.3mで、炭化物・人骨細片 S X434が出土。S K837は1.4m、1.05m、0.23mで、焼石・人骨細片 S X435が出土。S K838は0.8m（推定）、0.5m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X436が出土、S K839よりも古い。S K839は0.6m、0.5m、0.3mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片 S X437が出土。S K838やS K840よりも新しい。S K840は0.9m（推定）、0.45m、0.28mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X438が出土し、S K839よりも古い。

S K841～847 S K841は0.85m、0.6m、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X439が出土。S K842は0.9m、0.75m、0.4mで、炭化物・人骨細片 S X440が出土。調査区壁際で検出のS K843は0.85m（推定）、0.55m（推定）、0.27mで、焼石・多量の炭化物と人骨細片 S X441が出土した。S K844は1.2m、0.8m、0.32mで、焼石・炭化物・人骨片 S X442が出土。重複するS K845・846は、切り合い関係から前者が後者より新しい。前者S K845は0.8m（推定）、0.6m（推定）、0.2mで、焼土・炭化物及び土師器細片が出土。後者S K846は0.9m（推定）、0.6m（推定）、0.23mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片 S X443及び土師器細片が出土した。S K847は0.7m、0.5m、0.37mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X444が出土した。

S K848～851 S K848は1.0m、0.9m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片 S X445が出土。S K849は1.1m（推定）、0.8m（推定）、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片 S X446及び土師器小皿（284～285）2枚が出土。S K850より古い。S K850は1.3m（推定）、0.9m（推定）、0.32mで、焼石・炭化物・多量の人骨細片 S X447が出土。埋土直上でサヌカイト製石鍼（3）1点も採取した。S K849やS K851よりも新しい。S K851は1.0m（推定）、0.65m（推定）、0.25mで、炭化物・人骨細片 S X448が出土した。

S K852～857 S K852は1.9m、1.6m、0.25mとやや大型で、焼石・多量の炭化物・人骨細片S X49が出土。S K853は0.8m、0.65m、0.2mで、炭化物と人骨細片S X450及び古錢（銭255～256）2枚が出土した。S K855より新しい。S K854は1.0m、0.6m、0.23mで、焼石・多量の炭化物・人骨細片S X451及び鉄釘（鉄93～97）5本が出土。S K855は1.15m、0.75m、0.25mで、炭化物・人骨細片S X452が出土。S K853より古い。調査区壁際で検出のS K856は1.0m（推定）、0.6m（推定）、0.33mで、焼石・炭化物・人骨細片S X453及びクロ土師器底部破片（32）と土師器小皿破片（164）が出土。またS K857は1.6m（推定）、1.2m（推定）、0.2mで、焼石・炭化物・多量の人骨細片S X454及び鉄釘（参考101）1本とサヌカイト剥片も出土した。

S K858～861 S K858は0.65m、0.55m、0.17mと小規模で、炭化物・人骨細片S X455が出土した。S K859は1.45m（推定）、1.0m（推定）、0.3mで、焼石・炭化物・人骨細片S X456が出土。S K860は1.2m、1.0m（推定）、0.37mで、炭化物・人骨細片S X457及びサヌカイト剥片4点も出土した。S K861は1.2m、0.9m（推定）、0.45mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X458が出土した。

S K862～864 S K862は1.55m（推定）、1.2m（推定）、0.5mで、炭化物・人骨細片S X459の他に、縄文土器深鉢破片（11）も出土した。S K863は1.1m、1.0m、0.38mで、炭化物・人骨細片S X460が出土した。S K864は1.4m（推定）、1.0（推定）、0.32mで、埋土中に炭化物のみが混在した。

S K865～869 S K865は0.8m、0.75m、0.35mで、焼土・焼石・多量の炭化物・人骨細片S X461が出土。S K866は1.2m、0.85m、0.25mで、焼石・炭化物・人骨細片S X462が出土。S K867は1.2m、0.9m、0.15mで、多量の炭化物及び人骨細片S X463が出土した。底部の約3分の2を岩盤が占める。S K868は1.0m、0.8m、0.18mで、炭化物・人骨細片S X464が出土。掘形の肩に0.4m大の石が1個据わる。壁際のS K869は0.85m（推定）、0.75m、0.42mで、炭化物・人骨細片S X465が出土した。

S K870～873 S K870は1.3m、0.95m、0.2mで、焼土・焼石・炭化物・人骨細片S X466が出土し

た。当地区最南端の遺構S K871は1.3m、0.9m、0.23mで、焼石・炭化物・人骨細片S X467が出土した。掘形の一部に0.8m大の石が据わるS K872は1.2m、1.05m、0.25mで、埋土中から焼石・炭化物・人骨細片S X468が出土。その石がどういう機能や性格を持ったかは不明である。最後に、S K873は0.7m、0.22mで、底部に0.4m大の石が据わり、埋土中に焼土・炭化物が混在していた。（田坂 仁）

V. 遺物篇

(一) 石器

①石鐵・剥片（第18表、第43図・写真第9図）

57点ある。器種の内訳は、石鐵5点・石鐵未製品1点・二次加工痕有剥片1点・使用痕有剥片1点・剥片（碎片含む）48点・石核素材（分割礫）1点となる。石材の内訳をみるとサヌカイト40点・チャート4点・泥岩3点・片岩1点である。

石鐵（1～6）（1）～（4）は凹基無茎鐵である。（1）・（2）はともに側縁が直線となるもので、長幅比が1に近い正三角形状を呈す。（3）は側縁が内に膨らむもので、やや長身である。（4）は側縁が先端部付近で屈曲するいわゆる「五角形鐵」である。時期的には縄文時代後期に多くみられるが、1点のみであり時期確定には至らない。（5）は平基無茎鐵で、左下半部を欠損している。右側縁が内に膨らむことから、左側縁も同様か直線状となる。（6）は三角形状に加工を施すことから未製品とした。（1）～（6）はすべてサヌカイト製。

二次加工痕有剥片（7）山形に打面調整を行った痕跡がみられる風化度の強い横長剥片（サヌカイト）を素材とする。この横長剥片はその特徴から旧石器時代にさかのぼる可能性が高く、縁辺に残る不規則な加工も同時期のものである。新たな加工は腹面縁辺中央よりに施し、一見すると新しいキズのような色調を呈すが、風化度は石鐵（4）に近い程度のものである。このような、時代あるいは時期を相当に離れた石器を素材として用いるサヌカイト搬入例は、縄文時代後期半の松阪市天白遺跡にみられ、今後、時期的・数量的なあり方の検討が必要であろう。

剥片 図示はないが、剥離痕のあり方からおそらく両極打法により剥離されたものがある。灰色チャー

トを用いる。

その他、136.8gのチャート製石核素材（分割礫）や95.2gの泥岩製剝片がみられるが、大部分は石器素材とはなり得ない小型剝片である。（久保勝正）

②磨石・敲石（第18表、第43図・写真第9図）

磨石・敲石（10・11）（10）は円錐の半分余りを欠く。表面側とした中央部には敲打痕の一部が残り、反対側にも磨り面が形成されて平坦になっている。（11）はやや扁平な円錐の上下両端と表面中央部に敲打痕が残り、手ごろなハンマーとして使用されたものと考えられる。この2点以外にも明かに遺跡内に搬入された円錐で、単なる自然石として片づけられないようなものが認められる。（奥義次）

（二）土器

③縄文土器（第18表、第43図・写真第9図）

深鉢（8）早期後葉に属す、高山寺式土器の口縁部に近い深鉢片。断面形は体上部で屈曲し、口縁部に向けて、かなり外反する。表面には一辺ほぼ1cmほどの平坦な菱形文が斜格子状に密接施文されている。内面には太い斜行沈線がやや間隔をおいて施される。沈線間の断面形はなだらかなカマボコ状となる。纖維の含有はわずかに認められる程度で、目立たない。器厚は1.2～1.5cm。高山寺式土器の中では新しいタイプに属する。

深鉢（9）上記深鉢（8）と同一固体かどうかは不明であるが、同型式の底部に近い破片。器面がかなり傷み、文様は不明。断面形からすると、丸底に近い尖底と考えられる。これ以外にも破片が20数点見られるが、いずれも器面がひどく傷んでおり、施文の有無が判断出来ないものばかりである。（奥義次）

④須恵器（第19表、第44図）

杯蓋（12・13）いずれも破片で、A地区N14～16内の数ヶ所に散乱、埋没していたので、遺構に伴うものではない。前者は復元口径約12.1cm、同器高約5.5cm、後者は復元口径約14.0cm、同器高約5.1cmである。共に暗灰色を呈し、ロクロ水挽き後、天井部外面にロクロヘラ削りを施す。MT15号窯型式併行期（6世紀前半代）のものと判断した。A地区から南東へ約200m余離れた南西斜面に築造の4基の古墳は、どれも7世紀前葉以降に位置づけられる（註10）ため、他の古墳等の遺物が持ち込まれた可能性

が高い。

杯蓋（14）紐付き天井部分の小破片だが、上記甕（17）に伴出した。淡灰白色で、ロクロ水挽き後、天井部外面をロクロヘラ削りし、紐を貼付ける。7世紀末以降8世紀前半代頃までには収まると考える。

杯蓋（15・16）いずれもA地区出土の破片で、前者は土坑SK527とSK613からそれぞれ破片が出土し、口径は約16.4cm、器高約3.9cmと復元され、後者は土壤SK527（Ⅲ類）からの出土である。調整技法は前掲杯蓋（14）と同様。時期的には前者（15）は7世紀末以降8世紀前半代までに収まるが、後者（16）はツマミ部分の形状から、やや遅れて8世紀前葉～中葉頃に比定しておく。

甕（17）A地区土坑SK520に隣接のS X158からの出土で、ほぼ完形品。口径10.8cm、器高18.0cm、底部径6.8cmで、淡青灰色の器壁はロクロ水挽きの後に、体部下半をロクロヘラ削りで調整される。猿投岩崎41期併行期（7世紀末～8世紀初頭）とした。内部には人骨が充満していた。但し、この1点を以て、当山における墳墓の初現とするには、特に否定的材料はないが、それでもなお躊躇を感じる。

註10『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第二分冊二、1990年所収「横尾古墳群」192頁。

⑤土師器（第19表、遺物第44～49図）

ロクロ土師器（第19表、遺物第44図）

皿（32～38）底部破片が7点ある。いずれもA地区内の配石区画墓や周溝、あるいは土坑など中世墓に関する遺構の埋土中に混入した破片で、明確な遺構に伴う遺物ではない。復元底部径は殆ど約3.2cmから4.5cmの範囲に収まるが、1点だけ7.0cmというのもある。12世紀代の所産と考える。これらは、中世墓以前の経緯等も考慮すべき遺物と考える。

土師器皿・小皿（第19表、遺物第49図）

破片を含め、個体数として最も多いのは土師器皿類である。皿と小皿との区分は、口径10cmを一応の目安とした。完形品のなかで山茶碗と共伴の皿・小皿類は皆無のため、既出編年案等を参照しつつ、細分化は避け大きく包括的に①期13世紀末頃～14世紀末葉、②期14世紀末頃～15世紀後葉、③期15世紀後葉～16世紀末葉、の3期に仮分類してみた（註11）。

皿類（112～149）

やや古相を帯びる皿が4点（112～115）だけある。全てA地区出土の破片で遺りが悪く、調整技法も口縁部横ナデ程度しか判らない。（112・113）は復元口径約14.0cm、概ね12世紀後半代と考える。（114）は底部が未調整で、復元口径は約16.0cm、器高約2.5cmであった。12世紀後半代かと思う。（115）は復元口径が18.6cm、器高は約2.3cmである。11世紀末～12世紀前葉頃の所産かと推定する。いずれも中世墓関係の遺物と決めつけるのにはいささか躊躇する。

①期の皿（116～127）は、口径約11.0～13.0cm（平均約11.9cm）、器高約1.2～3.0cm（平均約2.4cm）、比較的に口縁部は肥厚しつつ、やや直立に近く内湾する傾向にある。

②期の皿（128～142）は、口径約9.8～13.6cm（平均約11.6cm）、器高約1.9～2.8cm（平均約2.4cm）、口縁部がやや肥厚するものから徐々に薄手に変化すると共に、口縁部が外に開きつつ下半部でS字状に屈曲する形状へと近づく。

③期の皿（143～149）は、口径約11.0～13.0cm（平均約11.7cm）、器高約1.3～2.8cm（平均約2.1cm）である。ほぼ三つのタイプがある。（143・144・148・149）は、②期の（141）の系統を引くタイプで、全体的に一層薄手で口縁部は外に開き、上記のS字状屈曲が普遍的になる。（145・146）は、器高が2.0cm未満、薄手で口縁部は緩やかに内湾し、歪みがみられるタイプ。（147）は、器高が2.0cmより大きく、薄手でやや内湾気味に外へ開く。②期の（142）と同じ系統になる。

小皿類（150～285、参考15～20）

①期の小皿（150～164）は、口径約6.0～10.0cm（平均約8.0cm）、器高約1.0～2.2cm（平均約1.3cm）であるが、構成要素は一様ではない。口縁部が肥厚するのはほぼ共通するものの、口径が8.0～9.0cm前後、器高2.0cm前後で、口縁部が内湾しながら真っ直ぐ上に立ち上がるタイプ（150）、口径は10.0cm前後、器高は1.5cm以下または2.0cm以下で、口縁部がやや開きつつ緩やかに立ち上がるタイプ（155・156）、口径が9.0cm前後または7.0～8.0cm、器高1.5cm以下の一般的な小皿タイプ（152・154）（157～159）、などいくつかのタイプが共存する。それらは概ね③期ま

で継続的に現れるようである。

②期の小皿（165～245）は、口径約6.0～10.5cm（平均約7.8cm）、器高約0.8～2.8cm（平均約1.3cm）。数量的にこの時期の小皿が多数を占めた。（134・244）などは①期の（150）のタイプに相応する。例えば、436号墓出土の小皿で言うと、（225・226）などは①期の（152・154）のタイプ、（229～231）は同じく（157～159）の系統である。この期の小皿は、全体に器壁は薄手に向い、器形に扁平化が進み、歪みや外外面に煤煙の痕跡が比較的多くみられる。

③期の小皿（246～285）は、口径約6.0～9.0cm（平均約7.7cm）、器高約0.6～2.0cm（平均約1.2cm）。SK828出土の（282）は、②期の（244）と同じタイプ、また（145・146）は①期の（155）と同じ系統に属す。（147）は①期（156）や②期（142）と同じタイプである。この時期に普遍的な小皿は、（255～263）のように一層扁平化が進んで、板状に近い形状を呈するまでになっている。

土師器碗・小碗（第19表、遺物第47図）

土師器碗（80・81）は、口縁部に向かうほど器壁が厚く、底部が貼付けた高台よりも下にややはみ出するような、なんとなく無骨な作りである。出土当時には類例がなかった。

土師器小碗（83～85）としたのは、口径が約10cm内外、器高は5cm以内のもので、高台の有無もある。当初は杯か鉢かと迷ったが、名称は小碗に統一した。土坑に伴って出土した（83）と（84）は完形品で、遺構の時期決定に重要。前者を16世紀代、後者を15世紀後半代に比定した。

土師器羽釜・鍋（第19表、遺物第47～48図）

2点の羽釜（93・94）は、共に墓の配石区画内（284・282号墓）から人骨（S X11・162）に伴って出土した。かつては藏骨器に転用された遺物に違いないが、ここではいずれも口縁部の小破片で、埋土への混入遺物と判断した。前者（93）は16世紀代、後者（94）は15世紀中葉頃のもの。両配石区画墓の造営はそれより遅らない。

次に、伊勢型鍋（95～111・参考14）は18個体あった。既出編年案（註12）を参照すると、（95）は12世紀中葉頃、（96～98）は13世紀後半代、（99～104）は14世紀前半代、（105～109）は14世紀末葉～15世

紀前葉、(110～111・参考14)は15世紀後葉～16世紀中葉代、にそれぞれ比定しうる。いずれも藏骨器への転用遺物に遡らないが、完形品はほとんどなく、ほぼ全容が判るのは3点(97・98・104)である。

註11 美杉村教育委員会編『北畠氏館跡9～多気北畠氏遺跡第26次調査北畠氏館跡総括編一』2005年などを参照。竹田治憲、伊藤裕偉らの助言も参考にした。責任は田阪が負う。

註12 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型」鍋に関する若干の覚書一」(『三重考古学研究』1、三重考古学談話会、1985年)、及び伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、1990年)など。

⑥陶器類(第19表、遺物第44～47図)

経筒外容器(第19表、遺物第44図)

A地区から5個体分の簡身(18・19・20・21・23・27・29)の破片が出土し、B地区からも口縁部破片(22)が1点出土した。この口縁部(22)の形状は上記簡身の口縁部とは別物で、併せて6個体分があったと判断した。簡身上半部(18)と下半部(19)は共に破片で、前者の復元口径は約16.5cm、後者の復元底部径は約11.2cmである。両者の胎土・色調・成形技法などの比較から、あるいは本来同一個体かとも考えたが、口径に対して底部径がやや小さく、器壁の厚みもややバランスを欠く。下半部(19)の口縁部には上半部(23)の方が相応しいかも知れない。

唯一、B地区の土坑SK624の埋土中に混入していた上半部(22)は、復元口径約14.8cmで、口縁端部は蓋受け部の立ち上がりを持つている。

上半部(20)と下半部(21)もそれぞれ破片で、前者の復元口径は約16.6cm、後者の復元底部径は13.0cmである。いずれも内面に粘土紐の結合痕跡が認められ、胎土や成形技法などの類似から、本来は同一個体であった可能性が高い。以上4個体はいずれも12世紀後葉～13世紀初頭、遅くとも13世紀前葉までには収まるであろう。

筒身と蓋とのセット関係が類推できるのが2組ある。蓋(26)と筒身(27)、蓋(28)と筒身(29)である。これらは特に182号墓の盛土内を中心に出土した。

蓋(26)は山茶碗の底部外面に紐を貼付けてお

り、復元口径約15.2cm、器高約7.3cm、底部径約6.2cm、12世紀末葉～13世紀前半代に位置づけた。筒身(27)は復元口径約13.2cm、器高約22.8cm、底部径約13.0cmである。暗灰白色で、内面に横ナデと指圧痕が遺り、口縁部～体部を横ナデ、下部には縦位のナデも認められる。12世紀後葉～13世紀初頭ごろのものと位置づけておきたい。

蓋(28)は組付きの天井部のみの破片で、残存度は悪い。筒身(29)は、復元口径約13.7cm、器高約27.1cm、底部径約14.1cm、成形技法は前述の筒身(27)とほぼ同様で、外面上黒褐色に変色した自然釉が見られる。この两者も12世紀後葉～13世紀初頭ないし13世紀前半代とみておきたい。

総じて経筒外容器に関する破片は、概ねA地区のK14～L16～N18区の、特に182号墓を中心とした一定のエリア内に散乱・埋没していた。遺構として断定は出来ないが、かつてA地区的山頂付近には中世墓に先行して経塚が営まれたと想定することができる。そしてその外容器自体が藏骨器に転用された可能性も、少ないと想え排除はできない。

壺・甕類(第19表、遺物第45～47図)

壺(39～40、42～44、46～49)

常滑産壺(39)は東中央斜面の88号墓の藏骨器として出土。既に口縁部を欠失していた。復元口径約9.5cm、器高約22.5cmで、頭部から肩部にへラ描き沈線が2条平行して走る。12世紀中葉以降13世紀前葉までに収まると考える。同墓埋土中からは天目茶碗の破片(67)が伴出したので、藏骨器としての使用は時代を下げて考える必要がある。

涙美産壺(40)は220号墓から出土のほぼ完形品。口径約11.8cm、器高約23.9cm、肩部に逆L字状の窓印(ヘラ記号)が描かれ、体部に1ヶ所穿孔がある。12世紀末～13世紀初頭頃に比定したが、13世紀前葉～中葉頃の山茶碗(56)を蓋にして人骨S X176を埋納した。少なくとも半世紀前後、あるいはそれ以上の伝世期間の後に藏骨器に転用されたと考える。

常滑産三筋壺(42)は、443号墓から出土し、口縁部を欠失する。現状での器高は約24.1cmである。肩部から自然釉が垂れ流れている。12世紀後半代～に比定した。人骨S X193が充満し、蓋にしていた瓦器の小碗(41)は12世紀末葉から13世紀前葉頃まで

には収まると考える。三筋壺の口縁部が欠けること、瓦器小碗の器壁に摩耗痕があることなどを考慮すると、両者が組合わせて転用されるには、もう少し時間が下る可能性がある。日常雑器は伝世しないといふのは恐らく、一部現代人の思い込みに過ぎないのではないか。443号墓の築造は13世紀以前にはあり得ないと考える。

同じく(44)は、M14～O15地区内の複数ヶ所から出土した破片を接合し、口径約10.9cmと復元。12世紀代と考える。藏骨器に転用された後、削平され散逸したものであろう。

渥美産壺(43)は墳丘状盛土の235号墓出土で、ほぼ完形品。口径約11.0cm、器高約27.0cmで、内部は人骨S X205が充満し、扁平な川原石を蓋にしていた(個別遺構第37図)。12世紀後半に比定する。

常滑産壺(46・47)は共に208号墓で出土(個別遺構第34図)。前者(46)は口縁部を欠き、現状で器高は約20.0cm。14世紀代のものという。器壁表面に凍結などによる剥離痕があるとの指摘を受けた。内部は人骨S X174が充満、小刀(鉄12)が副葬されていた。後者(47)はほぼ完形品。口径9.8cm、器高22.4cm、肩部にヘラ描き沈線が2条平行に走り、傘状の窓印がある。底部にひび割れがあり、壺としては二級品との教示を受けた。14世紀中葉頃に比定。内部は人骨S X175で充満、刀子(鉄01)を副葬した。両者の掘形は、その切合い関係から前者壺46(S X174)の方が新しい。

瀬戸産広口壺(48)は複数ヶ所から出土の破片を接合し復元した。口径約10.4cm、器高約25.0cm、劍先(蓮弁)、菊花(径2.8cm印花文)、蘿手文様を施した器壁に黒色の鉄釉がかかり。14世紀初頭頃に位置づけた。

以上、各種壺類の出土状況から勘案すると、13～14世紀代頃に藏骨器として転用された壺で、削平によって破損し、散逸したものがあることが判る。当中世墓の初現問題とともに、その変遷過程をも類推させる遺物であろう。

片口鉢ほか(45・50・51) 片口の鉢のうち(45)は常滑産である。複数ヶ所から出土の破片を接合した。復元口径約19.4cm、器高8.3cmで、やや歪みがあり、底部内面に自然釉がかかり、外面には砂粒圧痕が残

る。14世紀後半に比定。同じく片口鉢(51)も複数ヶ所出土の破片を接合。復元口径約30.0cm、器高約10.7cm、13世紀後葉～14世紀代に比定。

瀬戸産灰釉花瓶(50)は433号墓の埋土から出土の脚部破片である。14世紀後半に比定した。

甕類(69～75、87～91、86・92)

常滑産甕(69)は、想定納骨堂の182号墓盛土から出土した。復元口径約16.3cm、器高約23.0cm、N字口縁で肩部には菊花文のスタンプ痕跡がある。14世紀後葉頃に比定した。

常滑産甕(70)は399号墓から出土。N字口縁がやや退化しつつあり、肩部に直線的なヘラ描きの窓印がある。口径19.2cm、器高16.4cmで、内部には人骨S X194が充満。15世紀前葉～後半に比定した。

常滑産甕(71・72・73) いずれも完形品ではなく、しかも複数ヶ所から出土の破片を接合した。藏骨器に転用されていたものが、削平を受けて破損・散逸したものだろう。(71)は復元口径約15.4cm、15世紀後半～16世紀初頭頃のもの、(72)は辛うじてN字口縁の形を保ち、復元口径約20.2cmで、15世紀前半代のもの、(73)は復元口径約16.4cm、器高は約18.0～18.3cm、15世紀前葉頃のものと、それぞれ比定した。

常滑産甕(74)は同じく壺(39)の出土した88号墓で出土した破片を接合復元した。口径16.4cm、器高16.1cm、N字口縁がかなり退化し帯状に近い。15世紀中葉～後半代とした。88号墓の範囲は不明瞭で、時期の異なる墓が隣接した可能性がある。

常滑産甕(75)は、SK476の埋土中から出土した、N字口縁部の小破片である。口径は約16.5cmと復元できる。15世紀後半に比定した。

常滑産甕(87)は、182号墓(推定納骨堂)の盛土を含む複数ヶ所から出土の破片を接合。明瞭なN字口縁部で、復元口径約31.4cmとやや大きい。14世紀後葉～15世紀初頭に比定した。

常滑産甕(88・90)は、165号墓の埋土から出土の小破片である。復元口径は前者が約29.4cm、後者は約28.0cm、15世紀前半代の典型的なN字口縁である。両者は同一個体になる可能性があるかも知れない。

常滑産甕(89)は、N15地区斜面で出土の小破片。N字口縁で、復元口径は約22.0cmであった。15世紀前葉に比定。

常滑産甕（91）は、(87)と同様182号墓の盛土を含む複数ヶ所から出土した破片である。復元口径は約32.0cmあり、15世紀前半代に属する典型的なN字口縁部を備えている。

常滑産大甕（86・92）は、共に口径が50cmを超える大型の甕である。前者（86）は182号墓を含む複数ヶ所から出土の破片を接合し、完形復元した。口径約57.2cm、器高約73.2cm。口頭が萎縮するタイプで、器壁は比較的に薄手、体部外面には帯状の押印文を5段に分けて施文する。12世紀後半代（第4四半期頃）に属すると考える（遺物第51図・写真第11図）。後者（92）はB地区の462号墓（墳丘B）の主体部に相応するSK610出土の大甕。典型的なN字帶状口縁部をもち、肩部～体部に「大日」のスタンプ印を施す。体部に径20～25cmの円形に打ち欠き跡あり、底部は欠失していた。15世紀後半～16世紀初頭に比定した。462号墓（墳丘B）は當中世墓群の発展過程における、一つの画期をなす墳丘墓ないしは納骨堂の可能性があり、甕（92）はそれを裏付ける貴重な遺物。

山皿・山茶碗（第19表、遺物第46図）

山皿（参考9～11）

3点ある。図示はしなかったが、参考（9）は146号墓の埋土から、参考（10）は131号墓の埋土から、また参考（11）は200号墓SK75の埋土から出土。参考（9）は破片を接合し完形に復元し、口径約8.0cm、器高約2.0cm、底部径約4.2cmである。12世紀後葉～13世紀初頭に比定した。参考（10）と参考（11）は、共に小破片で混入遺物である。前者を13世紀中葉、後者を13世紀前葉に位置づけた。なお、後者は土師器皿小破片（113）とも同時出土である。

山茶碗（52～59・参考1～8）

全16点のうち、完形もしくは完形復元できたのは3点（55・56・58）ある。他はすべて破片で、單一の遺構から出土したのは8点（53・54・56・58・参考2、参考5～7）だけである。

（55）は和鏡（76）の出土した107号墓の区画東辺に沿う形で外接して出土した。明確な遺構に伴う遺物ではない。口径約14.4cm、器高約5.2cm、底部径約6.8cmあり、貼付け高台は約半分剥離し、初期圧痕も多かつた。13世紀中葉頃に比定した。和鏡が14世紀前半頃のものゆえ、遺物自体の時期は符合しない。

（56）は220号墓SK176出土で、口径約13.7cm、器高約5.4cm、底部径約5.6cmを測る。13世紀前葉～中葉に比定した。人骨SK176を埋納した源氏墓（40）の蓋に転用されていた。両遺物の時期差が即ち蓋の伝世期間になるが、山茶碗にもそれを見込むと、伝世期間は更に長くなる。出土遺物で造墓時期を推定できる数少ない例である。

（58）は土塙墓SK532から出土の完形品。口径14.8cm、器高5.5cm、底部径5.2cm。潰れた高台に初期圧痕が顕著であった。13世紀中葉～後葉に比定した。土塙から出土した唯一の山茶碗で、副葬品と考える。A地区の土塙墓の初現を考える上で貴重な遺物であった。

（53・54）はいずれも破片で、反転して復元すると、前者は口径約15.4cm、器高約5.7cm、底部径約6.3cm、後者は同じく13.9cm、5.1cm、5.1cmとなる。それぞれ182号墓の埋土と火葬土坑SK500の埋土からの出土。前者を12世紀中葉～後葉に、後者を13世紀前葉～中葉に比定した。

その他は遺構に伴わない破片ばかりなので第7表に譲り略すが、古くは12世紀中葉代のものから、14世紀前半代に至るまで見られ、時期幅は他の遺物と大きさは変らない。

おろし皿（65・66）（第19表、遺物第46図）

いずれも破片で、後者は82号墓埋土からの出土。復元口径は、前者が約18.0cm、器高は約3.0cm、後者の方は口径約18.0cm、器高は約4.0cmである。共に15世紀前葉頃に位置づけた。

天目茶碗（67・68）（第19表、遺物第46図）

両破片とも單一遺構からの出土ではなく、複数ヶ所で出土の破片を接合。前者の口径は幸うじて約11.8cmと復元できた。共に14世紀後葉頃に比定した。

⑦磁器類（第19表、遺物第44・46図）

白磁合子（24・25）

いずれも蓋はなく身だけの破片で、前者は表土採取、後者は194号墓SK282の埋土に混入して出土した。前者的復元口径は約8.2cm、器高は約2.0cm、底部径は約8.2cmである。後者の復元口径は約9.2cm、器高は約2.0cm、底部径は約8.8cmである。蓋の受け部が立上がる。12世紀代と考えた。先の経筒外容器の存在と併せて、當中世墓群に先行する経塚遺構を予

想させる遺物であろう。

青磁碗（60～64）

5点のうち、(63)以外は、かなり小さな破片ばかりで、しかも明確な遺構に伴う遺物ではない。全て13世紀末～14世紀代のものと考える。完形品の(63)は100号墓に伴う土坑SK514の底部から出土した副葬品で、文様はなく無地である。口径17.0cm、器高6.9cm、底部径6.3cmであった。當中世墓では比較的に早く営まれた方形周溝墓の遺物である。

（三）金属製品（第19～22表、遺物第47、50～52図）

①和鏡（76）

107号墓から出土した完形品である。径11.3cm、厚み0.2cm、縁厚0.7cmを測る。本来の鏡上上がりは良好だったと思えるが、腐蝕が進み、表面がやや浮上がつて剥離の危険性が高い。蓬莱山に千鳥が二羽舞っている図柄で俗に蓬莱鏡と呼ばれるもの。鎌倉時代末期（14世紀前半）頃に比定できるという。和鏡はこれ以外にも小破片が1点あったが、火葬時に熔解して著しく変形していく実測も出来なかつた。

②銭貨（第22表、遺物第52図）

A～C地区で出土した恐らく六文銭と考えられる銭貨は、総計291枚ある。内訳はA地区15枚、B地区で208枚、C地区は68枚である。銭貨名を判読し難いものが併せて87枚、約30%を占める。火葬時の熔解による付着や土中の腐食等による。判読し得る204枚（全体の約70%）のうち、最多は明銭の「永楽通寶」100枚（約34%）で、次いで「熙寧元寶」17枚・「元豐通寶」12枚・「皇宋通寶」11枚（以上13.8%）など北宋銭が目立つ。因みに北宋銭は23種90枚、これは判読可能な銭貨中の約44%に、また明銭は3種106枚で、同じくその52%にそれぞれ相当する。これは、出土した銭貨の初鋤年代がほぼ15世紀初頭頃までに収まることを示しており、当該中世墓の最盛期がそれ以降にあることを物語るのではないかと、推測せしめる。なお、なかには模鋤銭ではないかと詳しく述べるものに、例えば銭225「元符通寶」や銭238「永楽通寶」などがあるが、鑑定能力をもたず即断できない。

同一の土坑から12枚（B地区土坑SK706・766）、13枚（C地区土坑SK818）、18枚（B地区土坑SK

749）、25枚（B地区土坑SK744）など、多数の枚数が検出される例があった。反対に6枚未満の例もある。これらを単に被葬者の経済力の差とみなすばかりではなく、同一土坑で複数回の火葬があったとみるか、あるいは同業による「結縁」勧請の有無なども含め、様々に想定をしておくべきであろう。

276枚の銭貨がB・C地区の土坑群からの出土で、これは全体の94.9%を占める。六文銭としての銭貨が基本的に納骨時には使用されないとすれば、両地区的土坑群は火葬土坑が主流で、A地区は、ある時期を境に、その後に收骨を埋葬する墓地としてのみ機能したものと推測できる。ただ、A地区下層にも明らかな火葬土坑が少なくとも46基（SK481を含まず）はあり、從ってそこからは銭貨が出土してもおかしくはないが、案に相違して皆無であった。即ち、死者を荼毘に付す行為において用いる六文銭には、(77)のような土製模造銭のほかに紙製模造銭が用いられたかも知れないし、あるいは六文銭を用いない時期もあったのではないか、と思う。

③刀子類（第20表、遺物第50図）

出土した刀子は破片も含めると計37点ある。その内36点（97%強）はA地区に集中しており、B地区からの出土は皆無だった。大抵は人骨を伴う配石墓など（12点33%強）や下層の土壙墓（21点58%強）に埋葬された副葬品で、A地区的性格を物語るとともに、B・C地区（1点2.74%）の土坑群の大半が基本的には荼毘に付す、いわゆる火葬土坑としての機能をもつものであったことを強く示唆している。ただ、A地区でもすべての墓から出土した訳ではない。埋土中での腐蝕消滅を考慮してもなお、被葬者の経済力等には、当然ながらばらつきがあったものと推測せざるを得ない。

一般的に、刀子の目安は全長が30cm以下であると聞く。ほぼ完存の状態で出土した10点（鉄01・05・07～09・11・13・17・19・27）の平均全長は29.81cmであった。中には、鉄24～26のように、刃部の幅も狭く、やや小振りの製品も数点みられる。被葬者に起因する結果かも知れない。

木質の鞘部が断片的に残存している例も数点あり、鞘に収めた枕刀が本来の姿であろう。また錆膨れや欠失などにより、はっきりしない個体（鉄10・18・

20・25・26) もあるが、基本的にはどれも棟区と刃区をもつ構えになっていた。茎の尻近くに大刀のような忍孔は見られないが、区部に近く目釘孔がある。これも、鋸や腐蝕で確認できない個体もあった(鉄07・08・17・19)。273号墓出土の鉄27は、藏骨器の中に渦巻き状に曲げて押込まれていたもので、もはや鞘などは放棄され、副葬品としてはかなり形骸化していた実情もうかがえる。鉄01・12や鉄03・11などのように、一箇所から2本出土した例もあるが、明確な理由は判らない。

④鉄釘類(第21表、遺物第51図)

鉄釘は完形品、破片を問わず、参考資料としたものを含めて表では計56点と勘定した。但し、頭部を欠失したもののが20点あるので、実際の釘の数は更に少ない。いずれも茶毬に付す際に使用された木棺に打付けられていたと考える。B地区の土坑群から38点(67.9%)、C地区の土坑群からは9点(16.1%)、計47点(83.9%)とB・C地区的土坑群からの出土が圧倒的な割合を示している。この事実は、そこが基本的に火葬エリアとして機能したことを推測させる。ただ、腐蝕等で壊らなかったことを考慮しても、土坑数(409)に比べると、釘の出土した土坑は併せて25箇所(6.1%)に過ぎない。従って、茶毬に付される亡骸がすべて木棺に収められたとは考えられない。樽桶の類ならばもとより釘はないし、戸板で運ばれたり、籠や莫産などで覆われたままの亡骸もなお一般的であったと、想像する。

因みに、B地区SK707で12点、SK767で7点、C地区SK854でも5点など、2点以上出土した土坑は8箇所あるが、他の17箇所では1点のみの出土であった。

釘の完形品は少ないが、鉄72・84～87などはほぼ完形品に近く、その全長の平均値は7.7cm強である。図上復元した鉄47や鉄66・67なども参考にすると、全長はおおむね5.0cm前後から8.0cm前後と長短があり一定ではない。当時まだ丸釘ではなく、断面形は方形ないし長方形で、平均すると0.47cm×0.35cmとなる。釘の頭はやや扁平に成形されている。釘の先端が「く」の字に曲がったものが3点(鉄51・55・80)ある。いずれも木棺の蓋を打付ける際に生じたものであろう。

⑤鎌、及び鍔金(第20表、遺物第50図)

はつきり鎌と判断るのは鉄28と鉄参考45だけである。腐蝕してしまい完形品はない。かつて奈良県の忍辱山にある墓地で、明らかに土葬墓の形状をもつ墓の覆土の上に、数本の竹を一端で放射状に束ねた上で、土中の亡骸を取り囲むように円錐形状に立て、束ねた竹の円錐頂部から魔よけとしての鎌を吊り下げた民俗事例を実見したことがある。果たして、当中世墓の時代にもそういう習俗があったかどうか、遺物の出土状況から推測することは難しい。

その他、鉄21・鉄22・鉄23・鉄30・鉄31などは、鎌でも刀子でもなく、前2者(鉄21～22)や後2者(鉄30～31)は、他遺跡の類例から推して、鍔金と考えるのが妥当ではないかとの教示を得た。例えば、鎌倉の長勝寺遺跡は「成立期の民衆墓」(大三輪龍彦氏)としての土塙墓群の存在で著名だが、そこでは3点の鍔金や22個の石英などが出土している(註13)。横尾墳墓群A地区でも石英は多数出土しており、この鉄21・鉄22および鉄30・鉄31も、県内外の類例と形状などが似通っているので、本来は長勝寺遺跡などで見られたような鍔金であったのではないか、と考ええる。

なお、鉄23は片面に何かを引っかけるように造られているが、今のところ見当がつかない。また、鉄29は針金にしては太く、硬質で、ちょうど「パンセン」の類に似たような印象が出土当初から拭えずにいる。あるいは中世墓の遺物には相応しくないのかも知れない。

註13 長勝寺遺跡発掘調査団編『長勝寺遺跡—中世鎌倉の民衆生活を探る—』かまくら春秋社、一九七八年。
なお、県内の類似例については、同僚の文化財技師大川操氏のご教示を得た。

(四) 石製品・石塔類(第23～27表、第51～56図)

①石製品(第19表、遺物第47図)

砥石(78)

粘板岩製の砥石(78)は161号墓から出土した。破片で、長辺5.8cm以上、短辺3.2cm、厚さ0.4～0.8cm、横断する形で幅0.4～0.8cm、深さ0.4cmの磨り込み痕がある。暫定的だが、16世紀代のものではないか、とした。

硯（82）

おおむね完形で、粘板岩製である。東斜面の埋土下層で出土。上からの崩落かと推定。頭幅8.3cm、尻幅8.7cm、長さ12.0cm、厚さ1.6～1.85cm、ごく僅かに台形状（14世紀的な特徴）の名残を留める。水野和雄氏の研究成果に依拠すれば、側面傾斜A型、裏面平坦C式、内面はほぼ長方形（I）の特徴をもつ。14世紀末ないし15世紀初頭～前葉頃に比定しておきたい。

②石塔類（第23～27表、第51～56図）

石塔の中心は五輪塔である。現地で取上げた石塔は破片も含め1,107点（A地区1,014点、B地区93点）にのぼる。A地区での出土が圧倒的に多い。殆どは砂岩系の石材を使用している。長年風雨に曝された上に、恐らくは大小の現状変更、就中地元民による文化七年の大規模な現状変更（後掲VII、文献資料編『寄墓日記』参照）によって、当該墓地に今以上に残存していたと思われる中世的な墓地景観や遺構は相当の破壊を受けたと推測する。もはや原位置を保つ五輪塔は皆無に等しい状態であった。破損して計測不可能な石塔の残骸も多数あるため、別表一覧からはそれらを省いた。大きくは、下記のとおり三種類の類型に分類が可能で、それぞれ法量を計測した各部位の名称（a、b、cなど）は、別掲の第23表（凡例）を参照されたい。

I類（組立て式五輪塔）

空風輪+火輪+水輪+地輪を組合わせるタイプをI類とした。空輪A0006と風輪A0014とはそれぞれが一石で造られている当墓では希有な例で、I類には含めなかった。

このタイプの各部を合わせると、A地区で766点、B地区で22点出土した。内訳は下記のとおりである。

A地区（第24表、遺物第53～55図）

（1）空風輪：総数300点を数え、うち244点は概ね間違いない。残り56点は、破損した空輪または風輪の破片が13点、風輪部を欠損する空輪が43点からなる。それらは本来が空風輪なのか、空風火輪の一部か、一石五輪塔の一部か、或いは相輪宝珠に相当するのかが判然としないので除くが、暫定的にI類総数には入れている。

石材の面で注意すべきは、A0018が花崗閃緑岩製、

A0245は凝灰角礫岩製である。これは当墓では珍しく、近畿方面からの搬入もあったかと推測される。

244点の計測全高（凡例部位a）平均値は17.9cmである。このうち、全高が20cmを超えるものは34点（14%）あり、その中でさらに30cm以上のものが2点（A0222・A0227）ある。逆に最小のは10.6cm（A0122）、これは火輪A0373とセット関係にある。また、A0254のように火輪（A0451）・水輪（A0552）・地輪（A0698）と1セットであることが判明した希有の例もあるが、散乱状態での出土のため、通常セット関係までは把握できなかった。

多くの場合、火輪とのジョイント（枘）部分（石塔凡例中のj 纳部径・k 纳長を指す）をもち、全体の71%を占める。また、梵字を刻した例は2点（A0033、A0120）しかない。

（2）火輪：総数167点。花崗岩製が1点（A0357）だけであった。計測全高（凡例部位a）平均値は11.2cmである。全高が15cm以上のものは7点、軒部上端径（凡例部位j）が20cm以上のものは16点ある。この中に先の7点のうちの4点が含まれる。つまり比較的全高も軒部上端径も共に大きいのはA0338、A0369、A0390、A0463の4点で、とりわけA0338とA463は大型製品である。A0390は笠部に反りがなく特異な形状をしている。全長が10cm以下のものは52点あり、これは全体の31%を占める。空風輪A0122とセット関係にあったA0373も小型でこの中に含まれる。

空風輪と同様、大半にジョイント部分（枘）が造られている。全体の81%強に当たる136点の笠上部に納穴が穿たれる。風輪底部の納部と接続する仕組みである。納穴のないものは31点（18.5%）に過ぎない。梵字が刻まれたものはA0325の1点だけだった。

（3）水輪：総数は96点。計測全高（凡例部位a）平均値は13.2cmである。全高が15cm以上のものは11点、20cmを超えるのは2点（A0499、A0513）のみ。また、計測最大径（凡例部位e）の平均値は18.3cmであった。そのうちで20cmを超えるのは16点あり、先の2点も当然含まれる。前者は29.3cm、後者は30.3cmでともに16点中の最大級に属している。A0488とA0513には梵字が刻まれている。

計測不可能な6点を除く90点について最大径の位

置を調べた結果を参考までに記しておく。最大径の位置が全高的中心より上位にあるものは51点(56%)強、ほぼ中心部にあるのは18点(20%)、下位のものは21点(23%強)であった。

(4) 地輪：総数201点。計測全高（凡例部位 b）平均値は12.8cm、同横幅（凡例部位 a）平均値は18.5cmである。全高が15cm以上のものは34点(16.9%)あるが、20cmを超えるのは僅かに1点（A0739）にすぎない。また、横幅が20cmを超えるのは22点(11%)で、その半数の11点は25cm以上あった。最大はA0592の32.1cm、A0595の30.4(以上)cmである。ただしこの2点の全高は11~14cmと比較的薄いのが特徴である。

石材に片麻岩製（A 0575・A 0634）と空風輪にもあった凝灰角礫岩製（A 0635）のものが若干混じっている。

唯一梵字が刻まれていたのはA0583の大型品で、出土状況から判断して恐らく原位置を保っていたと考えられるものが2点（A0691・A0751）あることが特筆される。また、配石区画墓の配石に転用されていたものが11点あった。

B地区（第27表）

(1) 空風輪：総数は11点。敢えて計測全高の平均値を示せば23.4cmである。うち4点に枘部があり、枘部径6.7cm、枘長4.8cmがその平均値であった。B1017は462号墓（墳丘B）の土坑S K610に収められた大甕内部から地輪（B1032）と一緒に出土した。

(2) 火輪：総数は2点。1点は上部を欠失しているので全高的平均値はとれない。他の1点の全高は11.4cmで、これはA地区火輪の全高平均値11.2cmと変わらない法量である。2点とも枘・枘穴を持たないタイプである。

(3) 水輪：総数は3点。計測不可の1点を除く平均値は、全高が16.0 cm、最大径 21.0 cm。最大径の位置（凡例部位 b）は9cmになり、全高的中心部よりやや上位にあった。

(4) 地輪：総数は6点。欠損著しく計測暫定数値しか得られないため、可能な2点にかぎると、計測横幅平均値は17.6cmであった。

II類（三輪一石十二輪一石五輪塔）

空風火輪を一石で造り、水地輪をまた一石で造つて両者を組合わせるタイプをII類とした。

A地区（第25表、遺物第56図）

(1) 空風火輪：総数は105点を数えるが、うち73点は空・火輪部または火輪部を欠損しない欠失しているため、一石五輪塔との区別がつけにくく、従つて確実なものは32点になる。

測定全高平均値は29.5cmで、30cm以上あるのは12点(約38%)あり、全高値最大のものはA0776(36.6cm)、A0768(33cm)、A0785(32.4cm)などがある。最小はおおよそその半分に近く、A0784・A0780・A0793などは括弧つきだが15cm代であった。

このタイプに特徴的なことは、空輪部先端の突起（凡例 s・t）部分が異様に大きいということである。その平均値は6cmを超すが、完形品ではない場合にも、その痕跡をてがかりにして類別判定要素として生かせるかも知れない。

火輪底部にジョイント部（枘または枘穴）を持たない個体が19点(59.4%)、もつのは11点(34.4%)あり、枘（凸）部タイプは5点、枘穴（凹）部タイプが6点という内訳であった。A0773はA0877（水地輪）と同じ場所で伴出したので当初はセット関係を想定したが、ジョイント部の不整合によりその関係は成立しにくいように思う。

A0795からA0798までの4点はいずれも配石墓(223号墓・450号墓)の区画石として転用された状態で出土した。従つて両墓はその空風火輪よりは後代のものということになる。なお、A0848の石材は流紋岩質溶結凝灰岩という当墓域では珍しい石材であった。

(2) 水地輪：総数40点のうち、水輪部を欠損または欠失するのが18点ある。これは一石五輪塔の可能性もあるため、これも確実なものは22点となる。

計測全高（凡例部位 a）の平均値は25.9cmで、最大クラスはA0879(30.7cm)、A0877(29.2cm) A0885(28.3cm)などである。ジョイント部の有無が判るのは13点に過ぎず、ないのは3点、あるいは10点（枘部3点、枘穴部7点）であった。

地輪底部に挟り穴（凡例部位 n・o）をもつ個体が18点(82%)あり、その計測平均値はそれぞれ、

13.7cm、2.1cmであった。安定性を図るために工夫を考えるが、もしそれが納骨に利用されることがあるとすれば、よほど儀礼が簡略化され、納骨と五輪塔の設置が同時であることが前提になる。なお、A 0886とA 0892の2点は、配石区画墓の配石に転用されていたものである。

B地区（第27表）

（3）空風火輪：30点（9点） 21点は火輪部を欠失しており、場合によっては一石五輪塔になる可能性もあるため、平均値の算出には除外している。確実な9点の計測全高平均値も、8点は空輪先端部が欠損して数値の確定ができないため、計算できない。火輪部に納（3点）または納穴（1点）をもつのは4点で、他の5点にはそれがない。また、このタイプに特徴的な空輪先端部（凡例部位s・t）の大きさも、5cm以上のものばかりと類推可能である。

（4）水地輪：8点 計測全高平均値は26.8cmで、概ねA地区の同タイプの平均値に近い。他の部位に関する限りでも双方に大差はない。水輪上部の納および納穴の有無は、不明の2点を除くと、有りが5点、なしのが1点である。5点のうち3点が納、2点が納穴である。地輪底部の抉りも7点で確認できる。

III類（一石五輪塔）

空風火水地輪のすべてを一石で造るタイプ、いわゆる一石五輪塔をIII類とした。A地区で102点、B地区で27点、計129点出土し、C地区での出土はなかった。

A地区（第26表、遺物第56図）

102点のうち、全高（凡例部位a）測定値が確定できる完形品はきわめて少なく僅かに7点しかない。多くは空輪の先端部や地輪部などが欠損し、厳密に確定数値が示せないので一覧表では括弧書きになっている。ともあれ、全高の測定平均値は47.4cmあり、この平均値を上回るのは括弧書きの個体を含めても7点しかない。大型クラスはA 0950（59.6cm）、A 0947（55.8cm）、A 0926（54.6cm）などである。大抵は45～50cmの中型タイプと35～40cmの小型タイプに収まるだろう。

次に、地輪部の全長（凡例部位f）だが、この測定平均値は11.8cmであった。この平均値を上回るのは37点あり、A 0971（18.4cm）、A 0937（17.0cm）、A 0926（16.6cm）、A 0914・A 0989（共に16.0cm）な

どが最長の部類である。逆に最短の部類にはA 0965（6.7cm）、A 0927（7.6cm）、A 0996（8.0cm）などがある。文字を刻したものはない。

地輪底部に抉り穴（凡例部位s・t）をもうけるのは39点確認した。計測平均値はそれぞれ10.6cm、1.5cmと浅い目である。この空間に納骨をしたとの見方もあるが、例えば89号墓での検出例などから類推して、その可能性はまずない。既述のとおり、むしろ地面に建てる場合の安定性が考慮されているからである。

気になったのは、全体を縱方向に半蔵して、やや厚目の板状になった個体がまま見受けられたことで、A 1000のように区画用配石として転用されていたものもある。一体、五輪塔が他に転用されるまでにどれほどの時間的経過を要するのかは判らないが、一部の墓は近世初頭まで存続したのではないかと思われる使用例であった。

B地区（第27表）

総数は27点ある。全個体に何らかの欠失部分があり、正確な全高測定値を得られたものはない。ただ不十分ながらでも完形品に近いB 1075、B 1076、B 1082、B 1095、B 1097の未確定測定全高平均値を出すと、43.3cmになる。これは前記A地区的場合に近い数値であり、当然のことながら、このタイプも両者の間に大きな差異は認められない。

③宝鏡印塔（第25表・27表、遺物第52図）

完全な姿で残ったものではなく、相輪部と笠（屋根）部のほか、僅かに1点だが基礎部の出土がある。相輪だけならば、宝塔や多宝塔などの一部でもありうるが、屋根（笠）部の出土があったので、一括して宝鏡印塔として報告する。

相輪はA地区で30点、B地区では3点、計33点が出土した。完形品はなく、宝珠や丸輪、あるいは上下の受花や露盤（伏鉢）・納部などが何らかの形で損壊欠失している個体ばかりである。いま33点の計測全高平均値を求めるところ39.7cmである。同じく九輪高平均値は14.2cm、宝珠の最大径平均値は9.9cm、上受花最大径平均値は11.3cm、下受花最大径の平均値は12.1cm、そして露盤（伏鉢）部の最大径平均値は11.4cmであった。B 1103は461号墓（墳丘A）の周溝底部から出土した唯一の遺物で、当墓周溝の消長を

知る貴重な資料である。

屋根（笠）部は、A地区で3点、B地区で4点、計7点が出土した。計測全高平均値は23.0cm、隅飾り高の平均値は12.5cm、隅飾り先端間の幅平均値は28.9cm、軒下幅の平均値は25.9cmである。隅飾りはやや外に開き気味の個体が主流であった。相輪の数に比して極端に少なく、基礎部も1点しか出土していないのは、相当の散逸があった証拠である。

④石仏（第25表、遺物第52図）

阿弥陀仏を浮彫りしたものが出土した。全高は19.6cm、底部幅は5.2cmである。

（五）その他

①人骨

全ての遺構から出土したわけではないが、藏骨器を含め、A地区の配石区画墓の遺構検出等に伴って出土したのは206件、A地区下層の土坑群からの出土は146件、B地区土坑群からの出土は134件、C地区土坑群からは71件、計557件である（第1表参照）。ただし、出土状況は千差万別で、少量の破片の場合も、藏骨器に充満している場合も、等しく1件として採り上げている。

別掲鑑定結果にもあるように、全て火葬人骨である。詳細はその鑑定報告に譲るが、A地区的配石墓では複数箇所から、しかも必ずしも区画中央部からという説ではなく、左右に偏った箇所や、極端な場合には区画外周に近い箇所からの出土もままたつ。また、とりわけ南・東斜面の400～450号墓にかけてのエリアでは、配石墓の一区画が判然としないほど川原石で覆われていたが、それらを除去する過程でも、石と石の間から人骨が出土した例もあった。一石五輪塔が配石区画に転用されていた事実から類推するのだが、一部近世に及ぶものもしあるとすれば、終末期の状況は既存の墓の一郭を借りて埋納するだけの靈場と化していたかも知れない。

②石英

A地区に限って出土した。平均すると、5～6cm大に打ち欠いた石英が、配石遺構のなかに遺る地輪の底部付近や、多くのばあい区画のほぼ中央部付近とか、人骨の固まって出土する箇所などで、数個単位で検出されることが顕著であった。

（ひうちのく）

前述の燈籠の一件を考え合わせると、火打ち石と

しての役割は火を見るよりも明らかである。ただ、中には10cm前後の大きさのものから約2～3cm程度のものまであり一定しない。当該中世墓の全期間を通じて、通常の火打ち石として常に使用したかどうかは疑問もある。あるいは実際に「火打ち」作法が行われた時代もあったが、それが徐々に形骸化されるによよんで、ただ慣例的に石英を置いておくだけの習俗に変容して連続と続いているのか、明確な判断はできない。因みに、この石英は当山に近い「雲母谷」と呼ばれる場所で容易に採取できると、地元住民の方から聞いた（雲母は勿論、成分の上で石英と同質の鉱物である。これはあくまで憶測に過ぎないが、もしかしたら、この「雲母谷」という地名は、かつては「隕亡谷」^{（おとぼだに）}と俗称されていた語から転訛した可能性もあるのではないか、と今は想う）。

（田坂 仁）

註14 佐藤和彦編『中世史用語事典』新人物往来社、1991年、PT2を参照した。

VI.まとめ

（一）縄文人の痕跡

当遺跡で最古の遺物は縄文時代早期後葉までさかのぼる。今からおよそ7,000年あまりも昔のものである。深鉢と呼ばれる土器の破片が2点と、そのほか明確に時期は特定できなかったが、やはり縄文時代の石鐵が数点。これは当時の人々が使った矢じりである。いずれもC地区からの出土であった。横尾の山には数千年も昔の人々の生活の痕跡がのこされていたわけである。

石鐵（矢じり）は、サヌカイトという名称の語源にもなった四国は香川県（さぬき）や、齋王大来皇女の哀歌でも有名な奈良県は二上山など、産出地の限定される原石から作られた。C地区には、石鐵製作のためにその石を打ち欠いた時にできる剥片、つまり欠片が50点あまり散らばっていた。参考までに、その欠片の出土地点を遺構平面図第30～32図に黒い小三角印で示しておいた。標高111.2～110.4mのなだらかな南向き斜面に比較的集中して散布していたことが判る。一定期間、人々がそこに留まって生活をしたことは明らかである。少し東側の尾根筋（調査区外）には、あるいは住居跡などがまだあるのか

も知れない。

いずれにしても、サヌカイト原石の流通経路を含め、今後多気～松阪～一志地域の縄文時代遺跡を考える上での、貴重な材料を提供した。これが古墳群（註15）や中世墓群の裏面に隠れた横尾墳墓群のもう一つの顔である。

註15 三重県埋蔵文化財センター「横尾古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊2、1990年。

（二） 経塚の可能性

第19表にまとめたように、出土遺物には経筒外容器の筒身や白磁の合子などがあった。先の縄文土器や6～8世紀代の須恵器は別として、当墳墓群では比較的古い段階に属する遺物と考えている。少なくとも、外容器は6個体分あった。いずれも複数の箇所から出土した破片を接合した結果であり、完形のまま出土したのでも、遺構に伴って出土したのでもない。

経典を納めた筒形の容器を経筒というが、それは多くの場合、金銅製や銅製である。更にその経筒を納めたものが外容器である。これは陶器製や土製が多い。本例の場合は、後に藏骨器に転用されたのかも知れないが、ともかく経筒外容器が6個体もあったという事実から、当山には中世墓以前にまで経塚が営まれた可能性が極めて高い、と考えている。

三重県内にある経塚は約70遺跡を数えるが、ながらでも伊勢の朝熊山経塚は特に有名である。そこから出土した在銘の経筒や外容器には、保元元（1156）年から文治2（1186）年までの実年代が記されており、「12世紀後半の30年間を中心で造営されたことは明らかである」とされる。今回確認した上記外容器には銘文はないが、朝熊経塚や蓮台寺塚ノ口経塚などの年代よりも古く遡るものではなく、おおむね12世紀後葉から13世紀初頭に該当し、遅くとも13世紀前葉までの範疇には収まるものである。そしてこれが、当遺跡における中世墓の初現とどう関わるのかは、必ずしも明確ではない。「墓地全体の供養のためのもの」との解釈もあるが、それなら6個体もの外容器は多すぎはしないか、との疑問も少し生じる。なかには、個人的な信仰に発した経塚も当然

あったのではないだろうか。

ただ、残念ながら、明確な遺構として確認することは出来なかった。A地区の山頂部にあった182号墓の下層で検出したビット（個別遺構第36図）の性格が不明だったこと、同じA地区的下層で検出した土坑SK593（個別遺構第40図）の石で取り扱いのような特殊な構造が朝熊山経塚の第1型式によく似ていたことなどは、もしかしたら、経塚遺構のなごりを物語るのもであったのかも知れない。

註16 稲垣晋也「三重県伊勢市朝熊山経塚発掘ノート－経塚の構造と造営次第」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌10月号、№451、1988年』。関連して、伊勢市教育委員会『蓮台寺塚ノ口経塚群』1998年も参照。

註17 藤沢典彦「経塚」『日本考古学事典』三省堂、2002年、202～204頁)

（三） 土坑群の出現と性格

検出した土坑は合計409基（内訳A地区135基・B地区168基・C地区106基）である。地区毎の法量の平均値と傾向は本文中に述べたので繰り返さないが、いま各土坑の出土遺物の内容別に、該当する土坑数と割合を以下に纏めてみた。

横尾の出土人骨はすべて火葬骨だとの鑑定結果を得ているので、人骨出土の土坑は火葬するための土坑（火葬土坑）か、または火葬骨を葬る土壙（火葬墓）と考える。それらが併せて282基、全体の69%を占める。残り31%（127基）には人骨がなかった。すでに人骨が腐蝕して消滅したか、仮に入骨がなくても、焼土や焼石、炭化物、あるいは六文銭や副葬品などの伴出遺物によって、火葬土坑か火葬墓かの判断基準のために、土坑一覧表（第15～17表）に類型名を記した。

	A地区	B地区	C地区
焼土	59 (43.7%)	63 (37.5%)	17 (16.0%)
(焼土帯)	42 (31.1%)	20 (11.9%)	1 (0.9%)
焼石	25 (18.5%)	61 (36.3%)	56 (52.8%)
炭化物	55 (40.7%)	149 (88.7%)	102 (96.2%)
灰	2 (1.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
人骨	62 (45.9%)	129 (76.8%)	91 (85.8%)
錢貨	1 (0.7%)	29 (17.3%)	16 (15.1%)
鉄釘	4 (3.0%)	16 (9.5%)	5 (4.7%)
土器類	38 (28.1%)	14 (8.3%)	24 (22.6%)
刀子	16 (11.9%)	0 (0.0%)	1 (0.9%)

※ 整数の数値は出土した土坑（個）の数を表しているが、相互に重複してカウントされる。

この表でみる限り、茶毘に付す火葬土坑はすべての地区にあったことになる。ただA地区の場合、人骨出土の土坑の割合が他地区に比してかなり低いのは、收骨したあと火葬墓として葬られたが、時間と共に腐蝕・消滅したことを物語っている。それは六文銭に相当する錢貨や鉄釘の出土が極端に少ないと、また逆に副葬品としての供獻土器や刀子が多いことからも類推される。

次に、これら土坑をそれぞれの出土遺物の状況に応じて、仮にI類からIV類の4形態(6形式)に分類してみた。

I類土坑：強い火を受けて掘形（焼土帶）や底部などが赤く焼きしめられ、埋土中に、焼土塊・焼石・炭化物・灰・人骨などを全部または一部分含むもの。かつ中世墓関係の土器・金属製品などの遺物を一切含まないもの（A）と、その土器・金属製品のうちのどれかを含むもの（B）に細分。

II類土坑：I類のような焼土帶はないが、埋土中に、焼土塊・焼石・炭化物・灰・人骨などを全部または一部分含む。かつ中世墓関係の土器・金属製品などの遺物を一切含まないもの（A）と、その土器・金属製品のうちのどれかを含むもの（B）に細分。

III類土坑：I・II類のような焼土・焼石・炭化物・灰・人骨は一切ないが、中世墓関係の土器や金属製品の一部だけが出土するもの。

IV類土坑：I～III類のような遺物が一切何もないもの。これによって地区ごとの土坑数を下記のようにまとめた。

	A地区	B地区	C地区
I A類土坑	28基	16基	1基
I B類土坑	14基	4基	0基
II A類土坑	21基	95基	81基
II B類土坑	17基	38基	22基
III類土坑	24基	5基	0基
IV類土坑	31基	10基	2基

※ 土坑一覧表の備考欄にこの分類表記をしている。

I類は、火葬用に使われた土坑。I B類はその際の副葬品または鉄釘が遺っている状態のもの。合わせて63基ある。うち42基(66.7%)がA地区にあり、配石区画墓に覆われる以前には、A地区で茶毘に付し、A地区に葬ったことを示していた。実際、B・

C地区に比べて藏骨器のほか副葬土器や刀子が圧倒的に多いのも、その事實を裏付けている。ただ、SK 505～506やSK 510のように、明らかに火葬土坑でありながら、さして火を受けたとも思えない刀子がほぼ完存状態で出土したことから、火葬土坑をそのまま火葬墓にした例もあったと推測した。例えばA地区には243号墓（出土遺物から14世紀後半代を念頭に置いている）のように、火葬土坑SK 570をそのまま、あたかも火葬塚のように盛土して墓にした例が現実にあるからで、常に火葬の場と埋葬の場とを分けて考える必要は必ずしもなく、土坑機能の重層性も排除はできなかつた。

次に、評価の難しいのはII類で、II A類は多くの場合、火葬後に埋め戻したと推察され、I類と同じ火葬土坑と考えた。これがB・C地区に圧倒的に多いのは、両地区的性格を端的に表現していた。但し、同じII A類でも人骨だけが出土している場合は、收骨後の残余か、副葬品のない火葬墓とも見なしうる。例えばSK 470やSK 492などである。II B類は、出土遺物のパターンが多様で、最も判断が難しい。通常は焼土や焼石まで火葬骨と一緒に葬ることはないと考えるので、例えばSK 476の場合、人骨は收骨後の残余、土器破片は混入として、火葬土坑とみなした。SK 478のように、鉄釘が出土して火葬土坑であることが明白な場合にも人骨は残っていたからである。しかしSK 481の場合には、炭化物と錢貨および刀子が出土しており、人骨は消滅したと考えて火葬墓と見なした。通常錢貨は火葬時に六文銭として納めたと予想するが、それが1点しかなく、混入の可能性もある。まして刀子は副葬品であってみれば、これを火葬土坑と見なしていいかどうか迷走できない。消滅しにくい焼土・焼石を全く欠いていたからである。つまり、II B類はその内容によって火葬土坑か火葬墓かを逐一判断する必要があった。その結果は完璧ではない可能性がある。

III類土坑はSK 514やSK 527、SK 532などに見られるように、火葬骨が消滅して、副葬品だけが遺ったと解釈できる場合には、火葬墓とみなした（この場合、上層の配石区画墓と明らかに独立して存在すれば、形態上は土壙墓である）。但し、B地区のSK 623～624のように、熔解付着した古銭が出ている場

合は、火葬土坑とした。

IV類土坑は、手がかりになる遺物が一切ないので不明とせざるを得なかった。ただ、本来埋葬されていた火葬骨が消滅してしまったと考えれば、副葬品のない火葬墓を見なし得る。この場合も、配石区画墓との重複関係がなければ、形態上は土壙墓であったと考えた。ただし、全部で72基あるIII類・IV類土坑で、比較的に規模の大きい、例えばS K519・524とかS K496・516などは、土葬による土壙墓の可能性も排除はできず、火葬墓に先行するものがあつたかも知れない。

大阪泉州部の成合寺遺跡のように(註18)、出土遺物からほぼ14世紀後半で限定され、焼土坑と素掘りの土壙との機能分化が想定される土坑群とはやや違う印象があった。全体として、A地区は火葬土坑と火葬墓(土壙墓)が混在し、A地区が墓地専用になるにつれて、火葬土坑が徐々にB・C地区へと移行・増大していくと推測できる。但しその際、B・C地区の土坑には數量の割に重複するものが少なく、畢竟その分布範囲が広範囲にわたるのは、一度死人を焼いた場所を忌避したのでなければ、例えば自然災害や流行病の蔓延とか、あるいは織田軍の南伊勢侵攻(1569年)などで多数の遺体を一度に処理する必要に迫られたとか、そういう非常事態もあったからではないか、と想像した。

次に、A地区での初現はいつだろうか。手がかりとなる土器類を伴出した土坑が28%しかなく、しかも完形品が出土した土坑はわずか12基(8.9%)しかない。厳密な意味では、土坑の初現時期を捉えるのは困難であった。いま、12基の中で比較的古い完形土器が出土したのは、S K467、S K514、S K532、次いでS K494、S K561、S K572、S K592、S K599くらいである。就中、S K532は13世紀中葉～後葉の山茶碗(58)以外に出土遺物がなく、早ければ13世紀後半には出現した可能性がある(伝世期間を考慮せず)。

この他、A地区で熱残留磁化測定試料を探取したのは6基(S K501、558、567、568、570、581)ある。最も古いのはS K501で920年±150年、最も新しいのはS K567で1300年±50年と出ている。これによれば、遅くとも11世紀後半から13世紀中葉ころの間には火

葬土坑の出現はあったことになる。ただ、例えばS K570の場合、1140±70年で遅くとも13世紀前葉になるが、出土した土師器皿(破片)は14世紀中葉～後葉頃のものだった。測定者の報告にも断りがあるよう(X.附篇2)、この場合にはなお100年ほどの誤差も見積もっておく必要はあるのかも知れない。

以上、かれこれ勘案すると、早ければ12世紀末期以降13世紀代には、A地区において埋葬ないし火葬の始まった蓋然性は高いのではないかと考える。

註18 大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター編『成合寺—近畿自動車道と歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1985年

(四) 火葬施設S K558と点火次第

I A類に属する火葬土坑S K558は、縦2.8m、横1.5m、深さ0.55mを測り、個別造構第39図及び写真第7図に見るように、同じく火葬土坑と言っても、群を抜いた規模と精巧な構造に作られている。赤く焼き固まつた土の様子から、何度も使用された火葬施設と判断した。南北方向に穿たれた「溝状の通気孔」は他県の事例にも見られるが、左右6ヶ所にあるややオーバーハング気味の半球状の空洞壁面は特に火をうけており、A地区内でも特異な形態で、B・C地区に一般的な火葬土坑との差異は歴然としている。第1にその規模からみても、おそらく座棺ではなく寝棺用であったことは間違いない。火葬施設として注目される類例は、例えば安城市加美遺跡、奈良県石光山遺跡、長野県青木沢遺跡、京都府長岡京跡(S X13001)などにもあるが、横尾のS K558はそれらに比しても決して引けを取るものではない。

「天皇および女院等の御葬儀の次第書」(註19)とされる『古事次第』や『古事略儀』は、前者が「12世紀終わりごろの」、また後者は「室町時代初期ごろの」、それぞれ成立と推定されている(註20)。いま後者を参考にしながら述べる。

「棺の寸法は人に隨りて皆替わるべ」きものではあるが、先例は「長八尺三寸。廣一尺八寸。高一尺六寸。」と見える。ただでさえ郷の地の横尾にあって、高貴な人物と同等の棺が使われたり、同じ葬送の作法が実修されたとは到底考えられないが、寸法だけを單純に比較すると、その棺ならS K558には十分納まる

サイズである。北を枕に棺は置かれた。「貴所」とも呼ばれる火葬場は、大覺寺文書の「抵津尼崎墓所控」(1532年)にいう「火屋」(註21)に当るだろう。静岡県磐田市の一の谷中世墓群では側壁に柱穴をもつ233号墓火葬跡(註22)が知られているが、横尾の場合には柱穴ではなく屋根があつたかどうかまでは判らなかつた。

「まず、四角に各々薪一筋にして之を差すに、人々蓋を擧ぐ。始めに良より差して乾におよぶ。次に棺内の四面にも薪松などを差し廻る。始めの方はなし。前軸の上蔭、絶松の火を以て。御所にて燃し移したる火なり。良(北東)より始め乾(北西)におよぶ。次第に之を付く。北方には被さず。」とみえる。これは、いよいよ茶毬に付すにあたり、点火の作法を述べたもの。鬼門である艮から始めて時計回りで乾に至るまで順次点火するが、枕のある北方に火を廻すのは避けたようだ。横尾における火葬施設S K558それ自体の形状は、まさにこの都風の作法をある程度知る導師なり三昧聖のような人物が深く関わったことを示しているのではないだろうか。土坑S K558へ北枕にして納棺後、導師回向のうちに、南北の溝を除いて、東西両脇に3ヶ所ずつ計6ヶ所に薪松などを差し掛け、艮より点火したと推定したい。その6ヶ所の掘形は特に火を受けており、同時に通気孔としての機能も果たしたのである。

また、「礎を採り土を覆ひ。その後に墓を築く。石の卒塔婆を立て、釘貫を立て廻らし。松を植え。四面に溝を掘る。」と。これはあたかも『「餓鬼草紙』に描かれた墓の風景を思わせるが、横尾にもある方形周溝墓(例えば、100号墓、243号墓、461号墓など)の存在はこの「四面に溝を掘る」という造墓の手法が地方にも普及したためであろう。

S K558の熱残留磁化測定の結果は1230年±70年という幅を持つものであったが、A地区では比較的初期段階に機能した火葬施設であった可能性を指摘しておきたい。B地区的火葬土坑S K606はS K558のコピー版で、A地区的墓域が拡がり徐々にスペースがなくなるにつれて、新たに掘削されたものだろう。形は既に崩れてしまっている。恐らく作法も一層形骸化が進んだことだろうと想像する(第25図遺構平面図)。

なお、これ以外に火葬施設として特筆すべきは、

土坑S K478でも述べた「火葬用の棺台石」の存在がある。長辺1.0m、短辺0.6m、高さ0.6m大の石が2個、平坦面を掘えて据えてあつた。強い火を受けていた。本来は長辺1.2m、短辺1.0m、高さ0.6m大の平らな台状石だった可能性が高い。15世紀の中頃(文安三年)に親勝寺の僧行普が編集した『塩糞抄(あいのうしよう)』『土葬ノ事』には、「・・・凡そ葬法ニ四種アリ。諸經要集ニ云フ。葬法ニ四アリ。一二ハ水漂。二ニハ火焚。三ニハ土埋。四ニハ施林ト云云。五分律ニ云フ。若シ火ニ焼ク時ハ。石上ニ安在シテ。草土ニ得セズ。虫ヲ傷ツクルコトヲ恐ル故ニ。」(註23)と見える。この「もし火に焼く時は、石上に安在して」とある一文を彷彿とさせる台状石であつたと改めて思う。この台状石と先述のS K558との関係は判らないが、両者はA地区やB～C地区で規模の小さい單一の火葬土坑が一般化する以前に、A地区で繰り返し機能した火葬施設であったことは間違いない。この台状石を据えた土坑S K478の掘形内部から鉄釘の出土もあるところを見ると、ここに木棺を安置し、念仏回向をした後に荼毬に付して、収骨後は別の所に納骨して墳墓を築いた例があったのである(鉄釘の出土例は少ないので、釘を使った木棺の使用は横尾では少数派に属すかも知れない)。

* 火屋:はや。火葬場の異称をいい。

* 上蔭:ここでは修行年数をつんだ高僧のこと。

* 絶松:松明(たいまつ)のこと。

* 釘貫:柱を立て並べて横に貫を通した簡略な柵のこと。

註19 総群書類徒從完成会編『群書解題』第八、雜部、1982年、202～204頁。

註20 前掲『群書解題』203頁。

註21 笠松安至はかね校注『中世政治社会思想』下、196頁(日本思想大系22、岩波書店、1981年)。

註22 磐田市教育委員会編『一の谷中世墓群遺跡』1993年、本文縮2頁、写真図版編観73、参照。

註23 正宗教大編纂校訂『塩糞抄』巻第九、338頁、2006年、現代思潮新社、復刻日本古典全集(オンデマンド版)。なお本書には、「荼毬處を禪家には延寿堂と云い、自余の人は無常堂と云う」とも見えている。『諸經要集』29巻、唐の道世編、成立年不詳。仏教事典の一種で『善惡業報論』とも。五分律は南朝宋の仏陀什・竺道生等訳『亦沙塞部和醯五分律』30巻のこと、南伝律藏に最も近いという。

(五) 配石区画墓の初現

土坑の初現問題と同じように、配石区画墓の初現を確定するのも容易ではない。あくまで調査担当者の実感として言えば、A地区の山頂付近から標高の高い東尾根筋、伊勢湾を眺望する北・東側斜面には、比較的大きな石を用いた堅牢な区画にかつて盛土があったと思われる墓が多かったこと、周溝を伴う立派な墓が偏在していたことなどから、それらが他のエリアの墓より古いのではないかということである。

その意を強くした理由のひとつは、406号墓の下層で検出したS K567であった。この土坑の掘形には所謂「焼土帯」はなかったものの、土坑全体が真っ赤に焼けていた。本文中にも記したように、見逃せないのは北側に隣接した407号墓の南側石列も一緒に火を受けて焼けていたことである。つまり、407号墓のすぐ下(南側)で火葬をしたのは明白であった。A地区的細部はともかくも、全体的に見た時には、配石区画墓は標高の高い所、即ち斜面の上方から下方に向かって徐々に増築されていく傾向にあったと確信したのである。

全部ではないが同じようなことは、配石区画の切り合い関係、つまり石列配置の先後関係からもそれと見て取れる場合があった。例えば369号墓や371号墓は370号墓の南辺石列をそれぞれ一部共用して後から取付いたことは平面図からも判る(第14回遺構平面図)。同様にして、383号墓は228号墓の南辺を区画の一部に使っている。空間に余裕がある間は東西(左右)方向に増築が可能でも、隙間がなくなれば、斜面ゆえにより低い方(南側)へと増築するしかなかった。そして、数基で一つの小墓域(ブロック)を構成することもあったと考える(それが一家族ないしは親族の墓であったかどうかは、不明とせざるをえない)。

443号墓も尾根筋にある立派な墓249号墓の区画南辺に取付いた墓である(從て249号墓の方が先行する墓)。その443号墓からは既述のとおり、人骨(S X 193)を満たした転用蔵骨器である常滑産三筋壺(42)が瓦器小碗(41)を蓋にして出土した。三筋壺(42)は12世紀後半に、瓦器小碗(41)を12世紀末葉～13世紀前葉頃に比定した(小碗とはいものの、14世紀代に下る可能性もありはしないのか、いささかの逡巡もある)。転用されるには一定の時間的経過(伝

世期間)が必要である。443号墓の出現を早ければ13世紀前葉ないし前半代頃と推定した。

今、A地区的配石区画墓460基のうちで、破片も含め何らかの形で人骨以外の遺物が出土したのは85基、実に18.5%に過ぎない。このうち、完形もしくはほぼ完形の土器を埋納していたのは12基(14.1%)、全体ではたった2.6%に過ぎない。しかしこの数字には、例えば348号墓のように、重複する土坑S K532から完形の山茶碗(13世紀中葉～後葉)が出土したような例は含まれない。仮に両遺構が一体のものであれば、348号墓には13世紀後半代(～14世紀)の年代を与えることも可能かも知れない。

数少ない完形の土器から見た場合には、235号墓の渥美産壺(43)が12世紀後半、220号墓の渥美産壺(40)が12世紀末～13世紀初頭頃、山茶碗(50)が13世紀前葉～中葉頃、100号墓の青磁碗(63)13～14世紀代、などとなって比較的古い部類に属する。ただ、182号墓など20数ヶ所で出土の破片から接合復元した常滑産大甕(86)が通常の墳墓に用いられたか否かは兎も角も、それが12世紀の第4四半期のものであることを勘案すれば、伝世期間も考慮しつつ、早ければ12世紀末以降13世紀代のうちには一部の配石区画墓の初現もあったと見てよいのではないかと推測している。

(六) 配石区画墓の納骨形態

A地区に460基を数える配石区画墓のうち、遺物が何一つなかったのは178基(38.7%)、石塔は採取したが人骨も、土器片も金属製品も一切なかったのは123基(26.6%)ある。両方を合わせると301基(65.4%)にのぼる。これらは墓の形態はとるが、殆ど手がかりがない(石塔は動いている)。

人骨が出土したのは122基(26.5%)で、そのうち25基(20.5%)は2ヶ所から、8基(6.6%)は3ヶ所から人骨が出土し、4ヶ所から出土したのも1基(0.8%)だけあった。つまり122基中34基(27.9%)は人骨が複数ヶ所から出土している。また、人骨は出土しなかつたが、土器や金属器などの副葬品ないし破片が出土したのは37基(8.1%)あった。つまり159基(34.6%)については地下に被葬者に関する何らかの遺物情報を残すものである。そこから、納骨の形態にはおおよそ4タイプを抽出できるように思う。

横尾ではきちんと①蔵骨器に納まって人骨が出土したのは88号墓、208号墓、220号墓、235号墓、273号墓、364号墓、399号墓、443号墓の僅か8基（6.6%、全体では1.7%）に過ぎない。この8基には重複する下層土坑はない。

次に、②区画のほぼ中央部に、比較的に扁平な石や任意の川原石を用いて箱状（直方体）に組合わせて納骨空間を形作るタイプがある。58号墓、70号墓、109号墓、128号、351号墓、405号墓、406号墓、411号墓、423号墓などがそれに該当する（個別遺構第34図）。これらにもびつたり重複する下層土坑はなかった。

次に、③おおむね40cm内外の大きさの川原石を、平坦面を上にして据えるタイプがある。10号墓、26号墓、32号墓、85号墓、117号墓、120号墓、124号墓、125号墓、129号墓、130号墓、140号墓、150号墓、173号墓、204号墓、230号墓、231号墓、302号墓、311号墓、318号墓、319号墓、335号墓、372号墓、378号墓、425号墓などである。全てではないが、その直下または傍から人骨が出土した。人骨は土中に直接または有機質の入れ物に入れて埋納されたであろう。石は墓標を兼ねたか、もしくは石塔を据える台になった可能性もある。

更に、確認した例は少なかったが、④地輪の直下から人骨の出土したケースで、89号墓や372号墓などに見られた。例えば372号墓の場合、原位置を保つ地輪（A0691）の直下に厚さ0.06mの扁平な石（0.26m大）を蓋にして人骨（S X160）が出土した（個別遺構第34図）。地輪直下に納骨された典型的な例と言える。その他人骨だけの出土が84例あるが、うち区画内のほぼ中央部ないし中央部付近での出土は18例を数えた。そういう出土人骨の直上にも、本来は④の例のように地輪（即ち五輪塔）が据わっていた可能性がある。

配石区画墓の隅や縁辺部付近で、もしくは区画墓と区画墓との隙間や通路などで検出された人骨は、実際にはどういう意味をもつものか、明確ではない。A地区が配石区画墓で飽和状態になった後も、納骨する場所はA地区でなければならぬとする旧来の意識や慣例だけが存続し、墓制が大きく崩れるなかで、空いたところに適宜納骨（もしくは分骨）だけをするというような風習が生まれたかも知れない、と想

像した。

（七）「土饅頭」と墳丘状特殊遺構

かつて、墳墓をさして「土饅頭」（註24）と呼んだのはおそらく、覆土する際に土を半球状に盛り上げたからではないかと考える。横尾のA地区では、227号墓、235号墓、236号墓などのように、石で区画をすることなく、盛土だけの例（227号墓と236号墓には周溝がある）があり、文字通り土饅頭に相応しい形状に見えた。出土した壺の伝世期間が確定出来ないため、235号墓の築造は12世紀後半以降としか言えないが、227号墓や236号墓もふくめ、これらは比較的早い段階に属する墳墓のひとつであった可能性が高いと思う。

土饅頭の今ひとつの典型は、100号墓、182号墓、220号墓、221号墓、243号墓などであろう。このうち、100号墓、221号墓、243号墓はいずれも土坑を作つ方形周溝墓（註25）で、おそらく周溝の土を覆土として中央（土坑上部）に盛上げたことは間違いない、配石区画は土止めの役割も果たした。盛土の周囲に「釘貫を立てめぐら」せば、上述のとおり「鐵鬼草紙」にみる墳墓の姿を彷彿とさせる。182号墓や220号墓には周溝はなかったが、墳丘状の盛土があったことは断面図から看取される。前者はある時期に「納骨堂」として機能したと考えるが、その時期は明瞭ではなく、出土遺物の一番新しい時期に合わせると15世紀後葉と推測される。後者も、蔵骨器の伝世期間が判らないので推測に過ぎないが、出土した土師器皿の破片から推して14世紀末～15世紀中葉以降の築造としておく。全ての配石区画墓が土饅頭のように盛土されたのではなく、ある時期を過ぎると、区画内は比較的平坦に築造されたことは、個別遺構断面図からも判る。

さて、墳丘状特殊遺構としてここに注目すべきはB地区の461号墓（墳丘A）～464号墓（墳丘D）の4基である。これらは上記土饅頭とはやや趣が異なる。前2者には明確な墳丘と周溝がこっていたが（方形周溝墓）、後2者の場合は周溝もなく、盛土も極めて低く、下層で検出した複数の火葬土坑の存在から、それより後で築かれたことがわかるだけだった。前2者のうち、461号墓（墳丘A）は陸橋部から墳丘斜面に石の階段が設けられ、墳丘中央部に土坑

状の蘊みのあったことが断面観察で判明している(第41図土層断面図)。もしそこに大甕が埋納されていたならば、ある時期に「納骨堂」であった可能性を見いだすこともできる。当初、伝世した常滑産大甕(86)が本来はここに使われたのではないかとも考えたほどだが、証拠がない。いずれにせよ、前述京大理学部遺跡の火葬塚(SX1)や兵庫県龍野市宝林寺北遺跡の方形周溝墓(中世)、あるいは静岡県磐田市の谷中世墓群にみられたような主体部と周溝をもつ塚墓(註26)などよりは、むしろ新潟県出雲崎百塚の1号塚に見られる形状に最も近いものがある。下層で出土の土師器小皿破片(241)を仮に15世紀前半代と比定したので、それ以前に遡るのは難しいが、次の462号墓(墳丘B)よりは古い墓造と考えている。

462号墓(墳丘B)は最大の規模で、谷側を除く三方に周溝を巡らせ、墳丘上中央部の土坑S K610に常滑産大甕(92)を据えるもので、この大甕(92)は15世紀後半～16世紀初頭に比定できる。従ってそれ以降に、例えば16世紀後半で大規模な納骨堂として築造されたと考えることは許されよう。横尾中世墓群での造墓活動は長年月にわたるため、いくつかのエポックがあったと考えられるが、おそらくA地区にいよいよ造墓スペースがなくなって来た時期に築造されたこの納骨堂は、その一つの劃期を示すものであったと考えている。或いはそれが、例えば織田軍による攻撃後の出来事だとあってもなんら不思議ではないように思う。

註24 註23前掲『塙叢抄』巻第七、243頁参照(天文元年に「秋氏某北丘」の手になった『應添塙叢抄』では巻十に同文がある。)

註25 石川県の鶴崎遺跡では14世紀末～15世紀前半の周溝をもつ中世墓が著名で、報告書には全国的な類例(14遺跡15例)の分類表が示されている。新たな類例を追加することになった。石川県立埋蔵文化財センター『鶴崎遺跡』一九八六年。

註26 註22前掲書、本文編124頁、写真図版編図版114参照。

(八) 墓群と石塔の関係

出土・採取した五輪塔は部品(破片)をふくめ約1100点(計測や実測にたえないものは除外)あった。内訳は、空輪・風輪が15、空風輪298、火輪169、水輪99、地輪207、空風火輪135、水地輪48、一石五輪

塔129である。荒井勘之丞が『寄墓日記』に「其石塔誠に古代の作と相見えけれ共、文字の類少しもなく稀に梵字あり」と記すとおり、年号の判る文字には全く恵まれなかつた。1) 組立式の五輪塔と2) 一石五輪塔とに分けて述べる。

1) 松阪市矢津町にある現在の養徳寺境内に安置されていた五輪塔のなかに、「永正(二?)年」銘と「永祿十年」銘の地輪があり(註27)、前者の法量は22.4cm×19.2cm、後者の方は21.6cm×17.6cmであった。後者は永祿十二(1569)年の織田軍による大河内城攻め直前の銘である。これを一つの目安としてかれこれ勘案しつつ、第55図の地輪実測図を見たとき、大まかになるが、図の下3列(A0591からA0763)を概ね16世紀代に、上2列目から8列目(A0597からA0761)を概ね15世紀後半代を中心に比定することが可能ならば、最上段の一列目(A0592からA0723)は15世紀前半代から一部は14世紀代にも遡り得るのではないか、と考える。

2) 一石五輪塔については当初、16世紀末ごろには終息するという認識ていた。しかし近年、当センター職員の竹田憲治氏が、主として南勢地域を中心に行き五輪塔の実地調査を精力的に進めておられ(調査成果はいざれ公表されると聞く)、「奈良・大阪方面での編年觀をそのまま当地域に当ててはめるのはいささか実態にはそぐわない」との見解を筆者に示された。横尾の一石五輪塔は、①宝珠の先端部が肥大化し、②水輪部の胴回りに張りがなくなり直線化する、③地輪部が徐々に長くなっていく傾向も顕著である。同氏が調査された例えれば、三雲町觀音寺(享禄元年銘)や松阪市常教寺(永祿8年銘)、同じく森町本の田仲寺(元亀4年銘)などに残る8基ほどの一石五輪塔に近似するものは、第56図実測図で言えば、A0920、A0945、A0913、A0964ぐらいしかない。今これらを16世紀中葉～後半頃に比定し、同56図下から3列目のA0927、A0929、A0922の3基を16世紀後半～末頃に比定しておく。それ以外の諸例は、水輪部が張りを失い直線化するとともに、地輪部の縦の長さが伸びる傾向にあるもので、南勢地域では例えば松阪市淨眼寺墓地(慶長18年～19年銘)の例になれば、17世紀代にも入り得るかも知れないと結論に達した。従って、横尾では秀吉の天下になった以降にも

何らかの形で供養塔としての一石五輪塔は造立されたものと推定したい。

以上のような推定が可能ならば、「横尾中・近世墓群」としなければならないが、横尾中世墓の初現を早ければ13世紀代とみているので、ほぼ200年前後の期間、横尾には石造五輪塔のない時代があったのである。木製の卒塔婆は立っていたかも知れないが、当初から石造五輪塔が林立したと考えるのは現実的ではない。地下に埋納された12世紀～14世紀代の藏骨器関係の遺物に伝世期間を想定してもなお、その殆どの墓には石造五輪塔は伴わないので普通であった、と考える。

註27 三重県教育委員会編『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1986年3月、31頁。大河内城の西側にあった谷筋遺跡（伝養徳寺跡）の調査前に境内を訪ねた折、既にその五輪塔はそこにあり、拓本をとったものである。

（九）横尾墳墓群の存続期間（推考）

【初現時期について】具体的な遺構や所在場所の特定はできなかったが、A地区には、おおよそ12世紀後葉から13世紀初頭頃（遅くとも13世紀前葉まで）には、経塚が営まれた。そしてそれは、当山における中世墳墓の初現とほぼ時期を同じくしていた。土坑群の内容を4形態（6形式）に分けて検討した結果、12世紀末期以降遅くとも13世紀代のうちには、少例ながらA地区において埋葬（土壙墓）ないし火葬（火葬墓）の始まったことは、ほぼ間違いないと考える。しかも、遅くとも13世紀前半代以降には方形周溝墓を含む配石区画墓の初現も一部あったのではないか、というのがここまで包括的な結論である。遺物の伝世期間を考慮すれば、墓は13世紀後半代以降（14世紀にかけて）に初現があったとするのが、より確実なところである。尾根筋にあるSK532などは初期段階（13世紀後半以降）の土壙墓であったと推定でき、時期的にはそれからさほど下らず、220号墓や235号墓などの初期段階の配石区画墓も出現したのではないか、と考えている。

【土坑と配石区画墓の関係】A地区上層で確認した墓数は460基（第13表）、下層で検出の土坑（壙）は135基（第15表）であった。135基の土坑のうち、平面上、

上層の配石区画墓と重複もしくはほぼ重複するのは50基（37%）である。この中には81号墓とSK482（第35図）、100号墓とSK514（第39図）、221号墓とSK533（第21図）、243号墓とSK570（第38図）のように、両者が一体の遺構であることが明確な場合と、399号墓とSK568などのように別遺構であることが明瞭な場合がある。従って平面上重複関係にあるからと言っても両者を直ちに一体の遺構とすることはできない。重複しない土坑は85基（63%）もあり、規模も様々に連れば、いくつかに跨って重複する事が多い。もし、配石区画墓を土坑とセットで築造するなら、こういううちにはぐなことは起こらないだろう。これは、両者が同時に重複して築造されたというより、狭い範囲で偶然にそういう位置取りになったもので、真に重複する遺構は限定的であった。

なお、A地区の土坑だけを通覧した場合、遺物が何一つ出土しないIV類土坑が31基（23%）もある。手がかりは何もないが、SK488やSK490、SK536などのように小規模なものに比べると、例えばSK465、SK496、SK509、SK516、SK544などは、火葬骨を納めるだけにしてはいかにも規模が大きすぎる。これらの中には古い段階の土壙墓（土葬骨は消滅か）も一部混在したかも知れない、と想像される。

【墓域の発展と劃期】横尾で出土した人骨はすべて火葬骨であった。死者たちは当初、A地区において昆蟲に付され、その遺骨もA地区に葬られた。今、直接火葬に関係したI類・II類土坑をみると、B・C地区の土坑に比べてどれも規模が大きいか、または特殊な形状をしている。ただ、南東エリアに集中するSK571からSK599に至る土坑群（火葬土坑が中心）は、その規模や形状などからみてそれまでA地区に一般的であった土坑とは趣を異にし、むしろB地区に普遍的な土坑の始まりと位置づけた。そしてその出土遺物から判断して、その始まり（即ち、B地区型土坑への移行）はおおよそ15世紀中葉以降～後半にあつた。A地区では徐々に墓数が増大したため、その頃を境にして、火葬する場所が不足して從来のような埋葬の場所にも事欠く状況が進行しつつあったか、当地の村落共同体における葬制自体にも大きな変化があったであろう。その象徴が山頂部の「納骨堂」に比定した182号墓・183号墓の出現

ではなかつたか、と考える。

初期段階に属する墳墓はA地区の見晴らしのよい東斜面を中心に形成された。その代表的墳墓は、100号墓、220号墓、221号墓、235号墓、243号墓、あるいは227号墓、236号墓などである。中でも100号墓・221号墓・243号墓はそれぞれ土坑を作り、ほぼ同じ方向に周溝をめぐらし、かつ等間隔に一直線上に並ぶ（第17図）。上から順に古いと思うが、13世紀末以降14世紀末ころまでには収まる方形周溝墓である。221号墓の周溝の一部を切って227号墓が、更にその周溝を切って236号墓が出現するが、それがいつ頃かは基準遺物が皆無で判断できない。ただ、236号墓の周溝 S D878の埋土に混入の土師器小皿破片（238）からみて、その溝は15世紀中葉～後葉以降に埋設し始めたと想定され、両周溝墓がそれ以前の築造であることは動かない。以下、極めて大まかに墓域の発展過程を追うことにする（必ずしもこの順番に出来たという意味ではなく、あくまでも中心的造墓活動の推移傾向という程度に理解してもらいたい）。

13世紀後半以降14世紀末ないし15世紀初頭ころまでは、山頂の182号墓・183号墓に先立つ墳墓が、山頂から東斜面を中心形成されたと思う。

北尾根筋の第二テラスにある13号墓の土師器鍋（104）の評価は難しいが、仮にその伝世期間を20～30年としたなら、おおむね14世紀後半代以降には、この6段に造成されたテラスにまで墓域は拡がっていたものと考える。15～16世紀代に入ってもこのテラス上に墓の築造は続いたであろう。

14世紀～15世紀前半代を中心に、北から西部域一帯に造墓があり、また平行して14世紀後半以降15世紀代には、南側斜面にも徐々に墓域は拡大していくと考える。15世紀前葉～中葉頃にかけては、372号墓を中心とした斜面一帯に営まれる墓があり、日地区に一番近い南東側斜面には主として15世紀後半以降16世紀初頭にかけての墓が多くなっている。

16世紀代にも引き続き、尾根から南北の斜面を中心にして造墓は続けられたが、やがて新たに一区画分の墓を築造する場所が不足するようになると、古い墓と墓との隙間や、通路などを区切って墓とする例が山頂部、西部域をはじめ、特に南側斜面から南東斜面にかけての広い範囲に顕著に現われる。区画の縁

辺部や配石列の隙間など複数ヶ所から人骨の出土する例も、南側斜面から南東斜面にかけての墓域に多かった。これには、先述した自然災害や流行病の蔓延、あるいは織田軍との戦闘による一時的な大量の死者の処理などの事情が、A地区の墓域を逼迫させた背景にあると想定しておきたい。

常滑産大甕（92）を埋納していたB地区の462号墓（墳丘B）は、おそらくA地区が飽和状態になった後に築かれた新たな「納骨堂」であって、甕の伝世期間は不明だが、それは16世紀後半代であったと思う。ともかくそれが横尾中世墓のもう一つの割期であった、と考える。

【終焉】南勢地域の寺院や墓地などに現存する一石五輪塔の実地調査の成果を導入して、横尾墳墓群の一石五輪塔には一部17世紀代にも入るものがある、との教示を得たことは、上述のとおりである。現地調査段階でも気になったことは、配石区画墓の石列の一部に組み込まれた石塔が20点以上あり、145号墓や150号墓などのように、明らかに一石五輪塔が転用されているのをどう理解すればいいか、ということであった。一般民衆の信仰心や宗教意識を想像した場合に、他の墓に立っていた五輪塔を区画石に転用するには、廃絶後も一定の期間の経過を必要としたのではないか、と考えた。すなわち、戦国時代末期に使われた一石五輪塔が転用されるには、近世初頭まで待たねばならなかったのではないか、と。

A地区には墓と墓との間の僅かな隙間に人骨を埋葬している例が散見され、長大な遺跡（A～C地区）にあって、時代を経ても「納骨はあの山頂でなければならぬ」という強い観念だけが引継がれたのである。それは墓地として既に飽和状態に達した後のことでもあって、戦国時代末期以後にも納骨埋葬なり、病没者や織田軍との戦闘で犠牲になった人々への供養塔の造立などによって、命脈を保つことはあったと推測する。あるいは、堀坂山への神南備山信仰をもつ南勢地域の農民たちが、納骨に訪れる靈山としても存続することがあったのかも知れないと想像して、はなはだ粗略に過ぎるが、当該横尾墳墓群の調査報告文を閉じたいと思う。　（田阪　仁）

VII. 文献資料篇

(一) 荒井勘之丞『寄墓日記』について

旧・伊勢寺村の庄屋であった荒井勘之丞が文化12年（1815年）に著した『伊勢寺記』の中に『寄墓日記』という文章が収められている。当該中世墓に直接関係する重要な記録なので、以下に抄出して掲げておきたい。

【本文抄出】

「ここに南勢伊勢寺の里に国分尼寺の旧跡あり。是往昔一年号等知らざる也—この隣郷五十四ヶ村の憩墓所と申し伝う。

この地石塔数多くありて、草木鬱として日をもらさず。人家遠く實に寂莫として物凄き処なり。（略）

斯の如きの塔其数をしらず、林間に埋れ田辺の草根に隠れて、耕人等さわれば忽にたたりありてなやむ。又その石塔を持來り砾にいたす人多し。其中には忽にたたりありてなやむ則ち、其塔を立て念仏回向等すれば、そのなやみ即座に去る事里人の能く知る処なり。時に文化午の春ももこの地に登臨して見るに、石塔數所に半ば埋れ、或いは雪霜に朽ちて其形を失い、或いは畜類の糞にかけられ或いは田中に沈み、さまざまにして其あわれなる事こころも言も及ばず。予おもうに、此中には誰が祖先の墓、誰が前世の碑のあるべきもしがたしと有信の人に談るに、村老も予が言に隨喜して往古より捨て置きたる事を羨む。

これに依て、予両三の人を催し貴僧を侍て此林中に入り、回向を乞て共に念仏して帰る道すがらこのあわれなる事を談れば、貴僧も涙を垂て予に告いていわく、五輪は則ち仏の五体のかかる尊き物を想になすはよろしからず。且又よいの靈魂は虫と変じて、五穀の類をあらず物なりと。

然るに依て、林間に破壊したる石塔を同じ山の内七、八丁東女男坂の道の辺に集め、墓を移して自今往来の人々に念仏の回向を受ければ、靈魂成仏して五穀豊熟すべしと存ず。是然るべしと。貴僧に対して間に、貴僧のいわく、仏説の中にも一尺の塔を建れば一國の主に生るとあれば可なり。拙僧も又經供養結縁すべしと。

これに依て忽ち山主に地面を乞ひ受け貴僧を請

招し地祭して僧意にまかせ、古墓の土を持來りてこの新地に埋み石を寄て壇を作りければ、村中の老若耕作の休を以て我も我もと馳來りて一日に五輪一百、或は式百三百とよせ移す。時なる哉ときなるかな、雪中の枯木に春の花の開くが如く是迄足下にふみし塔も、今は頭上に頂礼して日々に香華を供養する。人其数をしらず、又は砾石にいたせし塔もさんげして持返す。彼は半ばにして一千五百程を移す。是皆願主の功にあらず、仏法不思議のなす処か老若ともに石塔を荷い小怪を往来するに、皆々大念佛にしてうたの声なし。小童も共に念佛して小石をはこぶ。たとえらん錢を得させたりとも、斯の如くなる事はあるべからず。予考るるに老若共に是皆有縁の石塔なり。又何某のいわく、この中の勝れたる石塔は平人の塔にはあらず。高僧又は官位の人の塔なるべし、と云々。考るるに往昔国分寺は大伽藍にて坊舍二十院なり。又北畠家繁榮にして、此辺の阿坂・大河内塔に家臣多しと聞き伝うなれば、右等の石塔にもあるべけんや。其石塔誠に古代の作と相見えけれ共、文字の類少しまなく稀に梵字あり。

（略）

○ 竜泉寺 淨土宗鎮西派 往還之南にあり。

号国分尼山本尊阿弥陀如來御長 作知れず。

そもそも当山は、往昔国分寺の一山にて能照坊と申ある其旧跡に小庵一宇のみありし處、何れの頃か横瀧寺中興開山三善上人の弟子の僧、其旧跡を再興し諸殿閣を造建し給う。本尊は則ち国分尼寺の本尊をここに移し奉るなり。依て国分尼山竜泉寺と号す。其國分尼寺は今は旧跡ばかり残れり。

○ 国分尼寺旧跡 地蔵堂より七、八丁南の山にあり。

往昔国分寺の坊舍にて、尼寺十箇寺の其一也。今廢寺と成りて旧地ばかりなり。此辺に墓の跡數カ所あり。塚の形多く五輪の石塔など林間に転び或いは埋れて其数かぞえがたし。近年其石塔を、ここより五、六丁東女男坂と云う処にて見る可し。

○ 女男坂 伊勢寺村より西野村へ越る道にあり。

此処は嫁入りの往来をいむなり。坂は南と北と分からりて谷間に細き流あり、涙水などと云々。

○ 寄墓 女男坂にあり 板行絵図弘める。

古代の石塔凡そ四千余あり、近年此処に移す。元是より五、六丁ばかり西の林中國分尼寺の旧地にあ

り、来由は巻のすえにて見る可し。

(以上、近藤豊美氏の読み下し文によった。)

(二) 女男坂と国分尼寺跡

旧県道丹生寺一志線を南下（岡山町で県道59号松阪第二環状線に合流して国道166号線に至る）すると、横瀧口交差点（四辻）から約900m前後、岡山町へ入る手前の向側池あたりがちょうどビーチになっており、道路脇を数m左へ入ったところに五輪塔の埋もれた場所がある。そのため、いつの頃からかここを称して五輪峠と言っている（第3図参照）。

上掲『寄墓日記』に見える「男女坂」とは、まさにこの五輪峠に同定して間違はない。現在、そこには火葬場があり、周囲に多数の五輪塔類が半ば埋もれた状態になっている。それを指して勘之丞は「寄墓」と呼んでいる。本文にはその石塔類を同地から西方5～6丁（約600m前後）にあったという「国分尼寺の旧地」より移したものであったことが判る。ここで、①「国分尼寺の旧地」とある、国分尼寺とは何か、②そしてそれはどこに当るのか、が問題になろう。先ずは②から見ることにする。

「林間に破壊したる石塔」のあった場所とそこから移し運ばれて形成された「寄墓」のある「男女坂」とは、東西に約600m前後（本文では約800m前後の計算になる）の距離を隔てる位置関係にあった。今、「男女坂」に同定した五輪峠を基点に地図上で当該「横尾墳墓群」の位置との関係を見ると、五輪峠に埋もれた五輪塔類は、間違いなくこの文化午歳（即ち1810年）の春に、伊勢寺村中の老若男女が、（今回「横尾墳墓群」と命名した）「林中」から「移し寄せた」ものにほかならない。そうすると、「林間に破壊したる石塔」のあった場所、即ちわれわれが調査した「横尾墳墓群」の場所或いはその付近を勘之丞は「国分尼寺旧跡」と認識していたということになる。

言うまでもなく、伊勢国の国分寺・国分尼寺は鈴鹿郡にあった。近年その一部が発掘調査され、調査成果も公表されている。しかし、「往昔国分寺は大伽藍にて坊舎二十院なり。云々」という書き方と前後のコンテキストをみれば、国分寺・国分尼寺がかつてこの伊勢寺村に在ったというのが、当村の庄屋勘之丞の歴史的認識だったのである。

当时、彼が伊勢国分寺と認識していたのは、伊勢

寺庵寺のことである（因みに現在伊勢寺庵寺跡に立てられた案内板にも伊勢国分寺跡であるとの記述があり、勘之丞の説を地元では長く伝承してきている）。これまでの部分的な発掘調査等によれば、この伊勢寺庵寺からは奈良時代後期に属する軒丸瓦のほか、蓬莱山を模した鬼面瓦、墨書き器などが出土している。ところで早く、当該庵寺の成立背景に言及したのは、御巫石部清直であった。その「太神宮寺排斥考」（『神宮神事考證』後篇所収）に言う。

「今モ飯高郡ノ西際ニ伊勢寺村アリ。一古刹ヲ存シテ國分寺トキ称ス。土俗ハコレヲ伊勢國ノ國分寺ナリト謂ヘレト、謬傳ナルコト三国地志ニ辨スルカ如シ。（略）丈六ノ佛像アリテ、伊勢寺ノ號アルヲ見レハ、是ゾ太神宮寺遷建ノ遺蹟ナラムト往テ検スルニ、正シキ徵證ハナケレト、聖武帝勅賜ノ法華經アリ、庭砌ニ古瓦ノ缺散逸ス。（略）サレハ土俗大神宮ヲ伊勢ト尊稱スレハ、伊勢寺ハ即チ太神宮寺トイフ意ナリ。諸國ノ國分寺ニ准セラレシ寺ナルヲ以テ、後世直ニ國分寺ト稱シ來レルニコゾ。是則チ太神宮寺排斥ノ遺跡ト決定シテ差ナカルヘキニヤ思惟セラルカシ。」と。

これはすなわち、『続日本紀』（以下同じ）天平神護二年七月丙子条に、「使ヲ遣ハシ丈六ノ佛像ヲ伊勢大神宮寺ニ造ラシム。」と見える伊勢大神宮寺が、崇りをなすとして後に「飯高郡度（廣）瀬山房」に移転され（寶龜三年八月甲寅条）、更に寶龜十一（780）年二月丙申条では、「神祇官言ス。伊勢ノ大神宮寺。先ニ崇リ有ルカ為メニ他處ニ遷シ建ツ。シカルニ今神郡ニ近クシテ。ソノ崇リ未タ止マズ。飯野郡ヲ除クノ外便地ニ移シ造ラントテヘリ。之ヲ許ス。」ということで、今度は神郡外への移転を余儀なくされた。つまり、勘之丞らが伊勢国分寺と認識した現在の伊勢寺庵寺こそは、この時に移転した大神宮寺の跡だと御巫翁は言うのである。

寶龜十一年、最終的に神郡外へ移転した大神宮寺の跡を現在の伊勢寺庵寺に比定することは、既に別稿でも触れたことがあり、追認する論考もある（註28）。大神宮=伊勢であり、伊勢寺という地名もここに大神宮寺が置かれていたことを反映しているのであろう。

閑話休題。大神宮寺を国分寺と認識していた勘之

丞は、セット関係にあるべき国分尼寺の所在地を当該横尾墳墓群のある山中に求めたのではないかと思う。

今回の発掘調査範囲で見るかぎり、寺院の建造物を想定・推測せしめる遺構は勿論検出していない。多数の石塔類が散乱した墓場の付近にかつての国分尼寺を想定するには何か根拠があったのだろうが、いかなる記録・伝承に基づいていたのか、今となつては知る術がない。

註28 伊藤久嗣「斎宮周辺部の古代寺院」『斎宮歴史博物館研究紀要』1、斎宮歴史博物館、1992年。

(三) 複数村による「惣墓所」

当該墓群が文化年間当時において「隣郷五十四ヶ村の惣墓所」と伝承されていたことは、注目しておかねばならない。「郷墓」(惣墓)が比較的よくのこっている奈良盆地においてさえ、例えば極楽寺墓地(御所市)では、それを形成している墓郷の数は二十二で、これが最大クラスである(註29)という。それゆえ、当初は五×四、二十ヶ村の謂ではないかと想像した

が、原文に「五十四」とある由、横尾の場合は格段に大規模な郷墓(惣墓)であったということになるが、果たして伊勢寺地区周辺だけぞれほどの「惣墓所」が成立しうるのかどうか、いまも疑問に思っている。それほど多数の隣郷村によって営まれた「惣墓所」であるとの伝承自体を否定するつもりはないが、ではその具体的な実相となると、明確に描き出すことは難しい。ただ、ここにいう「村」を近現代の社会的通念で捉えることは勿論できない(註30)。例えば平均的に「一村10家見当」と想定して、その対象範囲を櫛田川周辺の南勢地域一円にまで括げ、堀坂山への神南備信仰圏のなかのこととして考えるべき性格のものではないか、とも想像している。(田阪 仁)

註29 野崎清孝「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題」『人文地理』第二五卷第一号、1973年。

註30 末原慶二「阿蘇社領湯浦郷—阿蘇社領湯浦郷の「村」について—」(『中世成立期の社会と思想』105頁以下 参照、吉川弘文館、1991年)。

IX. 附篇（1）

三重県・横尾墳墓群出土の火葬人骨について

京都大学靈長類研究所 江原昭善

三重県教育委員会が昭和60年7月から昭和61年3月にかけて、近畿自動車道伊勢線延長工事建設に関連して横尾墳墓群（松阪市伊勢寺町字横尾の山中）の発掘調査を行なった。その際、多数の中世火葬人骨が出土した。

[出土状況]

報告書によると、上記の遺跡は4基の古墳（E・F区。7世紀前葉～中葉の築造と推定）と中世墓群とからなる。さらには中世墓群については、12世紀後半から13世紀前半の間に营造が始まり、16世紀末頃まで続いたらしい。その分布はA～D区だけに限られず、C～D区の南東調査区外にも広がっていることも確認されている。今回、A～C区（5,600m²）から出土した人骨について、その同定結果を報告する。

この中世墓群は、大きく配石区画墓・埴丘墓・土壙に分けることができ、とくに土壙群では火葬施設として利用された痕跡が濃厚で、調査担当者（宮田・田坂）によれば「當中世墓が基本的に火葬であったことを物語っている」という。

たしかに出土人骨はすべて火葬に付されており、その総数は同定によれば557個体であるが、実際には多少の変動はあるかもしれない。それというのも、人骨はすべて碎片化しており、形態特徴に基づく個体識別是不可能で、ひとまとめりが1個体分だとする以外にすべがない。さらに、出土状態からみても、「墓の一単位を明確にし得ぬほどに石が重複散乱し、骨の出土状況からみても、墓のうえに墓をつくったとしかいよいのない墓域さえあった」（上記担当者）し、近世の記録（荒井勘之丞「伊勢寺記」）のなかの「寄墓日記」（文化12年）によると、灾害供養のため墓域の一部が移動のため攪乱されたことも明白である。これらのことから、散逸や混入がなかったとはいえないからである。

当資料は、考古学的には価値の高いものではあるが、出土人骨の形態特徴を基にして論ぜるという観

点からすれば、上記のような不利な条件に加えて、すべて焼骨であり、さらには人为的に破碎された痕跡もあり、悲観的である。一般に焼骨は収縮や変形をともない、時代的・地域的特徴や形態特徴を読み取ることは不可能で、性別や年齢別もつけにくいかからである。

[人骨保存状況]

保存状況の目安として、各1個体分とみられる人骨について、その残存量を基にして、

比較的多くの骨片を含むもの	a
少量のもの	b
ごく少量のもの	c

に分類してみた。すでに述べたように、当資料はすべて焼骨であり、かつ碎片化していることから骨質の保存状況は無視してよいからである。

その結果、A区上層・A区下層・B区・C区を通じて総数557個体が認められた。A区上層からの出土数がもっとも多く、206体、36.98パーセント、次いでA区下層が146体26.21パーセント、B区は134体、24.06パーセント、C区はもっとも少なく71体、12.75パーセントである（第1表）。

人骨保存（残存）状況は、A区上層およびB区およびC区ではcが多いが、A区下層では逆にbが多く、その分だけcが少ない。前3者は後者に比べて擾乱をより大きく受けたのであろう。

それによれば、A区下層は他に比べて、bが多いことが目立つ。A区上層は人骨の消失が他区よりも著しいことがわかる。

[性別・年齢別分類]

性別・年齢別の分類を試みたのが、第3表である。

性決定は悲観的ではあるが、眉上弓Arcus superciliarisや眼窓上弓 Arcus supraorbitalis、外後頭隆起Protuberantia occipitalis externaや才トガイ隆起 Protuberantia mentalisの一部が残存していることがある。その場合には、かなり正確に性決定が可能であった。上腕骨遠位端の形状も、この部類に含まれる。しかし長管骨片の筋附着部たとえば大腿骨粗線 Crista femorisにみられる発達の程度などからは、あまり正確に判定することはできなかつた。したがって、これらに基づいた性判定も試みて、一応数字はあげてあるが、信頼度は低い。いざれに

せよ、この種の資料では、性の判定はあまり大きな意味をもつとは思われない。

年齢については、この資料が土葬骨であれば、平均死亡年齢が算出出来て興味のあるところだが、細分は困難であるゆえ、成人以前と以後に分類した。しかしながら成人以前といつても、幼・少年期のものは火葬に付した場合、骨が残存することはむづかしいのが実情である。したがって成人以前とはいっても、Juvenile後期のものに限られた。性の判定が不可能なものでは、当然のことながら年齢の決定も出来ないものが多く、各区を通じて484個体中、179個体（37.0パーセント）がこれに該当する。

中世では幼児死亡率が著しく高率だったといわれるが、おそらく本資料数に倍する幼児死亡があったに違いない。しかし残酷なことに本資料ではそれを明らかにすることが出来なかつた。

[今後の問題]

出土した人骨はすべて、完全な部分がないほどに破碎され、しかも大半が散逸・消失している。それが擾乱によるものとすれば、擾乱を受けていないと思われるA区下層出土の人骨についてみても、たしかに散逸・消失の程度はやや少ないが（第1表～3表参照）、全体として大差があるとはいえない。

一般に、火葬骨を藏骨器に収納する場合、その焼骨は人為的に破碎される。その際、たとえば藏骨器が木製や植物性の籠のようなものであれば、残らないことが多い。あるいは、火葬後に藏骨器に収納すると否とにかかわらず、破碎する習わしだけが残った可能性もある。実際にそのようなことがあったのだろうか。「土に返す」という信仰から、現代でものようにしている、関西の都市郊外のある墓地を筆者は経験している。したがって土俗的・民俗学的に検討してみる必要があろう。

人骨調査中に、偶然1個の長管骨破片に鼠害らしきものがあるのを見つけた。これがもし鼠の齧痕ならば、土葬した後に焼かれたと考えられる。その理由として、火葬以前の古い土葬人骨の一部が、後世の火葬時に混じり込んだ二次的なものかもしれない。しかし、後日、改めてくわしく調べた結果、鼠害とは断定するまでにはいたらなかった。筆者は、愛知県下で、ほぼ同時期の多くの遺跡で出土した土葬人

骨に鼠害例が多い事実に見慣れ過ぎていたためかもしない。将来、同じような事例があったときのために、記録に留めておきたい。

約400年にわたり営まれた横尾墳墓群のその時期は、中世から近世にむかう動乱期でもあった。その横尾墳墓群の背景には、近世の記録（上掲、荒井勘之丞「伊勢寺記」のなかの「寄墓日記」、文化12年）の伝承にもあるように、「往昔郡五十四ヶ村の惣墓所」だったのだろう。いずれも比較的平穏で安定した家族主義的村落だったがたがしのばれる。

偶然残存した下顎骨前面片にオトガイ舌骨筋の付着部の結節Spina musculi genioglossiがみられ、その形状もよく似ている。この特徴は中世人骨では比較的頻度の低いものであるが、3個体で発見されている。かれらは同族のものであったかもしれない。

それにしても、伊勢湾・知多湾・渥美湾とそれに接する内陸部一帯を俯瞰するとき、火葬や土葬の習俗、つまり宗教的・文化的に異なる文化圏がかなり複雑に入り組んでいたことがうかがわれ、その分布を明らかにしていくことは、宗教学的にはもちろん、民俗学的にも興味のあるところである。それぞれの事例報告もかなりの量に達しているはずゆえ、改めてこのような観点からの分布を吟味することも、ある程度可能であろう。

	a n (%)	b n (%)	c n (%)	計 n (%)
A区上層	3 (1.46)	89 (43.20)	114 (55.34)	206 (36.98)
A区下層	1 (0.68)	135 (92.47)	10 (6.85)	146 (26.21)
B区	0 (0.00)	55 (41.04)	79 (58.96)	134 (24.06)
C区	0 (0.00)	28 (39.44)	43 (60.56)	71 (12.75)
計	4 (0.72)	307 (55.12)	246 (44.17)	557

第1表 各墓域ごとの人骨保存状況

	a n (%)	b n (%)	c n (%)	計 n (%)
A区上層	3 (75.00)	89 (29.00)	114 (46.34)	206 (36.98)
A区下層	1 (25.00)	135 (43.97)	10 (4.07)	146 (26.21)
B区	0 (0.00)	55 (17.92)	79 (32.11)	134 (24.06)
C区	0 (0.00)	28 (9.12)	43 (17.48)	71 (12.75)
計	4	307	246	557

第2表 人骨保存状況（各墓域間における比較）

	性不明			推定		♂	♀	計			
	未成人	成人	年齢 不明	成人	成人						
				年齢 不明	成年						
A区上層	0	111	69	6	6	13	1	206			
A区下層	5	82	25	15	7	10	2	145			
B区	1	77	46	2	2	1	1	134			
C区	1	28	39	2	1	0	0	71			
計	7	298	179	25	16	24	4	556			

第3表 性・年令別分類表

X. 附篇（2）

横尾墳墓群の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫
吉村勝之
森定尚

はじめに

地磁気の方向は場所によって違つており、しかも、その方向をゆっくりと変えているので、同一地点でも時代によって地磁気の方向は違つておる。この地磁気のゆっくりとした時間的変化を地磁気永年変化と呼んでおる。日本で地磁気の偏角・伏角を直接観測した最も古い記録は、1883年のものであり、世界でも、ロンドンの1580年頃の記録まで遡れるだけである。高々400年余りしか記録がない。

一方、土には Fe_3O_4 （磁鉄鉱）や Fe_2O_3 （赤鉄鉱）などの鉄酸化物が1～3%程度含まれておる。これらは磁気テープの材料と同じ仲間で、磁石になる（磁化をもつ）ことができる磁性鉱物である。磁性鉱物を高温にまで加熱すると、それぞれの鉱物に固有の或温度以上では磁性（磁石になる性質）を失う。この温度をキューリー点といふ。磁鉄鉱のキューリー点は578°C、赤鉄鉱は670°Cである。磁場が作用している場所で、キューリー点以上の高温で磁性を失つた状態から磁性鉱物を冷却すると、キューリー点の温度に達した瞬間に、再び磁性が蘇り、作用している磁場の方向に磁化を獲得する。この磁化を熱残留磁化といふ。遺跡に残る窯跡や炉跡、焼土坑などの焼土は、かつて、昔の人が火を焚き高温に熱した後、地球磁場中で冷てておるので、当時の地球磁場の方向の熱残留磁化を持っており、昔の地磁気を記録している磁気テープなのである。過去の地磁気の化石であるともいえる。

時代のよく分かつたこのような焼土の熱残留磁化を測定すると、観測記録がなかつた古い時代の地磁気の方向を知ることができる。西南日本各地の遺跡の焼土の熱残留磁化を測定した結果、過去2000年間について、地磁気永年変化の様子が相当詳しく分かつてきた（Hirooka, 1971；広岡, 1977）。考古遺跡の焼土の熱残留磁化の測定から明らかになつた、歴史・

考古時代の地磁気変動を考古地磁気永年変化といふ。

遺跡焼土の熱残留磁化方向を西南日本の過去2000年間の考古磁気永年変化と照合して、永年変化曲線のどの年代の部分に近い磁化方向であるかを調べると、その焼土が焼かれた年代を決めることができる。これが考古地磁気法である。

測定試料の採取

地球磁場の方向の永年変化は、過去2000年間に最大でも約30°しか変わらない小さなもののため、最初に焼土を試料として採取するときの焼土の向きが、遺構の中でどのようになっていたかを知る方位測定の精度が、年代推定の精度を左右する。したがつて、できるだけ高精度の全方位試料を採取する事が望ましい。しかし、1個の試料に何時間も要するようでは実用にならない。高精度で短時間で試料採取ができるなければならない。

現在、私たちの研究室で用いている試料採取法は、次のような手順で行なわれている。

- 1) よく焼けた部分を選び、動かないように注意しながら、こぶし大の焼土の周りに深さ数cmの溝を掘り、試料とする焼土を削りだす。
 - 2) 削りだした焼土に石膏をかけて固め、表面に石膏の平面を作る。
 - 3) 石膏平面の最大傾斜線の方位と傾斜角を測定し、方位を示すマークを平面上に記入する。このときの方位測定の精度が年代に大きく響くので、できるだけ精密に測らなければならぬ。方位の測定には考古地磁気試料の採取用に特別に設計された改造クリノメータを用いている。
 - 4) 石膏で固めた焼土試料を遺構から切り離す。
 - 5) 切り離した試料の裏面を石膏で覆い、紙に包んで研究室に持ち帰る。このような試料を1つの遺構から十数個採取する。熱残留磁化を測定する磁力計は、34mm×34mm×34mmの立方体の試料を測るよう設計されているので、方位の測定を行なった平面を基準にして、その大きさの立方体に、ダイヤモンド・カッターで切断、整形する。もちろん、切断面は測定中にくずれないように薄い石膏で覆い補強しておく。
- 今回の横尾墳墓群では、A地区6箇所、B地区2箇所の土坑から試料を得た。採取試料の総数は84個

にのぼる。各遺構の採取試料個数および試料番号は次の通りである。

A地区

- S K 570 : 11 個 (試料番号 C 1 11 ~ 21)
S K 501 : 10 個 (試料番号 C 1 1 ~ 10)
S K 567 : 10 個 (試料番号 C 1 71 ~ 80)
S K 568 : 11 個 (試料番号 C 1 41 ~ 51)
S K 558 : 10 個 (試料番号 C 1 31 ~ 40)
S K 581 : 11 個 (試料番号 C 1 81 ~ 91)

B地区

- S K 664 : 10 個 (試料番号 C 1 101 ~ 110)
S K 608 : 11 個 (試料番号 C 1 111 ~ 121)

熱残留磁化の測定

測定試料の残留磁化は夏原技研製リング・コア型スピナーマ力計 (S MM85型) を用いて測定した。残留磁化測定の結果得られた個々の試料の偏角、伏角、磁化強度は、第4~11表に示されている。磁化ベクトルを水平面に投影した水平分力が真北からずれている角度を偏角といい、東にずれるのを正にとる。伏角は磁化ベクトルが水平面からどれくらい下に傾いているかを示す角度である。過去2000年間に、偏角は-18° (西偏) から+15° (東偏) の間で変化し、伏角は35° から60° の間で変っている。表中に*印のついている試料は、磁化方向が同じサンプルから得られた残りの測定試料と磁化方向が大きく異なっているために、次に述べる平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したものであることを示す。A地区の土坑 S K 501の結果を見ると、統計計算の時に除外したサンプルが多いことが分かる。また、磁化強度は、通常のよく焼けた陶器の窯跡の場合は 10^3 emu/gのオーダーであるのに対して、2桁弱い。

各遺構毎に、フッシャーの統計法 (Fisher, 1953) を用いて、平均偏角、平均伏角、95% レベルの信頼角 (α_{95})、精度変数 (K) を計算し、考古地磁気データとする。今回の測定で得られた横尾墳墓群の考古地磁気データは、第12表にまとめられている。

考古地磁気年代は、各遺構の平均偏角、平均伏角および α_{95} を、考古地磁気永年変化の標準曲線に記入し、その図から求める。この時、用いた標準曲線が過去の地磁気の永年変化を忠実に表わしているという前提に立っているので、もし、本当の地磁気の変

動がこの標準曲線と違っていたら、その違いの分だけ年代がずれることになる。13世紀から17世紀に関してはその可能性があり、数十年から百年程度推定年代が古すぎるのではないかという指摘がなされている。これは、この時代の年代の確かなデータが少ないことに起因していて、今後に残された問題である。したがって、今回得られた年代値も数十年から百年後へずれることが有り得る。

第1、2図に考古地磁気永年変化曲線と今回の測定結果が示してある。

考古地磁気推定年代

用いた考古地磁気永年変化曲線が正しいという仮定に立って、第1、2図から各土坑の考古地磁気年代を推定すると次のようになる。

A地区

- S K 570 : A.D. 700±100年
(又はA.D. 1140±70年)
S K 501 : A.D. 920±150年
S K 567 : A.D. 1300+50年
-100年
S K 568 : A.D. 1240±50年
S K 558 : A.D. 1230±70年
S K 581 : A.D. 1150±80年

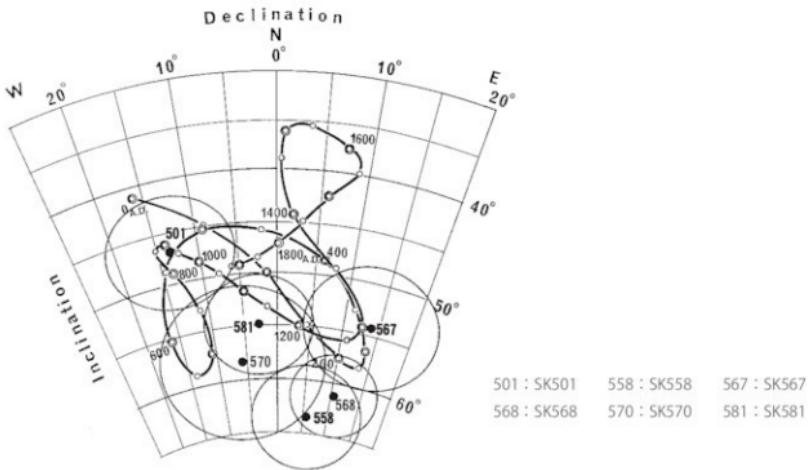
B地区

- S K 668 : A.D. 1210±140年
S K 608 : A.D. 1370+60年
-370年

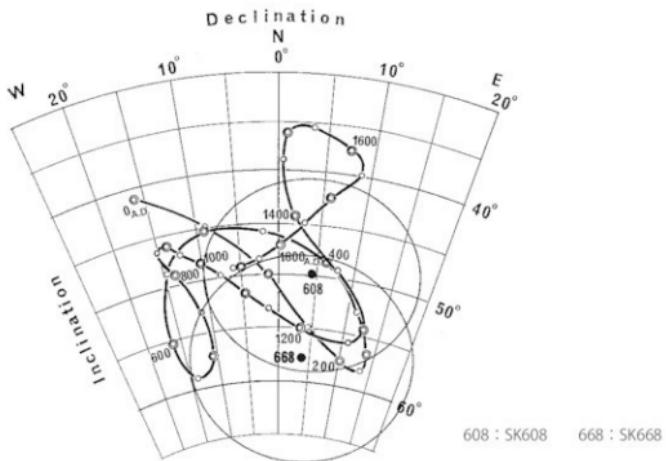
磁化方向のばらつきが非常に大きかったので、推定年代の幅が大きくなったり。また、SK 501では、偏角が大きく西偏し、伏角が浅いので、考古地磁気学的には10世紀の年代になる。

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀考古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究, vol. 15, 200-203.



第1図 西南日本の過去2,000年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群A地区の考古地磁気測定結果



第2図 西南日本の過去2,000年間の考古地磁気永年変化と横尾墳墓群B地区の考古地磁気測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 11	-19.9	67.6	1.74
12	0.2	74.0	1.53
13	-8.9	48.4	1.20
14	-6.8	54.0	7.90
15	-10.6	40.1	0.488
16	-14.5	56.1	1.63
17	-16.0	51.8	1.16
18	-15	58.6	0.224
* 19	-7.05	73.8	0.667
20	28.3	62.6	0.953
21	5.4	64.6	1.06

*印は統計計算の際に除外したもの

第4表 A 地区 SK 570 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 * 1	-35.4	35.6	1.39
* 2	-21.4	28.7	1.80
3	-8.3	50.8	12.50
4	-19.6	43.2	1.61
5	-13.1	46.3	4.08
6	-18.5	43.6	1.59
7	-19.3	44.5	5.10
8	1.1	52.0	78.20
* 9	-38.3	28.3	4.19
* 10	144.2	24.7	4.17

*印は統計計算の際に除外したもの

第5表 A 地区 SK 501 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 71	1.2	56.5	9.97
72	-4.1	53.9	11.90
73	-5.8	55.1	9.41
74	19.3	39.4	8.63
75	14.6	48.3	14.40
76	16.1	48.6	4.11
77	16.9	59.4	8.04
78	26.2	57.3	3.57
79	31.6	58.5	5.18
80	25.9	59.3	5.84

第6表 A 地区 SK 567 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 41	12.9	51.1	2.49
42	4.9	61.9	7.30
43	18.4	55.5	7.76
44	13.3	64.7	5.45
45	-2.8	65.7	3.65
46	10.5	61.3	6.86
47	-2.2	59.7	4.95
48	13.9	72.6	2.55
49	6.5	58.9	1.61
50	15.4	62.3	4.20
51	21.5	57.4	6.41

第7表 A 地区 SK 568 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 31	10.7	56.1	96.5
32	-4.5	60.3	3.75
33	28.6	60.8	0.728
34	15.6	62.1	4.82
35	7.4	67.4	4.14
36	-5.4	70.2	3.9
37	-20.4	73.9	6.41
38	0.2	60.5	3.87
39	-1.5	61.0	15.6
40	12.9	57.6	95.1

第8表 A 地区 SK 558 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 81	10.8	49.3	17.8
82	16.9	52.0	7.84
* 83	31.5	75.4	3.32
84	2.2	48.9	2.69
85	-9.5	56.9	4.79
86	-16.1	54.8	1.42
87	-14.3	53.6	2.13
88	-7.1	58.1	5.18
89	-7.8	60.3	5.23
90	9.1	57.1	6.11
91	-14.4	52.7	2.64

第9表 A 地区 SK 581 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 101	27.2	53.6	3.30
102	8.4	58.1	6.68
103	-10.8	41.7	5.13
104	0.5	56.5	5.87
105	-8.4	65.3	10.3
106	-21.1	68.1	9.23
107	27.4	33.7	2.38
108	-32.7	57.1	5.39
109	2.6	59.0	21.9
110	33.7	67.3	7.40

第10表 B 地区 SK 668 の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
C 1 111	1.5	42.5	4.00
112	1.4	45.7	31.40
113	7.9	47.1	7.86
114	-15.2	38.5	3.57
115	9.8	45.2	3.90
116	14.9	47.0	3.60
117	-30.8	38.1	5.97
118	24.5	56.6	11.90
* 119	-166.8	-4.0	2.33
120	24.7	67.1	4.46
121	29.2	56.8	6.35

*印は統計計算の際に除外したもの

第11表 B 地区 SK 608 の磁化測定結果

遺構名	N	D (° E)	I (°)	α_{mz} (°)	K	平均磁化強度 (×10 ⁻³ emu/g)
A地区 SK 570	10	-5.7	58.4	72.4	45.4	1.79
SK 501	6	-13.4	47.0	5.50	149.1	17.2
SK 567	10	14.1	54.2	5.88	68.2	8.11
SK 568	11	10.5	61.2	3.84	141.5	4.84
SK 558	10	5.9	63.5	4.83	100.7	23.5
SK 581	10	-2.7	54.9	4.74	104.4	5.60
B地区 SK 665	10	3.8	57.8	9.75	25.4	7.76
SK 608	10	4.4	49.8	9.26	28.1	8.30

第12表 横尾墳墓群の考古地磁気測定結果

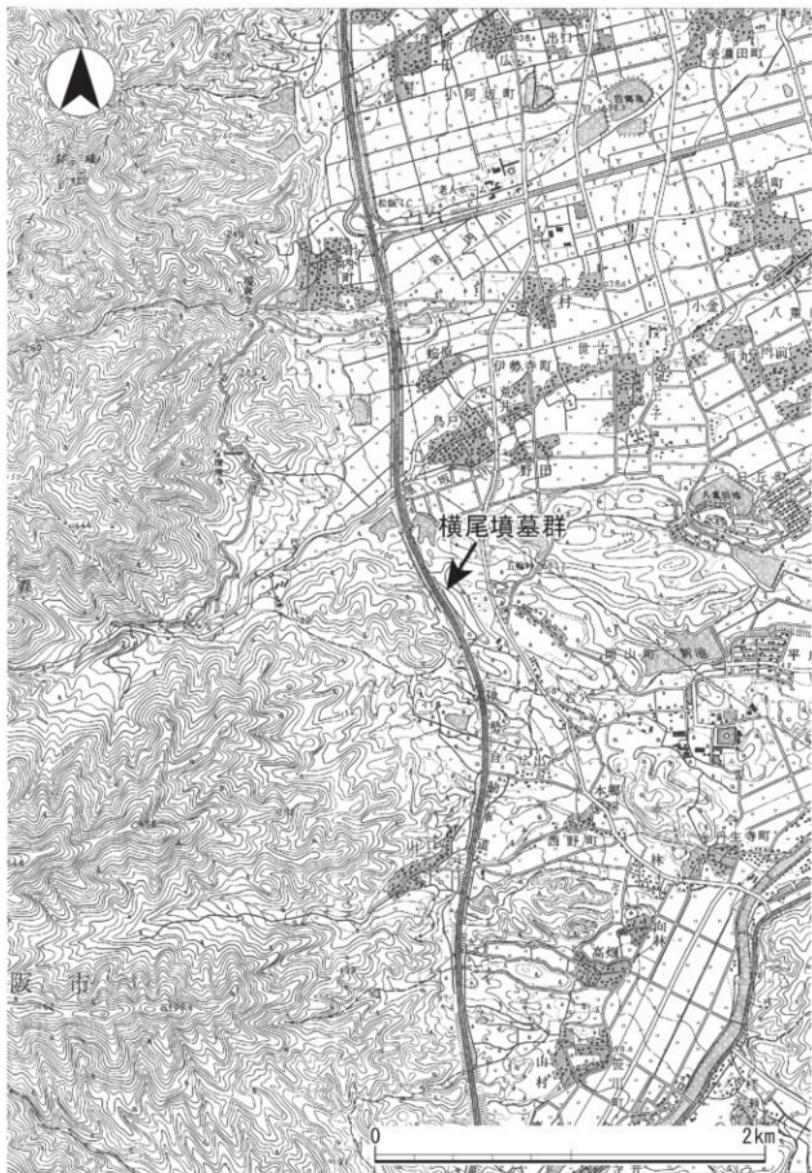
【発掘調査担当者からのお詫び】

附編（1）出土人骨の鑑定については、京都大学獣長類研究所の江原昭善教授（当時）に依頼をし、お手数を煩わせたことを記して感謝申し上げる。旧稿をそのまま掲載させて戴いたこと、報告本文中にその成果を十分生かし切れなかつたことをお断り致して、お詫び申し上げたい。

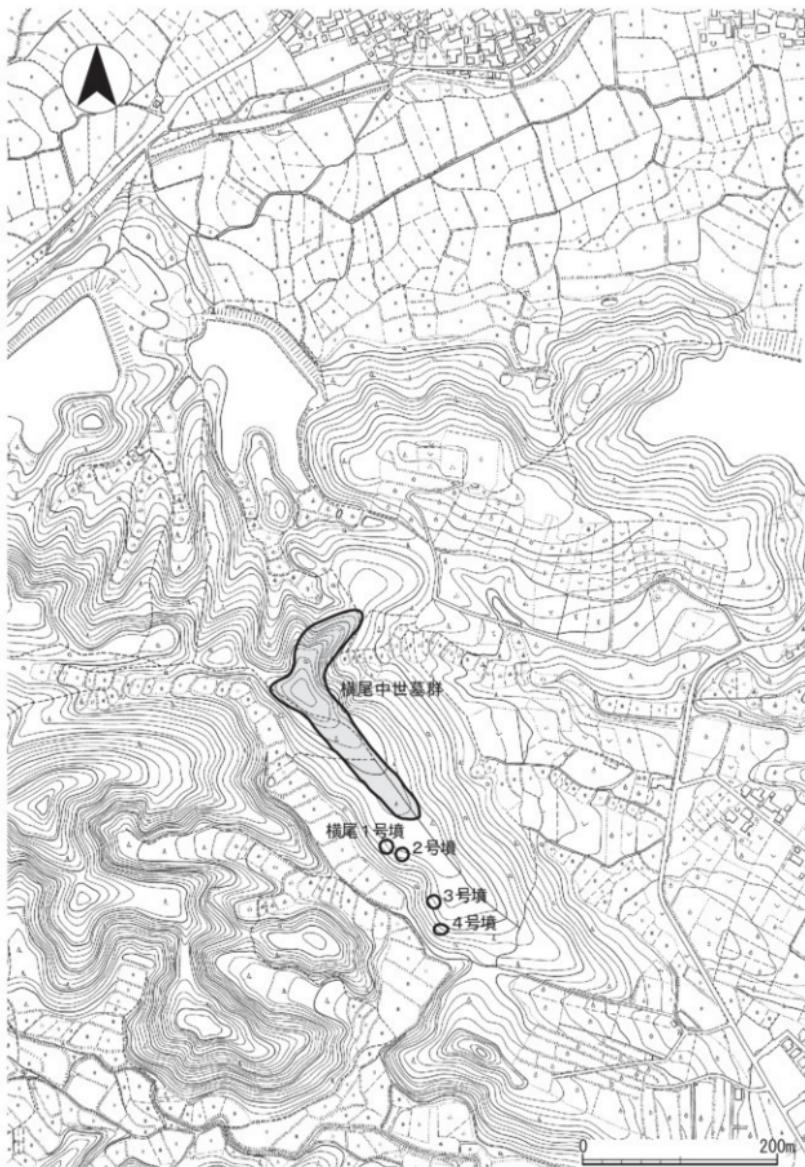
附編（2）熱残留磁化測定に先立つ試料採取は、現地発掘調査中に実施できず、現地調査終了後、さらに一年近く放置した場所での試料採取であった。従つて、厳密には必ずしも良好な試料ではないことをわれわれ関係者も十分に承知の上で、敢えて富山大学の広岡公夫教授に依頼したものである。そのことをここに併記して感謝申し上げたい。なお、遺構番号だけは今回新たな報告書番号に換えさせていただいた。即ち、

S K2→S K570、S K10→S K501、S K30→S K507、
S K35→S K508、S K36→S K509、S K45→S K581、
S K33→S K608、S K141→S K608 である。

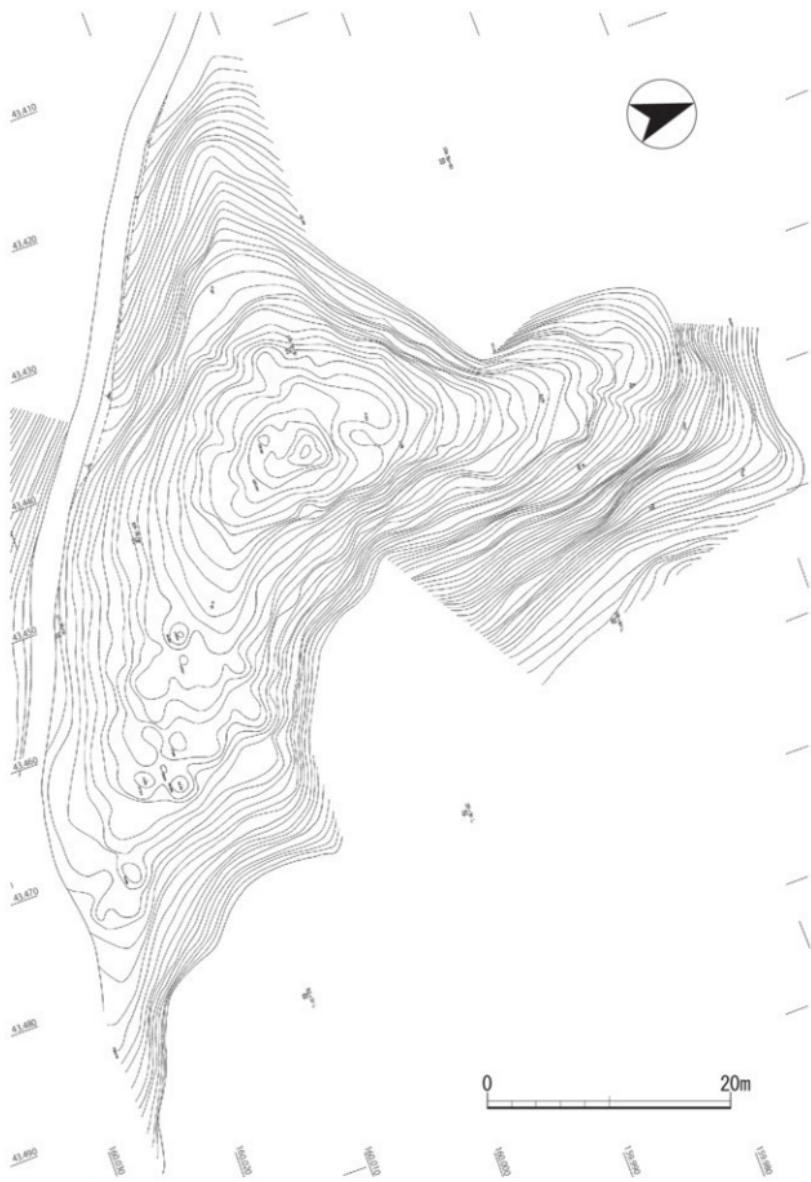
(田阪・宮田)



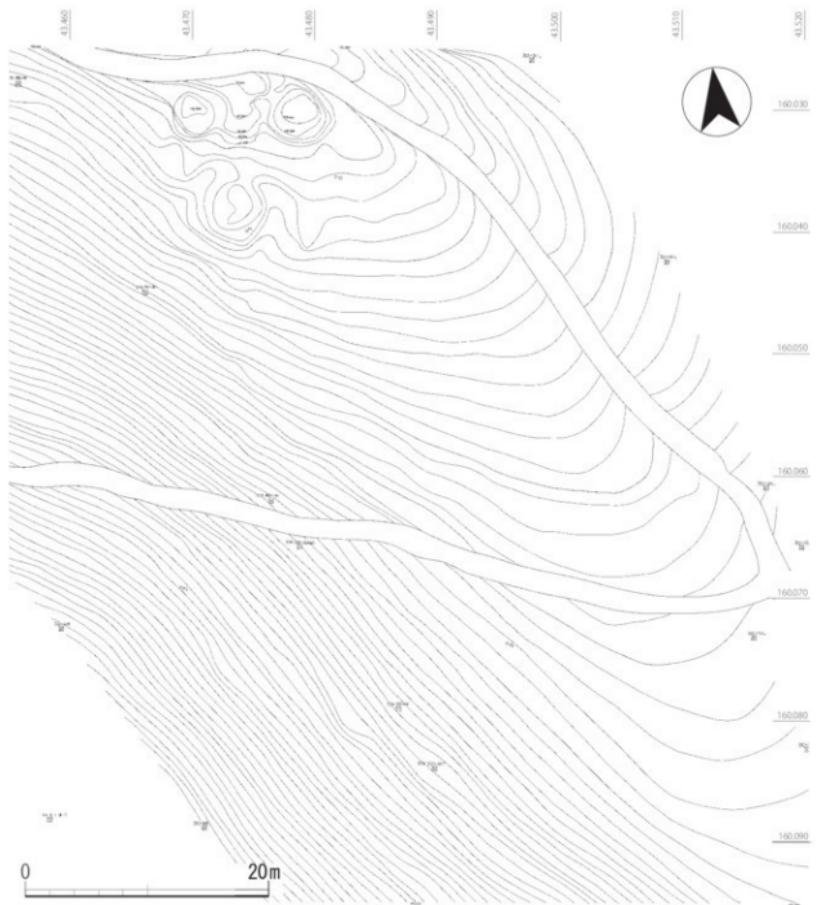
第3図 横尾墳墓群遺跡位置図（1：2,500）



第4図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

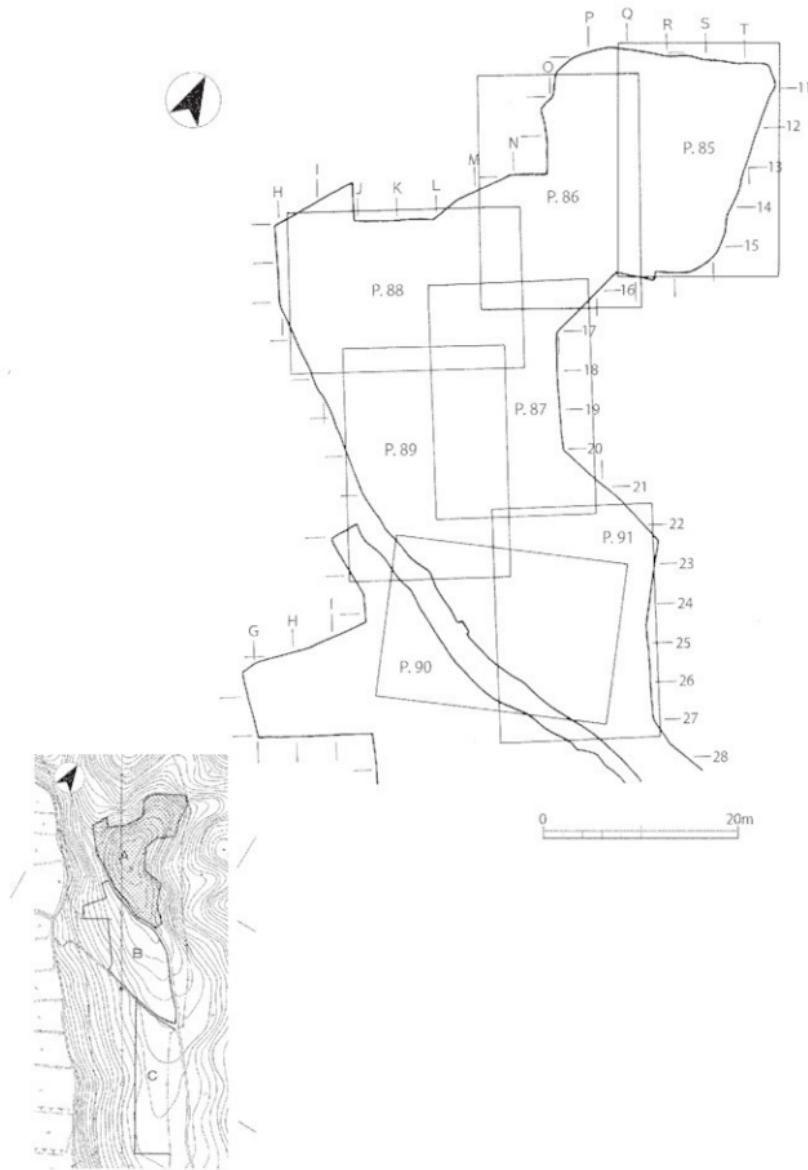


第5図 調査前地形測量図（A地区）



第6図 調査前地形測量図(B地区)

第7図 調査前地形測量図(C地区)



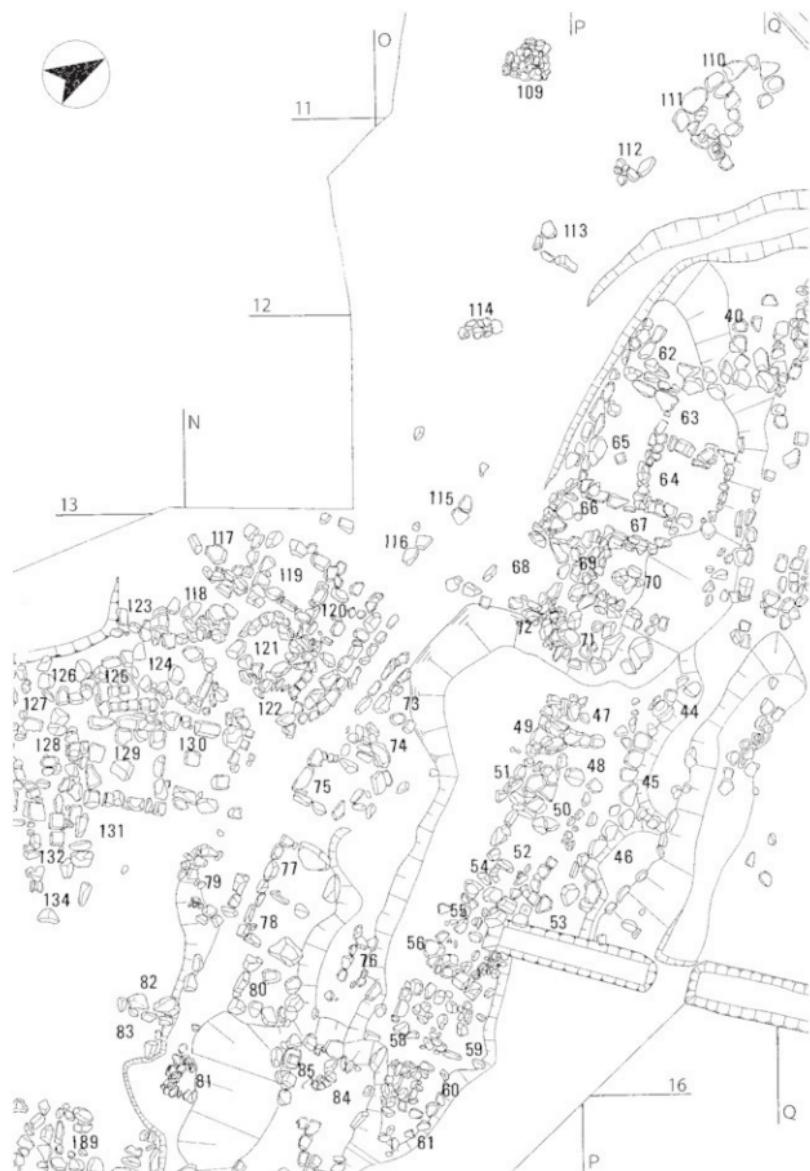
第8図 A地区上層遺構平面図区割り図



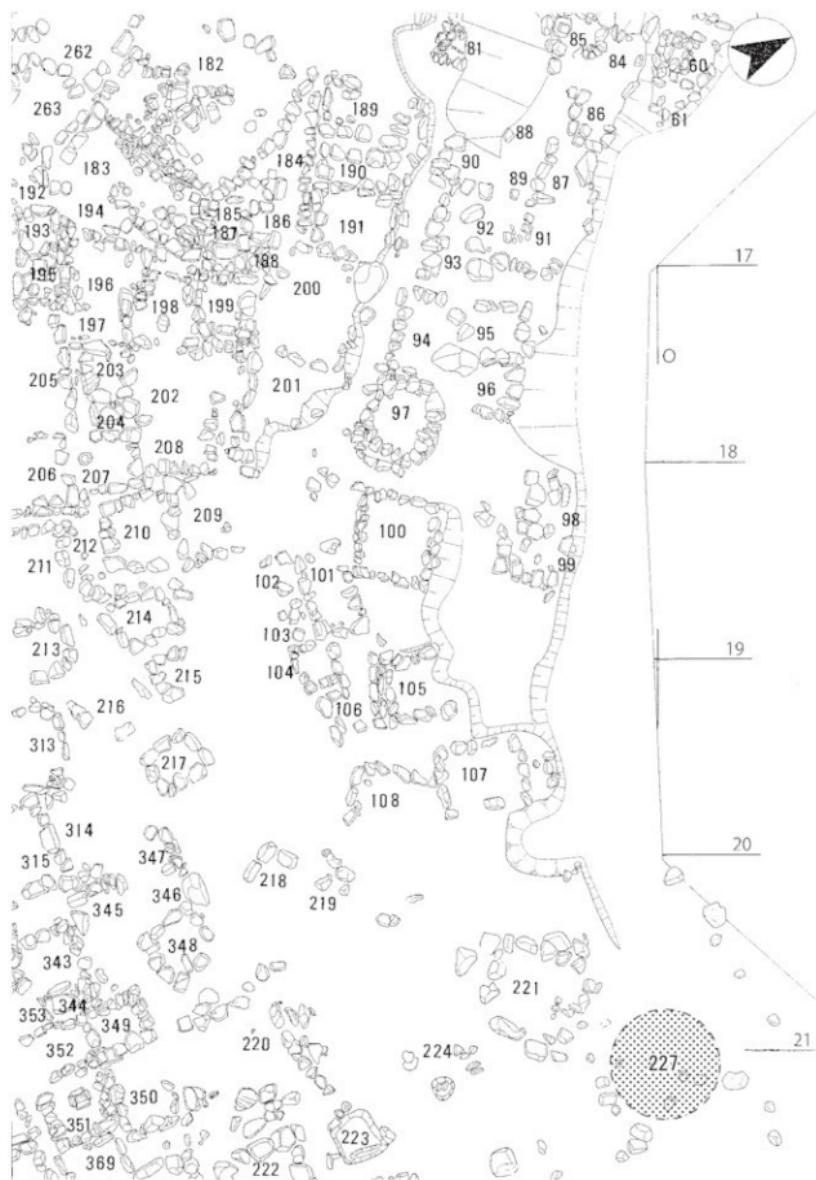
第9図 A地区上層全体遺構平面図 (1:200)



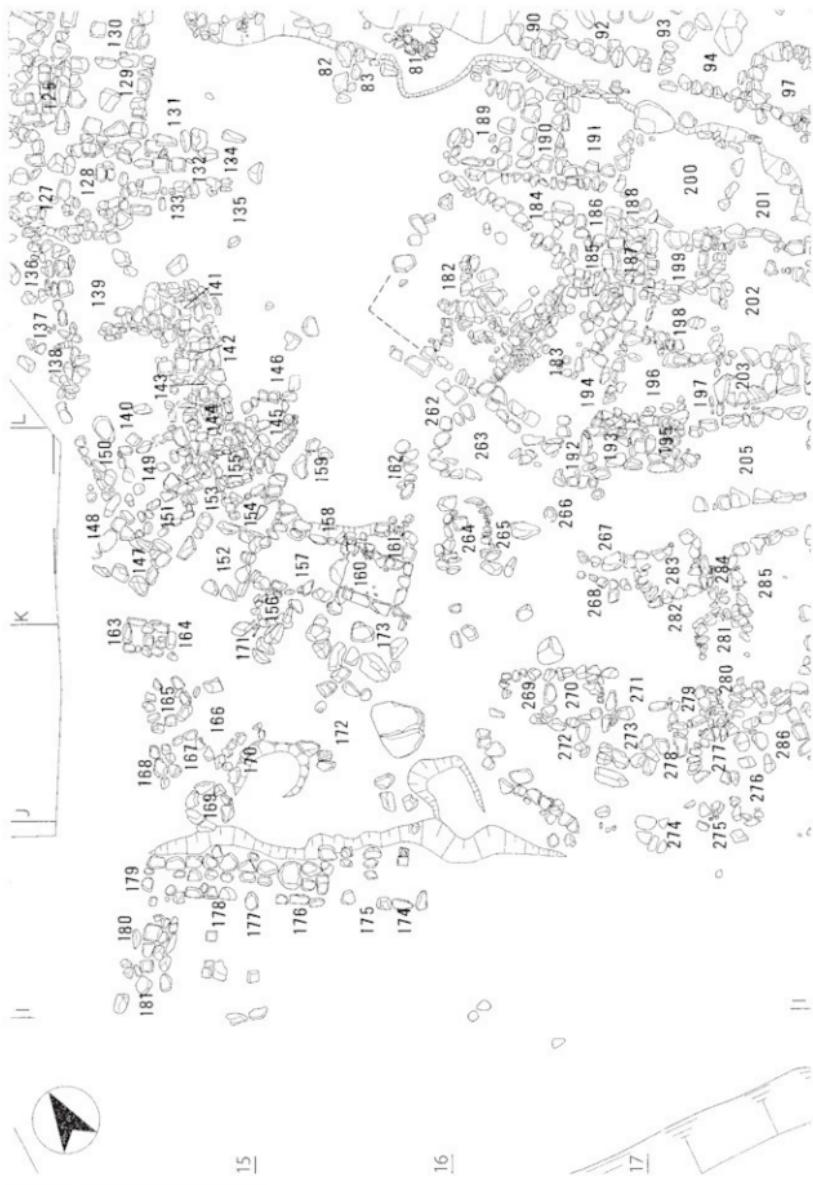
第10図 A地区上層部分遺構平面図



第 11 図 A 地区上層部分遺構平面図



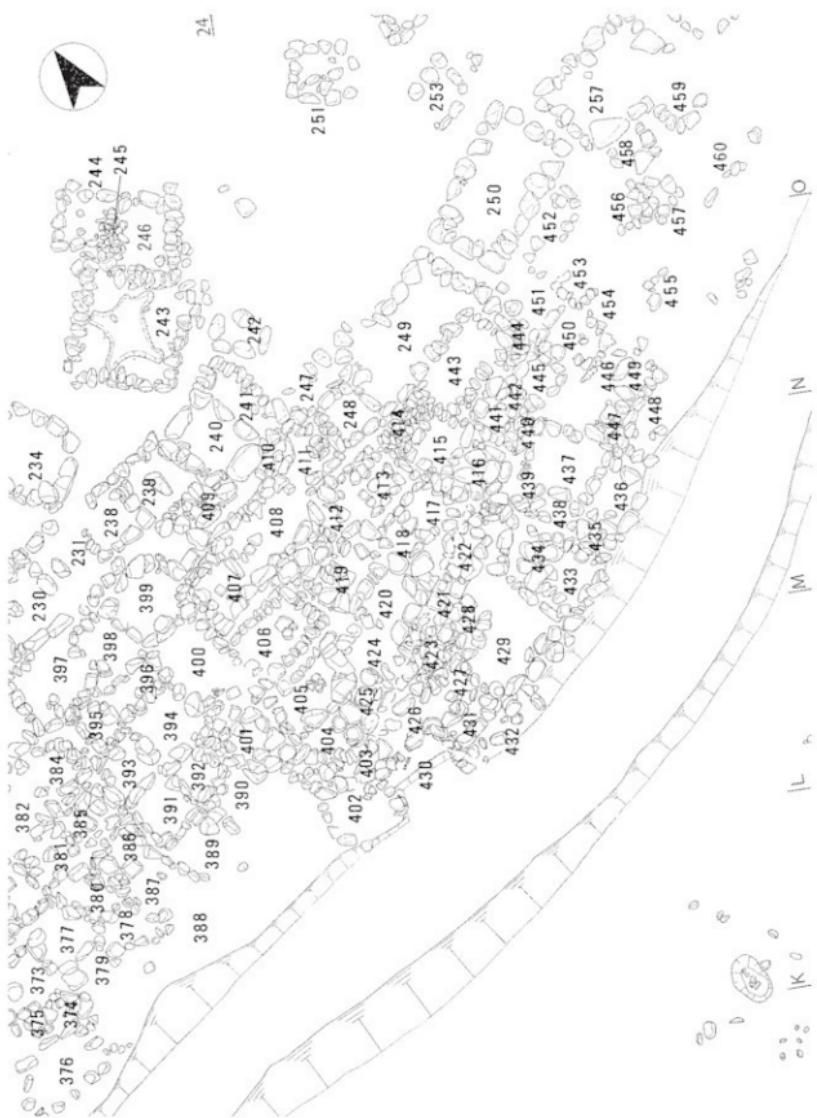
第12図 A地区上層部分遺構平面図



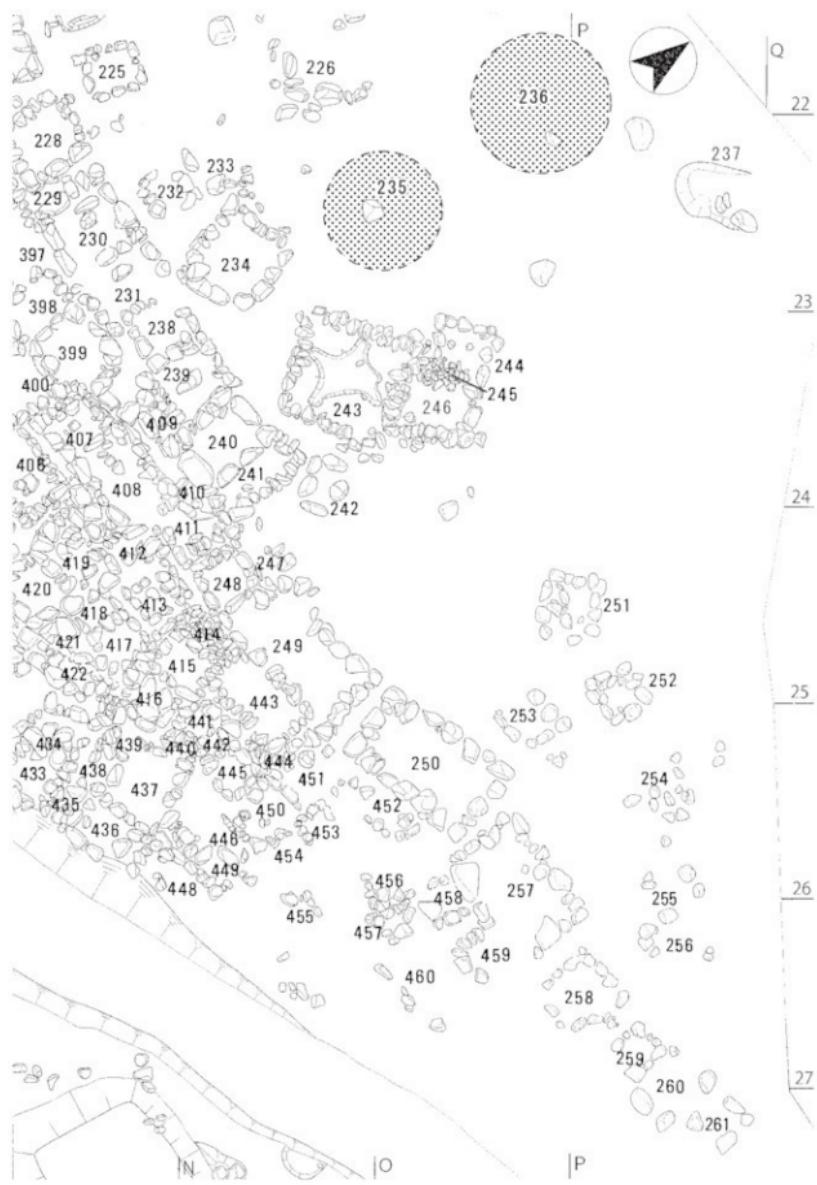
第13図 A地区上層部分遺構平面図



第14図 A地区上層部分遺構平面図



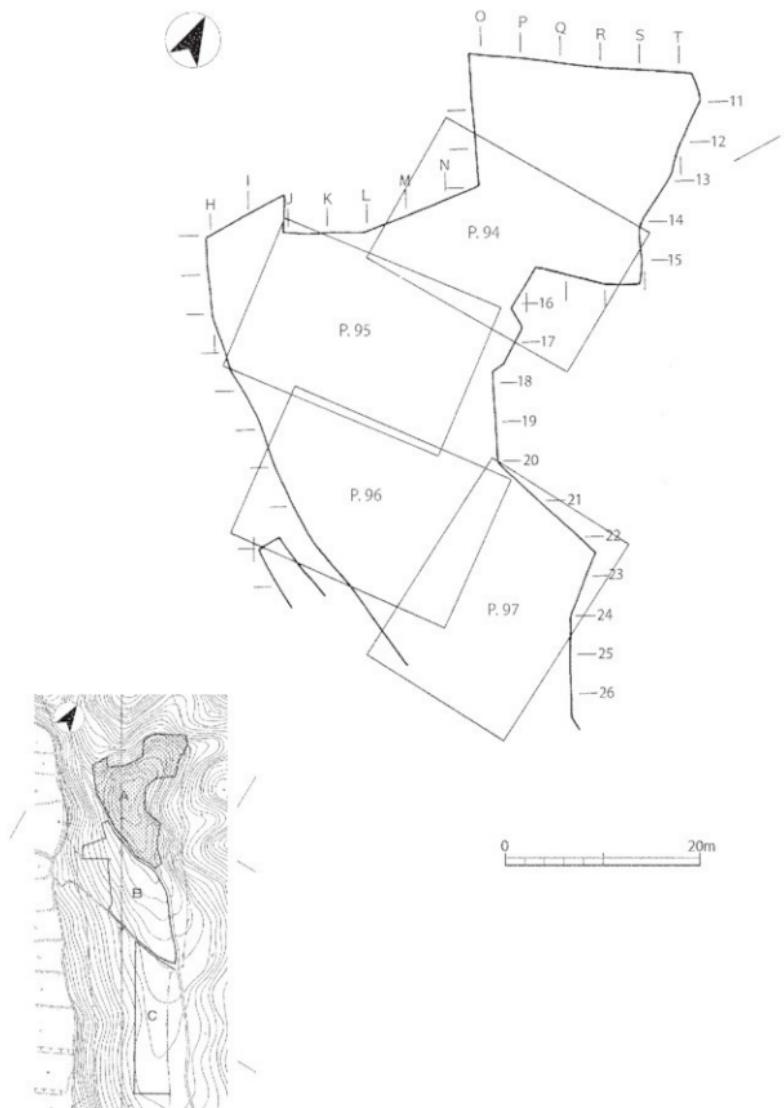
第15図 A地区上層部分遺構平面図



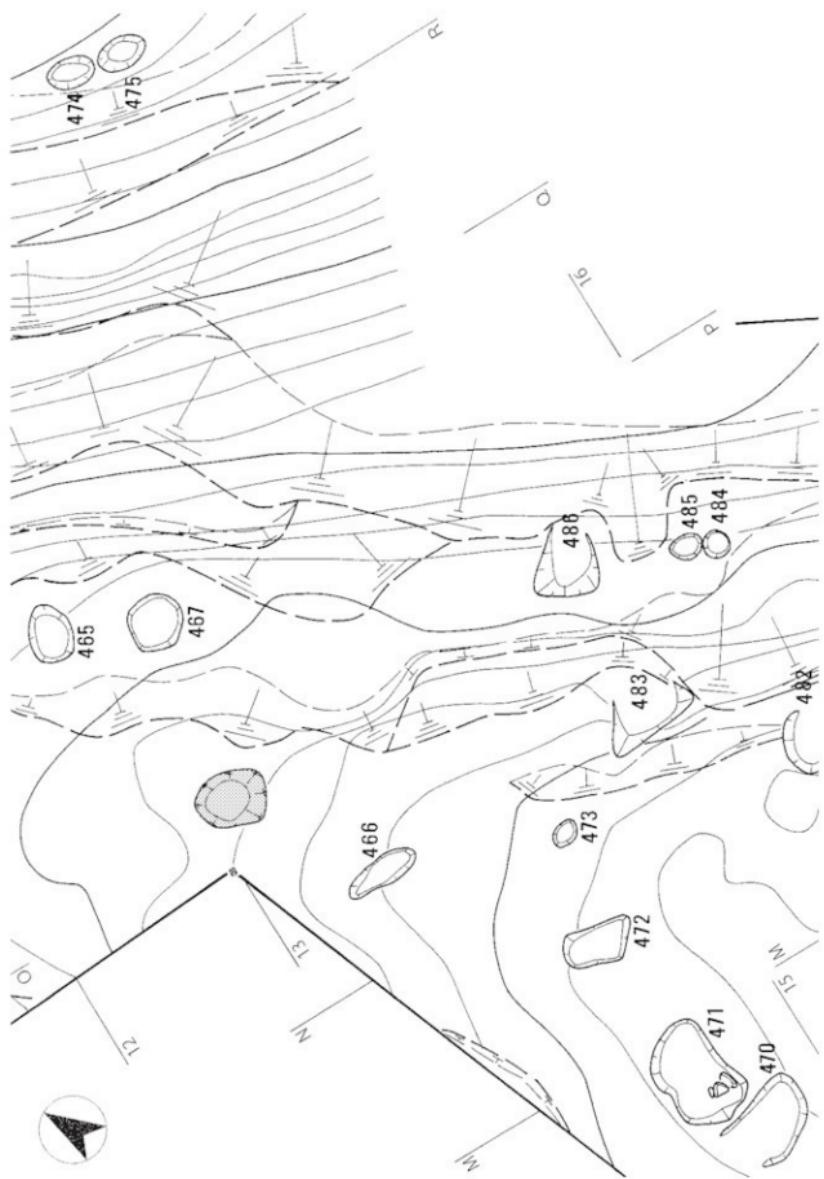
第16図 A地区上層部分遺構平面図



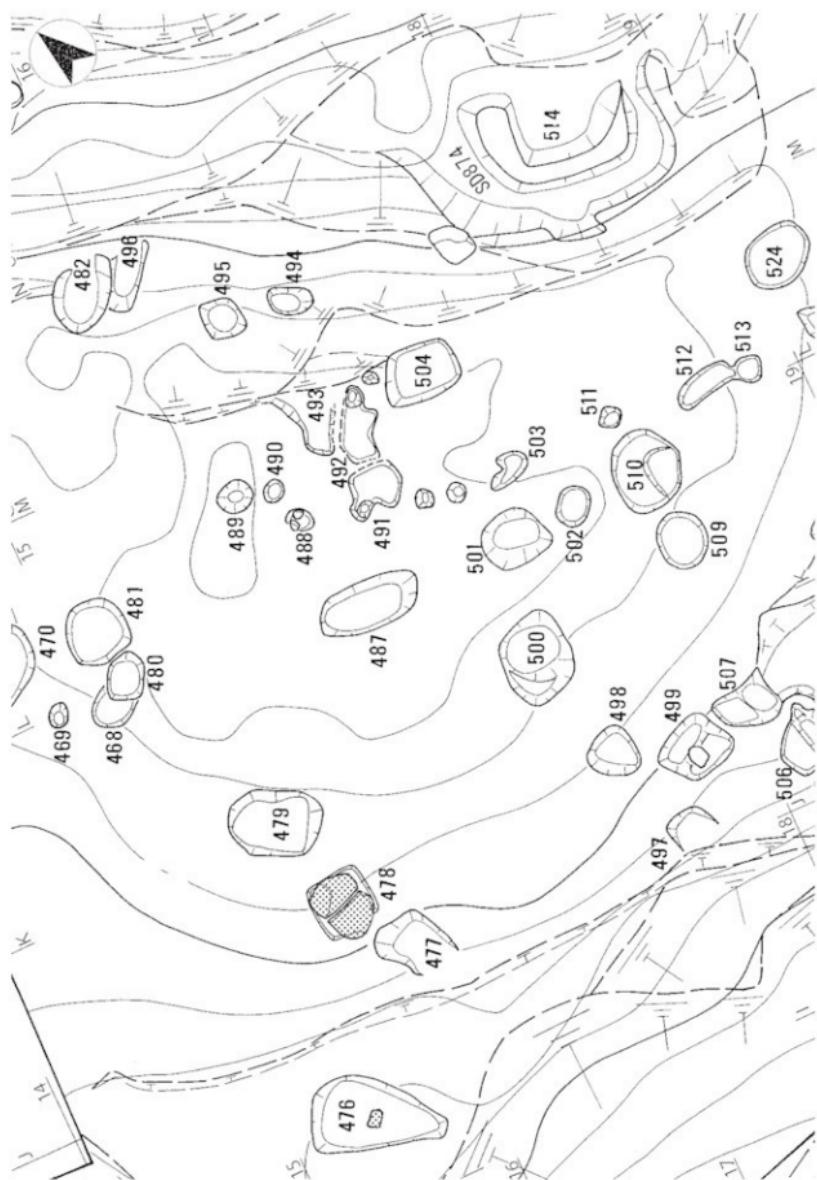
第 17 図 A 地区下層全体遺構平面図



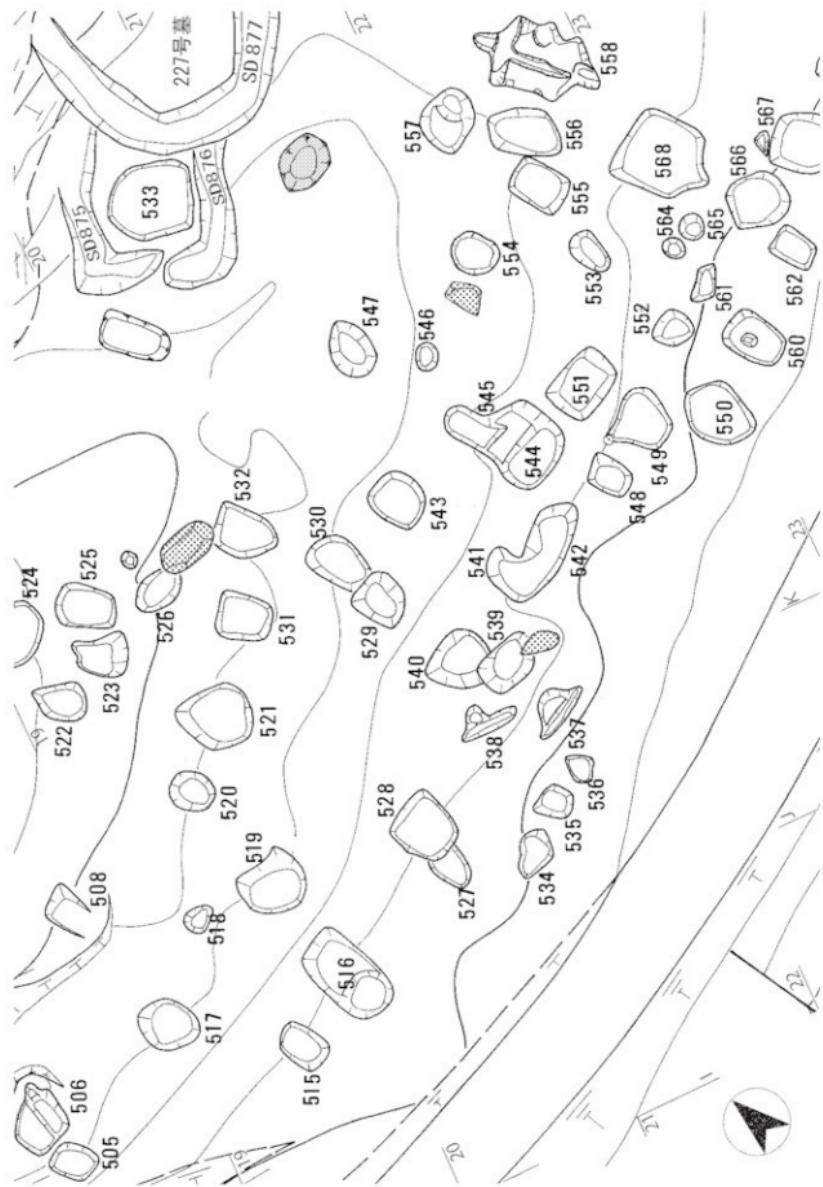
第18図 A地区下層遺構平面区割り図



第19図 A地区下層部分遺構平面図



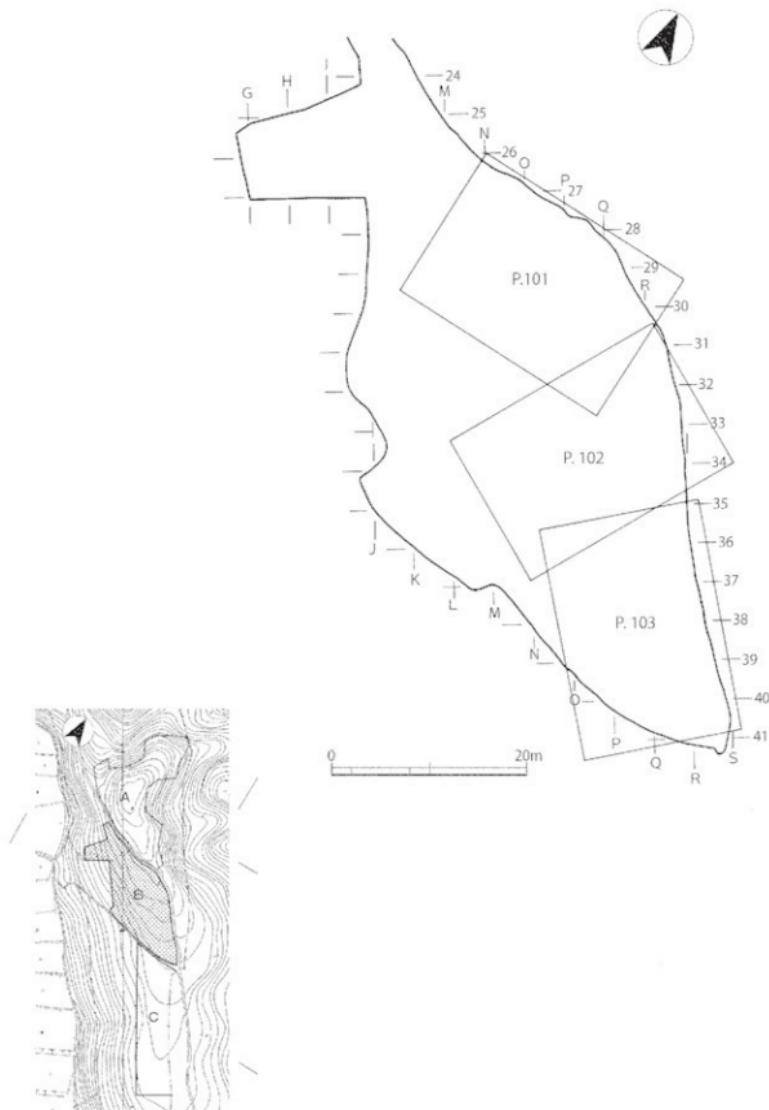
第20図 A地区下層部分遺構平面図



第21図 A地区下層部分遺構平面図



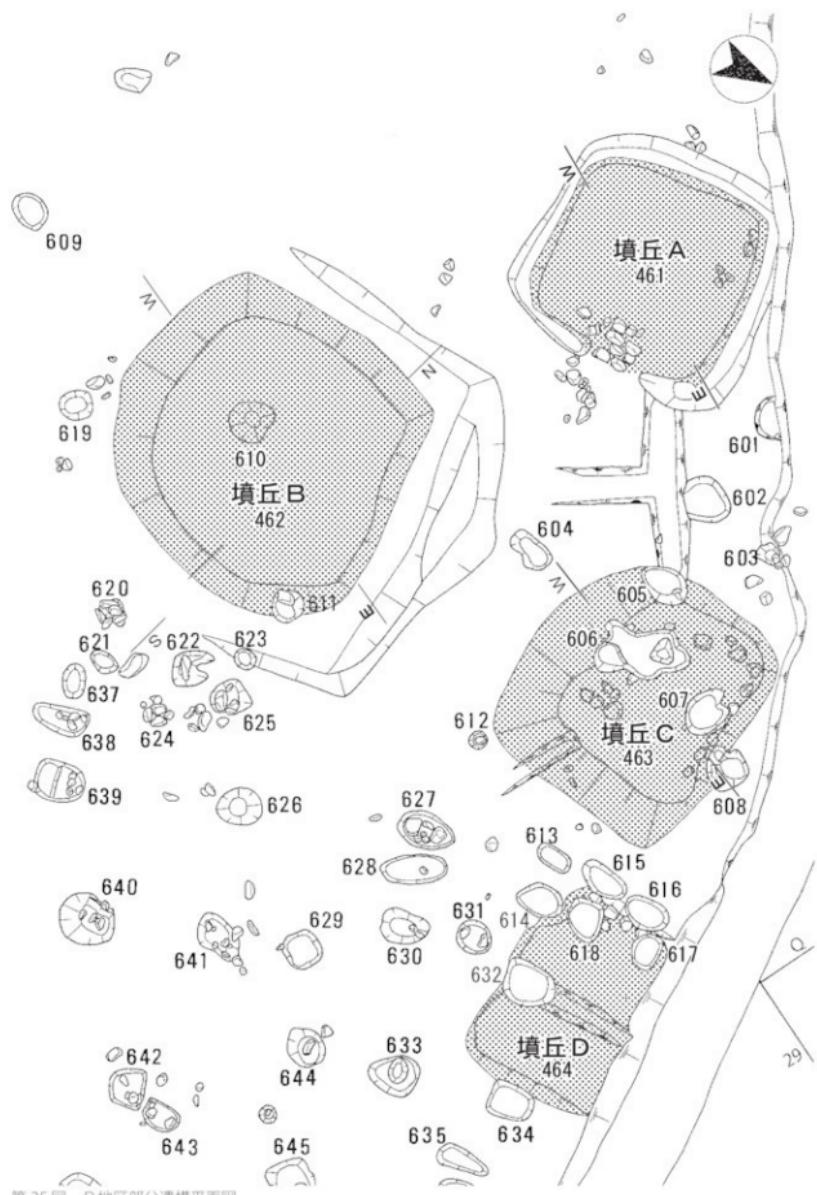
第22図 A地区下層部分遺構平面図



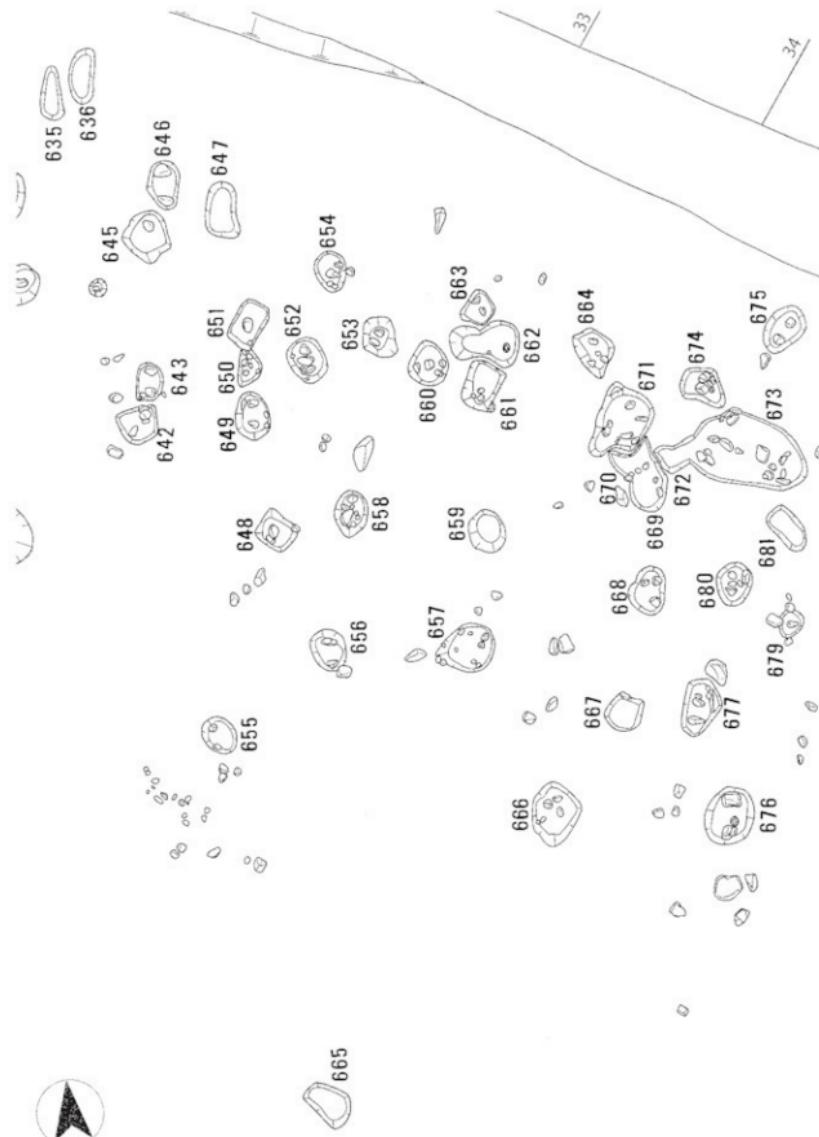
第23図 B地区全体遺構平面区割り図



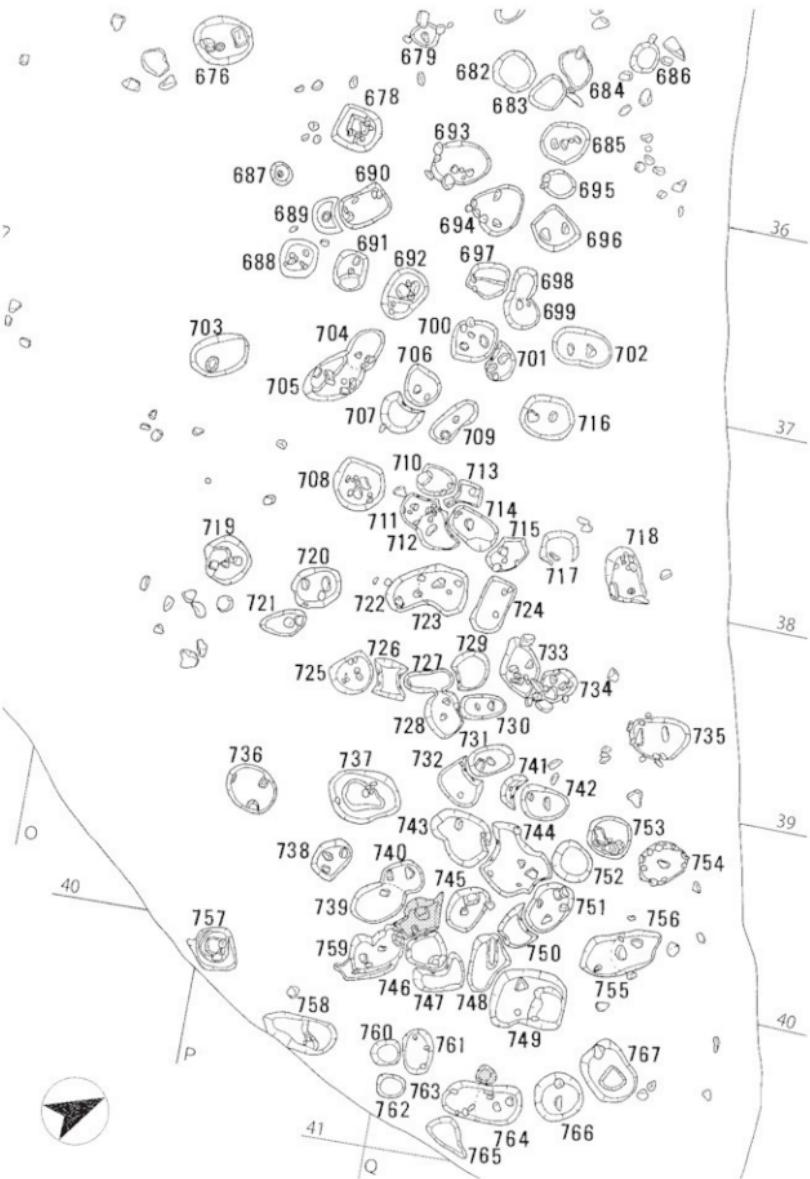
第24図 B地区全体遺構平面図 (1:200) - 99 ~ 100 -



第25図 B地区部分遺構平面図



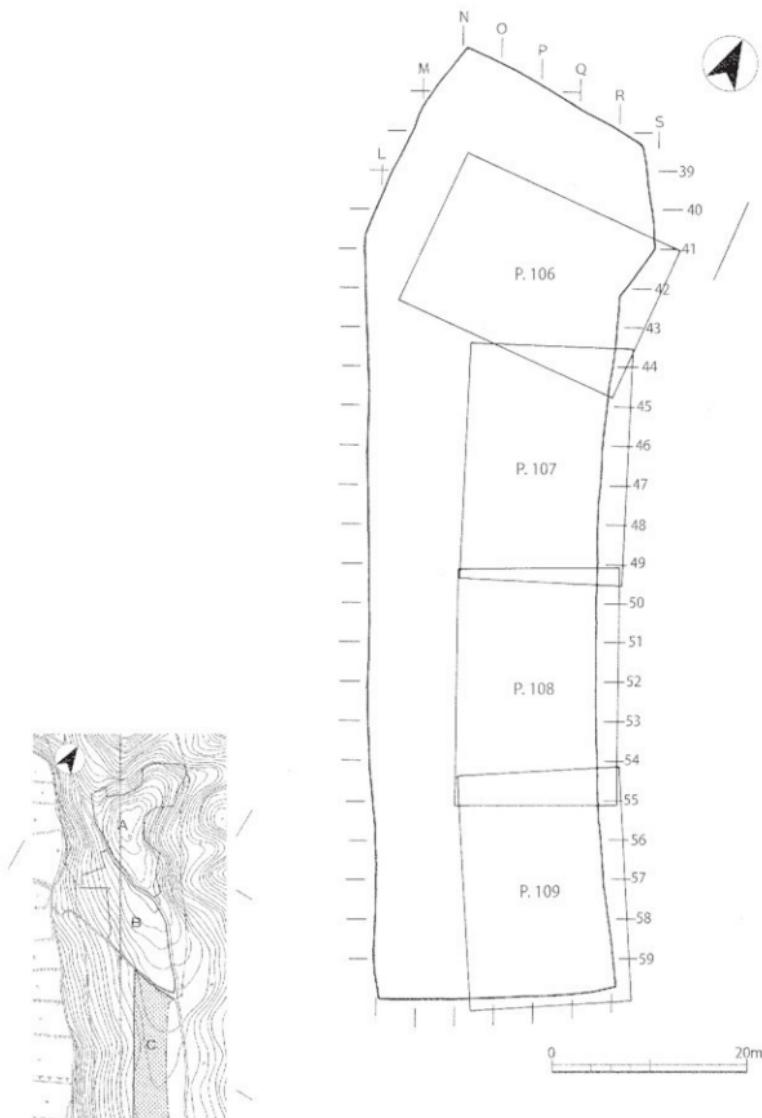
第26図 B地区部分遺構平面図



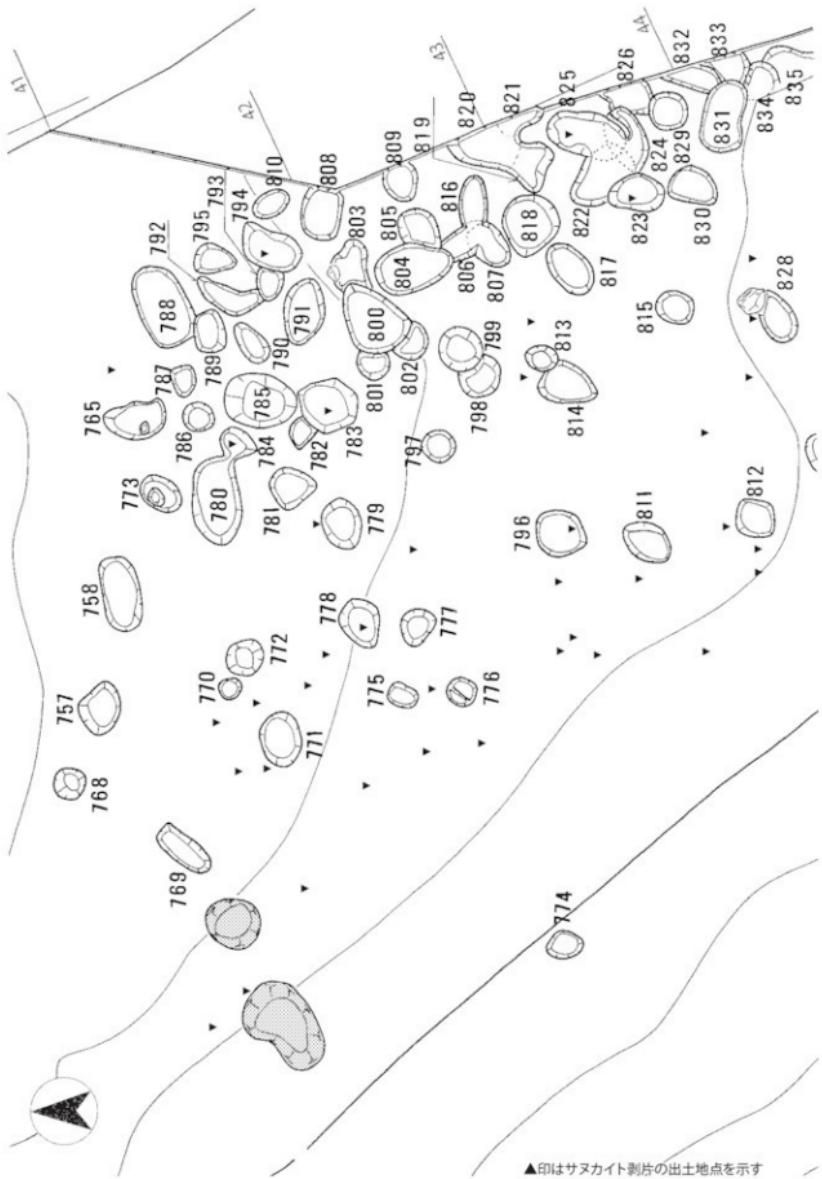
第27図 B地区部分遺構平面図



第28図 C地区全体遺構平面図 (1:400)

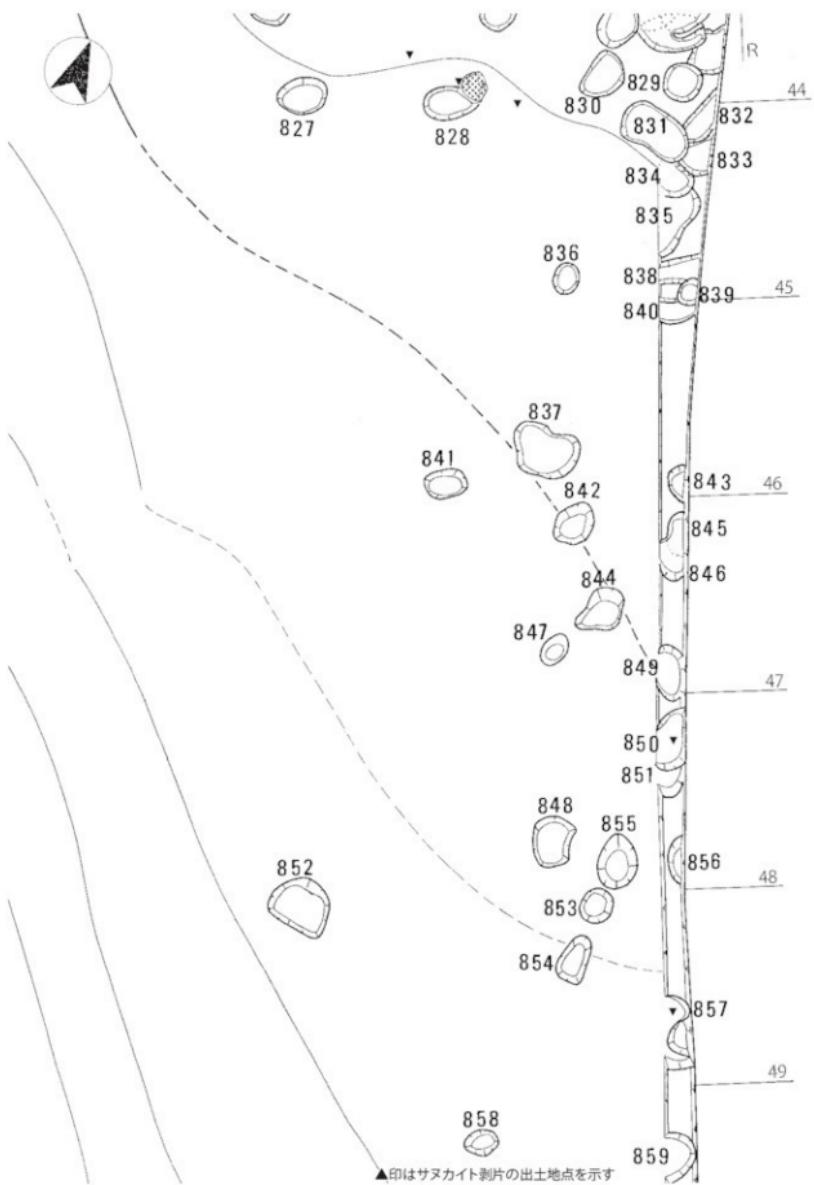


第29図 C地区全体遺構平面区割り図

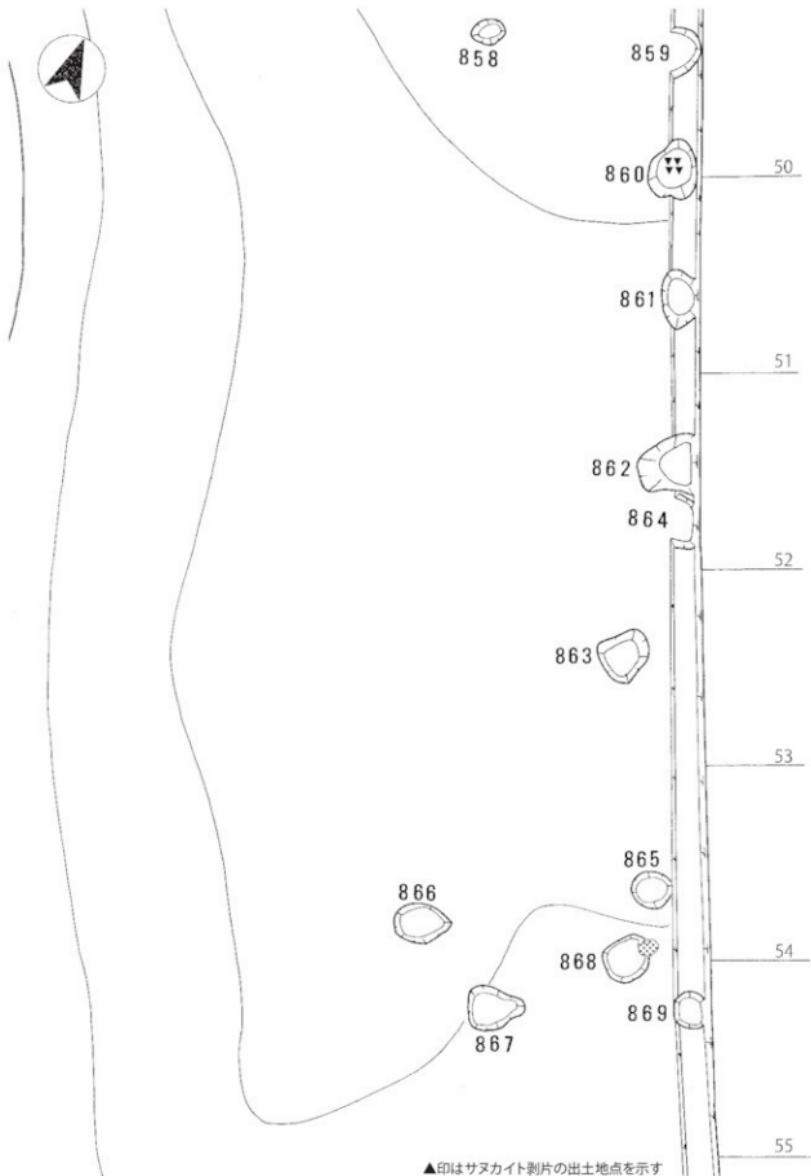


▲印はサヌカイト剥片の出土地点を示す

第30図 C地区部分遺構平面図



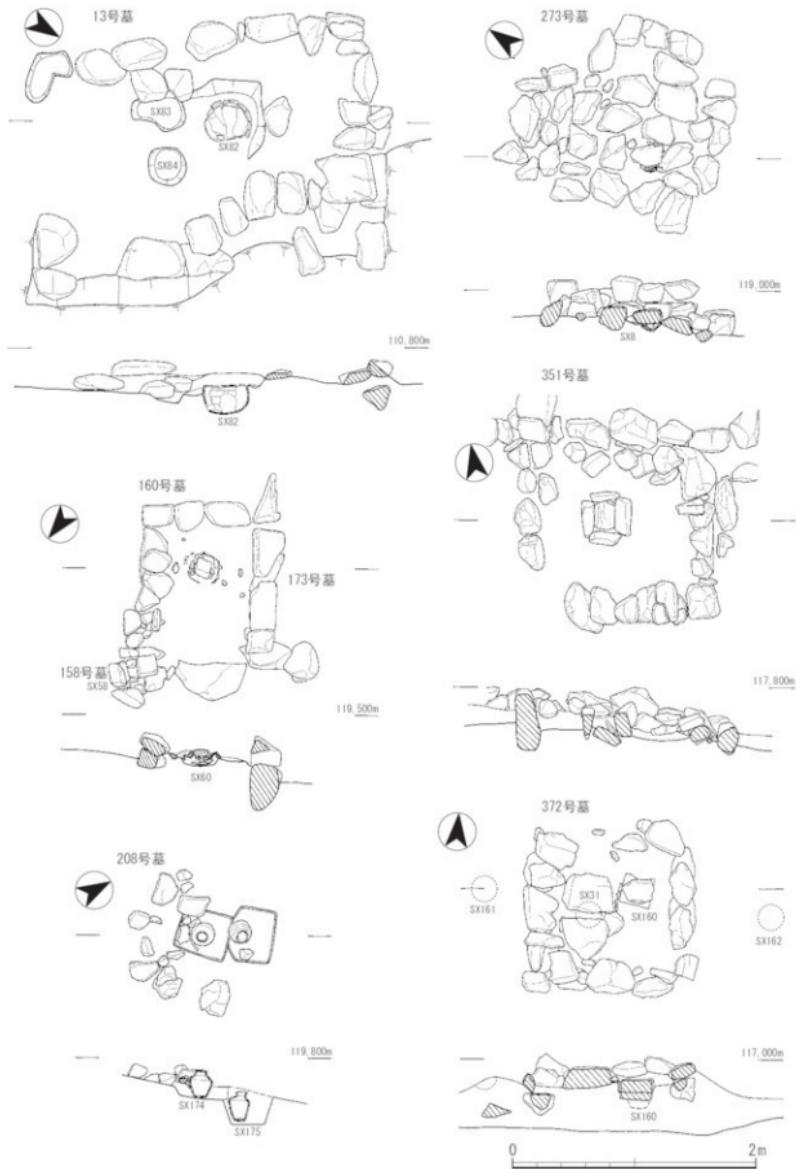
第31図 C地区部分遺構平面図



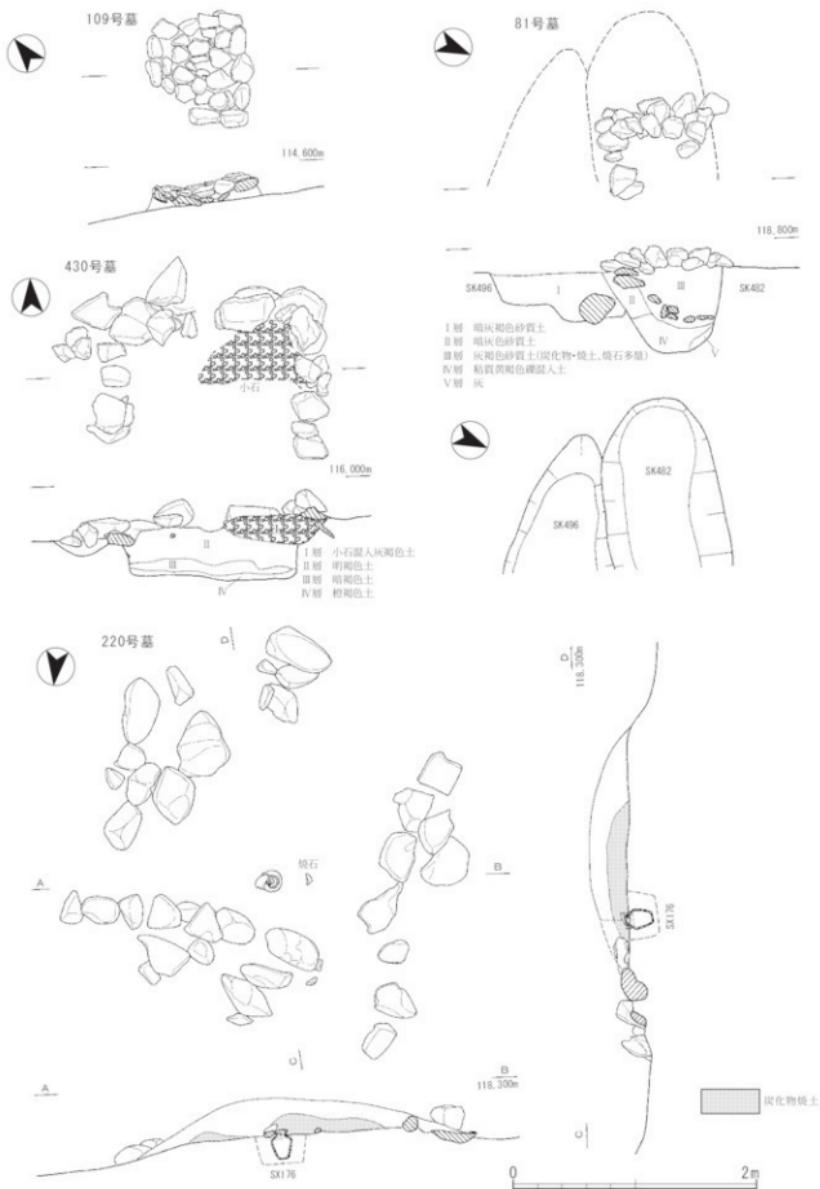
第32図 C地区部分遺構平面図



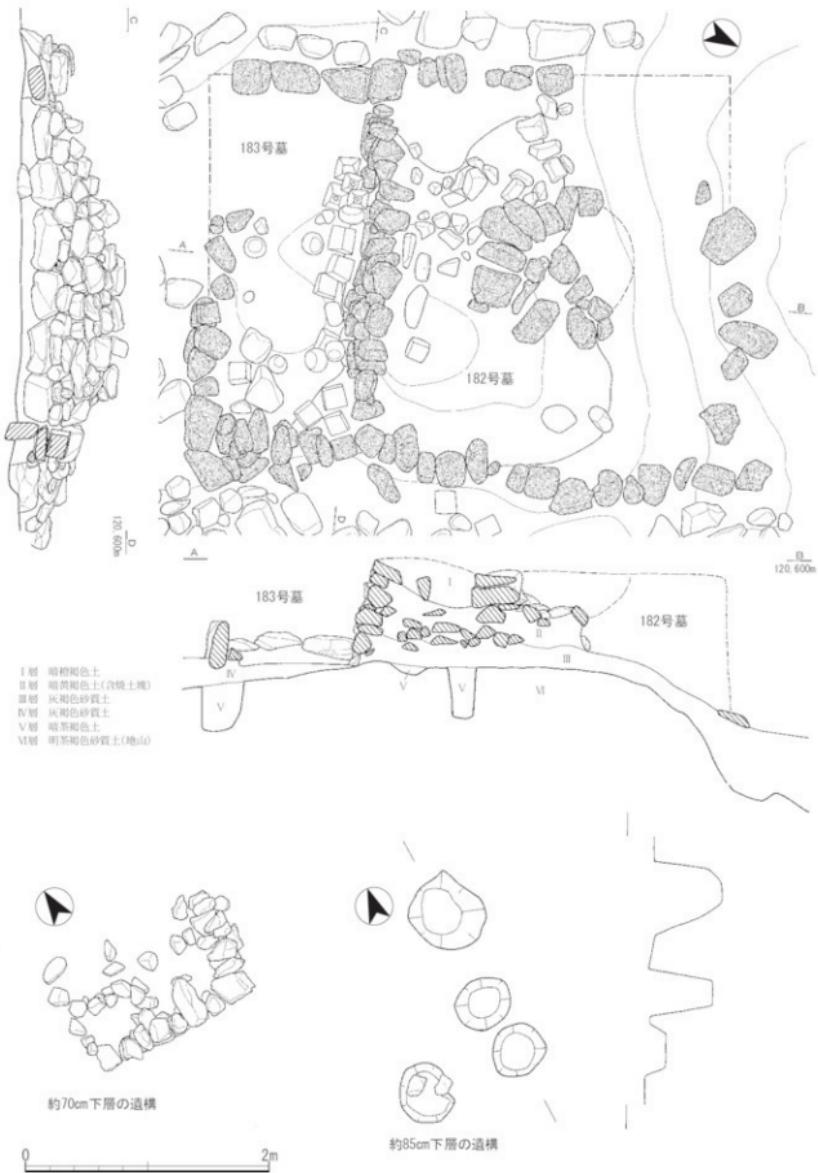
第33図 C地区部分遺構平面図



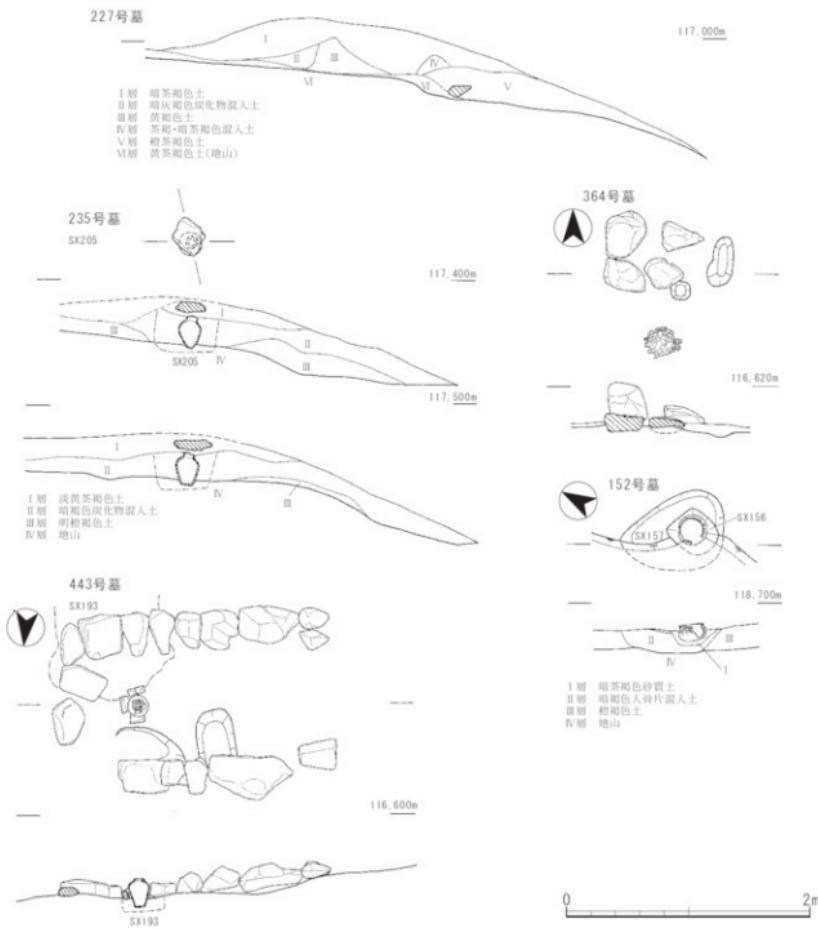
第34図 A地区個別遺構実測図



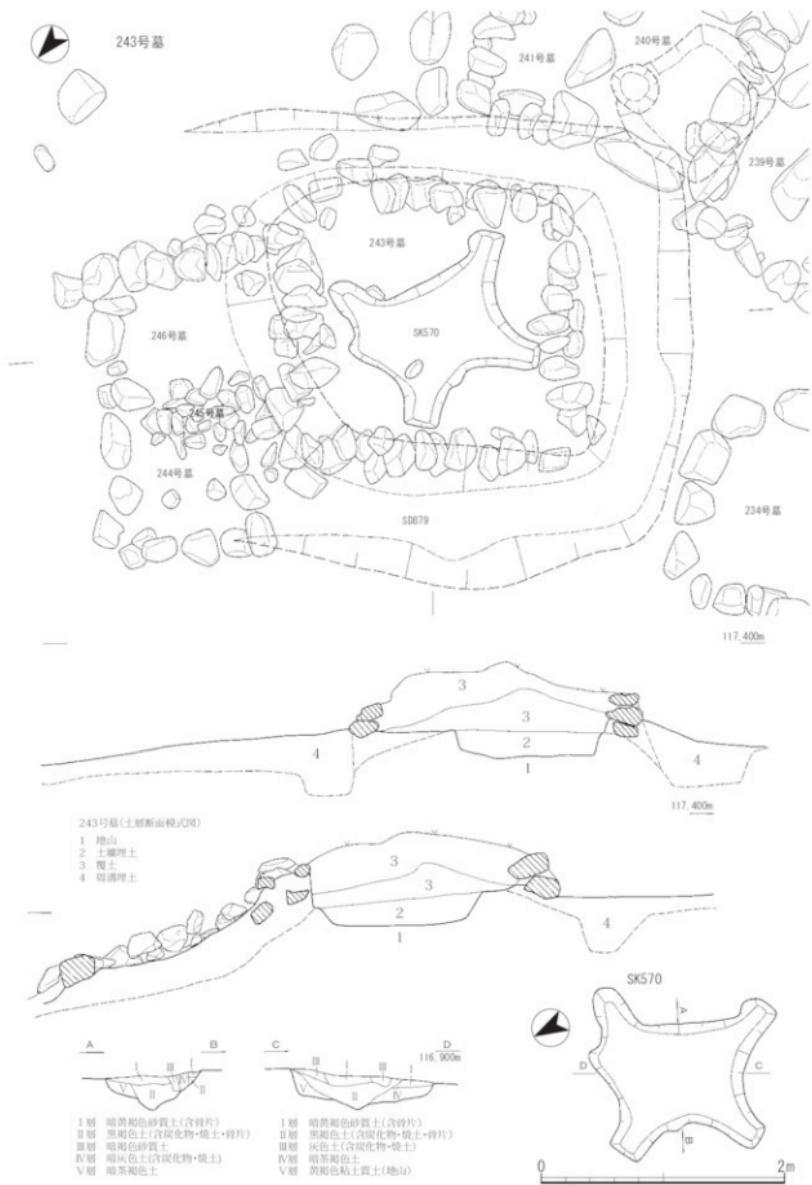
第35図 A地区個別遺構実測図



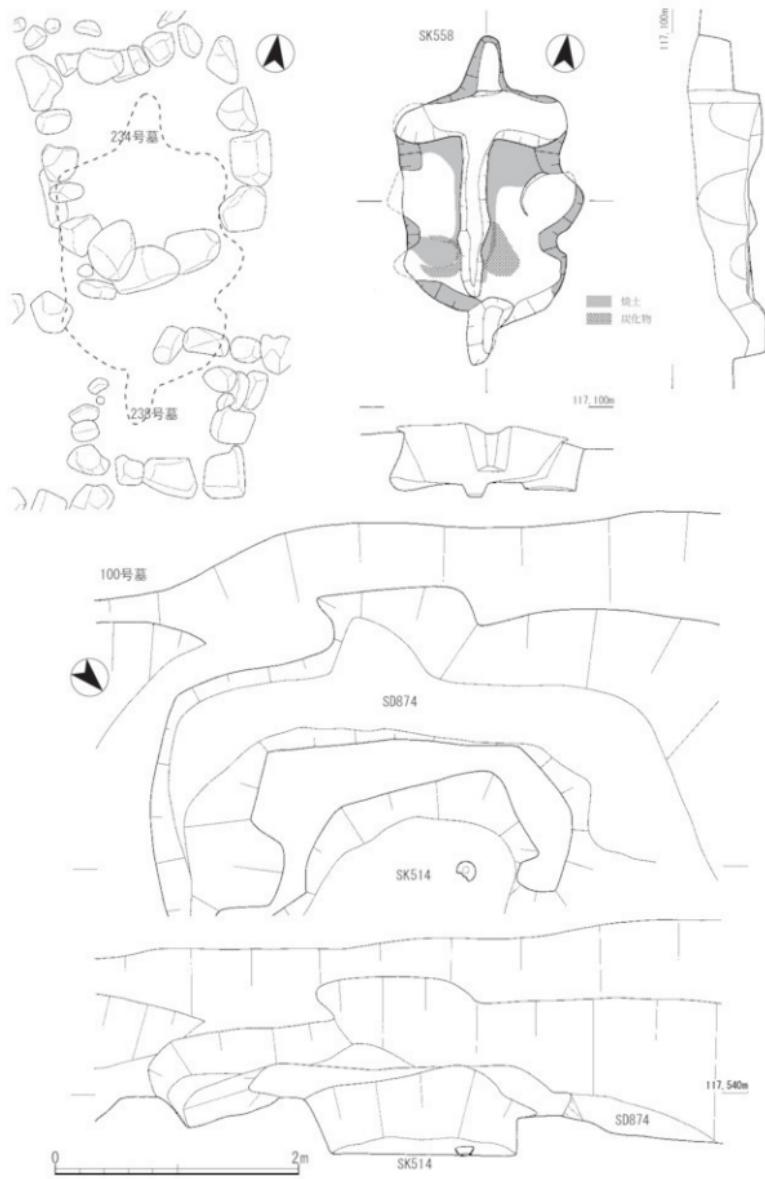
第36図 A地区個別遺構実測図



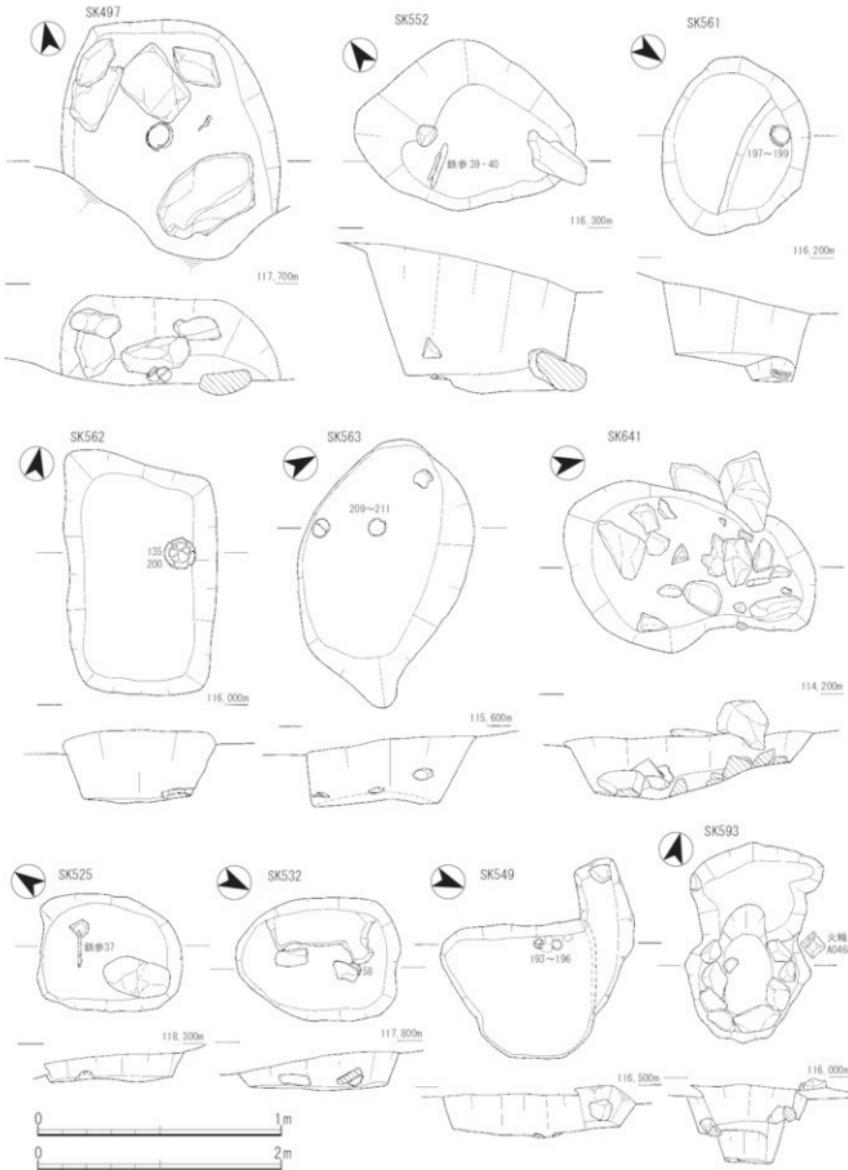
第37図 A地区個別遺構実測図



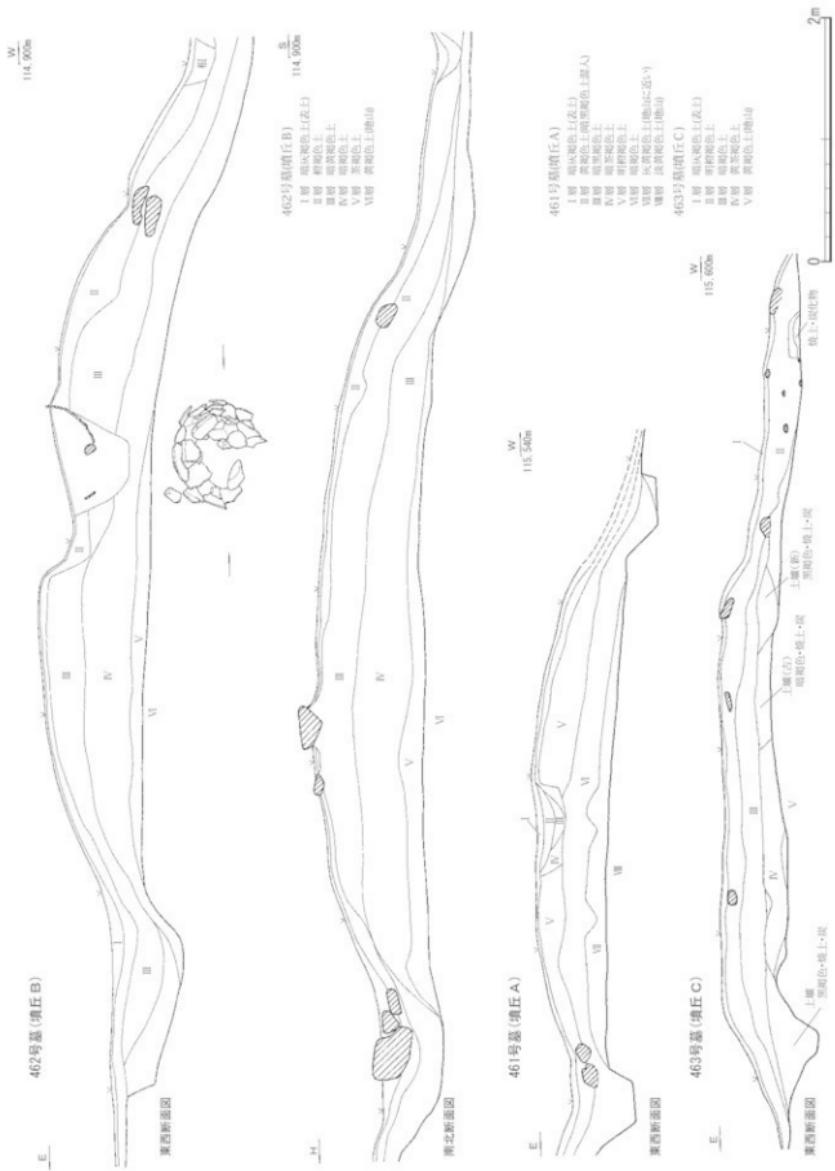
第38図 A地区個別遺構実測図



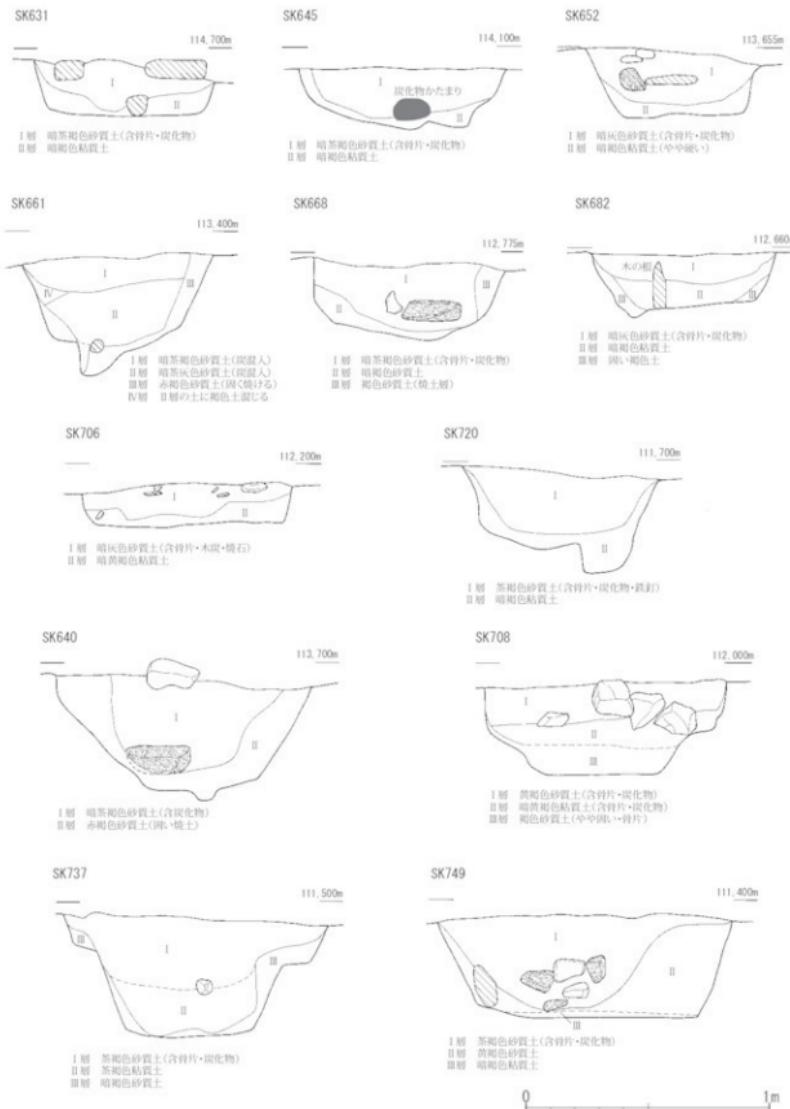
第39図 A地区個別遺構実測図



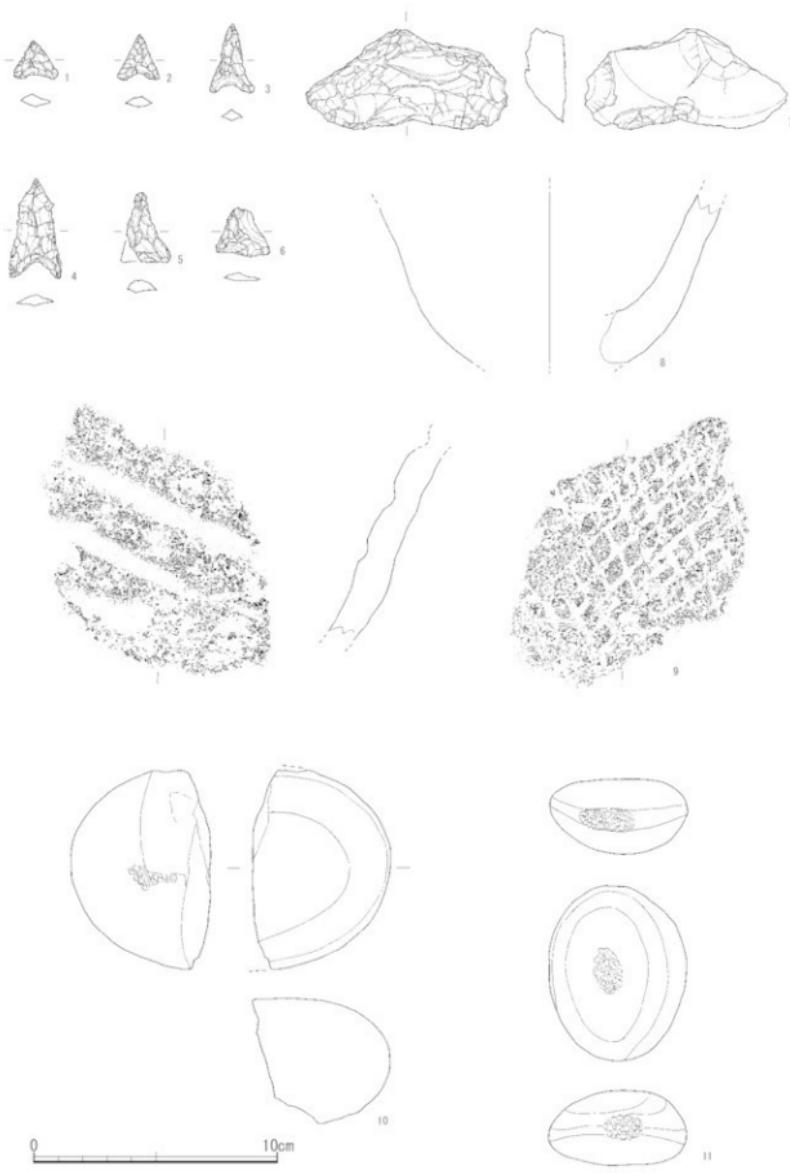
第 40 図 A 地区個別遺構実測図



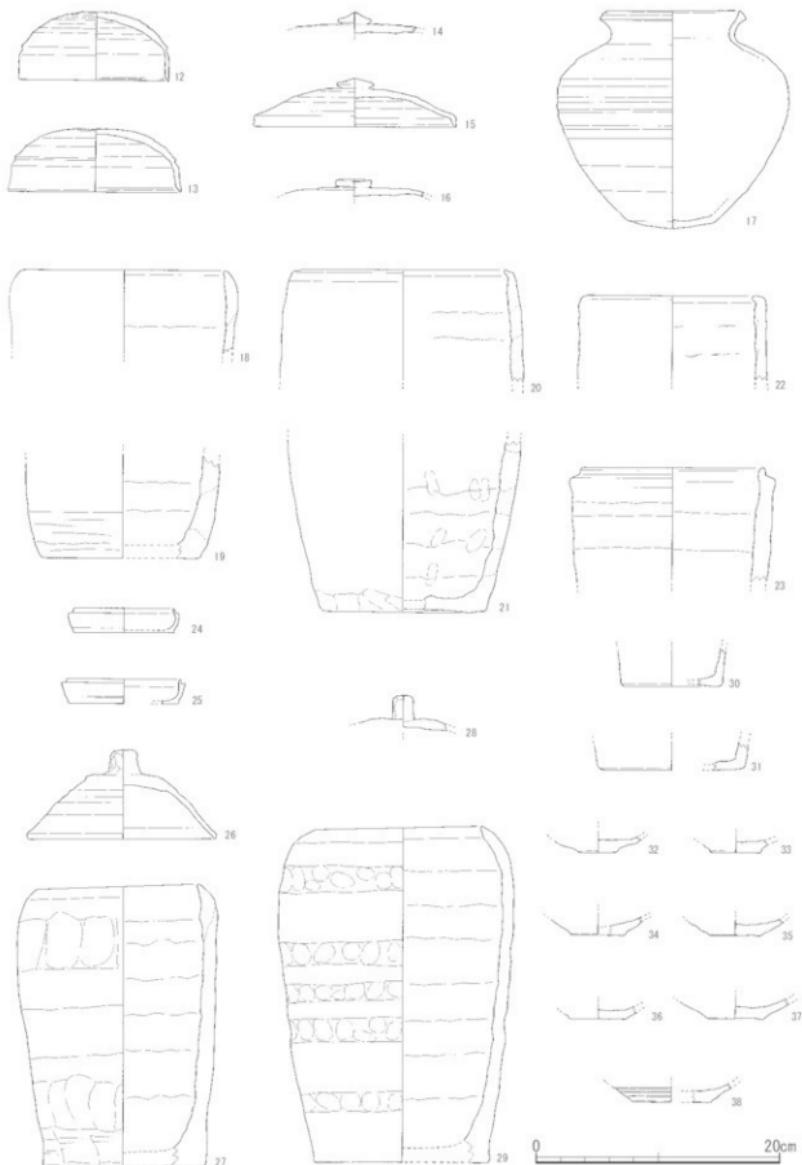
第41图 B地区填丘墓土层断面图



第42図 B・C地区個別遺構実測図



第43図 石器ほか遺物実測図 (1 : 2)



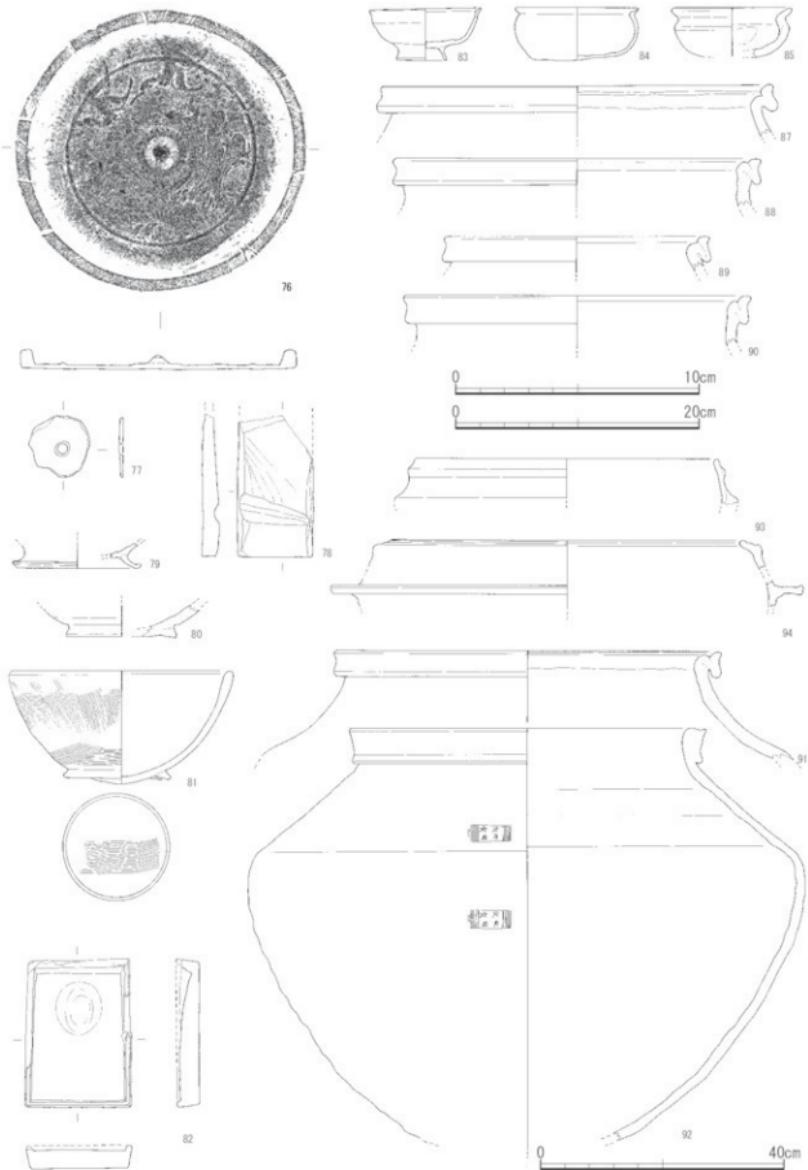
第44図 須恵器ほか遺物実測図 (1:4)



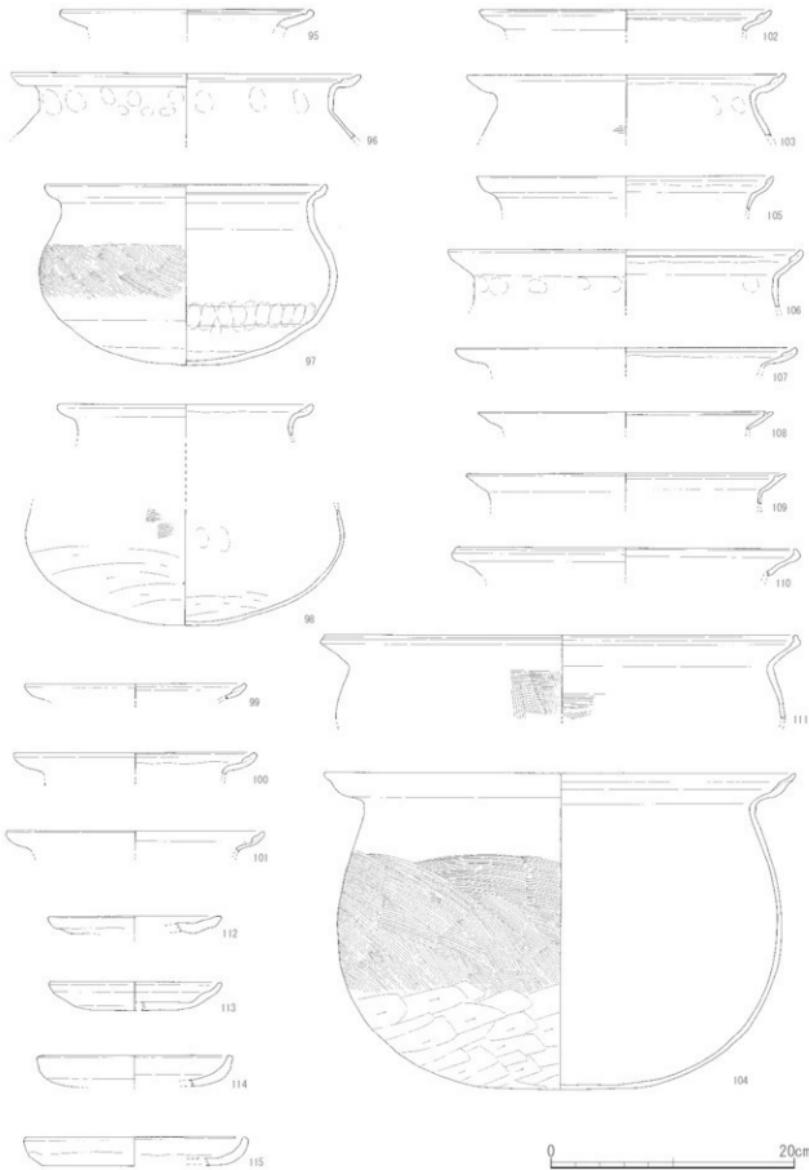
第45図 三筋壺ほか遺物実測図 (1:4)



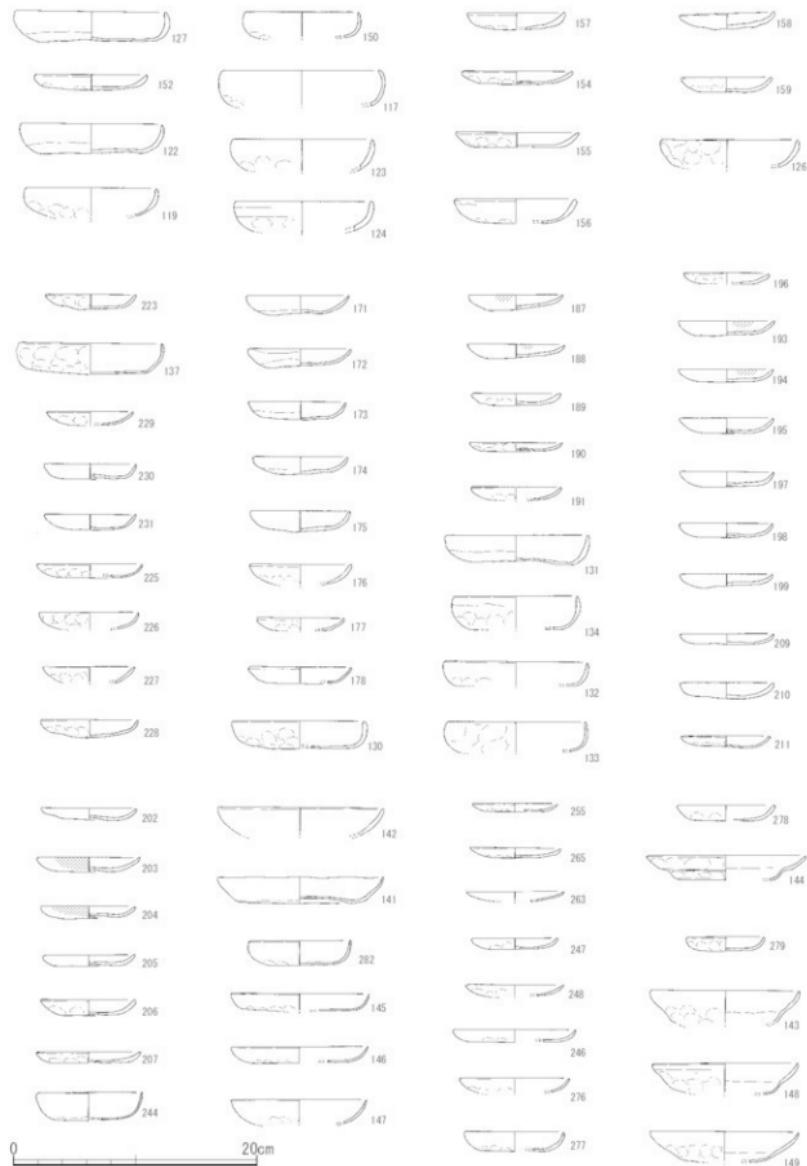
第46図 山茶碗ほか遺物実測図 (1 : 4)



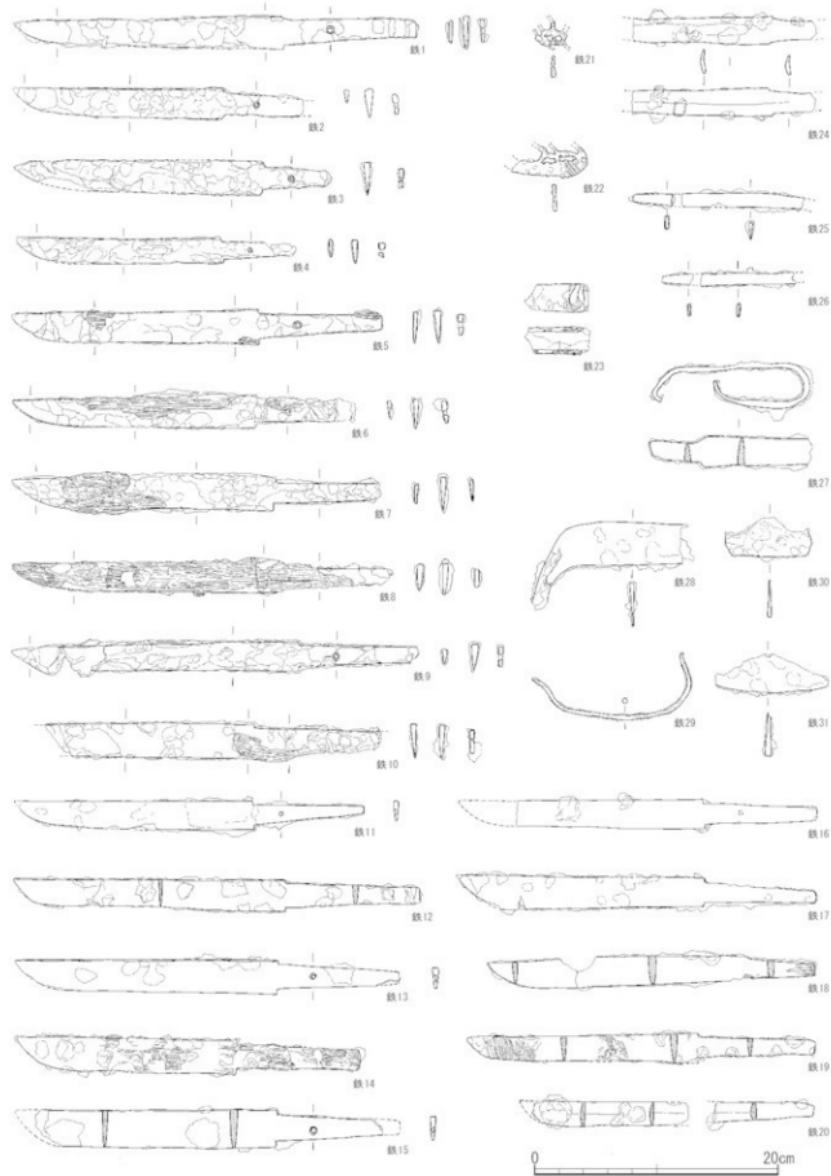
第47図 和鏡ほか遺物実測図 (76～78は1:2、79～85・87～91・93～94は1:4、92は1:8)



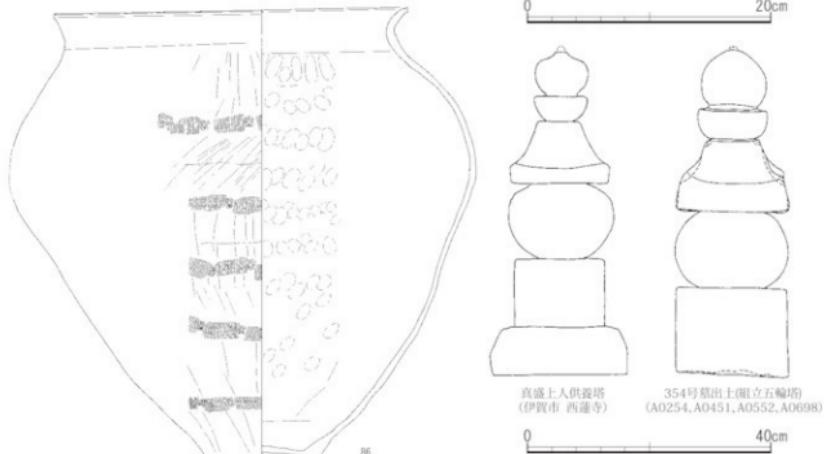
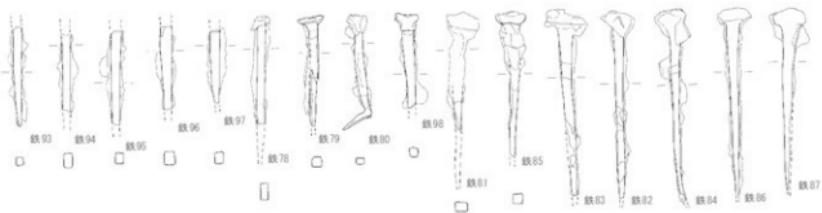
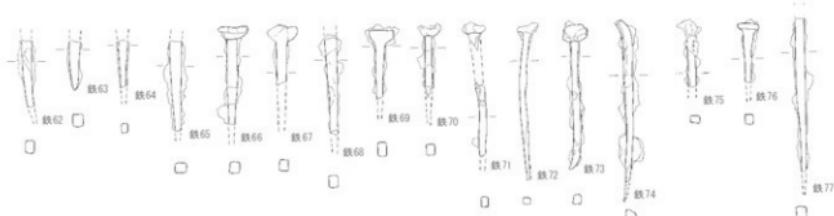
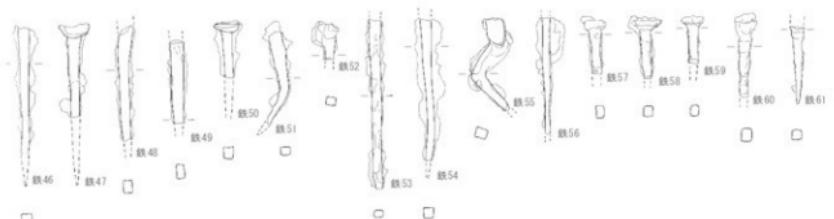
第48図 土師器類ほか遺物実測図 (1:4)



第49図 土器器皿ほか遺物実測図 (1 : 4)



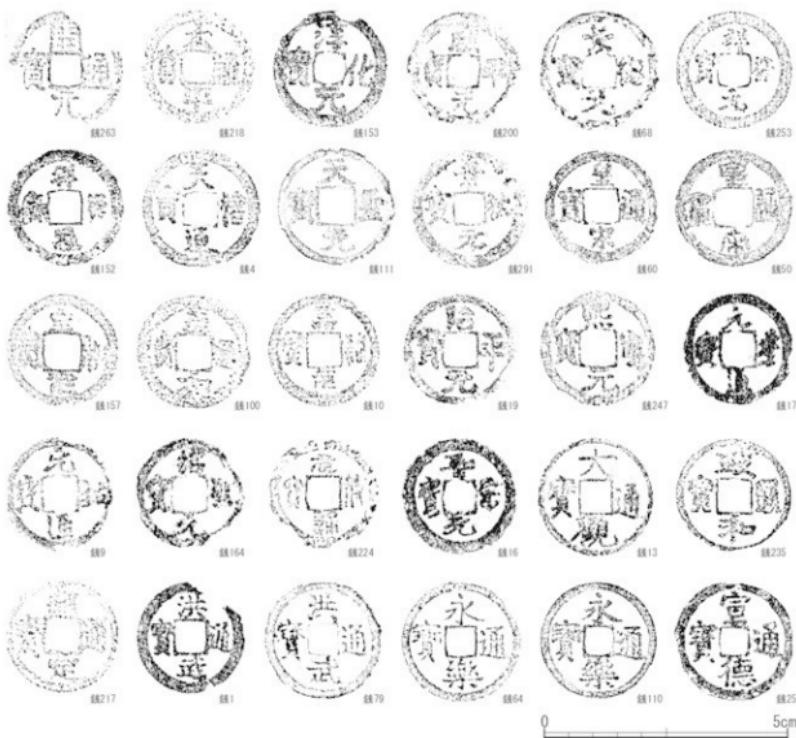
第50図 刀子ほか遺物実測図 (1:4)



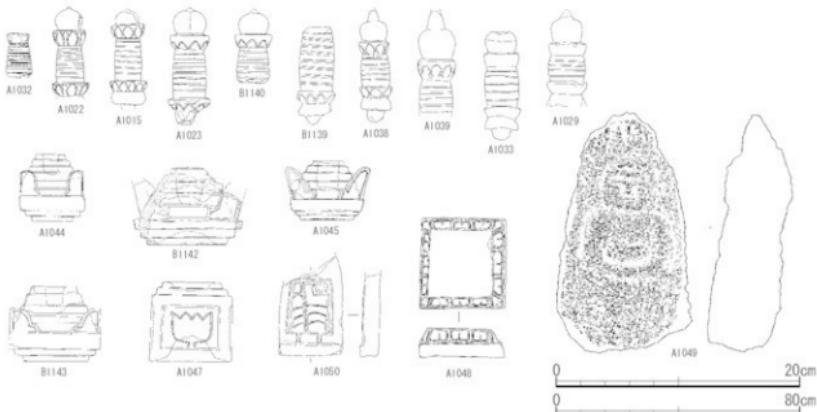
真盛入供養塔
(伊賀市 西蓮寺)
(A0254, A0451, A0552, A0698)



第51図 鉄釘ほか遺物実測図 (鉄釘は1:4、他は1:8)

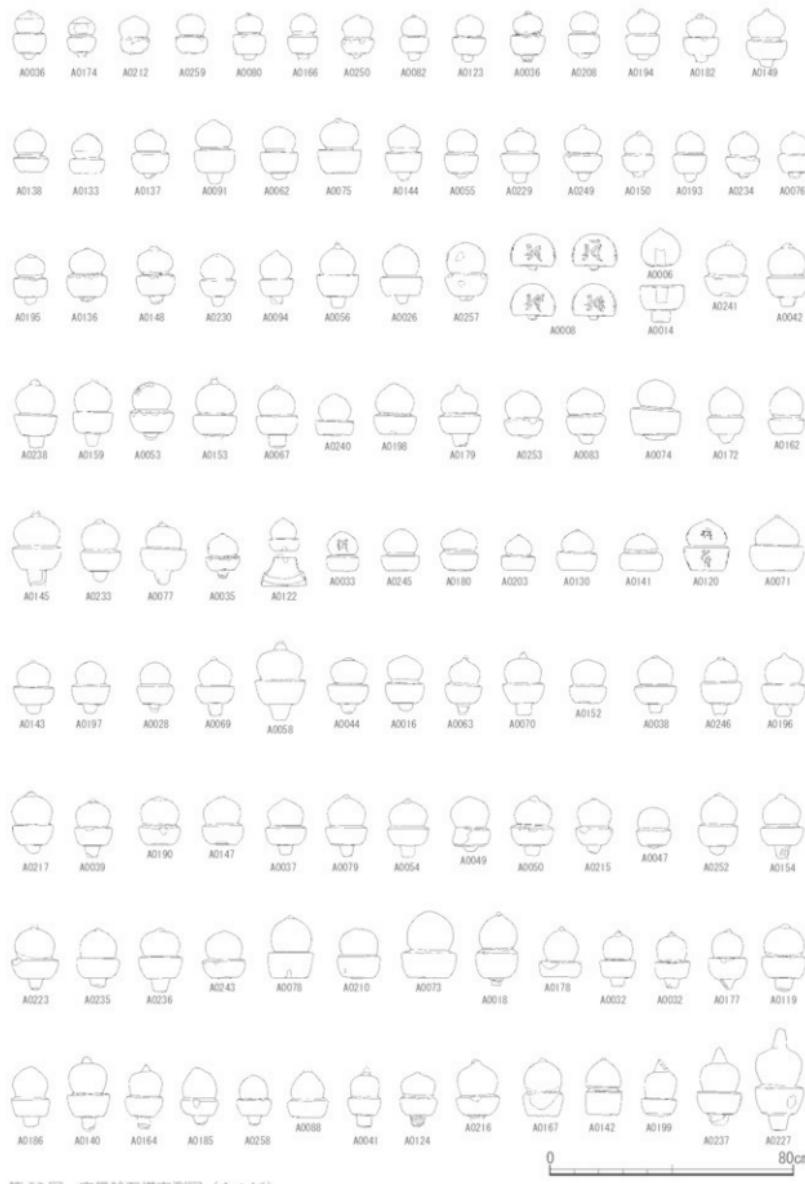


0 5cm

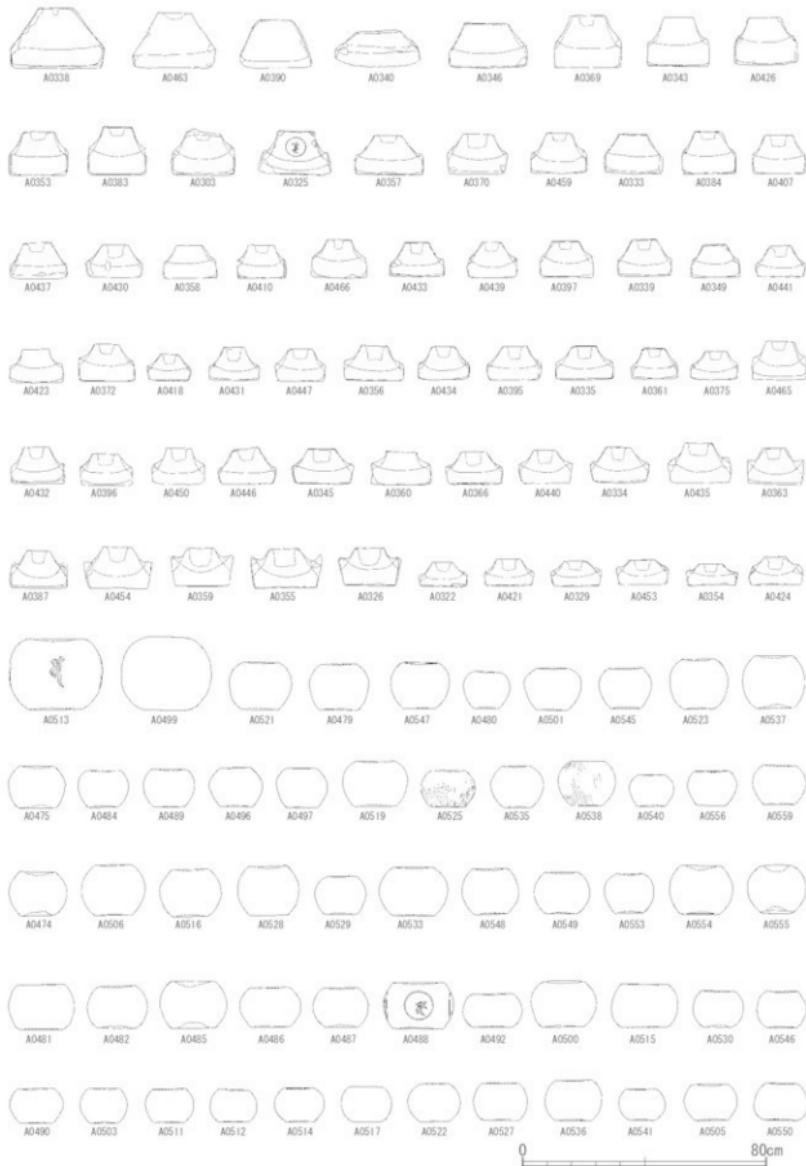


0 20cm
0 80cm

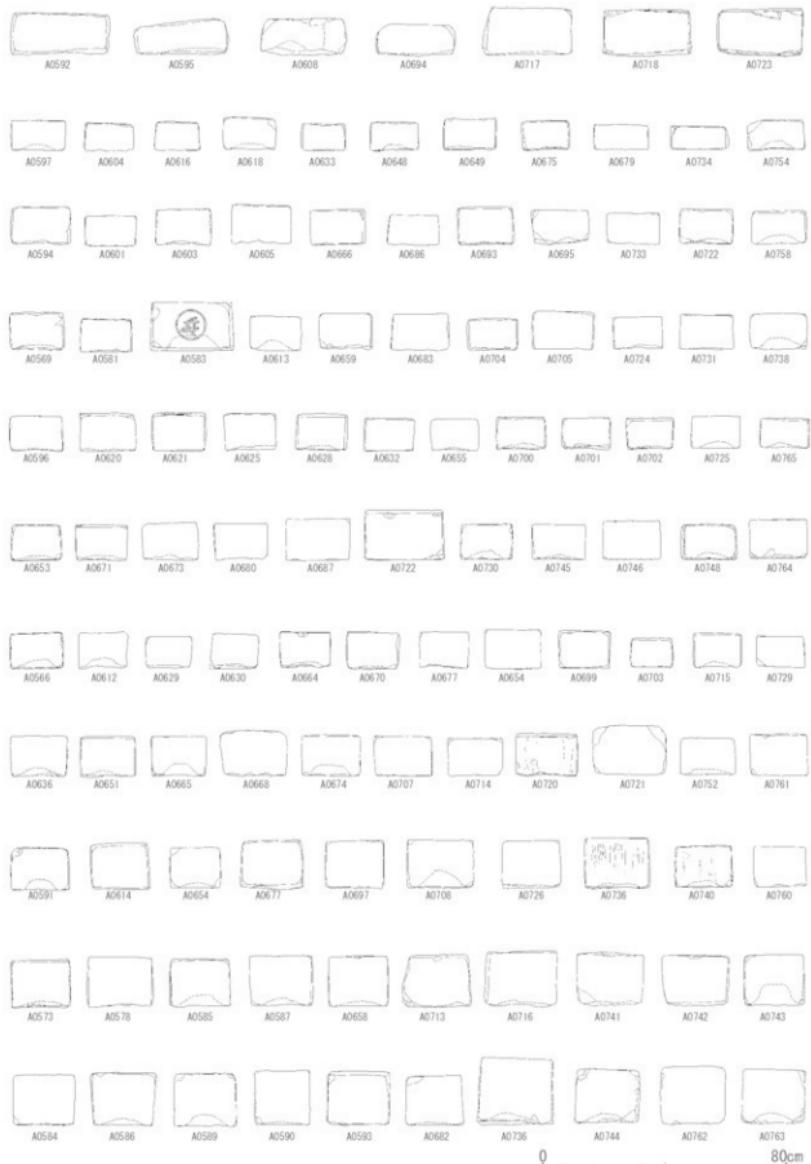
第 52 図 古銭拓影ほか遺物実測図（銭貨は 1 : 1、石仏は 1 : 4、他は 1 : 16）



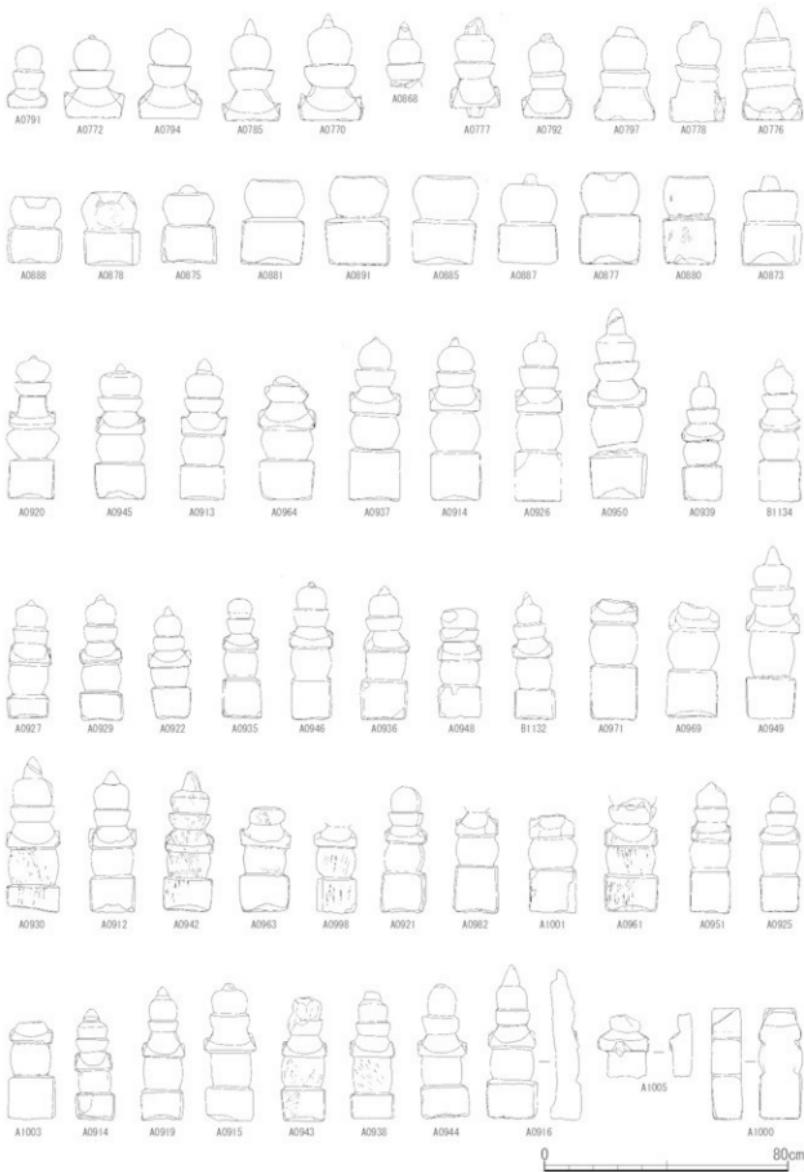
第53図 空風輪石塔実測図 (1 : 16)



第54図 火・水輪石塔実測図（1：16）



第55図 地輪石塔実測図（1:16）



第 56 図 一石五輪塔ほか実測図 (1 : 16)

北尾根支群第一テラス：1～11号墓（第10図）本文5～6頁

報告書 旧称 号墓 S.R.N.	小地区名	通横平面 形状	面積(m) 長辺×短辺	出土石塔類% (通横内探査)	出土人骨 SX%b	伴出土器 遺骨器ほか	金属品 (古銭)	備考 (回版%・重視土器など)
1 467	T10	方形	12×1.0	火輪A0456 地輪A0753 地輪A0754	—	—	—	—
2 欠番 468	T10～11	(方形)	(1.5×~)	空尾輪A042 空尾輪A043 (空)尾輪A0793 火輪A0440 火輪A0441～0443 水輪A0548 地輪A0671 一石五輪塔A0946 相輪A1042 宝篋印塔基礎部A1048	—	—	—	当墓本来の平面形状不詳。A1048は宝篋印塔の台座かも知れない。
3 欠番	T10～11	方形	(1.2×1.0)	—	—	—	—	—
4 欠番	T11	不明	—×—	—	—	—	—	一石五輪塔の一部かと思える地輪の破片を採取した。
5 469	T11	方形	(1.2×1.1)	—	—	—	—	0.3m大の河原石を敷詰めた状態。
6 470	S～T11	方形	(1.0×1.0)	—	—	—	—	—
7 471	S～T11	不明	—×—	—	S X146	—	—	遺骨器は確認できず。9号墓より古。
8 472	T12	不明	(0.7×0.6)	—	—	—	—	—
9 欠番	T11	方形か	(1.0×0.7 以上)	—	—	—	—	7号墓より新。
10 477	R14	長方形	1.5×1.1	地輪A0755	—	—	—	平面上は下層にSK474が重複。
11 478	R～S14	方形	12×1.0	空尾輪A0326	—	—	—	平面上は下層にSK475が重複。

北尾根支群第二テラス：12～28号墓（第10図）本文6頁

報告書 旧称 号墓 S.R.N.	小地区名	通横平面 形状	面積(m) 長辺×短辺	出土石塔類% (通横内探査)	出土人骨 SX%b	伴出土器 遺骨器ほか	金属品 (古銭)	備考 (回版%・重視土器など)
12 93	S10～11	二重方形	内12×10 外21×17	火輪A0427	—	土師器小皿破片 (269～272)	—	理士入三つの土器小皿（破片）は15c後葉～16c初頭頃の物に比定。12号墓はそれ以降の製造と推定。
13 85	S11	長方形か	2.0×1.5	—	S X82 S X83 S X84	土師器盤（104） 土師器小皿破片 (273～275)	—	S X82出土の土器（104）は14c前半代に比定。当墓理士から出土の土器小皿（273～275）は15c後葉～16c前葉頃に比定。S X83～84はそれ以降の消費か。（第34回）
14 473	S11	不明	—×—	—	—	—	—	—
15 479	S11	方形	0.9×0.8	一石五輪塔A0939 相輪A1019	—	—	—	—
16 欠番	S11	不明	—×—	—	S X85 S X91	—	—	遺骨器は確認できず。
17 521	S11～12	方形か	—×—	—	S X86 S X87 S X89	—	—	遺骨器は確認できず。
18 480	R～S11	方形か	0.7×0.7	水輪A0542	—	—	—	宝篋印塔笠部かと思しき断片の出土するも計測は不能。
19 481	R12	円形か	径0.8	地輪A0752	—	—	—	0.2～0.3m大の川原石を敷詰める。
20 520	S11	長方形	1.2×0.8	空尾輪A0207 空尾輪A0208	S X88 S X148	S X88から 土師器盤破片（98）	—	土師器盤（98）は13c後半代に相当。S X148に 遺骨器は付さない。
21 86	S12	方形	1.4×1.4	空尾輪A0211 空尾輪A0212	S X90	—	—	21号臺南側1.5m地点で人骨S X147を検出。土師 器盤破片（116）出土。小皿は13c末～14c末 埋葬と推定。
22 87	R～S12	長方形	1.4×0.9	—	S X93	—	—	遺骨器は確認できなかった。
23 88	S12	長方形	1.5×0.9	—	—	—	—	全面に石（0.25～0.3m大）敷きの様相。
24 欠番	R12	不明	—×—	—	S X92	—	—	遺骨器は確認できなかった。
25 欠番	R12～13	不明	1.0×0.8	—	—	—	—	—
26 474	S12	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	区画中央に0.3m大の川原石を据える。
27 476	R～S13	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	—
28 475	R13	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	—

北尾根第三テラス：29号墓～37号墓（第10図）本文6～7頁

報告書 旧称 号墓 S.R.N.	小地区名	通横平面 形状	面積(m) 長辺×短辺	出土石塔類% (通横内探査)	出土人骨 SX%b	伴出土器 遺骨器ほか	金属品 (古銭)	備考 (回版%・重視土器など)
29 欠番	R11	不明	不明	空尾輪A0196 空尾輪A0197～A0200 水輪A0539～0540 水輪A0541	—	—	—	配石区画通査の確認です。石塔類は上からの転落か、後世に入為的に局所に集積の可能性もある。
30 欠番	R11	長方形か	(1.4×1.0)	—	—	—	—	崩落した可能性が大きい。31号墓より後出。
31 89	R11	長方形か	2.0×1.6	—	S X94	—	—	区画配石の最初の発現点からみて、30号墓や32号墓より先行墓道に比定する。
32 64	R11	円形か	(径0.7)	—	—	—	—	区画中央に0.3m大の川原石を据える。31号墓より後出の墓。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16回参照。）

報告 年数 S.R.N.	旧称 S.R.N.	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石器類名 (遺構内採取)	出土人骨 S X №	伴出土器 骸骨ほか	金属品 (含古銭)	備考 (回復率、重複土器など)
33	81	R12	長方形	1.5×1.3	空風輪 A0082～A0083 地輪A0663～0607	S X 178	土師器小皿破片 (268)	—	土師器小皿(268)は15c後葉～16c初頭の遺物。当墓はそれ以降の築造と推定。(人骨 S X 178は旧 S X 93で、22号墓の S X 93と重複のため変更。以下 S X 名称変更はこの同一墓号重複等による混乱整理のための措置である。)
34	欠番	R11～12	不明	不明	(水) 地輪 A0955 地輪 A0658	S X 80	土師器小皿破片 (239)	—	土師器小皿(239)は14c末～15c前葉に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。
35	90	R12	方形か	1.0×1.1	—	—	—	—	
36	91	R12	長方形か	1.8×1.0	—	—	—	—	
37	92	Q12～13	方形	1.3×1.0	空風輪 A0201～ A0204 空風(火) 輪 A0860 —石五輪塔 A0938	—	土師器小皿(267) 破片	—	土師器小皿(267)は15c後葉～16c前葉に比定。当墓はそれ以降の築造と推定。

北尾根第四テラス：38号墓～46号墓まで（第10～11回）本文7頁

報告 年数 S.R.N.	旧称 S.R.N.	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石器類名 (遺構内採取)	出土人骨 S X №	伴出土器 骸骨ほか	金属品 (含古銭)	備考 (回復率、重複土器など)
38	94	Q11～12	橿円	長径1.9 短径1.2	地輪 A0653	—	—	—	周辺で、空風輪 A0229、一石五輪塔 A0944、 火風地輪(=一石五輪塔) A0996、一石五輪塔 A0961、空風火輪 A0792、空風輪 A0230、空風(火) 輪 A0864などを採取。
39	95	Q12	長方形	1.5×1.0	(偏) 柱櫛参照	—	—	—	
40	欠番	P～Q12	方形	1.5×1.5	(空) 空風輪 A0191 空風輪 A0192 空風輪 A0255 火輪 A0425 —石五輪塔 A0993	—	—	—	
41	欠番	Q12	長方形か	(1.5×1.2)	—	—	—	—	
42	96	Q13	方形か	(1.4×1.3)	—	—	—	—	
43	466	P～Q13	方形か	(1.0×0.9)	空風(火) 輪 A0863 水地輪 A0885 —石五輪塔 A0934 —石五輪塔 A0943	—	—	—	
44	463	P13～14	方形か	1.0×—	—	S X 171	—	—	P14の東斜面石の間からも骨片が少量出土。
45	464	P14	長方形か	(1.5×1.3)	—	—	—	—	斜面で崩落か。
46	465	P14	長方形か	(2.0×1.2)	空風輪 A0220 火輪 A0434 地輪 A0666～A0668	—	—	—	南北2基並ぶ地輪(A0667～A0668)に西接し て土師器皿細片も出土した。

北尾根第五テラス：47号墓～61号墓まで（第11回）本文7～8頁

報告 年数 S.R.N.	旧称 S.R.N.	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石器類名 (遺構内採取)	出土人骨 S X №	伴出土器 骸骨ほか	金属品 (含古銭)	備考 (回復率、重複土器など)
47	欠番	O13～P14	長方形か	(2.0×1.0)	空風輪 A0216～0218	—	—	—	土師器皿(127)は接合し完形復元。13c末頃～14c中葉に比定。該墓は15c初頭までには出現した可能性が高く、49号墓よりも先行すると考えられる。
48	429	O～P14	方形か	(1.0×1.0)	—	—	土師器皿(127)	—	48号より後出と推定。土師器皿(237)は接合して3形復元可能で、15c前葉～中葉ころに比定。15c後葉可能では蘭造と推定。
49	430	O14	方形か	1.0×0.8	—	—	土師器小皿(237)	—	
50	431	O14	方形か	(1.1×1.0)	火輪 A0432	—	—	—	
51	432	O14	方形	1.0×1.0	空風輪 A0219 (偏) 柱櫛 を参照)	—	—	—	49号墓との界目付(区画外)で大い骨片が地中に 突き刺さった状態で出土。配石遺構の痕跡なし。 火葬骨にしては硬い感じがした。
52	433	O14	方形	1.4×1.3	水輪 A0553 地輪 A0740	—	—	—	
53	欠番	O14	方形か	(1.3×1.2)	地輪 A0741～0742 火風地輪(=一石五輪塔) A1002	—	—	—	52号墓より後出の墓。
54	434	O14～15	長方形	0.9×0.6	—	—	—	—	
55	435	O14～15	方形か	(1.2×1.0)	—	—	—	—	
56	436	O15	方形	(1.2×1.0)	空風火輪 A0791	—	—	—	平面上は、下層で S K 486 ほど重複。
57	欠番	O15	不明	(1.0×—)	火風地輪(=一石五輪塔) A1003 風火風地輪(=一石五輪塔) A0962～A0963	—	—	—	斜面で崩落している。
58	437	O15	方形	1.2×1.1	火風輪+地輪 (=一石五輪塔) A0995	—	山茶型小皿破片	—	中央部に石貼りの小区画、納骨施設が、35号 墓411!墓にも類似の例あり。
59	501	O15	長方形か	1.3×1.0	—	—	—	—	斜面で一部崩落。
60	438	O15	方形	1.2×1.0	—	—	—	—	下層で S K 484 の一部と重複するも別遺構。
61	欠番	O16	不明	(1.2×0.8)	—	—	—	—	斜面で崩落している。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16回参照）

北尾根第六テラス：62号墓～83号墓まで（第11図）

本文 8～9頁

報告 号番	田畠 番号	小地区名	溝構平面 形状	幅員(m) 長さ×短辺	出土石器類等 (遺構内採集)	出土人骨 S X骨	伴生土器 屋骨器ほか	金属品 (古銭)	備考 (既伝化・重複土器など)
62	97	P12	方形	(12×~)	空風輪 A0188～A0189 空風 (火) 輪 A0857～ 火輪 A0422 水輪 A0536	S X95	—	—	二重の配石区画の可能性も。
63	98	P12	方形か	(18×1.5)	—	—	—	—	
64	99	P12～13	方形	18×1.6	—	—	—	—	土坑 S K 465が64～65号墓と一部重複。
65	77	P12	長方形	2.5×1.4	空風輪 A0185～A0187 空風火輪 (一石五輪塔) A1066 地輪 A0737 一石五輪塔 A0935 粗輪 A1037	S X97	—	—	土坑 S K 465と一部重複 (64号墓とも)。空風火輪 A1066は、一石五輪塔の水地輪部が欠失した状態。
66	80	O12～P13	方形	1.7×1.4	空風輪 A0178	—	—	—	
67	欠番	P12～13	長方形か	1.4×0.9	空輪 A0008 空風輪 A0179～A0180 地輪 A0645	—	—	—	空輪 A0008は其字入り、連続用の突起部 (ジヨイント) がある。法蓋計測倉庫等一覧表参照。
68	79	O13	方形か	(1.5×1.5)	空風輪 A0173～A0174 空風輪 A0175 (空) 風 (火) 輪 A0856 火輪 A0413 地輪 A0736	S X96	—	—	地輪 A0736は、区画配石に転用された可能性が大きい。
69	欠番	P13	橢円形	長径1.0 短径0.6	—	—	—	—	66・68・70号墓より後出。平面上、70号墓にかけて下層で土坑 S K 467が一部重複するが引違構。
70	100	P13	方形か	(1.3×~)	—	—	—	—	中央部に約3m×3mの川筋石三個で固められた納骨施設がある。58号墓、351号墓、411号墓と同じ。平面上下層で土坑 S K 467が一部重複するが別の遺構。東例斜面でS X267を検出し、土器器小破片 (85) も出土。
71	101	O～P13	長方形か	1.5×1.0	火輪 A0415	—	—	—	空風輪 A0181、火輪 A0416の他、空風輪 A0182～A0183などが当該区域に近接して出土。
72	500	O13	長方形	1.5×0.7	—	—	—	—	68・71号墓よりも奥側。
73	78	O13～14	方形か	(1.0×1.0)	水地輪 A0882 地輪 A0735	—	—	—	地輪 A0735は区画用の配石として転用。東例斜面下で人骨 S X263を検出し (15c 後葉～16c 前葉の土師器小破片266も出土)。
74	欠番	N～O14	方形か	(1.1×1.0)	火水地輪 (一石五輪塔) A0970	—	—	—	
75	27	N14	方形	1.2×1.2	火輪 A0331	—	—	—	
76	440	N15	方形か	1.0×~	空輪 A0005 空風輪 A0061 (空) 風 (火) 輪 A0273 水輪 A0503 水地輪 A0874～A0875 水地輪 A0893 地輪 A0584～A0585 地輪 A0612 一石五輪塔 A0920～ A0921	—	—	—	当墓区画に近接して、空風火輪 A0775、 火水地輪 (一石五輪塔) A0983なども出土。
77	24	N14	方形	1.5×1.2	一石五輪塔 A0919	—	—	—	
78	23	N14～15	方形	1.5×1.2	空風 (火) 輪 A0808～ A0810 風火地輪 (一石五輪塔) A1004	—	—	—	平面上は、概ね下層の S K 483と重複。
79	25	N14	方形	1.4×1.3	—	—	—	—	
80	22	N15	方形	1.4×1.3	空風輪 A0066 空風輪 A0076 空風 (火) 輪 A0811 火輪 A0349 地輪 A0595 一石五輪塔 A0922 一石五輪塔 A0926 火水地輪 (一石五輪塔) A0968 火水地輪 (一石五輪塔) A0980 粗輪 A1025	S X101	山茶碗小破片 (52) 古銭 (銭3) (「○口通賀」) 9	—	当墓而辺には石塔類が特に多く散乱。同じ山茶碗 (52) の破片は265号墓からも出土。合せし後元、12世紀中葉～の遺物であろう。銭 (3) の二文字は判読不能。当墓西側から天目茶碗破片 (68) が出土。14c 後葉のものか。
81	104	M～N15	方形か	1.0×~	—	—	—	—	平面上は、下層で S K 482と重複。(第35図)
82	48	M15	方形か	(1.4×1.3)	—	S X79	片口おろし皿破片 (66)	古銭 (銭6) (「開口通賀」) 9	おろし皿 (66) は15c 前葉頃に限定。当墓はそれ以前の築造と推測。銭 (6) は「開口通賀」よりも「開口通賀(開通元賀)」の可能性が高い。当墓斜面から14c 前半代の山茶碗破片 (59) も出土。
83	欠番	M15	方形か	(1.1×0.9)	—	—	—	—	

第13表 A 地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回図参照)

東側中央斜面：84号墓～108号墓まで。（第12回）本文9～10頁

報告 番号 S.R.N.	田名	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 最辺×短辺	出土石塔筒名 (遺構内採取)	出土人骨 S.X.N.	出土器 籠骨器ほか	金属品 (古鉄)	備考 (回数)・重石・土塁など)
84 441	N15	長方形か	(1.2×0.9)	—	—	—	—	—	一石五輪塔A0923、地輪A0586～0587、地輪A0588～A0589など多数の石塔が当墓周囲からも出土。
85 442	N15	方形	1.2×1.1	地輪 A0744 地輪 A0745	—	—	—	—	当墓に近接する東斜面から地輪 A0341～A0342、水輪 A0492～A0493、空瓶火輪 A0771～A0772なども出土。
86 83	N16	方形	1.2×1.1	地輪 A0613 地輪 A0746 宝鏡印塔基壇部 (左身) A1047	S X81	—	—	—	—
87 84	N16	長方形	1.5×1.2	空瓶輪 A0063～A0064 空瓶輪 A0276 空瓶(火) 輪 A0276 空瓶(火) 輪 A0814 水輪 A0876 地輪 A0747 火輪地輪(一石五輪塔) A0977	S X168 (田名 S X82)	—	—	—	当墓の周囲からは相輪 A1022、火水地輪(一石五輪塔) A0909、火輪 A0330 (a) (b)、水輪 A0483、(火) 輪 A0895、水輪 A0484なども出土した。人骨 S X168は田名 S X82のこと、13号墓下層の S X82と名称が変更したため更変した。
88 欠番	N16	不明	—×—	火輪 A0340 火輪 A0487 相輪 A1023 相輪 A1024 宝鏡印塔基壇 (笠) 部 A1045	S X76	常滑窯 (39) 天目茶碗破片 (67)	古銭 (銭5) 「唐車元寶」	—	人骨 S X76は小片。常滑窯 (39) は完出品に井上 (12c 中盤～13c 初頭)。14c 後半の天目茶碗 (67) の相輪片が16号墓から出土し、接合可能。当墓はそれ以前の梁柱部で、S X76の近傍で倒壊 (74c) も、銭5 (唐車元寶) は S X76の南側で倒壊 (74c) も、相輪片から一石五輪塔 A0914、火輪 A0815、火輪 A0338～0339のものが、地輪 A0583および A0590も出土。
89 欠番	N16	不明	—×—	水輪 A0489 地輪 A0751	S X153	—	—	—	人骨 S X153は地輪 A0751の直下で検出。当該地輪は火輪位置を保持するに解釈した。蓋置器はない。人骨は有機質容器に収めて埋葬したと推定。
90 443	M～N16	方形か	1.3×1.1	火輪 A0348 一石五輪塔 A0979	—	—	—	—	—
91 444	N16	長方形か	1.6×0.9	火輪 A0748 地輪 A0749	—	—	—	—	この両地輪は当墓区画の配石として転用された可能性が高い。
92 47	M～N16	長方形	2.0×1.4	空瓶輪 A0065 水輪 A0490 水輪 A0496 地輪 A0591 地輪 A0600 一石五輪塔 A0925	—	—	古銭 (銭4) 「天祐通寶」	—	水輪 A0496と地輪 A0600は同一地点からの出土。セッタ関係を推測させる。当墓東側の下方に隣接して地輪 (銭8) 「景定元寶」が出土した (第10表参照)。
93 欠番	M16～N17	方形か	1.5×1.5	—	S X72 S X102	S X72から 土師器破片 (105)	—	—	土師器 (105) は14c末～15c初頭に比定。当墓はそれ以前の造築と推定。人骨 S X72は小片で、遺物も全部入出。
94 50	M17	長方形	1.9×1.5	—	—	—	—	—	当墓に北接して、水輪 A0495、火輪 A037、空瓶輪 A0073～A0075などを採取した。
95 445	N17	方形	1.5×1.3	—	—	—	—	—	—
96 82	N17	方形	1.4×1.0	—	—	—	—	—	—
97 447	M17	椭円	長径2.0 短径1.6	—	—	—	—	—	—
98 446	N18	方形か	(1.2×1.2)	—	S X103	—	—	—	当墓の西側と南北に隣接して、空瓶輪 A0068及び A0069、火輪 A0344、水輪 A0494、地輪 A0597等を採取。上から崩落した可能性がある。
99 49	N18	方形	1.5×1.2	空瓶火輪 A0773 水地輪 A0877 (両方を組合させて一石五輪塔になる)	—	経営外容器開身 破片 (29)	—	—	開身 (29) は複数箇所から出土した破片の一つで、相互に接合。12c 後葉～13c 前葉に比定。空瓶火輪 A0773、水地輪 A0877は併せて一石五輪塔になる。当墓の西側と南北に隣接して空瓶(火)輪 A0818～0819、火輪 A0345、地輪 A0597および A0599、相輪 A1016等を採取 (上から崩落した可能性がある)。
100 52	M18	方形 (土塼 S K514と 周溝 S 874を伴 う方形 周溝基)	1.8×1.7	—	—	青磁碗 (6) (完品)	—	—	当墓の土塼 S X514と周溝 S X874 (幅0.6m～1.7m、深さ約3m) を作るが、柔軟斜面で落成された。南北西三方のみ残存。周溝を含む全体規模は5.1m×3.0m以上。土塼 S X514周溝から13c～14c代の青磁碗 (6) が出土。西側1mの地輪から人骨 S X181、水輪 A0565が出土。S X181は14c末頃～15c 後葉頃の土師器 (小口破片) (217) が出土。S X181は田名 S X182の名称を変更したもの。(第39回)。
101 55	M18	長方形	1.9×1.1	—	—	青磁碗破片 (64)	刀子 (鉄参考38)	—	青磁碗 (64) は13c～14c代、同一個体の破片は105号墓からも出土。100号墓より後出。
102 515	M18	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	—	区画配石の前後關係から101号墓より後出。
103 欠番	M18	方形	1.0×0.9	—	—	—	—	—	区画配石の前後關係から101号墓より後出。
104 448	M18～19	方形	1.1×0.9	—	—	—	—	—	区画配石の前後關係から101号墓より後出。
105 53	M18～19	方形	1.8×1.5	—	—	青磁碗破片 (64)	—	—	青磁碗 (64) の同一個体の破片は101号墓からも出土した。同墓はほぼ同時期に前して築造された可能性もある。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表（1～460号墓、第8～16回参照）

報告 号基 S.R.N.	旧称 小地区名	通横平断 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類期 (通横内反版)	出土人骨 S.X%#	伴出土器 遺骨器ほか	金属品 (古銅)	備考 (区分版#・重複土器など)
106 欠番	M19	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	—
107 54	M～N19	方形	1.9×1.5	—	—	—	和鏡 (76)	和鏡(76)は陳食時代末頃の蓬萊千足鏡。北妻付近から、空葉輪A0079、水輪A0498が出土。区间に秉接して、13c中葉頃の山茶碗(55)、15c中葉～後葉頃の土師器小皿破片(参考15)が出土。
108 450	M19	長方形か	(1.7×1.4)	—	—	—	—	—

西部城：109号墓～181号墓まで。（第11～13回）本文11～14頁

報告 号基 S.R.N.	旧称 小地区名	通横平断 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類期 (通横内反版)	出土人骨 S.X%#	伴出土器 遺骨器ほか	金属品 (古銅)	備考 (区分版#・重複土器など)
109 422	O10	方形か	(0.9×0.9)	—	—	—	—	全面石 (0.1～0.2m) 繋ぎ。(第33回)
110 424	P10	方形	(1.3×1.2)	水輪輪A0883 —石輪輪A0959	—	—	—	区画配石列の切り合い関係から見て、111号墓より後の墓（111号墓の北辻を共有する形でこの字形に取付くことから判断）。
111 423	P10～11	方形	1.3×1.3	空腹 (火) 輪A0859 水輪輪A0669及び A0890 (火) 地輪A0911 火輪輪 (一石五輪塔) A1012	—	—	—	110号墓より先行する墓。
112 425	P11	方形か	(1.5×1.3)	—	—	—	—	—
113 426	O～P11	方形か	(1.3×—)	—	—	—	—	—
114 427	O12	不規	(0.9×—)	—	—	—	—	—
115 欠番	O12	方形か	(1.6×1.5)	—	—	—	—	—
116 欠番	N12～O13	方形か	(1.6×1.5)	—	—	—	—	—
117 420	N13	方形か	1.4×1.3	—	—	—	—	区画中央部に0.4m大的平坦な石あり。類例は10号墓や85号墓などにもあり。
118 419	N13	方形か	1.1×1.0	—	—	—	—	—
119 34	N13	方形	1.5×1.4	—	—	—	—	平面上は、土坑S.K.466が一部下層で重複。(121号墓とも重複する)
120 33	N13	長方形か	1.7×1.3	SX68 SX98	—	—	—	遺骨器はない。
121 29	N13	椭円か	径1.3～1.5	空腹輪A0172 空腹 (火) 輪A0855	—	—	—	平面上は、土坑S.K.466が一部下層で重複。(119号墓も)
122 421	N13	方形	1.2×1.1	火輪輪A0410 地輪輪A0731～ A0734	—	—	—	地輪輪A0731からA0733の3個体は一列に並ぶ。
123 418	M13	方形か	1.0×—	—	—	—	—	—
124 30	N13	方形	1.7×1.2	—	—	ロクロ土師器皿 底部破片 (35)	—	区画配石列の切り合い関係から、125号墓より後出墓に判断。当墓に秉接して、空腹輪A0168～A0171、火輪輪A0409などが出土。埋土に混入のロクロ土師器皿底部破片 (35)は11c代以降のもの、124号墓より先行する。地輪輪のうち、4個体 (A0724～A0727) は区画配石として転用された可能性大。2個体 (A0728～A0729) はほほ元位置を保つと推定した。
125 31	M13	方形	(1.5×1.2)	地輪輪A0724～ A0729 (6個体)	—	—	—	—
126 416	M13	円形	径1.2	—	—	—	—	—
127 415	M13	不規	(0.8×0.6)	—	—	—	—	—
128 32	M14	方形	1.4×1.3	空腹輪A0086 火輪輪A0407	SX41 SX172	—	—	遺骨器はない。
129 21	M14	方形	1.8×1.6	—	SX67	—	—	遺骨器はない。平面上は、下層で土坑S.K.472の大きさが重複。
130 26	N14	方形	1.8×1.8	火輪輪A0411～ A0412 火輪輪A0454 地輪輪A0730	SX70 SX71	土師器小皿破片 (263) 常滑窯底破片 (73)	—	土師器小皿 (263) は16c前葉～後葉のもの。破片が複数枚から出たもの常滑窯底 (73) は15c前葉～に比定。当墓の東面下層で一部重複する土器5.K.473から、拂士、虎形などの模様出した。
131 51	M14	方形	(1.8×1.5)	水輪輪A0504	SX66 SX69	山田小破片 (参考10)	—	遺骨器なし。山田 (参考1.0) は13c中葉～に比定。下層で人骨5.S.X254を検出し、14c後葉～頸の土師器小皿 (216) も出土。当墓はそれより後代の築造と推定。
132 417	M14	長方形	1.4×1.0	地輪輪A0722～ A0723	SX99	—	—	下層で人骨5.S.X252を検出。その埋土より13c末～14c中葉頃の土師器小皿小破片 (152) 出土。当墓はそれより後代の築造と推定。
133 欠番	M14	方形か	(1.5×1.2)	—	SX64	—	—	遺骨器はない。
134 15	M14	方形か	(1.3×1.2)	火輪輪A0353 水輪輪A0505	SX65	—	—	遺骨器はない。
135 66	M14	方形か	(1.2×1.2)	—	SX63	—	—	遺骨器はない。
136 414	L13	長方形か	(1.5×1.0)	空腹 (火) 輪 A0853～A0854	—	—	—	他に地輪輪の一部と差しき破片1点も出土するが、計測不可能。
137 413	L13～14	方形か	(1.2×1.0)	—一石五輪塔A0933	—	—	—	—

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照。)

報告 号基 S/R No.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔跡名 (遺構内採取)	出土人骨 S X No.	伴出器物 遺骨番号	金属品 (含古鉄)	備考 (回塗色、重覆土層など)
138 412	L.13~14	不明	(1.0X~)	空風火輪A0790 火水輪+地輪 (一石五輪塔) A0991 一石五輪塔 A0955 一石五輪塔 A0951	—	—	—	一石五輪塔 A0951は区画用の配石として転用された可能性が高い。
139 102	L.14	方形か	Q.2X1.6	—	—	常滑度破片 (72)	—	二区画分の可能性も。その場合は (1.1X1.6) × 2 区画と想定。下層で S X 471 の一部が重複する。焼 (72) は15c 前半代の遺物で、複数地点から破片が出土し、接合復元。当墓はそれより後に開溝されたと推定。
140 欠番	K~L.14	方形か	(1.2X1.0)	地輪 A0716	S X 57	—	—	区画中央部に0.4m×大の石が握り、その直下で人骨 S X 57が出土。遺骨番号はない。地輪 A0716 は区画配石に転用された可能性も。
141 411	L.14	長方形	1.3X1.1	空風火輪 A777 火輪 A0354 地輪 A0721	—	—	—	全面石 (0.2 ~ 0.3m 幅) 敷きか。
142 欠番	L.14	長方形	1.3X1.1	空風 (水) 輪 A0822 ~ A0823 水輪 A0506 地輪 A0717 ~ A0720	—	—	—	地輪 A0717 ~ A0720は人位置を保つと推定。平面上に143号墓とに跨り土坑 S K 470の重複。
143 410	L.14	方形	0.6X0.6	—	—	—	—	142号墓と144号墓とに挟まれた基壇跡を利用した時代の墓。平面上は、142号墓とに跨り下層に S K 470の重複。
144 407	K~L.14	二重方形	内0.6X0.5 外1.3X1.1	—	—	—	—	二重方形区画の跡例に12号墓や401号墓がある。石で囲んだ内部を納骨室と規定すれば、58 号墓、351号墓、41号墓は跡例を見る。平面上は下層で土坑 S K 4690の一部の重複。
145 4	K~L.15	長方形か	(1.3X0.8)	一石五輪塔 A0950 相輪破片 A1036	—	土師器小皿破片 (255) 土師器鏡破片 (110 及び参考14)	—	一石五輪塔 A0950は、区画配石に転用か。平面上下層に土坑 S K 4690の重複。土師器小皿 (255) は16c 前葉～後葉。鏡 (110) は16c 前半代。鏡 (参考14) は15c 後葉～16c 初葉に比定。当墓は16c 前葉～後半の墓造と推定。
146 欠番	L.15	方形か	(1.3X1.0)	—	—	山田 (参考9)	—	接合して完形復元した山田 (参考9) は12c 後葉～13c 初葉に比定。当墓はそれ以前の墓造と推定。145号墓より先行。平面上は下層で土坑 S K 481と重複。
147 12	K.14	長方形	1.4X1.0	—	—	—	—	—
148 欠番	K.14	不明	—X—	空風輪 A0090	—	—	—	—
149 5	K.14	長方形	1.5X1.3	風輪 A0013 火水輪 (一石五輪塔) A1009	—	土師器小皿破片 (169~170)	—	土師器小皿 (169 ~ 170) は15c 中葉～後葉に比定。当墓はそれ以降に墓造と推定。
150 欠番	K~L.14	方形か	(1.2X1.1)	—	—	—	—	人骨はなかったが、区画中央部に0.5 ~ 0.6m幅の川筋形が握らる。形態的跡例には、10号墓、85 号墓、117号墓、120号墓、124 ~ 5号墓、129号墓、140号墓等がある。
151 10	K.14	長方形	1.1X0.6	空風 (火) 輪 A0824 火輪 A0356	—	—	—	149号墓より後出 (149号墓の一辺に取付く)。
152 13	K.14	方形	1.5X1.5	—	S X 156 S X 156 S X 157	土師器鏡破片 (97) 土師器鏡破片 (156) 土師器小皿破片 (157) 土師器小皿破片 (158)	—	土師器鏡破片 (97) は13c 後葉代。土師器小皿 (156) は14c 前葉～15c 後葉に比定。当墓は概ね15c 代の所持品と推定。153号墓より後出で、154号墓に接合する蓋であろう。(5 X 156 + 157) の種類状況 第37回
153 6	K.14	長方形	(0.7X0.5)	空風輪 A0089	—	土師器小皿小鏡破片 (246 ~ 248)	—	土師器小皿 (246 ~ 248) は15c 後葉～16c 初葉に比定。当墓はそれ以前の墓造と推定。152号墓より先行する。
154 405	K.14 ~ 15	長方形か	1.2X1.0	—	—	土師器小皿 土師器鏡破片 (111)	—	土師器小皿 (249) は15c 後葉～16c 未葉に比定。土師器鏡 (111) は複数個所から出土した破片の一つで、16c 後葉頃に比定。当墓は152号墓より後出で16c 後半代の墓造と推定。
155 406	K.14	方形	0.8X0.8	空 (風) 輪 A0300 火輪 A0355 地輪 A0714 風火水地輪 (一石五輪塔) A0958	—	—	—	火輪 A0355、一石五輪塔 A0958は、当墓区画に南接して出土。
156 403	K.15	円形	徑0.8	—	—	—	—	157号墓より後出。
157 11	K.14 ~ 15	長方形	2.0X1.3	地輪 A0643	—	涅槃度破片 (49)	—	杏 (49) は複数地点から出土の破片の一つで12c 代か。区画配石の前後型から、少なくとも 152号墓・160号墓・173号墓より後の墓造と推定。遺骨番なし。160号墓の区画配石に出来た後出墓。地輪の直下に人骨 S X 55が検出。(第34回)
158 欠番	K.15	不明	不明	地輪 A0715	S X 58	—	—	土師器鏡破片 (109) は14c 後葉～15c 前葉。筒身 (21) は12c 後葉～13c 前葉に比定。当墓は15c 前葉以降の墓造と推定。
159 3	K~L.15	方形か	(0.9X~)	空風輪 A0165	—	土師器鏡破片 (109) 経縫外右眉開身 鏡片 (21)	—	遺骨番なし。157・161号墓より先行。173号墓より新しく。土師器鏡 (99) 筒身部の鏡片は14c 前半代に比定。それより後代の墓造と推定。(第32回)
160 7	K.15	方形	1.6X1.2	地輪 A0641	S X 60	土師器鏡 小鏡片 (99)	—	160号墓より後出。筒石 (78) は16c 代か?
161 8	K.15	円形か	徑1.0	—	—	筒石 (78)	—	—

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1 ~ 460号墓、第8 ~ 16回参照)。

報告 号基 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類%	出土人骨 S.X% 内	伴出土器 屋骨器ほか	金属性 (古銭)	備考 (因版図・重複土器など)
162 欠番	K15	方形か	(1.2×—)	—	—	—	—	鳥身(20)は複数地点から出土した破片の一つで、12~後葉~13~前葉。当墓はそれより後代の製造と推測。地輪A0713はほぼ原形を保つと推定。当墓に近接して空風輪A0167も採取。
163 17	J~K14	方形	1.1×0.7	空風輪A0091~ A0092 地輪A0713	—	経世外容器 筒身破片(20)	—	鳥身(20)は複数地点から出土した破片の一つで、12~後葉~13~前葉。当墓はそれより後代の製造と推測。地輪A0713はほぼ原形を保つと推定。当墓に近接して空風輪A0167も採取。
164 欠番	J14	不明	不明	地輪A0642	—	—	—	区面の配石遺構は残存せず。
165 14	J14	円形か	径1.0	—	—	常滑窯小破片(88 及び90) 片口跡破片(51)	—	常滑窯(88~90)は15~前半代。片口跡(51)は複数地点から出土した破片の一つで、13~後葉~14~代に比定。当墓は15~前半代に開墾と推定。
166 欠番	J14	方形か	(1.2×1.1)	空(風)輪A0277 水輪A0507 水地輪A0878 相輪A1038	—	—	—	—
167 18	J14	方形	(1.0×0.8)	空風輪A0166 火輪A0406 —石五輪塔A0932	—	—	—	—
168 欠番	J14	方形か	(1.0×—)	—	—	—	—	—
169 409	J14	円形	径1.0	—	—	—	—	当墓に近接して空風輪A0093~空風火輪A0778~水地輪A0879を採取。
170 499	J14~15	方形	(1.2×—)	地輪A0712	—	—	—	—
171 404	J14~15	方形か	—×—	—	—	—	—	—
172 493	J15	長方形か	(1.7×0.9)	空風火輪A0788	S.X61	—	—	屋骨器なし。当墓に近接して(水)地輪A0910~火輪A0402~水輪A0532~空風輪A0161~空風輪A0162などを採取。
173 欠番	J~K15	方形	1.9×1.5	火輪A0401	—	—	—	区面中央部に平坦面をもつ0.5~0.6m大の川原石を搬入。隣例に10号墓、85号墓、117号墓、124~125号墓、129号墓、140号墓、150号墓などがある。160号墓より先行か。平面には下層に5~4.7mの根ね重複。宝鏡印塔跡破片・空風輪破片も採取したと計測は不可。
174 494	I15	方形か	(1.3×1.3)	火輪A0359 水地輪A0888 地輪A0707	—	—	—	通常の墓かどうか不詳(現代なら、六地蔵のような石像などが並んでいた可能性はない)。
175 495	I15	方形か	1.2×1.2	空風輪A0094 空風火輪A0779 水輪A0507 水地輪A0887 地輪A0616 —石五輪塔A0928	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。石塔部は斜面上面からの崩落もあるか。下層土坑5~K476の一部が重複。(170号墓など)重複。
176 L~X1	I15	方形か	1.0×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。風火輪A0780~火輪A0360~空風輪A0095~(水)地輪A0899~空風火輪A0781~相輪A1032が近接して土(崩落か)。平面には下層に5~K476の一部が重複(175号墓も)。酒井の墓かどうか不詳。空風輪A0164が近接して出土。前で火輪A0642を採取。
177 L~X2	I14~15	方形か	1.1×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。空風輪A0778~水地輪A0879が近接して出土。上からの崩落か。当墓の前方で地輪A0614~火輪A0358などを採取。
178 L~X3	I14	方形か	1.0×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。火輪(形状良) A0357が墓に近接して出土。
179 L~X4	I14	方形か	1.1×0.9	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。火輪(形状良) A0357が墓に近接して出土。
180 L~X5	I14	方形か	(1.0×0.9)	—	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。当墓に近接して出土。
181 L~X6	I14	方形か	1.1×0.9	空(風)輪A0278 (風)輪A0291 地輪A0640	—	—	—	通常の墓かどうか不詳。

山頂部~東尾根筋: 182号墓~261号墓まで。(第13~16回) 本文14~19回

報告 号基 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類%	出土人骨 S.X% 内	伴出土器 屋骨器ほか	金属性 (古銭)	備考 (因版図・重複土器など)
182 35	L15~16	方形	3.5×3.2	空風(火)輪A0871 地輪A0662 地輪A0663 地輪A0765 火水地輪(一石五輪塔) A0975 水地輪(一石五輪塔) A1013	S.X59	常滑窯破片 (73~87~91) 常滑窯大甕破片(86) 山茶瓶破片 (53~參考5) 土師器皿破片(115) 及び 小皿破片(179~180) 口跡破片(45~51) 臼輪頭破片(参考12) 経世外容器 筒身破片(20~23~27~29) 及外容器蓋(26~28)	吉種 (残11~残14) 4枚	A地区最大の石配石区段墓。区面は底土の過半を土取り等で失し、削平化。中央部に壘納の大塔全体を川原石で覆むほどの14mの円形施設が残存。納骨堂と推定。石弓位の相違から164号墓などと前半層に墓道と判明。破片が数ヶ所に散乱していた大塔(86)は12~13~後葉第四四四四塔頭のもの。塔(69)は14~後葉(73~91)は15~前葉(87)は14~後葉~15~初葉。山茶瓶(53)は12~中葉~後葉(参考5)は13~前葉塔頭。土師器皿(115)は11~末~12~前葉。小皿(179~180)は14~中期~15~後葉。口跡(45~51)は12~後葉~16~後葉(参考12)は14~中期~15~後葉。臼輪頭(参考12)は14~中期~15~後葉。筒身(20~27~29)は12~後葉~13~前葉。蓋(26~28)は12~後葉~13~前葉。これら比定。182号墓は(73~91)より後の墓造と推定。当墓の変遷を物語る遺構。(第16回)

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表(1~460号墓、第8~16回参照)。

報告 号墓 S/N	旧称 S/N	小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔頭等 (遺俄内採取)	出土人骨 S/N	伴出器物 骨質器ほか	金属品 (含古銭)	備考 (回収率、重要土器など)
183	45	L.16	長方形	3.5×1.5	空風輪A0256～A0257 空(風)輪A0302 火輪A0459～A0467 水輪A0556～A0564 地輪A0570～A0573 地輪A0759～A0764 地輪A0958 相輪A1041	S X281	片口鉢破片(45)、 経費外器物筒身 破片(20・23・29)	古銭(錢1) 「洪武通寶」	地輪等が多数集中。182号墓の下層施設か。地輪 A0570・A0573は区画石として転用か。空風輪 A0253・A0259、宝瓶地輪復元破片(斜面不可) などの区画北面壁に近寄して出土。古銭は(1)洪 武通寶は263号墓よりの境地に近い区画筒身で出 土。片口鉢(45)は14～後半代で複数か。 筒身(20・23・29)は12～後葉～13～前葉頃。 平面は182号墓との境地で下層土坑S X40が、 土坑S K49の一部(194・196号墓にも現る)や S K49の一部もそれ重複する。いずれも別 地輪。182号墓が新規定(確定)として解説され 機会で以来、多数の地輪が当該空間に埋めら れた可能性がある。(第36回)
184	25	M.16	方形か	1.8×1.2	火輪A0458 地輪A0574 地輪A0757	S X3 S X7	山茶碗小破片	S X7から 古銭(錢1)	重複する形の組合せ関係のように、区画配石の 右列の斜めに配置するから、183号墓等の 新規定により削除された先行墓と判斷。宝瓶印 屋根筒身跡地片も採取。
185	36	L.16	方形か	0.9×1.0	—	S X73	土師器筒身破片(108) 経費外器物筒身 破片(23)	—	182～183号墓等の新規定により削除された先行 墓と判斷。平面には下層土坑S K49の一部が重 複。筒(108)は14～15～前葉。筒身(23) は12～後葉～13～前葉に比定。当墓は少なくとも 15～前葉以前に出現していた可能性があると 推定。
186	37	M.16	方形か	不詳	空風輪A0025	S X2	S X2から 土師器皿小 破片(151) 理工室から 山茶碗破片 (参考3)	—	182号墓や183号墓等の新規定により削除された先行 墓と判斷。土師器皿小(151)は14～中葉～後葉頃。 山茶碗(参考3)は理工室地点から出土した破片の一 つで、13～中葉代と推定。当墓は14～未詳ま でには出現していなかった。宝瓶印屋根筒身A1029 ほか筒片も近傍地で採取した。遺器はない。
187	449	L.16	方形	1.4×1.1	—	—	—	—	区画中央に石(0.3～0.5m)大)がある。141号 墓など同じ圓筒石敷き。平面上は183号墓に跨 り土坑S K49の一帯が重複するが、別通模。
188	欠番	M.16	不詳	不詳	—	—	—	刀子 (鉄參考35)	187号墓との関係は不明。
189	38	M.16	長方形	1.6×1.2	(空)風(火)輪 A0813	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。宝瓶印 屋根筒身(笠部)破片も採取したが、計測不可。 人骨S X74は特に通路を以て埋納した ものと推定。遺骨器はない。
190	39	M.16	方形	1.6×1.2	—	S X74	山茶碗底部破片 (参考2)	—	182・183号墓より先行する墓と推定。宝瓶印 屋根筒身(笠部)破片も出土。下層土坑S K49と重 複。山茶碗は12～中葉～後葉。当墓はそれより後 出。
191	40	M.16	方形	1.7×1.3	—	S X4 S X5 S X6	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。平面上は、 下層土坑S K49(人骨S X219も含む)と重複。 S X6から下限骨の一部が出土(底石あり)。 遺骨器はない。
192	欠番	K.16	方形	1.2×0.9	—	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。下層土 坑S X48(7)の一部と重複。
193	欠番	K.16	方形	1.1×1.0	空風(火)輪A0806 地輪A0582	—	—	—	182・183号墓より先行する墓と推定。下層で土 坑S X48(7)の一部と重複。
194	欠番	L.16	不詳	1.3×1.3	—	S X282	—	—	遺骨器はない。平面上は、下層に土坑S K49の 一部と重複。(183・196号墓にも跨る)。
195	462	K.16～17	方形	1.3×1.1	空風輪A0027～A0028 空(風)輪A0266 小輪A0315 水輪A0474 地輪A0756	S X44	—	—	遺骨器はない。下層の土坑S K50は平面上、当 墓と205号墓とに跨って重複するが、別の通模。
196	44	L.16	長方形か	1.9×1.1	空風輪A0002 空風輪破片A0004 足輪A0011 空風輪A0031 空(風)輪A0365 空(風)輪A0296 地輪A0756	S X77	土師器皿小 破片(181～185)、 常徳便筒身破片(91)、 天日茶碗破片(68)	—	平面上は、下層にS K49の一部が重複(183 号墓は194号墓にも跨る)。土師器皿小(181～ 185)は、15～中葉～後葉の一点で、15～前 葉～中葉に天日茶碗(68)は14～中葉代に比定。 当墓は15～中葉～後葉に通路を以て採取。
197	欠番	L.17	方形	1.5×1.4	火輪A0313 地輪A0578	S X100 S X104	—	—	人骨S X104は径25～30cm、深さ14cmの納骨穴 で多く出土。有利機縫のものに納骨したか? 196 号墓は別と勘定した。
198	452	L.17	方形	1.5×1.2	地輪A0579	S X173	土師器筒身 (時期不明)	—	遺骨器なし。空火輪A0774や(水)地輪A 0896などを近接地で採取した。
199	42	L.17	方形	1.3×1.2	—	—	土師器筒身 (時期不明)	—	近接地で、相輪A1026のほか宝瓶印屋根筒身の小 破片などを採取。平面上は、下層で土坑S K504 と重複する。
200	41	M.16～17	方形か	0.2×2.0	—	S X75	土師器皿小 (参考11) 山茶碗小破片(参考11) 及び 陶器蓋小破片	—	土師器皿(113)は12～後半代～13～前葉。山茶 (参考11)は13～前葉に比定。当墓はそれ以後 の南宋と推定。188号墓より後出の墓。
201	43	M.17～18	方形か	(1.7×—)	空風輪A0071～ A0072 火輪A0346	—	土師器皿空筒身器 の部破片(30・31) 経費外器物筒身 破片(29)	—	東・南側斜面で崩落。円筒状容器(30・31)は 166号墓で出土した。12～13～前葉～初期頃か。 伊勢治台寺塔ノロ口経筒等に類似品がある。筒身 (29)は12～後葉～13～前葉に比定。それ以後 に通路としか言えない。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照)

報告 号基 (S.R.N)	小地区名	通構平面 形状	横構(m) 長辺×短辺	出土石器類期 (通構内反映)	出土人骨 S.X#	伴出土器 墓骨器ほか	金属品 (古銭)	備考 (因版#・重複土器など)
202 欠番	L17	長方形か	(2.7×1.5)	相輪A1027～A1028 寶鏡印塔基部破片 A1044	—	—	—	区画束縛から寶鏡印塔関係部品を4点採取したのが唯一の特徴。
203 453	L17	方形	1.3×1.1	地輪A0576～A0577	—	—	—	平面上は、下層でS.K503と重複。
204 454	L17	方形	1.1×1.0	地輪A0634～A0635	S X78	—	—	平面をもつ2.45mの大川原石を据える。類例は173号墓や187号墓などに見られる。墓骨器はない。地輪の土坑は芦井式墓で珍しい。
205 460	K17	長方形	2.5×1.9	水輪A0555	—	—	—	184・195・206号墓などと共に、(18)・(18)号墓第2以前の区画配石列方位を頭蓋。下層の土坑S.K501は平面をもつ当墓や195号墓と同て重複(S.K502とも重複する)。
206 461	K17～18	方形	1.8×1.7	火輪A0317 地輪A0580 地輪A0674 水輪A0554 地輪A0575	—	—	—	平面上は下層土坑S.K501と重複。295号墓との間の通路下でS.K509が重複。
207 455	L17～18	長方形	1.7×1.3		S X9	—	刀子(鉄2)	墓骨器なし。刀子類銀表を参照。平面上は、下層土坑S.K510と重複。
208 46	L17	長方形か	1.7×1.2	—石五輪塔A0989	S X1 S X174 S X175	S X174で(46) S X175で(47)	刀子(鉄1) 及び小刀 (鉄12)	人骨S.X1には墓骨器なし。西(46)は14C代に比定。小刀(鉄12)が伴出。西(47)は14C中量頭に比定。刀子(鉄1)が伴出。区画規模は2.3×1.2の可能性あり。埋土中から経年外器物周辺破片(29)も出土。14C中量に隣に施設の墓と推定。(第34回)
209 欠番	L18	方形	(2.0×1.8)	水輪A0476 水輪A0528	—	—	—	
210 456	L18	方形	1.6×1.6	—	—	—	—	
211 530	K18	長方形か	(2.0×1.7)	—	—	—	—	
212 516	L18	不明	(0.9×?)	—	S X150	—	—	S X150は墓間通路で埋葬した。墓骨器はない。平面上は下層土坑S.K512と一部重複。
213 367	K18	円形か	徑1.5	—	—	—	—	
214 457	L18	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	
215 458	L.18～19	方形	(1.1×1.0)	—	—	—	—	平面上は、下層のS.K524の一部が重複。
216 欠番	L19	方形か	(1.6×1.3)	—	—	—	—	平面上は、下層S.K522と重複。
217 459	L19	方形	1.3×1.2	—	—	—	—	平面上は、下層S.K525と重複。当墓と313号墓及び314号墓との間の通路下で土坑S.K523が重複。
218 451	M20	方形か	(1.0×0.8)	—	—	—	—	
219 欠番	M19～20	方形か	(0.9×?)	—	—	—	—	
220 59	L.20～M21	長方形	(2.7×2.0)	—	S X176	源美庄壹(40) 山茶鏡(56)	—	約0.3mの埴丘と土坑あり。美術品香(40)・412cと同一・13c初期前・比定。11世前葉・中量鏡(山茶鏡(56))を墓にして置き、墓はそれに隣の施設。区画内から出土の土師器皿類小品(13)は後代の追入遺物。(第35回)
221 67	N16	方形(村 周溝SD 875～S D876)	2.1×2.1	—	—	ロクロ土師器皿底 部破片(36～37)	土師S.K533 から 刀子(鉄4)	221号墓は出入口付で土塁や周溝の存在は判明なかった。下層土坑S.K533は周溝D.875～876の間に位置する。周溝は10.6m×2.65m、深さ0.3～0.4mで、その周囲中央から出土したロクロ土師器皿底部破片(36～37)は11世紀～12世紀に比定。少くとも墓窓はそれ以前の所蔵。
222 63	L～M21	方形	1.8×1.8	空尾輪A0136	—	—	—	平面上は、下層に土坑S.K546が重複。223号墓との間の下層に土坑S.K547と重複。222号墓の間に土窓S.K545が重複。
223 61	M21	不詳	不詳	空尾輪A0798	—	—	—	空尾輪A0798は区画配石として転用か。222号墓の間に土窓S.K545が重複。
224 欠番	M21	方形か	不詳	—	—	—	—	育母子画中央部にS.K682(直径約5m)のみ残存。遺跡はない。
225 62	M21～22	方形	1.2×1.1	水地輪A0892	—	—	—	水地輪A0892は北西隅の区画配石として転用された。
226 511	N21	方形か	(2.0×1.8)	—	—	—	—	水地輪A0881は隣接地で採取。刀子(鉄17)が東側して出土。
227 68	O21	橢円形 (配石区 画はなく 付周溝)	長径約2.5m 短径約2.0m	—	—	—	—	約0.4mの埴丘盛土道溝。三方に周溝SD.877がめぐる。溝幅約0.8m～1.0m、深さ約3m～0.45m。遺物なし。周溝の切合が間隔から、221号墓より新しく236号墓より古い。(第37回)
228 65	M21～22	方形	1.7×1.6	空尾(火)輪A0841 ～A0842 火輪A0375	—	—	—	383号墓より先に行する墓。隣接地で空尾輪A0125や火輪A0624を採取。平面上は下層の土坑S.K554と重複。
229 欠番	M22	長方形	(1.7×0.9)	—	S X62	土師器皿底破片 (222)	—	228号墓と230号墓との間(墓道)を利用した墓、從って両墓より後出の転用品。S X62出土の土師器皿(222)は14世末～15世前葉に比定。墓はそれが以降の通路と推定。
230 56	M22	方形	1.8×1.8	空尾輪A0135	S X52	—	—	397号墓より先に行する墓。平面上は下層の土坑S.K555と重複。231・232号墓にも跨ってS.K556の一部も重複。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照)

報告 年基 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔跡N ₀ (遺構内採取)	出土人骨 S X N ₀	伴出土器 骸骨跡ほか	金属品 (含古鉄)	備考 (回復率、重複土器など)
231 513	M22	長方形か (1.9×1.4)	—	S X 53	—	—	—	234号墓との間で空風輪A0123～A0124や水輪A0154などを採取。平面には230号墓・232号墓に跨って下層S付近S K556の一部が重複。
232 欠番	M～N22	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	平面には、230・231号墓にも跨って下層の土坑S K556が重複。233号墓にかけては下層S K557も重複している。
233 512	N22	方形	(1.3×1.3)	空風輪A0785	—	—	—	平面には、232号墓にかけて下層S K557が重複。
234 71	N22	方形	2.0×1.9	水輪(梵字) A0513	—	—	—	平面には、233号墓にかけて下層S K557が重複。
235 70	N～O22	円形	直径約2.5m	地輪A0675	S X 205	源美座西(43)	小刀 (鉄参考36)	平面には、232号墓にかけて下層S K557が重複。平面には、火葬場殿S K558の約半分が重複。梵字入り水輪A0513と230号墓出土の梵字入り空風輪A0120とセラ・開拓による。
236 69	O～P22	橢円形 (付周溝 S D 878)	長径約3.5m 短径約2.5m	—	—	土師器小皿破片 (238)	—	高さ約0.36mの墳丘状土壇。源美座西(43)、1412c後半代に比定。0.25m×(厚さ0.1m)の範平な石を側面に用いた。梵字入り水輪A0513とセラ・開拓による。周囲S D 878は幅0.5m～1.2m、高さ0.3m～0.65m、周囲内出土の土師器小皿(238)は1412c中後葉に比定。周囲溝はそれ以前に埋設したと推定。当墓はそれ以前の築造であろう。
237 欠番	P22	不詳	不詳	—	—	—	—	半円形土壇あり。平面上は、下層の土坑S K559が重複。
238 514	M22～23	方形	1.5×1.4	空風輪(其字入り) A0120	—	—	—	239号墓より先行する。空風輪A0120は234号墓出土の水輪A0513とセット関係にある可能性がある。平面上は下層土壇S K558の一部が重複。
239 58	M～N23	方形	1.8×1.7	—	—	—	—	238号墓より240号墓より後出の墓。火葬地輪(一石五輪塔) A0987を近傍地で採取した。
240 72	N23	長方形	1.9×1.5	空風輪A0121	—	—	—	道士壇0.4～0.42m。平面上は下層土壇S K568が重複。239号墓より先行し、243号墓より後出の墓。
241 欠番	N23	長方形	2.2×1.0	火輪A0370 地輪A0623	—	—	—	240号墓より後出。
242 484	N23	方形	(1.3×0.9)	—	—	—	—	—
243 73	N～O23	方形 (付周溝 S D 879)	2.5×2.4	—	S X 177 (S K570 の内)	—	—	約0.3mの墳丘状土壇が残存。火葬土坑S K570の上に重ねた墓。三辺に周溝S D 879が沿る。溝幅約0.5m～1.0m、深さ0.25mを測る。形態的には小舟形な方形周溝墓。240号墓より先行する。骸骨跡なし。(第368頁)
244 482	O23	方形	1.3×1.3	空風輪A0029 水輪A0475	—	—	—	243号墓より後出。火輪A0374を近傍地で採取。
245 欠番	O23	橢円形	1.1×0.6	—	S X 169	—	—	244号墓・246号墓より後出か。親縁関係ありと推定。人骨S X 169は15×147を名称変更した。骸骨跡なし。
246 483	O23	方形	1.9×1.6	空風輪A122	—	—	—	243号墓より後出の墓。
247 欠番	N24	長方形か (2.0×1.0)	—	空風輪(火) 輪A0840 火輪A0369	S X 128	—	—	骸骨跡なし。空風輪A0119を近傍して採取した。
248 336	N24	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	—
249 74	N24	長方形	3.2×1.8	—	土師器高台付輪 底部破片(80)、 土師器小皿破片 (235)	—	—	414号墓・443号墓より先行する墓。土師器頸(80)は15c後半～16c初頭頃か。土師器小皿(235)は14c末～15c後葉に比定。墓は15c後葉以降に開墾と推定。
250 75	N～O25	長方形	3.0×1.8	地輪A0681	—	—	—	盛土高約0.4～0.44m。平面上は下層に土坑S K594が重複する。
251 508	O～P24	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	平面上は、下層にS K579がおむね重複。
252 507	P24	方形	1.0×1.0	—	—	—	—	—
253 509	O24～25	方形	(1.2×1.1)	—	—	—	—	平面上、257号墓との中間部の下層で土坑S K595が重複する。
254 506	P25	円形か (僅1.1)	—	—	—	—	—	—
255 505	P25～26	方形か (1.1×1.1)	—	—	—	—	—	—
256 欠番	P26	方形か (1.0×—)	—	—	—	—	—	—
257 106	O25	長方形	2.7×1.9	—	—	—	—	残存する道士壇約0.3m。平面上、254号墓との中間部の下層で土坑S K595が重複。
258 108	O26	方形	1.5×1.5	—	—	—	—	—
259 503	P26	方形	0.9×0.9	—	—	—	—	—
260 109	P26	方形か (1.6×1.2)	—	—	—	—	—	—
261 504	P26～27	方形か (1.0×1.0)	—	—	—	—	—	—

南・東側斜面: 262号墓～460号墓まで (第13～16図)

本文19～28頁

報告 年基 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔跡N ₀ (遺構内採取)	出土人骨 S X N ₀	伴出土器 骸骨跡ほか	金属品 (含古鉄)	備考 (回復率、重複土器など)
262 欠番	L15	長方形か (2.0×1.1)	—	—	—	—	吉銘(鉄2) 「永安通鑑」1枚	銭貯貯京表(鉄2) 参照。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照)。

報告 号基 (SRNo)	田所 小地区名	遺構平面 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類%	出土人骨 S X%#	伴出土器 量骨器ほか	全品目 (合古残)	備考 (因版版・重複土器など)
263 1	K15～16	方形か	(1.5×1.4)	—	S X55	—	—	尾骨器なし。当墓の南西側隣接地で防火水輪(一石五輪塔)A1007・水輪A088を採取。人骨S X55の南側(18号墓南側)で古墳(鉄1)「沢武遺跡」が出土。平面は下層で坑5 K487の一部と重複。
264 402	K16	長方形か	1.5×1.1	—	S X56	常滑産焼小鏡片 (87)	—	尾骨器なし。鐵(87)は14c後葉～15c初頭頃に比定。当墓はそれより以降の改造と推定。同個体の別個破片は18号墓から出土。
265 2	K16	不詳	不詳	—	S X145	山茶壺小鏡片 (52)	—	尾骨器なし。人骨S X145は2649号墓の南東外壁に挿して検出。本来は墓道の通路の可能性も。山茶壺(52)は12c中葉頃に比定。同個体の他の破片は80号墓から出土。
266 9	K～L16	不詳	不詳	相輪A1017	S X10 S X142 S X143	土師質円筒状容器 の内部破片(30) 及び(31) 常滑産口鉢鏡片 (45) 経内外器皿身 破片(29)	銚子 (鉄52)	鏡器なし。(30) (31)の同一個体の破片は201号墓から出土。12c末～13c初頭頃に比定(伊勢台寺址満ノ原跡)で類似鏡片あり。鉄(45)の破片は18号墓、183号墓からも出土。14c代に比定。筒身(29)の破片は99・182・183・201号墓から出土。12c後葉～13c前半代に比定。当墓は14c代以降の範囲と推定。
267 欠番	K16	不詳	不詳	空(風) 輪A0299	(S X 142)	—	—	266号墓のS X142は当墓の可能性もある。
268 欠番	J～K16	方形か	(1.5×1.2)	(水) 地輪A0903 相輪A1018	—	—	—	—
269 401	J16	方形	1.1×1.1	—	—	—	—	270号墓より後出の墓。当墓の西側近隣地で火輪A0400や(水) 地輪A0902を採取した。
270 400	J16	方形	1.1×1.1	—	—	—	—	269号墓より先行する墓。
271 398	J16～17	長方形か	(1.5×1.1)	—	—	—	—	—
272 欠番	J16	方形か	(1.3×1.3)	地輪A0639	—	—	—	270号墓より後出の墓。
273 399	J16	方形	1.2×1.1	—	S X8	土師器鏡破片(102) 刀子 (鉄27)	5 Xから 刀子 (鉄27)	西隅通路で火輪A0323・火輪A0398を採取。鏡(102)は麻平石(0.26m、厚さ0.11m)を置にしていた。14c前半代に比定。当墓はそれ以降の改造と推定。(第34回)
274 498	I16～17	円形か	(径1.1)	—	—	—	—	当墓の西側で一石五輪塔A0913を採取。
275 497	I～J17	円形か	(径1.0)	水輪A0530	S X151	—	—	人骨S X151は旧S X10の名称を変更。刀子類觀察表参照。
276 392	I～J17	方形	(1.3×1.1)	—	—	—	—	277号墓より後出の可能性。平面上は下層の土坑S K497とほぼ重複する。
277 393	J17	円形	径1.4	—	—	—	—	276号墓より先行する可能性。近接地で空瓶輪A0055を採取。
278 欠番	J17	円形か	(径1.0)	—	—	—	—	—
279 欠番	J17	方形か	(0.9×—)	空・風輪小鏡片 水輪A0478	—	—	—	平面上は、下層でS K498の一部が重複(280号墓)も。
280 394	J17	長方形か	(1.1×0.9)	—	—	—	—	集石残存。平面上は、下層でS K498の一部と重複(279号墓)も。
281 397	J17	円形か	(径1.1)	—	—	—	—	—
282 16	J～K17	(長方形)	(～×0.45)	空(風) 輪A0289 空風(火) 輪A0851 水輪A0529	S X162	土師器羽釜破片 (94)	—	本来281号墓と283号墓との間の通路であった空間を転用か。平面上は下層でS K500の一部が重複。土師器羽釜(94)は15c中葉頃に比定。当墓はそれ以前の築造と推定。人骨S X162は旧S X10の名称を変更した。
283 396	K16～17	長方形	1.5×1.1	—	—	—	—	平面上は下層でS K498の大半が重複。近接地で地輪A0636、地輪A0637・空風(火) 輪A0850などを採取。
284 20	K17	(長方形)	(～×0.45)	空(風) 輪A0272 水地輪A0673 相輪A1043	S X11	土師器羽釜破片 (93)	—	本来は281号墓と285号墓との間の通路であった空間を転用か。土師器羽釜(93)は16c代に比定。当墓はそれ以前に築造と推定。
285 395	J～K17	長方形	2.1×1.9	一石五輪塔A0990	—	—	—	295号墓より先行する墓。乗物馬道で空瓶輪A0767・空瓶輪A0054を採取した。
286 390	J18	方形	1.2×1.1	—	—	—	—	平面上は下層のS K499と概ね重複。
287 欠番	J17	方形か	(1.0×1.0)	—	—	—	—	—
288 欠番	I17～18	方形か	(0.9×0.9)	空瓶輪A0033 空(風) 輪A0290	—	—	—	—
289 欠番	I17	不詳	不詳	—	—	—	—	—
290 391	I17～18	方形か	不詳	火輪A0453 地輪A0638	—	—	—	—
291 欠番	I18	不詳	不詳	—	S X12 S X13	—	—	人骨S X13の直上には扁平な石が据えてあった。更にその直上に曾ては五輪塔が設置されていた可能性がある。
292 112	J18	円形か	(径1.5)	空瓶輪A0034 空瓶輪A0035	—	ロクロ土師器皿底 部破片(33)	—	本墓は全面的に敷きか。ロクロ土師器皿(33)は埋土器入遺物T11 c代に比定。平面上は、下層土坑S K5064当墓とほぼ重複する。
293 373	J17～18	方形か	(1.5×—)	空瓶輪A0032 火輪A0324	—	—	—	平面上は下層で土坑S K507がほぼ重複する。
294 370	J17～18	方形か	(1.3×1.3)	空瓶輪A0158	—	—	—	296号墓より先行する墓。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照。)

報告 号墓 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) (長辺×短辺)	出土石塔頭等 (遺儀内採取)	出土人骨 S X N	伴出器物 遺骨器ほか	金属性品 (含古鉄)	備考 (回復N.・重複土器など)
295 369	K.17～18	長方形	2.4×1.8	空風輪A0057 空風輪(火) 輪A0805	—	—	—	285号墓より後出の墓。当墓は206号墓との間の通路部分の下層で5 K509が重複。
296 371	J.18	長方形	(1.5×0.9)	(空) 風輪A0251	—	—	—	本來は墓道であった空間を利用した墓か、294号墓・295号墓より後出の墓。
297 372	J.～K.18	方形	(1.3×1.2)	—	—	—	—	296号墓に先行し、295号墓より後出の墓。南東側の墓道で水輪 A0479・空風輪A0056を探取。
298 374	J.18	長方形	1.4×1.3	—	—	—	—	
299 375	J.18	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	
300 376	J.18	方形	1.2×1.1	火輪A0396	S X 161	—	—	遺骨器なし。東側墓道で水輪 A0525・水輪 A 0526を探取。旧 S X 11が284号墓 S X 11と名前重複したので S X 161に変更した。
301 377	J.18	方形か	(1.0×—)	空風輪A0157	—	—	—	
302 378	J.18～19	方形か	(1.0×—)	—	—	—	—	区画中央部に平坦面をもつ0.5mの大の石が握る。人骨なし。173号墓・187号墓、204号墓などに類似。平面上は、大略下層土坑 S K 517と重複する。
303 379	I.～J.18	円形か	(徑1.1)	—	—	—	—	
304 欠番	I.～J.18	方形か	(0.9×0.9)	地輪A0581	—	—	—	
305 380	I.18～J.19	方形か	(1.0×0.9)	—	S X 14	—	—	遺骨器なし。
306 381	J.19	方形か	(1.1×—)	火輪A0321 地輪A0700～0704	—	—	—	五個の地輪が集中。(地輪A0702～A0704は区画配石に転用された可能性もある。)
307 529	K.18	長方形	(2.1×1.4)	—	—	—	—	平面には下層で土坑 S K 508と重複。
308 365	K.18～19	方形	(0.9×0.6)	—	—	—	—	当墓は、墓道を転用して築造したと判断。
309 366	K.18～19	方形	1.3×1.3	—	—	—	—	
310 362	K.19	方形	1.5×1.3	水輪A0480 (水) 地輪A0908	—	—	—	
311 364	K.19	長方形	(1.1×1.1)	空風輪A0150	—	—	—	平坦面をもつ0.4mの大の石が2個握るもの骨の出土なし。310号墓・312号墓より後出の墓。下層 S K 520が当墓上312号墓とあって重複。315号墓より後出の墓。空風輪A0151・水輪 A 0900を南北西に隣接する墓道で探取。平面以上は当墓と311号墓間に跨り下層土坑 S K 520が重複。
312 311	K.19	方形	1.1×1.0	—	—	—	—	315号墓より後出の墓。空風輪A0149を西側隣接地で探取。平面上は314号墓・315号墓との間の通路部分下に土坑 S K 523が重複。
313 368	K.19	円形か	徑1.8	—	—	—	—	本來は墓道であったが、平面上は317号墓・313号墓との間の通路部分下に土坑 S K 523が重複。
314 欠番	K.～L.19	長方形か	(2.0×—)	—	—	—	—	平面には下層で土坑 S K 521と重複。空風輪 A 0049を隣接地で探取。
315 311	K.19～20	方形	1.9×1.8	—	—	—	—	空風輪A0147・空風輪0148・水輪 A 0521を近接地で探取。
316 383	K.19～20	方形	1.3×1.2	空風(火) 輪A0846 空風(火) 輪A0847 地輪A0627	—	—	—	—
317 363	J.19	方形か	1.3内外	火輪A0391	—	—	—	地輪A 0628を近接地で探取。墓道利用か。平面上は下層で土坑 S K 518の一部が分離。
318 361	J.19	長方形	2.4×1.1	空風輪A0155 火輪A0319 地輪A0705	S X 15 S X 16	—	—	遺骨器なし。人骨 S X 162は平坦面をもつ0.3mの大の石の下から出土。319号墓より後出か。320号墓に跨る。束接地で地輪A 0631～火輪A 0394などを探取した。
319 382	J.19	長橋円形	2.0×1.0	—	S X 105	—	—	遺骨器なし。径1.1mの円形の可能性あり。人骨 S X 105は平坦面をもつ0.3mの大の石の下から出土。水輪 A 0522を近接地で探取。平面上は下層で土坑 S K 519が重複。
320 217	J.19	方形	1.3×1.2	空(風) 輪A0267 空風輪A0039 地輪A 0680	S X 38 S X 106 S X 107 S X 108	—	—	遺骨器なし。318号墓との間で空風輪A0156を探取。318号墓に西側で321号墓と一緒に墓があつた可能性も。
321 欠番	J.19	方形	1.3×1.3	火輪A0318	—	—	—	320号墓と一緒に長方形の墓になる可能性もある。
322 欠番	J.19	方形か	(1.0×—)	—	S X 170	—	—	遺骨器なし。人骨 S X 170は S X 148を名前変更した。平面上は当墓と325号墓とに跨って下層で土坑 S K 516が重複する。
323	J.19	方形か	(1.0×1.0)	地輪A 0699	—	—	—	平面より、下層土坑 S K 515と重複する。S K 515出土土器器底破片は13cm未～14cm前頭部に北定(土坑一覧表参照)。
324 欠番	I.～J.19	方形か	(1.2×—)	火輪A0395 水輪A0524	—	—	—	平面より、322号墓と323号墓とに跨り下層で土坑 S K 516が重複。
325 387	I.～J.19	方形か	(1.3×1.3)	一石五輪塔 A0931	S X 29	—	—	328号墓より先行する墓。
326 384	J.20	方形	1.2×1.3	—	—	—	—	遺骨器なし。327号墓より後出の墓。左記 A0452～A1000の石塔は当該328号墓を造る際、明らかに他のこれら集めで区画面配石として転用したもの。当墓の後代性を示す。
327 385	J.20	方形	1.8×1.8	空(風) 輪A0270	—	—	—	
328 386	J.20	方形	0.8×0.8	空風輪A0040 火輪A0452 (水) 地輪A0886 一石五輪塔 A1000	S X 28	—	—	

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照。)

報告 号基 (SRNo)	旧称	小地区名	通構平面 形状	横構(m) 長辺×短辺	出土石塔期(年) (通構内反映)	出土人骨 S X No	伴出土器 遺骨器ほか	金属性 (古銅)	備考 (因版(6)・重複土壤など)
329 388	I～J20	方形	(1.1×—)	空腹 (火) 輪A0549 地輪A0632 地輪A0633	—	—	—	—	—
330 389	J20	方形か	(1.6×—)	—	—	—	—	—	当墓の西側で一石五輪塔A0954を採取。
331 301	K20	方形	1.5×1.2	—	—	—	—	—	332号墓より後出の墓か。
332 302	J～K20	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	—	331・333号墓より先行する墓か。
333 303	J20	方形	(1.2×1.2)	—	—	—	—	—	332号墓より後出の墓か。平面上は334号墓・340号墓に跨り下層で土坑S K528が重複。
334 304	J20	不詳	不詳	—	—	—	—	—	平面上は333号墓・340号墓に跨り下層で土坑S K528が重複する。
335 305	J20	長方形か	1.7×1.2	相輪A1019	S X25	—	—	—	人骨S X25は平坦面をもつ0.4m大の石の直下から出土。遺骨器はない。平面上は下層で土坑S K534が重複する。
336 欠番	J20～21	方形か	(1.5×—)	—	—	—	—	—	—
337 537	J21	長方形か	(2.0×—)	—	S X26 S X27	—	—	—	遺骨器なし。
338 306	J20～21	長方形か	(1.6×1.0)	空腹輪A0051 相輪A1020	S X24	—	—	—	遺骨器なし。平面上は下層で土坑S K534と概ね重複する。
339 307	J20～21	方形	1.0×0.9	空腹輪A0050	—	—	—	—	—
340 308	J～K20	方形	1.2×1.1	空腹輪A0041 空腹輪A0042 空腹輪A0141 空腹輪A0146	(下層で S X232 を検出)	—	刀子 (鉄20)	—	遺骨器なし。下層検出の人骨S X232(刀子鉄20)は当墓に伴う可能性あり。平面上は333号墓・334号墓に跨り下層土坑S K528も重複する。
341 309	K20	方形	1.2×1.2	空腹輪A0044 空腹輪A0045 地輪A0626	S X17 S X152	—	—	—	遺骨器なし。空腹輪A0043・A0046～A0048・火輪A0322が近接周囲で採取した。
342 310	K20	方形	1.3×1.1	—	—	—	—	—	343号墓より後出の墓。
343 491	K～L20	方形	1.4×1.4	—	—	—	—	—	344号墓より先行する墓。
344 欠番	K～L20	方形	1.0×0.9	—	—	—	—	—	343・349号墓より後出の墓。
345 489	L20	方形	(1.5×1.3)	—	—	—	—	—	平面上は下層の土坑S K531と概ね重複する。S K531から土師器皿・小の6枚土、14c米～15c前葉(6件)と判定(土坑1-蓋表参照)。
346 490	L19～20	長方形か	(1.5×1.1)	—	—	—	—	—	平面上は下層でS K526の一部が重複する。
347 欠番	L20	長方形か	(1.5×1.2)	—	—	—	—	—	348号墓より後出の墓。
348 488	L20	方形	1.4×1.3	—	—	—	—	—	平面上下層で概ねS K532と重複。土坑から山茶硝(58)の出土。
349 487	L20	方形	1.4×1.2	—	—	—	—	—	平面上下層で土坑S K530と概ね重複。343号墓・350号墓・352号墓などと並行する墓。
350 486	L20～21	長方形	1.6×1.3	—	—	—	—	—	平面上は下層でS K543と重複。
351 201	K～L21	方形	1.6×1.4	—	—	—	—	—	区画中央部に直方体の形状に川原石で囲まれた0.4×0.4mの施設があり、納用施設と推定(58号墓+411号墓にとも動跡あり)。(第34回)
352 528	K～L20	長方形	1.4×1.1	—	—	—	—	—	349号墓より後出の墓。(平面上は下層の土坑S K529と概ね重複)。
353 321	K20	方形	1.2×1.2	—	—	—	—	—	—
354 314	K20	方形	1.4×1.3	火輪A0390 空腹輪A0254 火輪A0451 火輪A0552 地輪A0696 (五輪セッタ削い)	—	—	—	355・356号墓より先行する墓。遺物実測図第51回参照。	—
355 315	K20～21	方形	0.8×0.8	火輪A0385 地輪A0697	—	—	—	354号墓・357号墓より後出の墓。空腹火輪が区画の一部で転用されていた。平面上は356号墓に跨って下層で土坑S K540が重複している。	—
356 317	K21	長方形か	1.0×0.6	—	—	—	—	354号墓・357号墓より後出の墓。平面上、355号墓に跨って下層で土坑S K540が重複。	—
357 316	K21	方形	1.5×1.2	—	—	—	—	360号墓より先行する墓。	—
358 313	K20～21	方形	1.4×1.3	地輪A0696	S X22	—	—	359号墓より先行する墓。平面上は下層の土坑S K530と概ね重複。	—
359 318/小	K21	長方形	1.3×0.9	—	—	—	—	358号墓・360号墓より後出の墓。平面上、360号墓に跨って下層で土坑S K530が重複。	—
360 319	K21	方形	(1.5×1.2)	(空) 黑(火) 輪A0807 地輪A0694	—	—	—	平面上、359号墓に跨って下層の土坑S K530が重複する。	—
361 欠番	K21	橢円形	1.5～0.6	—	S X21	—	—	遺骨器なし。埴輪軒用のため、358号墓・360号墓・361号墓より後出の墓と推定。近接周囲で火輪A0386を採取。平面上は下層の土坑S K537と概ね重複する。	—
362 312	J21	方形	(1.5×—)	空(風) 輪A0287	S X23 S X48	—	—	遺骨器なし。空腹輪A0139～A0140を近接地で採取。平面上は、下層の土坑S K535と概ね重複。また、土坑S K3867一部も当墓と重複。	—
363 320	J～K21	方形	(1.3×—)	空腹 (火) 輪A0845	—	—	—	平面上362号墓に跨って下層の土坑S K536が重複。	—

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照)

報告 号墓 S/R No.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔頭等 (遺構内採取)	出土人骨 S/X No.	伴出器 骸骨器ほか	金屬品 (含古物)	備考 (回廊型・重複土塁など)
364 211 K.21	方形か	(14X—)	—	S X20	土師器類 (103)	S X20から 鉄釘 (鉄53)	土師器類 (103) は14c前半代に比定。当墓はそれ以降の製造か。土師器類 (103) は0.4×0.4m大の川面石を基に。金屬品 (鉄59) も出土。(第37回)	
365 492 K.21～22	方形	(3.5X1.5)	空軸A0003 空軸A0053 火水地軸 (—石五輪塔) A0988	S X18 S X149	—	—	368号墓との間の墓間通道で空軸A0052を採取した。蓋骨器なし。	
366 欠番 K.21	長方形	(12X0.5)	地軸A0695	S X19	—	—	墓道転用墓。365号墓・367号墓等より後出の軸。蓋骨器なし。	
367 318大 K.21	方形	14X1.3	—	—	—	—	平面には、下層でS K541が重複する。	
368 203 K.21～L.22	方形	1.5X1.3	空軸A0252	—	—	—	377号墓との間で人骨S X165を検出(下記両例)。平面には、下層で土坑S K542が重複する。	
369 202 L.21	長方形	20X1.4	空軸 (火) 軸A0844	—	—	—	370号墓より後出。371号墓に跨って下層で土坑S K544が重複。	
370 485 L.21	方形	1.6X1.4	—	—	—	—	369号墓・371号墓に先行する墓。外接して人骨 S X50を検出 (371号墓との境)。北側墓道に接して空軸A037を採取。平面上は、下層で土坑 S K545が重複している。	
371 322 L.21～22	方形	1.4X1.3	—	—	—	—	370号墓より後出の墓。平面上、369号墓とに跨つて下層で土坑S K546が重複。	
372 204 K.~L.22	方形	1.4X1.4	空軸A0271 空軸A0142 (空) 空軸A0142 空軸A0143 空軸A0144 地軸A0691 地軸A0692	S X31 S X160	S X31埋土から 土師器小皿破片 (192)	—	地軸A0691は原生埋持の可能性大。直下に羅平安などを基にし、人骨 S X160が出土。羅例は89号墓も。区間に平昭明天をもつて0.4m大的石2個あり、間から人骨 S X31出土。類似318～319号墓、335号墓など。368号墓との間で人骨 S X165を検出。土坑 S X192 (192) は14c末～15c前半代に比定。空軸A0142と(空) 空軸A0142は合せて一体。(第34回)	
373 205 K.22	方形	1.5X1.3	地軸A0679	—	—	—	377号墓より後出の墓。	
374 欠番 K.22	方形	0.6X0.5	—	—	—	—	373号墓より後出の墓。	
375 欠番 K.22	方形か	(0.5X0.5)	地軸A0693	—	—	—	373号墓より後出の墓。地軸A0693は区画配石に転用の可能性がある。	
376 210 K.22	長方形か	(1.6X1.3)	—	—	—	—	—	
377 206 K.22	方形	1.4X1.1	—	—	—	—	373号墓より先行する墓。	
378 207 K.22	方形か	(1.1X1.0)	—	S X32	土師器小皿破片 (252～254)	—	人骨 S X32は石の上で検出した。埋土から出土の土師器小皿 (252～254) は15c後葉～16c前半代に比定。当墓はそれ以降に製造と推定。	
379 279 K.22	方形か	(1.2X—)	火軸A0389	—	—	—	—	
380 496 K.~L.22	長方形か	1.4X1.0	—	—	—	—	—	
381 110 L.22	方形	1.2X1.1	—	—	—	—	平面上は、下層でS K549が重複。	
382 323 L.22	方形か	(1.5X1.4)	—	—	—	—	平面上は、下層でS K551が重複。	
383 64 L.~M22	長方形	2.6X1.8	—	S X49 S X51	—	—	228号墓より後出で、397号墓に先行する墓。蓋骨器なし。	
384 324 L.22	方形	1.3X1.2	空軸A0144 火軸A0387	—	—	—	—	
385 325 L.22	長方形	1.2X0.8	—	—	—	—	—	
386 欠番 L.22	方形	1.1X1.0	—	—	—	—	平面上387号墓にも跨つて下屜土坑 S K550が重複。	
387 209 K.22～L.23	方形	1.5X1.3	—	S X30 S X140	—	—	平面上386号墓にも跨つて下屜土坑 S K550が重複。蓋骨器なし。	
388 208 K.23	不詳	不詳	—	—	—	—	—	
389 526 L.23	方形か	(1.3X1.2)	火軸A0382	—	—	—	平面上391号墓にも跨つて下屜土坑 S K560が重複。	
390 502 L.23	方形か	(1.3)X1.1	—	—	—	—	—	
391 327 L.22～23	方形	1.4X1.2	空軸A0134	—	—	—	平面上389号墓とに跨つて下屜土坑 S K560が重複。	
392 328 L.23	方形	1.2X1.0	空軸A0133	—	—	—	—	
393 224 L.22	方形	1.4X1.3	—	—	—	—	平面上394号墓にかけて下屜土坑 S K561が重複。400号墓より後出の墓。平面上393号墓にかけて下屜土坑 S K565が重複。	
394 329 L.23	方形	1.7X1.7	—	—	—	—	—	
395 225 L.23	長方形	1.3X0.9	空軸A0145 火軸A0388 水軸A0520	—	—	—	397号墓より後出の墓。	
396 360 L.22～M23	長方形	1.6X0.9	—	—	—	—	400号墓より後出の墓。本来は墓道であったか。平面上は下屜土坑 S K564が重複。	
397 326 L.~M22	方形	1.8X1.6	—	—	—	—	230号墓・383号墓より後出で、395号墓に先行する墓。平面上下屜土坑 S K563が重複。	
398 57 M.22～23	長方形	1.5X1.2	—	—	土師器小皿 小破片 (256)	—	399号墓より後出の墓。理佐出土の土師器小皿 (256) は15c初葉～16c初頭頃に比定。当墓はそれ以降に製造と推定。	
399 76 M23	方形	1.7X1.5	—	S X194	常滑産鏡 (70)	—	407号墓より後出で、408号墓に先行する墓。400号墓の境で火軸A0378を採取した。鏡 (70) には2枚記号があり、人骨 S X194が充満す。15c前半代に比定。当墓はそれ以降に製造と推定。平面上下屜土坑 S K568が重複する。	

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16回参照)。

報告 号基 S.R.N.	旧称	小地区名	通構平面 形状	横幅(m) 長辺×短辺	出土石器類(% (通構内反映))	出土人骨 S.X#	伴出土器 遺物ほか	金属品 (古銭)	備考 (因版#、重複土器など)
400	330	L～M23	長方形	24×1.5	空腹輪A0131 火輪A0377 水輪A0515 水輪A0516	S X35 S X123	—	—	399号墓より後出で、394号墓・396号墓に先行する。平面には下屜土坑5.K566の一部が重複する个别遺構。S X123は旧S X36を名称変更。
401	215	L23	二重方形	内10×0.9 外16×1.6	火輪A0381	—	土師器小皿破片 (201)	—	理学から出土の小皿(201)は15c中葉～後葉頃に比定。以此に隣に範囲と推定。平面下屜土坑5.K567が被覆する。
402	522	L23～24	方形か	1.5×1.5	—	—	—	—	平面下屜土坑5.K563が重複する。
403	欠番	L24	椭円形	長径1.4× 短径0.8	—	—	—	—	平面下屜土坑5.K563が重複。403号墓より新しく。
404	332	L23～24	方形	1.2×1.1	—	S X134	—	—	平面下屜土坑5.K563が重複。403号墓より新しく。
405	214	L23～M24	長方形	1.9×1.2	空腹輪A0132	S X121	—	—	平面下屜土坑5.K563が重複。403号墓より新しく。
406	213	M23	長方形	1.9×1.3	空腹輪A0130 空腹(火)輪A0869 火輪A0380	S X122	—	—	納骨施設に付いた集石あり。類例は128号墓に、58号墓・351号墓・411号墓なども見られる。平面上406号墓にかけて下屜土坑5.K567が重複。
407	525	M23	方形	1.2×1.2	空腹輪A0129 火輪A0379 地輪A0669	—	—	—	S X1218石棺頂に納骨空洞。火葬土坑5.K567がほぼ重複。一体の可能性あり。419号墓との基部通路でA骨S X131・S X125及びS X155を残し、A骨A0015を採取。S X33出土の土師器小皿破片(257)を16c前半代に比定。当墓は当然それ以前の墓。
408	212	M23	長方形	2.1×1.5	水輪A0518 地輪A0688	S X126	土師器鍋 破片(107)	—	区画南側の2列目は火葬土坑5.K567の火を受けたく焼けていた。この事実から、406号墓に先行する墓。近接地で火葬地輪A0987・空腹輪A0127を採掘。
409	欠番	M23	長方形	1.5×0.8	—	—	—	—	土師器鍋(107)は14c末～15c初頭頃に比定。当墓はそれに隣の範囲と推定。419号墓との間の外接通路でA骨S X124も検出。
410	欠番	N23	不整形	1.0×0.8	—	S X127	—	—	240号墓より後出の墓。
411	335	M23～24	方形	1.4×1.4	空腹輪A0114 空腹輪A0116 空腹輪A0253	S X228 S X233	土師器皿 (137) 土師器小皿 (224)	S X233 から万子 (鉄引)と 金属製品 (鉄23)	240号墓・408号墓・411号墓より後出で、411号墓の一部を盗むを食する手跡で造営された墓。元は墓道であった場所。当墓の年代性を示す。
412	226	M24	不整形	(0.7)×0.7	—	S X54	土師器鍋破片(106)	—	410号墓より先行する墓。区画の中央東側端部に石を埋合せた状況(0.3m)の納骨用施設(類似は58号墓や351号墓も)。区画西側の人骨S X233と共に作成した刀子(鉄引)ほか2点出土。S X228は納骨施設の北接部分に位置する。土師器皿(137)、小皿(224)は240号墓の附近に近く、15c前葉～中葉頃に比定。當墓場合は、その近傍。
413	337	M24	方形 二重区画	1.5×1.2 0.9×0.9	地輪A0687	S X36 S X37	—	—	408号墓・411号墓・413号墓の隙の空隙を利用してした墓。本来は墓道と推定。鍋(106)は14c末～15c初頭頃に比定。当墓はそれ以後の隣と推定、419号墓より後出。417号墓・418号墓との間の墓道で、空腹輪A0109・火輪A0367・水輪A0512・風輪A0014・空輪A0009・空腹輪A0112等を探取した。
414	347	N24	長方形	1.5×0.8	空腹輪A0118 地輪A0678 地輪A0686	—	—	—	全土石(0.1～0.2m)敷き。415号墓と一体の墓になる可能性も。本来は240～249号墓に沿う墓道であった可能性が高い。
415	220	M～N24	長方形	1.5×1.1	空腹輪A0108 火輪A0365	S X43	—	—	414号墓より一体になる可能性もあり。空腹輪A0107を近接地で採取した。
416	346	M24～25	方形	1.3×1.2	空腹輪A0103～ A0105 水輪A0511 地輪A0677	S X110 S X141	S X141から 土師器小皿破片 (223)	—	隨意する415号墓は441号墓とに挟まれた空間でも別途人骨S X44を採取した。土師器小皿(223)は14c末葉～15c前葉に比定。この破片を以て当墓をそれに隣の範囲と推定。
417	218	M24	(円形?)	1.2×1.2	火輪A0366	S X42 S X111 S X112	S X42から 土師器小皿圓形品 (259)	—	418号墓に先行する墓。土師器小皿(259)は15c中葉～後葉頃に比定。当墓はそれに隣の範囲と推定、413号墓との間(墓道)で別途三箇所で人骨S X129～S X131が検出。共に通路に転用した後出墓の可能性大。平面上420号墓にかけて下屜土坑5.K572が重複。
418	338	M24	方形	0.9×0.5	空腹(火)輪A0838	S X40	—	—	413号墓・418号墓・420号墓に先行する墓。人骨S X124及びS X154や408号墓との間の通路で検出。後出墓の可能性大。平面上420号墓にかけて下屜土坑5.K572が重複。
419	216	M24	長方形	1.8×1.2	空腹輪A0113 火輪A0368	S X45 S X46	—	—	419号墓より後出。平面上419号墓との境目に下屜土坑5.K577が重複。近接地で空腹輪A0110～A0111を採取。
420	331	M24	方形	1.4×1.4	—	S X115 S X116 S X117	—	—	墓道を転用した可能性もある。
421	340	M24	長方形	1.2×0.9	空(風)輪A0286 空腹(火)輪A0839	S X113	—	—	421号墓に先行。平面上434号墓との境目に下屜土坑5.K578が重複。
422	339	M24	長方形	1.1×0.8	地輪A0676	—	—	—	人骨S X47と424号墓の穴に納骨。墓道を転用した墓。420・424・428号墓より後出。平面上427～428号墓に跨り土坑5.K574が重複。人骨S X164は旧S X46を名称変更した。
423	334	L～M24	長方形	1.4×0.4	空腹輪A0007	S X47 S X164 S X114	—	—	

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照)

報告 年基 S.R.N.	旧称 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔頭等 (遺構内採取)	出土人骨 S X N.	伴出器物 骸骨番号	金属品 (含古鉄)	備考 (回塙N.・重複土塙など)
424 223	L～M24	長方形か	(1.7×0.8)	—	S X39. S X118 S X119	S X118から 土師器小皿破片 (208)	—	405号墓・420号墓より後回の墓。人骨 S X 34を 区画石の間で検出。当墓への埋葬が否かは不明。 406号墓と19号墓との間に墓道でも人骨 S X 120 を検出。土師器小皿 (208) は15c前葉～中葉塙 に比定。当墓はそれ以前の墓造と推定。
425 333	L.24	長方形	1.2×0.9	空風輪A0115～ A0117 地輪A0622	—	—	—	区画石央部に平面をもつ2.4mの大石が据わる。 類似の302号墓ほかにも、南西面に画外で人骨 S X 133を検出。424号墓との間で火輪の破片も 採取。
426 欠番	L.24	長方形	(1.3×0.9)	—	(S X 133)	—	—	人骨 S X 133は区画配石の石の上で検出。それ自 体後土塙を示し、当墓との関連性は不明。
427 欠番	L.24	楕円形	長径1.5 短径1.2	—	—	—	—	平面には41号墓に跨り下屨土坑 S K 572が重 複。また429号墓・431号墓にも跨って下屨土坑 S K 573が重複。更に423号墓・24号墓にも跨っ て下屨土坑 S K 574が重複するが、いずれも当墓 に先行する前の遺構。
428 341	L～M24	楕円形	1.3×1.1	—	—	—	—	平面に423号墓・42号墓にも跨り下屢土坑 S K 574が重複。かつ429号墓にも跨り下屢土坑 S K 575が重複。共に当墓とは別の遺構。
429 342	L.24～M25	長方形	2.2×1.4	火輪A0446	S X132	S X132から 土師器小皿の破片 (212～215)	—	平面には下屢土坑 S K 580が、また土坑 S K 576 の大石が重複。427号墓・431号墓に跨り土坑 S K 573が、428号墓にかけては土坑 S K 575が、そ れぞれ部分的に重複。土師器小皿 (212～215) は15c中葉～後葉塙に比定。当墓はそれ以前に築 造か。
430 105	L.24	方形	1.9× (1.4)	—	—	—	—	区画石に小石生き(礎石痕は無し)。後世、山道 開墾時に削平される。平面上は下屢土坑 S K 571が複 ね重複。(第35回)
431 524	L.24	長方形	1.5×0.8	—	—	—	—	平面上は427号墓にも跨り下屢土坑 S K 572が重 複。427号墓・429号墓に跨り下屢土坑 S K 573も重 複。
432 523	L.24	方形	0.7以上×~	—	—	—	—	後世、山道開闢で削平される。
433 343	M25	方形	1.2×1.2	空(風)輪 A0284 空風(火)輪 A0837 相輪 A1034	—	黑戸床灰陶花瓶の 破片 (50)	—	平面上は当墓及び243号墓と429号墓との境目で 下屢土坑 S K 581が重複。435号墓に跨り土坑 S K 582も重複。更に434号墓・436号墓に跨りては 土坑 S K 584も重複。花瓶 (50) は14c前半代～ に比定。当墓はそれ以前の墓造と推定。
434 344	M25	不整形	長径0.8 短径0.5	—	—	—	—	433号墓より後出。透鏡を転用か。平面に422号 墓との境目下屢土坑 S K 578が、また433号墓・ 429号墓との境界地下に土坑 S K 581が、434号墓 ～透鏡にかけての下屢土坑 S K 582が、433号 墓・438号墓に跨り透鏡土坑 S K 584が。それぞれ 重複。
435 345	M25	方形	0.9×0.6	空風輪A0836	S X136	—	—	433号墓と36号墓との間の墓道を転用。433号墓・ 436号墓より後出。平面上433号墓に跨り下屢土 坑 S K 583が、また36号墓・436号墓に跨って 下屢土坑 S K 585が。それぞれ重複。
436 222	M25	方形	1.3×1.2	—	S X135	堆土から 土師器小皿の破片 (225～231)	—	平面上は下屢土坑 S K 589が既存重複。435号墓 ・438号墓に跨って下屢土坑 S K 585が、437号墓 ～透鏡にかけての下屢土坑 S K 586が重複。7個体 分の土師器小皿 (225～231) は15c中葉～後葉 塙に比定。当墓はそれ以前に築造と推定。
437 221	M25	方形	1.5×1.4	空(風)輪 A0283 地輪 A0621	—	土師器小皿破片 (260)	—	平面上は下屢土坑 S K 588が既存重複。439号墓 ・439号墓に跨る位に下屢土坑 S K 586も重複。 土師器小皿 (260) は16c前葉～後葉塙に比定。 当墓はそれ以前に築造と推定。
438 103	M25	円形	徑1.1	火輪A0364	—	—	—	437号墓より後出。透鏡を転用。平面上433号墓・ 434号墓に跨って下屢土坑 S K 584が、435号墓・ 436号墓に跨って下屢土坑 S K 585が、437号墓・ 439号墓に跨り下屢土坑 S K 586が重複。それぞれ重 複。
439 欠番	M25	方形	0.6×0.6	—	S X137	—	—	437号墓より後出。透鏡を転用。平面上441号墓・ 438号墓に跨って下屢土坑 S K 586が重複。
440 欠番	M～N25	方形	0.7×0.5	—	—	土師器小皿 (265) 完形品	—	437号墓より後出。透鏡を転用。平面上441号墓・ 442号墓に跨り下屢土坑 S K 587が重複。土師 器小皿 (265) は16c前葉～後葉塙に比定。当墓は ほぼその時の墓造と推定。
441 351	N25	長方形	1.2×0.6	—	—	—	—	本来は441号墓と併せて一つの墓が、平面上440 ～441号墓に跨り下屢土坑 S K 587が重複。
442 349	N24～M25	長方形	1.1×0.5	—	—	—	—	三筋窓(「脛骨窓」の高さ)瓦器兩種を転用。(41) は12c前葉～13c前葉に、(42)は12c後葉に比定。 249号墓より後葉塙。当墓はそれ以前に12c前 葉～中葉塙までは築造か。(第37回)
443 348	N24～M25	長方形	2.0×1.2	—	S X193	常滑窯三筋窓 (42) 瓦器小窓 (41)	—	443号墓と445号墓の間の墓道を転用か。平面上 445号墓に跨り下屢土坑 S K 593が重複。
444 350	N25	不整形	0.6×0.4	—	—	—	—	445号墓に跨り下屢土坑 S K 593が重複。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照)。

報告 号基 (SRN)	田耕 小地区名	遺構平面 形状	規模(m) 長辺×短辺	出土石塔期(年) (遺構内採取)	出土人骨 5X%b	伴出土器 量骨器ほか	金属性 (古式銭)	備考 (既知の・重複土器など)	
445	353	N25	方形	1.0×0.9	空尾 (火) 輪 A0826 空尾火輪 A0782 水地輪 A0880 地輪 A0617～A0618 空尾火輪 (一石五輪塔) A0952～A0953 火水輪 (一石五輪塔) A1010 火水地輪 (一石五輪塔) A0984	—	—	—	平面上444号墓に跨り下層土坑 S K593が重複。
446	352	N25	方形か (1.0×0.8)	空尾輪 A0096～ A0097	—	—	—	相輪 A1033を近接地で採取。平面上447号墓に跨り下層土坑 S K592が重複。	
447	354	M～N25	長方形	(1.0×0.7)	地輪 A0619	—	埋土から 土器器小皿 破片 (262)	—	446号墓に448号墓との墓道転用。平面上448号墓に跨り下層土坑 S K590が、446号墓に跨り土坑 S K592が重複。土器器小皿 (262) は15c後葉～16c初頭頃に比定。当墓はそれ以後に転用されると推定。
448	219	M～N25	長方形か 平による。	1.7× (0.9 以上) 別	空尾 (火) 輪 A0833 ～A0835 水輪 A0510 火水地輪 (一石五 輪塔) A0986	S X138	5 X138から 土器器小皿 破片 (261)	—	山邊開墾ため約半分削平する。平面上は下層 土坑 S K591と概ね重複。447号墓にかけて土坑 S K590やS K596の一部分も重複。土器器小皿 (261) は15c後葉～16c初頭頃に比定。当墓は それ以後に転用されると推定。一石五輪塔 A0986は区 面の配石に転用された可能性がある。
449	355	N25	方形	1.0×0.8	—	—	—	空尾輪 A0098を近接地で採取した。	
450	356	N25	方形	1.4×1.2	空 (風) 輪 A301 空尾火輪 A0795～A 0797 地輪 A0683～A0684 一石五輪塔 A0949	S X139	—	—	左側石塔は全て区画石に転用されていた。当該 450号墓墓造の時期的なら後性を示す。
451	357	N25	方形	1.4×1.2	空尾火輪 A0783 地輪 A0626 地輪 A0662	—	—	—	地輪 A0682は区画石に転用された可能性がある。
452	359	N～O25	長方形	1.3×0.7	—	—	—	250号墓より後出。近接地で空尾輪 A0100を採取 した。	
453	358	N25	長方形か (0.8×0.5 以上)	火輪 A0361	—	—	—	—	
454	欠番	N25	方形か (1.5×1.2)	空尾輪 A0099 空 (風) 輪 A0280 空 (風) 輪 A0281 空尾 (火) 輪 A0827 (空) 空尾火輪 A0784 空尾 (火) 輪 A0828 水輪 A0509 一石五輪塔 A0929 火水地輪 (一石五輪塔) A0985 火水輪 (一石五輪塔) A1011	—	—	—	平面上455号墓に跨り下層土坑 S K598が重複。	
455	欠番	N26	方形か (1.2×0.6)	地輪 A0685	—	—	—	区画配石に地輪 A0685を転用。平面上454号墓 に跨り下層土坑 S K596が重複。	
456	欠番	N25～26	方形か (1.0×0.9)	空尾輪 A0101～A0102 空 (風) 輪 A0282 空尾 (火) 輪 A0830 ～A0832	—	—	—	区画配石に五輪塔石を転用。	
457	欠番	O26	不整形	(0.7×0.6)	—	—	—	—	
458	欠番	O25	方形か (1.0×1.0)	阿弥陀佛淨面石 A1049	—	—	—	257号墓より後出する墓。	
459	欠番	O26	方形か (1.3×1.1)	—	—	—	—	257号墓より後出する墓。	
460	107	O26	長方形か (1.4×1.1)	空尾輪 A0248 空 (風) 輪 A0298 火輪 A0447～A0448 水輪 A0550 火水地輪 (一石五輪塔) A0999	—	—	—	盛土26cm。近接地で火輪 A0362～A0363も採取。	

規模(m) 長辺×短辺	出土石塔期(年) (遺構内採取)	出土人骨 5X%b	伴出土器 量骨器ほか	金属性 (古式銭)	備考
配石区画基平均的規模	1.5×12	211ヶ墓	166箇墓	78ヶ墓	25ヶ墓 規模の平均値は()内の数字を除して計算し、 小数点第二位を四捨五入した。石塔・土器などの 遺物は、個数ではなくそれが出土した墓の数を。 人骨は区画内で出土した箇所の数を表示。 結果的に遺物が一切検出されなかつた区画は 175基ののぼる(全体の38%)。

第13表 A地区検出 配石区画墓群一覧表 (1～460号墓、第8～16図参照)。

報告番号	旧称	地区	形状	規模 (cm)	附属施設	出土遺物			備考欄	
						石塔	土器	金属製品		
461	墳丘A	M.26・27 ～N.27	圓丸方形	墳丘部、 400×400cm、 高さ80cm、 周溝部S.D880 幅30～60cm、 深さ15～30cm。	周溝・梯級・ 石積階段 (4段分あり)	周溝から 空氣輪B 1061、周溝 底面から相 輪B1140	墳丘下層か ら土師器 小口破片 (241)	無し	墳丘+周溝の規模、約450m前後。墳丘中央部に 前面で幅約9m×24m、深さ22mの土坑状の探し跡 認。遺構ならば大規模納骨の可能性も。 小口(241)は15c前半～中葉頃と判定。当該施設 築造はそれ以後と推定。(第25回・第41回)	
462	墳丘B	L.28・29・30 ～ N.28・29・30	（圓丸方形）	墳丘部 約550×710cm、 高さ90cm、 周溝部S.D881 幅約44～170cm、 深さ20～52cm。	土坑・周溝・ 墳丘上には 石列(4m) が残存した。	S.K610大 窓内から空 (周) 輪B 1054、地輪 B1069(落 込み遺物)	常滑大甕 (92) および 土師器小皿 (242) 「昭寧元寶」 (銀書体)	古鏡2枚 (銘22～23) 「昭寧元寶」 (銀書体)	古鏡2枚 (銘22～23) 「昭寧元寶」 (銀書体)	古鏡を除く三方に周溝、墳丘部K.610に大甕(92) を埋納。15c後半～16c頭に比定。墳丘土壇内出 土の小口(242)は15c前半～中葉頃に比定。な らば、墳丘被覆からは15c中葉～後葉代の土師器小皿 (242)が出土。銀貨銘表参照。(第25回・第41回)
463	墳丘C	N.28～ O.28・29	（圓丸方形）	480×360cm	L字形の石 列が約2.6m +1.5m分 残存した。	無し	無し	無し	墳丘下から先行する土坑を複数検出。(第25回・第 41回)	
464	墳丘D	P.29～30	（圓丸方形）	400×300cm	石列(1.5m)	無し	無し	無し	墳丘下から先行する土坑を複数検出。	

第14表 B地区検出 特殊遺構（墳丘状盛土遺構）(第25・第41図及び写真第7～8図参照)

報告 土器 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	埴 土	磨 化	灰	人骨 片	鉄質	土器類	刀・刀子	備考	
465	欠番	P.12	圓丸長方形	120・90・17	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。平面上は64号墓と65号 墓とに跨る重複。(重複關係はあくまでも平 面上の事であり、必ずしも同一の遺構を指 しない)。	
466	16	N.13	長椭円形	160・60・15	○	○	—	○	—	—	—	I A類。暗茶褐色土。(素面褐色引立)。延形 に近い個々に施しまった施土手際(例)に残る (以下各地区でこれを洗土帶と表記)。119・ 121号墓に跨り重複。人骨S.179。	
467	27	P.13	圓丸方形 に近い	110・110・20	○	—	○	—	—	土師器小皿 (160～162)	—	II日鏡。暗茶褐色土。69～70号墓に重複。 土師器皿(160)は完形で、(119)13c未 明～14c末期に比定。	
468	12	K.14	椭円形	100・80・13	—	—	—	—	—	—	—	IV類。革茶褐色土。69～70号墓に重複。 145号 墓と155号墓の境地に当たる。	
469	17	L.14	椭円形	50・40・16	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。144号墓と一部分重複。 人骨S.182。	
470	欠番	L.14	不整形椭円 形	(180・130・10)	—	—	—	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨13号墓(S.X196 ～198)から出土。142号墓と143号墓に跨 り重複。	
471	67	L.14	圓丸長方形 に近い	220・130・18	○	○	○	—	—	—	—	I A類。暗茶褐色土。延形に施土差。底部に0.3 ～0.4mの大石積二石。139号墓と一部重複。	
472	15	M.14	圓丸長方形 に近い	140・80・15	○	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人大が129号墓と重複。 人骨片S.X564。	
473	63	N.14	椭円形	60・40・14	○	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。130号墓と一部重複。 暗視不明の小片土葬。	
474	112	S.14	椭円形	95・60・17	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。10号墓に伴う土葬。	
475	113	S.14	椭円形	100・60・16	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。11号墓に伴う土葬。	
476	76	I.15	二等辯 三角形状	280・160・21	○	—	○	—	○	—	—	常滑瘦健 破片(75)	II日鏡。暗茶褐色土。延形に中央約4.0m×0.2 m大的石積二石。175・176号墓と一部重複。 要(75) N.Y口縁の破片(15～後半)より 以降の小片土葬。人骨S.X183。
477	欠番	J.15	圓丸方形	(150・100・25)	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。時刻不明の土葬墓。	
478	19	J.～K.15	圓丸長方形	170・130・5	○	○	○	—	○	—	—	S.X109から 訂正(本)(鉢46 ・鉢47)	II日鏡。暗茶褐色土。土坑内一枚に火を受 けた台状火石。1.0m×0.6m×0.6mの2階 を燃える。ある時期に火葬施設として使用。 人骨S.X109。172号墓より後半と判断。
479	11	J.～K.15	方形に近 い椭円形	140・85・44	○	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。平面に横ね173号墓 と重複。	
480	13	L.15	圓丸方形	110・80・23	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。S.K468・481より新。 平面上に145号墓と重複。	
481	14	L.15	圓丸方形 に近い	140・130・20	—	—	○	—	—	刀子1本 (鉢14)	II日鏡。暗茶褐色土。S.K480より古。平 面上に146号墓と重複。錢貨銘表舌(銘10) 及び刀子銘表舌(鉢14)参照。		
482	68	M.15	馬蹄形	160・120・18	—	—	○	—	—	土師器破片	—	II日鏡。暗茶褐色土。S.K496より新。平 面上に81号墓と重複。(別扱過橋第35回)。	
483	欠番	N.15	(圓丸長 方形)	(175・100・35)	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。概ね78号墓と重複。	
484	64	O.15	円形	55・50・20	○	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨S.X184。平面上 に60号墓と一部重複。	
485	65	O.15	椭円形	70・50・17	○	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨S.X185。	
486	欠番	O.15	圓丸方形	(140・125・21)	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。平面上は56号墓と重 複。	

第15表 A地区検出 土坑群一覧 S.K.465～S.K.599・第17図～22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	陶 器	炭 灰	人骨 片	錢貨	土器類	釘・刀子	備考
487	72	K 16	長方形に 近い橢円	220・100・41	○ ○ ○ ○ ○	—	—	—	—	土師器皿 (130)、筒小 皿(171)～ (178)、針9枚	—	I 日鏡、暗茶褐色土。腹面に燒土帶。人骨 S X234、192～193号墓の一部。263号墓の 一部と重複。完形の小皿は15cm中型鏡の ものか。
488	114	L 16	橢円形	60・45・31	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。底面に0.2m大円川原石 2個。182号墓と183号墓の墓口に相当。
489	115	L 16	廣丸方形	80・70・48	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。183号墓の中心部に当 たる位置に重複。
490	116	L 16	橢円形	50・40・42	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。183号墓と重複。
491	119	L 16	不整形	110・100・21	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。地盤 A 0766出土。183 号墓、194号墓、196号墓に跨り重複。近接 して人骨片 S X216～218を挟む。
492	118	L 16	不整形	150・70・25	—	—	—	○	—	—	—	II A類、暗茶褐色土。人骨片 S X246、183 号墓、187号墓に跨り重複。
493	117	L 16	不整形	110・60・15	—	—	—	○	—	鍍金(鐵 21)、刀子 (鉄参考42)	—	II 日鏡、暗茶褐色土。人骨片 S X247、182 号墓と185号墓にかけ重複。
494	60	M 16	橢橢円形	90・55・33	—	—	○	—	○	土師器皿 (122)、 土師器小鏡 の破片	—	II 日鏡、暗茶褐色土。人骨 S X219(第1 表191号墓参照)。完形の小鏡器皿(122) は14cm中型で末梢のものと推定。
495	61	M 16	橢橢丸方形	100・90・59	—	—	—	—	—	ロクロ口土師器 皿底部破片 (38)	—	III類、暗茶褐色土。ロクロ口土師器皿は11～ 12cm代。190号墓と重複。190号墓底部から 12cm中型へ後掌山茶碗底部破片出土。
496	62	M 16	廣丸方形 に近い	150・80・52	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。SK 482より古(四回 通模第35回)。
497	5	J 17	(廣丸方形)	100・90・23	—	—	—	—	—	土師器組片	鍍釘2本(鉄 48～49) 及び鍍金 (鉄22)	III類、暗茶褐色土。ほぼ276号墓と重複。 (個別通模第40回)
498	7	J 17	廣丸三角形	105・105・36	—	—	—	—	—	土師器小皿 (165)	—	III類、暗茶褐色土。279・280号墓と一部重複。 小皿(朝ねむ形)は15cm中型へ後掌に比定。
499	85	J 17	橢橢丸方形	130・110・50	—	—	—	—	—	土師器組片	刀子1本 (鉄8)	III類、暗茶褐色土。大略286号墓と重複。
500	18	K 17	西切形	200・150・75	○ ○ ○ ○ ○	—	—	—	—	山茶鏡(54)	—	II 日鏡、暗茶褐色土。鏡面に西切形に火を 引いた石(0.2m大)。が一羽で4件ある。大 半は283号墓と、一部は282号墓と重複。山 茶鏡(54)は13cm前掌へ中型ごろに比定。 人骨 S X166。
501	10	K 17	廣丸方形 に近い	145・130・32	○ — ○ — ○	—	—	—	—	和銅小破片 (培殖した状 態)	—	I 日鏡、暗茶褐色土。鏡面に火を引いた 人骨 S X187、195号墓と205号墓に跨り重複。培 殖した和銅小破片のみ。時期不明。熱残 化分析測定試料採取調査。附録(2)参照(920 年±150年)。この結果は、いささかさざざ感がある。
502	53	K 17	橢円形	85・65・8	—	—	○	—	○	—	—	II A類、暗茶褐色土。人骨 S X470(A地 区N165と180を重複したので名称を変 更)。平面上は285号墓と重複。
503	Pit 1	L 17	不整形橢円	90・50・12	—	—	—	—	—	土師器小皿 (186)	—	—
504	120	L 17	廣丸長方形 に近い	155・110・34	—	—	—	—	—	土師器皿 小破片 (314・119)	—	—
505	6	J 16	馬蹄形	100・80・27	○ — ○ — ○	—	—	—	—	土師器小鏡 (84)	刀子1本 (鉄85)	II 日鏡、暗茶褐色土。鏡面に一部燒土帶。切 合し頭がからく506号より古。人骨片 1人 294。小鏡は15cm後掌代。小鏡も刀子も ほぼ平行。
506	3	J 18	方形状 (不整形)	120・110・24	○ — ○ — ○	—	—	—	—	—	刀子2本 (鉄3・鉄11)	—
507	101	J 18	方形に近 い不整形	120・85・73	—	—	○	—	○	—	—	II 日鏡、暗茶褐色土。土師器皿(166・完形) は15cm前掌へ中型に比定。火葬墓。人骨 S X189。平面上は大略293号墓と重複。
508	欠番	K 18	(廣丸長 方形)	(100・80・15)	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。平面上は307号墓と重複。
509	107	K 18	橢円形	120・105・17	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。土師器皿(一部)の間 の通路下部に位置する墓。
510	9	K 18	円形に近い	165・150・11	○ ○ ○ ○ ○	—	—	—	—	刀子1本 (鉄13)	—	—
511	欠番 (S X 167)	L 17 ～ 18	廣丸方形	45・40・15	—	—	—	—	—	刀子2点 (鉄24・鉄 参考32)	II 日鏡。黄褐色土質。鏡面に厚い燒土帶。 底面に焼石一箇。刀子は2点併出。人骨 S X167と206号墓と重複。	
512	8	L 18	馬蹄形	130・50・21	—	—	○	—	○	—	—	II A類、暗茶褐色土。人骨 S X192。平面上 212号墓と一部重複するも別遺集。
513	欠番	L 18	廣丸方形	50・50・16	—	—	—	—	—	—	—	IV類、暗茶褐色土。

第15表 A 地区検出 土坑群一覧 S K 465～S K 599・第17図～22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 屋・廊・深 (cm)	積 土	堆 石	炭 化 物	灰 灰	人骨 片	鉄質	土器類	釘・刀子	備考	
514	26	M18	隅丸方形 (付属面溝 SD874)	172・(70)・56	-	-	-	-	-	-	青磁器 (63) 完形	-	Ⅲ期。100号墓 (1.8m×1.7m)と一体の通溝。東側崩落範囲。墳丘高2.3m～2.6m、1.2m以上周囲5.0～8.74m(幅6m～1.7m、深さ約0.3m)を含む全体規模は5.1m×3.0m以上の方形面溝墓 (第396号)。底部から青磁器 (13～14c 元代) が出土したが、盗掘時期はそれより下る。	
515	82	J19	方形に近い	105・75・30	-	-	-	-	-	-	土師器皿 (117) 及び小皿 (150) 破片	-	Ⅳ期。茶褐色土。底面に川筋石3種。平面は32号墓～325号墓に跨り重複。	
516	83	J19～ 20	長方形	200・115・30	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。茶褐色土。底面に川筋石3種。平面は32号墓～325号墓に跨り重複。	
517	6	J19	楕円形	130・110・17	○	○	○	○	-	-	-	-	ⅠA期。深褐色土。壁面に厚い土塗。人骨片 S-X207。平面上は3302号墓と重複。	
518	79	J19	楕円形	70・50・17	-	-	-	-	-	-	土師器皿片	-	Ⅲ期。暗褐色土。317号墓と一部が重複。	
519	80	J19	略椭円形	135・110・39	-	-	-	-	-	-	刀子1点 (鉄6)	-	Ⅲ期。暗褐色土。底面には331号墓と重複。時期不明の刀子 (火打) 基。	
520	81	K19	円形に近い	100・80・23	-	-	-	-	-	-	刀子1本 (鉄7)	-	Ⅲ期。暗褐色土。317号墓と一部が重複。時期不明の墓。当該土坑の西側40cm地帶で人骨片 (S-X158) の充満した須恵器部 (17) が出土。	
521	29	K20	隅丸方形 に近い	160・130・11	○	-	○	○	○	-	-	-	-	ⅠA期。ほぼ315号墓と重複。場所に厚い土塗。底面全表面 (底面目字跡) が覆う。2ヶ所から人骨片 (S-X190およびS-X286) 出土。
522	102	L19	隅丸方形 形状複合	110・80・26	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。暗茶褐色土。ほぼ216号墓と重複。	
523	122	L19	不整形	115・90・8	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。暗茶褐色土。217号墓と313・314号墓との間の隙間直下に相当する墓坑。	
524	97	L19	略椭円形	140・120・17	-	-	-	-	-	-	刀子1点 (鉄10)	-	Ⅲ期。暗茶褐色土。平面は215号墓と一部が重複。時期不明の墓基。	
525	96	L19	隅丸方形	130・90・23	-	-	-	-	-	-	刀子1点 (鉄10) (鉄37)	-	Ⅲ期。暗茶褐色土。ほぼ217号墓と重複。時期不明の墓基。	
526	121	L19	楕円形	100・80・30	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。暗茶褐色土。347号墓と一部が重複。	
527	78	J20	楕円形	100・65・20	-	-	-	-	-	-	須恵器皿 (15・16) 破片	刀子1本 (鉄19)	Ⅲ期。暗茶褐色土。S-K526より古く、335号墓と一部が重複。時期不明の墓基。須恵器皿はB区S-X613号土器の頭と接合、290期 (7c末～8c前半代。B: 前葉一中葉) のものがあり。刀子はほぼ原在状態。	
528	20	J20	略方形	125・120・26	○	○	○	-	○	-	土師器皿 (167) 破片	-	ⅠB期。暗茶褐色土。底面に土塗。火に焼けた長方形の石 (0.3m) 1個。S-K527よりも新。333号墓・334号墓・340号墓に跨り重複。小皿 (15c 前葉一中葉) の時期より以降に火葬土坑として機能したと推測。人骨片 (S-X195)。	
529	127	K20	隅丸方形	110・100・21	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。暗茶褐色土。S-K530より新。ほぼ352号墓と重複。時期不明の墓基。	
530	74	L20	長椭円形	140・95・34	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ期。暗茶褐色土。底面には340号墓と重複。土坑 K-S29より古く。時期不明の墓基。	
531	69	L20	隅隅丸方形	110・95・38	-	-	○	-	-	-	土師器皿 (131)・小皿 (187～191)	-	ⅡB期。暗茶褐色土。平面はほぼ345号墓と重複。土師器皿 (14c 前葉一中葉) の時期より以降に比定。ほぼ290期 (15c 前葉一中葉) の墓基と推測。	
532	95	L20	隅丸方形に 近い台形	135・100・30	-	-	-	-	-	-	山茶碗 (58)	-	Ⅱ期。暗茶褐色土。底面には348号墓と重複。山茶碗は13c 中葉～後葉に比定。横口は初期阶段で構成 (底面) する。	
533	19	N20	隅隅丸方形 (付属面溝 SD875～ SD876)	180・155・29	○	-	○	-	○	-	口クロ土師器 皿 (36・37) 底部小破片	刀子1点 (鉄04)	I 0期。圓形に土塗。底面はS-O875～876後葉、221号墓と一緒に土塗。圓窓幅20.6m～6.0m、底面227号墓の面溝S-D798より古く。青瓷を含む全体規模は3.5m×3.4mと推定。形態的類似 S-K 514、S-K 570等参照。口クロ土師器皿 (11c～12c後葉) は小皿類。底面は須恵器皿。刀子は漆器皿、人骨片 S-X99。	
534	84	J21	不整形	105・70・8	○	-	-	○	-	-	-	-	ⅠA期。暗褐色土。壁面に土塗。人骨片 S-X287。平面には338号墓と重複。	
535	77	J21	略方形	80・65・21	-	-	-	-	-	-	土師器皿 (128・129) 破片	鉄釘 (鉄50 ～鉄51)	Ⅱ期。暗茶褐色土。平面には362号墓と重複。皿 (15c 中葉) の時期以後に築造の墓坑か。	
536	123	J21	略方形	75・55・22	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅱ期。暗茶褐色土。平面には362号墓と重複。時期不明の墓坑。	
537	23	K21	不整形半円形	135・68・17	○	-	-	○	-	-	-	-	ⅠA期。暗茶褐色土。壁面に土塗。人骨片 S-X163。平面には361号墓と重複。	
538	21	K21	不整形	120・60・16	○	-	○	-	○	-	-	-	ⅠA期。暗茶褐色土。壁面に土塗。人骨片 S-X166。平面には358号墓と重複。	
539	22	K21	方形に近い 楕円形	120・95・44	○	○	○	-	○	-	-	-	ⅠA期。暗茶褐色土。底面には359号墓と重複。人骨片 X200。	

第15表 A地区検出 土坑群一覧 SK 465～SK 599・第17図～22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	陶 器	炭 灰	人骨 片	鉢質	土器類	刀・刀子	備考
540	100	K21	扇方形	130・80・42	—	—	—	—	—	土師器小皿 (251) 小破片	—	III類。雨茶褐色土。切合い関係からS.K. 539号より古。355～356号墓と重複。小皿(15c後半～16c初頭)の時期以降に施造の土器群か。
541	98	K21	廣丸長方形	120・70・34	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。平面上367号墓と重複。土坑S.X.542号より古。時期不明の土器。
542	99	K21	廣丸長方形	150・85・35	—	—	—	—	—	刀子2点(鉢 26・5点参考41)	—	III類。雨茶褐色土。平面上368号墓と重複。土坑S.X.541号より古。時期不明の土器群。
543	75	L21	略圓丸方形	110・100・23	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。平面上350号墓と重複。時期不明の土器。
544	103	L21	廣丸方形に 近い圓形	159・90・34	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。平面上369号墓及びJ371号墓と重複。時期不明の土器。
545	104	L21	長椭円形	120・65・50	—	—	—	—	—	土師器皿 (132～134) 破片	—	III類。雨茶褐色土。370号墓と重複。土師器皿(14c末～15c前半)に近いかそれ以後の土器群と推定。
546	25	M21	橢円形	60・50・8	○	—	○	○	—	—	—	I.A類。雨茶褐色土。人骨S.X.201。平面上222号墓と重複。掘出S.堆土部。底部に川原石(0.1m×0.08m)あり。
547	125	M21	橢円形	125・90・25	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。222号墓と223号墓との中間位置に位置。時期不明の土器。
548	105	L22	廣丸方形	100・70・50	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。平面上357号墓と重複。時期不明の土器。
549	34	L22	不整橢円形	135・130・35	○	—	○	○	—	土師器小皿 (193～196) 4枚	—	II.B類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。平面上381号墓と重複。人骨片S.骨子のま主墓挖出S.堆土部と同様。頭部は15c前葉～中葉期に定位。その他の頭骨か。人骨S.X.202。(遺構第40回)
550	28	L22	廣丸方形に 近い橢円形	160・120・23	○	—	○	—	—	—	—	II.A類。雨茶褐色土。人骨片S.X.220。火葬土坑。平面上386号墓と387号墓と同一重複。
551	90	L22	廣丸長方形	140・100・50	—	—	—	—	—	土師器皿 (121) 小破片	—	III類。雨茶褐色土。平面上382号墓と重複。底面部に川原石(0.2～0.4m)大)。5cm以上。土師器皿(13c末～14c前葉)の時期以降の土器群と推定。
552	94	L22	廣丸方形に 近い橢円形	85・80・53	—	—	—	—	—	刀子2点(鉢 参考39・40)	—	III類。雨茶褐色土。頭ね393号墓と重複。時期不明の土器群。(遺別遺構第40回)
553	89	M22	橢円形	95・60・40	—	—	—	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。平面上397号墓と重複。時期不明の土器。
554	24	M22	橢円形に 近い	100・85・30	○	—	○	—	—	土師器小皿 (218～221) 小破片	刀子1点 (鉢15)	I.B類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。火葬土坑を主墓群にした可能性。土師器小皿(14c中葉～後葉)の時期に施造と推測。平面上228号墓と重複。人骨片S.X.180。掘形に近接する平面部をむち石(0.8m×0.5m大)は、特定の機能を持った可能性もあるか。
555	88	M22	廣丸長方形	120・85・32	—	—	—	—	—	土師器皿 (123～124) 破片	—	III類。雨茶褐色土。平面上230号墓と重複。土師器皿(13c末～14c前葉)の時期以降に施造の土器群と推定。
556	73	M22	廣丸長方形 に近い	160・100・20	○	—	○	—	—	土師器皿 (96) 破片	—	II.B類。雨茶褐色土。人骨片S.X.245。平面上は232～231号墓と重複。土師器皿(14c中葉～後葉)の時期に施造の土器群と推定。
557	86	N22	略圓丸方形	130・105・21	—	—	—	○	—	土師器小皿 (153) 破片	—	I.A類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。234号墓～235号墓の位置。透視孔・溝など複数の火葬施設。土坑S.X.606号同じ。人骨S.X.203。特殊施設で測定試験採取遺跡。附図(2)参照。(1230年±70年)。(遺別遺構第39回)
558	36	N22	亀形(山形 形状)	280・150・55	○	—	○	—	—	—	—	I.A類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。火葬土坑。平面上237号墓と重複。
559	1	P22	不整形	140・100・18	○	—	○	—	—	—	—	I.A類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。底面部に川穴(0.3m×0.2m)深さ0.11m)。平面上は389号墓と391号墓に跨り重複。
560	41	L23	廣丸長方形	125・85・24	○	○	○	—	—	—	—	II.B類。雨茶褐色土。391～394号墓にかけて重複。副葬品品目別の土師器皿(12c後葉～15c中葉)により以前に施造の土器群か。(遺別遺構第40回)
561	93	L23	廣丸長方形 に近い	85・50・30	—	—	—	—	—	土師器小皿 (197～199) 兜形品3枚	—	III類。雨茶褐色土。平面上143号(E401号)墓と重複。土師器皿及び小皿(14c後葉～15c中葉)により以前に施造の土器群か。(第40回)
562	91	L23	長方形	90・65・27	—	—	—	—	—	土師器小皿 (135) 小皿 (200) 破片	—	III類。雨茶褐色土。平面上140号～404号墓にかけて重複。土師器皿3枚(15c中葉～後葉)とほぼ同時期の土器群と推定。(第40回)
563	92	L24	不整橢円形	90・70・26	—	—	—	—	—	土師器小皿 3枚 [209～211] 楕円形兜形	—	III類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。平面上145号墓と重複。
564	32	M23	橢円形	40・40・6	○	—	○	—	—	—	—	IV類。雨茶褐色土。掘形に施造の土器。平面上145号墓と重複。

第15表 A地区検出 土坑群一覧 S.K.465～S.K.599・第17図～22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	填 土	礁 石	炭 化 物	灰 灰	人骨 片	鉄 質	土器類	釘・刀子	備考
565	124	M23	円形	50・50・17	-	-	-	-	-	-	-	-	I-V類。暗黃褐色土。394号墓と396号墓との 墳頂下層に位置する。時明不明の土器質。
566	33	M23	円形を帯び た楕丸形	130・110・31	○	○	-	-	-	-	鉢1本 (鉢54)	-	I-B類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。釘の 出土から明らかに貴士坑。時明は不明。
567	30	M23	楕丸形 に近い	140・125・32	○	-	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。埴土等はないが、全 面が真っ白に焼けている。火は北壁とする 407号墓の南面の陶石でも及んでいた。概 ね405号墓と重複。人骨片X405・熱残留物 測定試料採取遺構。附図(2) (1300m土 50E)
568	35	M23	楕丸形	190・160・21	○	-	○	○	-	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。人骨片X194を納めた た堂消産屋。(15c前半代)は159号墓の 最背部。堤防に埴土等。底面が範囲に基 づく。当該人骨坑・熱残留物測定試料採取 遺構は399号墓とは共通遺構。附図(2) (参考)(1405±50E)
569	37	N23	楕丸形	115・100・20	○	-	○	-	-	-	-	-	II-A類。灰黑色土。平面上240号墓と重複。 時明不明の土器質。
570	2	N23	四隅突出型 方形(付属 の周溝SD 879)	100・60・25	○	-	○	-	○	-	土師器小皿 (154~157) 小破片	-	I-B類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。西隅 突出型遺構。周溝SD879を右方形 周溝SD143号墓に伴う土坑。(人骨片S X 177)。土師器皿は14c中葉~前期。土器片 K502より古。100号墓S514。221号墓 S K533に類似。熱残留物測定試料採取 遺構。附図(2) 参照 (1140±70E)。(個 別地圖第38回)
571	52	L24	不整椭円形	90・80・32	○	○	-	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨 片S X206。平面上は大約430号墓と重複。
572	39	L24	長椭円形	120・50・21	○	-	-	-	○	-	-	-	I-B類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨 片S X209。土師器皿(14c末~15c中 葉)に近づく時明に火葬土坑と墓壙にしたと 推定。平面上427・431号墓と重複。
573	38	L24	長椭円形 に近い	100・70・17	○	○	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨 片S X210。平面上427・429・431号墓に 重複。
574	108	L24	不整長方形	125・55・40	-	-	-	-	-	-	-	-	I-V類。暗黃褐色土。底部0.3mの大刀川原石。 平面上423・427・428号墓と重複。 時明不明の土壙。
575	43	M24	不整形 (楕丸 形崩落)	120・60・38	○	○	-	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨 片S X212。平面上428・429号墓と重複。
576	44	M24	半椭円形	85・60・13	○	○	-	-	○	-	-	-	II-A類。暗黃褐色土。人骨片S X213。大半 が429号墓と重複するも同遺構。
577	31	M24	椭丸長方形	120・55・33	○	-	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。平面 上は419~420号墓と重複。 人骨片S X292。
578	109	M24	椭円形	90・75・39	-	-	-	-	-	-	-	-	II-A類。暗黃褐色土。422号墓と434号墓と の墳頂下部に当たる。人骨片S X242。
579	111	O24	長椭円形	75・40・18	-	-	-	-	-	-	-	-	II-B類。暗黃褐色土。平面上はほぼ25号墓 と重複。時明不明の土壙。
580	40	M25	長椭円形	85・45・18	-	-	-	-	○	-	-	-	II-A類。暗黃褐色土。人骨片S X214。平面 上は429号墓と重複。
581	45	M25	椭丸形に 近い椭円形	110・70・20	○	○	-	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨S X206。S K582より新。431・434号墓~ 429号墓の墳頂下部に位置する。人骨片S X211。
582	42	M25	椭丸形 に近い	90・70・23	○	○	○	-	○	-	-	-	II-B類。暗黃褐色土。人骨片S X255。S K 584より古。平面上433・435号墓と重複。 土師器皿(14c末~15c中葉)・山茶鏡(14 c前半代)より以前の火葬土坑と推測。
583	55	M25	椭丸形 に近い	80・(70)・18	○	○	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。平面上435・436・438 号墓と重複。土師器皿(15c中葉~後葉) より以前に塗装の火葬土坑と推測。
584	59	M25	椭丸長方形	(100・60・18)	○	○	○	-	○	-	-	-	II-B類。暗黃褐色土。平面上435・436・438 号墓と重複。土師器皿(15c中葉~後葉) より以前に塗装の火葬土坑と推測。
585	57	M25	椭丸長方形	140・75・29	-	○	-	-	-	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。平面上435・436・438 号墓と重複。土師器皿(15c中葉~後葉) より以前に塗装の火葬土坑と推測。
586	47	M25	椭状椭円形	170・40・17	○	○	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨片 S X241。S K588より新。平面上437・ 438・439号墓と重複。時明不明の火葬土坑。
587	71	N25	椭状椭円形	90・50・20	○	-	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。S K588 より古。平面上440~441・442号墓と重複。 人骨片S X469。時明不明の火葬土坑。
588	56	M25	椭丸長方形	(140・40・20)	○	-	○	-	○	-	-	-	I-A類。暗黃褐色土。堤防に埴土等。人骨片 S X242。S K586より古。S K587・ 589より新。平面上は437号墓と重複。

第15表 A地区検出 土坑群一覧 S K 465 ~ S K 599・第17図~22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	陶 石	炭化 物	灰	人骨 片	鉢質	土器類	釘・刀子	備考
589	54	M25	(圓丸方形)	(80・50・20)	○	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土。底面に燒土層。人骨片SKX223、土器SK590より古。平面上は436号墓と重複。
590	51	M25	略楕円形	80・(50)・20	○	○	-	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土。底面に燒土層。人骨片SKX222、SK589・SK591より新。平面上は447・448号墓と重複。
591	46	M25	不整形	100・50・20	○	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土。底面に燒土層。人骨片SKX221、SK590より古。平面上は448号墓と重複。
592	70	N25	圓丸長方形	100・55・41	○	-	○	-	-	-	土器器皿Q36) 完存	-	II B類。暗褐色土。平面上446・447号墓と重複。土器器皿(14cm未~15cm前葉)とほぼ同時期の出土品の差異が定めた。
593	66	N25	略圓丸 長方形	170・75・53	○	○	○	-	○	-	土器器皿(125) 破片	-	I B類。暗褐色土。底面の北半部に燒土層。平面上は444・445号墓と重複。土器器皿(13cm未~14cm前葉)より以降に陳列の大土器坑と推測。人骨片SK593より古。南半部石積み土坑は經年累積の力的作用から火輪A1062が近接出土。(第40回)
594	58	O25	圓丸方形	65・50・16	-	-	-	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土色。250号墓と重複。人骨片SK229。
595	110	P25	不整形圓形	95・55・20	-	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土色。人骨片SK243、254号墓と252号墓との中間下層に相当する位置。
596	126	N26	長楕円形	75・30・15	○	-	-	-	-	-	-	-	I A類。暗褐色土色。底面に燒土層。448号墓と一例が重複。時期不明の大土器坑。
597	49	N26	長楕円形	135・55・23	○	-	-	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土色。人骨片SK230。
598	48	N26	圓丸方形 近い楕円形	140・95・26	○	○	○	-	-	-	-	-	II A類。暗褐色土色。454・455号墓と重複。
599	50	N26	圓丸方形	60・60・31	○	○	-	-	○	-	土器器皿(126) 破片・ 土器器皿小皿(158・159)	-	I B類。暗褐色土色。底面に燒土層。人骨片SKX231。土器器皿曲片(13cm未~14cm初頭)より遺土層。完存の土器器皿(14cm中葉~後葉)の時期に造られたと思われる。

第15表 A地区検出 土坑群一覧 SK 465～SK 599・第17図～22図。

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	陶 石	炭化 物	灰	人骨 片	鉢質	土器類	釘・刀子	備考
A地区 土坑総計 135基		土坑平均規模		1193・82.7・264	59	25	55	2	62	1基	38基	21基	平均値は()内の推定数値を算出し算出した。 遺物関係はそれが出土した土坑の数。 最初に焼土層を持つもの: 41基(30.4%) 遺物等が一切ない不明土坑: 32基(24%)
600	140	K25	不整形圓形	100・65・22	○	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土色。底面に燒土層。外側に土塊片付ける。外北側から研磨器外縁部分片(20)、南側で土器器皿破片(B1076)などを探定。人骨片SK216。
601	138	N27	(高円形)	88・(80)・16	○	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土色。人骨片SK217。時期不明の大土器坑。
602	137	N27	(むすび形)	(100)・94・27	○	-	○	-	-	-	-	-	II A類。暗褐色土色。人骨片SK218。
603	139	O27	椭円形	50・36・20	○	-	○	-	○	-	土器器皿(139) 破片	-	II A類。暗褐色土色。土器器皿曲片(139)は15cm中葉程度に比定。それ以後の大土器坑と推定。人骨片SK218。
604	135	N28	椭圓形	92・52・18	○	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土色。人骨片SK226。時期不明火葬土坑。
605	136	N28	平行四邊形 形に近い	100・70・20	○	-	○	-	○	-	土器器皿(140)	-	II A類。暗褐色土色。底面に燒土層。相輪(日1136)、空窓(火)輪(81085)、出土、南東側約5m地点で空窓輪(81052)・(水)地輪部(81137)、もと火葬(463号墓(埴丘))に先行する火葬施設。A地区のSK588と類似形態の火葬施設。人骨片SK227。
606	149	O28	楕円形 状(圓筒突出 形態)	190・85・21	○	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土色。底面に燒土層。相輪(日1136)、空窓(火)輪(81085)、出土、南東側約5m地点で空窓輪(81052)・(水)地輪部(81137)、もと火葬(463号墓(埴丘))に先行する火葬施設。
607	159	O28	不整形圓形	100・75・24	○	-	○	-	○	-	-	-	I A類。暗褐色土色。底面に燒土層。人骨片SK228。

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第23～27図

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(㎝)	積 土	鐵 石	炭 化 物	灰 灰	人骨 片	銅質	土器類	針・刀子	備考	
608	141	O28	不整形橢円	90・80・33	○ ○ ○	-	○	-	-	-	-	-	I A類。暗茶褐色土。圓形に火葬土坑。463号墓(埴丘D)に先行する火葬土坑。人骨S X237。東側約4～6m地点で圓形から人骨細片出土。熱残留磁化測定試料採取遺構：A-D.1370～60年or-370年(VH期2世紀前)。	
609	158	K29	橢円形	80・60・40	-	-	-	-	-	-	-	-	IV類。暗褐色土。	
610	-	M29	円形(盃み)	96・88・45	-	-	-	-	古鉄 (鉄22・鉄23) 「御寧元實」 2枚	常徳造 大甕(92)	-	-	Ⅲ期。462号墓(埴丘B)の大健僅納土坑。地輪(8109)。(南)・輪(8104)。出土古鉄(鉄22)は墳丘Eの火葬土坑の近傍。古鉄(鉄23)は火葬土坑(92)内出土。大甕(92)は15c後半～16c初頭に比定。それ以後に製造の主体部施輪。16世紀末の納骨堂の可能性。	
611	150	N29	圓丸方形	80・70・31	-	-	-	-	-	-	-	-	IV類。暗褐色土。462号墓(埴丘B)より後出。暗褐色土。空腹(少)輪(8109) ～1099)。(空)風扇矢。火輪(81100)。 (空尾)火水地輪(81127)等が出土。	
612	143	O29	円形	35・34・20	-	-	-	-	-	-	-	-	II日類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。人骨S X236。	
613	20	O29	隅丸長方形	75・40・22	-	-	○	-	○	-	須彌器蓋 破片(15)	-	-	I A類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。人骨S X236。
614	23	O29	長椭円形	100・65・23	-	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗茶褐色土。人骨S X236。	
615	21	P29	長椭円形	100・55・35	○	○	○	-	○	-	-	-	I A類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。人骨S X236。	
616	22	P29	橢円形	90・60・12	○	○	○	-	-	-	-	-	I A類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。人骨S X236。	
617	145	P29	不整橢円形	80・75・30	○	○	-	-	○	-	-	-	I A類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。人骨S X236。	
618	144	P29	圓丸方形	75・55・29	○	○	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。464号墓(埴丘D)。 に先行する火葬土坑と推定。人骨S X249。	
619	160	L30	圓丸方形	70・60・18	-	-	-	-	-	-	土師器皿 (144)・小皿 (276～278) の小破片	-	-	II A類。暗茶褐色土。須彌器蓋(15)。破片 はA地区のSK27から出るの破片と組合し、 7c末～8c前半代に比定。内部から 須彌器蓋(144)出土。地輪B 1070 も近接出土。火葬使用的所見なし。16c前 半以降の火葬墓の所見なども考慮すべきか?
620	162	M30	隅丸三角形	60・40・23	-	-	-	-	-	-	-	-	IV類。地黃褐色土。	
621	163	M30	橢円形	60・38・20	-	-	-	-	-	-	-	-	IV類。暗茶褐色土。宝鏡印塔座根部B 1142 が近接して出土。	
622	161	N30	L字変形	70・70・16	-	-	-	-	-	-	-	-	IV類。暗茶褐色土。	
623	151	N30	円形	45・40・41	-	-	-	-	-	古鉄 「[中]元 實?」ほか 2枚あり (鉄208～ 209)	土師器皿片	-	-	II類。暗黃褐色土。火気の跡はないが、 出羽林官(大文政)は高熱で油解付焼して いたので、一応火葬土坑としておく。須彌 器蓋表参。
624	152	N30	圓丸方形	60・60・38	-	-	-	-	-	利鉄不能鉄 3枚(鉄210 ～212)	栗渦造大甕 (92)口縁部 破片・ 経葉外容器 小破片	-	-	II類。暗褐色土。古鉄は焼付着で利鉄不 能。大甕(92)口縁部破片は462号墓(埴丘D) のSK610出土の大甕と組合可能。SK610 は破壊後に混じるならびに後代の火葬土 坑になる。経葉外容器小破片は12c中期～ 13c初頭に比定(A地区からの散逸遺物の 一部)。
625	148	N30	圓丸方形	70・60・32	-	-	-	-	-	-	-	-	II類。茶褐色土。内底部から一石五輪の地 輪部B 1122～1124。火水地輪部B 1124 など出土。	
626	19	N30	橢円形	90・75・50	-	-	○	-	-	-	白磁器小破片 (参考13)	-	-	II日類。暗褐色土。白磁器(参考13)は15c 後半頃のものか。外表面西80cm地点古土 坑部器皿・古鉄4枚出土。また北東側1mで も古鉄1枚出土。
627	14	O30	橢円形	113・64・23	-	○	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。	
628	15	O30	長椭円形	135・60・22	○	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨S X250。	
629	18	O30	圓丸方形	74・72・19	○	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨S X251。	
630	16	O30	不整橢円形	93・57・24	○	-	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨S X252。	
631	17	O30	橢円形	73・67・22	○	○	○	-	○	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。 底部に0.3m大的川原石2個。 (第42回)	
632	146	P30	圓丸方形(盃み)	110・75・20	○	○	○	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨S X256。	
633	157	P30	圓丸方形	90・23・25	○	-	-	-	○	-	-	-	II A類。暗褐色土。圓形に火葬土坑。直徑に 小穴(0.45m×0.3m)あり。時期不明の火 葬土坑。人骨S X257。	

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第23～27図

報告 土坑 番号	提出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	石	炭化物	灰	人骨片	錢貨	土器類	釘・刀子	備考
634	156	P 30	圓丸長方形	90・70・25	—	—	—	—	○	—	—	—	II A類。暗褐色土。464号墓(鶴丘D)に先行の火葬土坑。人骨5×258。
635	155	P 30	長椭円形	100・40・23	—	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗褐色土。人骨5×259。
636	154	P 30	長椭円形 (歪み)	110・45・21	—	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗褐色土。人骨5×260。
637	164	M 31	椭円形	70・40・10	—	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗褐色土。
638	1	M 31	不整形椭円形	115・50・15	○	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
639	2	N 31	椭円形	100・75・25	○	—	—	○	—	○	—	—	I A類。暗褐色土。掘出し堆土層。人骨5×261。外北側距離1mで空窓(馬頭B 1077)、空窓(3d)輪B 1093～B 1096などを採取。時期不明の火葬土坑と考える。
640	3	N 31	圓丸方形	116・105・30	○	—	—	○	—	—	—	—	II A類。黃褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨5×262。(個別遺構第40回)
641	4	O 31	不整形椭円	102・64・25	—	○	○	—	○	—	土器器 小鏡(83)	—	II B類。褐色土。人骨5×263。土器器小 鏡(83)は16c代に比定。時期不明の 火葬土坑と推定。(個別遺構第40回)
642	5	O 31	圓丸台形	73・77・30	○	○	○	—	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
643	6	O 31	圓丸長方形	76・56・22	—	○	○	—	○	—	—	—	人骨5×266。
644	7	P 31	椭円形	80・72・33	○	—	○	—	—	—	—	—	I A類。暗褐色土。掘出し堆土層。時期不明の火葬土坑。
645	8	P 31	不整形椭円	84・75・25	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。黃褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨5×268。(個別遺構第40回)
646	9	P 31	椭円形	90・55・25	○	○	—	—	○	—	—	—	I A類。黃褐色土。掘出し堆土層。時期不明の火葬土坑。
647	153	P 31	圓丸長方形	110・60・24	—	—	—	—	—	—	—	—	IV類。黃褐色土。
648	12	O 32	圓丸方形	76・56・25	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。黃褐色土。人骨5×270。
649	11	O 32	不整形椭円形	74・64・24	○	—	○	—	○	—	口クロ土器器 破片(34)	—	I B類。黃褐色土。掘出し堆土層。入水の 口クロ土器器破片(34)破片は11c代と推定。 それよりは後代の火葬土坑。人骨5×271。
650	10	P 32	不整形三角形	70・50・13	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。黃褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨5×272。
651	10	P 32	圓丸長方形	100・60・25	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。黃褐色土。土坑X 650より古い。 時期不明の火葬土坑。人骨5×273。(田X 273を名前変更した)。
652	44	P 32	椭円形	90・73・27	—	○	○	—	—	—	—	—	II A類。黃褐色土。時期不明の火葬土坑。(個 別遺構第42回)
653	26	P 32	圓丸方形 (歪み)	80・63・30	○	○	○	—	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
654	43	P 32	不整形椭円形	85・66・20	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗褐色土。人骨5×274。
655	13	N 33	椭円形	80・64・30	○	—	○	—	○	—	鉤釘(参考) 1点	—	I B類。黃褐色土。掘出し堆土層。時期不 明の火葬土坑。人骨5×275。
656	25	O 33	椭円形	80・65・25	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨5×276。
657	32	O 33	不整形椭円形	115・95・28	○	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
658	24	O 33	不整形椭円形	90・66・30	○	—	○	—	○	—	—	—	I A類。黃褐色土。掘出し堆土層。時期不 明の火葬土坑。人骨5×277。
659	55	O 33	不整形椭円形	83・70・26	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨5×278。
660	42	P 33	不整形 圓丸方形	85・78・26	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨5×279。
661	27	P 33	圓丸長方形 (歪み)	98・78・28	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。褐黑色土。人骨5×280。(個別 遺構第42回)
662	28	P 33	盤算形	142・80・22	○	—	○	—	○	—	古鏡(「景徳元 寶」ほか3枚 (銘61～63))	—	II B類。朱色土。錢鏡(「景徳元 寶」ほか3枚)。錢鏡(「銘61～ 63」)。鑄造付属の銭2枚(銘62～63)は 判読不能。火葬土坑。人骨5×283。
663	29	P 33	圓丸台形	64・58・17	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。褐色土。時期不明の火葬土坑。 人骨5×284。
664	31	O 33	不整台形	90・70・30	○	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬土坑。
665	165	M 34	不整形椭円形	100・70・25	—	—	—	—	—	—	—	—	IV類。黃褐色土。
666	40	N 34	不整形 圓丸方形	100・88・30	○	○	○	—	○	—	鉤釘(鉤56) 1点	—	II B類。黃褐色土。鏡面に堆土層。時期不 明の火葬土坑。人骨5×285。
667	56	O 34	圓丸方形	70・68・27	—	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。
668	33	P 34	不整形椭円形	95・78・25	○	—	○	—	○	—	—	—	I A類。暗褐色土。鏡面に堆土層。火葬用 土坑。人骨5×286。(個別遺構第42回)。 熱残留量測定試料採取遺構：A D1210年 ±140年(「河内2世紀」)。
669	133	P 34	(椭円形)	(100)・76・20	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。黃褐色土。S K 670より古い。時 期不明の火葬用土坑。人骨5×289。

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第23～27回

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	積 土	堆 積 化 物	灰 灰	人骨 片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考
670	132	P 34	(略円形)	84・(80)・10	-	-	○	-	-	-	-	II A類。暗茶褐色土。SK 671よりも古く、SK 669よりも新しい。時期不明の火葬土坑。
671	30	P 34	不整形圓 丸長方形	122・102・17	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石土等、底部も一面に赤く焼ける。SK 670よりも新しい。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X290。
672	131	P 34	(廣丸方形)	(60)・60・19	-	-	○	-	-	-	-	II A類。暗褐色土。
673	39	Q 34	不整橢円形	240・140・25	-	○	○	-	○	-	鉄釘(鉄 78) 1枚	II B類。深褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X291。
674	70	Q 34	不整形橢円	95・60・20	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X292。
675	52	Q 34	橢円形	90・60・20	○	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X296。
676	41	O 35	橢円形	112・95・30	○	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。底部に石あり。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X297。
677	54	O 35	不整形橢円	118・76・29	○	-	○	-	○	-	-	I A類。暗茶褐色土。底部に堆土等。底部に石あり。時期不明の火葬用土坑。人骨 S X298。
678	57	P 35	廣丸方形	90・85・20	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。二重土坑(内部土坑規模は0.38m×0.35m×0.1m)。底部に10cmの大いの石5個、0.23mの大いの石1個。時期不明の火葬土坑。人骨 S X299。
679	48	P 35	略円形	55・48・20	-	○	○	-	-	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石。時期不明の火葬土坑。
680	47	P 35	略円形	80・72・25	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石。時期不明の火葬土坑。人骨 S X300。
681	36	P 35	廣丸長方形	100・50・25	-	-	○	-	○	-	-	古鉄5枚(鉄 199・200) 「太平通寶」 「永宋通寶」 ほか
682	34	P 35	略円形	84・75・20	-	-	○	-	○	-	-	古鉄5枚(鉄 55～59) 「皇宋通寶」 ほか
683	35	Q 35	不整橢円形	80・60・20	-	-	○	-	○	-	-	鉄釘1本 (参考91)
684	134	Q 35	廣丸長方形	80・78・11	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。人骨 S X304。
685	123	Q 35	橢円形	90・80・20	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石(0.1～0.2m大)が4個以上。時期不明の火葬土坑。人骨 S X305。
686	53	Q 35	橢円形	64・54・28	-	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。人骨 S X306。
687	142	O 36	略円形	46・44・15	-	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。
688	116	P 36	廣丸方形	76・75・25	-	○	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。底部に石(0.1～0.15m大)6個あり。時期不明の火葬土坑。人骨 S X307。
689	49	P 36	(廣丸方形)	74・(70)・28	-	-	○	-	-	-	-	II A類。茶褐色土。底部に石(0.15mの小石)5個あり。
690	50	P 36	廣丸長方形	115・65・25	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部も全面赤く焼ける。土坑 S 669よりも新。時期不明の火葬土坑。人骨 S X308。
691	117	P 36	廣丸長方形	80・65・28	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石(0.1～0.15m大)2個あり。人骨 S X309。
692	118	P 36	不整橢円形	105・80・33	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に石(0.25～0.3m大)あり。時期不明の火葬土坑。人骨 S X310。
693	129	P 36	橢円形	110・95・25	-	○	○	-	○	-	-	II B類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨 S X311。
694	51	P 36	不整橢円形	110・100・15	-	-	○	-	○	-	-	II B類。暗褐色土。底部に16cmの石(0.15～0.2m大)。人骨 S X312。
695	124	Q 36	橢円形	60・50・20	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。人骨 S X313。
696	125	Q 36	廣丸方形	100・95・18	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。底部に石(0.25～0.3m大)。人骨 S X314。
697	126	Q 36	廣丸方形	82・76・40	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨 S X315。
698	127	Q 36	(橢円形)	(66)・52・21	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。SK 669よりも古。人骨 S X316。
699	128	Q 36	(橢円形)	(80)・72・20	-	-	○	○	-	○	-	II B類。暗茶褐色土。SK 668よりも新。錢貞觀察表(鉄213～216)、1枚は判別不能。火葬土坑。人骨 S X317。
700	69	P 36	廣丸方形	88・82・21	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。底部に陶瓦を置き、石(0.2m大)が並ぶ。SK 701よりも新。人骨 S X318。

第 16 表 B 地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第 23～27 図

報告 土坑 番号	標出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深(cm)	堆 土	崩 落	炭 灰	人骨 片	錢貨	土器類	釘・刀子	備考
701	130	Q37	(不整形 円形)	(80・65・11	-	○	○	-	○	-	-	II A類。黒褐色土。底部に間隔を置き、石(0.2m大)が2個ある。S K700より古。火葬土坑。人骨5 X319。
702	58	Q36	圓丸長方形	120・70・28	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。底部に0.3m大の川原石が2個埋まる。人骨5 X320。
703	68	O37	長楕円形	120・80・30	-	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。人骨5 X321。
704	114	P37	(楕円形)	85・65・18	-	-	○	-	○	-	-	II B類。暗茶褐色土。S K705より新。錢貨觀察表(銭197~198)・永業通寶・鑄か
705	115	P37	(楕円形)	120・85・35	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。人骨5 X323。
706	71	P37	不整形 楕円	77・87・18	-	○	○	-	○	-	-	古錢12枚(銭107~118)・天聖元寶・ほか
707	72	P37	(圓丸方形)	(88)・86・30	-	-	○	-	○	-	-	古錢7枚(銭119~125)・開元通寶・ほか
708	113	P37	圓丸方形	105・100・25	-	○	○	-	○	-	-	鉄釘12点(鉄57~68)・銀盒(鉄30)
709	73	P37	長楕円形	112・42・14	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底面に火を受けた石(約0.2m大)。火葬土坑。人骨5 X326。(個別遺構第42回)
710	119	P37	(圓丸方形)	76・62・15	-	-	○	-	○	-	-	II B類。黒褐色土。S K711・713より新。人骨5 X328。底部に0.35m大的石あり。
711	120	P37	(不整形 円形)	(100)・68・14	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。S K710・712より古。人骨5 X329。
712	121	P37	(不整形 円形)	(80)・(70)・12	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。人骨5 X330。
713	122	P37	(圓丸方形)	80・70・15	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底面に火を受けた石(約0.2m大)。火葬土坑。人骨5 X331。
714	74	Q37	圓丸長方形	106・66・38	-	-	○	-	○	-	-	鉄釘1本(鉄73)
715	75	Q37	(不整形 円形)	90・(70)・20	-	○	○	-	○	-	-	II B類。黒褐色土。人骨5 X332。
716	59	Q37	椭円形	105・85・15	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に0.25m大的石が2個埋まる。火葬土坑。人骨5 X334。
717	60	Q37	圓丸方形	70・65・18	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に0.25m大的石が2個埋まる。火葬土坑。人骨5 X335。
718	67	Q37	圓丸長方形	110・65・25	-	○	○	-	○	-	-	鉄釘1本(鉄79)
719	64	O38	圓丸方形	100・90・32	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。底部に0.1~0.2m大的石が4個埋まる。火葬土坑。人骨5 X337。
720	61	P38	圓丸方形	95・80・30	-	○	○	-	-	-	-	鉄釘4点(鉄74~77)
721	77	P38	不整形円形	90・50・25	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。火葬土坑。人骨5 X338。
722	45A	P38	(楕円形)	110・70・15	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。S K723より古。火葬土坑。人骨5 X339。
723	45B	P38	(不整多 角形)	110・100・15	○	-	○	-	○	-	-	古錢2枚(銭53・54)・開元通寶・ほか
724	76	Q38	圓丸長方形	120・63・35	-	○	○	-	○	-	-	II B類。暗褐色土。底面に火(0.1m大)が3個埋まる。火葬土坑。人骨5 X341。
725	109	P38	圓丸方形	90・76・26	-	○	○	-	○	-	-	II B類。暗茶褐色土。S K726より新。錢貨觀察表(銭48~51)・永業通寶・鑄か
726	110	P38	(楕円形)	(90)・78・18	-	-	○	-	-	-	-	II A類。暗褐色土。S K727・728より古。火葬土坑。人骨5 X340。
727	46	P38	長楕円形	100・46・20	○	○	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。S K726・729より新。圓形に火葬土坑。錢貨觀察表(銭48~51)・火葬土坑。人骨5 X342。
728	104	Q38	(圓丸長 方形)	90・70・20	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に0.1~0.15m大的石2個埋まる。火葬土坑。人骨5 X344。
729	112	Q38	圓円形	80・76・22	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。S K727より古。人骨5 X345。
730	111	Q38	長楕円形	94・50・23	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部に0.2m大的石2個埋まる。火葬土坑。人骨5 X346。
731	38	Q38	圓丸長方形	92・58・20	○	○	○	-	○	-	-	II B類。暗褐色土。S K732より古。底部に0.15~0.25m大的石2個埋まる。錢貨觀察表(銭52)・火葬土坑。人骨5 X347。

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600~SK 767・第23~27回

報告 土坑 番号	経年 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	填 土	鐵 化 物	灰 灰 土	人骨 片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考	
732	105	Q39	(隅丸長方形)	92・(80)・21	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗茶褐色土。SK731より古。人骨5X348。	
733	37	Q38	隅丸平行四辺形	124・80・23	-	-	○	-	○	古銭7枚 (魏41～47) 「開通元寶」 ほか	-	-	II B類。黒茶褐色土。SK734より新。SK734は含め底面に大小1.8個の石(1.01～0.3m大)が不規則に散在。銭貨観察表(魏41～47)。培土付着。火葬土坑。人骨5X349。
734	63	Q38	隅丸台形	96・66・17	-	-	○	-	○	-	-	-	
735	108	R38	不整椭円形	124・84・14	-	○	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。底部1間隔を走る一对の石(0.3～0.35m大)。露わる。火葬土坑。人骨5X351。	
736	65	P39	椭円形	105・85・20	-	-	○	-	-	古銭1枚 (魏60) 「皇宋通寶」	-	-	II B類。暗黃褐色土。底部厚層3ヶ所に長径0.2m前後の半円凹小穴を穿つ。銭貨観察表(魏60)。
737	62	P39	不整形椭円	130・110・50	○	-	○	-	○	古銭6枚 (魏68～73) 「景德元寶」 ほか	-	-	II B類。暗褐色土。内側にも0.05×0.55m大小の土坑。銭貨観察表(魏68～73)。培土付着で判読不能3枚。火葬土坑。人骨5X352。(底部直線模様第42回)
738	66	P39	不整形椭円	85・65・25	-	○	○	-	○	-	-	-	
739	102	P39	不整椭円形	118・80・20	-	-	○	-	○	-	-	-	
740	103	P39	隅丸方形	(90)・68・10	-	-	○	-	○	-	-	-	
741	89	Q39	(隅丸方形)	70・(60)・23	-	○	○	-	-	-	-	II A類。暗褐色土。SK742より古。火葬土坑。	
742	90	Q39	不整椭円形	98・66・25	-	○	○	-	○	古銭2枚 (魏105・106) 「永業通寶」	-	-	II B類。黒褐色土。SK741より新。銭貨観察表(魏105～106)。人骨5X356。
743	106	Q39	不整形椭円	132・98・32	-	○	○	-	○	古銭19枚 (魏133～151) 「開通元寶」 ほか	土師器皿 (143) 及び 小皿(279) の各破片	-	II B類。暗褐色土。SK744より新。銭貨観察表(魏133～151)。「永業通寶」2枚、「開通元寶」1枚。判読不能6枚。(培土付着・歪曲7枚)。土師器皿(143・279)は15cm後壁で16cm前面に比定。それ以後の火葬土坑と推測。人骨5X357。
744	107	Q39	(不整形 椭円)	(180)・110・20	-	○	○	-	○	古銭25枚 (魏160～ 184) 「祥符元 寶」 ほか	-	鉢釘1本 (鉢80)	II B類。暗褐色土。SK743・751より古。火葬土坑。人骨5X358。
745	99	Q39	隅丸長方形	102・72・20	-	○	○	-	○	-	-	-	
746	101	Q40	(隅丸台形)	82・(66)・18	-	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。SK747より新。人骨5X360。	
747	100	Q40	(隅丸方形)	104・(74)・20	○	-	○	-	○	古銭5枚 (魏165～189) 「天祐通寶」 ほか	-	-	II B類。暗茶褐色土。SK746・748より古。銭貨観察表(魏165～189)：「説不能」枚を含む。火葬土坑。人骨5X361。
748	98	Q39	不整形椭円	120・76・23	○	-	○	-	○	古銭16枚 (魏86～103) 「天祐元 寶」 ほか	土師器皿小皿 (280) 破片	-	II B類。暗茶褐色土。SK749より古。SK747・750より新。銭貨観察表(魏86～103)。土師器皿小皿(280)は16cm前面に比定。それ以後の火葬土坑。人骨5X362。底面に溝(幅0.2m、長さ0.7m、深さ0.1m)があり。
749	88	Q40	隅丸長方形	145・110・30	-	○	○	-	○	古銭16枚 (魏86～103) 「天祐元 寶」 ほか	土師器皿小皿 (281) 小破片	-	II B類。暗茶褐色土。SK749(281)・1416cの半円弧に比定。それ以後の火葬土坑。SK748より新。銭貨観察表(魏86～103)。人骨5X363。(底部直線模様第42回)
750	97	Q39	(隅丸長 方形)	(110)・72・15	○	-	○	-	○	-	-	II A類。暗褐色土。SK748・751より古。火葬土坑。人骨5X364。	
751	96	Q39	隅丸長方形	106・76・20	-	○	○	-	○	古銭8枚 (魏152～159) 「淳化元 寶」 ほか	-	-	II B類。暗褐色土。SK744やSK750より新。銭貨観察表(魏152～159)。培土付着一枚。底面に5個の石(0.15～0.2m大)を配列。火葬土坑。人骨5X365。
752	147	Q39	隅丸方形	84・76・16	-	-	-	-	-	古銭1枚 (魏207) 「永業通寶」	-	-	II A類。暗茶褐色土。銭貨観察表(魏207)。
753	94	Q39	隅丸方形	88・86・22	○	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。底面南側に7個の石(0.1～0.4m大)を集積。火葬土坑。人骨5X366。	
754	95	R39	隅丸方形	102・82・20	○	-	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。底面中央(1)と周囲(10)に計11個の石(0.1～0.2m大)を配列。火葬土坑。人骨5X367。	
755	92	R39	(隅丸方形)	(100)・84・19	-	-	○	-	○	古銭1枚 (魏196) 「永業通寶」	-	-	II B類。暗茶褐色土。SK756より古。銭貨観察表(魏196)：「説不能」枚。人骨5X368。
756	93	R39	(隅丸台形)	(100)・78・15	-	○	○	-	○	-	-	II A類。茶褐色土。SK755より古。火葬土坑。底面に石2個(0.2～0.3m大)を盛る。人骨5X369。	

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第23～27図

報告 土坑 番号	標出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深 (cm)	堆 土	腐 化物	灰	人骨 片	鉄質	土器類	釘・刀子	備考
757	83	P 40	圓丸方形	88・86・20	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。抜根。内部に更に土坑 (0.72m, 0.6m, 0.1m)と (0.38m, 0.32m, 0.1m)あり。工具の土坑。
758	78	P 40	長楕円形	146・72・25	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨 S X 370。
759	79	P 40	不整形橢円	(130)・80・23	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗褐色土。抜根。火葬土坑。人骨 S X 331。
760	80	Q 40	圓丸方形	60・54・15	○	—	○	—	—	—	—	II A類。暗褐色土。火葬土坑。
761	81	Q 40	長楕円形	96・60・18	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗褐色土。人骨 S X 372。
762	82	Q 40	圓丸方形	60・50・15	—	—	○	—	○	—	—	II B類。暗褐色土。残骨觀察表 (図64～67)・端附付着で判読不能3枚。火葬土坑。人骨 S X 373。
763	85	Q 40	(圓丸方形)	(80)・76・20	—	—	○	—	—	—	—	II B類。暗褐色土。S K 764より古。鉄質觀察表 (図201～206) : 空洞度良好3枚。
764	86	Q 40	(圓丸方形)	(80)・80・20	—	○	○	—	○	—	—	II A類。深褐色土。底面に3個の石 (0.1～0.15m) が溝る。S K 763より新。北側0.4m地点にも古銭一枚 (192～194) 近接出土。火葬土坑。人骨 S X 374。
765	87	Q 40	不整形橢円	125・70・20	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗褐色土。火葬土坑。
766	84	R 40	橢円形	100・95・25	○	—	○	—	○	—	—	人骨 S X 375。
767	91	R 40	圓丸長方形	130・95・16	—	—	○	—	○	—	—	II B類。暗褐色土。鉄質觀察表 (図87～85)・端附付着2枚、利尻不堪1枚。底面に2個の石 (0.2～0.3m大) が一對溝る。火葬土坑。人骨 S X 376。

報告 土坑 番号	標出 番号	小地区名	規模 幅・横・深 (cm)	堆 土	腐 化物	灰	人骨 片	鉄質	土器類	釘・刀子	備考
B地区 土坑群計 168基		土坑平均規模	93.9・70.1・23.0	63	61	149	0	129	29基	14基	15基

第16表 B地区 土坑群一覧 SK 600～SK 767・第23～27図

報告 土坑 番号	標出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深 (cm)	堆 土	腐 化物	灰	人骨 片	鉄質	土器類	釘・刀子	備考
768	欠番	O 39	円形	60・60・17	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。
769	242	O 40	圓丸方形	120・50・25	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
770	241	O 40	橢円形	45・40・38	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
771	297	O 40	橢円形	115・80・15	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。時期不明の火葬土坑。人骨 S X 378。
772	305	P 40	略圓丸方形	75・65・45	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨 S X 379。
773	231	P～Q 40	橢円形	90・65・20	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬不明の火葬土坑。人骨 S X 380。土坑底部に小穴。
774	252	M-N 41	不整橢円形	75・60・45	—	—	—	—	—	—	—	IV類。暗茶褐色土。底面に0.20m大の川原石1個。
775	244	O 41	略圓丸長方形	60・40・37	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
776	243	O 41	橢円形	60・50・30	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
777	301	O 41	圓丸正角形	75・60・40	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨 S X 381。
778	240	O 41	不整橢円形	100・80・47	—	—	○	—	○	—	—	II B類。暗茶褐色土。土器類小皿 (245)は15c前半・中葉頃に比定。それ以後の火葬土坑。人骨 S X 382。(5)は手蓋無里路 (6基・43基)。
779	234	P 41	略圓丸方形	105・80・58	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨 S X 383。
780	232	P 41	長楕円形	180・100・47	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K 784より古い火葬土坑。人骨 S X 384。罐文土器は混入。
781	233	P 41	圓丸台形	85・80・42	—	—	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
782	300	Q 41	圓丸方形	50・50・15	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K 783より古。人骨 S X 385。
783	208	Q 41	略橢円形	120・110・50	—	○	○	—	○	—	—	II B類。暗茶褐色土。S K 785より古。S K 783より新。S K 784より古。S K 782より新。サヌカイト剝片混入。

第17表 C地区検出 土抗群一覧 SK 768～SK 873・第28～33図

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	埴 土	礫 石	漂 浮 物	灰 灰	人骨 骨	鉢質	土器類	針・刀子	備考
784	204	Q41	不整楕円形	80・65・40	—	○	○	—	○	古鉢1枚 (残247)	サヌカイト 削片混入	—	II B類。暗茶褐色土。鉢質観察表(残247)、 SK780より新。火葬土坑。人骨S X 387。 サヌカイトは混入。
785	205	Q41	椭圓丸方形	150・110・50	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK783より新。火葬 土坑。人骨S X 388。
786	302	Q41	略内形	65・60・33	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 389
787	201	Q41	やや圓形	60・45・10	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 390
788	202	Q41 ～ R41	長楕円形	175・100・18	○	○	○	—	○	—	土器器皿小皿 (283) 破片	—	II B類。暗茶褐色土。SK789より古。土器 器皿小皿(283)は15 cm後頭部～16 cm初頭部に 比定。それ以後の火葬土坑。人骨S X 391。 (写真残88)
789	203	Q41	椭圓長方形	85・65・28	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK788より新。火葬 土坑。人骨S X 392。
790	206	Q41	長楕円形	90・50・45	—	○	○	—	○	古鉢4枚 (残 257～260)	—	—	II B類。暗茶褐色土。鉢質観察表(残257 ～260)：焰状付着。火葬土坑。 人骨S X 393。
791	209	Q41 ～ 42	椭圓ひし形	140・80・37	—	○	○	—	○	古鉢2枚 (残 245～246)	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK793より古。火葬 土坑。判読不能1枚。火葬土坑。 人骨S X 394。
792	207	Q41	縦長鉤形	145・50・30	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK793より古。火葬 土坑。人骨S X 395。
793	210	Q41	楕円形	(110)・50・25	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK794より古。SK 793より新。人骨S X 396。
794	211	Q41 ～ 42	不整楕円形	135・80・30	—	—	○	—	○	—	サヌカイト 削片混入	—	II A類。暗茶褐色土。SK793より新。底部 に0.2m大的の川原石握る。人骨S X 397。
795	212	Q～ R41	椭圓三角形	85・60・25	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 398。
796	259	P42	椭円形	110・90・35	○	○	○	—	○	—	サヌカイト 削片混入	—	II A類。暗茶褐色土。c地区で唯一の堆土帯。 火葬土坑。人骨S X 399。サヌカイト削片 は混入。
797	235	P42	ほ円形	70・65・40	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨S X 400。
798	236	P42	椭円形	90・80・45	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK799より古。人骨 S X 401。
799	220	Q42	椭円形	90・85・47	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK798より新。火葬 土坑。人骨S X 402。
800	215	Q42	椭圓三角形	165・120・40	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK801～803より新。 底部(0.3～0.4m)大川原石2個。火葬 土坑。人骨S X 403。
801	298	Q42	略内形	(75)・65・42	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK800より古。 人骨S X 404。
802	299	Q42	略内形	(85)・75・30	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK800より古。 人骨S X 405。
803	216	Q42	不整台形	(80)・75・27	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK800より古。 人骨S X 406。
804	217	Q42	長楕円形	160・100・48	—	○	○	—	○	古鉢5枚 (残 224～228)	土器器 皿破片	—	II B類。暗茶褐色土。鉢質観察表(残224 ～228)。SK803・805・806より新。火葬 土坑。人骨S X 407。
805	218	Q42	椭圓長方形	(100)・75・30	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK804より古。 人骨S X 408。
806	219	Q42	長楕円形	(120)・60・25	○	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK816より新。 火葬土坑。人骨S X 409。
807	227	Q42 ～ 43	椭圓長方形	100・70・30	—	—	○	—	○	古鉢8枚 (残 229～236)	—	—	II B類。暗茶褐色土。鉢質観察表(残229 ～236)：判読不能1枚。SK806より新。 人骨S X 410。
808	214	Q42	椭圓長方形	105・80・25	—	○	○	—	○	古鉢6枚 (残 239～244)	—	—	II A類。暗茶褐色土。鉢質観察表(残239 ～244)：溶解部。火葬土坑。 人骨S X 411。
809	289	Q42	楕円形	(90)・75・25	—	○	○	—	○	—	土器器 皿破片	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 412。
810	213	R42	楕円形	80・50・30	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 413。
811	295	O43	楕円形	110・70・23	○	○	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。	
812	296	O43	椭圓九方形	90・85・25	○	—	—	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 414。
813	237	P43	不整楕円形	70・55・33	—	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK814より新。
814	238	P43	椭圓三角形	120・85・42	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK813より古。 人骨S X 415。
815	254	P43	椭圓丸方形	80・85・40	—	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
816	228	Q43	楕円形	(120)・(65)・32	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 416。
817	221	Q43	楕円形	120・75・45	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。 人骨S X 417。

第17表 C地区検出 土坑群一覧 SK 768～SK 873・第28～33図

報告 土坑 番号	標出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・横・深 (cm)	埴 石	漆化 物	灰	人骨 片	銭貨	土器類	釘・刀子	備考	
818	222	Q43	略圓九方形	115 × 110 × 30	—	—	○	—	○ 古錢1枚 (錢 269～281)	—	—	II B類。栗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢269～281) : 滲漏付着一枚。判断不能5枚。火葬土坑。人骨S X 418。	
819	226	Q43	不整台形?	100 × (75) × 45	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K820より古。人骨S X 419。	
820	249	Q43	(不整構円?)	(160) × (100) × 33	—	—	○	—	○	—	—	II A類。栗茶褐色土。S K821より古。SK 819より新。人骨S X 420。	
821	250	Q43	(長構円形?)	(100) × (60) × 45	—	—	○	—	○	—	—	II A類。栗茶褐色土。S K820より新。人骨S X 421。	
822	223	Q43	不整構円形?	(150) × (110) × 50	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K223との間で (錢254) : 滲漏通貨。出土: S K823 × 825より古。火葬土坑。人骨S X 422。	
823	224	Q43	不整構円形?	110 × 80 × 38	—	○	○	—	○	—	サヌカイト 剖片混入	II A類。暗茶褐色土。S K822より新。火葬土坑。人骨S X 423。	
824	225	Q43	(構円形?)	(140) × (80) × 40	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K822 × 826より新。SK 825より古。火葬土坑。人骨S X 424。	
825	267	Q43	(長構円形?)	(165) × 90 × 43	—	○	○	—	○	—	サヌカイト 剖片混入	II A類。暗茶褐色土。S K824より新。火葬土坑。人骨S X 425。	
826	266	Q43	(不整構円形?)	(130) × (85) × 22	—	—	○	—	○	古錢6枚 (錢 286～291)	—	II B類。暗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢286～291) : 滲漏付着一枚。判断不能1枚。S K824より古。底面に0.3mの大川原石。火葬土坑。人骨S X 426。	
827	264	Q44	不整構円形	100 × 75 × 32	—	○	○	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑と推定。	
828	239	P 44	構円形	80 × 70 × 30	—	○	○	—	—	土師器皿 (145～147) 同小皿 (82) 破片	—	II B類。暗茶褐色土。土師器皿 (145～147と82) は15c後葉～16c初頭階に比定。それ以後の火葬土坑と推定。(写真第8回)	
829	265	Q43 ～44	円形	80 × 80 × 25	—	○	○	—	○	古錢1枚 (錢261)	土師器皿片	—	II B類。栗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢261)。火葬土坑。人骨S X 427。
830	229	Q44	圓丸半円形	100 × 70 × 38	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 428。	
831	230	Q44	圓丸長方形	140 × 90 × 30	—	○	○	—	○	古錢6枚 (錢 248～253)	土師器皿片	鉄釘1本 (錢98)	II B類。暗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢248～253) : S K832 × 833より新。火葬土坑。人骨S X 429。
832	268	Q44	長構円形?	(140) × 50 × 18	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K831より古。SK 833より新。火葬土坑。人骨S X 430。	
833	278	Q44	(不整構円形?)	(130) × (70) × 30	—	○	○	—	○	古錢2枚 (錢 284～285)	—	鉄釘1本 (参考100)	II B類。暗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢284～285) : 滲漏付着。S K831 × 832より古。SK 834より新。火葬土坑。人骨S X 431。
834	275	Q44	(構円形?)	(90) × (80) × 25	—	○	○	—	○	古錢1枚 (錢267)	—	—	II B類。暗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢267) : S K833より古。S K835より新。火葬土坑。人骨S X 432。
835	274	Q44	(不整構円形?)	(160) × (90) × 17	—	○	○	—	○	古錢4枚 (錢 263～266)	土師器皿2枚 (148～149) 破片	刀子1本 (錢25)	II B類。暗茶褐色土。銭貨觀察表 (錢148～149) c中盤～後葉に比定。それ以後の火葬土坑。銭貨觀察表 (錢263～266) : SK 834より古。人骨S X 433。
836	247	P ~ Q45	略円形	60 × 60 × 30	—	—	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨S X 434。	
837	245	P 45 ～46	不整構圓形	140 × 105 × 23	—	○	—	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 435。	
838	290	Q45	(長構円?)	(80) × 50 × 25	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K839より古。火葬土坑。人骨S X 436。	
839	277	Q45	詳説円形	60 × 50 × 30	○	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K838 × 840より新。火葬土坑。人骨S X 437。	
840	276	Q45	(不整構円形?)	(90) × 45 × 28	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K839より古。火葬土坑。人骨S X 438。	
841	304	P 46	圓丸長方形	85 × 60 × 30	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 439。	
842	248	P 46 ～ Q46	不整台形	90 × 75 × 40	—	—	○	—	○	—	—	II A類。栗茶褐色土。人骨S X 440。	
843	285	Q46	(圓丸長方形?)	(85) × (55) × 27	—	○	○	—	○	—	—	II A類。栗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 441。	
844	255	Q46	不整台形	120 × 80 × 32	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 442。	
845	284	Q46	(圓丸長方形?)	(80) × (60) × 20	○	—	○	—	—	土師器皿片	—	II A類。暗茶褐色土。S K846より新。火葬土坑。	
846	286	Q46	(圓丸長方形?)	(90) × (60) × 23	○	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。S K845より古。火葬土坑。人骨S X 443。	
847	261	P 47	圓丸長方形	70 × 50 × 37	—	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 444。	
848	294	P 47	略圓九方形	100 × 90 × 20	○	○	○	—	○	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨S X 445。	

第17表 C 地区検出 土抗群一覧 S K 768～S K 873・第 28～33 図

報告 土坑 番号	検出 番号	小地区名	平面形状	規模 幅・幅・深(cm)	埴 土	焼 石	炭化 物	灰	人骨 片	鉢質	土器類	釘・刀子	備考
849	270	Q47	(不整楕円形?)	(110) × (80) × 23	—	○	○	—	○	—	土師器小皿 2枚(284～285)	—	II B類。暗茶褐色土。小皿(284～285)は 15c後葉期に比定。それ以前の火葬土坑。 人骨SK446。
850	271	Q47	(楕円形)	(130) × (90) × 32	—	○	○	—	○	—	サフカイト 石鏡1点(3) 混入	—	II A類。暗茶褐色土。SK849、851より新。 火葬土坑。人骨SX447。
851	272	Q47	(楕円形?)	(100) × (65) × 25	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK850より古。人骨 SX448。
852	256	Q48	楕丸台形	190 × 160 × 25	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX449。
853	262	P48	楕円形	80 × 65 × 20	—	—	○	—	○	吉賀2枚(残 255～256)	—	—	II B類。暗茶褐色土。残削痕有(残255 ～256)。吉賀2枚(残255～256)
854	257	P48	長楕円形	100 × 60 × 23	—	○	○	—	○	—	鐵釘5本 (鉄93～97)	—	II B類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SK451。
855	246	Q48	略椭円形	115 × 75 × 25	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。SK853より古。 人骨SX452。
856	288	Q48	(楕円形?)	(100) × (60) × 33	—	○	○	—	○	—	ロコロ土師 器皿(32) 底部破片、 土師器小皿 (164) 破片	—	II B類。暗茶褐色土。ロコロ土師器皿(32) は11c代のもの。小皿(164)は11c後 葉～14c前葉期に比定。それ以後の火葬土 坑。人骨SK453。
857	283	Q49	(楕円形?)	(160) × (120) × 20	○	○	○	—	—	—	サフカイト 針片混入	鉄釘1本 (参考101)	II B類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SK454。
858	303	P49	楕円形	65 × 55 × 17	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨SX455。
859	273	Q49	(楕丸形?)	(145) × (100) × 30	○	○	○	—	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX456。
860	280	Q50	楕円形	120 × (100) × 37	—	—	○	—	○	—	サフカイト 針片4点 混入	—	II A類。暗茶褐色土。人骨SK457。
861	279	Q50	楕丸三角形	120 × (90) × 45	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX458。
862	281	Q51	(楕丸形?)	(155) × (120) × 50	—	—	○	—	○	—	鐵土器 深杯(11) 破片混入	—	II A類。暗茶褐色土。人骨SK459。
863	291	P52	楕丸台形	110 × 100 × 38	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨SK460。
864	282	Q52	(楕円形)	(140) × (100) × 32	—	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。
865	263	P～ Q53	楕円形	80 × 75 × 35	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SK461。
866	293	Q54	不整楕円形	120 × 85 × 25	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SK462。
867	253	P54	釣鐘形	120 × 90 × 15	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。底面の2/3に岩盤。 人骨SX463。
868	292	P54	楕円形	100 × 80 × 18	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。底面の間に0.4mの大石。 人骨SX464。
869	287	Q54	(楕円形)	(85) × 75 × 42	—	—	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。人骨SX465。
870	258	O57	楕丸長方形	130 × 95 × 20	○	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX466。
871	251	N59	楕円形	130 × 90 × 23	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。火葬土坑。人骨SX467。
872	260	O59	楕丸形	120 × 105 × 25	—	○	○	—	○	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。底面に0.4mの大石。 火葬土坑。人骨SX468。
873	269	P59	楕円形	70 × 70 × 22	○	—	○	—	—	—	—	—	II A類。暗茶褐色土。底面に0.4mの大石。 火葬土坑。

C地区 土坑総計 106基	土坑平均規模	規模 幅・幅・深(cm)	埴 土	焼 石	炭化 物	灰	人骨 片	鉢質	土器類	釘・刀子	備考
—	—	101.6 × 73.3 × 31.7	17	56	102	0	91	15基	24基	6基	()内の数値は除外して平均値を算出した。 圓形に埴土帯を持つもの：1基 (0.9%) 遺物等が一切ない不明土坑：2基 (1.9%)

第17表 C地区検出 土坑群一覧 SK 768～SK 873・第28～33回

報告番号	器種(名稱)	地区名	出土遺構等	法量(cm・g)				材 料	時 期	備 考 條
				長径	短径	厚み	重さ			
1 石器	C地区	P41南黃褐色土	1.8	1.4	0.5	0.375	サヌカイト	未確定	凹基無茎器。第43回、写真第9回。	
2 石器	C地区	O42南黃褐色土	1.7	1.6	0.4	0.395	サヌカイト	未確定	凹基無茎器。第43回、写真第9回。	
3 石器	C地区	Q47 S K 850表上	2.5	1.8	0.5	0.595	サヌカイト	未確定	凹基無茎器。第43回、写真第9回。	
4 石器	C地区	P41表土	3.4	2	0.5	1.46	サヌカイト	(後期か?)	凹基無茎器(五角形器)。第43回、写真第9回。	
5 石器	C地区	P41 S K 778	2.9	2	0.6	0.855	サヌカイト	未確定	平基無茎器。第43回、写真第9回。	
6 石器	C地区	P41南黃褐色土	2.2	2	0.3	0.585	サヌカイト	未確定	未製品。第43回、写真第9回。	
7 二次加工 底有剖片	C地区	Q49 S K 857	8.2	4.1	1.6	26.6	サヌカイト	(後期か?)	第43回。	残存部のみの計測数値。
10 磨石	C地区	N40表土	5.68	8.2φ	5.2	272.61	砂岩	未確定	平基無茎器。第43回、写真第9回。	
11 錐石	C地区	Q43表土下層	7.2	5.6	3.1	170	砂岩	未確定	敲打面あり。第43回、写真第9回。	

報告番号	器種	地区名	出土遺構等	残存度	胎土	色調	成形技法等	時期	備考欄
8 深鉢	C地区	Q51 S K 862	体部破片	面~5mm 8×6cm	鈍い赤褐色 白色小石多含	内面:ナテガ (?) 外面:施文らしい痕跡あり	早期後葉	9の深鉢とよく似たタイプ。第43回。	
9 深鉢	C地区	N40表土	体部破片	面~5mm 13×9cm	鈍い赤褐色 白色小石含 粉砂	内面:斜行沈れあり 外面:碧円文斜格子状に施文	早期後葉	高山寺式新タイプ。第43回、写真第9回。	

第18表 出土遺物観察表 繩文時代の遺物(久保勝正・奥義次両氏の作成による。)(第43回)

報告番号	実測番号	器種名	出土遺構等	形状 遺存状態	口径 (cm)	底面 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調査法等	時期年代	出土状況	備考
12 22- 3048	縄毛器 杯	N 16 92年墓及び N 15 80号墓西側 及び東側	破片	約12.1 約5.5	—	やや密	■	褐灰色	ロウ口水滴きナデ 天井部外側クロロ ヘド前半	—	M T15号屋型式併行 縄(ツマ)なし 第44回			
13 22- 3115	縄毛器 杯	K 19 78年墓80号墓 N 16号墓側面	天井部一端縫 一部 縫合後	約14 約5.1	—	やや密(質 好和)	■	褐灰色	ロウ口水滴きナデ 天井部外側クロロ ヘド	8c前半~ 中葉	—	第44回		
14 22- 3046	縄毛器 杯	K 19 S K 520側面 のS X 158	天井部部分 小破片	不規	不明	—	褐灰色	ロウ口水滴き 天井部クロロへ たり、施毛付	(7c末) ~ 8c前半	15x16共伴	第44回			
15 22- 3047	縄毛器 杯	J 26 S K 527 B 860 Q 29 S K 613	縫合複合的 の現存	約16.4 約19	—	やや暗	■	褐灰色	ロウ口水滴き 天井部クロロへ たり、施毛付	(7c末) ~ 8c前半	14x16共伴	自然解。 第44回		
16 22- 3045	縄毛器 杯	J 26 S K 527	細部分小破片	不規	不明	—	やや密	■	灰褐色	天井部クロロへ たり、施毛付	8c前半~ 中葉	14x15共伴	第44回	
17 22- 3008	縄毛器復	K 19 S K 520側面 のS X 158	大陽光形 (縫合部)1/2 のS X 158	16.8 18	6.8	やや密	■	褐灰色	ロウ口水滴き 底部下部クロロ ヘド	7c末~ 8c初頭	311x312厘米。 316年墓に埋められた 遺物。認定41期併行。 第44回 吉原通路底面下で標 出。入骨X 158号 真跡			
18 22- 3116	絞糸外容器 (上半部)	K 15 26.9年墓 筒身	口縫部 約19.9存在	復元縫 復元縫	復元縫 約16.5	不規	不規	やや密(質 好和)	不規 圓周	ロウ口水滴き 口縫部隕ナデ はがき不明	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	—	胎土・色調・成形技法・法量 等の比較から(20)と同一個体 と算定。	
19 22- 3117	絞糸外容器 (下半部)	L 1-M 15 26.9年 筒身	縫合 約15.6存	不規	不規	復元縫 約11.2	やや密 3.0mm粒 粘合	不規 圓周	ロウ口水滴き 体部下部ヘド(リ 他不規)	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	—	胎土・色調・成形技法・法量 等の比較から(20)と同一個体 と算定。第44回		
20 22- 3080	絞糸外容器 (上半部)	2-1-14 16.9年 L 16 18.2年墓下層 18.3年墓上層 D 860 K 25 S K 600先端部	縫合縫合 底部一部 のS X 2存 底部矢先。	復元縫 復元縫	約16.6 不明	不規	やや密(質 好和)	■	乳白色	内底縫ナデ 粘合結合部、 糊付部あり。 糊付ナデ	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	(複数地点出土の 破片を複合)	胎土・成形技法・法量等から (20)と同一個体と算定。 第44回	
21 22- 3082	絞糸外容器 (全部)	K 15 15.9年 理土	口縫部 約19.9存	復元縫 復元縫	復元縫 約11.0	不規	不規	やや密	乳白色 3.0mm粒 粘合	内底縫ナデ 粘合結合部、 糊付部あり。 糊付ナデ	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	—	胎土・色調・成形技法・法量等から (20)と同一個体と算定。 第44回	
22 22- 3081	絞糸外容器 (上半部)	B地区 N 30 S K 624	口縫部 約19.9存	約15.0	不規	不規	やや密	■	乳白色	内底縫ナデ 糊付部上部 内底:灰白	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	口縫部は(20)に類似し内 側に凸起するタイプ。 第44回		
23 22- 3081	絞糸外容器 (下半部) (下部)	L 16 18.5年 18.3年 18.2年 土下層	口縫部一部 のS X 2存 底部矢先~ 底部矢先。	復元縫 復元縫	約14.8	不規	不規	やや粗 (3 ~4mm大 の小石含)	乳白色	内底縫ナデ 糊付部~底部 糊付ナデ	12c 後葉~ 13c 初 (~前葉)	複数地点出土の破 片を複合	口縫部は蓋型部の丘上が 力をもつ。 第44回	
24 22- 3040	白縫合口 (底)	M 16地区 表土	約19.9存	約14.8	約10.2	約8.2	約8.2	■	乳白色 (糊合)	ロウナデ	12c 代	—	(25)より小ぶり。 第44回	

第19表 出土遺物観察表 古墳~室町時代の遺物(第44~49回)

報告 番号	実測 番号	器種 名前	出土遺構 新番号	出土遺構 遺存状態	形状 寸法	口径 (cm)	高さ (cm)	径深 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考
25	036- 05	小口縫合子 (東)	L16 194号墓 S×282	口縫部 約15mm 約15mm存 在	約92	約20	約8.8	直	直	直	淡灰白色 (青灰)	ロクロナデ	12c代	入骨 (S×282)	第44回
26	22- 3052	陶瓶 (追付山革附)	L16 182号墓 S×3.3	口縫部 「波形」約2/3 復元後 約15.2	約7.3	約6.2	やや密 粗粒付	直	直	直	淡灰白色 (青灰)	ロクロ水路き 道部分切り 粗粒付。	12c末葉~ 13c初葉代	外容器(27)の 一部破片と共に 外容器	山手側遺構に柱を付けた形。 外容器(27)の蓋と齊芯。 第44回 写真第9回
27	22- 3051	経帶外容器 筒身	J-17 282号墓 L17 152号墓 S×2下巻、 筒身接合部 復元後	底部 約25mm残存 縦縫合部 約15mm 縦縫合部 約15mm 縦縫合部 約15mm	復元後 約13.2	約22.8	復元後 約13.0	やや密 1.0mm 粗粒	直	直	淡灰白色 (青灰)	内面施加墨 + 模様ナデ 口縫部縫 ~ 体部模様ナデ、 下部に複数 ナデがあり。	12c後葉~ 13c初葉代	第40回共伴 第41回 複数点出土上 の範囲を撮影	中世墓域の現状変更に伴い撤 したか、裏(26)とセット開 拓場所。
28	22- 3054	陶瓶蓋	L16 182号墓 S×3.4 約40件	桶形未開口部の 小片復合約 不明	不明	不明	—	やや密 (青 粗粒)	不規	淡灰白色	ロクロナデ 粗粒付	12c後葉~ 13c初葉代 (~14世紀)	外容器(29)の 一部破片と共に 外容器	GW経帶外容器の蓋。粗粒面 化。	第44回
29	22- 3050	経帶外容器 筒身	L16 182号墓盛土部 S×1+266号墓 L17 209号墓 堆積褐色土、 M17 201号墓、 N18 99号墓北側地	桶片複合 約45mm存 在	復元後 約13.2	復元後 約14.3	やや密	直	内面: 施加墨 + 模様ナデ 外面: 淡灰白色	内面施加墨 + 模様ナデ 口縫部+体部 模様ナデ。	12c後葉~ 13c初葉代 (~14世紀)	蓋(28)と共に 複数点出土上 の範囲を撮影	中世墓域の現状変更に伴う施 けたか、(26)とセット開 拓場所。	第44回 写真第9回	
30	004- 03	土師質 円筒状 平底容器	M17 201号墓 埋土	底部小簡片	不詳	不詳	約12.0	やや粗	直	内面施加墨 (青)	内外ナデ (青)	12c末葉~ 13c初葉代	(3) 共伴	伊豆市瀬戸寺尾ノ原庭園群で みた跡地出土。	第44回
31	004- 04	土師質 円筒状	M17 201号墓 埋土	底部小簡片	不詳	不詳	約8.0	やや粗	直	内面: 内面ナデ 外面: 青色	内面ナデ (青)	12c末葉~ 13c初葉代	(3) 共伴	206号墓からも同様簡片出土。	第44回
32	010- 08	口クロ 上縫移置	C-956 S×856埋土	底部破片	不詳	不詳	約1.2	やや粗	直	内面施加墨 10YR7/4	ロクロ充填 底部未切り	11c代~	土焼器小回 (164)	対象となる箇所も考慮。蓋など への配向不可。	第44回
33	021- 05	口ロ 上縫移置	J18 292号墓埋土	底部破片	不詳	不詳	約4.0	やや粗	直	内面: 黄褐色	ロクロ充填 底部未切り	11c代~	—	同上。	第44回
34	004- 09	ロクロ 上縫移置	B-952 O32 S×649	底部破片	—	—	約4.5	やや粗	直	内面: 7.5YR6/6	ロクロ充填 底部未切り	11c代~	—	同上。	第44回
35	004- 03	ロクロ 上縫移置	N13 124号墓 埋土	底部破片	—	—	約4.2	精	直	内面施加墨 5YR5/6	ロクロ充填 底部未切り	11c代~	—	対象厚壁。ひび割れ	第44回
36	011- 02	ロクロ 上縫移置	N20-21 221号墓 S×533(筒内) 埋土	底部破片	不詳	不詳	約4.5	やや粗	直	内面施加墨 底部未切り	ロクロ充填 底部未切り	11c~ 12c代	(3) 共伴	対象となる箇所も考慮。蓋など への配向不可。	第44回
37	011- 01	ロクロ 上縫移置	N20-21 221号墓 S×533 埋土	底部破片	不詳	不詳	約4.2	やや粗	直	内面: 黄褐色	ロクロ充填 底部未切り	11c~ 12c代	(3) 共伴	同上。	第44回
38	004- 10	ロクロ 上縫移置	M16 5×495埋土	底部 約15mm残存	不詳	不詳	約7.0	やや粗	直	内面: 褐色	ロクロ充填 底部未切り	11c~ 12c代	—	同上。	第44回
39	22- 3006	陶瓶 筒身	N16 89号墓 S×7.9	約17.8mm残存 口縫部欠失 復元後 約9.5	不詳 (復元 後)	残存 約22.5	約10.2	やや密	直	内面: 暗褐色	粘土接着上 ナデ、ラテナ 内面+ケイ 酸	12c中葉~ 13c前半	入骨小片 (5X 76)、天井茅葺簡片 (67)	筒内へ運搬にヘラを押す技術 第45回、写真第9回	第45回、写真第9回
40	029- 03	陶瓶 蓋	L21 220号墓 (896)	大略筒形	約11.8	約23.9	約9.0	やや密 2mmの粗 粒	直	内面: 褐色	内面施加墨 底部未ハク工 底面に青灰 色に変化	ロクロナデ	山手側(56)を基にし て筒内X5X76を 複数点から出土。	対応 (近用芋用ハラ認定)、 筒内へ運搬にヘラを 押す技術。	第45回
41	22- 3026	瓦瓶小瓶	N24 44号墓 S×7.93	施瓦片に武い 状態	約10.7	約4.9	約1.0	やや密	直	内面: 褐色	内面施加墨 底部未ハク工 底面に青灰 色に変化	ロクロ模様ナデ 直筒型未引	12c末葉~ 13c前半代	対象施瓦片(42)と人 骨 (5X193) 共伴	第45回、写真第9回
42	22- 3002	陶瓶 筒身 三腔	N24 44号墓 S×7.93	口縫部欠失 他は良好	不詳	残存 約24.1	約8.6	粗 1mmの 粗粒	直	内面: 褐色	複数点内壁下 部から青灰 色に変化、火 照跡。	内面施加墨 底部未ハク工 底面に青灰 色に変化	瓦瓶小瓶 (41) と 人骨 (5X193) 共 伴	瓦瓶小瓶を蓋として被骨部に 配置。内面に人骨 5X205が充満。	第45回、写真第9回
43	22- 3001	陶瓶 筒身	O22 225号墓	施瓦片 (口縫 部一部欠失 瓦瓶復元)	約11.0	約27.0	約9.7	やや密	直	内面: 褐色	内面: 青灰白色 自然釉かぶ りあり	ナデ 体部下へ引剥 り	12c後半代 ~	刀子(参考16)を 剥離。内面に人骨 5X205が充満。	第45回、写真第9回
44	22- 3024	陶瓶 筒身 二腔	M15 M14 130号墓 石川井口80 M14×15, N14、O15区 部	口縫部+体部 約15mm残存 (筒内) 底部未失 失	約10.9	不詳	不詳	やや密 1.0mmの 粗粒	直	内面: 褐色	ロクロナデ 内面: 青灰白色 褐色	12c代	複数箇所から出土 の簡片を含む	対象箇所へ運搬。	第45回
45	22- 3013	陶瓶 筒身 口縫	L16 182号墓 S×3.3 L16 266号墓 183号墓	復合 約15mm残存 (青 復元)	約19.4	約8.3	約11.2	やや密 (青 粗粒)	直	内面: 褐色	ナデ 口縫部模様ナデ 体部下へ引剥 り	14c後半代 ~	(2023IC6027C20 (29)と共に 複数点出土上 の範囲を撮影)	蓋あり。内部内面に自然釉、 底面へ運搬と直。	第45回 写真第9回

第19表 出土遺物観察表 古墳~室町時代の遺物 (第44~49回)

報告書番号	測定番号	商標名	出土遺物 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	縦高 (cm)	横高 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考	
46	22-3064	陶器 安達屋 田	L.17 20号墓 S.K174 (66)	口縁 脚部(一部破 れ、他部分 欠け)	不規 約20.0	約10.2	約4.7 7mm大小 右青白	粗 約20.0	不直 (無成形指 上部)	淡黃褐色 赤褐色	ナデ 脚部下端 へう折り?	14c代	小刀 (A1) 和野 安達屋春 (47出土 人妻5 X174)	被食器に転用。 昭和20年(昭和2 年4月)。写真第102	
47	22-3063	陶器 安達屋 田	L.17 20号墓 S.K175 (66)	輪形形 (口縁部一 脚欠失)	9.8	22.4	9.7	やや灰 約2.0	やや直 ~4mm大き 白色小石 含む)	黄灰青茶褐 色	ナデ 脚部下端へう折 れ(後脚)は複数 二条で行 脚部あ り)	14c 中葉頃 ~	刀子 (B1) 刀削 安達屋春 (46出土 人妻5 X175)	被食器に転用。底部ひび割れ(後 としてて二脚をとこと)。 第45回 写真第103	
48	22-3067	陶器 瀬戸屋 庄	L.15 80号墓 庄内村の瀬 戸屋	約1/2欠失 壁部(後脚部 後脚)	約10.4	腹元 約2.0	約10.9	やや灰	直	淡綠青褐 色。口縁へ 底部・脚部 鉄物の付着	口内充満文 底部に鉄物の付 着。底部に鉄物 の付着	14c 初頭 ~(前葉)	前先 (瀬井)・背花 (82.8cm の庄)・腰文 腰文 等真第102		
49	22-3022	陶器 瀬戸屋 庄 (7)	K.14 165号墓 K.15 157号墓 K.16 N.16 瀬戸屋地質	K.14 165号墓 K.15 157号墓 K.16 瀬戸屋 N.16 瀬戸屋地質	口縁端部破 損(口縁部の U型切欠)	約15.4	不詳	不直	やや直 (腰 付)	淡黃 灰褐色	ナデ 内脚部直 角部に複数 本体に複数 外底部自然 脚部自然	ロコナデ 内脚部直 脚部自然 本体に複数 外底部自然	14c 代~	複数箇所から出土 の鐵片を報告。	第45回
50	22-3058	陶器 瀬戸屋 庄花苑	M25 43号墓 理土	口縁部一部 欠失 脚部破片接合	不詳	不詳	約7.9	やや直	直	真真燒色 輪・綠灰色	ロコナデ 脚部折り 底部丸り切 (コウロ特針回り)	14c 後半~	—	第45回	
51	010-010	陶器 片口林	J.14 165号墓 N.14 北長岡地区 北長岡 L.16 182号墓 其他地	約1/2残存 (腰合部充 て元)	約30.0	腰理 約10.7	腰理 約14.5	やや直	直	淡黃色 淡黃色	ナデ 底部折り切 脚部折り	14c 後葉~ 14c 代	(01)23(26)27(28) (09)3(5)などと 共存 第45回 写真第103	底部外側に一向向への 腰上げ脚あり。 第45回 写真第103	
52	22-3039	山茶瓶	265号墓 及D.N.15 80号墓地土	約1/5残存 (腰合部充 て元)	約15.2	約5.0	約6.4	やや直	直	淡灰褐色	ロコナデ 高台輪付ほか不規	13c 中葉~	—	II-4型式・内面自然地付材。 第46回	
53	22-3015	山茶瓶	L.16 182号墓理土	腰合 約1/3残存	約15.4	約5.7	約6.3	やや直 (腰 付)	直	淡青 灰白色	ロコナデ 底部折り切 高台輪付	12c 中葉~ 後葉	09(23)(26)27(28) (09)3(5)などと 共存 第45回 写真第103	高台輪折曲輪底少 第46回	
54	22-3020	山茶瓶	K.17 5.K500理土	腰合 約1/3残存 脚部(左脚 部)缺け	約13.9	約5.1	約5.1	やや直	不直	淡青 灰白色	ロコナデ 底部折り切 高台輪付	13c 初葉~ 中葉	—	第46回	
55	22-3014	山茶瓶	N.16 10号墓東 石列5号 腰元	腰合 約1/2残存 腰合大底充 て元	約14.6	約5.2	約6.8	やや直	直	淡青 灰白色	ロコナデ 見込み一方脚ナ ラ・底部折り切 高台輪付	13c 中葉~ 後葉	初期多 10号墓 底脚 石列5号 (世貿資料)	初期多 10号墓 底脚 石列5号 底脚 (世貿資料) 第46回 写真第103	
56	22-3017	山茶瓶	L.21 220号墓 S.K176	腰合 大底充て元 約1.3cm	約13.7	約5.4	約6.6	やや粗 小石を含む	直	模様白色 模様白色	ロコナデ 底部折り切 高台輪付	13c 初葉~ 中葉	美術便覧 (40) の墨に短松 第46回	模様白 大底充 の墨に短松。 第46回	
57	028-02	山茶瓶	O.15 利家屋 西近藤区	口縁部の1/5 残存 腰合充て元	約15.0	約5.0	約5.8	やや直	直	淡青 灰白色	ロコナデ 底部折り切 高台輪付	13c 中葉~	高台輪折曲輪少 第46回 写真第103	高台輪折曲輪少 (利家屋) 第46回 写真第103	
58	22-3018	山茶瓶	L.20 5.K512	腰合 (腰 付)	14.8	5.5	5.2	やや直 (腰 付)	直	淡灰褐色	ロコナデ 見込み一方脚ナ ラ・底部折り切 リ脚・高台輪付	13c 中葉~ 後葉	連れの高台に初期地頭署 (道 延徳より取付け高台園の方 が大きい)。 第46回	連れの高台に初期地頭署 (道 延徳より取付け高台園の方 が大きい)。 第46回	
59	22-3019	山茶瓶	M.15 82号墓 利家屋	口縁部の1/2 以上欠失 腰部残存	約13.4	約4.9	約5.6	粗 2mm ~ 5mm粗 小石多含	直	淡青 灰白色	ロコナデ 見込み一方脚ナ ラ・底部折り切 リ脚・高台輪付	14c 初葉代 ~	—	ロコナデ時針回り、 参考人・第55。 第46回 写真第103	
60	22-3036	青磁瓶	N.19號区 東利家	口縁部一部 約1/7残存 底部大底	約10.8	(約)4.4	(約)3.9	精良	直	模様色	ロコナデ 底部津井文	13c 実~14 c 前	(68)と同一個体の可能性も。 第46回	(68)と同一個体の可能性も。 第46回	
61	22-3038	青磁瓶	N.22 234号墓 利家屋 西近藤地頭	不規 不明	約5.6	良	良	淡綠色	ロコナデ 外底部津井文 見込み花文	13c 実~14 c 直	—	—	第46回		
62	22-3034	青磁瓶	N.22 濱田道穂	口縁部 約1/3残存	約17.0	不明	不明	粗良	直	淡綠色	ロコナデ 外底部津井文	13c 実~14 c 直	—	第46回	
63	22-3052	青磁瓶	M.18 10号墓 5.K514	腰合 供物の1/7残 存 口縁部 10号墓	17	6.9	6.3	精良	直	淡綠色	ロコナデ 外底部津井文	13c ~ 14c 代	元代のもの。 第46回 写真第103	元代のもの。 第46回 写真第103	
64	22-3037	青磁瓶	M.18 10号墓 M.19 10号墓	供物の1/7残 存 口縁部 10号墓	不規 不明	(約)5.2	良	良	模様色	ロコナデ 外底部津井文	13c ~ 14c 代	—	第46回		
65	026-01	おろし皿	N.16 地区 利家屋	口縁部 約1/5残存 底部大底	約18.0	約3.0	—	直	直	淡真燒色	ロコナデ ロコロコロナ 子、輪脚	15c 初葉期	—	第46回	
66	026-02	おろし皿	M.15 82号墓	口縁部 約1/5残存 底部大底	約18.0	約4.0	—	直	直	淡真燒色	ロコナデ ロコロコロナ 子、輪脚	15c 初葉期	—	第46回	
67	22-3035	天目茶碗	N.16 88号墓 S.K76 L.16 196号墓理土	腰合口縁部 約1/5残存 底部大底	約11.8	不明	不明	良	良	淡黃褐色 内底部鉄物 底部津井文	ロコナデ 底部津井文 底部津井文	14c 後葉?	複数箇所で出土の 鐵片を報告	(68)と同一個体の可能性も。 第46回	

第19表 出土遺物觀察表 古墳~室町時代の遺物 (第44 ~ 49回)

報告 番号	実測 番号	器種 名前	出土遺構 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	高さ (cm)	径深 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考	
68	22- 3043	天目茶碗	L.16 N.15 S.07 5.13E縦西	縦合 全体～底面の 5/4斜行	不明	不明	約16	良	薄	乳黃褐色 内側灰褐色 裏褐色	ロクロ水洗き (鉢脚)	14c後半?	複数箇所で出土の 縦合を複数	(6)と同一個体の可能性ある。 第4回	
69	22- 3110	陶器 灰度差 鏡	L.16 N.12号基 盤内	約1/2斜行 (混合灰度差 鏡)	復元径 約16.3	約21.0	約16.3	やや密	並	暗赤褐色 内面ナメ、胎生灰、 外表面ラフ仕上・ハ ケ目 (底面から上 へ・ナメが剥け)	14c後半~	(2022.5.26)27/28 29/4/5(15.3.30)等 などと共に。	N字口縁・脇部 等に文様装飾の施設。 可算第10回		
70	22- 3010	陶器 灰度差 鏡	M23 399号基 盤 S.194	口縁部復元 高所復元	19.2	16.4	11.6	やや粗 5mm大 小石含	並	褐赤褐色 口縁部暗ナメ	ロクロ口 口縁部暗ナメ	15c前半 ~後半代	人耳共存 (土器5. K.56の底面全面に 黒斑)	N字口縫や化粧、 脇部ヘラ 底部砂粒粘土灰 色、 39.46回、写真第10回	
71	22- 3023	陶器 灰度差 鏡	K.14 151号墓土 153号墓 小石 K.16北半部 表土	縦合 口縁部の1/3 斜行	約15.4	不詳	不詳	粗 7mm 粉砂含	並	褐赤褐色	ロクロナメ 内面に胎生灰、 外壁折り曲げ 唇状に	15c後半~ 16c初頭	複数箇所出土の縦 合を複数	第4回	
72	22- 3029	陶器 灰度差 鏡	L.14号基 盤灰土 139号墓 土	縦合 口縁部の1/6 斜行	(約) 20.2	不明	不明	やや密 (底 粗粒多)	並	褐赤褐色	ロクロ口ナメ 内面灰斑痕、 外表面灰褐色・向割 毛目底面後縁ナメ	15c前半代	複数箇所出土の縦 合を複数	N字口縫、 第46回	
73	68- 04	陶器 灰度差 鏡	N.-M13 125号基 N14 130号基 盤M15号基 盤灰土 L.16 182号墓 盤ほか	口縁部 約1/5斜行 5/4斜行 縦合の 4/5斜行	復元 約16.4	18.0	約16.3 内外	12.4	やや粗 1~5mm 白色小石 含む	並	褐赤褐色 裏褐色	横ナメ+胎生灰 (内面下部底面 跡跡) 体外灰 底面・脇部・底面 方向ナメ上げ	(2022.5.26)27/28 29/4/5(15.3.30)等 (5.6.6)などと共に。 複数箇所出土の縦 合を複数	北部砂粒灰、 第46回	
74	022- 01	陶器 灰度差 鏡	N.16 68号基 盤 S.26近芯	縦合 高所復元 (口 縁1/2斜行)	16.4	16.1	13	やや密	並	褐・赤褐色 内面灰斑痕	ロクロナメ 口縁部暗ナメ (底部へと僅 横半径3mm)	15c中頃 ~後半代	5.7.6(4.39)を複 数箇所出土。	N字口縫化・底部外面に 灰斑痕、 第46回 写真第10回	
75	027- 04	陶器 灰度差 鏡	J.15 K.476号基 盤	N字口縫底 小鉢片	約16.5	不明	不明	やや粗 1.0mm底 粗粒	並	灰褐色 5YR5/2	ロクロナメ	15c後半~	—	N字口縫、 第46回	
76	032- 04	灰陶	M~N19 107号基 盤	高所品	復元	厚11.2	厚0.2	—	—	—	—	—	—	進葉飾 (進葉山に千鳥が二羽 舞う)、 第4回 写真第11回	
77	067- 10	土器 盆加 灰陶	J.208区 高所探査	一部欠損 約4/5斜行	径約25	厚0.2	—	密 (高所)	並	灰褐色 7.5YR7/4	中央部に穿孔 径40mm	16c代	—	多量灰斑底面にも想例あり、 第47回	
78	22- 3044	鰐石 (鮎板岩)	K.15 161号基 盤	鉢片	高辺 5.8 以上	短辺 (3.2)	厚さ 0.4~ 0.8	密	—	褐赤褐色	上面滑らか、 幅4~5~6cm、 深さ4~6cmの塵 り凹入跡、	16c代?	—	第47回	
79	022- 03	土器 白引削	B.956. N.30 S.626	底部破片 約1/2斜行	不詳	不詳	約11.2	やや密	並	浅黄褐色 7.5YR4/4	底部ナメテ 底部ナメ	16c代	—	類例を知らず 第47回	
80	022- 04	土器 削器	H.24 24号基 盤上	底部 約1/4斜行	不詳	不詳	約9.0	やや密	並	褐・黄 褐褐色	底部削り付、 横ナメ下合 底部灰斑痕	15c後半~ 16c初頭	土器削器小品 (3.0) と同系統的。	第47回	
81	22- 3021	土器 削器	L.23 高所底下	口縁部 約1/2斜行 縦合の 底面	約18.0	約9.3	約8.8	やや密	並	褐・黄 褐褐色	ナメ 体部・底部外壁に ハクモ10cm/3cm 剥り落とし、	15c後半~ 16c初頭	底面が苔台より剥出しそう な苔台裏の例。 第47回 写真第10回	第47回	
82	22- 3121	灰方研 (鮎板岩製)	P.13地区 糸糸束下層	大輪刃形 (一部欠失 高所復元)	鉢幅83	長さ	厚さ1.6	—	—	暗灰色	側面(大型) 裏面(子型) (C型) 内面長方形 (1) の特徴 水野(1982)参照	15c初頭 ~後半代	—	台形状(14回目の特徴)の名 前。	第47回
83	22- 3062	土器 小瓶	B.956. O.31 S.641	大輪刃形	約9.0	約4.3	約3.8	密	並	深褐色 乳褐色	口縁部ナメ 底込式灰斑痕 高所底下合	16c代	—	口縁底部でやや内反する。 第47回 写真第10回	第47回
84	22- 3025	土器 小瓶	J.17 S.5.505	縦合 大輪刃形(復元)	約10.0	約4.3	—	密 (高所)	並	深褐色白色	ナメ 口縁部暗ナメ 粘土底付上げ崩れ ナメ	15c後半代	—	口縁底部下外壁にへう状工具 の当り。	第47回 写真第10回
85	026- 03	土器 小瓶	P.13 S.267 (70号墓斜面裏)	口縁部小瓶片	復元 約3.72	復元 約3.72	約18.5	—	やや密	並	深褐色 7.5YR7/4	ナメ 口縁部暗ナメ 体外内ナメ・オ サニ、外表面工具ナ メ、底部凹印文	13c ~ 14c 代	人骨 (S.3.267), 厚手・伴物粘土瓶。	第47回
86	0038- 01	陶器 灰度差 大甕	L.16 182号基 盤内 石底下层 底20數孔 に凹孔點	口縁部1/2 斜行 1/2斜行 底20數孔 (復元復元)	復元 約1.72	口縁 復元 約1.72	約1.72	約18.5	密	褐 約0.5mm 大粒粗 を含む	口縁部暗ナメ 体外内ナメ・オ サニ、外表面工具ナ メ、底部凹印文	12c後半代 20c~25c 明周 25c~明周 明周	口動植物器タイプ。 甕は比較的優美、 体外表面に帯状 模様文を主題に分けて施記。 写真第11回	第47回	

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告 番号	実測 番号	商標 名前	出土遺物 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考
87	032 -03	陶器 灰度 裏	K 16 264年墨 5 X56 L 16 182年墨 墨土内蔵	N字口縁部 約10cm残存 約31.4	復元径 約21.4	不明	不明	やや密	素	黄 素面黄 法灰黄 自然釉	内部素面ナメ S V R S 2	14c 後葉 ~ 15c 初	複数地点出土の破 片を複合	N字口縦。 第47回
88	032 -01	陶器 灰度 裏	J 14 165年墨	N字口縁部 約10cm残存 約20.4	復元径 約20.4	不明	不明	やや密	素	灰黄色 S V R S 2	口縁部端ナメ ほか不明	15c 前半代 ~	灰度墨端 (90) 具伴	N字口縦・墨(60)と同一個体 第47回
89	027 -03	陶器 灰度 裏	N 15 約墨	N字口縁部 小破片	約22.0	不明	不明	やや密	素	外腹灰度 内腹灰黄 25 Y 6/2	口縁部端ナメ ほか不明	15c 純葉期 ~	~	N字口縦。 第47回
90	027 -02	陶器 灰度 裏	J 14 165年墨	口縁部 約10cm残存 約28.0	不明	不明	やや密	素	灰黄色 S V R S 2	口縁部端ナメ ほか不明	15c 前半代 ~	灰度墨の端片 (88)	N字口縦。 第47回	
91	22- 3112 (032 -02)	陶器 灰度 裏	N 165年墨 L 165 194年墨端土 K 175 282年墨端	口縁部一 194年墨端土 L 165 182年墨端 K 175 282年墨端	復元径 約16cm残存 約32.0	復元径 約32.0	不明	不明	やや密	外：浅黄 2.5 Y 7/3 内：灰黄 2.5 Y 6/2	内部素面ナメ 内腹灰黄 特に端部に	15c 純葉期 ~	複数地点出土の破 片を複合	N字口縦 第47回
92	22- 3113	陶器 灰度 裏 大腹	Q 045 462年墨 5 K 610 186年墨 369年墨 (88)真生焼	底面 (直径45cm) 灰 朱はかね墨端 内腹灰度 外腹灰度	約57.0	約68.0	~	やや密	素	外：暗灰色 内：灰青色 内：墨青色 スランプアンド	内部素面ナメ タキシ (大口 スランプアンド)	15c 後半 16c 初頭 ~	空 (廻) 脇日1054 付地墨端 (500)古 銭 (823) (前半 夏) 人骨は強健	N字口縦 第47回
93	021 -01	土師器 羽笛	K 17 284年墨 S X11	口縁部 約16cm残存	約25.0	不明	~	粗2.5mm 約2.5mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4 (他不明)	様ナメ	16c 代 ~	~	第47回
94	22- 3069	土師器 羽笛	K 17 282年墨 S X162	口縁部 (羽 笛)	約28.8	不明	~ 1~2mm 約2.5mm	粗	乳灰黄色 約2.5mm	様ナメ (他不明)	15c 中葉期 ~	S X162 (4) 5 X12 (6) 名称変更。 第47回		
95	22- 3074	土師器 羽笛	O 035 K 25 S K 600 (墨)	口縁部 小破片	約25.1	不明	~	やや密	素	明黄褐色 10 Y 7/4	口縁部細々 折曲丸孔、軸窓	12c 中葉期 ~	~	第48回
96	012 -01	土師器 羽笛	M 22 S K 536	口縁部 約16cm残存	約28.5	不明	~	やや粗 0.5mm 約1.5mm	粗	明黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 内腹ナメアラ 庄 (他不明)	13c 後半代 ~	外腹端付着。 第48回	
97	22- 3011	土師器 羽笛	K 14 152年墨 S X156	口縁部 約19cm残存	約22.7	約14.7	~	やや密	素	灰褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 外腹端アラ 底部端アラ (他 不明)	13c 後半代 人骨 (5 X 156), 復行管、隨殼の5 X 157から 土師器小皿 (168出土。 第48回		
98	22- 3096	土師器 羽笛	S 11 ~ 12 20年墨 S X 88	口縁・底部の 約16cm残存	約25.0	不明	~	やや密 1mm 約1.5mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 体部 (1.5) ~ 10 本cm (近距離)	13c 後半代 人骨 (5 X 88)	第48回	
99	012 -04	土師器 羽笛	K 15 160年墨 S X 60	口縁部小破片	約18.0	不明	~	粗1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ (他不明)	14c 前半代 ~	人骨 (5 X 60)	第48回
100	012 -05	土師器 羽笛	K 21 364年墨 S X 20	口縁部小破片	約20.0	不明	~	~ 1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ (他不明)	14c 前半代 ~	~	第48回
101	021 -03	土師器 羽笛	N 15 81年墨 色物斜面	口縁部端片 約13cm残存	約21.0	不明	~	やや粗 1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ (他不明)	14c 前半代 ~	~	第48回
102	22- 3099	土師器 羽笛	J 16 273年墨 S X 8	口縁 約3.5cm残存	約23.8	不明	~	やや粗 1~2mm 大粒粒状	素	真黄褐色 10 Y 7/3 内腹 2.5 Y 6/2	口縁部端ナメ 体部 (1.5) 目 5~6mm 底部アラ	14c 前半代 ~	刀子 (827), 人骨 (5 X 8)	第48回
103	012 -02	土師器 羽笛	K 21 364年墨 S X 20	口縁部 約10cm残存	約26.0	不明	~	粗 1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 体部 (1.5) 目 (他不明)	14c 前半代 ~	人骨 (5 X 20)	第48回
104	22- 3053	土師器 羽笛	S 11 13年墨 S X 82	聯合 大略束後形	約28.2	約25.8	~	やや密	素	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 体部 (1.5) 目 5~6mm 底部アラ	14c 前半代 ~	被置器に転用。 第48回 写真第10回	
105	22- 3100	土師器 羽笛	M 16 ~ N 17 93年墨 S X 72	複合 口縁約1.0cm 厚	約24.2	不明	~	やや粗 1.0mm 約1.0mm	粗	淡真褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 体部 (1.5) 目 1cm (近距離)	14c 末葉 15c 初	人骨小片 (5 X 72)	第48回
106	013 -02	土師器 羽笛	M 24 412年墨 S X 54	口縁部 約4.5cm残存	約29.0	不明	~	1.5mm 約1.5mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 輪端ナメ	14c 末葉 15c 初	人骨 (5 X 54)	第48回
107	013 -03	土師器 羽笛	M 23 409年墨 S X 26	口縁部 約10cm残存	約28.0	不明	~	1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ (他不明)	14c 末葉 15c 初	人骨 (5 X 26) 体部小皿片。 第48回	
108	004 -01	土師器 羽笛	L 16 185年墨	口縁部 約7cm残存	約24.0	不明	~	やや密	素	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ (他不明)	14c 末葉 15c 初	外腹に復行付着。 第48回	
109	018 -12	土師器 羽笛	K ~ L 15 159年墨端上	口縁部 約10cm残存	約26.0	不明	~	1.0mm 約1.0mm	粗	真黄褐色 10 Y 7/4	口縁部端ナメ 横端ナメ、輪端 目に突起が鉛込	14c 末葉 15c 初	~	第48回

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告 番号	実測 番号	器種 名前	出土遺構 新番号	出土遺構 遺存状態	形状 寸法	口径 (cm)	高さ (cm)	径深 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考
110	追加 B	土焼器皿	L.15 145号基	口縁部 1/10残存	約28.0	不明	—	やや密	良	高い質感 H.Y.R.6.3	口縁部横ナメ 上げ、脚ナメ (脚不明)	16c 前半代 ~	土焼器皿 (参考 14c)、土焼器小皿 (253)	第48回	
111	016 -01	土焼器皿	L.15 145号西下 K.11～15 154号基	口縁・底部 小片復原	約39.1	不明	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.6.3	口縁部横ナメ 底部×ケリ	16c 中葉～	土焼器皿小皿 (249)	復行着跡、 第48回	
112	追加 A	土焼器皿	M.17 190号基西	口縁部 1/9残存 底部欠失	約14.0	約1.4	—	粗	良	淡黃褐色 10Y.R.6.6	横ナメ	12c 後半代 ~	—	—	第48回
113	021 -02	土焼器皿	M.17 200号基 S.7X5	小窓部 口縁部の1/15 残存	約14.0	約2.4	—	やや粗 1.5mmの 粒状	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	口縁部横ナメ 底部×口縁部×底 部を強く横ナメ	12c 後半～ 13c 前葉	山中 (参考111) 人骨 (S.7X5)	口縫成形や内窓気泡、 第48回	
114	010 -02	土焼器皿	L.17 S.K.504土壠	口縁部1/10残存	約16.0	約2.5	—	やや密	良	高い質感 10Y.R.7.4	ナメ	12c 後半代	土焼器皿 (119)	粗粒、 第48回	
115	023 -02	土焼器皿	L.16 162号基下層	口縁部 約1/6残存	約18.6	約2.3	—	やや粗 1.2～2mm 大粒粒状	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	口縁部横ナメ ほか不明	11c 前葉～ 12c 前葉	(2002.3.26.07.28) 2004.5.1.05.2009	口縫成形や上端部に幅5mm (7月参考など) 共存	第48回
116	22 3077	土焼器皿	S.12 219号基南側 S.7X4.7	腰合 口縁部の1/3 残存	約12.0	約2.5	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	口縁部横ナメ	13c 時期～ 14c 時期	—	口縫部肥厚、輪扁底内窓。 並み。	
117	007	土焼器皿	J.19 S.K.515 埋土	鋸刃 約1/2残存	約13.0	約3.0	—	やや密	良	淡黃褐 10Y.R.8.3	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (150)	口縫部や底に近く 内窓・盃みあり。 第48回	
118	007 -07	土焼器皿	K.20 S.K.521 地西面	腰合 約1/7残存	約13.0	約2.2	—	やや粗 1.0mmの 粒状	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (参考 16)	口縫部やや肥厚しつつ 内窓・盃み。 復行。	
119	010	土焼器皿	L.17 S.504土壠	腰合 約1/4残存	約11.0	約2.3	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.8.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (114)	やや厚手・口縫部肥厚しつつ 深く内窓・盃み。 第48回	
120	001 -05	土焼器皿	L.19 地北層	腰合 約1/2残存	約11.5	約2.2	—	やや粗	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	—	全般にやや厚手。	
121	019 -09	土焼器皿	L.22 S.K.551埋土	腰合 口縁部約1/4残存	約11.0	約1.2	—	粗 1.5mmの 粒状	良	淡黃褐色 10Y.R.8.4	口縫部横ナメ	13c 時期～ 14c 時期	—	薄手・口縫部や肥厚、 直立立ち内窓。	
122	22 -3027	土焼器皿	M.16 191号基下層 S.5.494	腰合先端復元	約11.6	約2.5	—	2mm大白 石を含む	良	淡黃褐色 10Y.R.8.4	口縫部横ナメ	13c 時期～ 14c 時期	人骨 (M.219)	薄化・口縫や肥厚、 直立・外周付帯付・縦溝付。 第48回	
123	009 -03	土焼器皿	M.22 230号基下層 S.5.555埋土	口縁部 1/2残存 底部欠失	約11.4	約2.65	—	やや密	良	灰白色 10Y.R.8.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (124)	第48回	
124	009 -02	土焼器皿	M.22 230号基下層 S.5.555埋土	口縁部 1/3残存 底部欠失	約11.0	約2.6	—	やや密	良	灰白色 10Y.R.8.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (123)	第48回	
125	001 -03	土焼器皿	N.25 S.5.591埋土	腰合 口縁部の1/2 残存	約12.0	約2.3	—	密	良	淡黃褐色 乳白色 10Y.R.8.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	—	薄手・口縫部底に立ちがり丸 く底、先端丸。 (113)物語タイ。	
126	005 -08	土焼器皿	N.26 S.5.599 S.231埋土	約1/4残存	約11.0	約2.4	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (158) 内: 淡黃褐色 10Y.R.7.4	口縫部や底厚して丸。 復行付帯。	
127	22 -3028	土焼器皿	P.14 4年墓	腰合後 復元復原	約12.2	約2.3	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	口縫部横ナメ	13c 時期～ 14c 時期	—	薄化・口縫や肥厚、 略扁内窓。直縫蓋み大。 第48回	
128	001 -04	土焼器皿	J.21 S.K.535	腰合 口縁部の4/5 残存	約11.5	約2.3	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	13c 時期～ 14c 時期	土焼器皿 (129)	薄化・口縫や肥厚、 略扁内窓。先端丸。 (125-127)と類似タイプ。	
129	001 -10	土焼器皿	J.21 S.K.535	腰合 口縁部の4/5 残存	約10.4	約2.2	—	やや密	良	淡黃褐色 2.5Y.8.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿 (128)	複数薄手。口縫はやや厚く 直立支撑に内窓。	
130	008 -05	土焼器皿	K.16 S.5.487 S.234	約1/2残存 (底部一部 失失)	約10.5	約2.3	—	やや粗	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	M.4.40から土焼 部分(小皿) (171)～ 175	口縫部内面に肥厚付帯す。 第48回	
131	22 -3096	土焼器皿	L.20 S.5.531	腰合 大略充て復原	約11.7	約2.4	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿小皿 (187～191)	口縫や肥厚、 底に開けつつ内窓。	
132	008 -04	土焼器皿	L.21 S.K.545	口縁 約1/3残存	約11.6	約2.0	—	密	良	灰白色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿 (132～133)	平面に370基に重複の土焼。 第48回	
133	008 -03	土焼器皿	L.21 S.K.545	鋸刃 大略残存	約11.4	約2.5	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿 (132～134)	質感は薄い。	
134	008 -02	土焼器皿	L.21 S.K.545	2/5残存 底部欠失	約9.8	約2.7	—	やや密	良	淡黃褐色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿 (132～ 133)	—	
135	008 -06	土焼器皿	L.23 S.K.562 埋土	4/5残存	約11.0	約2.8	—	密	良	灰白色 10Y.R.7.4	ナメ	14c 時期～ 15c 時期	土焼器皿 (139)	質感は薄い。	

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告書番号	測定番号	商標名	出土遺物新番号	形狀	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	成形技法	時期年代	出土状況	備考	
136	017 -11	土師器皿	L.20～M.21 220年墓 磚瓦器土 表記	壺合 口縁約1.4倍 厚	約11.1	約22.5	—	やや密	美	外：黄褐色 内：淡黄褐色	ナデ 14c未焼～ 15c後焼	瓦葉屋古 (40)	口縁部や肥厚、 壁やかに内窓。 口縁部外周に沈模版の印み あり。		
137	001 -01	土師器皿	M.24 411年墓 5.K.235	壺合 約4.5残存	約12.0	約26	—	やや密 1mm以下 の粘粒	美	黄褐色 外墨和紅斑	ナデ 14c未焼～ 15c後焼	土師器皿小(224) 刀子(800g)、人 形埴輪。	等手・口縁部は朱り氣味で、 道に内窓する。		
138	010 -09	土師器皿	M.25 5.K.583	壺片 壺合 約1/2残存	約11.5	約25	—	やや密	美	乳白色	ナデ 底部外側に 鉢形痕あり	14c未焼～ 15c後焼	山茶屋小坂井(夢 考古)	等手・口縁部は朱り氣味で、 道に内窓する。	
139	019 -07	土師器皿	O.062 O.27 5.K.603埋土	壺小 口縁約1.4倍 約12.0	約1.9	—	粗1.5mm 粘粒多	美	黄褐色 口縁部暗アラ 内窓工具痕	10YR7/7.5	14c未焼～ 15c後焼	—	等手・口縁部やや肥厚し、 道に立上がり気味。		
140	22- 3079	土師器皿	B地区 N.26 5.K.605	壺合 約4.5残存	約11.8	約25	—	やや粗	美	灰灰褐色	口縁部暗アラ 内窓指捺痕	14c未焼～ 15c後焼	—	粗化等化、口縁部黒立、内 窓あり。豊火施用。 第49回 瓦葉屋第11回	
141	22- 3078	土師器皿	B地区 R.40 5.K.607	壺合 約4.5残存	約13.6	約21	—	やや密	美	黄褐色	口縁部暗アラ 口へ追加指捺痕	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿と小皿 (742-244)	等手・口縁部開き気味に内窓。 第49回 瓦葉屋第11回	
142	006 -10	土師器皿	B地区 R.40 5.K.767	壺合 約4.5残存	約13.6	約25	—	やや密	美	黄褐色	口縁部暗アラ 10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿と小皿 (141)-244)	受火施用。 口縁部開き気味に内窓。 第49回	
143	005 -10	土師器皿	B地区 Q.39 5.K.743	約4.5残存 約(12.0)	約(28)	—	やや粗 1.5mm程 粘粒	美	黄褐色	ナデ 10YR7/3	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿小(279) 内窓指捺痕	粗化等化、道へ口縁部 道状痕す。 第49回		
144	010 -08	土師器皿	B地区 L.30 5.6.5 5.K.619	口縁部 約4.5残存	約13.0	約21	—	やや密	美	黄褐色	ナデ 10YR7/7.5	14c未焼～ 15c後焼 16c未焼	土師器皿小(276) (276-278)	等手・一部二口縁部開 け状態。	
145	025 -06	土師器皿	C地区 P.44 5.K.828	壺合 約3.0残存	約11.0	約14	—	やや密	美	灰灰褐色	口縁部暗アラ 底部外側に粘粒痕	10YR8/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿・小皿 (146)-147)及び(202)	粗化等化、口縁部 内窓あり。
146	025 -07	土師器皿	C地区 P.44 5.K.828	口縁部留片 約3.0残存	約11.0	約13	—	やや密	美	灰灰褐色	口縁部暗アラ 底部外側に粘粒痕	10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿・小皿 (145)-147) 及び (282)	粗化等化、歪み・口縁部 壁やかに内窓。
147	025 -08	土師器皿	C地区 P.44 5.K.828	口縁部留片 約1/2残存	約11.0	約21	—	やや密	美	黄褐色	口縁部暗アラ 底部外側に粘粒痕	10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿・小皿 (145)-146) 及び (282)	粗化等化・口縁部 壁やかに内窓。
148	025 -01	土師器皿	C地区 S.835 No.1	壺合 口縁部約1/2 残存	約12.0	約27	—	やや密	美	黄褐色	ナデ 10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿 (349) 外側面指捺痕 体部反復・裡地が行 く	等手・体部に指捺されで深み (段状に屈曲)。 第49回	
149	025 -02	土師器皿	C地区 S.835 No.2	壺合 約3.0残存	約12.0	約25	—	やや密 2mm大 粘粒合	美	黄褐色	ナデ 10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿 (148) 外側面指捺痕 体部反復・裡地が行 く	等手・体部に指捺されで深み (段状に屈曲)。 第49回	
150	007 -04	土師器皿	J.19 5.K.515埋土	壺片 約3.0残存	約9.2	約22	—	やや密	美	黄褐色	ナデ 10YR8/8	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿 (117)	口縁部やかに内窓。底部 の差さ不同。	
151	018 -05	土師器皿	L.~M.16 186年墓 5.K.2埋土	約4.6残存	約6.0	約13	—	やや粗	美	黄褐色	ナデ 7.5YR6.4	14c未焼～ 15c後焼	人骨 (5.K2)	扁平化・歪み・口縁部肥厚し 壁が立ち上り氣味。	
152	019 -08	土師器皿	M.14 132年墓下層 5.K.25埋土	壺合 約4.5残存	約9.3	約13	—	やや粗 1.0mm大 粘粒合	美	灰灰褐色	10YR8/4	14c未焼～ 15c後焼	人骨 (5.K252)	扁平化・凹凸・口縁部や肥厚。 壁がに内窓。	
153	019 -10	土師器皿	N.22 5.K.557内	壺片 壺合 約1/2残存	約7.5	約10	—	粗 1.0mm 粘粒合	美	灰灰褐色	10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	—	扁平・歪み・口縁部不規則 に内窓。	
154	011 -05	土師器皿	N.23 5.K.570	243年墓 約7.7残存	約9.0	約11	—	やや密	美	黄褐色	ナデ 10YR7/4	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿小(155) 13c未焼～ 14c未焼	等手・口縁部やかに内窓。歪 みあり。	
155	011 -06	土師器皿	N.23 5.K.570	243年墓 約7.7残存	約10.0	約12	—	やや密	美	青灰 乳白色	ナデ・他不明	14c未焼～ 15c後焼	土師器皿小(154) 13c未焼～ 14c未焼	口縁部や肥厚しつづやかに 内窓。	
156	011 -07	土師器皿	N.23 243年墓 5.K.570	壺合 約3.0残存	約10.0	約20	—	やや密	美	青灰 乳白色	ナデ・他不明	13c未焼～ 14c未焼	土師器皿と小皿 (155)及び(157) 遷 期に被覆。	口縁部や肥厚しつづやかに 内窓。	
157	023 -02	土師器皿	N.23 5.K.570	243年墓 約7.7残存	約9.0	約13	—	やや密	美	灰白	ナデ 10YR8/2	13c未焼～ 14c未焼	土師器皿と小皿 (154)～(156)	等手・扁平化・歪みあり。 口縁部や肥厚、 壁がに内窓。	
158	24 -06	土師器皿	N.26 5.K.599 5.K.231	壺合 大略所後元	約7.8	約12	—	密	美	灰灰褐色 内・新焼物	10YR8/4	13c未焼～ 14c未焼	土師器皿と小皿 (126)～(128) 人骨 (5.K231)	扁平・歪み・口縁部不規則 に内窓。	
159	005 -07	土師器皿	N.26 5.K.599 5.K.231埋土	壺合 約3.0残存	約7.5	約12	—	密	美	灰灰褐色 内・新焼物	10YR8/4	13c未焼～ 14c未焼	土師器皿と小皿 (126)～(128) 人骨 (5.K231)	扁平・歪み・口縁部不規則 に内窓。	

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告 番号	実測 寸法	器種 名前	出土遺構 新番号	出土遺構 遺存状態	形状 寸法	口径 (cm)	高さ (cm)	径深 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考
160 3090 小皿	22— 上縁器 9mm	P13 S.K.467	実形品	7	1.1	—	やや密	並	薄白色 10YR8/2	口縁部ナデ 底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 13cm高さ～ 14cm底面	土縁器小皿 (160・ 162)	質平、蓋み大、口縁部不規 則に内凹気味。口縁部外周 に指圧痕あり。蓋み少々。 瓦蓋第11回		
161 063 —02	上縁器 小皿	P13 S.K.467	複合 約1/2残存	約8.0	約1.0	—	やや密	並	薄白色 10YR8/2	外表面指圧痕	1.1mm 13cm高さ～ 14cm底面	土縁器小皿 (160・ 162)	質平、蓋み化して口縁部 や内側へ蓋み少。		
162 3091 小皿	22— 上縁器 9mm	P13 S.K.467	複合 約6.7残存	約7.2	約1.1	—	やや粗	並	薄白色 10YR8/2	外表面指圧痕	1.1mm 13cm高さ～ 14cm底面	土縁器小皿 (160・ 161)	質平、口縁部不規則に内凹気味。 蓋みあり。 口縁部外周に指圧痕。 瓦蓋第11回		
163 065 —03	上縁器 小皿	S12 21号墓施用 S.147	約1/4残存	約7.4	約1.1	—	密	並	薄褐色 10YR8/4	外表面指圧痕	1.1mm 13cm高さ～ 14cm底面	人骨 (S.147)	やや厚壁、口縁部やかに 内凹気味。 蓋み少々。		
164 010 —07	上縁器 小皿	C.952 Q48 S.856	約1/2残存	約7.4	約1.35	—	やや密	並	薄褐色 10YR8/4	底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 13cm高さ～ 14cm底面	口口土縁器皿 片 (32)	質平、口縁部やや厚壁 やかに内凹、既に歪み。		
165 3107 小皿	22— 上縁器 9mm	J17 S.K.468	ほり切跡有 口縁一部 欠け	約7.0	約0.8	—	やや密	並	薄白色 10YR7/6 内：淡黄色 10YR8/3	底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	—	質平、握把み大、口縫部 乙内凹せ。		
166 024 —01	上縁器 小皿	J18 S.K.507	はげ青白 西松粘土	約8.2	約1.0	—	やや密	並	薄褐色 10YR8/4	外表面外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	—	質平、質化、口縫部 や内凹気味。		
167 019 —01	上縁器 小皿	J20 S.K.528	複合 口縁部の1/2 残存	約7.0	約1.1	—	やや粗	並	薄褐色 10YR7/4	外表面指圧痕	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	—	質平、質化。蓋み大。 口縫部、内側に内凹気味 油少々。		
168 22— 上縁器 9mm	K14 K04	15号墓 S.157	約4.5残存	約7.2	約1.2	—	やや密	並	黄赤色 内：黄褐色	外表面指圧痕	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	人骨 (S.157)	薄手、矢張り、口縫部不規 則に内凹気味。隨出土上：152号 墓よりX156から土縁器皿 片出土。		
169 018 —09	上縁器 小皿	K14 14号墓	約1/4残存	約8.0	約1.4	—	やや粗	並	薄褐色 10YR7/3	外表面ナデ	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器小皿 (170)	薄手、質み、口縫部 や内凹気味。要火、揮付量。		
170 018 —10	上縁器 小皿	K14 14号墓	口縁 約1/4残存	約8.0	約1.0	—	やや密	並	薄褐色 23Y7/2	外表面指圧痕か	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器小皿 (169)	薄手、質化。口縫部 や内凹気味。要火捺、 揮付量。		
171 22— 上縁器 3071	K16 S.K.487	実形品	8.3	1.5	—	やや密 砂粒有	並	淡褐色 10YR8/2	口縁部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿及び小皿 (130) (172) (178) 第4回	口縫部や砂粒しつつ漆 に内凹。蓋み少々。			
172 22— 上縁器 3072	K16 S.K.487	実形品	8.4	1.5	—	やや密 砂粒有	並	淡褐色 10YR8/2	口縁部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿及び小皿 (130) (171) (178) 第4回	口縫部や砂粒しつつ 揮付量に内凹。蓋み少々。			
173 22— 上縁器 3073	K16 S.K.487	実形品	7.9	1.5	—	やや密 砂粒有	並	中やばく 淡褐色 砂粒有	口縁部ナデ 底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿及び小皿 (130) (171) (172) 及び(174) (178) 第4回	口縫部や砂粒、 揮付量に内凹。蓋み少々。 口縫部外周に指圧痕に 沿う。			
174 22— 上縁器 3083	K16 S.K.487	複合 約9.0残存	約7.7	約1.5	—	やや密 砂粒有	並	黄白褐 内：淡褐色	口縁部ナデ 底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿及び小皿 (130) (171) (178) 及び(175) (176) (178) 第4回	口縫部や砂粒、 揮付量に内凹。蓋み少々。			
175 22— 上縁器 3095	K16 S.K.487	約1/5残存	約8.2	約1.8	—	やや粗 0.5mm 砂粒有	並	薄白色 砂粒有	口縁部ナデ 底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿及び小皿 (130) (171) (178) 及び(174) (176) (178) 第4回	口縫部や砂粒、 揮付量に内凹。接収され、 他の同類の明器片三。			
176 020 —01	上縁器 小皿	K16 S.K.487	口縁部 約1/5残存	約8.5	約1.7	—	粗 2.0mm 砂粒有	並	薄褐色 10YR8/4	口縁部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (175) (177) (178) 及びX234から土縁器皿 片 (130)	口縫部底に砂粒、 揮付量に内凹。蓋み少々。 口縫部外周に接収。		
177 020 —02	上縁器 小皿	K16 S.K.487	口縁部 約1/5残存	約7.0	約1.0	—	やや密 0.5mm 砂粒有	並	薄褐色 10YR8/4	口縁部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (176) (178) 及びX5 K234から土縁器皿 片 (130)	薄手、質平、蓋み、口縫部 や内凹気味。口縫部外周に 接収。		
178 020 —03	上縁器 小皿	K16 S.K.487	口縁部 約1/5残存	約8.5	約1.3	—	粗 2.0mm 砂粒有	並	薄褐色 内外兼ナデ	口縁部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (177) 及びX5 (234) から土縁器皿片 (130)	薄手、口縫部や 内凹気味。口縫部外周に 接収。		
179 007 —03	上縁器 小皿	L15～T6 182号墓 盤上下層	複合 約2.5残存	約8.0	約1.1	—	やや密	並	薄褐色 10YR7/4	内表面型で成形 か?	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	(2052) (2692) (7500) (2054) (2693) (7500) (2054) (2694) (7500) (7301) (5参考) (7500) 及び(2052) (2692) (7500) (2054) (2693) (7500) (2054) (2694) (7500)	口縫部つまみ上げ、 接収。蓋みあり。		
180 006 —08	上縁器 小皿	L16 182号墓 下層	約1/3残存	約7.8	約1.1	—	やや粗	並	薄褐色 10YR8/4	底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (176) 及び(177) (178) (2054) (2692) (7500) (2054) (2693) (7500) (2054) (2694) (7500)	口縫部底に内凹、蓋み。		
181 019 —11	上縁器 小皿	L16 196号墓土	複合 約1.3残存	約7.5	約0.9	—	中や粗 1.0mm 砂粒	並	薄褐色 23Y7/4	底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (172)～ (178)	薄手、質平、口縫部小さく 内凹。		
182 019 —12	上縁器 小皿	L16 196号墓土	複合 約1.3残存	約7.0	約1.0	—	中や粗 1.0mm 砂粒	並	薄褐色 10YR6/5	底部外周に指圧痕 あり	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (181) (183)～(185)	薄手、質平、蓋み、口縫部不 規則に内凹気味。		
183 019 —13	上縁器 小皿	L16 196号墓土	約1/5残存	約7.5	約1.4	—	中や粗 1.0mm 砂粒	並	薄褐色 10YR7/4	内表面指圧痕	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (181) (182)～(184) 及び(185)	薄手、質平、蓋み、口縫部 や内凹気味。		
184 019 —14	上縁器 小皿	L16 196号墓土	複合口縁 約1/4残存	約8.5	約1.2	—	中や粗 1.0mm 砂粒	並	薄褐色 10YR7/6	内外兼ナデ	1.1mm 14cm高さ～ 15cm底面	土縁器皿 (171)～ (181) (182) (185)	薄手、質平、蓋み、口縫部 や内凹気味。治療付。		

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告書番号	実測番号	種類	出土遺構 番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形接法 調整技法等	時代年代	出土状況	備考
185	019 -15	土師器 小皿	L.16 196号埋土	約1周残存	約7.0	約1.2	—	中や粗 1.5mm厚 芯土粗 粒多	並	黄真黄色 10 YR 7/6	口部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 15 cm底 2周	土師器小皿 (181)～ (184)	手平・皿み・口縁部 僅かに内湾質味。
186	020 -04	土師器 小皿	L.17 SK.503埋土	破片複合 約1周残存	約7.5	約1.6	—	1.0mm厚 粒多	並	褐色 7.5 YR 7/6	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	—	圓形・皿み・口縁部 僅かに内湾質味。受火痕。
187	22- 5088	土師器 小皿	L.20 SK.531 No.1	複合 大焰表面復元	約7.6	約1.2	—	中や粗 0.5 ～1.0mm 粒多	並	黄：淡黃褐色 底部外側に指圧痕 あり	口部部様ナメ 2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿及び小皿 (131)・(188)～(191) 第4回	扁平化・皿み・口縁部 不規則に内湾質味。	
188	22- 3063	土師器 小皿	L.20 SK.531 No.2	圓形	7.9	1.2	—	中や粗	並	淡黃褐色	口部部様ナメ 底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿及び小皿 (131)・(188)～(191) 第4回	扁平・皿み・口縁部不規則に 内湾質味・口縫部治療 付。
189	004 -05	土師器 小皿	L.20 SK.531	約1周残存	約7.6	約1.0	—	中や粗	並	黄真黄色 10 YR 7/4	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿及び小皿 (131)・(187)～(188) 第4回	手平・皿み・口縫部や肥 厚かに内湾質味。
190	004 -06	土師器 小皿	L.20 SK.531	複合 約1周残存	約7.5	約0.75	—	中や粗	並	黄真黄色 10 YR 7/4	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿及び小皿 (131)・(187)～(189) 第4回	手平・皿み・口縫部 僅かに内湾質味・皿み。
191	003 -01	土師器 小皿	L.20 SK.531	複合 約1周残存	約7.5	約1.3	—	中や粗	並	黄真黄色 10 YR 7/4	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿及び小皿 (131)・(187)～(190) 第4回	手平・扁平化して口縫部や 内湾質味・空腹部・唇縫部強。
192	018 -02	土師器 小皿	K.~L.22 SK.202号 SK.531埋土	破片複合 約1周残存	約8.0	約1.2	—	中や粗 1.0mm厚 粒多	並	黄真黄色 10 YR 6/3	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	人骨 (S-X)及び 5 X 160	扁平化・皿み・口縫部や肥 厚かに内湾質味。
193	22- 3089	土師器 小皿	L.22 SK.549 (No.1)	口縫部一部復 合 实用復原	約7.7	約1.2	—	中や粗	並	黄：淡黃褐色 底部外側に指圧痕 内：白泥	口縫部様ナメ 底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 194-196	扁平化・皿み・口縫部不規 則に内湾質味・口縫部外側に 修理。
194	22- 3067	土師器 小皿	L.22 SK.549 (No.2)	複合 約4周残存 (底付形)	約7.6	約1.3	—	中や粗	並	淡黃褐色	口縫部様ナメ 底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (193)・(195)～(199)	扁平・皿み・口縫部や肥 厚かに内湾質味・口縫部外側に 修理。
195	22- 3064	土師器 小皿	L.22 SK.549	複合復元復元 内：白泥	約7.6	約1.25	—	中や粗	並	黄：淡黃褐色 10 YR 6/2	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (193)・(195)及び(199)	扁平化・皿み・口縫部 僅かに内湾質味。
196	006 -07	土師器 小皿	L.22～ SK.549	複合 約4.5周残存	約7.0	約1.3	—	中や粗	並	灰白色 10 YR 6/2	底部外側に指圧痕 粗面質造	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (193)～(196)	口縫部平。
197	22- 3085	土師器 小皿	L.23 SK.561 (No.1)	圓形	7.6	1.3	—	中や粗 5mm大 小石混入	並	乳白色	底部外側に 指圧痕あり 布紋土模も	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (193)～(199)	扁平・口縫部や肥 厚、内湾質味。
198	22- 3086	土師器 小皿	L.23 SK.561 (No.2)	圓形	7.5	1.2	—	中や粗	並	乳白色	底部外側に指圧痕 布紋土模も	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (197)～(199)	扁平・口縫部や肥 厚、内湾質味・皿み。
199	22- 3087	土師器 小皿	L.23 SK.561 (No.3)	圓形	7.5	1.1	—	中や粗 1mm高 粒粘合	並	乳白色	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (197)～(198)	手平・皿み・口縫部 不規則に内湾質味。
200	009 -01	土師器 小皿	L.23 SK.562 埋土	約1周残存	約10.5	約1.8	—	—	並	黄真黄色	底部部壓痕	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (119)	底転復元・唇縫跡。
201	006 -09	土師器 小皿	L.23 401号埋 土	約1周残存	約9.4	約1.6	—	—	並	乳白色	ナメ	底部外側に指圧痕	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	口縫部がく (溝跡) 隙間に内窓。
202	22- 3065	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合復元復元 内：白泥	約7.7	約0.9	—	中や粗 1mm高 粒粘合	並	黄：淡黃褐色 底部外側に指圧痕	ナメ	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (203)～(207)	扁平・皿み・口縫部 不規則に内湾質味。
203	22- 3068	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合復元復元 内：白泥	約8.3	約1.2	—	中や粗 1mm 粒粘合	並	黄：灰白色 25 YR 2/2 25 YR 2/4	底部外側に指圧痕 ナメ	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (202)～(204)～(207)	扁平・口縫部や肥 厚、内湾質味・口縫部に 修理付。
204	22- 3092	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合 約6周残存	約7.6	約1.0	—	中や粗 0.5mm 粒粘合	並	淡黃褐色	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (202)～(203)～(205)～ (207)	扁平・皿み・口縫部 僅かに内湾質味。
205	22- 3093	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合 大焰表面復元	約7.3	約0.9	—	中や粗	並	淡黃褐色	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	—	不規則・扁平・皿み大・口縫 部に内窓質味。
206	017 -04	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合 約4周残存	約7.8	約1.3	—	中や粗	並	黄：灰白色 25 YR 2/2 25 YR 2/4	底部外側に指圧痕 ナメ	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (202)～(205)～(207)	手平・口縫部や肥 厚に内窓質味。
207	017 -05	土師器 小皿	L.24 SK.572	複合 約1周残存	約8.2	約0.9	—	中や粗	並	黄真黄色 10 YR 7/4	底部外側に指圧痕 底部中央膨出孔 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (202)～(206)	扁平・皿み大・口縫 部に内窓質味。
208	006 -04	土師器 小皿	L.24 424号埋 土X118	約1周残存	約9.2	約2.3	—	中や粗	並	黄真黄色 10 YR 7/4	底部外側に指圧痕 ナメ	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	人骨 (S-X) (118)	手平・口縫部や肥 厚に内窓質味。
209	22- 3084	土師器 小皿	L.24 SK.563 (No.1)	楕円表面に近 い	約7.6	約0.9	—	中や粗 粒少	並	乳白色	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (210)～(211)	手平・皿み・口縫部 僅かに内湾質味。
210	22- 3066	土師器 小皿	L.24 SK.563 (No.2)	複合 大焰表面復元	約7.5	約1.3	—	中や粗	並	乳白色	底部外側に指圧痕 あり	2周 14 cm幅～ 15 cm高 2周	土師器皿 (209)～(211)	扁平・皿み・口縫部不規則に 内窓。

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告 番号	測定 番号	器種 名	出土遺構 名	出土遺構 断面番号	出土遺構 現状	形状 寸法	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調整技術等	時期年代	出土状況	備考
211	005	土師器	L 24 S K 563	複合 筒形	約7.3	約1.0	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (209×176)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
212	002	土師器	L 24 429号墓 S X 132	約1/5残存	約8.0	約1.4	—	やや粗	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデはがれ不規 則性の厚底 剥離跡有	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (213×215)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
213	002	土師器	L 24 429号墓 S X 132	約1/5残存	約9.0	約1.7	—	1.0mm 砂粒含	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデはがれ不規 則性の厚底 剥離跡有	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (214×215)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
214	002	土師器	L 24 429号墓 S X 132	約1/6残存	約8.0	約1.0	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (212×213×215)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
215	002	土師器	L 24 429号墓 S X 132	約1/3残存	約6.0	約1.2	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (212×214)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
216	22	土師器	M 14 131号墓下層 S K 254	複合 筒形	約8.0	約0.95	—	やや細	Ⅲ	灰褐色	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (5×254)	扁平、並み、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
217	006	土師器	M 18 S X 181	約1/8残存	約7.9	約1.3	—	粗	Ⅲ	灰白	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (100号西側1m)	薄手、口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
218	003	土師器	M 22 229号墓 下層 S K 554	複合 筒形	約8.0	約0.9	—	やや粗 1.5mm 砂粒含	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/3	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (219×221)	薄手、一層扁平化して口縁部 はやや厚軽	
219	003	土師器	M 22 229号墓 下層 S K 554	約1/6残存	約8.0	約1.4	—	やや粗	Ⅲ	真黄褐色 10YR 8/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (218×220×221)	口縁やかに内凹、受火痕跡、 第40回	
220	003	土師器	M 22 229号墓 下層 S K 554	約1/4残存	約8.0	約0.85	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (219×221)	薄手、質化し口縁部や内腹 厚しなら健かに内凹気味	
221	003	土師器	M 22 229号墓 下層 S K 554	口縫 約1/8残存	約7.0	約0.9	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (220×221)	薄手、質化して口縁部 僅かに内凹気味	
222	018	土師器	M 22 229号墓 下層 S K 554	複合 筒形	約7.3	約1.2	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/3	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (5×62)	薄手、並み大、口縁部 や内腹、小く内凹	
223	023	土師器	M 24 416号墓 S X 141 墓主	約1/2残存	約8.0	約1.6	—	1~3mm 大粒粘土	Ⅲ	灰白色 10YR 8/2	口縫模様ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (5×141)	手すり、口縁やや厚軽、 僅かに内凹	
224	001	土師器	M 24 41号墓 S X 213	範型 復元後	約7.5 ~7.8	約1.2	—	やや粗	Ⅲ	灰白色 10YR 8/2	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (486)	手すり、口縁やや内凹気味、 並み大	
225	001	土師器	M 25 436号墓埋土	複合 筒形	約8.5	約1.3	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 8/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (5×233)	口縁やかに内凹、 受火痕跡、僅く残る、 第40回	
226	001	土師器	M 25 436号墓埋土	複合 筒形	約8.0	約1.3	—	やや粗	Ⅲ	真黄褐色 10YR 8/4	ナデ あり	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縁やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (525×227×231)	手すり、口縁やかに内凹、 受火痕跡、僅く残る、 第40回	
227	001	土師器	M 25 436号墓埋土	口縫 約1/2残存	約7.5	約1.3	—	中細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (226×231)	手すり、口縁やや内凹気味、 並み大	
228	001	土師器	M 25 436号墓埋土	複合 筒形	約8.0	約1.4	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×227×229)	僅に内凹、壁火痕跡、 第40回	
229	002	土師器	M 25 436号墓埋土	約1/5残存	約7.0	約1.3	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 6/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×228×230)	手すり、口縁やかに内凹気味、 僅く残る	
230	22	土師器	M 25 436号墓埋土	範型 復元後	約7.5	約1.3	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫模様ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×228×228)	手すり、並み	
231	22	土師器	M 25 436号墓埋土	範型 復元後	約7.4	約1.3	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫模様ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×229)	手すり、口縁やや肥厚、 小さく内凹	
232	003	土師器	M 25 S K 585	複合 筒形	約7.0	約0.9	—	やや粗	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 胎土あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (224×225)	手すり、口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
233	006	土師器	N 16 S X 180 (84号墓 更替剖面)	約1/4残存	約8.0	約1.5	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 胎土か 粗面剥離跡有	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (80)	口縫部質平にして、並み大、 手すり、並み	
234	23	土師器	N 23 405号墓	約3/4残存	約7.2	約0.9	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫やかに内凹、 胎土あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (224×227)	手すり、口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	
235	05	土師器	N 24 249号墓埋土	複合 筒形	約7.6	約1.2	—	やや細	Ⅲ	真黄褐色 10YR 7/4	ナデ あり	口縫模様ナデ あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×229)	手すり、口縫やや肥厚、 並み大	
236	22	土師器	N 25 S K 592	複合 筒形	約7.8	約1.3	—	粗	Ⅲ	灰白色 25YR 2/2	ナデ あり	口縫やかに内凹、 胎土あり	口縫やかに内凹、 受火痕跡、粗面剥離跡、 第40回	土師器小皿 (225×230)	手すり、並み、口縫部僅に肥厚、 僅かに内凹、受火痕跡、 第40回	

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物（第44～49図）

報告 番号	実測 番号	器種 名前	出土遺構 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	底面 (cm)	縁高 (cm)	施土	焼成	色調	成形技法 調整技法等	時期年代	出土状況	備考
237	24 -8	土焼器 小皿	O-14 49号墓	複合 大輪井内復元	約7.3	約1.1	—	やや密	三	真裏橙色	外面部ナデと粘土層 内面部ナデと型当て 板(手作工無)	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋平・皿み大・口縁部や内底厚 底部不規則に立ち上がる。
238	005 -05	土焼器 小皿	O-22 236号墓 内復元	約1/2残存	約7.3	約1.05	—	やや密	三	底裏橙色	外面部ナデ	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋手・口縁部や内底気泡・ 底形不規整込み。
239	017 -06	土焼器 小皿	H-12 34号墓 内復元	複合 約1/3残存	約7.5	約0.9	—	やや密	三	底裏橙色	ナデ 外面部ナデ	2周 14c米透~ 15c後葉	人費 (S-X80)	蓋平化・口縁部やや肥厚・ 底が内に内窓・受火痕・ 揮手若干。
240	006 -02	土焼器 小皿	S-121 146号墓 内復元(下層)	複合 約4/5残存	約7.3	約1.35	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 外面部ナデ(内面当てか)	2周 14c米透~ 15c後葉	人費 (S-X273)	口縁部にまぶし止 内窓・皿み大。
241	23- 3059	土焼器 小皿	N-05 277-28 46号墓 頂部A下層	複合 約1/2残存	約8.5	約1.4	—	粗 0.1mm 砂粒多	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋手・縁幅や内底厚・ 底が内に内窓・皿み少々。
242	006 -03	土焼器 小皿	M-29 46号墓 頂部B盛土内	複合 約1/2残存	約8.0	約1.55	—	粗 砂粒少	三	真裏橙色	ナデ 外面部ナデが 粗粒外被覆	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋手・口縁部や内窓・ 受火痕跡。
243	007 -01	土焼器 小皿	M-29 46号墓 盛土内	複合 約1/2残存	約7.8	約1.4	—	やや粗	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	2周 14c米透~ 15c後葉	—	口縁部にさく (溝目) 内窓・皿みあり。 瓦真目11回
244	24 -3	土焼器 小皿	R-40 5×767 C-665 O-1-P1 S-5 778	複合 約1/2残存	約8.5	約2.2	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋手・口縁部に高曲面。 瓦真目14回
245	023 -01	土焼器 小皿	K-14 15号墓 埋土	複合 約1/4残存	約9.0	約2.8	—	1~2mm 大粒粒	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に 指圧痕あり	2周 14c米透~ 15c後葉	—	蓋手・皿み・口縁部大きさ・ 内窓ありして立ち上がる・複合形 複数。
246	017 -07	土焼器 小皿	K-14 15号墓 埋土	約1/7残存	約8.5	約1.0	—	やや粗	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に 指圧痕あり	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・口縁部に厚底。 小さく内窓・口縁付耳。
247	017 -08	土焼器 小皿	K-14 15号墓 埋土	約1/6残存	約7.0	約0.9	—	やや粗 1.5mm時 粒度	三	真裏橙色	ナデ 10Y R6/3 外面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・底平・口縁部やかに 内窓気泡・底部無孔蓋・ 瓦真目14回
248	017 -09	土焼器 小皿	K-14 15号墓 埋土	約1/9残存	約7.9	約0.9	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 23Y R7/3 外面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平・口縁部やかに 内窓気泡・口縁部に治癒付 耳。 瓦真目14回
249	015 -02	土焼器 小皿	K-14 15号墓	複合 約1/2残存	約7.1	約1.0	—	やや密	三	真裏橙色	口縁部横ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X280)	蓋平化・口縁部肥厚・ 皿みながら立ち上がる。
250	011 -04	土焼器 小皿	K-16 5×280	約1/9残存復 存	約7.5	約1.0	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X280)	蓋平化・口縁部やかに内窓・ 底部無孔蓋に治癒付耳。
251	011 -03	土焼器 小皿	K-21 5×540	約1/9残存復 存	約7.0	約0.8	—	やや密	三	真裏白色 外・真裏橙 10Y R8/2 外面部ナデ	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平化・皿み・口縁部 小さく(溝目) 内窓・口縁付耳。
252	018 -01	土焼器 小皿	K-22 37号墓壁土	複合 約1/5残存	約7.0	約1.1	—	密	三	真裏橙色	ナデ 10Y R7/4 外面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・口縁部やかに内窓・ 口縁付耳。
253	018 -02	土焼器 小皿	K-22 37号墓壁土	約1/8残存	約8.0	約0.8	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 10Y R8/4 外面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平化・皿み・口縁部 小さく(溝目) 内窓・口縁付耳。
254	018 -03	土焼器 小皿	K-22 37号墓壁土	約1/7残存	約9.0	約1.0	—	密	三	真裏橙色	ナデ 10Y R7/4 外面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平化・皿み・口縁部 やかに内窓気泡・ 底が内に内窓。
255	004 -08	土焼器 小皿	K-1~L-15 145号墓	口縁部 約1/4残存	約7.0	約0.7	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平・口縁部内窓気泡・ 受火痕跡。
256	023 -10	土焼器 小皿	M-23 39号墓	複合 約1/4残存	約6.8	約1.15	—	やや密	三	真裏橙色 外・真裏橙 10Y R7/4 外面部ナデ	口縁部横ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	—	非常に薄手で一・口縁部小さく (溝目) 内窓・治癒痕跡。
257	018 -08	土焼器 小皿	M-23 406号墓と 5×19号の間	約1/8残存	約9.0	約1.2	—	やや密	三	真裏橙色	内面部ナデ	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X33)	口縁部やかに内窓気泡・ 受火痕跡・底部無孔。
258	020 -05	土焼器 小皿	M-24 5×130 (417+413)号 墓(通路跡下)	約2.5	約0.6	—	やや粗 1.0mm 砂粒多	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X130)	蓋手・蓋平・皿み大・口縁部 不規則に内窓気泡。	
259	24 -02	土焼器 小皿	M-24 5×130 X-542	高脚品	6.8	1.2	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X42)	蓋手・蓋平・皿み大・口縁部 やかに内窓気泡・ 底部無孔。
260	023 -05	土焼器 小皿	M-25 43号墓	複合 約1/2残存	約7.3	約2.05	—	密	三	真裏橙色	10Y R8/3	3周 15c後葉~ 16c米透	—	蓋手・蓋平・口縁部や内底厚・ 底が内に内窓・受火痕跡。
261	004 -07	土焼器 小皿	M-25 44号墓 X-5138	口縁部 約1/9残存	約8.0	約1.5	—	やや密	三	真裏橙色	ナデ 底部外面部に指圧痕 あり	3周 15c後葉~ 16c米透	人費 (S-X138)	蓋手・口縁部に内窓・口縁 部に治癒痕跡。

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44 ~ 49回)

報告 番号	実測 基号	器種 名前	出土遺構 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	高さ (cm)	横径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形接法 調整技法等	発現年代	出土状況	備考
262	052 -06	土焼器 小皿	N25 447号墓土	約1/5残存	約7.0	約16	—	やや密	Ⅲ	褐色 25YR 7/6	ナデ 外腹面指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・口縁部僅やかに内湾。 焼付付着。
263	017 -01	土焼器 小皿	N14 130号墓土	口縁 約1/5残存	約8.0	約6.7	—	やや密	Ⅲ	灰青褐 10Y R 7/4	ナデ(地不調)	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・底平・口縁部どう内凹せず。 第49回
264	005 -04	土焼器 小皿	N16 5 X 47 (5X47の 名前変更)	約1/5残存	約7.0	約13	—	やや密	Ⅲ	斜褐色 25YR 7/4	ナデ 底部外腹面指圧痕 筋壓掌指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	非常に薄手・口縫部や内凹、 受火痕跡。
265	22- 3103	土焼器 小皿	N25 440号墓	丸底面	7.3	0.8	—	やや粗 45mm 小石合	Ⅲ	浅灰色 25Y 7/3	ナデ 底部外腹面指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・底平・口縫部不規則 に内湾気味。 第49回
266	062 -08	土焼器 小皿	O-13 5 X 262 (7号墓 東側面下)	複合 約1/2残存	約7.5	約1.0	—	やや密	Ⅲ	浅黄褐色 10Y R 8/4	ナデ 外腹面指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	人骨 (5 X 262)	薄手・底平且つ、口縫部の内 湾形状は不規則不明瞭・並み、 受火痕跡。
267	002 -09	土焼器 小皿	Q13 37号墓	約1/4残存	約8.0	約1.0	—	やや粗	Ⅲ	浅黄褐色 10Y R 8/3	ナデ 外腹面指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・底平化・口縫部や不 規則に立ち上がり異質・並み。
268	005 -02	土焼器 小皿	R12 33号墓	約1/6残存	約7.6	約0.8	—	やや粗 15mm 砂粒合	Ⅲ	浅黄褐色 10Y R 8/4	ナデ 底部外腹面指圧痕 筋壓掌指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・口縫部僅かに内湾気味。
269	019 -02	土焼器 小皿	511 12号墓 壁土	複合 約1/4残存	約7.0	約1.2	—	10mm粒 砂合	Ⅲ	剥落 10Y R 7/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (270-272)	底平化・並み・口縫部や中折厚、 僅かに内湾気味・焼付付着。
270	019 -01	土焼器 小皿	511 12号墓 壁土	複合 約1/4残存	約7.0	約1.3	—	10mm粒 砂合	Ⅲ	浅灰色 5YY 8/4	ナデ 外腹面指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (269-271+272)	薄手・口縫部僅かに内湾。
271	019 -04	土焼器 小皿	511 12号墓 壁土	口縁部 約1/5残存	約7.0	約1.2	—	10mm粒 砂合	Ⅲ	灰青褐色 10Y R 7/4	ナデ 内腹面ナデ	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (269-270+272)	薄手・口縫部小さく凸に立ち上 がり・受火痕跡・焼付痕。
272	007 -09	土焼器 小皿	511 12号墓 壁土	複合 約1/4残存	約7.6	約1.2	—	やや密 (微 砂粒)	Ⅲ	剥落 10Y R 7/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (269-271)	口縫部やかに内湾。
273	018 -06	土焼器 小皿	511 13号墓 (5X262西端)	約1/4残存	約8.0	約1.4	—	やや密	Ⅲ	浅黄褐色 10Y R 8/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (274-275)	底平若干並み・口縫部僅か に内湾・受火痕跡・焼付痕。
274	003 -12	土焼器 小皿	511 13号墓	約1/6残存	約8.0	約1.7	—	やや密	Ⅲ	灰青褐色 10Y R 8/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (273-275)	口縫部僅かに内湾。
275	003 -13	土焼器 小皿	511 13号墓	約1/5残存	約8.0	約1.1	—	やや密	Ⅲ	灰青褐色 10Y R 8/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器小皿 (273-274)	薄手・口縫部僅かに内湾。
276	010 -04	土焼器 小皿	B地区 L30 埴五号都 5.6.19	口縁一部 約1/3残存	約9.0	約1.2	—	やや密	Ⅲ	剥落 10Y R 7/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器皿及び小皿 (144-277-278)	剥落深い・底平並み・口縫部 僅かに内湾。
277	010 -05	土焼器 小皿	B地区 L30 埴五号都 5.6.19	口縁一部 約1/4残存	約8.0	約1.6	—	やや密	Ⅲ	剥落 10Y R 6/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器皿及び小皿 (144-276-278)	口縫小さく(溝跡)立ち上がる・ 底平並み・第49回。
278	010 -06	土焼器 小皿	B地区 L30 埴五号都 5.6.19	口縁～底部 約1/4残存	約8.0	約1.3	—	やや密	Ⅲ	斜褐色 25Y 7/4	ナデ 底部外腹面に 指圧痕あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器皿及び小皿 (144-276-277)	剥落深い・口縫部僅かに内湾・ 並み・第49回。
279	005 -09	土焼器 小皿	B地区 Q39 5.7.43	複合 約1/2残存	約6.4	約1.2	—	やや密 (微砂粒)	Ⅲ	剥落 10Y R 7/4	ナデ 外腹面指圧痕	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器皿 (143)	薄手・口縫小さく(溝跡)に内 湾・受火痕跡・同跡器皿三 点目。第49回。
280	017 -03	土焼器 小皿	B地区 Q39 5.7.48	約1/5残存	約9.0	約1.1	—	やや密	Ⅲ	剥落 10Y R 7/4	ナデ 底部外腹面に 指圧痕あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・口縫部小さく(溝跡)に内 湾。
281	018 -11	土焼器 小皿	B地区 Q40 5.7.49 壁土	口縫部細小 約1/2残存	約9.0	約1.4	—	やや密	Ⅲ	W: 浅黄色 25Y 7/4 内: 暗灰黃 25Y 5/3	口縫部ナデ ナデ	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・口縫部僅かに内湾・ 並み・第49回。
282	025 -05	土焼器 小皿	C地区 P44 5.8.28	破片複合 約1/5残存	約8.0	約2.0	—	やや密 2mm大 砂粒合	Ⅲ	剥落褐色 10Y R 7/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	土焼器皿 (145-147)	口縫直立内湾・並み。 第49回。
283	024 -04	土焼器 小皿	C地区 P-41 5.7.28	複合 口縫部約2/3 残存	約8.5	約1.2	—	やや密 1.5mm 砂粒合	Ⅲ	剥落褐色 10Y R 6/4	ナデ 底部外腹面に指圧痕 あり	3周 15c後葉～ 16c未葉	—	薄手・口縫部僅かに内湾。
284	025 -03	土焼器 小皿	C地区 S-449 (No.2)	破片複合 約1/5残存	約8.5	約1.9	—	やや密	Ⅲ	剥落褐色 10Y R 7/4	口縫部ナデ	3周 15c後葉～ 16c未葉	薄手・底平少々・口縫直立内 湾・第49回。	
285	025 -04	土焼器 小皿	C地区 S-449 (No.1)	破片複合 約1/5残存	約8.5	約1.8	—	やや密	Ⅲ	剥落褐色 10Y R 7/4	口縫部ナデ ナデ	3周 15c後葉～ 16c未葉	薄手・底平少々・口縫直立内 湾・第49回。	
参考 (1)	22- 3049	山素陶	M14 120号 墓壁 壇	遺物片 約1/2残存	不詳	不詳	約7.0	やや密	Ⅲ	淡青 灰白色	ロクナ	12c後葉 ～(未葉)	—	高臺に軽らか・薄込み部 やや優らかに厚感。

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44～49回)

報告書番号	実測番号	器種名	出土遺構 新番号	形状 遺存状態	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	成形技法 調査技法等	時期年代	出土状況	備考
参考(2)	028 -03	山茶瓶	M16 190号墓 出土下層	底部残存	不明	不明	7.6	やや密	並	黄灰白色 高台附付(底付 先端)	見込みに一方向ナ ド	12c 半焼 ~(後葉)	—	高台砂粗面・粗粒優少(53)と 類似のタイプ。
参考(3)	22- 3016	山茶瓶	M16 190号墓 新番号	破片 壁部 約3/4残存	約14.9	約4.7	約6.8	やや粗	並	淡青灰色	見込み一方向ナ ド 底面み切り 直角切欠	13c 中葉~	3ヶ所から出土の壁 片を撮合	高台削鉛面・粗粒優多。内面に強い当りによる絞縮。
参考(4)	22- 8056	山茶瓶	N25 449号墓 外北塗	底部のみ壁片	不明	不明	5.5cm	粗3mm ~ 6mm大長 石粒	並	灰白色	ロクロナデ	見込み一方向ナ ド	14c 前半代 ~	ロクロ圓筒形斜切り、側面 と脚部のタイプ。
参考(5)	—	山茶瓶	L16 182号墓壁土	口縁部 約1/5残存	約16.0	不明	不明	やや粗	並	淡青 灰白色	ロクロナデ (他不規)	13c 前葉頃 ~	GB+23+26 ~ 29+ 45+51+53等と共に 中野福字第3形式に相当する が。	中野福字第3形式に相当する が。
参考(6)	—	山茶瓶	M25 5K583	複合 底部小瓶片	不明	不明	約6.6	やや粗	並	灰白色	ロクロナデ	底面み切り 輪付け高台無	14c 前半代 ~	上牌器皿(138)。 参考4と同じタイプ。
参考(7)	—	山茶瓶	M24 5X131 (41+42)7号墓 壁面溝跡で検 出)	複合 底部一部~口縁部 約1/5残存	約13.0	不明	不明	粗 3 ~ 6mm 大系石粒	並	灰白色	ロクロナデ (他不規)	14c 前半代 ~	人骨(5X131)。 参考4と同じタイプ。	参考4と同じタイプ。
参考(8)	—	山茶瓶	N15倒置 と30号墓	複合 底部一部~口縁部 約1/5残存 底部先端	約13.4	不明	不明	粗 3 ~ 6mm 大系石粒	並	灰白色	ロクロナデ (他不規)	14c 前半代 ~	2ヶ所から出土の壁 片を撮合	参考4と同じタイプ。
参考(9)	22- 3075	山皿	L15 146号墓壁土	複合表面復元 約8.0	約2.0	約4.2	密	良	暗灰白色	ロクロナデ	底面み切り ロクロ回転は時計 回り	12c 後葉 ~ 13c 初	—	—
参考(10)	—	山皿	M17 131号墓壁土	小破片	約8.2	約2.3	不明	密	良	暗灰白色	ロクロナデ	底面み切り	13c 中葉~	—
参考(11)	021 -06	山皿	M17 200号墓 5X75壁土	口縁部 約1/5残存	約8.0	約2.2	約9.4cm	やや密	並	淡灰白色	ロクロナデ	底面み切り 上牌器皿小盤片 (111) 人骨(5X75)	13c 前葉~ —	—
参考(12)	22- 3041	白磁瓶	L16 182号墓 土蓋上	口縁部 約1/5残存 底部先端	約10.0	不明	不明	やや密	並	乳灰白色	ロクロ水滴き (他不規)	14c 后葉~ 15c 後葉	—	口縫隙内円周無輪界面約 4mm。
参考(13)	22- 3042	白磁瓶	0地区 N30 5K626 壁面外土蓋 上蓋土	底部壁面 約1/5残存 縦縫合跡 先端	不明	不明	深6.8	密	良	白色 (釉面)	ロクロ水滴き	15c 後葉~ 16c 未量	—	壁膜薄い。
参考(14)	004 -08	土牌器皿	K-L15 143号墓	口縁部 約1/8残存	約2.66	不明	—	やや密	良	黄黄褐色 10YR6/4	横ナデ 口縫隙部つまみ上 げ	15c 後葉~ 16.5初	上牌器皿(116) 上牌器皿(255)	口縫隙外側に太く沈線状 溝あり。
参考(15)	017 -02	土牌器皿	N19 107号墓 石列外張	複合 約1/5残存	約7.0	約1.2	—	やや粗	並	黄黄褐色	ナデ	①頭 14c 未葉~ 外蓋粘着部	山茶瓶(35) —	電子・口縫隙やかに内凹・豊火・ 横付器。
参考(16)	007 -06	土牌器皿	K-20 5 K521高西	口縁部 約1/8残存	約7.0	約1.3	—	やや密	並	黄黄褐色 7.5YR7/4	ナデ	②頭 14c 未葉~ 口縫隙部	土牌器皿(118) —	口縫隙僅かに内凹・豊火・ 横付器。
参考(17)	003 -08	土牌器皿	L-23 395号墓 区间外張	複合 約1/2残存	約7.0	約0.95	—	やや密	並	黄黄褐色 10YR6/4	ナデ	③頭 15c 後葉~ 外蓋粘着部	上牌器皿(18) —	電子・口縫隙やかに内凹・豊火・ 横付器。
参考(18)	003 -09	土牌器皿	L-23 区间外張	約1/4残存	約6.0	約1.3	—	やや密	並	黄黄褐色 10YR7/4	ナデ	④頭 15c 後葉~ 外蓋粘着部	上牌器皿(19) —	電子・口縫隙小さく頂部に 内凹・横付器。
参考(19)	003 -11	土牌器皿	L-23 区间外張	複合 約1/5残存	約8.0	約1.3	—	やや密	並	黄黄褐色 2.5YR6/3	ナデ	⑤頭 15c 後葉~ 底面外側に粘着部 あり	上牌器皿(17) —	電子・口縫隙部小さく頂部に 内凹・横付器。
参考(20)	003 -10	土牌器皿	L-23 区间外張	複合 約1/2残存	約7.0	約1.5	—	やや密	並	黄黄褐色 10YR7/4	ナデ	⑥頭 15c 後葉~ 外蓋粘着部	上牌器皿(17) —	電子・口縫隙やかに内凹・ 豊火・横付器。
参考(21)	—	石美	A地区 107号墓 出土物裏 記載	複合 約1/5残存	—	—	—	—	—	半透明 乳白色	—	—	—	枕輪の根などに割れず剥か れていた。本末は火打ち石か。
参考(22)	—	貝	4-1 (貝・アサリ) 貝殻	駆は貝殻 アサリ現存	—	—	—	—	—	—	—	—	—	遺構に伴うものではなく、 参考までに記した。

第19表 出土遺物観察表 古墳～室町時代の遺物 (第44 ~ 49図)

報告番号	実測番号	採取時の番号	出土地区	遺構名ほか	法量 (c.m.) 現存長・万能尺幅	備考欄	照覧図	照覧写真
鉄01	12	6	A区L17	208号墓 S X175	32.8	2.7 鉄(12)と同じ208号墓出土。鐵骨器常滑産(47)に副葬。	第50回	第11回
鉄02	85	4	A区L17	207号墓 S X9	23.3	2.7 鋼・茎先一部欠失。縦区・刃区・目釘孔あり。	第50回	第11回
鉄03	14	11	A区J18	S K506 S X159	25.7	2.7 縱に近い刃先・茎先欠失。縦区・刃区・目釘孔あり。鉄(11)と併出。	第50回	
鉄04	15	14	A区N20	S K533	22.6	2.1 縱の一部・茎先欠失するも、完全に近い。縦区・刃区・目釘孔あり。	第50回	第11回
鉄05	17	21	A区J18	S K505	30	2.9 縱折れるもほぼ完存。縦区・刃区・目釘孔あり。	第50回	
鉄06	16	24	A区J19	S K519	28	3.2 茎先欠。棒部は13cm木質片付着。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	第11回
鉄07	19	25	A区J19	S K520	30	2.9 縱に近い刃先・茎先欠失。縦区・刃区・目釘孔あり。目釘孔は見えず。木質片の一部が残存。	第50回	第11回
鉄08	13	26	A区J17	S X499	31	2.9 縱の一部・茎先欠失するも、完全に近い。縦区・刃区・目釘孔あり。縫割れで目釘孔は見えず。下記の鉄(31)と併出した。	第50回	第11回
鉄09	18	27	A区M24	411号墓 S X233	33.1	3 縱折れるもほぼ完存。縦区・刃区・目釘孔あり。	第50回	第11回
鉄10	51	33	A区L19	S K524	27.3	2.8 縱の一部・茎先・刃先欠。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	第11回
鉄11	24	12	A区J18	S K506 S X159	28.5	2.3 鋼・縦の一部・茎先・刃先欠。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	
鉄12	90	5	A区L17	208号墓 S X174	33.6	2.7 鉄(01)と同じ茎より出土。鐵骨器常滑産(46)に副葬。弓なりに曲がる。ほぼ完存。	第50回	
鉄13	8	15	A区K18	S K510	31.3	2.8 縱完存。茎先に近い刃方が一部欠失。縦区・刃区・目釘孔あり。	第50回	
鉄14	9	16	A区L15	S K481	28	2.8 細びやかに曲がる。縦区・刃区・目釘孔あり。木質片付着。	第50回	
鉄15	3	20	A区M22	S K554	28.3	3.1 縱の一部・茎先・刃先欠。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	
鉄16	7	?	A区～J 17	275号墓 S X158	24.3	2.4 鋼(01)と併出。刃先に一部欠失するも略完存。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	
鉄17	25	1	8	A区O21 東北地点	28.8	2.6 縱完存。縦に目釘孔見えず。	第50回	
鉄18	22	13	A区K19	不明	26.8	2.5 縱部一部欠。刃先欠失。縦区・刃区・目釘孔。	第50回	
鉄19	6	22	A区J20	S K527	28.5	2.4 縱完存。縦で刃区欠。目釘孔離し見えず。	第50回	
鉄20	4	23	A区K20	340号墓の (可能地)	21.4	2.1 欠失あり。縦区・刃区共に不明。やや小ぶり。	第50回	
鉄21	67	34	A区L16	S K493埋土	26	* 錐金。鉄参考(42)と併出。	第50回	
鉄22	66	*	A区J17	S K497埋土	62	* 錐金。鉄(21)と同類品か? 木質片付着。	第50回	
鉄23	37	28	A区M24	411号墓 S X233	53	2.3 非刀子。不明鉄製品。鉄(09)の刀子に併出。	第50回	
鉄24	10	18	A区L17	S K511 S X167	15	2.3 刃先・茎部に欠失あり。縦あり。目釘孔なし。鉄参考(32)と併出。	第50回	
鉄25	84	28	C区Q44	S K835	13.4	1.2 やや細い刃の鉄製品。刀子か? 鉄(26)と類似。	第50回	
鉄26	86	31	A区K21	S K542	10	0.9 鉄(25)に類似するが、一層細く小振り。刀子かどうか不明。	第50回	
鉄27	20	2	A区J16	273号墓 S X8	24.1	2.8 滑溝状に渋曲するも、概ね完存。鐵骨器の鉄(102)に副葬。	第50回	
鉄28	28	*	A区北 略地圖	山川碑誌 トレーナー	13.2	3.5 非刀子。恐らく鍔の一部と推定。	第50回	
鉄29	31	*	A区K21	364号墓 S X20	18	0.4 非刀子。所謂「パンセン」の感じもある。硬質。	第50回	
鉄30	32	*	B区P37	S K707	7	3.1 錐金。	第50回	
鉄31	39	26	A区J17	S K499	9.1	3.1 錐金。鉄(08)刀子に併出。	第50回	
鉄参考(32)	1	17	A区L17	S K511 S X167	22	2.5 茎部に目釘孔より鉄沈孔を欠失。鉄(24)と併出。		
鉄参考(33)	2	19	A区Q12	東斜面	17.7	3 刃部の4/5残存。他欠失。		
鉄参考(34)	23	?	A区M17	区画南面	20.8	2.9 縱。茎を欠失。		
鉄参考(35)	68	10	A区M16	188号墓 S X20	18.5	2.7 縱・区部・目釘孔付近欠失部分多い。		
鉄参考(36)	88	9	A区O22	235号墓 S X8	28	3 刃先・縦部分欠。区付近欠失。鐵骨器。		
鉄参考(37)	11	32	A区L19	S K525	30.2	2.8 木質物部一部残存。		
鉄参考(38)	29	3	A区M18	101号墓 S X167	5.9	1.4 刀子の一部の鉄(25・26)等と同類遺物か。		
鉄参考(39)	53	29	A区L22	S K552	12	2.3 鉄に木質物付存。鉄参考(40)併出。		
鉄参考(40)	52	30	A区L22	S K552	22.7	2 刃先。一部布刀痕。鉄参考(39)併出。		
鉄参考(41)	87	31	A区K21	S K542	8.6	1.8 刀子茎の破片か?		
鉄参考(42)	63	35	A区L16	S K493	3	0.6 鉄(21)と併出。鉄(25)と同類か?		
鉄参考(43)	無	無	A区M14	S X253	5.5	1.3 刀子の一部分か?		
鉄参考(44)	無	無	A区N16	東斜面	42	1.9 刀子の一一部分か? 錐孔大さき。		
鉄参考(45)	無	無	A区K17	区画南面	16	3.2 非刀子。鉄(28)と同じ形状。鍛と複合。表面著しい。		

○各部位の名称等、説明に用いることは、佐藤惠山編「刀剣」(『日本の美術』No.6、1966年10月、至文堂)に依拠した。

第20表 出土刀子類観察表(第50回)

報告番号	実測番号	出土地区名	出土遺構名等	法量		備考(形状・伴出物等)	開闢回
				現長(cm)	断面厚(mm)		
鉄46	49	A区 J 15	S K478 S X109	5.1	4.5×4.0	頭欠、断面方形。頭・骨出土。	第51回
鉄47	50	A区 J 15	S K478 S X109	3.7	-	断面方形。頭・骨出土。	第51回
鉄48	64	A区 J 17	S K497	4.7	5.5×4.0	頭欠、断面方形。	第51回
鉄49	65	A区 J 17	S K497	3.4	5.5×3.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄50	34	A区 J 21	S K535	2.3	6.5×5.0	断面方形。骨出土。	第51回
鉄51	35	A区 J 21	S K535	3.6	4.5×3.5	頭欠、断面方形。骨出土・屈曲。	第51回
鉄52	17(12)	A区 k 16 D2	266号墓	1.6	4.0×3.0	断面方形。	第51回
鉄53	-	A区 K 21	364号墓 S X20	7	3.5×2.5	頭欠、断面方形。土師器鍋、骨。	第51回
鉄54	36	A区 M 23	S K566	5.9	6.0×4.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄55	17(10)	B区 N 30	S K626側	4.6	5.0×4.0	断面方形。屈曲。	第51回
鉄56	41	B区 N 34 ～O34	S K666	4.8	-	頭欠、断面方形。	第51回
鉄57	73	B区 P 37	S K707	2.2	5.0×3.0	断面方形。骨出土。銚 (119～125) 伴出。	第51回
鉄58	72	B区 P 37	S K707	2.5	4.5×3.0	断面方形。骨出土。	第51回
鉄59	75	B区 P 37	S K707	1.9	4.0×2.5	断面方形。骨出土。	第51回
鉄60	74	B区 P 37	S K707	3.5	5.5×3.5	断面方形。骨出土。	第51回
鉄61	76	B区 P 37	S K707	3.2	4.0×3.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄62	71	B区 P 37	S K707	2.7	5.0×4.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄63	77	B区 P 37	S K707	2	5.0×4.5	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄64	78	B区 P 37	S K707	1.9	4.0×3.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄65	70	B区 P 37	S K707	3.7	4.5×4.0	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄66	54	B区 P 37	S K707	4	4.5×4.0	断面方形。骨出土。	第51回
鉄67	55	B区 P 37	S K707	2.4	5.0×4.0	断面方形。骨出土。	第51回
鉄68	60	B区 P 37	S K707	4	5.0×3.5	頭欠、断面方形。骨出土。	第51回
鉄69	56	B区 P 35	S K682	2.9	5.5×4.0	断面方形。参考 (89) 伴出。銚 (55～59) 伴出。	第51回
鉄70	57	B区 P 35	S K682	2.9	4.7×3.5	断面方形。参考 (89) と伴出。	第51回
鉄71	61	B区 P 36	S K693	5.5	4.0×3.0	断面方形。	第51回
鉄72	48	B区 Q 37	S K714	6.9	3.0×2.5	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51回
鉄73	25 (-2)	B区 P 37	S K710	6.1	4.0×3.0	断面方形。炭化物・骨出土。	第51回
鉄74	-	B区 P 38	S K720	7.5	5.0×4.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄75	-	B区 P 38	S K720	2.8	3.6×3.2	断面方形。	第51回
鉄76	58	B区 P 38	S K720	2.4	4.0×3.5	断面方形。	第51回
鉄77	59	B区 P 38	S K720	6.3	5.2×4.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄78	42	B区 Q 34	S K673	4.5	7.0×2.5	断面方形。	第51回
鉄79	26	B区 Q 37	S K718	4.7	4.3×4.0	断面方形。	第51回
鉄80	43	B区 Q 39	S K744	5	3.6×2.5	断面方形。先端屈曲。銚 (160～184) 伴出。	第51回
鉄81	47	B区 R 40	S K767	5.1	5.0×4.0	断面方形。	第51回
鉄82	-	B区 R 40	S K767	6	4.3×4.0	断面方形。	第51回
鉄83	46	B区 R 40	S K767	7.6	4.5×4.2	断面方形。	第51回
鉄84	-	B区 R 40	S K767	8.2	3.5×3.5	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51回
鉄85	40	B区 R 40	S K767	8.3	6.0×3.0	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51回
鉄86	44	B区 R 40	S K767	7.9	3.3×3.0	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51回
鉄87	45	B区 R 40	S K767	7.5	4.5×3.6	断面方形。ほぼ全長に近い。	第51回
参考88	-	B区 N 33	S K655	-	-	断面方形。	
参考89	-	B区 P 35	S K682	-	-	断面方形。銚 (55～59) と同一遺構から出土。	
参考90	-	B区 P 36	S K694	-	-	断面方形。	
参考91	-	B区 Q 35	S K683	-	-	断面方形。	
参考92	-	B区 Q 40	S K766	-	-	断面方形。銚 (74～85) 伴出。	
鉄93	79	C区 P 48	S K854	4.1	3.3×3.0	頭欠、断面方形。	第51回
鉄94	80	C区 P 48	S K854	3.2	6.0×4.0	頭欠、断面方形。	第51回
鉄95	81	C区 P 48	S K854	3.9	4.5×3.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄96	82	C区 P 48	S K854	3.4	5.5×4.5	頭欠、断面方形。	第51回
鉄97	83	C区 P 48	S K854	3	5.0×2.8	頭欠、断面方形。	第51回
鉄98	11(-8)	C区 Q 44	S K831	3.9	3.5×3.0	断面方形。銚 (248～253) 伴出。	第51回
参考99	69	C区 Q 41	S K783	-	-	断面方形。銚 (237～238) 伴出。	
参考100	-	C区 Q 44	S K833	-	-	断面方形。銚 (284～285) 伴出。	
参考101	-	C区 Q 49	S K857	-	-	断面方形。	

第21表 出土鉄釘観察表(第51回)

報告番号	採取番号	発掘区	地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鑄造年	拓本	備考欄	開敷図
銭1	1	A地区	K16	183号墓	洪武通寶	明1368年	裏面文字は「一錢」か?		第52図
銭2	2	A地区	L15	262号墓	永樂通寶	明1406年	縁刃部破損。		
銭3	3	A地区	N15	80号墓	□口通寶?	—	縁刃部一部破損。		
銭4	4	A地区	N16	92号墓	天祐通寶	北宋1017年	破損あり。		第52図
銭5	5	A地区	N16	80号墓	熙寧五X76毫	熙寧元寶	北宋1068年	縁辺部破損少々	
銭6	6	A地区	M15	82号墓	開元通寶?	(唐 621年)	約4分欠損。南宋1259年の開慶通宝より開通元寶(開元通寶)の可能性がある。		
銭7	7	A地区	P27	現道跡	政和通寶	北宋1111年	文字部分一部剥離		
銭8	8	A地区	N16	92号墓東下	景祐元寶?	南宋1260年	不可 磨耗著しい		
銭9	9	A地区	O15	東側斜面	元祐通寶	北宋1086年	縁刃部若干欠損		第52図
銭10	10	A地区	L15	5 K481	嘉祐元寶?	北宋1056年	S K481は146号墓と平面上には重複。		第52図
銭11	11	A地区	L16	182号墓盛土内	大觀通寶?	北宋1107年	約半分欠損		
銭12	12	A地区	L16	182号墓盛土内	大觀通寶	北宋1107年			
銭13	13	A地区	L16	182号墓盛土内	大觀通寶	北宋1107年			第52図
銭14	14	A地区	L16	182号墓盛土内	大觀通寶	北宋1107年	文字辨識、約4割欠損		
銭15	欠番	A地区	M16	184号墓X7	判読不能	—	不可 小破片。骨片・山茶碗小破片。		
銭16	1	B地区	N30	S K262南外	聖宋通寶?	北宋1018年	銭(1)と培解付着		第52図
銭17	2	B地区	N30	S K262南外	元豐通寶?	北宋1078年	銭(1)と培解付着		第52図
銭18	3	B地区	N30	S K262南外	□口通寶	(?)	元祐通寶か? 磨耗著しい。		
銭19	4	B地区	N30	S K262南外	治平元寶	北宋1064年			第52図
銭20	5	B地区	N30	S K262北東外	判読不能	—	不可 銭(2)と培解付着		
銭21	6	B地区	N30	S K262北東外	判読不能	—	不可 銭(2)と培解付着		
銭22	193	B地区	M29	46号墓墳頂部	熙寧元寶	北宋1068年	篆書体「墳丘B・五輪塔出		
銭23	7	B地区	M29	5 K610 大門内	熙寧元寶	北宋1068年	篆書体「墳丘B・五輪塔出」		
銭24	8	B地区	P35	S K682の南	元豐通寶?	北宋1078年			
銭25	9	B地区	P35	S K682の南	官德通寶	明1426～1533年			第52図
銭26	10	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年	銭(2)と培解付着		
銭27	11	B地区	P35	S K682の南	皇宋通寶?	北宋1039年	銭(2)と培解付着		
銭28	12	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年	銭(2)と培解付着		
銭29	13	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年	銭(2)と培解付着		
銭30	14	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年	銭(3)と培解付着		
銭31	15	B地区	P35	S K682の南	判読不能	—	不可 銭(3)と培解付着		
銭32	16	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年	銭(3)と培解付着		
銭33	17	B地区	P35	S K682の南	判読不能	—	不可 銭(3)と培解付着		
銭34	18	B地区	P35	S K682の南	祥符通寶?	北宋1009年	磨耗著しい		
銭35	19	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年			
銭36	20	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年			
銭37	21	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年			
銭38	22	B地区	P35	S K682の南	永業通寶	明1408年			
銭39	23	B地区	P35	S K682の南	□口通寶?	(?)	剝離欠損、磨耗著しい		
銭40	24	B地区	P35	S K682の南	熙寧元寶?	(北宋1068年?)	培解付着		
銭41	25	B地区	Q38	S K733	永業通寶	明1408年			
銭42	26	B地区	Q38	S K733	開通元寶(開元通寶)	唐621年	一般には開通元寶といった(窪野善氏)。		
銭43	27	B地区	Q38	S K733	永業通寶	明1408年			
銭44	28	B地区	Q38	S K733	元豐通寶?	北宋1078年	銭(45)と付着磨耗著しい		
銭45	29	B地区	Q38	S K733	□口通寶?	—			
銭46	30	B地区	Q38	S K733	判読不能	—	不可 磨耗著しい		
銭47	31	B地区	Q38	S K733	元祐通寶?	(?)	磨耗著しい		
銭48	32	B地区	Q38	S K727	永業通寶	明1408年			
銭49	33	B地区	Q38	S K727	永業通寶	明1408年			
銭50	34	B地区	Q38	S K727	皇宋通寶	北宋1039年			第52図
銭51	35	B地区	Q38	S K727	元祐通寶?	(?)	磨耗著しい		
銭52	36	B地区	Q38	S K731	永業通寶	明1408年			
銭53	37	B地区	Q38	S K723	洪武通寶	明1368年			
銭54	38	B地区	Q38	S K723	熙寧□寶?	(?)	歪曲・1/4次損		
銭55	39	B地区	P35	S K682	熙寧元寶	北宋1068年			
銭56	40	B地区	P35	S K682	皇宋通寶	北宋1039年			
銭57	41	B地区	P35	S K682	至和元寶	北宋1054～55年			第52図
銭58	42	B地区	P35	S K682	永業通寶	明1408年	銭(59)と培解付着・磨耗著しい。		

第 22 表 出土銭貨観察表 (第 52 図)

報告番号	採取番号	発掘区	地区名	出土遺物等	銭貨名称	初鋳造年	拓本	備考欄	開敷図
銭59	43	B地区 P 35		S K 682	皇宋通寶	北宋1039年			
銭60	44	B地区 P 39		S K 736	皇宋通寶	北宋1039年			第52回
銭61	45	B地区 P 33		S K 662	景德元寶	北宋1004年	磨耗著しい		
銭62	46	B地区 P 33		S K 662	判読不能	—	不可(銭61)と熔解付着		
銭63	172	B地区 P 33		S K 662	判読不能	—	不可(銭63)と熔解付着		
銭64	47	B地区 Q 40		S K 762	永業通寶	明1408年	銭(5～67)と熔解付着		第52回
銭65	48	B地区 Q 40		S K 762	判読不能	—	不可(銭64、66、67)と熔解付着		
銭66	49	B地区 Q 40		S K 762	判読不能	—	不可(銭64、65、67)と付着		
銭67	50	B地区 Q 40		S K 762	判読不能	—	不可(銭64、65、66)と熔解付着		
銭68	51	B地区 P 39		S K 737	景德元寶	北宋1004年	銭(69)と熔解付着		第52回
銭69	52	B地区 P 39		S K 737	利誂不能	—	不可(銭68)と熔解付着		
銭70	53	B地区 P 39		S K 737	昭聖元寶?	北宋1094年	銭(71)と熔解付着		
銭71	54	B地区 P 39		S K 737	利誂不能	—	不可(銭70)と熔解付着		
銭72	55	B地区 P 39		S K 737	熙寧元寶?	北宋1068年	銭(73)と熔解付着		
銭73	56	B地区 P 39		S K 737	利誂不能	—	不可(銭72)と熔解付着		
銭74	57	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭75	58	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭76	59	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭77	60	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭78	61	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭79	62	B地区 R 40		S K 766	洪武通寶	明1368年			第52回
銭80	63	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭81	63	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年	約8割欠損		
銭82	64	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年	銭(83)と熔解付着		
銭83	65	B地区 R 40		S K 766	利誂不能	—	不可(銭82)と熔解付着		
銭84	66	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭85	67	B地区 R 40		S K 766	永業通寶	明1408年			
銭86	69	B地区 Q 40		S K 749	元豐通寶	北宋1078年			
銭87	70	B地区 Q 40		S K 749	永業通寶	明1408年			
銭88	153	B地区 Q 40		S K 749	永業通寶	明1408年	半纏 銭(88～91)と熔解付着		
銭89	154	B地区 Q 40		S K 749	利誂不能	—	不可(銭88～91)と熔解付着		
銭90	155	B地区 Q 40		S K 749	判読不能	—	不可(銭88～91)と熔解付着		
銭91	156	B地区 Q 40		S K 749	利誂不能	—	不可(銭88～91)と熔解付着		
銭92	157	B地区 Q 40		S K 749	永業通寶	明1408年			
銭93	158	B地区 Q 40		S K 749	元豐通寶	北宋1078年			
銭94	159	B地区 Q 40		S K 749	永業通寶	明1408年			
銭95	160	B地区 Q 40		S K 749	洪武通寶	明1368年			
銭96	161	B地区 Q 40		S K 749	天聖元寶?	北宋1023年			
銭97	162	B地区 Q 40		S K 749	永業通寶	明1408年			
銭98	163	B地区 Q 40		S K 749	□□元寶?	—			
銭99	164	B地区 Q 40		S K 749	元□通寶?	(?)	元和通寶の兼書体か		
銭100	165	B地区 Q 40		S K 749	聖和通寶	北宋1054～55年			第52回
銭101	166	B地区 Q 40		S K 749	利誂不能	—	不可(銭102)と熔解付着		
銭102	167	B地区 Q 40		S K 749	判読不能	—	不可(銭101)と熔解付着		
銭103	欠番	B地区 Q 40		S K 749	□元?	—	不可(約8割熔解欠損。不可)		
銭104	71	B地区 Q 39	東側	S K 751	聖和通寶	北宋1054～55年			
銭105	72	B地区 Q 39		S K 742	永業通寶	明1408年			
銭106	73	B地区 Q 39		S K 742	永業通寶	明1408年	約1/2欠損		
銭107	74	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年			
銭108	75	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年			
銭109	76	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年			
銭110	77	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年			第52回
銭111	78	B地区 P 37		S K 706	天聖元寶	北宋1023年	銭(112)と熔解付着		第52回
銭112	79	B地区 P 37		S K 706	利誂不能	—	不可(銭111)と熔解付着		
銭113	80	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年	銭(114)と熔解付着		
銭114	81	B地区 P 37		S K 706	利誂不能	—	不可(銭113)と熔解付着		
銭115	82	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年	銭(116)と熔解付着 表面摩滅		
銭116	83	B地区 P 37		S K 706	利誂不能	—	不可(銭115)と熔解付着		
銭117	84	B地区 P 37		S K 706	永業通寶	明1408年			

第22表 出土銭貨観察表（第52回）

報告番号	採取番号	貝塚区	地区名	出土遺構等	銭貨名称	初耕年	拓本	備考欄	測量図
魏118	85	B地区	P37	S K706	判読不能	—	不可	磨耗著しい	
魏119	86	B地区	P37	S K707	天聖元寶	北宋1023年		魏(120)と培解付着	
魏120	87	B地区	P37	S K707	天(龍)通寶	北宋1017年		魏(119)と培解付着 天祐通寶か	
魏121	88	B地区	P37	S K707	元祐通寶?	(?)		磨耗著しい元祐通寶か	
魏122	91	B地区	P37	S K707	熙寧元寶	北宋1068年		磨耗著しい、魏(123)と付着	
魏123	92	B地区	P37	S K707	皇宋通寶	北宋1039年		魏(122)と付着	
魏124	欠番	B地区	P37	S K707付口内	永樂通寶	明1408年		約半分欠損、破片	
魏125	欠番	B地区	P37	S K707付口内	開元通寶 (開元通寶)	唐621年		「開元通寶」とも、磨耗著しい	
魏126	89	B地区		土中深埋	判読不能	—	不可	磨耗著しい	
魏127	92	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	魏(128)～132)培解付着	
魏128	93	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	培解付着	
魏129	94	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	培解付着	
魏130	95	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	培解付着	
魏131	96	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	培解付着 約半分欠損	
魏132	97	B地区	P38	S K725	判読不能	—	不可	培解付着	
魏133	98	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁一部磨耗	
魏134	99	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(133)と培解混着	
魏135	100	B地区	Q39	S K743	政和通寶	北宋1111年		兼書体。磨耗著しい、縁辺部欠損	
魏136	101	B地区	Q39	S K743	政和通寶	北宋1111年		磨耗著しい。縁辺部欠損	
魏137	102	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁辺部摩滅	
魏138	103	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁辺部摩滅	
魏139	104	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		約2割欠損	
魏140	141	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(141)と培解付着	
魏141	142	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(140)と培解付着	
魏142	143	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
魏143	144	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
魏144	145	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
魏145	146	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(144・146・147)と培解付着	
魏146	147	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(144・145・147)と培解付着	
魏147	148	B地区	Q39	S K743	判読不能	—	不可	魏(144・145・146)と培解付着	
魏148	149	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		培解歪曲?～8割欠損	
魏149	150	B地区	Q39	S K743	永業通寶	明1408年		培解歪曲?～8割欠損	
魏150	欠番	B地区	Q39	S K743	熙寧元寶 (熙寧元寶)	北宋1068年		約8割欠損	
魏151	欠番	B地区	Q39	S K743	開元通寶 (開元通寶)	唐621年		約3～4割欠損	
魏152	105	B地区	Q39	S K751	祥符通寶	北宋1009年			第52回
魏153	106	B地区	Q39	S K751	淳化元寶	北宋990年		魏(154)と培解付着	第52回
魏154	107	B地区	Q39	S K751	□□口寶	—		魏(153)と培解付着	
魏155	108	B地区	Q39	S K751	判読不能	—	不可		
魏156	109	B地区	Q39	S K751	判読不能	—	不可	約半分欠失	
魏157	140	B地区	Q39	S K751	永業通寶	明1408年		約半分欠失	
魏158	152	B地区	Q39	S K751	永業通寶	明1408年		微食一部破損	
魏159	178	B地区	Q39	S K751付口内	永業通寶	明1408年		約3割欠損	
魏160	90	B地区	Q39	S K744	永業通寶	明1408年		縁辺部破損	写真第126回
魏161	111	B地区	Q39	S K744	熙寧元寶?	北宋1068年		磨耗著しい	写真第126回
魏162	112	B地区	Q39	S K744	紹聖元寶?	北宋1094年		磨耗著しい	写真第126回
魏163	113	B地区	Q39	S K744	皇宋通寶?	北宋1039年		磨耗著しい	写真第126回
魏164	114	B地区	Q39	S K744	紹聖元寶	北宋1094年			第52回
魏165	115	B地区	Q39	S K744	聖宋元寶	北宋1101年			
魏166	116	B地区	Q39	S K744	祥符元寶	北宋1008年			
魏167	117	B地区	Q39	S K744	元豐通寶	北宋1078年			
魏168	118	B地区	Q39	S K744	聖正通寶	元1341年			
魏169	119	B地区	Q39	S K744	永業通寶	明1408年			写真第126回
魏170	120	B地区	Q39	S K744	永業通寶	明1408年			写真第126回
魏171	121	B地区	Q39	S K744	紹聖元寶?	(?)		磨耗著しい	写真第126回
魏172	122	B地区	Q39	S K744	判読不能	—	不可	魏(173)と培解付着	写真第126回
魏173	123	B地区	Q39	S K744	判読不能	—	不可	魏(172)と培解付着	写真第126回
魏174	124	B地区	Q39	S K744	永業通寶	明1408年			写真第126回
魏175	125	B地区	Q39	S K744	永業通寶	明1408年			写真第126回

第22表 出土銭貨觀察表（第52回）

報告番号	採取番号	発掘区	地区名	出土遺物等	銭貨名称	初鑄造年	拓本	備考欄	開敷図
魏176	126	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年			写真第12回
魏177	127	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年			写真第12回
魏178	128	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年			写真第12回
魏179	129	B地区Q39		S K744	聖宋通寶?	北宋1039年		磨耗著しい	写真第12回
魏180	130	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年		「永」字の便に從1mmの穿孔あり	写真第12回
魏181	131	B地区Q39		S K744	聖和元寶?	北宋1054~55年		磨耗著しい	写真第12回
魏182	132	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年			写真第12回
魏183	133	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年			写真第12回
魏184	134	B地区Q39		S K744	永楽通寶	明1408年		縁辺部破損	写真第12回
魏185	135	B地区Q40		S K747	永楽通寶	明1408年			
魏186	136	B地区Q40		S K747	永楽通寶	明1408年			
魏187	139	B地区Q40		S K747	天祐通寶	北宋1017年			
魏188	欠番	B地区Q40		S K747	熙寧通寶	北宋1068年			
魏189	欠番	B地区Q40		S K747	判読不能	—	不可		
魏190	151	B地区Q39		S K748	永楽通寶	明1408年		約3割欠損	
魏191	179	B地区Q39		S K748付12	永楽通寶	明1408年		縁辺部欠損	
魏192	168	B地区Q40		S K764の北側	永楽通寶	明1408年		磨耗著しい、一部欠損。	
魏193	169	B地区Q40		S K764の北側	永楽通寶	明1408年		文字不明瞭、魏194と付着。	
魏194	170	B地区Q40		S K764の北側	判読不能	—	不可	魏193と熔解付着	
魏195	171	B地区不詳		撲士中空取	永楽通寶	明1408年		約3割欠損	
魏196	173	B地区R39		S K755	永楽通寶	明1408年		文字不明瞭	
魏197	178	B地区P37		S K704付11)内	元豐通寶	北宋1078年		縁辺部少々欠損	
魏198	179	B地区P37		S K704付11)内	□元)通寶	(?)		約3割欠損	
魏199	180	B地区P35		S K681	永楽通寶	明1408年		熔解付着	
魏200	181	B地区P35		S K681	咸平通寶	北宋998年		熔解付着	第52回
魏201	182	B地区Q40		S K763	永楽通寶	明1408年		濃度良好	
魏202	183	B地区Q40		S K763	永楽通寶	明1408年		濃度良好	
魏203	184	B地区Q40		S K763	永楽通寶	明1408年		濃度良好	
魏204	185	B地区Q40		S K763	永楽通寶	明1408年		約4割欠損	
魏205	186	B地区Q40		S K763	永楽通寶	明1408年		約9割欠損	
魏206	187	B地区Q40		S K763	嘉祐通寶?	北宋1056年		磨耗著しい	
魏207	187	B地区Q39		S K752	永楽通寶	明1408年		縁辺一部欠損	
魏208	188	B地区N30		S K623	□宋)通寶	(?)		魏209と熔解付着	磨耗著しい
魏209	189	B地区N30		S K623	判読不能	—	不可	魏208と熔解付着	
魏210	190	B地区N30		S K624	判読不能	—	不可	熔解付着	
魏211	191	B地区N30		S K624	判読不能	—	不可	熔解付着	
魏212	192	B地区N30		S K624	判読不能	—	不可	熔解付着	
魏213	欠番	B地区Q36		S K699	聖宋通寶?	北宋1039年		磨耗著しい	
魏214	欠番	B地区Q36		S K699	永楽通寶	明1408年		文字不明瞭	
魏215	欠番	B地区Q36		S K699	元豐通寶	北宋1078年		文字摩滅、付着	
魏216	欠番	B地区Q36		S K699	利説不能	—	不可	熔解付着	
魏217	欠番	B地区	不硝土塙	紹定通寶	南宋1228年				第52回
魏218	欠番	B地区	不硝土塙	太平通寶	北宋976年				第52回
魏219	欠番	B地区	不硝土塙	元豐通寶?	北宋1078年				
魏220	欠番	B地区	不硝土塙	熙寧通寶?	北宋1068年			磨耗著しい	
魏221	欠番	B地区	不硝土塙	利説不能	—	不可	熔解付着		
魏222	欠番	B地区	不硝土塙	利説不能	—	不可	熔解付着		
魏223	欠番	B地区	不硝土塙	利説不能	—	不可	熔解付着		
魏224	200	C地区Q42		S K804	元符通寶	北宋1098年		篆書体	第52回
魏225	201	C地区Q42		S K804	元符通寶	北宋1098年		篆書体(模造錢ではないか?)	
魏226	202	C地区Q42		S K804	皇宋通寶	北宋1039年		文字流れあり	
魏227	207	C地区Q42		S K804	元豐通寶	北宋1078年		約3割欠失。(元豐通寶か)	
魏228	243	C地区Q42		S K804	利説不能	—	不可	約8割欠失、碎片・磨耗著しい	
魏229	203	C地区Q42		S K807	永楽通寶	明1408年			
魏230	204	C地区Q42		S K807	嘉祐通寶	北宋1034年			
魏231	205	C地区Q43		S K807	利説不能	—	不可	「□元)通寶」か?	
魏232	206	C地区Q43		S K807	永楽通寶	明1408年			
魏233	218	C地区Q43		S K807	永楽通寶	明1408年			
魏234	219	C地区Q43		S K807	永楽通寶	明1408年			

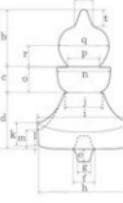
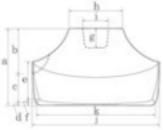
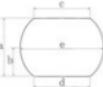
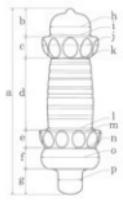
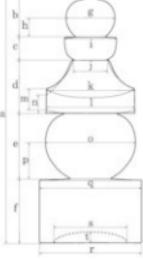
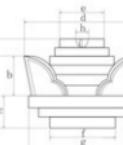
第22表 出土銭貨觀察表(第52回)

報告番号	採取番号	発掘区	地区名	出土遺構等	銭貨名称	初鑄年	拓本	備考欄	開敷図
銭235	220	C地区	Q43	S K 807	召和通寶	北宋1111年			第52回
銭236	228	C地区	Q43	S K 807	天聖元寶	北宋1023年			
銭237	208	C地区	Q41	S K 783	永業通寶	明1408年			
銭238	209	C地区	Q41	S K 783	永業通寶	明1408年	(模造銭ではないか?)		
銭239	210	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭240	211	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭241	212	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭242	213	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭243	214	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭244	215	C地区	Q42	S K 808	判読不能	—	不可	銭(239～244) 6枚培解付着	
銭245	216	C地区	Q41	S K 791	判読不能	—	不可	約5割欠失	
銭246	236	C地区	Q41	S K 791	永業通寶	明1408年	割れ、一部欠失		
銭247	217	C地区	Q41	S K 784	熙寧元寶	北宋1068年			第52回
銭248	221	C地区	Q44	S K 831	熙寧元寶	北宋1068年			
銭249	222	C地区	Q44	S K 831	元豐通寶	北宋1078年			
銭250	223	C地区	Q44	S K 831	紹聖元寶	北宋1094年	裏書体		
銭251	224	C地区	Q44	S K 831	紹聖元寶	北宋1094年	裏書体		
銭252	225	C地区	Q44	S K 831	皇宋通寶	北宋1039年			
銭253	226	C地区	Q44	S K 831	祥符元寶	北宋1008年			第52回
銭254	227	C地区	Q43	S K 818～822	永業通寶	明1408年	約5割欠失		
銭255	229	C地区	Q48	S K 853	判読不能	—	不可	銭(256)と培解露着 約3割欠	
銭256	230	C地区	Q48	S K 853	判読不能	—	不可	銭(255)と培解露着 約3割欠	
銭257	231	C地区	Q41	S K 790	判読不能	—	不可	銭(257～260) 4枚培解付着	
銭258	232	C地区	Q41	S K 790	判読不能	—	不可	銭(257～260) 4枚培解付着	
銭259	233	C地区	Q41	S K 790	判読不能	—	不可	銭(257～260) 4枚培解付着	
銭260	234	C地区	Q41	S K 790	判読不能	—	不可	銭(257～260) 4枚培解付着	
銭261	235	C地区	Q43	S K 829	判読不能	—	不可	約5割欠失	
銭262	237	C地区	Q41	不明	熙寧元寶	北宋1068年	磨耗著しい		
銭263	238	C地区	Q41	S K 835	廣通元寶 (闊元通寶)	唐621年	縁辺一部欠損		第52回
銭264	239	C地区	Q41	S K 835	永業通寶	明1408年			
銭265	240	C地区	Q41	S K 835	治平元寶	北宋1064年	約6割欠失、文字配列から判読		
銭266	241	C地区	Q41	S K 835	元祐通寶	北宋1086年	約8割欠失、元の字形から推測		
銭267	242	C地区	Q41	S K 834	元豐通寶	北宋1078年			
銭268	244	C地区	Q43	表土・層	永業通寶	明1408年	加熱による赤み		
銭269	245	C地区	Q42	S K 818	永業通寶	明1408年	銭(270)と培解付着		
銭270	246	C地区	Q42	S K 818	永業通寶	明1408年	銭(269)と培解付着		
銭271	247	C地区	Q42	S K 818	永業通寶	明1408年	約1割欠失		
銭272	248	C地区	Q42	S K 818	元祐通寶	北宋1086年	銭(273)と培解付着		
銭273	249	C地区	Q42	S K 818	天聖元寶	北宋1023年	銭(272)と培解付着		
銭274	250	C地区	Q42	S K 818	洪武通寶	明1368年			
銭275	251	C地区	Q42	S K 818	判読不能	—	不可	銭(276)と培解付着	
銭276	252	C地区	Q42	S K 818	判読不能	—	不可	銭(275)と培解付着	
銭277	253	C地区	Q42	S K 818	判読不能	—	不可	銭(276)と培解付着	
銭278	254	C地区	Q42	S K 818	判読不能	—	不可	銭(275)と培解付着	
銭279	265	C地区	Q43	S K 818	熙寧元寶	北宋1068年	割れ、一部欠		
銭280	266	C地区	Q43	S K 818	元符通寶	北宋1098年	割れ、約2割欠		
銭281	267	C地区	Q43	S K 818	判読不能	—	不可	破片、磨耗著しい	
銭282	255	C地区	Q41	淡黃褐色土	永業通寶	明1408年	割れ、約2割欠失		
銭283	256	C地区	N41	淡黃褐色土	永業通寶	明1408年	約5割欠失		
銭284	257	C地区	Q44	S K 833	聖和通寶	北宋1054～55年	銭(285)と培解付着、一部欠		
銭285	258	C地区	Q44	S K 833	祥符元寶	北宋1008年	銭(284)と培解付着		
銭286	259	C地区	Q43	S K 826	熙寧元寶?	宋1068年	銭(287)と培解付着		
銭287	260	C地区	Q43	S K 826	判読不能	—	不可	銭(286)と培解付着	
銭288	261	C地区	Q43	S K 826	永業通寶	明1408年			
銭289	262	C地区	Q43	S K 826	熙寧元寶?	北宋1068年			
銭290	263	C地区	Q43	S K 826	永業通寶	明1408年			
銭291	264	C地区	Q43	S K 826	嘉祐元寶	北宋1034年			第52回

注意：銭貨名稱で判読できないものは「?」印を以て示した。全く判読出来ないものは「判読不能」とした。拓本の全てを既故に掲載したわけではないことをお詫びして貰ってください。

第22表 出土銭貨觀察表（第52回）

石塔凡例

空風輪  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>g 風輪上部径</td> </tr> <tr> <td>b 空輪高</td> <td>h 風輪最大径</td> </tr> <tr> <td>c 風輪高+柄長</td> <td>i 風輪底部径</td> </tr> <tr> <td>d 柄部高</td> <td>j 柄部径</td> </tr> <tr> <td>e 風輪高+柄部高</td> <td>k 柄長</td> </tr> <tr> <td>f 空輪最大径</td> <td></td> </tr> </table>	a 全高	g 風輪上部径	b 空輪高	h 風輪最大径	c 風輪高+柄長	i 風輪底部径	d 柄部高	j 柄部径	e 風輪高+柄部高	k 柄長	f 空輪最大径		空風火輪三輪一石  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>k 火輪軸厚隅部</td> </tr> <tr> <td>b 空輪高</td> <td>l 火輪軸部隅反り</td> </tr> <tr> <td>c 風輪高</td> <td>m 火輪軸厚中央</td> </tr> <tr> <td>d 火輪高</td> <td>n 火輪最大径</td> </tr> <tr> <td>e 火輪納(穴)高</td> <td>o 火輪高-頸部高</td> </tr> <tr> <td>f 火輪納(穴)最大径</td> <td>p 火輪上部径</td> </tr> <tr> <td>g 火輪納(穴)最小径</td> <td>q 空輪最大径</td> </tr> <tr> <td>h 火輪軸下端径</td> <td>r 空輪最大径位</td> </tr> <tr> <td>i 火輪軸上端径</td> <td>s 空輪起部最大径</td> </tr> <tr> <td>j 火輪上部径</td> <td>t 空輪起部高</td> </tr> </table>	a 全高	k 火輪軸厚隅部	b 空輪高	l 火輪軸部隅反り	c 風輪高	m 火輪軸厚中央	d 火輪高	n 火輪最大径	e 火輪納(穴)高	o 火輪高-頸部高	f 火輪納(穴)最大径	p 火輪上部径	g 火輪納(穴)最小径	q 空輪最大径	h 火輪軸下端径	r 空輪最大径位	i 火輪軸上端径	s 空輪起部最大径	j 火輪上部径	t 空輪起部高
a 全高	g 風輪上部径																																
b 空輪高	h 風輪最大径																																
c 風輪高+柄長	i 風輪底部径																																
d 柄部高	j 柄部径																																
e 風輪高+柄部高	k 柄長																																
f 空輪最大径																																	
a 全高	k 火輪軸厚隅部																																
b 空輪高	l 火輪軸部隅反り																																
c 風輪高	m 火輪軸厚中央																																
d 火輪高	n 火輪最大径																																
e 火輪納(穴)高	o 火輪高-頸部高																																
f 火輪納(穴)最大径	p 火輪上部径																																
g 火輪納(穴)最小径	q 空輪最大径																																
h 火輪軸下端径	r 空輪最大径位																																
i 火輪軸上端径	s 空輪起部最大径																																
j 火輪上部径	t 空輪起部高																																
火輪  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>g 挿穴深さ</td> </tr> <tr> <td>b 全高-軸厚中央</td> <td>h 笠上部幅</td> </tr> <tr> <td>c 軸厚中央</td> <td>i 挿穴上部径</td> </tr> <tr> <td>d 軸厚中央反り</td> <td>j 軸部上端径</td> </tr> <tr> <td>e 軸厚隅部</td> <td>k 軸部下端径</td> </tr> <tr> <td>f 軸部隅反り</td> <td></td> </tr> </table>	a 全高	g 挿穴深さ	b 全高-軸厚中央	h 笠上部幅	c 軸厚中央	i 挿穴上部径	d 軸厚中央反り	j 軸部上端径	e 軸厚隅部	k 軸部下端径	f 軸部隅反り		水地二輪一石  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>i 水輪下部径</td> </tr> <tr> <td>b 地輪高</td> <td>j 水輪最大径位</td> </tr> <tr> <td>c 水輪高</td> <td>k 水輪角部高</td> </tr> <tr> <td>d 水輪納高</td> <td>l 地輪上部径</td> </tr> <tr> <td>e 水輪納(穴)最大径</td> <td>m 地輪下部径</td> </tr> <tr> <td>f 水輪納(穴)最小径</td> <td>n 挿り穴最大径</td> </tr> <tr> <td>g 水輪上部径</td> <td>o 挿り穴深さ</td> </tr> <tr> <td>h 水輪最大径</td> <td></td> </tr> </table>	a 全高	i 水輪下部径	b 地輪高	j 水輪最大径位	c 水輪高	k 水輪角部高	d 水輪納高	l 地輪上部径	e 水輪納(穴)最大径	m 地輪下部径	f 水輪納(穴)最小径	n 挿り穴最大径	g 水輪上部径	o 挿り穴深さ	h 水輪最大径					
a 全高	g 挿穴深さ																																
b 全高-軸厚中央	h 笠上部幅																																
c 軸厚中央	i 挿穴上部径																																
d 軸厚中央反り	j 軸部上端径																																
e 軸厚隅部	k 軸部下端径																																
f 軸部隅反り																																	
a 全高	i 水輪下部径																																
b 地輪高	j 水輪最大径位																																
c 水輪高	k 水輪角部高																																
d 水輪納高	l 地輪上部径																																
e 水輪納(穴)最大径	m 地輪下部径																																
f 水輪納(穴)最小径	n 挿り穴最大径																																
g 水輪上部径	o 挿り穴深さ																																
h 水輪最大径																																	
水輪  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>d 下部径</td> </tr> <tr> <td>b 最大径位</td> <td>e 最大径</td> </tr> <tr> <td>c 上部径</td> <td></td> </tr> </table>	a 全高	d 下部径	b 最大径位	e 最大径	c 上部径		相輪  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>i 宝珠下部径</td> </tr> <tr> <td>b 宝珠高</td> <td>j 上諸花最大径</td> </tr> <tr> <td>c 上諸花</td> <td>k 九輪上部径</td> </tr> <tr> <td>d 九輪高</td> <td>l 九輪下部径</td> </tr> <tr> <td>e 下諸花高</td> <td>m 下諸花最大径</td> </tr> <tr> <td>f 伏鉢高</td> <td>n 伏鉢上部径</td> </tr> <tr> <td>g 柄長</td> <td>o 伏鉢最大径</td> </tr> <tr> <td>h 宝珠最大径</td> <td>p 柄部径</td> </tr> </table>	a 全高	i 宝珠下部径	b 宝珠高	j 上諸花最大径	c 上諸花	k 九輪上部径	d 九輪高	l 九輪下部径	e 下諸花高	m 下諸花最大径	f 伏鉢高	n 伏鉢上部径	g 柄長	o 伏鉢最大径	h 宝珠最大径	p 柄部径										
a 全高	d 下部径																																
b 最大径位	e 最大径																																
c 上部径																																	
a 全高	i 宝珠下部径																																
b 宝珠高	j 上諸花最大径																																
c 上諸花	k 九輪上部径																																
d 九輪高	l 九輪下部径																																
e 下諸花高	m 下諸花最大径																																
f 伏鉢高	n 伏鉢上部径																																
g 柄長	o 伏鉢最大径																																
h 宝珠最大径	p 柄部径																																
一石五輪塔  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>k 火輪軸上端径</td> </tr> <tr> <td>b 空輪高</td> <td>l 火輪軸下端径</td> </tr> <tr> <td>c 風輪高</td> <td>m 火輪軸厚隅部</td> </tr> <tr> <td>d 大輪高</td> <td>n 火輪軸厚中央</td> </tr> <tr> <td>e 水輪高</td> <td>o 水輪最大径</td> </tr> <tr> <td>f 地輪高</td> <td>p 水輪最大径位</td> </tr> <tr> <td>g 空輪最大径</td> <td>q 地輪上部径</td> </tr> <tr> <td>h 空輪最大径位</td> <td>r 地輪下部径</td> </tr> <tr> <td>i 風輪最大径</td> <td>s 挿り穴最大径</td> </tr> <tr> <td>j 大輪上部径</td> <td>t 挿り穴深さ</td> </tr> </table>	a 全高	k 火輪軸上端径	b 空輪高	l 火輪軸下端径	c 風輪高	m 火輪軸厚隅部	d 大輪高	n 火輪軸厚中央	e 水輪高	o 水輪最大径	f 地輪高	p 水輪最大径位	g 空輪最大径	q 地輪上部径	h 空輪最大径位	r 地輪下部径	i 風輪最大径	s 挿り穴最大径	j 大輪上部径	t 挿り穴深さ	笠  <table border="0"> <tr> <td>a 全高</td> <td>f 下段形下部幅</td> </tr> <tr> <td>b 罂胎り高</td> <td>g 軸下幅</td> </tr> <tr> <td>c 軸厚+下段形高</td> <td>h 柄上部径</td> </tr> <tr> <td>d 罂胎り先端間の幅</td> <td>i 挿穴深さ</td> </tr> <tr> <td>e 上段形上面幅</td> <td></td> </tr> </table>	a 全高	f 下段形下部幅	b 罂胎り高	g 軸下幅	c 軸厚+下段形高	h 柄上部径	d 罂胎り先端間の幅	i 挿穴深さ	e 上段形上面幅			
a 全高	k 火輪軸上端径																																
b 空輪高	l 火輪軸下端径																																
c 風輪高	m 火輪軸厚隅部																																
d 大輪高	n 火輪軸厚中央																																
e 水輪高	o 水輪最大径																																
f 地輪高	p 水輪最大径位																																
g 空輪最大径	q 地輪上部径																																
h 空輪最大径位	r 地輪下部径																																
i 風輪最大径	s 挿り穴最大径																																
j 大輪上部径	t 挿り穴深さ																																
a 全高	f 下段形下部幅																																
b 罂胎り高	g 軸下幅																																
c 軸厚+下段形高	h 柄上部径																																
d 罂胎り先端間の幅	i 挿穴深さ																																
e 上段形上面幅																																	

第23表 石塔計測部位凡例

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位置法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A 0001	21	空輪	L13	—	(13.7)	—	—	—	13.3	10.4	—	—	—	表探、砂岩、空輪突起欠・風輪以下欠失。	
			L16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨耗顯著計測不可、空輪突起部も。	
A 0002	104	空輪	196号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	先端部のみ、欠損顯著、計測不可。	
A 0003	139	空輪	K21 365号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破片、底方向に半載。	
A 0004	150	空輪	L16 196号墓	—	(11.2)	—	—	—	(10.2)	—	—	—	—	—	
A 0005	348	空(?)	N15 76号墓	—	(11.8)	—	—	—	(10.0)	—	—	—	—	圓錐頭器。	
A 0006	467	空輪	M24	—	12.4	—	—	—	12.8	8.8	—	—	—	空輪を一石造、A 0004風輪とセットか、第53回	
A 0007	472	空輪	M24 423号墓	—	(9.0)	—	—	—	(10.9)	(8.1)	—	—	—	—	
A 0008	678	空輪	P13 67号墓	—	10.2	—	—	—	14.5	12.4	—	—	—	梵字入、連結突起、第53回	
A 0009	722	空輪	P11	—	(12.6)	—	—	—	(10.0)	(8.1)	—	—	—	縫隙横4分の1残。	
A 0010	722	空輪	P11	—	(10.4)	—	—	—	(10.0)	(5.3)	—	—	—	底方向に半載。	
A 0011	104	風輪	L16 196号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨耗顯著、実測不可、第53回	
A 0012	150	風輪	L16 196号墓	—	(9.8)	—	—	—	(10.5)	—	—	—	—	破片、底方向に半載。	
A 0013	369	風輪	K14 149号墓	—	—	4.1	—	—	—	—	9.0	7.3	—	—	
A 0014	461	風輪	M24	—	—	12.2	—	8.1	—	—	14.7	10.7	6.3	4.1 風輪一石造、A 0006空輪とセットか、第53回	
A 0015	471	風輪	M24	—	—	(8.5)	(0.7)	(5.9)	—	(7.7)	(0.9)	(7.0)	(5.2)	(1.9)	—
A 0016	5	空開輪	I14	(17.8)	(8.4)	9.4	0.9	6.7	11.2	8.2	12.3	8.6	5.2	2.6 表探、第53回	
A 0017	11	空開輪	J14	(20.1)	(9.1)	11.0	0.2	6.8	11.4	10.3	13.5	8.6	5.5	4.0 表探、	
A 0018	13	空開輪	J20	(21.7)	(10.7)	(11.0)	1.6	8.0	12.4	9.9	13.6	8.6	6.0	(1.4) 表探、突起欠、花崗岩緑縫、第53回	
A 0019	18	空開輪	J15	(15.5)	(8.0)	(8.6)	1.2	7.4	11.2	8.4	12.0	8.8	—	— 表探、風輪下部の連結突起欠損。	
A 0020	35	(空)風輪	M24	(9.3)	(2.6)	(6.8)	0.9	5.9	—	(8.5)	11.7	7.5	—	— 表探、空輪欠、風輪小欠。	
A 0021	38	空開輪	L16	(18.6)	(11.4)	(7.2)	(0.5)	(6.7)	(13.9)	(11.7)	(12.3)	(10.0)	—	— 半壞、突起欠。	
A 0022	42	空開輪	N16	19.5	9.8	9.7	0.5	5.8	11.3	9.6	12.9	8.1	5.2	3.4 斜面表探。	
A 0023	45	空開輪	L16	(12.9)	(5.5)	(7.4)	1.2	4.7	9.0	7.0	9.9	6.4	3.9	(1.5) 突起欠、丁部欠。	
A 0024	47	空開輪	L13	(19.3)	(8.6)	10.7	0.2	6.7	11.8	9.2	13.6	8.3	5.2	3.8 半壞、突起欠。	
A 0025	59	空開輪	M16 186号墓	(14.8)	(8.3)	6.5	1.4	5.1	10.8	7.3	10.6	(6.3)	—	— 表探、突起欠、風輪半壞。	
A 0026	60	空開輪	L17	19.0	9.9	9.1	0.6	5.9	11.8	9.1	13.6	10.3	4.4	2.6 表探、第53回	
A 0027	63	空開輪	K17 195号墓	(19.4)	(9.8)	(9.6)	0.9	6.4	13.8	11.2	14.5	9.1	4.8	(2.3) 表探、空輪突起欠、風輪下部の連結用突起破損。	
A 0028	64	空開輪	K17 195号墓 Q23	(15.2)	(6.7)	(8.4)	0.7	5.9	9.8	8.6	11.7	7.6	4.1	(1.8) 表探、空輪突起欠、風輪下部の連結用突起割れ。第53回	
A 0029	66	空開輪	21.4 244号墓	—	10.5	10.9	0.7	6.5	12.3	9.4	12.9	7.8	5.3	3.7 壁下斜面軸測。	
A 0030	93	空開輪	K17	(15.4)	(7.1)	(8.3)	0.7	6.3	10.5	8.6	11.5	7.1	(4.3)	(1.3) 空輪突起欠、風輪下部連結突起欠損。	
A 0031	103	空開輪	L16 196号墓	(14.4)	(8.2)	(6.2)	0.6	(5.6)	(11.1)	(10.5)	(12.4)	(11.4)	—	— 2/3欠失。	
A 0032	107	空開輪	J18 293号墓	(17.9)	(8.9)	9.0	0.7	5.2	9.8	8.0	11.3	8.7	6.2	3.1 第53回	
A 0033	108	空開輪	J18	(12.9)	(7.6)	5.2	0.7	4.5	9.6	7.4	10.6	7.8	—	— 梵字入り、小欠。第53回	
A 0034	109	空開輪	J18 292号墓	(19.9)	(10.4)	(9.5)	2.0	(7.5)	(13.5)	10.7	(15.3)	(12.9)	—	— 空輪突起欠。	
A 0035	110	空開輪	J18 292号墓	(14.4)	(7.3)	(7.1)	0.8	3.9	9.9	8.6	11.1	7.0	4.4	(2.4) 第53回	
A 0036	112	空開輪	J19 306号墓	(15.8)	(7.0)	(8.8)	0.6	6.2	9.4	7.4	10.8	7.4	4.2	2.0 他に空輪突起部。第53回	
A 0037	116	空開輪	J19	(18.4)	(8.4)	10.0	1.1	5.4	11.4	9.9	13.1	8.4	4.7	3.5 空輪突起欠。第53回	
A 0038	118	空開輪	J19	(18.5)	(9.3)	9.2	0.8	5.5	11.4	10.0	13.4	8.2	3.4	2.9 空輪突起欠。第53回	
A 0039	119	空開輪	J19 320号墓	(18.1)	(8.1)	(10.0)	0.6	(5.6)	11.0	9.0	(12.0)	(7.9)	5.1	(3.8) 空輪突起欠。第53回	
A 0040	124	空開輪	J20 328号墓	(15.1)	(7.5)	(7.6)	1.0	(4.8)	(9.6)	(8.0)	(10.5)	(7.3)	(4.6)	(1.8) 空輪突起欠、風輪下部連結突起欠損。	
A 0041	125	空開輪	J20 340号墓	(17.9)	(7.5)	10.4	0.6	5.6	(9.2)	8.3	10.6	7.3	4.8	4.2 空輪突起欠。第53回	
A 0042	126	空開輪	J20 340号墓	(20.6)	(10.1)	10.5	0.7	6.1	12.1	9.9	(13.2)	8.8	5.7	3.7 空輪突起欠。第53回	
A 0043	127	空開輪	K20	(22.3)	(13.7)	(8.6)	1.2	(7.4)	(12.7)	(11.4)	(13.3)	(9.1)	—	— 空輪突起欠、全体1/3履方向に半載。	
A 0044	128	空開輪	K20 341号墓	(17.9)	(8.1)	9.7	0.6	5.7	11.5	9.0	13.2	8.0	5.3	3.4 空輪突起欠。第53回	
A 0045	129	空開輪	K20 341号墓	(15.7)	(7.0)	(8.7)	0.7	(5.9)	(11.1)	(10.2)	(12.0)	(7.7)	(5.3)	(2.1) 空輪突起溝溝。風輪下部連結突起欠。	
A 0046	130	空開輪	K20	(13.7)	(6.7)	(7.0)	(0.9)	(4.3)	(9.1)	(8.1)	(10.2)	(7.9)	(4.5)	(1.8) 空・空輪突起欠。第53回	

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52～56回)

報告番号	採取番号	出土部位 名所	出土場所	各 部 位 法 算										備 考 標	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A-0047	131	空風輪	K-20	(13.3)	(6.9)	(6.4)	(0.7)	(4.5)	(10.3)	(9.0)	(11.1)	(8.3)	(4.4)	(1.1)	空・風輪突起欠。第53回
A-0048	133	空風輪	K-20	(17.4)	(8.1)	(9.2)	(0.4)	(6.0)	(11.4)	9.7	(12.3)	(7.6)	4.5	(2.8)	空・風輪突起欠。
A-0049	134	空風輪	K-20	(18.0)	(9.7)	(8.3)	1.2	(5.1)	(12.3)	9.5	(12.2)	10.5	4.4	(2.0)	空・風輪突起欠。第53回
A-0050	135	空風輪	J-20 339号基	(16.3)	(9.0)	(7.3)	1.4	(5.9)	11.8	10.0	13.7	9.0	—	—	第53回
A-0051	138	空風輪	J-21 338号基	(15.2)	(6.3)	(8.9)	1.0	(5.9)	(9.2)	7.2	(10.8)	(7.3)	(5.0)	2.0	空・風輪突起欠。空輪部縦1.4%。
A-0052	140	空風輪	K-21	(18.5)	(7.7)	(10.8)	(0.7)	(6.5)	9.5	8.6	(12.2)	7.5	4.7	(3.6)	空・風輪突起欠。
A-0053	142	空風輪	365号基	(17.8)	(9.1)	(8.7)	(1.4)	(6.0)	12.4	10.2	14.1	8.2	5.4	(1.3)	空・風輪突起欠。第53回
A-0054	144	空風輪	K-17	(15.1)	(8.0)	(7.1)	(1.4)	(5.7)	12.5	10.6	13.4	8.5	—	—	空・風輪突起欠。第53回
A-0055	146	空風輪	J-17	(15.5)	(6.8)	(8.7)	0.8	(5.8)	9.7	8.1	10.8	7.4	4.2	(2.1)	空・風輪突起欠。第53回
A-0056	153	空風輪	K-18	(20.6)	(10.1)	10.5	0.2	6.6	11.3	8.9	13.5	8.8	5.1	3.7	空輪突起欠。第53回
A-0057	154	空風輪	18 295号基	(20.5)	(9.9)	10.6	0.6	6.1	15.5	9.4	11.6	7.6	4.9	3.9	空輪突起欠。
A-0058	164	空風輪(a)	N-15	(25.1)	(11.0)	13.3	0.5	7.5	14.8	12.4	16.4	9.6	8.1	5.3	A-0059とは別個体。第53回
A-0059	164	空風輪(b)	N-15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	A-0058とは別個体。計測不可。
A-0060	171	空風輪	N-15	15.2	7.8	7.4	6.2	1.2	10.2	7.5	12.1	11.0	—	—	風輪下部欠損。
A-0061	182	空風輪	O-15 79号基	(12.8)	(7.4)	(5.4)	0.6	(4.9)	—	—	—	—	—	—	縱方向に半載。
A-0062	202	空風輪	O-14 101号基	(17.0)	(7.1)	(9.9)	1.0	6.4	10.8	8.0	12.0	8.4	5.4	2.5	第53回
A-0063	226	空風輪	M-16 87号基	(17.8)	(8.4)	(9.4)	0.6	5.8	10.0	8.4	11.7	7.1	5.2	(3.0)	第53回
A-0064	230	空風輪	M-16 87号基	(18.5)	(7.4)	(11.1)	1.0	6.3	(10.9)	8.3	11.3	7.3	4.9	(3.8)	空輪対称方向に半載。
A-0065	249	空風輪	M-16 92号基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A-0066	262	空風輪	M-15 80号基	(17.0)	(8.3)	(8.7)	0.9	(5.6)	10.7	8.7	11.7	7.5	(5.4)	(2.2)	—
A-0067	266	空風輪	N-17	20.4	9.6	10.8	0.6	6.0	11.8	10.2	13.4	9.0	6.2	4.4	第53回
A-0068	269	空風輪	N-18	20.0	9.5	10.5	0.5	5.8	11.9	10.2	13.3	9.3	6.0	4.2	—
A-0069	273	空風輪	N-18	(18.1)	(7.9)	(10.2)	0.7	5.5	10.7	9.4	12.5	8.0	5.1	4.0	第53回
A-0070	281	空風輪	M-18	20.3	9.9	10.5	0.4	6.2	12.1	10.6	13.4	7.9	5.8	3.9	第53回
A-0071	283	空風輪	M-18 201号基	(17.6)	(9.1)	8.4	0.3	8.1	14.2	13.5	17.6	10.9	—	—	風輪底平坦。第53回
A-0072	284	空風輪	M-18 201号基	(15.6)	(7.8)	(7.8)	0.1	(6.0)	9.6	7.9	(11.5)	(9.9)	(5.7)	(1.7)	空・風輪欠損。
A-0073	287	空風輪	M-17	21.7	12.7	9.0	0.9	8.1	15.0	12.4	17.7	12.5	—	—	第53回
A-0074	288	空風輪	M-17	19.7	8.9	10.8	1.1	7.9	11.8	9.8	16.3	13.7	8.1	1.8	第53回
A-0075	289	空風輪	M-17	18.0	9.7	8.3	1.0	7.3	11.8	8.1	12.8	8.6	—	—	第53回
A-0076	298	空風輪	M-15 80号基	(13.9)	6.3	(7.6)	(0.7)	5.5	9.2	8.4	(10.5)	6.5	(3.8)	(1.4)	風輪の連結用突起欠損。第53回
A-0077	301	空風輪	M-16	(19.8)	(7.7)	(12.1)	0.5	7.0	11.4	10.5	14.7	8.5	7.2	4.6	第53回
A-0078	306	空風輪	M-16	(19.3)	(11.0)	8.4	0.2	8.2	13.1	10.7	14.5	11.8	2.3	2.3	第53回
A-0079	311	空風輪	M-19	19.9	9.5	10.4	1.1	5.6	12.0	10.1	13.0	8.6	4.7	3.7	第53回
A-0080	312	空風輪	M-19	(15.1)	(6.2)	8.8	0.5	6.5	8.6	7.0	10.5	7.3	5.3	1.8	第53回
A-0081	313	空風輪	M-16	(18.8)	(12.1)	6.7	0.5	6.2	(12.3)	10.0	15.2	11.5	—	—	空輪4分の3欠損。
A-0082	320	空風輪	R-12 33号基	14.5	6.7	7.8	0.3	5.1	8.1	6.9	9.4	6.7	4.2	2.4	第53回
A-0083	321	空風輪	R-12 33号基	18.1	8.5	9.6	0.6	6.0	12.1	10.3	12.6	7.9	5.3	3.0	第53回
A-0084	339	空風輪	I-15	(20.5)	(9.0)	11.5	1.2	6.9	11.9	9.1	13.6	8.9	5.5	3.4	空輪突起少。
A-0085	341	空風輪	O-14	(15.5)	(6.8)	(7.8)	1.0	5.6	10.0	8.1	11.0	6.3	4.2	2.1	—
A-0086	354	空風輪	M-14 128号基	(16.4)	(10.4)	(6.0)	0.1	(5.9)	12.7	(10.6)	(14.7)	(14.2)	—	—	風輪半端。
A-0087	362	空風輪	L-14	(14.9)	(6.6)	(8.3)	0.2	(8.1)	11.0	10.2	(12.9)	(12.0)	—	—	空輪半端。
A-0088	363	空風輪	L-14	(14.8)	(9.0)	(5.8)	0.8	(5.0)	10.8	9.9	(13.1)	(10.0)	—	—	第53回
A-0089	367	空風輪	K-14 153号基	19.8	8.1	11.7	1.5	6.9	11.4	8.6	12.7	8.6	3.9	3.2	—
A-0090	372	空風輪	K-14 148号基	16.4	8.2	8.2	0.7	4.6	10.1	8.3	11.4	7.8	4.9	2.9	—
A-0091	373	空風輪(a)	J-14 163号基	20.9	9.3	11.5	0.5	7.4	11.7	8.8	13.1	7.7	6.1	3.6	A-0092とは別個体。第53回
A-0092	373	空風輪(b)	J-14 163号基	16.6	7.8	8.8	1.0	5.0	10.2	8.2	11.2	7.4	3.8	2.8	A-0091とは別個体(連続部一部欠損)。
A-0093	379	空風輪	J-14 167号基	(15.5)	(7.0)	(8.5)	0.6	5.1	(9.3)	7.4	10.3	7.6	5.1	(2.8)	169号基に接合して出土。
A-0094	391	空風輪	I-15 175号基	17.2	9.2	8.0	0.4	5.2	10.4	8.4	11.2	6.6	4.4	2.4	第53回
A-0095	397	空風輪	I-15 175号基	(15.0)	(9.2)	(5.8)	(0.8)	(5.0)	(14.3)	(12.2)	(13.2)	(9.7)	—	—	縱方向に半載。一石造か。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52~56図)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位置法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A0096	409	空腹輪	N25 446号墓	(14.1)	(7.6)	(6.5)	(0.4)	(5.5)	(10.3)	(9.3)	(11.6)	(8.1)	(5.3)	②b)	一部欠損。
A0097	410	空腹輪	N25 446号墓	(11.8)	(6.6)	(5.2)	(0.4)	(4.8)	(10.8)	(9.6)	(11.5)	(10.1)	—	—	半壊。
A0098	412	空腹輪	N25 449号墓	(23.1)	(11.3)	11.8	1.1	6.7	15.2	11.9	16.1	9.6	6.4	4.0	一部欠損。
A0099	416	空腹輪	N25 454号墓	(14.3)	(7.8)	(6.5)	0.8	(5.7)	10.9	(8.3)	(11.6)	(7.3)	—	—	風輪縦方向に半壊。
A0100	427	空腹輪	N25 452号墓	(15.6)	(7.6)	(8.0)	0.6	(4.2)	(10.0)	(8.1)	(10.4)	(8.2)	5.1	(3.2)	
A0101	431	空腹輪	O26 456号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0102	434	空腹輪	O26 456号墓	(16.1)	7.9	(8.2)	0.9	(5.6)	10.2	8.8	11.6	7.7	4.6	(1.7)	風輪底部の連結用突起欠損。
A0103	451	空腹輪	M24 416号墓	(20.1)	(8.8)	(11.3)	1.0	6.0	12.7	10.7	13.8	9.4	5.9	(4.3)	
A0104	452	空腹輪	M24 416号墓	23.5	11.8	11.7	0.5	7.1	12.1	9.8	13.7	9.4	5.2	4.1	
A0105	453	空腹輪	M24 416号墓	(16.0)	(7.8)	(8.2)	0.6	(5.5)	(9.5)	(7.4)	(10.9)	(7.3)	(4.5)	(2.1)	対方向に半壊。
A0106	454	空腹輪	M24 415号墓	(13.1)	(7.5)	(5.6)	0.6	(5.0)	(7.8)	(6.5)	(9.3)	(6.4)	—	—	
A0107	455	(空)腹輪	M24 415号墓 近接	—	—	(6.1)	(0.5)	(4.8)	—	—	(8.9)	(6.7)	(3.9)	(0.8)	空輪欠、縫方向に半壊。
A0108	456	空腹輪	M24 415号墓	(13.5)	(6.2)	(7.3)	(1.3)	(5.3)	(9.6)	(7.7)	(10.6)	(6.6)	(4.2)	(0.7)	
A0109	458	空腹輪	M24	(15.7)	(9.1)	(6.6)	0.3	5.9	10.9	8.5	11.8	8.1	(5.3)	(0.4)	
A0110	463	空腹輪	M24	(16.8)	(8.1)	(8.7)	1.1	(6.0)	10.8	9.4	(12.3)	7.8	(4.5)	(1.6)	
A0111	464	空腹輪	M24	(16.2)	(7.3)	(8.9)	1.0	6.4	(10.7)	8.3	12.0	7.7	(5.2)	(1.5)	対方向に半壊。
A0112	468	空腹輪	M24	(16.6)	(8.5)	(8.1)	0.8	(5.4)	(11.1)	9.2	(11.9)	(7.5)	(4.4)	(1.9)	空輪突起欠損。
A0113	469	空腹輪	M24 419号墓	(15.1)	(8.3)	(6.8)	0.4	(6.4)	(12.6)	11.8	(14.0)	(9.2)	—	—	突起欠損。
A0114	473	空腹輪(a)	M24 415号墓	(14.6)	(7.8)	(6.8)	(0.5)	(5.4)	(10.6)	(8.6)	(11.1)	(7.0)	(4.2)	(0.9)	A0115とは別個体。
A0115	473	空腹輪(b)	M24	(13.6)	(8.2)	(5.4)	1.2	(4.2)	(11.2)	(8.9)	(11.8)	(8.1)	—	—	A0114とは別個体。
A0116	474	空腹輪(a)	L24 411号墓	(14.4)	(7.3)	(7.1)	0.9	(4.7)	9.9	(8.3)	(10.2)	(7.3)	(4.8)	(1.5)	A0117とは別個体。
A0117	474	空腹輪(b)	N24	(18.2)	12.8	(5.4)	0.3	(5.1)	10.7	9.3	12.1	(11.2)	—	—	A0116とは別個体。
A0118	475	空腹輪	N24 414号墓	(14.8)	(9.2)	(5.6)	1.7	3.9	(11.2)	(8.2)	(10.5)	(8.2)	—	—	A0622軸輪と採取番号が重複、 風輪半壊。
A0119	479	空腹輪	N24	21.7	10.1	11.6	0.9	6.5	13.3	11.8	14.5	10.3	6.5	4.2	第53回
A0120	480	空腹輪	N23 238号墓	(16.5)	(8.5)	8.0	0.6	7.4	13.1	10.9	14.7	10.3	2.6	2.7	梵字入り。第53回
A0121	481	空腹輪	N23 240号墓	(16.2)	(10.0)	(6.2)	0.4	(5.8)	(12.0)	10.1	(13.6)	9.3	(5.7)	—	
A0122	484	空腹輪	O23 246号墓	10.6	6.5	4.1	0.3	3.8	8.4	7.5	9.9	7.3	1.5	1.4	A0373軸輪とセット。第53回
A0123	487	空腹輪	N22	15.2	7.3	7.9	0.4	5.3	9.0	7.7	10.9	6.9	3.9	2.2	第53回
A0124	488	空腹輪	N22	17.8	8.4	9.4	0.5	5.4	11.1	9.3	12.0	7.8	4.9	3.5	第53回
A0125	492	空腹輪	M22	(14.5)	(6.2)	(8.3)	0.9	6.1	(10.0)	(9.0)	(11.9)	(7.4)	(4.2)	(1.3)	
A0126	497	空腹輪	M22	(15.8)	(7.6)	(8.2)	1.1	(6.0)	(11.2)	(8.1)	(12.0)	(8.1)	(4.8)	(1.1)	対方向に半壊。
A0127	501	空腹輪	M23	(12.9)	(6.2)	(6.7)	(0.6)	(6.1)	(10.3)	(9.1)	(11.9)	(8.0)	—	—	部分破損。
A0128	502	空腹輪	M23	(15.1)	(7.4)	(7.7)	0.7	(6.2)	(9.8)	(8.9)	(11.1)	(7.1)	(4.5)	(0.8)	部分破損。
A0129	503	空腹輪	M23 407号墓	(15.3)	(9.3)	6.0	1.3	4.7	11.3	8.6	11.6	(8.6)	—	—	空輪突起欠、風輪少穴。
A0130	504	空腹輪	M23 406号墓	12.8	6.9	5.9	0.3	5.6	10.3	9.0	12.9	10.5	—	—	第53回
A0131	508	空腹輪	M23 400号墓	(18.7)	(8.2)	(9.5)	1.0	(5.9)	(11.1)	(8.6)	(11.4)	(7.8)	(5.4)	②b)	突起少穴。
A0132	515	空腹輪	L23 405号墓	(13.9)	(7.4)	(6.5)	1.2	(5.3)	(11.0)	(9.1)	(11.5)	(9.0)	—	—	部分欠損。
A0133	517	空腹輪	L23 392号墓	12.5	7.3	5.2	1.0	4.2	10.0	7.5	11.5	9.8	—	—	第53回
A0134	518	空腹輪	L23 391号墓	13.4	8.3	5.1	0.8	4.3	10.5	7.9	11.0	7.2	—	—	
A0135	522	空腹輪	M22 230号墓	(13.7)	(7.4)	(6.5)	0.8	5.5	(10.1)	—	(11.1)	(8.5)	—	—	突起少穴。
A0136	525	空腹輪	L21 222号墓	(17.0)	(7.6)	(9.4)	1.2	(6.7)	(11.7)	9.4	(13.2)	(8.2)	(4.9)	(1.3)	突起少穴。第53回
A0137	526	空腹輪	L21	(15.5)	(6.6)	(8.9)	0.6	(6.5)	9.9	8.3	(11.7)	(8.1)	(4.4)	(1.8)	第53回
A0138	529	空腹輪	K21	13.7	8.2	5.5	1.2	4.3	10.1	7.3	11.2	7.7	—	—	第53回
A0139	532	空腹輪	J21	(15.8)	(8.7)	(7.1)	(1.4)	4.4	11.0	8.5	11.8	9.0	5.1	(1.3)	
A0140	533	空腹輪	J21	(17.5)	(8.0)	(9.5)	0.9	6.2	10.8	8.0	11.8	8.1	4.8	(2.4)	第53回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52~56図)

報告番号	採取番号	出土部位 名稱	出土場所	各部位置										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A0141	534	空軸輪	J20 340号墓	(11.8)	(6.0)	5.8	0.3	5.5	10.6	10.4	13.8	11.9	—	—	第53回
A0142	536 538	空軸輪 空(周輪)	L22 372号墓	(17.9)	(9.1)	(8.8)	(1.6)	(7.2)	11.2	(10.2)	11.2	10.2	—	—	半壙、採取番号538と536で一體化。 第53回
A0143	537	空軸輪	L22 372号墓	(16.9)	(7.6)	(9.3)	0.7	5.3	10.2	8.8	12.6	8.9	4.9	(3.4)	第53回
A0144	540	空軸輪	L22 384号墓	(17.2)	(7.9)	(9.3)	0.9	6.1	10.3	8.0	11.8	8.5	4.6	(2.3)	第53回
A0145	541	空軸輪	L22 395号墓	(22.9)	(9.6)	(13.3)	1.2	7.1	15.0	12.0	16.2	10.2	6.6	(5.0)	第53回
A0146	547	空軸輪	K20 340号墓	(12.9)	(8.0)	(4.9)	(0.5)	(4.4)	(9.6)	(7.5)	(10.5)	(7.6)	—	—	縱方向に半壙。
A0147	552	空軸輪	K19	(15.7)	(8.3)	(7.4)	1.3	(6.1)	12.2	8.9	13.5	8.5	(5.2)	—	空輪突起欠、第53回
A0148	553	空軸輪	K19	(18.5)	(8.7)	(8.8)	1.1	6.0	11.5	8.7	12.6	8.6	5.4	(2.7)	空輪突起小欠、第53回
A0149	558	空軸輪	K19	18.6	9.0	9.6	1.0	5.9	11.8	9.0	12.9	8.4	4.9	2.7	第53回
A0150	559	空軸輪	K19 311号墓	(14.5)	(7.4)	(7.1)	0.3	5.1	(8.9)	8.1	(10.4)	(7.8)	(4.2)	(1.7)	空輪突起小欠、第53回
A0151	560	空軸輪	K19	(13.9)	(8.6)	(5.3)	(0.6)	(4.7)	(9.4)	(8.7)	(10.3)	(8.9)	—	—	空輪半壙。
A0152	562	空軸輪	J19	(14.1)	(7.7)	6.4	0.9	5.5	11.0	9.4	11.9	8.1	—	—	第53回
A0153	566	空軸輪	J19	18.3	10.9	7.4	0.6	6.8	13.2	10.8	14.2	9.3	—	—	尾輪下部欠損、第53回
A0154	570	空軸輪	J19	20.9	10.7	10.2	0.4	5.7	12.6	10.7	14.1	9.1	5.3	4.1	第53回
A0155	576	空軸輪	J19 318号墓	(16.1)	(7.8)	(8.3)	(0.8)	(6.0)	11.8	10.2	13.1	(8.1)	4.7	(1.5)	突起欠損あり。
A0156	577	空軸輪	J19	(14.6)	7.4	(7.2)	0.7	4.5	8.7	8.0	9.5	(6.8)	4.3	(2.0)	—
A0157	585	空軸輪	J18 301号墓	(13.4)	(6.9)	(6.5)	0.5	(5.4)	(9.2)	(8.3)	(10.1)	(7.0)	(4.5)	(0.6)	縱方向に半壙。
A0158	592	空軸輪	J18 294号墓	(20.1)	10.4	9.7	0.3	5.8	(12.0)	(9.4)	(13.2)	(10.2)	5.5	3.6	縱方向に半壙。
A0159	593	空軸輪	L18	(17.5)	10.0	(7.5)	—	6.7	12.1	9.9	13.3	8.9	5.7	(0.8)	第53回
A0160	621	空軸輪	J15	(13.1)	(7.6)	(5.5)	(1.1)	(4.4)	(8.4)	(7.1)	(9.0)	(7.6)	—	—	縱方向に半壙。
A0161	624	空軸輪	J15	(15.6)	(9.5)	(6.1)	(0.8)	(5.3)	(12.2)	(10.0)	(12.1)	(11.2)	—	—	縱方向に半壙。
A0162	625	空軸輪	J15	15.0	9.7	5.3	0.7	4.6	10.9	8.3	11.8	9.3	—	—	第53回
A0163	628	空軸輪	J15	(16.9)	(9.4)	(7.5)	0.3	5.2	(10.6)	8.2	(11.4)	(7.8)	(4.5)	(2.0)	—
A0164	629	空軸輪	J15	(19.8)	(9.7)	(10.1)	0.4	6.3	10.8	9.5	12.4	7.7	5.0	3.4	第53回
A0165	639	空軸輪	J15 159号墓	(14.2)	(8.7)	(5.5)	(0.3)	(5.2)	(9.7)	(9.8)	—	—	—	—	採取番号638・639を併せて空軸輪の 一全体になる(尾輪部欠損あり)。
A0166	641	空軸輪	J14 167号墓	(14.6)	(6.6)	(8.0)	0.8	(5.3)	8.5	6.3	(9.7)	6.8	4.3	(1.9)	第53回
A0167	644	空軸輪	J14 163号墓 西側	(17.8)	(10.2)	7.6	0.8	6.8	12.3	10.5	13.0	10.1	—	—	縱方向に半壙。第53回
A0168	657	空軸輪	N13 124号墓東側	12.5	7.9	5.3	0.7	4.6	8.8	6.1	9.5	7.1	—	—	尾輪突起方向に半壙。
A0169	658	空軸輪	N13 124号墓東側	(14.8)	(7.0)	(7.8)	(0.4)	(5.7)	(8.5)	(7.6)	(10.5)	(6.7)	(4.0)	(1.7)	—
A0170	659	空軸輪	N13 124号墓東側	(18.9)	(8.9)	10.0	0.5	6.5	12.0	10.3	12.9	8.4	5.0	3.0	—
A0171	660	空軸輪	N13 124号墓 東側	14.0	9.3	4.7	1.2	3.5	11.1	7.9	12.4	9.5	—	—	—
A0172	664	空軸輪	N13 121号墓	(18.5)	(9.6)	(8.9)	0.8	5.3	11.3	9.6	12.1	7.7	5.3	2.8	第53回
A0173	668	空軸輪	O13 68号墓	(16.6)	(8.0)	(8.6)	0.5	(6.0)	10.5	8.5	10.9	7.4	4.7	(2.1)	空輪縦方向に半壙。
A0174	670	空軸輪	O13 68号墓	(12.7)	(5.8)	(6.9)	1.0	(4.6)	(8.4)	6.6	(9.4)	(5.9)	3.7	(1.3)	第53回
A0175	672	空軸輪	O13 68号墓	22.7	11.9	10.8	0.7	7.1	14.6	11.8	15.8	8.8	5.7	3.0	—
A0176	673	空軸輪	O13 68号墓 南側	(19.5)	(9.2)	(10.3)	0.5	6.0	11.4	9.0	13.7	9.1	5.6	3.8	堆積。
A0177	676	空軸輪	O13	(19.1)	8.9	(10.2)	0.2	6.6	9.9	9.1	12.5	7.5	5.1	(3.4)	第53回
A0178	677	空軸輪	P13 66号墓	15.2	10.0	5.2	0.7	4.5	10.9	8.6	12.8	10.4	—	—	第53回
A0179	680	空軸輪	P13 67号墓	(19.9)	9.7	(10.2)	0.7	5.7	12.0	10.4	13.5	8.5	5.4	(3.8)	第53回
A0180	681	空軸輪	P13 67号墓	(13.0)	(6.9)	(6.1)	0.7	(5.4)	11.4	9.9	12.3	8.6	—	—	尾輪底部欠損、第53回
A0181	684	空軸輪	P13 71号墓 南側	12.8	8.9	9.3	0.6	6.0	11.2	8.6	12.5	8.8	4.4	2.7	—
A0182	686	空軸輪	P13 71号墓 南側	15.6	7.0	8.6	0.7	5.5	9.7	7.4	11.5	7.5	4.4	2.4	第53回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52~56図)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A0183	687	空風輪	P13 71号墓 倒壊	(18.4)	9.2	(9.2)	0.5	6.1	11.1	9.3	12.1	7.6	4.9	(2.6)	風輪底部の連結用突起破損。
A0184	692	空風輪	P13 64号墓 斜糸田	(19.7)	(10.3)	(9.4)	0.2	(6.6)	(11.3)	9.5	(12.4)	(7.7)	(5.4)	(2.6)	空輪突起小穴。
A0185	703	空風輪	P12 65号墓	(18.5)	(10.2)	(8.3)	(1.1)	(4.5)	(10.8)	(9.5)	(11.8)	(8.3)	5.1	(2.7)	突起等一部欠損。第53回
A0186	704	空風輪	P12 65号墓	19.7	9.7	10.0	0.9	5.5	11.6	9.3	12.7	9.8	5.8	3.6	第53回
A0187	706	空風輪	P12 65号墓	(18.1)	(9.9)	(8.2)	(0.8)	(7.4)	(13.8)	(10.7)	(15.0)	(9.6)	—	—	縦方向に半壊。
A0188	710	空風輪	P12 62号墓	(13.7)	(8.0)	(5.7)	(0.1)	(5.6)	(9.8)	(7.2)	(9.8)	(4.6)	—	—	空輪縦方向に半壊。
A0189	711	空風輪	P12 62号墓	(13.7)	(8.1)	(5.6)	0.7	(4.9)	10.3	(8.0)	(9.3)	(5.7)	—	—	風輪損壊。
A0190	719	空風輪	P12 62号墓 東糸田下	(15.5)	(9.3)	6.2	0.6	5.6	12.4	10.5	13.6	8.7	(5.8)	—	損壊あり。第53回
A0191	724	(空)風輪	Q12 40号墓	(7.2)	(1.8)	(5.4)	(0.1)	(5.3)	—	(6.6)	(9.8)	(7.9)	—	—	空輪欠失。縦方向に半壊。
A0192	726	空風輪	Q12 40号墓	(21.6)	(8.9)	(12.7)	1.2	(7.5)	(14.4)	(11.3)	(16.3)	(10.4)	(5.5)	(4.0)	縦方向に半壊。
A0193	729	空風輪	Q12 36号墓 西側	16.5	7.3	9.2	0.4	6.0	9.1	8.2	10.8	7.3	4.4	2.8	縦方向に半壊。第53回
A0194	736	空風輪	R11 31号墓 西糸田下	(15.9)	(7.4)	8.5	0.7	6.1	10.2	8.0	10.8	7.3	4.5	1.7	風輪底部に連結用突起(凸部)有り。第53回
A0195	737	空風輪	R11 31号墓 西糸田下	(16.0)	(7.0)	(9.0)	0.9	5.6	9.6	7.1	10.9	8.3	4.6	(2.5)	風輪底部に連結用突起(凸部)有り。第53回
A0196	746	空風輪	R11 29号墓	20.4	9.8	10.6	0.3	6.1	12.2	10.2	13.8	9.0	5.9	4.2	風輪底部に連結部。第53回
A0197	748	空風輪	R11 29号墓	16.7	6.7	10.0	1.2	(5.8)	(9.6)	9.0	(12.5)	8.7	4.9	3.0	風輪底部に連結部。第53回
A0198	749	空風輪	R11 29号墓	16.2	9.9	6.3	0.7	5.6	12.5	10.2	13.8	9.8	—	—	風輪底部連結部無。第53回
A0199	750	空風輪	R11 29号墓	(18.5)	(12.8)	5.7	0.3	5.4	10.2	8.8	11.5	8.7	—	—	第53回
A0200	751	空風輪	R11 29号墓	18.5	9.0	9.5	0.7	6.1	10.6	7.9	12.2	7.3	4.8	2.7	風輪底部に連結部。
A0201	756	空風輪	Q13 37号墓	(19.0)	(8.5)	10.5	0.6	6.8	13.5	11.1	14.5	9.3	4.9	3.1	空輪縦方向に半壊。
A0202	757	空風輪	Q13 37号墓	(15.2)	(8.4)	(6.8)	0.5	5.1	10.5	8.2	11.3	6.5	4.3	(1.2)	風輪連結部。
A0203	760	空風輪①	Q13 37号墓	11.4	6.5	4.9	0.4	4.5	9.2	7.9	11.2	8.8	—	—	風輪連結部無。第53回
A0204	760	空風輪②	S11 37号墓	(15.2)	(8.3)	(6.9)	(0.4)	(5.4)	(10.8)	8.9	(11.5)	(7.2)	(4.5)	(1.1)	空風輪突起欠損、風輪連結部欠損。
A0205	766	空風輪	S11 12号墓 西糸田下	23.3	12.0	11.3	0.9	7.1	14.7	12.7	15.9	10.0	5.8	3.3	他破片1点計測不可。
A0206	767 768	(空)風輪	S11 13号墓 西糸田下	22.5	13.6	8.9	0.7	8.2	15.5	11.0	16.3	12.5	—	—	採取番号767・768とで一体の空風輪。
A0207	773	空風輪	S11 20号墓	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A0208	774	空風輪	S11 20号墓	(15.2)	(6.7)	(8.5)	0.9	6.1	9.2	7.1	(10.1)	6.9	(4.4)	(1.5)	風輪連結部有。第53回
A0209	775	空風輪	S12 22号墓 西側	(17.5)	(7.0)	10.5	0.8	5.5	(10.6)	8.9	12.1	7.7	5.4	4.2	縦1/3欠。
A0210	776	空風輪	S12 22号墓 西側	(16.2)	8.9	(7.3)	0.8	(6.5)	12.7	11.4	14.0	9.9	—	—	風輪連結部欠失。第53回
A0211	781	空風輪	S12 21号墓	(13.8)	(6.4)	(7.4)	0.7	5.5	9.3	6.8	9.8	6.5	4.4	(1.2)	風輪縦方向に半壊。A0661地輪と回生出土。
A0212	782	空風輪	S12 21号墓	(12.0)	(6.7)	(5.3)	(0.4)	(4.7)	9.5	7.9	9.7	(6.6)	(3.9)	(0.2)	損壊あり。第53回
A0213	784	空風輪	L16 183号墓 北西石組	(13.6)	(8.1)	(5.5)	(0.3)	(5.2)	9.6	8.6	11.6	(8.8)	—	—	縦方向に半壊、突起等損壊。
A0214	796	空風輪	O12 (17.8)	(7.8)	(10.0)	0.5	6.3	9.3	8.0	11.2	7.0	5.1	(3.2)	—	
A0215	804	空風輪	P14 (17.8)	(8.9)	(8.9)	0.9	5.2	11.2	9.1	(12.1)	7.5	5.3	(2.8)	損壊有、連結部有。第53回	
A0216	805	空風輪	P14 47号墓	(19.1)	(11.5)	(7.6)	0.8	5.7	12.9	10.5	13.8	8.6	5.7	(1.1)	連結部欠損。第53回
A0217	806	空風輪	P14 47号墓	(19.9)	10.1	(9.8)	1.1	5.9	12.7	10.8	13.0	8.2	5.4	(2.8)	連結部有。第53回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52~56図)

報告番号	採取番号	出土部位 名所	出土場所	各部位法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0218	807	空気輪	P14 47号墓	(17.4)	(8.7)	(8.7)	0.7	5.8	12.1	9.9	12.8	7.9	5.1	(2.2)	連結部凹凸。
A0219	808	空気輪	P14 51号墓	(17.9)	(8.6)	9.3	0.7	5.8	10.8	8.5	12.3	7.7	4.7	2.8	連結部有。
A0220	813	空気輪	P14 46号墓	(15.3)	(7.5)	(7.8)	0.2	5.8	10.0	7.8	10.9	(6.4)	4.2	(1.8)	彫刻有、連結部有。
A0221	817	空気輪	P14	(19.8)	(11.5)	(8.3)	0.7	(7.6)	(15.3)	(11.7)	(13.9)	(9.1)	—	—	縦方向に平塗。
A0222	822	空気輪	Q14	(30.9)	(17.0)	13.9	0.5	7.8	15.9	11.8	16.8	10.4	7.3	5.6	縦方向に平塗。
A0223	824	空気輪	Q14	19.8	(9.9)	9.9	0.6	5.6	12.4	10.8	14.7	9.4	4.9	3.7	底輪小穴、連結部有。第53回
A0224	825	空気輪	Q14	(18.6)	(9.6)	(9.0)	0.5	7.0	12.1	10.8	14.0	8.5	4.5	(1.5)	連結部有。
A0225	826	空気輪	Q14	20.1	9.7	10.4	0.4	6.4	11.1	9.2	12.9	7.7	5.2	3.6	連結部有。
A0226	828	空気輪	Q14	(18.1)	(9.5)	(8.6)	0.7	5.7	11.6	9.2	12.5	7.5	4.4	(2.2)	連結部小穴。
A0227	829	空気輪	P15	32.9	18.4	14.5	0.5	8.2	15.0	11.1	15.7	11.0	(7.2)	5.8	連結部有。第53回
A0228	830	空気輪	P15	16.9	8.4	8.5	0.4	5.0	10.5	9.6	13.0	8.5	5.4	3.1	連結部有。
A0229	837	空気輪	O12 39号墓 周辺	17.8	7.8	10.0	0.7	5.7	9.9	8.4	12.4	7.3	4.9	3.6	連結部有。第53回
A0230	842	空気輪	O12 39号墓 周辺	16.8	6.9	9.9	0.4	5.1	11.3	8.7	11.6	7.2	4.4	3.4	第53回
A0231	844	空気輪	R12 東斜面	(14.8)	(8.7)	6.1	1.1	5.0	(13.6)	12.0	15.4	12.6	—	—	
A0232	845	空気輪	R12 東斜面	(17.6)	(8.6)	(9.0)	0.3	5.9	11.5	10.1	12.4	9.2	5.4	(2.8)	
A0233	847	空気輪	R12 東斜面	20.3	9.6	10.7	0.7	6.3	12.3	10.0	13.3	8.3	5.1	(3.7)	第53回
A0234	851	空気輪	S14	(14.7)	(7.8)	(6.9)	0.4	(5.1)	9.9	7.9	(10.7)	6.7	(4.0)	(1.4)	第53回
A0235	852	空気輪	S14	20.4	8.5	11.9	0.4	6.8	12.4	10.3	14.0	9.0	6.3	4.7	A0236とは別物。第53回
A0236	852	空気輪	S14	(18.9)	9.4	(9.5)	0.2	6.2	11.7	10.5	13.6	9.2	5.5	(3.1)	A0235とは別物。第53回
A0237	854	空気輪	S14	(24.2)	13.7	(10.5)	0.5	6.7	13.3	11.0	14.7	9.5	6.9	(3.3)	第53回
A0238	855	空気輪	S14	(22.0)	(10.7)	(11.3)	0.5	(6.7)	12.3	9.7	13.8	8.8	5.5	(4.1)	第53回
A0239	856	空気輪	S14	(16.8)	(8.0)	(8.8)	0.6	6.2	9.3	8.0	11.5	7.6	(4.6)	(2.0)	
A0240	862	空気輪	S14	13.3	8.3	5.0	0.5	4.5	(10.5)	8.1	12.4	10.2	—	—	第53回
A0241	863	空気輪	R13	(16.3)	(9.3)	7.0	0.6	6.4	(13.0)	11.0	13.9	8.3	5.3	—	第53回
A0242	865	空気輪	T10	20.4	9.6	10.8	0.6	6.7	12.0	10.2	13.6	8.3	5.5	3.5	
A0243	869	空気輪	T10	(15.1)	(8.9)	(6.2)	0.7	(5.3)	11.9	9.8	13.7	8.7	5.6	(0.2)	第53回
A0244	881	空気輪	Q13 37号墓 西南下	(17.3)	(8.7)	(8.6)	0.6	(8.0)	13.1	10.5	(14.4)	(9.0)	—	—	前仄角破壊(松子大、二上山多い)、插入品か。蓋だらみでも少し度出するといふ。)
A0245	884	空気輪	N17	13.6	7.8	5.8	0.9	4.9	11.0	8.6	12.3	8.8	—	—	第53回
A0246	886	空気輪	K17	18.7	8.2	10.5	0.3	6.6	10.9	10.5	13.3	8.4	5.2	3.6	第53回
A0247	894	空気輪	M24	(13.7)	(7.0)	(6.7)	0.3	(6.4)	10.8	9.4	12.2	8.1	—	—	
A0248	902	空気輪	O26 460号墓	(14.5)	(6.7)	(7.8)	0.2	(6.0)	8.4	7.2	10.2	(6.2)	(3.8)	(1.6)	突起欠損。
A0249	910	空気輪	L17 196号墓 南側	18.3	8.9	9.4	0.7	5.7	11.7	9.4	12.5	7.3	4.3	3.0	第53回
A0250	911	空気輪	J19	(14.1)	7.2	(6.9)	(0.7)	(4.7)	9.7	7.8	10.3	7.0	(3.8)	(1.5)	一部欠損。第53回
A0251	914	(空) 空輪	J18 296号墓	—	—	(10.7)	(0.3)	(10.4)	—	(8.1)	(13.6)	—	—	—	半塗、空輪欠失。
A0252	915	空気輪	K21 368号墓	(19.2)	(9.4)	(9.8)	0.3	6.7	11.5	9.5	12.5	8.7	5.2	(2.8)	彫刻有り。第53回
A0253	926	空気輪	N24 411号墓	(15.5)	(8.5)	(7.0)	0.8	(5.2)	11.6	9.1	12.5	7.8	4.8	(1.0)	一部欠損。第53回
A0254	938	空気輪	K20 354号墓	15.0	9.6	5.4	1.0	4.4	10.6	7.8	11.2	6.6	0	0	A0451火輪・A0552水輪・A0698地輪などでセット関係。第51回
A0255	1027	空気輪	O12 40号墓	22.6	11.2	11.4	0.2	7.8	13.7	11.0	15.5	11.2	5.3	3.4	
A0256	1041	空気輪	L16 183号墓	(18.5)	(9.8)	(8.7)	0.8	(6.4)	12.6	10.6	(13.9)	(8.8)	(6.0)	(1.5)	欠損有り。
A0257	1046	空気輪	L16 183号墓	(18.6)	(10.0)	(8.6)	0.7	6.5	12.5	10.3	13.6	8.2	5.2	(1.4)	一部欠損。第53回
A0258	1064	空気輪	H15 下層	16.1	7.6	8.5	0.3	5.2	8.9	8.3	11.1	7.4	4.3	3.0	底輪底部連結突起。第53回
A0259	1065	空気輪	K19 下層	12.7	7.0	5.7	0.8	4.9	9.2	—	10.6	7.3	—	—	第53回
空気輪各部位法量平均値				17.9	9.2	8.9	0.7	5.9	11.3	9.2	12.7	8.5	5.0	3.3	(—) 内数値及びA0001～A0015とA0260～A0302の58基は除外して計算した。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第52～56回)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A-0260	3	空(周輪)	M28	—	—	—	—	—	8.7	—	—	—	—	—	表探、突起他欠損。
A-0261	6	空(周輪)	J22	—	—	—	—	—	—	8.4	—	—	—	—	表探、欠損。
A-0262	31	空(周輪)	L17	—	(8.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	表探、空輪半壊、突起欠。
A-0263	48	空(周輪)	L16	—	(10.6)	—	—	—	—	(11.5)	(9.1)	—	—	—	突起欠、長輪欠失。
A-0264	98	空(周輪)	K16	—	(10.5)	—	—	—	—	(9.5)	(7.7)	—	—	—	破損。
A-0265	105	空(周輪)	L16 196号基	—	(7.9)	—	—	—	—	(12.6)	—	—	—	—	空輪半壊。
A-0266	106	空(周輪)	K16 195号基	—	(12.2)	—	—	—	—	(11.2)	(9.7)	—	—	—	空輪縦方向に半壊。
A-0267	114	空(周輪)	J19 320号基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	頭部割れ計測不可。
A-0268	122	空(周輪)	J19	—	(15.6)	—	—	—	—	(10.7)	(7.4)	—	—	—	空輪突起小欠。対1/3倒壊。
A-0269	123	空(周輪)	J19	—	(9.4)	—	—	—	—	10.2	(9.0)	—	—	—	風輪欠損。
A-0270	123	空(周輪)	J20 327号基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	著しく崩壊し計測不可。
A-0271	143	空(周輪)	L22 372号基	—	(11.3)	—	—	—	(10.0)	—	—	—	—	—	破損。
A-0272	145	空(周輪)	K17 284号基	—	(8.5)	—	—	—	(9.9)	—	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0273	184	空(周輪)	O15	(16.5)	(13.8)	—	—	—	—	12.7	11.6	—	—	—	風輪欠損。
A-0274	233	空(周輪)	N16 87号基	—	(10.2)	—	—	—	(10.3)	(6.6)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0275	307	空(周輪)	N16	—	(10.0)	—	—	—	9.8	(8.4)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0276	353	空(周輪)	N16 87号基	—	(11.8)	—	—	—	(12.8)	(10.7)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0277	376	空(周輪)	J14 166号基	—	(9.9)	—	—	—	11.6	7.2	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0278	387	空(周輪)	I14 181号基	—	7.7	—	—	—	9.2	6.7	—	—	—	—	相輪宝珠の可能性。
A-0279	405	空(周輪)	M24	—	(14.8)	—	—	—	—	11.7	(8.4)	—	—	—	半壊、風輪欠失。
A-0280	417	空(周輪)	25 454号基	—	(14.9)	—	—	—	—	13.1	(10.8)	—	—	—	風輪欠損。
A-0281	425	空(周輪)	N25 454号基	—	(12.0)	—	—	—	—	8.6	(7.2)	—	—	—	風輪欠損。
A-0282	432	空(周輪)	O26 456号基	—	(10.1)	—	—	—	—	9.9	(8.3)	—	—	—	風輪欠損。
A-0283	443	空(周輪)	M25 437号基	—	(8.0)	—	—	—	(10.3)	(7.9)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0284	446	空(周輪)	M25 433号基	—	(12.4)	—	—	—	—	11.4	(8.9)	—	—	—	風輪欠損。
A-0285	448	空(周輪)	M25	—	(12.1)	—	—	—	—	(13.0)	(11.8)	—	—	—	—
A-0286	465	空(周輪)	M24 421号基	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	計測不可。
A-0287	531	空(周輪)	J21 362号基	—	12.3	—	—	—	—	8.6	(7.5)	—	—	—	風輪欠損。
A-0288	591	空(周輪)	J18	—	(10.7)	—	—	—	—	11.4	(8.0)	—	—	—	風輪欠損。
A-0289	604	空(周輪)	K17 282号基	—	(15.3)	—	—	—	—	14.0	(12.3)	—	—	—	風輪欠損。
A-0290	609	空(周輪)	J17 288号基	—	(9.1)	—	—	—	—	(8.9)	(6.4)	—	—	—	対方向に半壊、風輪欠損。
A-0291	631	空(周輪)	I14 181号基	—	(12.2)	—	—	—	—	(11.7)	(10.1)	—	—	—	対方向に半壊、風輪欠損。
A-0292	706	空(周輪)	P12 65号基	—	(10.4)	—	—	—	(10.4)	(7.1)	—	—	—	—	対方向に半壊、風輪欠損。
A-0293	760	空(周輪)	S11 129号基 底下	—	(6.0)	—	—	—	(10.7)	—	—	—	—	—	1/3残、風輪欠損。
A-0294	760	空(周輪)	Q13 37号基	(10.1)	(7.5)	(2.6)	—	—	(10.1)	(7.5)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0295	785	空(周輪)	L16 183号基 北西石組	—	(10.3)	—	—	—	(11.2)	(10.0)	—	—	—	—	対方向に半壊、風輪欠損。
A-0296	792	空(周輪)	L16	—	(8.4)	—	—	—	(11.3)	(8.8)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0297	792	空(周輪)	L16	—	(9.6)	—	—	—	(10.4)	(9.9)	—	—	—	—	—
A-0298	903	空(周輪)	Q26 460号基	—	(13.2)	—	—	—	(10.7)	(8.9)	—	—	—	—	風輪欠損。
A-0299	907	空(周輪)	K16	—	(14.6)	—	—	—	(12.4)	(9.9)	—	—	—	—	風輪欠損、対方向に半壊。
A-0300	913	空(周輪)	K14 155号基	—	(7.6)	—	—	—	(9.2)	(8.5)	—	—	—	—	風輪欠損。採取番号の同じ一石五輪塔A-0948あり。
A-0301	920	空(周輪)	N25 450号基	—	(13.7)	—	—	—	(14.3)	(7.3)	—	—	—	—	区画配石に転用、対方向に半壊、風輪欠損。
A-0302	1039	空(周輪)	L16 183号基	—	9.2	—	—	—	(11.7)	(8.9)	—	—	—	—	半壊、風輪欠損。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第52～56図）

報告番号	採取番号	出土部位 名所	出土場所	各 部 位 法 番										備 考 標		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k		
A0303	8	火輪	I 14	(15.0)	(9.6)	4.8	0.6	(7.7)	0.6	(3.7)	(11.0)	(4.8)	20.6	19.6	表採、上部欠損。第54回	
A0304	10	火輪	K 20	9.0	5.3	3.4	0.3	3.9	0.8	3.1	6.4	4.6	15.0	13.8	表採。	
A0305	20	火輪	I 14	10.2	6.0	3.7	0.5	4.5	1.3	3.4	6.7	5.0	16.5	16.0	表採、砂呑。	
A0306	24	火輪	L 13	(13.9)	(6.6)	4.6	0.5	(7.3)	(2.2)	—	(7.7)	—	(19.3)	—	表採、半壙、連結孔無。	
A0307	28	火輪	不明	(13.5)	(4.7)	(4.1)	(0.5)	(8.3)	(3.7)	2.8	9.0	5.2	18.5	(17.9)	一部欠損。	
A0308	34	火輪	M 24	10.5	(6.2)	2.5	0.5	(4.3)	(1.3)	4.8	7.6	5.3	17.5	16.7	表採。	
A0309	36	火輪	L 10	(9.0)	(2.4)	(0.0)	(1.3)	(6.3)	(2.0)	—	(10.8)	—	17.5	(16.3)	表採、上部半壙、連結孔無。	
A0310	40	火輪	N 16	11.7	7.0	4.2	0.5	4.2	1.2	2.6	8.3	4.8	17.4	16.4	斜面表採。	
A0311	41	火輪	N 16	9.6	5.4	3.7	0.5	5.2	1.2	3.4	7.8	4.4	16.6	15.6	斜面表採。	
A0312	43	火輪	N 16	(9.9)	(5.0)	2.7	0.3	4.9	1.9	3.0	(7.9)	(5.1)	17.0	15.4	斜面表採、欠損あり。	
A0313	58	火輪	L 17 197号墓	9.3	6.4	2.6	0.3	4.5	0.9	3.4	6.8	4.5	16.4	14.8	表採。	
A0314	91	火輪	K 17	12.2	5.4	2.7	0.8	6.8	3.3	4.6	9.2	6.3	18.4	18.2		
A0315	92	火輪	195号墓	K 17	10.2	6.3	3.4	0.5	5.0	0.8	4.3	7.0	5.0	18.4	17.7	
A0316	98	火輪	K 16	(7.4)	(3.5)	(3.9)	—	—	—	(9.5)	—	(13.2)	—	破損。		
A0317	101	火輪	K 17 206号墓	(8.4)	(3.7)	(1.9)	(0.5)	(4.9)	(2.3)	(3.2)	(6.4)	(5.5)	16.8	(15.4)	火輪半壙。	
A0318	113	火輪	J 19 321号墓	8.9	4.5	3.0	0.4	4.4	1.0	3.8	6.8	4.9	14.5	13.4	縱方向に半壙。	
A0319	115	火輪	J 19 318号墓	(5.6)	(1.0)	(1.4)	(0.3)	(4.6)	(2.9)	—	(7.9)	—	(12.7)	(12.4)	上部半壙、水輪欠か、連結孔無。	
A0320	117	火輪	J 19	(8.3)	(5.0)	(3.0)	(0.4)	(4.2)	(0.8)	(2.8)	(6.9)	(4.2)	(15.8)	(14.8)	全体摩耗欠損顯著。	
A0321	120	火輪	J 19 306号墓	8.4	4.9	3.3	0.2	4.3	0.4	3.5	7.7	4.8	16.3	15.2	一部欠損。	
A0322	132	火輪	K 20	8.2	4.8	2.8	0.6	(4.0)	(0.6)	3.0	6.5	4.8	15.9	(14.9)	小穴あり。第54回	
A0323	149	火輪	J 16	(12.7)	(5.6)	(3.4)	(1.0)	(7.1)	(2.7)	—	—	—	(17.1)	(16.6)	破損。	
A0324	151	火輪	J 18 293号墓	(8.9)	(3.8)	(2.4)	(0.6)	(5.1)	(2.1)	(3.8)	(7.1)	(5.1)	(16.6)	(16.0)	凹溝突端部欠損。	
A0325	158	火輪	N 15	14.1	9.8	3.2	1.1	(3.7)	(3.6)	—	(12.0)	—	(23.6)	(21.4)	梵字入り、連結孔無。第54回	
A0326	168	火輪	N 15	12.3	7.0	5.0	0.3	(8.6)	0.2	5.8	9.3	7.4	(20.0)	16.6	第54回	
A0327	169	火輪	N 15	11.2	7.6	3.0	0.6	4.6	1.0	3.5	7.8	4.9	16.8	16.0		
A0328	170	火輪	N 15	8.3	5.4	2.6	0.3	3.6	1.3	2.2	6.5	4.0	13.7	13.0		
A0329	175	火輪	N 15	8.2	5.2	2.6	0.4	4.7	0.7	2.7	7.5	4.8	16.6	14.9	第54回	
A0330	194	火輪	N 16	(10.3)	(4.3)	(3.2)	(0.5)	(6.0)	(2.3)	(3.6)	(7.9)	(5.6)	15.7	14.3	上部欠損。	
A0331	200	火輪	N 14 75号墓	9.1	6.0	2.6	0.5	(4.6)	0.4	3.8	7.1	5.5	16.2	14.9		
A0332	212	火輪	N 15 東斜面	11.2	5.4	2.4	0.8	5.8	2.6	3.4	6.8	4.9	17.7	16.8		
A0333	213	火輪	N 15 東斜面	12.8	7.6	4.6	0.6	4.6	1.6	—	9.1	—	19.1	17.4	連結孔無し。第54回	
A0334	215	火輪	N 15 東斜面	11.8	7.6	3.6	0.6	(5.6)	1.2	4.3	7.9	5.0	19.0	17.0	第54回	
A0335	216	火輪	N 15 東斜面	11.2	7.4	3.5	0.3	(5.4)	0.6	4.2	8.1	4.9	18.7	17.7	第54回	
A0336	227	火輪	N 16 87号墓	9.7	6.0	3.3	0.4	5.4	0.6	3.8	6.8	4.9	16.8	15.2		
A0337	229	火輪	N 16 87号墓	10.4	7.3	2.8	0.3	5.4	0.6	3.8	6.8	4.8	15.7	15.0		
A0338	237	火輪	N 16	19.5	13.0	6.0	0.5	6.2	1.3	2.4	11.3	2.0	30.4	28.5	比較的大、底部に径18.0cm、深さ0.8cmの窪み。第54回	
A0339	239	火輪	N 16	12.2	8.2	3.5	0.5	4.2	1.2	3.4	8.2	4.2	17.8	16.9	第54回	
A0340	244	火輪	N 16 88号墓	12.0	5.6	4.0	2.4	(2.0)	(4.1)	1.0	14.2	1.4	(27.6)	(26.1)	扁平・歪、比較的大。第54回	
A0341	253	火輪	N 15 東斜面	12.3	5.3	4.1	0.3	7.0	2.6	4.0	8.7	5.9	20.3	18.7		
A0342	254	火輪	N 15 東斜面	9.2	6.0	3.0	0.2	(4.6)	0.4	3.8	8.0	5.5	(16.8)	14.6		
A0343	266	火輪	N 17	15.6	8.8	6.6	0.2	7.8	1.3	—	9.6	—	20.0	19.4	連結孔無。第54回	
A0344	271	火輪	N 18	9.5	5.4	3.8	0.3	3.8	0.4	4.4	7.4	5.6	18.0	17.4		
A0345	274	火輪	N 18	11.4	7.4	3.6	0.4	6.2	0.6	4.3	9.0	6.4	20.2	18.0	第54回	
A0346	282	火輪	M 18 201号墓	14.4	8.6	5.3	0.5	6.2	1.2	—	14.2	—	25.4	24.6	やや大ぶり。第54回	
A0347	286	火輪	M 17	15.8	7.2	5.7	0.7	8.6	2.2	—	9.5	—	19.9	19.8		
A0348	294	火輪	N 16 90号墓	(9.8)	(4.2)	3.2	0.2	5.6	(2.2)	(3.7)	(7.7)	(5.1)	17.3	16.2		
A0349	297	火輪	N 15 80号墓	10.8	6.5	4.1	0.2	(4.6)	1.2	—	7.4	—	16.0	15.2	連結孔無。第54回	
A0350	300	火輪	N 16	9.6	4.3	2.6	(0.7)	(5.3)	(2.0)	(3.8)	(7.5)	(5.2)	(16.2)	(14.9)		
A0351	305	火輪	N 16	(10.4)	(5.0)	(4.8)	(0.6)	(5.2)	(1.2)	(4.4)	(7.0)	(8.5)	(16.0)	(14.7)	欠損あり。	

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第54図)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各 部 位 法 量										備 考 標	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A0352	310	火輪	N17	11.2	7.6	3.2	0.4	4.4	1.4	3.8	7.5	4.6	17.8	16.9	一部欠損。
A0353	357	火輪	M14 134号墓	14.0	7.5	6.3	0.2	6.0	1.2	2.6	9.4	5.5	19.0	17.9	底面に幅約0.5cmの脇痕数条。第54回
A0354	358	火輪	L14 141号墓	(7.0)	(4.0)	2.7	0.3	(4.4)	0.4	(2.6)	(7.4)	4.4	16.6	15.4	第54回
A0355	366	火輪	K14 155号墓	12.6	9.0	3.3	0.3	(10.2)	0.3	5.8	9.3	7.2	(23.0)	20.0	一部欠損。第54回
A0356	371	火輪	K14 151号墓	11.2	8.7	2.3	0.2	5.2	0.3	4.6	8.2	6.0	19.8	19.0	連結孔溝滅失し。第54回
A0357	382	火輪	I14	12.6	8.0	4.2	0.4	4.6	1.4	2.2	8.8	5.6	22.2	21.4	底面孔径6.4cm、深さ0.7cm、形状良好で、花形若輪。第54回
A0358	384	火輪	I14	10.7	5.8	4.7	0.2	5.4	0.6	—	(7.9)	—	17.4	16.8	一部欠損。第54回
A0359	389	火輪	I15 174号墓	12.4	7.4	4.6	0.4	9.4	0.4	6.0	8.4	7.7	20.2	17.7	第54回
A0360	396	火輪	I15	11.0	5.8	4.8	0.4	5.9	1.2	—	9.5	—	19.5	18.7	底面に径3.6cm・深さ0.3cmの溝み。第54回
A0361	420	火輪	N25 453号墓	10.2	7.0	2.8	0.4	3.6	0.8	2.8	6.7	4.5	15.2	14.4	第54回
A0362	435	火輪(a)	O26	(10.2)	(6.2)	3.6	0.4	3.6	0.7	(4.2)	(7.0)	5.6	18.5	17.4	
A0363	435	火輪(b)	O26	12.0	8.6	3.0	0.4	5.8	1.8	3.8	7.4	5.0	18.0	17.2	第54回
A0364	447	火輪	M25 438号墓	(9.9)	(4.7)	(2.6)	(0.5)	(5.2)	(2.1)	3.4	8.2	5.5	17.6	(17.3)	
A0365	454	火輪	M24 415号墓	8.4	4.2	3.8	0.4	4.8	0.6	3.4	8.5	5.6	16.8	16.0	一部欠損。
A0366	457	火輪	M24 417号墓	10.6	6.5	3.8	0.3	5.4	0.3	4.6	8.3	5.4	18.5	17.2	底面に幅1.5cm・深さ0.6cmの溝痕跡が9.0cmの円周状に残る。第54回
A0367	459	火輪	M24	10.6	5.8	3.9	0.9	4.0	1.4	—	8.0	—	17.4	16.8	連結孔無。
A0368	470	火輪	M24 419号墓	9.7	5.6	3.8	0.3	4.0	1.3	—	9.0	—	17.6	16.8	連結孔無。
A0369	478	火輪	M24 247号墓	17.0	10.6	6.2	0.2	(7.6)	1.4	3.1	11.6	5.0	21.4	21.0	第54回
A0370	482	火輪	N23 241号墓	12.8	7.8	4.4	0.6	5.8	1.2	4.4	9.6	6.6	19.4	18.0	一部欠、両地点出土のA0623号輪あり。第54回
A0371	483	火輪(a)	O23	12.0	6.8	4.5	0.4	6.5	0.8	3.0	8.0	4.7	18.2	17.6	
A0372	483	火輪(b)	O23	—	—	(5.5)	(0.2)	(9.3)	(3.6)	—	—	—	(17.1)	(16.7)	1/4残、実測不可。第54回
A0373	484	火輪	O23	9.4	7.0	2.0	0.4	2.4	2.0	1.8	7.2	1.5	14.8	13.8	A0123空腹輪とセット関係。
A0374	485	火輪	O23	—	—	(5.3)	(0.3)	(9.1)	(3.5)	—	—	—	(16.8)	(16.3)	半埋。
A0375	496	火輪	M23 228号墓	9.2	6.0	2.7	0.4	4.0	0.8	2.6	6.8	4.2	15.2	14.6	底面に幅0.2cmの脇跡が溝痕状に残る。第54回
A0376	498	火輪	M22	(10.0)	(3.4)	1.7	0.6	(6.6)	(4.3)	—	—	—	(20.4)	(19.6)	傾1/3残。
A0377	505	火輪	M23 400号墓	10.0	5.6	4.0	0.4	4.3	1.4	—	7.0	—	16.9	16.3	連結孔無。
A0378	509	火輪	M23	(9.7)	(4.1)	3.3	0.2	5.6	2.1	(3.8)	(9.3)	(5.2)	19.0	18.4	
A0379	511	火輪	M23 407号墓	(11.8)	(6.1)	(2.5)	(1.0)	(5.7)	(2.2)	(2.8)	—	—	(18.6)	(17.5)	半埋。
A0380	513	火輪	M23 406号墓	10.2	6.1	3.6	0.6	4.0	1.0	—	8.0	—	17.0	16.3	連結孔無。
A0381	516	火輪	L23 401号墓	(13.5)	(3.8)	(3.9)	(0.3)	(9.7)	(5.5)	(6.9)	(10.5)	(7.7)	(22.7)	(19.7)	底方向に半埋。
A0382	519	火輪	L23 389号墓	(9.5)	(3.6)	(3.4)	(0.6)	(5.9)	(1.9)	(3.5)	—	—	(16.4)	—	底方向に半埋。
A0383	521	火輪	M21	15.4	9.4	5.6	0.4	7.2	1.3	2.8	8.9	5.2	18.8	18.2	第54回
A0384	523	火輪	L21	14.0	8.0	5.6	0.4	6.0	1.0	2.5	7.8	5.6	17.6	16.9	一部欠損。第54回
A0385	528	火輪	K21 355号墓	11.2	5.6	5.2	0.4	5.4	0.6	—	8.5	—	18.0	17.4	連結孔無。
A0386	535	火輪	L22 372号墓	(9.1)	(5.2)	1.7	0.3	(3.9)	(1.9)	(4.2)	—	—	16.1	15.6	上座欠。
A0387	539	火輪	L22 384号墓	12.0	8.5	2.9	0.6	(6.9)	1.5	4.1	7.2	5.0	18.6	17.9	一部欠損。第54回
A0388	542	火輪	L22 395号墓	(8.8)	(3.9)	(2.4)	0.3	(4.9)	(2.2)	(3.3)	7.5	5.3	16.9	17.0	
A0389	544	火輪	K22 379号墓	11.5	(4.8)	3.6	0.1	(6.7)	(3.0)	3.8	8.9	5.7	19.1	17.7	
A0390	546	火輪	K22 354号墓	15.7	12.4	2.7	0.6	3.8	1.2	—	10.2	—	23.2	22.2	やや大ぶり、笠部の反りなく特異な形状。連結孔無し。第54回
A0391	555	火輪	K19 317号墓	11.4	8.0	3.0	0.4	4.5	1.3	3.8	8.1	5.4	19.1	17.9	底部に駆出。
A0392	568	火輪	J19	8.6	5.2	3.0	0.4	5.3	0.4	4.2	7.8	5.2	16.5	15.3	
A0393	572	火輪	J19	8.7	6.0	2.4	0.3	3.8	0.3	4.2	7.2	5.3	17.4	15.6	
A0394	573	火輪	J19	9.6	6.1	3.1	0.4	4.4	0.7	3.5	(8.0)	5.0	17.8	16.1	一部欠損。
A0395	584	火輪	J19 324号墓	11.1	7.2	3.6	0.3	4.9	0.4	4.2	7.8	4.7	17.8	16.0	第54回
A0396	586	火輪	J18 300号墓	10.2	6.0	3.8	0.4	4.0	2.0	3.7	8.5	5.4	17.0	16.6	第54回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第54回)

報告番号	採取番号	出土部位 名稱	出土場所	各 部 位 法 算										備 考 標	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0397	590	火輪	J18	12.0	7.3	4.3	0.4	5.3	1.6	2.7	8.5	4.5	17.2	16.2	第54回
A0398	611	火輪	J16	13.0	7.5	5.0	0.5	4.8	1.8	2.8	7.7	4.7	19.7	19.2	風化による摩滅跡有。
A0399	612	火輪	J16	12.2	8.0	3.4	0.8	5.8	1.4	3.3	8.9	4.9	20.8	19.7	一部欠損。
A0400	614	火輪	J16	(9.2)	(5.3)	3.6	0.3	(5.5)	0.3	4.2	7.7	4.2	(16.9)	15.5	一部欠損。
A0401	619	火輪	J15 173号墓	(10.7)	(4.6)	(4.4)	(0.3)	(6.1)	(1.4)	—	—	—	(17.5)	(17.9)	擦傷。
A0402	622	火輪	J15	12.1	8.3	3.4	0.4	6.0	0.6	3.8	7.9	5.1	18.0	17.5	A0532水輪と同一地点伴出。
A0403	630	火輪	J14	10.2	6.8	3.2	0.2	4.8	0.8	4.4	8.2	5.2	18.0	15.8	一部欠損。連結孔の底部中央に更に埋2cm、深さ6cmの溝有り。
A0404	633	火輪	J16	8.8	6.0	2.4	0.4	(3.8)	(0.6)	3.8	6.8	5.0	(15.2)	(14.4)	一部欠損。
A0405	638	火輪	K15	(8.0)	(3.5)	(1.9)	(0.3)	(4.5)	(2.3)	(1.9)	—	(4.1)	(15.7)	(15.4)	半壊上部欠。
A0406	642	火輪	J14 167号墓	11.7	5.6	3.6	0.9	6.1	1.6	2.0	7.8	5.0	(16.8)	(16.5)	
A0407	655	火輪	M14 128号墓	12.3	7.5	4.6	0.2	5.6	0.6	3.6	8.9	5.4	17.5	16.2	第54回
A0408	656	火輪	M13 北斜面	10.9	6.0	4.5	0.4	6.0	1.0	—	8.7	—	18.2	17.6	一部欠損。連結孔無し。
A0409	661	火輪	N13 124号墓 東側	9.7	4.9	4.5	0.3	4.6	0.8	—	9.4	—	16.7	15.6	連結孔無。
A0410	665	火輪	N13 122号墓	10.7	7.3	3.1	0.3	5.1	0.9	2.3	8.0	4.6	16.0	15.2	一部欠損。第54回
A0411	666	火輪	N14 130号墓	10.0	7.0	2.7	0.3	4.9	0.3	3.9	8.4	5.5	18.1	15.6	
A0412	667	火輪	N14 130号墓	11.5	6.4	4.8	0.3	5.0	0.5	4.6	8.3	5.5	19.5	18.3	一部欠損。
A0413	671	火輪	O13 68号墓	11.7	7.5	3.8	0.4	4.8	0.8	5.0	8.8	6.0	19.8	18.4	
A0414	674	火輪	O13 68号墓南	(12.0)	(4.3)	(3.6)	(0.1)	(7.7)	(4.0)	(3.6)	(13.2)	(6.0)	21.4	19.2	半壊。
A0415	682	火輪	P13 71号墓	10.9	5.4	5.2	0.3	5.1	0.8	3.4	8.3	5.4	18.2	16.4	一部欠損。
A0416	685	火輪	P13 71号墓南	9.8	5.0	2.6	0.7	4.8	1.5	4.5	7.3	4.9	16.7	16.0	
A0417	694	火輪	P13 64号墓 東斜面	9.1	5.9	2.9	0.3	4.2	0.5	2.9	8.0	4.7	16.4	14.6	
A0418	695	火輪	P~Q13 42号墓西	8.6	5.0	3.3	0.3	4.0	0.7	3.2	6.0	4.3	14.4	12.9	第54回
A0419	697	火輪	P13 64号墓 東斜面	(10.0)	(6.6)	3.1	0.3	(4.5)	0.5	(3.8)	(9.3)	4.9	(19.3)	(18.2)	欠損あり。
A0420	699	火輪	P13 64号墓 東斜面	8.8	5.5	2.9	0.4	3.9	0.4	4.2	7.0	5.3	16.2	15.4	欠損あり。
A0421	701	火輪	P13 64号墓 東斜面下	8.7	6.1	2.3	0.3	4.2	0.4	3.5	8.0	5.3	16.2	15.0	一部欠損。第54回
A0422	709	火輪	P12 62号墓	10.8	7.4	2.8	0.6	4.5	0.9	3.6	7.1	4.6	17.8	17.0	欠損あり。
A0423	718	火輪	P12 62号墓 東斜面下	10.8	6.8	3.6	0.4	4.3	1.7	—	8.4	—	17.6	16.9	連結孔無し。第54回
A0424	723	火輪	P13 71号	9.0	5.8	3.0	0.2	(5.4)	(0.7)	3.9	7.1	5.0	(17.4)	(16.4)	擦傷あり。第54回
A0425	727	火輪	Q12 40号墓	10.1	4.3	2.9	0.2	5.8	2.7	(3.9)	(7.6)	(4.7)	17.4	16.2	上部小欠。
A0426	732	火輪	Q11 38号墓北	15.4	8.2	6.5	0.7	7.5	2.0	—	10.6	—	20.5	19.1	一部欠損。第54回
A0427	765	火輪	S11 12号墓	(12.6)	(4.2)	(5.0)	—	(8.6)	(3.6)	(6.5)	—	—	(21.4)	(20.0)	擦傷。
A0428	793	火輪	L16 196号墓 東石組	—	—	—	—	—	—	3.4	7.2	4.8	15.6	15.2	縦方向に半壊。
A0429	795	火輪	L16 196号墓 東石組 199号墓 199号墓 の中间	(13.2)	(5.8)	(1.3)	(0.3)	(7.4)	(5.8)	—	(11.9)	—	(19.7)	(18.5)	上部擦傷。
A0430	797	火輪	O12	10.7	6.8	3.5	0.2	(4.7)	(0.5)	4.2	8.5	5.5	(18.6)	(17.4)	擦傷あり。第54回
A0431	801	火輪	O12	10.8	7.6	2.8	0.4	3.8	1.0	4.4	6.8	5.3	16.3	15.8	一部欠損。第54回
A0432	809	火輪	P14 50号墓	12.0	7.9	3.7	0.4	4.9	1.7	3.8	8.3	5.3	17.4	16.8	一部欠損。第54回
A0433	810	火輪	P14	10.6	7.0	3.2	0.4	5.1	0.5	3.0	7.9	4.4	18.2	16.7	一部欠損。第54回
A0434	811	火輪	P14 46号墓	10.8	7.2	3.0	0.6	(4.6)	1.0	3.4	7.5	5.0	(16.7)	(16.2)	一部欠損。第54回
A0435	820	火輪	P14	13.1	9.9	2.8	0.4	(7.3)	0.8	4.1	9.0	6.5	(20.4)	(19.1)	擦傷。第54回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第54図)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量										備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	
A0436	846	火輪	R12 東斜面	7.6	5.2	2.1	0.3	(3.3)	0.4	3.3	6.4	5.1	(15.7)	(15.0)
A0437	850	火輪	S14	11.9	7.9	3.4	0.6	(3.7)	(1.1)	3.2	8.9	5.2	(18.5)	(17.9) 一部欠損。第54回
A0438	853	火輪	S14	(9.5)	(2.5)	4.0	—	(7.0)	(3.0)	—	(16.1)	—	(23.0)	21.2 上部半壊。
A0439	860	火輪	S14	11.6	6.3	2.9	0.4	5.8	0.4	2.9	6.2	4.7	16.4	15.6 第54回
A0440	866	火輪	T10 2号墓	10.8	6.6	3.8	0.4	(5.7)	0.6	4.2	7.2	5.2	17.4	15.5 第54回
A0441	870	火輪	T10 2号墓	(10.1)	(7.0)	2.8	0.3	4.3	0.3	(3.4)	(7.0)	4.7	16.4	14.8 一部欠損。第54回
A0442	871	火輪	T10 2号墓	10.0	5.8	3.8	0.4	6.2	3.0	3.6	8.2	5.6	16.8	15.3 全体に駆出跡明瞭。
A0443	872	火輪	T10 2号墓	11.8	7.3	4.3	0.2	6.0	0.4	3.8	8.4	6.7	19.9	18.0 一部欠損。
A0444	878	火輪	T12	12.5	8.1	4.0	0.4	6.3	0.3	4.2	8.2	6.7	18.9	16.8 一部欠損。
A0445	888	火輪	L14	12.4	7.6	3.8	1.0	(5.6)	1.5	4.9	9.8	6.5	19.7	18.8
A0446	896	火輪	M24 429号墓	(12.0)	(8.2)	3.5	0.3	(5.0)	0.4	(4.2)	(8.5)	5.4	(18.7)	17.0 第54回
A0447	899	火輪	O26 460号墓	10.4	6.7	3.4	0.3	5.0	0.7	3.1	7.5	5.1	16.1	15.0 風化顯著、縫割れ多。第54回
A0448	901	火輪	O26 460号墓	9.6	5.7	3.3	0.6	(5.0)	0.7	3.4	6.5	4.3	16.2	15.6 一部欠損。
A0449	904	火輪	K22	11.0	7.0	3.5	0.5	5.5	0.3	5.0	10.0	5.7	19.5	17.9 上部少欠。
A0450	909	火輪	Q23 243号墓北	11.9	8.5	3.0	0.4	5.3	1.4	4.1	8.1	5.1	17.1	16.9 一部欠損あり。第54回
A0451	938	火輪	K20 354号墓	11.7	7.5	3.9	0.3	5.2	0.6	0	8.2	0	(15.6)	18.2 A0254空風輪・A0552水輪・A0698地輪とそれぞれセット関係ある。第51回
A0452	940	火輪	J20 328号墓	(11.2)	(2.5)	3.3	0.3	(8.7)	(5.1)	(4.9)	(12.3)	(6.8)	(18.9)	17.7 区画配石に軽用、半壊。
A0453	950	火輪	I18 290号墓	8.0	4.4	3.2	0.4	5.5	0.4	3.3	8.8	6.2	16.9	15.4 一部欠損。第54回
A0454	979	火輪	N14 130号墓	13.3	9.4	3.5	0.4	(8.0)	0.6	5.0	9.4	6.8	21.6	19.4 一部欠損。底部中央に径5.6cm、深さ0.4cmの底みあり。第54回
A0455	1013	火輪	S10 1号墓	10.7	6.6	3.6	0.5	6.3	0.9	3.2	7.5	5.2	16.9	16.0 一部欠損。
A0456	1016	火輪	T10 1号墓	9.7	7.1	2.2	0.4	(4.5)	0.4	3.2	7.8	5.1	(17.4)	15.8 欠損有り。
A0457	1020	火輪	S13	11.7	7.3	3.6	1.0	5.4	0.8	5.3	8.3	6.0	20.4	20.0
A0458	1022	火輪	M16 184号墓	10.9	7.9	2.6	0.4	5.1	0.4	4.5	7.5	5.3	17.3	16.4
A0459	1031	火輪	L16 183号墓	12.9	8.4	4.0	0.5	5.8	1.0	2.6	7.7	5.2	18.3	17.6 第54回
A0460	1032	火輪	L16 183号墓	(10.4)	(6.8)	3.2	0.4	(4.7)	0.7	(3.3)	(7.7)	4.9	17.1	16.4 上部欠損。
A0461	1045	火輪?	L16 183号墓	9.5	7.2	2.0	0.3	(4.2)	0.4	(3.8)	(7.8)	5.9	(16.5)	(15.0) 困謬あり。
A0462	1048	火輪	L16 183号墓	10.3	6.6	3.4	0.3	5.0	0.6	2.9	7.9	5.0	16.4	14.4 欠損有り。
A0463	1049	火輪	L16 183号墓	17.7	13.4	3.9	0.4	5.1	1.0	2.0	11.0	7.2	26.9	25.3 大形製品。第54回
A0464	1051	火輪	L16 183号墓	12.7	8.4	4.0	0.3	4.5	1.4	—	9.8	—	22.4	18.6 連結孔無し。
A0465	1052	火輪	L16 183号墓	12.4	8.4	3.6	0.4	6.4	1.0	3.0	8.9	5.0	17.6	17.1 第54回
A0466	1053	火輪	L16 183号墓	12.5	7.3	4.6	0.6	5.8	1.4	3.2	7.6	3.0	18.0	17.3 従欠損。第54回
A0467	1057	火輪	L16 183号墓	8.9	(3.1)	(2.0)	0.6	(5.8)	(3.2)	3.4	8.0	5.7	19.4	18.5 欠損有り。
A0468	1062	火輪	N25下層 S.K.593	—	—	3.0	0.4	4.5	(0.4)	—	—	—	(16.2)	(15.4) 振壙著し。
A0469	1063	火輪	J20 下層	8.9	5.0	3.3	0.6	(4.6)	1.0	3.4	7.0	4.8	(16.6)	(15.0) 欠損あり。
火輪各部位法量平均値				11.2	6.9	3.6	0.4	5.2	1.0	3.6	8.2	5.1	18.1	17.0 () 内数値は除外して計算した。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第54図）

報告番号	採取番号	出土部位 名所	出土場所	各 部 位 法 算											備 考 標
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0470	30	水輪	L18	(11.1)	(5.6)	(11.0)	(12.9)	(15.9)							表採、欠損あり。
A0471	46	水輪	L16	13.0	6.3	9.9	11.2	16.6							上部少々。
A0472	49	水輪	N16	11.9	5.0	11.4	11.7	18.3							斜面表採。
A0473	61	水輪	K17	13.1	6.5	9.7	9.6	16.1							
A0474	62	水輪	K17 195号基	14.3	7.5	11.6	10.9	18.6							第54回
A0475	65	水輪	O23 244号基	13.6	7.9	11.2	11.8	18.5							縦下斜面転倒。第54回
A0476	90	水輪	L18 209号基	—	—	—	—	—							計測不可。
A0477	94	水輪	K17	12.4	7.5	11.3	10.6	17.0							
A0478	148	水輪	J17 279号基	(12.2)	(7.0)	11.0	—	18.0							下部3分の欠失。
A0479	152	水輪	K18	15.0	6.3	12.5	11.5	19.4							第54回
A0480	155	水輪	K19 310号基	11.8	8.0	8.6	7.9	15.2							第54回
A0481	163	水輪	N15	14.6	7.3	15.8	15.4	21.7							第54回
A0482	166	水輪	N15	13.8	6.8	12.3	12.8	19.6							第54回
A0483	197	水輪	N16	12.5	7.3	11.4	11.4	18.9							第54回
A0484	199	水輪	N16	11.9	5.5	10.3	11.7	16.4							第54回
A0485	211	水輪	N15	15.6	8.2	14.2	14.1	21.7							裏斜面。第54回
A0486	214	水輪	N15	13.0	7.4	12.6	12.6	19.8							裏斜面。第54回
A0487	242	水輪	N16 88号基	12.6	6.2	10.9	11.3	18.0							第54回
A0488	245	水輪	N16	15.0	7.3	16.6	16.7	22.8							梵字入り。第54回
A0489	248	水輪	N16 89号基	12.4	8.0	11.3	9.3	16.6							第54回
A0490	251	水輪	N16 92号基	11.3	5.8	10.2	11.6	17.2							第54回
A0491	258	水輪	N15 東斜面	12.7	6.2	9.8	10.1	16.9							
A0492	259	水輪	N15 東斜面	10.6	5.4	14.3	13.5	19.2							第54回
A0493	260	水輪	N15 東斜面	12.7	6.1	9.2	10.1	17.2							
A0494	270	水輪	N18	13.0	6.7	10.4	9.7	17.6							
A0495	285	水輪	M17 (14.8)	(7.1)	16.2	—	23.0								3分の欠失。
A0496	291	水輪	N16 92号基	12.8	6.0	10.5	10.1	17.3							A0600地輪と同一地点併出。第54回
A0497	306	水輪	N16	12.8	7.7	10.3	10.3	16.5							第54回
A0498	312	水輪	N19	13.0	6.6	12.0	12.1	20.0							斜面。第54回
A0499	328	水輪	N16	23.7	12.2	14.5	14.6	29.3							
A0500	337	水輪	O14 東斜面	14.7	7.9	14.1	13.9	21.2							駆打痕。第54回
A0501	338	水輪	O14	13.6	5.5	10.6	10.8	18.8							第54回
A0502	342	水輪	O14 (10.6)	—	—	—	—	(15.3)							半導。
A0503	347	水輪	N15 79号基	11.1	5.5	9.3	10.8	15.8							第54回
A0504	355	水輪	M17 131号基	(13.7)	(7.6)	—	11.2	(18.2)							
A0505	356	水輪	M14 134号基	11.5	6.2	11.3	10.5	16.9							第54回
A0506	364	水輪	L14 142号基	16.4	8.8	11.9	12.0	20.8							第54回
A0507	377	水輪	J14 166号基	12.4	6.4	10.7	10.5	17.4							
A0508	392	水輪	I15 175号基	11.3	6.4	9.6	9.6	15.2							
A0509	414	水輪	N25 454号基	11.1	6.2	6.9	7.9	15.0							
A0510	437	水輪	M25 448号基	(13.5)	(9.3)	(9.9)	(11.2)	(17.2)							縦方向に半載。
A0511	450	水輪	M24 416号基	10.8	6.4	10.5	9.9	16.0							第54回
A0512	460	水輪	M24	10.3	5.6	10.2	10.2	14.8							
A0513	486	水輪	N22 234号基	22.8	11.0	19.0	17.2	30.3							梵字入り。第54回
A0514	489	水輪	N22	10.8	6.3	9.8	9.2	16.2							第54回
A0515	506	水輪	M23 400号基	13.9	7.3	15.4	15.7	22.2							第54回
A0516	507	水輪	M23 400号基	15.3	8.2	11.8	11.9	20.0							第54回
A0517	512	水輪	M23	11.6	6.4	9.1	9.7	16.3							第54回
A0518	514	水輪	M23 408号基	7.8	4.7	9.4	7.6	12.4							
A0519	520	水輪	M21	14.9	7.6	13.8	13.2	21.4							第54回
A0520	543	水輪	L23 395号基	(12.0)	—	(8.8)	—	(14.9)							縦方向に半載。
A0521	554	水輪	K19	15.3	8.3	11.7	12.2	22.0							第54回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第54回)

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量										備考欄	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
A0522	557	水輪	K19	122	65	9.5	9.2	17.0							第54回
A0523	564	水輪	J19	16.0	9.3	10.7	10.4	19.4							第54回
A0524	583	水輪	I19 324号基	(12.3)	(6.9)	(9.7)	(8.5)	(15.3)							履方向に半壊。
A0525	587	水輪	J18	11.9	5.8	11.2	10.9	17.5							第54回
A0526	588	水輪	J18	(16.2)	(8.8)	(14.7)	(14.0)	(22.9)							半壊、採取番号589・588とで一體。
A0527	594	水輪	L18	12.2	6.2	12.4	11.6	17.7							第54回
A0528	595	水輪	L18 209号基	16.1	8.1	11.8	12.3	19.7							第54回
A0529	603	水輪	K17 282号基	12.5	5.9	10.1	10.0	16.6							第54回
A0530	606	水輪	I17 275号基	11.6	5.7	(10.0)	11.0	(16.7)							第54回
A0531	608	水輪	J17	10.6	6.3	8.4	8.0	15.0							
A0532	623	水輪	J15	—	—	—	—	—							A0402火輪と同一地点併出。
A0533	626	水輪	J15	15.7	8.1	12.6	13.3	22.5							第54回
A0534	698	水輪	P13 64号基 東斜面	12.1	5.8	9.2	9.7	15.2							
A0535	700	水輪	P13 64号基 東斜面	13.6	6.2	10.2	10.3	17.5							第54回
A0536	712	水輪	P12 62号基	13.1	7.0	11.6	11.9	18.5							第54回
A0537	716	水輪	P12 62号基 東斜面下	16.6	8.6	12.6	12.7	20.4							上面剝離痕。第54回
A0538	717	水輪	P12 62号基 東斜面下	14.3	6.5	10.2	10.7	18.7							全面に剝離痕。第54回
A0539	744	水輪	R11 299号基	13.0	7.2	10.4	9.4	16.4							
A0540	745	水輪	R11 299号基	10.2	6.0	8.9	9.1	14.6							第54回
A0541	747	水輪	R11 299号基	10.3	5.2	10.0	8.6	15.2							第54回
A0542	772	水輪	S11 18号基	12.5	6.7	9.6	10.3	16.4							圓孔。
A0543	780	水輪	S12 21号基座	(13.8)	(7.4)	(8.7)	(11.6)	(17.9)							履方向に半壊。
A0544	783	水輪	S12	(5.5)	—	—	(10.5)	(15.1)							横方向に半壊。
A0545	800	水輪	O12	13.4	7.6	11.1	10.1	16.9							第54回
A0546	802	水輪	O12	11.8	6.3	10.6	10.8	16.6							第54回
A0547	861	水輪	S14	14.8	9.2	11.2	11.4	19.3							第54回
A0548	867	水輪	T10 2号基	14.9	8.0	11.3	10.3	18.4							第54回
A0549	887	水輪	K17	13.7	6.3	10.2	10.9	17.6							第54回
A0550	900	水輪	O26 466号基	11.9	5.1	10.3	10.8	17.3							第54回
A0551	906	水輪	H17	14.3	8.1	12.4	11.1	19.0							
A0552	938	水輪	K20 354号基	12.4	6.5	9.4	9.6	18.3							A0259空気輪・A0451火輪・A0698 地輪とでそれぞれセット關係にある。 第51回
A0553	996	水輪	P14 52号基	12.8	6.8	10.0	10.0	17.0							第54回
A0554	1028	水輪	L17 207号基	15.5	8.6	13.2	12.6	20.4							第54回
A0555	1029	水輪	L17 205号基	14.7	7.4	11.0	19.5	19.4							径9.0、深さ22cmの底みあり。第54回
A0556	1033	水輪	L16 183号基	11.2	4.6	9.0	11.4	15.9							第54回
A0557	1035	水輪	L16 183号基	12.1	5.9	12.0	11.8	18.1							
A0558	1036	水輪	L16 183号基	12.8	5.8	9.9	10.8	17.8							
A0559	1038	水輪	L16 183号基	14.1	6.7	10.6	10.4	18.5							第54回
A0560	1040	水輪	L16 183号基	12.8	5.6	10.5	10.9	17.5							
A0561	1044	水輪	L16 183号基	12.3	5.8	13.4	13.1	18.1							
A0562	1047	水輪	L16 183号基	14.1	7.3	(14.8)	14.9	(20.3)							履方向に半壊。
A0563	1054	水輪	L16 183号基	12.3	6.6	10.8	11.7	18.4							
A0564	1056	水輪	L16 183号基	13.3	6.4	10.5	10.6	17.5							
A0565	1058	水輪	M18 100号基 西斜面下	(12.0)	(6.4)	9.6	(11.9)	15.2							破損。

水輪各部位法量平均値

132 6.8 11.2 11.3 18.3

注意：() 内の不確定数値は除外して計算した。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第54回）

報告番号	採取番号	出土部位 名稱	出土場所	各 部 位 法 算											備 考 標
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0566	9	地輪	L14	16.8	11.3										表採。第55回
A0567	19	地輪か	L14	18.5	12.9										表採。砂砲、上部欠損（水地輪かも）。
A0568	26	地輪	L16	18.8	14.5										表採。
A0569	32	地輪	L17	17.4	12.2										表採。第55回
A0570	71	地輪	L16 183号墓	17.6	13.7										区画配石に転用。
A0571	72	地輪	L16 183号墓	—	—										計測不可。
A0572	74	地輪	L16 183号墓	—	—										計測不可。
A0573	75	地輪	L16 183号墓	18.9	15.3										第55回
A0574	77	地輪	M16 184号墓	—	—										計測不可。
A0575	82	地輪	L17 207号墓	18.7	11.4										片麻岩製。
A0576	83	地輪	L17 203号墓	—	—										磨耗著し計測不可。
A0577	86	地輪	L17 203号墓	—	—										計測不可。
A0578	88	地輪	L17 197号墓	22.3	17.0										第55回
A0579	89	地輪	L17 198号墓	—	—										計測不可。
A0580	101	地輪	K17 206号墓	(20.0)	(9.0)										地輪上部欠損。
A0581	111	地輪	J18 304号墓	16.9	11.0										第55回
A0582	147	地輪	K16 193号墓	(15.9)	(10.8)										
A0583	159	地輪か	N16	27.2	(16.4)										梵字入り。第55回
A0584	186	地輪	N15 76号墓	20.1	16.5										第55回
A0585	187	地輪	N15 75号墓	19.6	15.9										第55回
A0586	208	地輪	N15 東斜面	21.1	17.2										第55回
A0587	209	地輪	N15 東斜面	20.6	16.2										第55回
A0588	218	地輪	N15 東斜面	17.2	12.4										
A0589	219	地輪	N15 東斜面	20.0	17.2										第55回
A0590	238	地輪	N16	18.0	17.9										第55回
A0591	250	地輪	N16 92号墓	19.1	14.0										第55回
A0592	252	地輪	N15 東斜面	32.1	13.6										大型品。第55回
A0593	255	地輪	N15 東斜面	20.0	17.5										第55回
A0594	256	地輪	N15 東斜面	19.4	12.0										第55回
A0595	263	地輪	N15 80号墓	(30.4)	(11.5)										大型品。第55回
A0596	264	地輪	N15 東斜面	17.4	11.7										第55回
A0597	272	地輪	N18	17.5	9.7										第55回
A0598	277	地輪	N18	(18.2)	(13.7)										3分の1欠。
A0599	278	地輪	N18	(15.8)	(13.8)										半壊。
A0600	292	地輪	N16 92号墓	17.8	11.2										A0496水輪と同一地点出回。
A0601	302	地輪	N16	16.6	10.1										第55回
A0602	303	地輪	N16	17.0	13.0										
A0603	322	地輪	R12 33号墓	18.4	(12.1)										第55回
A0604	323	地輪	R12 33号墓	15.7	(9.1)										第55回
A0605	324	地輪	R12 33号墓	19.7	(12.9)										第55回
A0606	325	地輪	R12 33号墓	(19.4)	—										半壊。
A0607	326	地輪	R12 33号墓	20.3	12.8										縦方向に半壊。
A0608	332	地輪	O14	(27.8)	(12.1)										大型品。第55回
A0609	333	地輪	O14	(19.4)	(16.1)										採取番号333と336などで併せ一組。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第55回）

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0610	335	地輪	O14	14.9	(17.1)										上部欠。
A0611	339	地輪	O14	(21.4)	(15.9)										上部半壙。
A0612	346	地輪	N15 76号墓	16.4	12.0										第55回
A0613	352	地輪	N16 86号墓	16.5	11.0										第55回
A0614	383	地輪	I14	19.1	14.5										第55回
A0615	388	地輪	H14	18.4	13.0										
A0616	394	地輪	I15 175号墓	14.3	9.6										第55回
A0617	401	地輪	N25 445号墓	(13.6)	(6.0)										1/3残。
A0618	407	地輪	N25	17.2	10.5										第55回
A0619	421	地輪	N25 447号墓	16.3	(11.9)										半壙。
A0620	426	地輪	N25 451号墓	18.4	12.0										第55回
A0621	442	地輪	M25 437号墓	18.4	12.7										第55回
A0622	475	地輪	L24 425号墓	—	—										計測不可。A0118空廻輪と採取N重複。
A0623	482	地輪	N23 241号墓	(19.1)	(8.4)										1/3残。A0370火輪と同地点出土。
A0624	494	地輪	M22	16.1	10.9										半壙。
A0625	524	地輪	L21	17.0	11.9										第55回
A0626	548	地輪	K20 341号墓	(13.9)	(9.7)										冠方向に半壙。
A0627	551	地輪	K19 316号墓	14.0	9.6										半壙。
A0628	556	地輪	K19	17.0	11.9										第55回
A0629	563	地輪	J19	15.7	9.8										第55回
A0630	565	地輪	J19	16.8	11.1										第55回
A0631	567	地輪	J19	—	—										半壙、計測不可。
A0632	579	地輪	J20 329号墓	15.9	(10.6)										第55回
A0633	580	地輪	J20 329号墓	14.6	(8.9)										第55回
A0634	597	地輪	L17 204号墓	(18.3)	(12.0)										片痕岩製。
A0635	598	地輪	L17 204号墓	(17.2)	(11.0)										凝灰角礫岩製。
A0636	600	地輪	K17	18.3	13.4										第55回
A0637	601	地輪	K17	—	—										計測不可。
A0638	610	地輪	J18 290号墓	15.8	9.9										
A0639	613	地輪	J16 272号墓	—	—										計測不可。
A0640	632	地輪	I14 181号墓	—	—										計測不可。
A0641	637	地輪	K15 160号墓	18.0	(13.1)										
A0642	645	地輪	J14 164号墓	17.8	13.2										
A0643	646	地輪	K15 157号墓	18.1	12.3										
A0644	675	地輪	O13	17.8	13.0										
A0645	679	地輪	P13 67号墓	(20.5)	(16.1)										
A0646	688	地輪	P13 64号墓 東斜面	20.8	(17.2)										上部欠掘。
A0647	689	地輪	P13 64号墓 東斜面	15.8	(11.4)										
A0648	690	地輪	P13 64号墓 東斜面	16.2	9.3										第55回
A0649	691	地輪	P13 64号墓 東斜面	17.2	(10.6)										第55回
A0650	702	地輪	P12 65号墓西	17.0	13.6										
A0651	720	地輪	P12 62号墓 東斜面下	18.4	13.4										第55回

第24表 A地区組立式五輪塔計測值一覧表(第55図)

報告番号	採取番号	出土部位 名稱	出土場所	各 部 位 法 番										備 考 標	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0652	728	地輪	Q12 38号墓西	15.8	12.3										損傷有。
A0653	730	地輪	Q12 38号墓	15.7	11.1										第55回
A0654	731	地輪	Q12 38号墓南	16.9	12.7										第55回
A0655	735	地輪	R11 31号墓 底下	15.8	10.4										第55回
			R11												
A0656	739	地輪	31号墓 底下	(17.4)	(13.0)										縦方向に平塗。
A0657	740	地輪	31号墓 底下	(13.8)	(12.3)										縦方向に平塗。
A0658	754	地輪	R12 34号墓	20.1	16.3										第55回
A0659	763	地輪	S10 12号墓	17.0	11.3										第55回
A0660	764	地輪	S10 12号墓	(16.5)	(12.6)										損傷あり。
A0661	781	地輪	S12 21号墓	17.0	13.1										A0211空風輪と同件出土。
			L16												
A0662	788	地輪	182号墓	(16.2)	(9.8)										破片を合わせて計測。
A0663	789	地輪	L16 182号墓	17.5	10.6										斜め縦方向に平塗。
A0664	798	地輪	O12	16.5	11.1										第55回
A0665	799	地輪	O12	17.8	13.2										第55回
A0666	812	地輪	P14 46号墓	17.4	11.2										第55回
A0667	814	地輪	P14 46号墓	19.9	16.1										第55回
A0668	815	地輪	P14 46号墓	22.0	14.8										第55回
A0669	823	地輪	O14	(13.5)	(11.2)										斜め縦方向に平塗。
A0670	857	地輪	S14	17.3	11.7										第55回
A0671	873	地輪	T11 2号墓	17.0	11.4										A0793空風輪と同地点出土。第55回
A0672	880	地輪	T12	13.9	10.1										
A0673	882	地輪	N18	18.6	12.6										第55回
A0674	885	地輪	K17 206号墓	19.0	13.2										第55回
A0675	891	地輪	O22 235号墓	16.0	10.4										第55回
A0676	892	地輪	M24 422号墓	16.4	13.0										
A0677	893	地輪	M24 416号墓	17.5	11.5										第55回
A0678	895	地輪	N24 414号墓	18.9	13.7										
A0679	905	地輪	K22 373号墓	18.4	8.3										第55回
A0680	912	地輪	J19 320号墓	18.0	12.2										第55回
A0681	914	地輪	O25 250号墓	18.5	11.8										
A0682	915	地輪	N25 451号墓	19.1	16.2										第55回
A0683	916	地輪	N25 450号墓	19.5	12.0										区画の配石に転用。第55回
A0684	923	地輪	N25 450号墓	15.9	11.7										区画の配石に転用。
A0685	924	地輪	N25 455号墓	15.2	(5.8)										区画の配石に転用、半塗。
A0686	925	地輪	N24 414号墓	17.6	11.2										第55回
A0687	927	地輪	M24 413号墓	18.5	13.5										第55回
A0688	928	地輪	M23 408号墓	18.4	14.0										
A0689	929	地輪	M23 407号墓	19.9	13.8										
A0690	930	地輪	M23 406号墓	—	—										摩利頭著計測不可。空風輪の可能性も。
A0691	931	地輪	L22 372号墓	18.1	13.2										元位置を保つと判断。
			S X 160												

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第55図）

報告番号	採取番号	出土部位名	出土場所	各部位法量											備考欄
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0692	931	地輪	L22 372号墓	25.6	16.5										
A0693	932	地輪	K22 375号墓	18.3	12.2										区画の配石に転用。第55回
A0694	933	地輪	K21 360号墓	26.2	10.2										大型品。第55回
A0695	934	地輪	K21 366号墓	18.8	(11.1)										一部欠損。第55回
A0696	935	地輪	K21 358号墓	20.1	14.6										
A0697	936	地輪	K21 355号墓	19.0	16.1										第55回
A0698	938	地輪	K20 354号墓	18.0	14.2										A0254空気輪・A0451火輪・A0552水輪とでそれぞれセット関係にある。第51回
A0699	942	地輪	J19 323号墓	16.1	10.1										第55回
A0700	943	地輪	J19 306号墓	16.3	10.2										第55回
A0701	944	地輪	J19 306号墓	16.4	10.1										第55回
A0702	945	地輪	J19 306号墓	15.4	10.0										第55回
A0703	946	地輪	J19 306号墓	13.8	9.3										第55回
A0704	947	地輪	J19 306号墓	17.5	11.9										第55回
A0705	948	地輪	J19 318号墓	20.3	12.2										第55回
A0706	949	地輪	K19 310号墓	(21. 2)	(13. 1)										
A0707	953	地輪	I15 174号墓	19.2	13.1										第55回
A0708	954	地輪	I14 170号墓	21.9	16.0										第55回
A0709	955	地輪	I14 170号墓	18.5	13.3										
A0710	956	地輪	I14 170号墓	18.5	14.2										
A0711	958	地輪	J14 170号墓	17.4	13.2										
A0712	958	地輪	J14 170号墓	17.2	12.2										
A0713	959	地輪	J14 163号墓	22.2	17.5										第55回
A0714	961	地輪	K14 155号墓	18.8	12.6										第55回
A0715	963	地輪	K15 158号墓	15.5	11.0										直下に人骨片混在土を検出。第55回
A0716	964	地輪	L14 140号墓	22.7	18.0										やや大型品。第55回
A0717	966	地輪	L14 143号墓	29.7	15.1										大型品。第55回
A0718	967	地輪	L14 143号墓	27.8	14.8										大型品。第55回
A0719	968	地輪	L14 143号墓	19.7	13.5										
A0720	969	地輪	L14 143号墓	19.9	13.3										第55回
A0721	970	地輪	L14 141号墓	24.0	15.6										やや大型品。第55回
A0722	971	地輪	M14 132号墓	25.3	16.1										やや大型品。第55回
A0723	972	地輪	M14 132号墓	28.4	15.4										大型品。第55回
A0724	973	地輪	M13 125号墓	16.2	10.6										第55回
A0725	974	地輪	M13 125号墓	16.0	10.4										第55回
A0726	975	地輪	M13 125号墓	19.5	15.2										第55回
A0727	976	地輪	M13 125号墓	18.9	12.3										
A0728	977	地輪	M13 125号墓	19.0	13.4										
A0729	978	地輪	M13 125号墓	15.6	10.2										第55回
A0730	980	地輪	N14 130号墓	17.0	11.4										第55回
A0731	981	地輪	N13 122号墓	18.0	11.1										第55回

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表(第55図)

報告番号	採取番号	出土部位 名稱	出土場所	各 部 位 法 量											備 考 標
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	
A0732	982	地輪	N13 122号墓	17.7	12.6										
A0733	983	地輪	N13 122号墓	17.7	11.0										第55回
A0734	984	地輪	N13 122号墓	19.0	7.6										第55回
A0735	985	地輪	O14 73号墓	19.7	14.5										区画の配石に転用。
A0736	986	地輪	O13 68号墓	21.2	16.1										区画配石に転用か、やや大型。第55回
A0737	987	地輪	P12 65号墓	17.9	11.6										半壌。
A0738	991	地輪	Q12	18.5	11.8										第55回
A0739	992	地輪	Q12	24.2	21.4										大型品。第55回
A0740	995	地輪	O~P14 52号墓	18.3	12.8										区画の配石に転用。第55回
A0741	998	地輪	O15 53号墓	—	—										計測不可。第55回
A0742	999	地輪	O15 53号墓	—	—										計測不可。第55回
A0743	1000	地輪	P14	—	—										区画の配石に転用。第55回
A0744	1005	地輪	N15 85号墓 東斜面	20.1	17.6										第55回
A0745	1006	地輪	N15 85号墓 東斜面	17.5	11.5										第55回
A0746	1007	地輪	N16 86号墓	19.0	12.5										第55回
A0747	1008	地輪	N16 87号墓	18.1	12.3										
A0748	1009	地輪	N16 91号墓	17.9	11.0										区画の配石に転用。第55回
A0749	1010	地輪	N16 91号墓	16.0	12.7										区画配石に転用。
A0750	1011	地輪	N16	17.5	12.3										
A0751	1012	地輪	N16 89号墓 S X 153	17.6	(11.6)										元位置を保持か、人骨伴出。
A0752	1014	地輪	R~S12 19号墓	17.9	11.9										第55回
A0753	1015	地輪	T10 1号墓	17.3	13.8										
A0754	1017	地輪	T10 1号墓	17.5	10.3										欠損有り。第55回
A0755	1019	地輪	R~S13 10号墓	20.0	13.9										
A0756	1021	地輪	K16 195号墓	(29.0)	(18.9)										
A0757	1023	地輪	M16 184号墓	18.2	13.6										
A0758	1030	地輪	L16 183号墓	17.7	10.3										第55回
A0759	1034	地輪	L16 183号墓	15.8	11.8										
A0760	1037	地輪	L16 183号墓	17.6	13.2										第55回
A0761	1042	地輪	L16 183号墓	18.6	13.6										第55回
A0762	1043	地輪	L16 183号墓	20.5	17.7										やや大型。第55回
A0763	1045	地輪	L16 183号墓	20.2	16.9										第55回
A0764	1055	地輪	L16 183号墓	18.6	12.6										複次掘。第55回
A0765	1060	地輪	L16 182号墓	15.8	9.6										第55回
A0766	1061	地輪	L16 S K 491	16.8	11.4										同地点でA0871空塗(火)輪も伴出。

地輪各部位法量平均値 18.5 12.8

注意：() 内の不確定数値は除外して計算した。

注意：括弧内の数字は欠失等による不確定数値。一時は計測不要・不可能な場合を示す。*印は横穴及び狭穴の数値である。

第24表 A地区組立式五輪塔計測値一覧表（第55図）

報告 番号	採取 場所	三輪一石 出土 場所	出土地 部位	各 部 位 重 量 (g)																	備 考	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s
A0767	97	空腹火輪	K17	30.3	14.3	7.4	8.6	(3.8)	6.8	5.8	(14.8)	—	15.0	—	—	16.7	6.6	13.2	13.8	3.9	6.3	3.6
A0768	204	空腹火輪	N15 乗綱面	33.0	16.1	5.9	11.0	2.9	7.5	4.4	17.6	—	11.0	—	—	(2.2)	13.9	5.2	10.6	13.0	5.9	—
A0769	207	(空)火輪	N15 乗綱面	(18.0)	—	8.0	10.0	0	0	0	(18.0)	(15.6)	10.8	(5.9)	1.8	(0.9)	15.2	7.2	—	—	—	—
A0770	236	空腹火輪	N16	32.0	13.9	7.7	10.4	0	0	0	20.4	19.1	11.8	6.9	0.7	2.6	16.7	7.1	11.7	14.3	3.9	—
A0771	257	空腹火輪	N15 乗綱面	29.2	11.2	6.9	11.1	0	0	0	(18.9)	—	(10.0)	—	0.3	4.5	(14.0)	6.6	9.3	12.0	4.6	—
A0772	261	空腹火輪	N15 乗綱面	26.6	11.3	6.0	9.5	0	0	0	17.7	18.6	9.8	7.6	0.3	3.6	14.3	5.8	8.9	11.9	4.5	—
A0773	279	空腹火輪	N18 99号墓	28.2	13.1	5.4	10.2	0	0	0	17.3	16.1	10.5	5.8	1.1	3.4	15.3	5.1	12.0	13.6	4.2	—
A0774	317	空腹火輪	L17	(7.8)	8.3	4.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A0775	349	空腹火輪	O15	(19.6)	7.3	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A0776	351	空腹火輪	N15 乗綱面	(36.6)	(19.6)	6.2	11.0	*4.0	*9.4	5.8	19.5	17.5	15.3	5.6	0.7	2.5	17.2	5.1	14.2	14.9	5.4	8.6
A0777	359	空腹火輪	L14 141号墓	(32.0)	(33.5)	5.3	9.8	3.4	6.4	4.7	16.2	14.0	10.4	5.5	0.7	1.5	13.5	4.8	10.7	12.7	6.3	7.0
A0778	380	空腹火輪	L14	31.8	13.6	4.9	13.3	0	0	0	(16.2)	—	12.0	7.1	0.1	1.3	14.5	4.0	11.1	(13.4)	6.5	6.6
A0779	390	空腹火輪	L15 175号墓	31.3	15.8	5.9	9.6	*4.3	*7.2	—	17.2	15.0	12.7	6.4	0.2	2.3	14.2	4.9	11.6	13.8	7.0	—
A0780	395	(空)火輪	L15	(35.8)	—	4.8	10.7	0	0	0	(16.7)	—	(10.6)	—	—	—	12.9	4.1	(10.0)	—	—	—
A0781	399	空腹火輪	L15	(27.3)	(11.0)	5.0	10.9	0	0	0	17.3	—	11.1	5.4	0.3	2.3	12.8	3.7	(8.9)	12.3	6.5	—
A0782	407	空腹火輪	N25 445号墓	(31.0)	(14.3)	5.7	11.3	0	0	0	(17.2)	—	(11.0)	(6.5)	0.0	(14.6)	5.0	12.1	(14.5)	4.9	—	—
A0783	413	(空)火輪	N25 454号墓	(37.0)	—	6.5	11.0	0	0	0	17.0	14.8	(10.0)	6.7	0.3	2.0	—	(4.8)	—	—	—	—
A0784	419	(空)火輪	N25 454号墓	(35.0)	—	6.1	9.2	*3.4	*8.0	—	(17.0)	—	(12.0)	—	(0.4)	(2.0)	13.9	5.4	(11.8)	—	—	—
A0785	490	空腹火輪	N22 233号墓	32.4	15.6	6.9	9.9	0	0	0	17.6	17.9	9.5	4.9	0.4	2.3	14.7	6.6	9.7	13.0	4.9	4.4
A0786	571	空腹火輪	J19	28.3	9.9	8.8	9.6	0	0	0	(14.9)	—	13.0	—	—	(2.0)	16.1	7.8	12.8	13.9	6.3	—
A0787	607	空腹火輪	L17	(37.0)	(5.8)	4.4	(7.0)	0	0	0	(13.5)	—	(7.0)	—	—	—	9.4	3.9	7.5	(8.3)	2.9	—
A0788	621	空腹火輪	J15 172号墓	30.4	13.2	6.5	10.7	(0.8)	—	—	18.4	—	12.4	6.6	0.2	2.9	14.3	5.5	11.1	12.6	4.7	—
A0789	627	空腹火輪	J15	(25.0)	(7.4)	5.9	12.3	(0.4)	7.6	—	20.1	—	12.6	—	—	—	14.4	5.0	10.9	(9.2)	—	—
A0790	651	空腹火輪	L13 138号墓	(31.0)	14.4	5.2	11.4	*3.3	*8.6	—	17.0	14.9	10.5	7.8	0.2	2.1	12.6	4.5	9.7	11.4	4.1	—
A0791	831	空腹火輪	O15 56号墓	20.0	7.3	6.7	6.0	0	0	0	13.2	—	7.9	—	0.1	2.3	10.7	5.4	7.8	9.0	2.7	—
A0792	841	空腹火輪	O13 29号墓	(0.6)	(12.0)	5.3	9.0	0	0	0	15.1	13.9	9.8	5.9	0.2	1.5	11.6	4.5	9.3	11.3	4.6	4.8
A0793	874	(空)火輪	T11 2号墓	(15.9)	—	5.0	(0.9)	0	0	0	(18.0)	(16.4)	(12.6)	(6.2)	(0.3)	(2.0)	14.6	4.5	11.0	—	—	—
A0794	875	空腹火輪	T11	28.9	11.6	6.3	11.0	0	0	0	19.2	17.3	10.2	8.2	—	4.0	15.2	5.9	11.0	12.9	4.9	—
A0795	917	空腹火輪	N25 450号墓	30.2	12.4	8.9	8.9	0	0	0	(19.2)	—	(13.0)	—	0.1	(1.9)	15.0	8.3	11.7	13.4	6.0	—
A0796	919	空腹火輪	N25 450号墓	(22.0)	—	5.2	11.5	0	0	0	(17.0)	—	11.8	(5.4)	0.1	1.6	(13.9)	4.7	(10.8)	(12.3)	—	—
A0797	922	空腹火輪	N25 450号墓	(29.0)	(13.0)	5.5	11.0	*4.6	*9.2	—	19.7	—	13.6	—	0.5	2.8	15.9	4.7	12.5	14.6	5.0	7.4
A0798	1025	空腹火輪	M21 223号墓	29.2	15.3	5.4	8.7	*9.2	*7.4	—	18.4	—	11.7	—	0.3	2.2	16.0	5.8	11.7	13.7	4.9	—
三輪一石の法量平均値				29.5	12.6	6.0	10.3	3.2	7.1	5.2	17.7	16.3	11.5	6.5	0.4	2.5	14.1	5.4	10.8	12.7	4.9	6.2
〔 〕 内数値除外。 *印は他の法量を示す。																						

第25表 A地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧 (第56図)

報告 番号	採取 番号	三輪一石 比上位	出土 場所	各 部 位 比 重 (凡 横 縦 照)																備 考		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q		
A0799_2	空風(火) 輪	M19 表探	(052) 8.0 8.20	0.3	0.9	9.0	7.4	10.0	7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端欠。火輪欠。(一石五輪塔かも)。		
A0800_4	空風(火) 輪	L24 表探	—	—	(4.6)	0.5	3.9	9.4	8.1	9.2	6.7	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。(一石五輪塔かも)。		
A0801_7	空風(火) 輪	M22 表探	(062) (064) 5.60	0.5	5.0	10.2	9.0	11.9	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。(一石五輪塔かも)。		
A0802_12	空風(火) 輪	N15 表探	(058) (07.7) (4.1)	0.2	3.9	9.3	8.6	10.0	8.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一石五輪かも。火輪欠損。	
A0803_15	空風(火) 輪	M20 表探	(05.0) (07.8) (7.1)	0.7	5.2	(11.2)	8.8	12.8	8.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端欠損。火輪欠。(一石五輪塔かも)。	
A0804_23	空風(火) 輪	L16 表探	(06.2) (07.7) (7.5)	0.7	6.9	11.0	9.2	12.3	7.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端欠損。火輪欠。(一石五輪塔かも)。	
A0805_95	空風(火) 輪	K18 295号基	(05.7) (06.9) (6.1)	0.5	5.6	10.2	9.4	11.6	(0.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端欠。火輪欠。	
A0806_102	空風(火) 輪	M16 193号基	(05.9) (08.3) (7.0)	1.4	6.4	(13.2)	(12.9)	(13.5)	(11.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠缺。縱方向に半壠。	
A0807_141	(空風(火) 輪)	K21 360号基	(03.3) (0.2) (5.1)	0.7	4.4	—	(8.3)	(10.4)	6.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪一部残。火輪欠缺。	
A0808_172	空風(火) 輪	N15 78号基	(06.7) (07.7) (8.0)	0.9	7.1	9.8	7.8	(11.8)	(8.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一石五輪？(火輪以下消失)。空輪先端欠。尾輪少。	
A0809_173	空風(火) 輪	N15 78号基	(07.9) (12.1) (5.8)	0.8	5.9	10.6	8.4	11.6	7.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一石五輪か。(火輪以下消失)。空輪先端欠。	
A0810_174	空風(火) 輪	N15 78号基	(03.7) (8.4) (0.3)	0.2	5.1	9.7	6.9	10.4	6.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一石五輪？(火輪以下消失)。	
A0811_191	空風(火) 輪	N15 80号基	(02.7) (0.7) (6.0)	0.9	4.7	(10.8)	(8.8)	(12.4)	(0.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縱方向に半壠。火輪欠失。	
A0812_217	空風(火) 輪	N15 東側斜面	(05.3) (08.2) (7.1)	0.5	6.6	11.6	9.5	12.9	(9.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。空輪先端欠。	
A0813_223	(空風(火) 輪)	M16 189号基	—	—	8.9	—	—	—	—	(20.0)	(12.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空・火輪欠。比較的大きい。
A0814_232	空風(火) 輪	N16 142号基	(02.7) (0.7) (5.0)	0.2	4.8	(10.3)	8.7	(10.7)	(8.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0815_236	空風(火) 輪	N16 (09.3)	(01.7) (0.7) (7.8)	0.6	7.2	12.9	11.7	14.6	(12.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0816_246	空風(火) 輪	N16 (06.4)	10.1	6.3	0.3	6.0	11.2	9.0	12.9	8.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0817_247	空風(火) 輪	N16 (03.4)	(0.7) (0.3)	0.1	6.2	(10.2)	8.8	(12.6)	(8.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0818_275	空風(火) 輪	N18 (07.9)	12.3	(5.2)	0.9	(4.3)	10.8	8.9	11.2	9.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0819_276	空風(火) 輪	N16 (09.4)	(0.7) (0.7) (5.7)	0.6	5.1	(12.1)	11.8	(14.0)	(11.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0820_304	空風(火) 輪	N16 (04.0)	8.8	(5.2)	0.6	4.6	10.3	9.7	(11.8)	7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0821_309	空風(火) 輪	N17 (03.7)	8.0	(0.7)	0.9	7.0	10.3	9.2	11.3	(7.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空・火輪欠。	
A0822_360	空風(火) 輪	L14 142号基	(04.7) (0.7) (0.7)	1.4	6.3	10.1	7.9	(11.0)	(7.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0823_361	空風(火) 輪	L14 142号基	(03.6) (0.7) (0.8)	0.5	4.3	(9.3)	8.2	11.0	(8.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0824_370	空風(火) 輪	K14 151号基	(02.1) (7.6) (4.3)	0.1	4.9	10.4	7.8	11.5	7.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪以下欠失。	
A0825_374	空風(火) 輪	J14 (03.6)	8.6	(5.0)	0.5	4.5	(14.7)	(13.6)	(16.0)	(12.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0826_405	空風(火) 輪	D25 445号基	(03.1) (0.7) (4.7)	0.5	4.2	(10.5)	(9.2)	(11.5)	(9.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縱方向に半壠・火輪欠。	
A0827_418	空風(火) 輪	D25 454号基	(04.7) (0.8) (4.2)	0.5	3.7	8.9	(8.4)	(9.4)	(8.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。縱方向に半壠。	
A0828_423	空風(火) 輪	D25 454号基	(04.7) (0.9) (4.8)	0.6	4.2	10.8	9.1	11.5	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0829_426	空風(火) 輪	N25 (06.1)	(0.0)	(6.1)	0.5	5.6	12.1	10.1	13.3	9.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0830_429	空風(火) 輪	O26 456号基	(06.0) (0.7) (0.7)	0.6	4.2	11.5	10.3	(11.6)	(10.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0831_430	空風(火) 輪	O26 456号基	(06.4) (0.12) (5.2)	0.7	4.9	10.7	9.6	11.0	9.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0832_433	空風(火) 輪	O26 456号基	(06.8) (0.13) (5.8)	0.4	5.3	10.1	8.6	11.5	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。	
A0833_438	空風(火) 輪	M25 448号基	(04.8) (0.11) (4.8)	0.9	4.0	(10.7)	(9.6)	(11.0)	(9.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	尾輪半壠。空輪先端・火輪欠。	
A0834_439	空風(火) 輪	M25 448号基	(06.1) (0.12) (3.8)	0.4	3.6	10.9	(9.8)	12.1	10.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。縱方向に半壠。	
A0835_445	空風(火) 輪	M25 448号基	(09.2) (0.24) (6.8)	0.9	5.9	(10.5)	(10.5)	(12.5)	(10.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0836_444	空風(火) 輪	M25 435号基	(02.3) (0.9) (0.0)	0.6	2.6	8.8	7.6	9.6	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。	
A0837_449	空風(火) 輪	M25 433号基	(03.4) (0.6) (0.6)	0.7	6.1	(9.0)	7.7	11.3	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪半壠。火輪欠。	

第 25 表 A 地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧

報告 番号	採取 番号	三輪一石	出土 場所	各 部 位 各 量 元 例 想 像																備 考	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	
A0838	462	空廐(火) 輪	M24 418号墓	(14.2)	(8.8)	(5.4)	0.8	(4.6)	9.8	9.2	12.6	9.9	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0839	466	空廐(火) 輪	N24 421号墓	(13.2)	(8.8)	(4.8)	0.6	(4.2)	(10.1)	(9.0)	(11.0)	(9.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。
A0840	477	空廐(火) 輪	M24 247号墓	(15.7)	(8.3)	(7.2)	1.4	(5.8)	12.6	9.2	13.3	(9.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0841	493	空廐(火) 輪	M22 228号墓	(15.4)	(7.8)	(7.6)	(1.1)	(6.5)	(11.0)	(9.1)	(13.7)	(9.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半軽。火輪欠失。 (一石五輪幅かも)。
A0842	495	空廐(火) 輪	M22 228号墓	(21.3)	(13.8)	(7.3)	0.5	(6.8)	11.9	9.4	12.9	(9.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	半端、火輪欠(一石五輪幅)。
A0843	499	(空廐(火) 輪)	M22 L.21	—	—	(5.3)	(0.8)	(4.5)	—	(11.4)	(13.9)	(12.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	空・火輪欠失。火輪経方向に半軽。
A0844	527	空廐(火) 輪	L.21 369号墓	(3.9)	(8.7)	(5.2)	0.7	(4.5)	(11.9)	(10.8)	(12.9)	(10.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半軽。空輪先端欠、火輪欠失。
A0845	530	空廐(火) 輪	K.21 363号墓	(7.8)	12.8	(4.5)	0.5	4.0	8.7	7.3	9.1	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠失。(一石五輪幅)。
A0846	549	空廐(火) 輪	K.20 316号墓	(2.7)	(6.6)	(5.8)	(0.4)	(5.4)	(7.8)	(7.3)	(9.3)	(8.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠失。縦方向に半端。
A0847	550	空廐(火) 輪	K.20 316号墓	(13.5)	(8.8)	(4.7)	0.6	(4.1)	(9.8)	(7.4)	(10.5)	(8.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠失。縦方向に半端。
A0848	569	空廐(火) 輪	J.19	(16.5)	9.9	6.6	0.4	(6.2)	10.1	8.2	10.6	9.0	—	—	—	—	—	—	—	—	淡板岩質滑結凝灰岩、 火輪欠失。
A0849	578	空廐(火) 輪	J.20 329号墓	(12.0)	(6.6)	(5.1)	0.3	(4.8)	9.0	8.0	10.4	10.8	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0850	602	空廐(火) 輪	K.17 L.13	(15.6)	(10.4)	(5.2)	0.6	(4.6)	(11.7)	(10.2)	(12.9)	(10.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半端。火輪欠。 空輪先端欠。
A0851	605	空廐(火) 輪	K.17 282号墓	(12.6)	(8.3)	(4.3)	0.9	(3.4)	10.4	9.2	(11.4)	(9.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。
A0852	617	空廐(火) 輪	J.15	(13.2)	6.4	(6.8)	0.3	(6.5)	10.7	10.1	13.2	(10.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪半端、火輪欠。
A0853	647	空廐(火) 輪	L.13 136号墓	(13.6)	(9.4)	(4.9)	—	(4.5)	9.7	8.7	11.0	(8.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0854	648	空廐(火) 輪	L.13 136号墓	(11.6)	(7.8)	(5.8)	0.5	(5.3)	10.2	9.1	11.8	(9.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0855	663	空廐(火) 輪	N13 121号墓	(16.2)	(8.9)	(7.7)	0.9	(6.4)	11.0	9.2	14.0	11.6	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。
A0856	669	(空廐(火) 輪)	O13 68号墓	—	(2.1)	(8.9)	(0.4)	(6.2)	—	(9.3)	(12.7)	(8.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪冠方向に半端、 空・火輪欠。
A0857	714	空廐(火) 輪	P12 62号墓	(13.3)	(8.3)	(5.0)	0.3	(4.7)	9.5	8.1	10.7	(8.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0858	715	空廐(火) 輪	P12 62号墓	(14.3)	(8.4)	(5.9)	0.3	(5.6)	11.8	9.6	13.3	(9.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0859	721	空廐(火) 輪	P11	13.9	9.0	4.9	0.8	4.1	9.9	8.9	11.7	9.5	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0860	759	空廐(火) 輪	Q13 37号墓	(13.6)	(7.3)	(6.3)	0.8	(5.5)	9.5	7.8	10.8	(7.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半端、火輪欠失。
A0861	821	空廐(火) 輪	Q14	(15.5)	(8.8)	(6.7)	0.3	(6.4)	11.3	9.2	12.7	8.9	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪冠方向に半端、 空輪先端欠及び火輪欠。
A0862	827	空廐(火) 輪	Q14	(14.2)	(7.9)	(6.7)	0.1	(6.6)	(10.4)	(9.2)	(12.8)	(9.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半端、火輪欠。
A0863	835	空廐(火) 輪	Q13 43号墓	(17.4)	12.8	(5.6)	0.6	(4.8)	10.4	8.8	12.0	(9.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠。
A0864	843	空廐(火) 輪	Q12 39号墓 遇	(12.6)	(7.1)	(5.7)	0.5	(5.2)	9.3	8.1	10.5	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0865	848	空廐(火) 輪	S14	(16.4)	(9.2)	(7.2)	0.4	(6.8)	11.2	9.6	12.7	(10.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪冠方向半端、空輪先端 及び火輪欠。
A0866	849	空廐(火) 輪	S14	(13.2)	(8.9)	(4.2)	0.7	(3.5)	(12.9)	(12.0)	(13.9)	(12.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半端、空輪欠失。
A0867	897	空廐(火) 輪	N.26	(14.6)	(8.6)	(6.8)	0.4	(5.6)	9.7	8.1	11.2	(7.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0868	898	空廐(火) 輪	N.26	(13.2)	(8.8)	(5.2)	0.3	(4.9)	11.1	9.6	12.6	(9.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪冠方向半端、空輪欠失。
A0869	930	空廐(火) 輪	M23 406号墓	(20.3)	(11.7)	(8.6)	0.3	(8.3)	(13.9)	(12.4)	(15.2)	(12.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端・火輪欠。
A0870	1059	空廐(火) 輪	K.17 下層	(14.5)	10.0	(4.5)	0.7	(3.8)	11.4	9.4	11.9	8.9	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪冠方向半端、 空輪欠失。
A0871	1061	空廐(火) 輪	L.16	(11.0)	8.2	(2.8)	0.2	(2.6)	7.5	6.0	7.6	(6.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪欠失。一石五輪が、同 地点でA0766地輪も出。
空廐(火輪)・石法量平均値				13.9	9.9	6.7	0.6	5.0	10.4	8.8	11.6	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	以上A0799からA0871までの73基は火輪欠失のため、空輪と同様に計測した。

第25表 A地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧

報告番号	採取番号	二輪一石出土部位	出土場所	各部位法量(凡例参照)																備考			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	t		
A0872	17	水地輪	J16 表探	(21.4)	12.5	8.9	—	—	—	—	(16.3)	15.1	—	11.8	19.0	18.6	14.0	2.4	—	—	—	水輪上部欠損。	
A0873	96	水地輪	K17 264号基	23.3	13.7	9.6	4.6	6.9	3.7	15.2	18.3	15.9	6.1	12.8	20.0	19.1	13.5	4.0	—	—	—	第56図	
A0874	183	水地輪	O15	22.2	13.1	9.1	0	0	0	10.2	11.4	9.1	4.7	12.2	12.1	12.4	0	0	—	—	—	水輪部欠損1/3。	
A0875	188	水地輪	N15 76号基	22.7	13.0	9.7	2.3	6.6	3.2	12.4	16.6	13.0	4.8	11.8	17.0	(18.1)	14.0	1.1	—	—	—	地輪近部欠損あり。 第56図	
A0876	231	水地輪	N16 87号基	(23.7)	11.1	(22.6)	—	—	—	(14.0)	(15.1)	13.3	7.3	10.2	16.0	15.8	0	0	—	—	—	半壊。	
A0877	279	水地輪	N18 99号基	29.2	15.9	13.3	*25	*13	*31	12.6	18.9	14.4	6.6	15.3	19.0	18.7	14.9	2.6	—	—	—	A0773風火山輪一石造と セト同様。第56図	
A0878	375	水地輪	J14 166号基	23.4	12.1	11.3	*34	*18	*48	12.2	17.9	13.5	6.1	11.2	17.8	17.3	13.2	1.4	—	—	—	水輪部欠損あり。第56図	
A0879	381	水地輪	I14	30.7	16.5	14.2	0	0	0	15.8	21.6	16.6	9.7	15.3	24.7	23.9	19.1	3.9	—	—	—	半壊。水輪欠損あり。	
A0880	402	水地輪	N25 445号基	28.1	15.0	13.1	*30.5	*12.0	*38	13.0	17.1	13.3	6.5	14.0	18.0	17.3	10.6	1.9	—	—	—	蓋蓋跡強調。第56図	
A0881	491	水地輪	M21	26.9	15.0	11.9	*16	*12.2	*8.0	14.0	19.4	14.5	5.5	13.6	19.9	19.6	16.9	2.1	—	—	—	第56図	
A0882	713	水地輪	O14 73号基	(18.8)	10.8	(7.2)	—	—	—	(16.2)	15.4	(3.6)	9.9	17.4	17.0	11.8	1.6	—	—	—	冠方向に半壊。水輪欠損あり。		
A0883	734	水地輪	Q10 110号基	(12.8)	7.9	—	—	—	—	—	10.2	—	6.8	13.0	12.6	9.1	0.8	—	—	—	水輪大半欠。地輪冠方向に半壊。		
A0884	791	水地輪	K16 263号基 南西石組外側	(34.6)	7.7	—	—	—	—	—	(12.6)	11.2	(5.7)	7.1	13.9	13.5	9.6	0.7	—	—	—	水輪部上半分欠失。地輪冠方向に半壊。	
A0885	836	水地輪	Q13 43号基	28.3	14.5	13.8	*14.4	*13.7	*18.0	15.5	21.7	15.6	8.3	14.0	20.8	20.3	16.7	1.6	—	—	—	第56図	
A0886	939	水地輪	J20 328号基	(14.8)	13.1	—	—	—	—	—	—	11.2	—	12.2	14.9	14.3	11.5	1.8	—	—	—	区画石に転用。半壊。水輪欠失。	
A0887	951	水地輪	I15 175号基	25.4	13.2	12.2	(6.3)	7.1	—	(11.8)	(17.4)	15.8	6.4	12.0	20.1	20.1	16.4	3.3	—	—	—	第56図	
A0888	952	水地輪	I15 174号基	21.1	11.9	9.2	*15.5	*19.0	*5.6	11.7	16.4	13.8	4.2	10.3	17.8	17.2	13.3	1.5	—	—	—	第56図	
A0889	988	水地輪	P11 111号基	(12.1)	13.0	—	—	—	—	—	(13.2)	—	—	12.6	(17.2)	(17.0)	—	(1.7)	—	—	—	冠方向に剥離。残存状態不良。	
A0890	989	水地輪	P11 111号基	(23.8)	13.2	(9.8)	—	—	—	(13.6)	15.0	12.6	4.0	11.5	16.3	16.2	12.4	2.3	—	—	—	水輪上部欠損。(一石五輪か?)。	
A0891	993	水地輪	Q14	27.9	14.6	13.3	(10.6)	(10.0)	(14.0)	19.0	16.2	8.6	13.8	21.0	20.3	0	0	—	—	—	水輪一部欠失。第56図		
A0892	1024	水地輪	M21 225号基	27.8	13.8	14.0	0	0	0	0	13.8	(18.9)	14.8	7.5	13.2	19.5	20.1	15.7	1.8	—	—	—	区画石に転用。冠方向に半壊。
A0893	1026	水地輪	N15 76号基	(10.8)	8.0	—	—	—	—	—	11.4	—	12.2	15.7	(15.8)	—	—	—	—	—	—	水輪欠失。地輪下部半壊。	
二輪一石の法量平均値				25.9	12.7	11.9	3.6	6.0	3.5	13.3	17.8	13.6	6.4	12.0	17.8	17.6	13.7	2.1	—	—	—	1%の不確定数値は除外。 *印は図-56の数値を示す。	

報告番号	採取番号	二輪一石出土部位	出土場所	各部位法量(凡例参照)																備考	
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	t
A0894	22	水地輪	L13 表探	(6.0)	8.9	(12.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊(地輪も欠損)。
A0895(L)	33	(水)地輪	L17 表探	13.3	15.4	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪部欠損。
A0895(N)	198	(水)地輪	N16	15.0	17.4	10.3	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0896	318	(水)地輪	L17	11.6	12.1	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0897	327	(水)地輪	R11	15.7	(19.6)	11.1	6.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0898	334	(水)地輪	O14	(15.3)	(14.9)	9.7	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。冠方向に半壊。
A0899	398	(水)地輪?	I15	(17.7)	(13.3)	12.1	2.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0900	561	(水)地輪	K19	(14.2)	(16.6)	10.0	2.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0901	575	水地輪	J19	(14.8)	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水地輪半壊。
A0902	615	(水)地輪	J16	(20.0)	(14.4)	14.8	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0903	616	(水)地輪	J16 268号基	(31.8)	8.9	18.9	(1.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0904	752	(水)地輪	31号基 東側	(32.0)	8.9	8.9	(1.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊。水輪欠損。
A0905	753	(水)地輪	R12 34号基	15.3	(12.3)	(11.7)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。(一石五輪か?)。
A0906	788	(水)地輪	L16 182号基	14.2	(10.9)	10.6	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0907	803	(水)地輪	O12	15.7	18.9	13.1	2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。(一石五輪か?)。
A0908	949	(水)地輪	K19 310号基	(21.2)	(13.1)	(13.7)	(2.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪欠損。
A0909	957	(水)地輪	I14	18.6	(12.9)	(10.3)	(1.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	冠方向に2/3欠損。水輪欠損。
A0910	960	(水)地輪	J15	19.5	(13.2)	(15.1)	(2.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	地輪半壊。水輪欠損。
A0911	990	(水)地輪	P11 111号基	14.2	(11.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊・水輪欠損。
(水)地輪-石法量平均値				15.3	14.0	11.5	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	以上A0894からA0911までの19基は、水輪を欠失するので地輪と同様に計測し、平均値を出した。

第25表 A地区三輪一石・二輪一石五輪塔計測値一覧 (第56図)

報告 番号	採取 番号	出土部位 名称	出土 場所	各部位法量(凡例参照)																備 考			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q			
A1014	14	相輪	K27 表採	(16.3)	—	—	—	4.4	8.2	3.7	—	—	—	10.0	12.6	8.7	11.5	6.1	—	—	宝鏡印塔相輪上部3/4欠失。		
A1015	50	相輪	L17 C-2中央	(30.4)	(4.4)	4.4	14.1	3.4	4.0	—	8.0	8.0	11.8	7.6	8.7	12.2	9.9	11.3	—	—	表採、相輪宝珠部・伏輪部欠損。 第52回		
A1016	51	相輪	N18 斜面 考土	(15.9)	8.6	4.2	(3.1)	—	—	—	10.1	8.1	11.4	7.8	—	—	—	—	—	—	相輪九輪以下欠失。		
A1017	55	相輪	K16 266号墓	(17.6)	—	—	(12.5)	(5.1)	—	—	—	—	—	—	10.6	(32.8)	(9.8)	—	—	—	—	相輪、九輪下部・下墻花のみ残存。	
A1018	100	相輪	K16 268号墓	(10.4)	—	—	—	—	10.4	5.2	—	—	—	—	—	—	7.3	11.2	6.2	—	—	伏輪部のみ残存。宝珠から下墻花部まで欠失。	
A1019	136	相輪	J20 335号墓	(34.7)	(7.6)	5.0	(11.5)	3.6	4.0	(3.0)	8.9	7.1	9.8	7.2	8.2	10.4	8.0	9.7	6.2	—	—	九輪上部欠失。宝珠・伏輪欠損。	
A1020	137	相輪	J21 336号墓	(9.8)	—	—	(5.7)	(4.2)	—	—	—	—	—	—	9.0	11.2	—	—	—	—	—	—	相輪九輪一部と下墻花部のみ。
A1021	137	相輪	J21 21	(28.4)	7.0	5.0	12.0	4.4	—	—	9.0	2.2	10.7	7.9	9.3	12.2	—	—	—	—	—	相輪伏輪部欠失。宝珠一部欠損。 相輪・上墻花部と九輪上部で破損。 第52回	
A1022	192	相輪	N16	4.2	7.4	5.4	14.4	4.2	11.0	6.8	9.4	8.3	—	9.0	10.0	13.7	8.9	13.3	6.0	—	—	—	
A1023	240	相輪	N16斜面 89号墓	(38.5)	(8.6)	5.2	15.9	4.2	4.6	—	10.8	8.8	12.9	9.3	10.7	13.9	8.0	—	—	—	—	相輪宝珠・伏輪部破損。第52回	
A1024	243	相輪	N16 88号墓	(36.1)	—	—	27.7	8.4	—	—	—	—	—	9.9	15.2	18.1	—	—	—	—	—	九輪・下墻花部のみ残存。継方式向に半端。	
A1025	296	相輪	N15 80号墓	(30.2)	—	—	(16.2)	4.8	10.0	6.1	—	—	—	8.6	9.6	12.8	9.7	12.7	6.5	—	—	相輪・宝珠・上墻花部欠失。	
A1026	314	相輪	L17	(18.3)	4.2	4.0	(10.1)	—	—	—	7.5	7.6	9.9	7.7	—	—	—	—	—	—	—	相輪・九輪下部以下欠失。	
A1027	315	相輪	J20 202号墓	(29.6)	(1.8)	3.9	13.5	(3.6)	6.8	(1.9)	—	(7.4)	10.2	7.8	9.7	11.9	9.5	(11.2)	5.4	—	—	相輪・宝珠・伏輪部損傷。	
A1028	316	相輪	L17 202号墓	(20.2)	—	—	(7.0)	3.9	(9.3)	(3.2)	—	—	—	8.5	12.3	9.9	12.1	5.5	—	—	—	相輪・九輪下部以下のみ残存。	
A1029	319	相輪	L16	(30.2)	(8.5)	4.3	8.7	4.1	(4.8)	—	10.2	9.2	12.5	10.4	10.7	12.7	9.7	(10.8)	—	—	—	相輪・宝珠・伏輪部欠損あり。 第52回	
A1030	340	相輪	O14 斐利面	(14.5)	—	—	(3.0)	3.6	7.9	(3.5)	—	—	—	9.4	12.1	8.0	11.4	7.3	—	—	—	相輪・下墻花・伏輪のみ残存。	
A1031	378	相輪	J14 166号墓	(12.3)	—	—	(0.9)	4.2	7.2	4.3	—	—	—	(0.0)	11.4	9.0	10.5	6.4	—	—	—	相輪か・下墻花・伏輪部のみ残存。	
A1032	400	相輪	I15	(15.4)	—	(3.8)	11.6	—	—	—	—	(7.0)	6.0	8.6	—	—	—	—	—	—	—	宝珠・下墻花・伏輪欠失。上墻花及び九輪に欠陥あり。第52回	
A1033	408	相輪	N25	(35.4)	(6.3)	4.7	13.3	4.8	7.1	(14)	10.1	9.0	11.9	9.7	9.7	12.0	8.9	11.0	6.6	—	—	宝珠・伏輪部欠陥一部欠損。 第52回	
A1034	445	相輪	M25 433号墓	(34.2)	—	—	(10.6)	(3.6)	—	—	—	—	—	—	7.8	9.3	—	—	—	—	—	九輪の一部と下墻花の一部のみ残存。	
A1035	622	相輪	J15	(20.8)	—	—	(7.7)	(4.1)	9.0	4.5	—	—	—	9.1	(11.8)	10.1	12.3	6.0	—	—	—	九輪下部一部伏輪のみ残存。 墻花部欠陥。	
A1036	640	相輪	L15 145号墓	(15.1)	(7.0)	4.8	(2.4)	—	—	—	10.4	8.2	12.0	8.0	—	—	—	—	—	—	—	宝珠・上墻花のみ残存。	
A1037	707	相輪	P12 65号墓	(20.2)	8.9	6.0	—	—	—	—	13.1	11.4	14.1	(5.9)	—	—	—	—	—	—	—	宝珠・上墻花部のみ。墻花部に5.3×5.3cmの熱赤り。	
A1038	738 741	相輪	R11 31号墓 西面下	37.1	10.3	4.2	10.5	3.7	8.4	4.0	8.9	7.5	9.8	7.7	9.0	10.7	8.2	10.1	6.1	—	—	複合復元計測。第52回	
A1039	769	相輪	S11 15号墓	(33.3)	(15.6)	6.9	(10.8)	—	—	—	12.1	9.7	12.8	9.3	—	—	—	—	—	—	—	宝珠(先端一部)・上墻花部及び九輪部(下部分)以下欠失のみ残存。第52回	
A1040	777	相輪	S12 21号墓西面	(10.3)	—	—	—	(1.2)	9.1	5.2	—	—	—	—	—	—	8.4	12.4	7.6	—	—	下墻花部・納のみ残存。	
A1041	787	相輪	T11 183号墓	(16.7)	—	—	(8.0)	3.4	(4.7)	(0.3)	—	—	—	8.8	10.9	9.7	11.4	(5.8)	—	—	—	九輪(上部欠)・下墻花(一部)・伏輪(納)のみ残存。	
A1042	876	相輪	2号墓	(10.6)	(8.6)	3.3	(0.5)	—	—	—	8.9	6.0	9.0	(5.7)	—	—	—	—	—	—	—	宝珠(先端2)・上墻花(のみ)、九輪部以下は欠。第52回	
A1043	908	相輪	K17 284号墓	(19.3)	—	—	(14.4)	(4.9)	—	—	—	—	—	(8.1)	9.1	11.7	—	—	—	—	—	九輪(上部欠)・下墻花(下部欠)のみ残存。	
相輪部法量の平均値				39.7	7.7	4.7	14.2	4.2	8.4	5.0	9.9	8.3	11.1	8.4	9.6	12.1	9.0	11.4	6.3	() 内不確定数値は除外して算出した。			

報告 番号	採取 番号	出土部位 名称	出土 場所	各部位法量(凡例参照)																備 考		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q		
A1044	54	履根部	L17 C-2	22.2	(8.2)	8.2	(20.8)	9.8	13.6	21.4	6.0	6.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	宝鏡印塔豆部。萬葉先端欠陥元して算出。第52回
A1045	241	履根部	N16 88号墓	19.5	10.7	6.8	28.2	9.8	18.0	24.0	7.6	8.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	萬葉及下段形一部欠。第52回
A1046	618	履根部	J15	(18.2)	(11.4)	7.2	(29.2)	—	20.2	27.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上段形欠陥・萬葉欠損。
履根部法量の平均値				23.0	12.5	7.4	26.9	11.4	19.0	25.9	6.8	7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	() 内の不確定数値は除外して算出した。

第25表 A地区相輪ほか計測値一覧(第52回)

報告番号	採取場所	出土部位名	出土場所	各部位の法量(凡例参照)																		備考		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s		
A1047	234	基礎部	N16斜面 86号基	26.0	26.8	19.0	23.0	2.0	2.2	21.7													宝瓶印塔基礎。底部に径6.6、 深さ7.2cmの堀り跡みあり。 第52回	
A1048	1018	基礎	T11 2号基	9.4	27.2																			宝瓶印塔の基礎。第52回
A1049	1	石仏	O25～26 458号基																					阿弥陀仏か。門限石。拓本。 第52回
A1050	—	石仏	日地区 表塚																					阿弥陀仏か。第52回

注意：括弧内の数字は失等による不確定値。—は測定不可能な場合を示す。*印は稍穴及び抉り穴の数値である。

第25表 A地区相輪ほか計測値一覧（第52図）

報告番号	採取場所	出土場所	各部位の法量(cm)(別掲凡例参照)																		備考欄			
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s			
A0912	25	L13	45.6	(12.5)	5.4	7.4	8.6	11.7	11.5	4.2	11.8	9.5	(12.0)	14.7	5.6	1.4	13.8	5.8	14.7	14.7	12.6	2.9	空輪先端復元。豆鉢軸欠損。 第56回	
A0913	156	I17 斜面	45.0	12.5	4.8	7.6	9.0	11.1	12.0	3.9	12.5	9.0	14.3	13.9	5.4	2.1	13.9	5.0	14.3	14.4	12.2	1.0	空輪先端復元。第56回	
A0914	157	N16	52.9	10.9	4.9	9.1	12.0	16.0	12.0	2.4	12.8	11.0	16.6	16.2	7.6	2.4	16.2	6.5	16.7	16.0	10.6	1.7	輪削形品。第56回	
A0915	161	N15	(44.6)	(9.6)	5.0	7.8	11.2	11.0	11.6	4.2	12.6	10.9	(16.0)	16.9	4.7	2.0	13.0	4.6	15.2	15.0	11.3	1.7	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。 第56回	
A0916	165	N15	(49.7)	(14.2)	5.2	8.2	9.9	12.2	10.0	4.2	11.0	8.8	14.9	15.0	5.3	2.6	14.2	5.5	15.0	14.8	0	0	履半切。(幅6.2～9.8cm)。空輪 先端復元。幅6cm、高7cm。 第56回	
A0917	167	N15	(34.8)	(5.9)	14.4	7.0	8.1	9.4					10.4	12.5	14.8	4.8	2.1	13.2	5.4	15.0	14.2	0	0	空輪輪損傷。地輪欠損。 第56回
A0918	178	N15	(28.0)	—	5.0	6.4	7.6	9.0	—	(4.9)	10.0	8.6	11.4	13.2	(3.3)	(1.6)	11.5	4.5	14.3	14.0	0	0	空輪損傷。火輪軸一部欠。 第56回	
A0919	177	N14 77号基	(42.6)	(10.7)	3.6	8.6	10.2	9.5	9.2	3.2	9.6	8.2	13.4	13.8	4.2	1.9	12.8	5.4	13.8	12.2	11.2	1.4	空輪先端。(幅6.2～9.8cm)。空輪 先端復元。幅5.5cm、高4.1cm。 第56回	
A0920	180	N～O15 76号基	(46.2)	(8.6)	4.5	10.4	9.6	13.1	11.0	3.8	11.7	8.0	14.8	14.8	4.2	3.3	17.0	7.8	14.0	14.8	9.2	1.4	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。 第56回	
A0921	181	N～O15 76号基	(42.5)	(10.0)	4.3	6.2	8.6	13.4	9.6	3.7	11.0	8.7	12.8	13.1	4.0	2.5	13.0	4.6	13.5	13.0	10.0	1.2	空輪先端。第56回	
A0922	189	N15 80号基	36.0	9.5	4.4	5.4	6.5	10.2	8.8	3.2	9.8	8.6	13.6	13.4	4.8	2.2	12.2	4.6	12.8	10.0	—	0.6	第56回	
A0923	203	N15 東斜面	(46.6)	(10.2)	4.6	7.8	9.4	14.6	11.0	2.6	12.2	10.0	(13.8)	(14.6)	5.8	1.8	16.1	5.0	16.2	16.4	12.0	2.0	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。 第56回	
A0924	267	N17	(40.0)	(9.1)	5.9	7.0	7.7	(10.2)	9.4	3.4	10.6	(8.3)	11.2	13.7	3.8	2.1	12.6	4.6	14.4	12.9	0	0	火輪欠り。地輪半壊。 第56回	
A0925	298	N16 92号基	(31.7)	(7.4)	4.4	8.0	9.6	12.3	7.7	2.9	10.0	7.6	(12.6)	(13.0)	(3.8)	(3.2)	12.8	5.8	13.8	12.0	0	0	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。 第56回	
A0926	295	N15 80号基	54.6	11.0	7.2	8.2	11.6	16.6	11.0	3.9	12.8	8.2	(14.8)	14.6	7.0	4.0	14.8	6.4	(14.8)	14.8	0	0	火・地輪一部欠。第56回	
A0927	331	O14 東斜面	(38.0)	(8.2)	5.3	7.1	8.8	7.6	10.0	3.4	11.4	8.2	(12.8)	(13.6)	4.8	2.0	13.0	5.5	13.8	(12.8)	10.0	1.1	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。 第56回	
A0928	393	I15 175号基	(44.9)	(8.9)	5.7	7.8	13.0	(9.3)	11.9	4.7	12.4	11.8	(16.4)	(12.0)	(5.7)	2.2	15.2	(14.0)	—	0	0	履半切。地輪部に各々一部欠損。 第56回		
A0929	415	N25 454号基	(40.4)	(10.0)	5.2	7.0	9.2	9.0	9.8	4.0	10.8	8.0	(13.2)	(13.4)	3.4	1.4	13.0	5.1	13.8	13.8	7.8	0.6	火・地輪一部欠。第56回	
A0930	574	J19	(49.4)	(15.8)	5.2	8.8	11.5	(8.1)	(12.0)	5.3	14.4	11.2	(17.0)	(17.7)	4.6	2.0	16.4	6.0	17.4	16.8	0	0	空輪先端。地輪部不整形。 第56回	
A0931	582	20	(31.6)	(7.6)	5.4	7.2	8.8	(10.6)	10.3	3.4	11.7	9.2	—	(14.2)	—	(2.5)	13.5	5.3	14.4	—	—	—	空・火輪輪損傷方向に平壠地輪下部 欠失。	
A0932	643	J14	(44.2)	(12.9)	5.2	5.5	(8.9)	(13.7)	11.6	3.9	12.6	9.7	—	(14.9)	—	1.4	13.0	5.3	(14.5)	(14.8)	0	0	水・地割れ分離。	
A0933	650	L13 127号基	(38.4)	(7.9)	4.0	6.5	9.3	10.7	10.2	3.3	11.7	9.2	—	14.6	(3.5)	1.7	13.5	5.0	(13.3)	(12.8)	0	0	火輪半壊状態。	
A0934	696	P13 43号基	(33.9)	(9.4)	3.8	5.9	6.4	8.4	10.4	3.1	(11.0)	8.0	(12.4)	(12.6)	4.0	(1.2)	11.0	3.8	12.4	11.1	7.0	1.1	空輪先端。火輪笠蓋一部欠。	
A0935	705	P12 65号基	(40.2)	(8.0)	4.8	6.1	8.2	13.1	8.0	3.6	8.8	6.4	11.2	10.2	3.6	1.4	11.0	6.1	12.0	12.4	0	0	空・地輪一部欠損。第56回	
A0936	742	R11 31号基 西面下	(45.2)	(9.8)	4.6	7.0	8.8	13.0	9.8	2.9	11.8	9.0	(12.6)	(12.8)	0.0	0.0	13.0	6.8	(15.0)	14.4	10.6	0.8	空・火・水・地輪一部欠損。 第56回	
A0937	755	Q13 37号基 北西側 屋下	(52.8)	(10.2)	6.6	9.0	10.0	17.0	10.7	3.8	13.0	9.2	(16.9)	15.8	(6.4)	3.8	16.2	5.4	16.3	16.6	0	0	空・火輪一部欠損あり。第56回	
A0938	758	Q13 37号基 北西側 屋下	(44.6)	(13.4)	4.8	6.8	11.4	8.2	9.6	3.6	11.2	9.4	(13.8)	14.2	4.4	2.0	12.8	5.8	14.0	13.6	0	0	空輪先端復元高6.6cm。火輪の一部 分を欠失。第56回	
A0939	770	S11 15号基	41.8	11.8	4.8	6.0	7.6	11.6	8.3	3.8	10.5	8.6	(13.4)	(13.2)	(3.6)	1.5	12.0	4.4	13.0	12.2	0	0	火輪一部欠損。盤根明瞭。第56回	
A0940	816	P14	(34.1)	(8.7)	4.2	4.9	8.3	10.0	(6.7)	(2.0)	(8.1)	7.5	10.0	11.6	3.5	1.2	11.8	4.0	12.4	(13.2)	0	0	空・火・地輪損傷。	

第26表 A地区一石五輪塔計測値一覧（第56図）

報告番号	採取番号	出土場所	各部位の法量(cm)(別掲九例参照)																備考欄					
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t		
A0941	818	P14	(46.0)	(9.6)	3.8	6.8	7.0	8.8	8.6	3.6	10.6	8.2	11.4	12.2	4.6	12	10.5	4.0	(12.6)	12.4	0	空・地輪一部欠損。第56回		
A0942	819	P14	(44.3)	(13.2)	5.0	7.1	8.2	10.8	12.4	4.6	13.6	9.8	(15.4)	15.2	4.8	18	14.0	5.6	15.7	15.0	13.0	2.0	空・火輪一部欠損。第56回	
A0943	834	Q13 43号基 Q12	(40.1)	(6.8)	5.2	7.2	9.7	11.2	—	—	—	8.8	(14.0)	(14.6)	(14.2)	1.9	13.8	3.2	14.4	13.4	12.2	1.4	空風輪欠損著し。駕痕頭著。第56回	
A0944	838	39号基 周辺	(43.9)	(10.3)	5.8	8.0	8.6	10.8	9.2	5.0	11.8	9.4	(15.6)	15.2	(16.6)	2.2	13.2	5.8	15.4	15.4	0	0	空・火輪一部欠損あり。第56回	
A0945	858	S13	(44.6)	(11.4)	5.2	7.4	8.6	12.0	13.6	4.8	14.6	10.6	(15.0)	14.6	5.3	10	15.4	4.8	16.2	15.4	12.0	2.6	空・火輪一部欠損あり。第56回	
A0946	868	T10 2号基 東斜面 南側トレシ ンチ	(44.8)	(8.6)	5.8	7.2	9.0	14.2	9.8	2.7	11.4	9.2	13.9	13.6	4.4	2.6	13.3	4.6	12.8	12.8	0	0	空・地輪一部欠。略完品形。	
A0947	883	—	55.8	13.2	6.2	9.8	13.2	13.4	12.2	4.3	14.2	11.0	(16.8)	17.4	6.2	2.5	14.8	7.5	16.0	14.5	0	0	少輪一部欠。略完品形。	
A0948	913	O25	(35.3)	(6.6)	4.3	6.2	7.6	10.6	(11.8)	3.4	(22.6)	10.0	(14.0)	14.2	14.0	1.4	13.0	4.6	(13.8)	(13.2)	0	0	空・地輪一部欠損あり。第56回	
A0949	918	N25 45号基 L15	(42.2)	(9.3)	5.2	7.4	10.1	(11.2)	9.8	3.6	11.1	7.9	—	(13.9)	(3.7)	(21)	14.5	5.1	13.7	(12.8)	0	0	空・地輪一部欠損あり。第56回	
A0950	962	145号基 L13	(59.6)	(17.0)	5.8	9.4	12.2	15.2	12.6	5.6	14.6	10.8	18.8	16.6	5.8	2.0	17.0	8.0	18.6	16.4	13.0	3.6	空・地輪一部欠損あり。地輪部のみ区画用配石として転用。第56回	
A0951	965	138号基 N25	(42.6)	(8.0)	5.0	7.0	7.6	14.8	9.6	2.6	11.2	9.4	(12.6)	(12.2)	4.4	2.6	13.0	4.4	12.6	12.8	0	0	空・火輪一部欠損あり。第56回	
A0952	403	445号基 N25	(33.9)	(8.5)	6.5	7.7	11.2	—	11.9	5.8	13.4	10.1	14.9	16.7	5.6	1.8	14.7	7.4	—	—	—	空風火輪。地輪消失。		
A0953	404	445号基 J20	(26.2)	(6.5)	3.9	5.1	10.7	—	(9.4)	(2.7)	(10.4)	9.9	—	13.4	—	—	13.1	6.1	—	—	—	空風火輪。地輪消失。		
A0954	581	—	(29.8)	(8.9)	4.2	5.2	11.5	—	10.3	3.3	10.6	8.1	9.9	12.6	3.2	1.7	13.2	6.6	—	—	—	空風火輪。地輪消失。		
A0955	654	L13 138号基	(31.6)	(9.1)	4.7	7.4	10.2	—	9.9	3.3	(11.3)	7.4	(12.0)	(12.9)	(4.8)	2.5	13.4	5.2	—	—	—	空風火輪。地輪消失。		
A0956	743	R11	(28.2)	(5.5)	5.6	7.1	10.0	—	(8.0)	(10.3)	(8.3)	—	(12.4)	—	3.1	(12.1)	6.3	—	—	—	空風火輪絆方向に半壊。地輪消失。			
A0957	265	N17	(32.9)	(0.1)	(4.6)	7.8	8.5	9.7	—	—	8.6	8.6	—	(17.8)	(14.6)	(12.6)	(13.9)	1.2	8.9	(7.2)	0	0	空風火輪。地輪消失。	
A0958	365	K14 155号基	(27.2)	—	(3.9)	6.5	7.1	9.7	—	—	8.6	8.2	11.1	12.5	3.7	2.6	12.9	3.8	13.0	12.5	0	0	空風火輪。地輪絆方向に半壊。	
A0959	733	110号基 Q10 Q13	(36.6)	—	(4.8)	6.1	11.1	8.6	—	—	(10.0)	(10.4)	12.6	14.2	3.9	1.0	(12.2)	5.9	12.8	11.8	8.6	1.1	空風火輪。地輪消失。	
A0960	761	37号基 東側 Q12	(42.0)	(2.5)	2.2	8.7	13.2	10.4	—	—	14.4	13.0	—	17.8	(5.3)	(2.5)	16.5	8.5	16.6	16.4	10.7	1.8	空風火輪絆方向に半壊。	
A0961	840	39号基 周辺	(37.3)	(2.6)	(5.4)	8.0	8.6	12.5	—	—	—	10.2	(16.0)	(16.0)	5.6	1.8	16.0	6.0	17.3	16.6	12.2	2.0	風火水地輪。空輪欠失・風輪欠損及び火輪一部消失す。	
A0962	1002	O15 57号基	(34.6)	(4.2)	5.2	6.6	9.4	11.0	—	—	11.2	9.2	(14.6)	(15.6)	(16.0)	1.6	13.4	5.2	13.8	12.8	10.8	1.4	風火水地輪。空輪欠失・火輪一部に欠損あり。駕痕頭著。	
A0963	1003	O15 57号基	(34.0)	—	(5.4)	9.2	7.4	12.0	—	—	—	9.8	(16.5)	(15.6)	(5.2)	(2.6)	13.8	5.4	15.8	14.6	11.0	2.4	風火水地輪。空輪欠失・火輪部に欠損あり。駕痕頭著。	
A0964	1004	O15	(39.0)	—	(8.4)	9.0	9.4	13.0	—	—	10.4	18.2	18.4	6.0	2.2	16.6	5.4	17.6	16.0	0	0	風火水地輪。空輪欠失・風輪部に欠損あり。第56回		
A0965	27	(不明)	(26.9)	—	6.5	7.7	6.7	—	—	—	8.8	8.4	11.0	8.6	—	10.2	4.4	10.7	9.2	—	0.5	火水地輪のみ。		
A0966	37	N23	(27.1)	—	8.0	10.5	8.6	—	—	—	(9.4)	—	1.2	(11.7)	—	(12.4)	(10.5)	—	1.4	火水地輪のみ。	—			
A0967	99	K16	(34.6)	—	—	7.1	11.7	15.8	—	—	—	(7.8)	11.3	12.9	9.9	2.4	13.7	6.7	15.7	14.5	0	0	火水地輪のみ。	
A0968	190	N15 80号基	(27.0)	—	(7.3)	10.0	9.7	—	—	—	—	(13.0)	15.2	16	2.0	13.9	6.2	15.3	15.1	10.7	0.9	火水地輪。空風輪欠失・火輪欠損あり。		
A0969	193	N16	(37.0)	—	(9.2)	12.4	15.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16.8	7.6	16.0	16.6	13.4	1.8	少風火輪のみ・火輪欠損あり。第56回
A0970	201	N14 74号基	(32.3)	—	(7.0)	10.8	13.7	—	—	—	—	(16.0)	(5.5)	(3.3)	16.1	6.0	(15.7)	(12.9)	0	0	火水地輪。火輪上半分消失・地輪部は半壊。			
A0971	205	N15 東斜面	(38.6)	—	—	(7.6)	12.6	18.4	—	—	—	(14.0)	15.3	5.4	3.2	15.8	8.0	15.2	15.0	0	0	少風火輪のみ・火輪欠損あり。第56回		
A0972	206	N15 東斜面	(33.5)	—	—	10.6	9.6	15.3	—	—	—	17.6	—	(14.2)	(0.0)	(2.6)	16.3	6.4	14.3	13.9	0	0	少風火輪、空風輪欠失・火輪軸部に欠損あり。	
A0973	210	N15 東斜面	(31.4)	—	—	10.8	10.2	14.4	—	—	—	11.1	13.2	2.9	2.3	12.6	5.6	13.4	12.6	9.4	2.0	少風火輪、空風輪欠失・火輪の一部を欠損。		
A0974	220	N15 東斜面	(29.6)	—	—	10.8	9.8	12.0	—	—	—	(11.3)	14.4	5.1	—	14.0	6.5	16.2	16.0	0	0	少風火輪絆方向に半壊。火輪に損傷あり。		
A0975	221	M16 182号基	(29.3)	—	—	10.6	10.3	13.4	—	—	—	—	(13.2)	—	(0.0)	(2.4)	12.6	6.9	13.1	12.9	0	0	火水地輪、火輪半壊。	
A0976	225	N16 87号基	(29.8)	—	—	6.7	6.5	10.0	—	—	—	(8.4)	—	12.9	0.8	21	1.1	13.8	12.2	(12.0)	6.8	1.9	少風火輪、火輪・地輪一部欠損。	
A0977	228	N16 87号基	(28.1)	—	—	8.0	10.2	9.9	—	—	—	—	8.2	—	12.5	—	(14.3)	12.3	5.3	13.2	12.0	0	0	火水地輪。火輪損壊。
A0978	290	N16 (18.9)	—	—	10.5	5.8	9.1	—	—	—	—	—	11.7	(4.1)	—	14.0	6.5	16.2	16.0	0	0	火水地輪。火輪・地輪一部欠損。		
A0979	293	N16 90号基	(23.1)	—	—	10.5	8.1	9.0	—	—	—	—	(15.4)	—	—	15.1	4.9	16.6	(16.4)	0	0	火水地輪。火輪・地輪損壊あり。		

第26表 A地区一五五輪塔計測値一覧(第56回)

報告番号	採取番号	出土場所	各部位の法量(cm)(別開丸例参照)															備考欄				
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p				
A0980	299	N15 80号墓	(27.1)	—	—	(8.8)	10.2	(8.0)	—	—	—	(12.4)	—	—	12.3	7.2	(12.8)	(12.9)	8.8	11		
A0981	329	O14	(33.8)	—	(9.9)	11.6	13.1	—	—	—	—	(18.8)	—	(2.4)	17.2	5.5	18.6	18.4	13.5	22		
A0982	330	O14 東斜面	(32.8)	—	—	(7.7)	9.6	15.4	—	—	—	(17.0)	(5.0)	(2.0)	13.8	5.6	13.6	14.6	0	0		
A0983	350	O15	(32.8)	—	—	(7.7)	10.9	14.2	—	—	—	—	15.5	18.1	3.6	22	16.9	6.7	17.5	17.5		
A0984	411	N25 445号墓	(27.1)	—	(8.3)	9.1	9.7	—	—	—	—	(15.0)	—	(1.8)	13.5	5.4	14.0	14.0	11.2	11		
A0985	422	N25 454号墓	(28.8)	—	(7.9)	9.3	12.0	—	—	—	—	(13.8)	15.0	(5.1)	25	13.2	5.2	15.1	14.9	10.9		
A0986	441	M25	(35.0)	—	(8.8)	11.9	(14.3)	—	—	—	—	(12.8)	14.9	42	17	14.2	7.4	13.7	12.2	0		
A0987	500	M23	(29.3)	—	(6.6)	10.4	(12.5)	—	—	—	—	(14.0)	(3.0)	(2.0)	14.4	6.1	(15.4)	(15.5)	11.6	22		
A0988	545	K21 365号墓	(22.6)	—	(6.7)	8.9	(7.6)	—	—	—	—	(17.7)	12.7	(3.3)	17	12.6	4.8	12.7	(1.6)	7.2	07	
A0989	596	L17 208号墓	(34.3)	—	(6.3)	12.0	16.0	—	—	—	—	(12.9)	14.3	(3.6)	28	13.9	6.3	14.0	14.6	9.5	22	
A0990	599	K17 285号墓	(34.7)	—	(9.0)	15.4	9.7	—	—	—	—	—	—	—	(15.0)	9.7	(12.6)	(11.9)	0	0		
A0991	652	L13 653 138号墓	(27.4)	—	(5.5)	8.1	13.8	—	—	—	—	(12.0)	(4.3)	17	12.3	4.2	12.8	12.4	0	0		
A0992	693	64号墓 東斜面	(24.9)	—	(4.6)	11.5	8.8	—	—	—	—	—	—	—	(14.8)	7.6	15.6	(15.2)	11.8	13		
A0993	725	Q12 40号墓	(21.7)	—	(6.8)	5.3	(9.6)	—	—	—	—	(11.9)	(3.6)	(1.7)	(1.8)	27	(1.9)	(1.2)	0	0		
A0994	794	L16 196号墓 と199号 墓の間	(27.8)	—	—	7.8	9.2	(10.8)	—	—	—	9.6	—	(15.0)	—	(1.9)	13.0	4.9	(14.8)	(14.6)	0	0
A0995	832	Q15 83号墓	(24.0)	—	(6.2)	7.4	10.4	—	—	—	—	(12.2)	12.4	4.2	22	11.6	4.8	13.2	12.2	9.6	14	
A0996	839	Q12 39号墓 周辺	(21.7)	—	(6.9)	7.2	8.0	—	—	—	—	11.4	11.2	26	16	11.6	4.2	13.0	11.8	0	0	
A0997	859	S13	(27.0)	—	(7.0)	11.2	8.8	—	—	—	—	(12.0)	(12.0)	(3.2)	(1.6)	11.2	6.3	(10.9)	10.8	9.2	12	
A0998	897	N26	(28.4)	—	(7.6)	9.4	11.6	—	—	—	—	(13.8)	(13.4)	(4.0)	(1.6)	12.9	4.9	(12.4)	(13.4)	0	0	
A0999	903	O26 460号墓	(25.9)	—	(7.3)	8.8	9.8	—	—	—	—	(8.0)	(4.2)	(1.0)	(0.6)	20	12.3	5.6	14.4	14.4	0	0
A1000	941	J20 328号墓	(35.6)	—	(10.8)	9.6	15.2	—	—	—	—	(13.5)	13.5	(2.6)	—	14.2	4.2	13.4	12.8	0	0	
A1001	994	Q14	(32.0)	—	(7.6)	9.4	15.0	—	—	—	—	(14.6)	(14.6)	—	—	15.6	6.0	15.2	15.0	0	0	
A1002	997	O15 53号墓	(26.6)	—	(7.3)	12.0	9.4	—	—	—	—	(17.8)	—	—	13.2	5.0	13.2	12.0	0	0		
A1003	1001	O15 57号墓	(31.8)	—	(7.8)	9.8	14.2	—	—	—	—	(13.2)	(13.8)	(4.4)	(1.6)	13.0	6.0	14.8	15.4	0	0	
A1004	178	N14 78号墓	(20.9)	—	5.1	7.7	(8.1)	—	—	—	11.7	8.9	(2.2)	(14.1)	(4.3)	(1.9)	12.5	—	—	—		
A1005	224	M15	(20.8)	—	(5.6)	6.2	(9.0)	—	—	—	—	9.0	(16.0)	(16.4)	(4.1)	(3.5)	12.6	—	—	—		
A1006	705	P12 65号墓	(20.2)	—	(4.9)	5.8	9.9	—	—	—	(10.7)	7.9	—	(12.8)	—	(1.5)	(1.6)	6.3	—	—		
A1007	790	K16 263号墓 南西側 石組の 外側	(18.5)	—	(5.9)	6.6	(6.4)	—	—	—	(10.3)	(10.9)	—	15.5	(3.6)	22	(13.7)	—	—	—		
A1008	889	M15	(19.7)	—	3.9	5.4	(10.3)	—	—	—	10.7	9.8	13.0	14.9	34	12	14.3	4.0	—	—		
A1009	368	K14 149号墓	(16.6)	—	(7.4)	9.2	—	—	—	—	(17.8)	—	(12.8)	(3.1)	(2.5)	12.6	4.8	—	—	—		
A1010	406	N25 445号墓	(17.3)	—	(5.9)	11.4	—	—	—	—	—	—	—	—	14.0	6.0	—	—	—			
A1011	424	N25 454号墓	(16.2)	—	8.6	17.6	—	—	—	—	7.5	—	15.9	(5.0)	(2.8)	15.3	—	—	—			
A1012	722	P11 111号墓	(14.8)	—	(3.8)	9.0	—	—	—	—	—	—	(15.3)	—	(1.6)	13.3	5.6	—	—			
A1013	890	M16	(12.9)	—	—	—	(4.3)	8.6	—	—	—	—	—	—	—	19.9	—	(12.1)	(12.2)	8.5		
一石五輪壇平均値																						
内数値は境外に算出。																						

第26表 A地区一石五輪塔計測値一覧(第56図)

報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例模式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1051	B62	空軸?	N29	—	(8.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	損傷痕跡頭著、天地不詳。	
B1052	B13	空風輪	O28	(15.9)	(12.1)	0.9	(0.4)	(3.4)	(11.3)	(9.5)	(7.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半壊、風輪下部欠損。	
B1053	B14	空風輪	O28	(34.4)	(19.3)	(15.1)	(1.3)	(10.3)	(9.4)	(16.1)	(21.6)	(16.7)	(9.1)	(3.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半壊、欠損あり。
B1054	B40	空(風)輪	M29 462号墓 SK610	—	(10.9)	—	—	—	10.3	8.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	墳丘B大壠内出土。風輪部欠失。	
B1055	B43	空(風)輪	N30	(12.2)	—	—	—	—	—	(22.7)	(11.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪欠失、縦方向に半壊。	
B1056	B43	(空)風輪	N30	(12.3)	(3.5)	8.8	—	—	(4.1)	(14.6)	16.5	(12.2)	7.1	4.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪欠失、縦方向に半壊。
B1057	B60	空風輪	Q31	23.9	11.9	12.0	0.5	66	14.2	11.3	15.8	9.4	6.7	4.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪部に柄あり。
B1058	B63	空(風)輪	J25	—	(7.8)	—	—	—	—	(9.8)	(8.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪欠失、縦方向に2/3割。	
B1059	B75	空風輪	M28	(18.2)	(12.3)	0.9	0.4	(5.5)	13.8	12.1	17.6	(15.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪先端欠・風輪の下部は半壊状態。	
B1060	B77	空風輪	M28	22.9	10.8	12.1	0.3	65	13.3	10.9	15.8	10.7	6.4	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	風輪部に柄あり。
B1061	B89	空風輪	M28 461号墓 西溝内	(13.1)	(6.8)	(5.3)	(0.8)	(5.9)	(9.9)	(8.7)	(11.4)	(9.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	墳丘A西溝内出土。 縦方向に半壊。	
空風輪各部位法量の平均値				23.4	11.4	11.0	0.4	6.6	12.9	10.6	16.4	10.1	6.7	4.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	注意) かっこ内の数値は除外して計算 (以下同じ)。
報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例模式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1062	B17	火輪	N28	—	—	5.2	0.4	6.0	0.6	—	—	—	20.0	17.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上部欠損。	
B1063	B69	火輪	N27	11.4	7.8	3.1	0.5	6.0	0.7	—	10.3	—	(20.0)	(19.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠損あり。	
火輪各部位法量の平均値				11.4	7.8	4.2	0.5	6.0	0.7	—	10.3	—	20.0	17.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上記に同じ。	
報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例模式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1064	B1	水輪	N27	17.2	9.4	14.6	15.3	21.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊実測不可。	
B1065	B37	水輪	K25	14.8	8.5	16.3	14.1	20.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊実測不可。	
B1066	B80	水輪	M28	(13.8)	—	—	(14.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上記に同じ。	
水輪各部位法量の平均値				16.0	9.0	15.4	14.7	21.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上記に同じ。	
報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例模式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1067	B21	地輪	M28	16.2	(9.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縦方向に半壊、上部欠損。	
B1068	B29	地輪	M28	(17.1)	(8.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊。	
B1069	B39	地輪	M29 462号墓 SK610	—	(19.0)	(7.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	墳丘B大壠内出土。縦方向に半壊。	
B1070	B41	地輪	L30	(24.0)	(8.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊。	
B1071	B66	地輪	N27	19.0	(9.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上部欠損。	
B1072	B60	地輪	M28	(17.3)	(10.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	半壊。	
地輪各部位法量の平均値				17.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	部位(b) に確定値なく算出不可。カッコ内内部の平均値は(9.0) cmになる。	
報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例模式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1073	B6	空輪	O27	(30.6)	(14.2)	7.0	9.4	4.8	6.0	3.3	18.4	—	11.7	—	0.3	22	16.0	5.7	12.0	14.0	5.0	5.6	—	—	—	—	空輪、火輪笠部欠損。 柄あり。	
B1074	B7	空輪	N28	(25.4)	(8.8)	5.6	11.0	3.4	8.0	3.6	(17.5)	—	11.5	6.6	0.3	17	14.4	3.6	11.5	(12.5)	4.6	—	—	—	—	—	空輪笠部に柄あり。	
B1075	B9	空輪	N28	34.9	18.5	5.5	10.9	*4.6	*8.4	5.0	19.4	(19.2)	13.2	7.3	0.2	27	14.9	5.1	12.2	15.0	5.9	7.6	7.2	—	—	—	—	火輪笠方向に半壊一部欠損、 底部穴開けあり。
B1076	B38	(空)火輪	K25	(17.6)	(8.8)	6.4	10.4	0	0	0	17.2	18.4	10.6	6.6	0.4	30	14.4	5.3	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	火輪底面に熱なし。
B1077	B48	空輪	N31	(32.7)	(15.4)	5.8	11.5	0	0	0	19.2	20.2	11.0	7.0	0.4	24	14.2	4.8	12.0	13.8	4.6	(6.2)	—	—	—	—	空輪先端欠失。	
B1078	B65	空輪	N27	(31.8)	(12.4)	5.8	13.6	0	0	0	18.0	—	12.8	8.2	0.6	30	16.8	4.4	14.2	15.6	5.0	—	—	—	—	—	空輪笠部欠損。	
B1079	B72	空輪	M28	(34.1)	(14.6)	5.3	14.2	4.1	6.8	4.9	17.2	17.8	11.2	7.8	0.3	24	13.6	4.2	11.0	13.2	6.8	(6.0)	13.6	—	—	—	空輪欠失。	
B1080	B75	空輪	M28	(15.8)	—	—	13.4	0	0	0	20.7	(20.0)	12.0	(7.8)	(0.8)	36	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空輪底面欠失。	
B1081	B81	(空)火輪	M28	(17.7)	—	7.5	10.2	0	0	0	(10.8)	—	11.8	6.2	0.3	20	(14.2)	6.5	(10.0)	—	—	—	—	—	—	—	空輪部欠失。火輪・火輪に欠損。	
空風火輪・石塔計測値の平均値				34.9	18.5	6.1	11.6	4.5	6.9	4.1	18.6	18.5	11.8	7.3	0.4	26	16.3	5.0	11.8	14.3	5.3	6.6	7.2	—	—	—	—	—

第27表 B地区石塔計測値一覧

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例版式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1082	B3	空風(火輪)	N27	(15.0)	(9.9)	(5.3)	0.7	(4.4)	11.0	9.8	11.9	10.5	—	—													火輪欠失。	
B1083	B5	空風(火輪)	O27	(17.8)	(11.5)	(6.3)	0.5	(5.8)	14.6	12.5	(16.3)	(12.8)	—	—													履半壙、火輪欠失。	
B1084	B8	空風(火輪)	N28	(22.8)	14.7	(8.1)	0.7	(7.4)	12.8	(11.2)	(11.6)	(7.5)	—	—													履半壙、火輪欠失、 他破片2点計測不可。	
B1085	B12	空風(火輪) S.K.606	O28	(16.5)	(9.1)	(7.4)	0.6	(6.8)	(12.4)	(11.1)	(14.2)	(12.9)	—	—													履半壙、火輪欠失。	
B1086	B19	空風(火輪)	M27	(17.1)	(10.9)	(5.8)	0.4	(4.6)	12.4	10.4	13.5	(12.1)	—	—													三輪一石、火輪欠失。	
B1087	B25	空風(火輪)	M28	(14.8)	(11.0)	(3.8)	0.8	(3.0)	10.8	(10.6)	(11.7)	(10.0)	—	—													履半壙、火輪欠失。	
B1088	B26	空風(火輪)	M28	(15.1)	(10.0)	(5.1)	0.6	(4.5)	12.8	10.8	(12.8)	(9.0)	—	—													破壊痕、火輪欠失か、 他破片2点計測不可。	
B1089	B27	空風(火輪)	M28	(17.8)	11.5	4.5	0.4	4.1	9.5	8.0	10.5	7.4	—	—													火輪欠失、一石五輪の 可能性も。	
B1090	B28	空風(火輪)	M28	(15.3)	(9.2)	(6.1)	0.4	(5.7)	10.8	8.9	12.5	8.6	—	—													火輪欠失、一石過りか 一石五輪等は不詳。	
B1091	B30	空風(火輪)	M28	(15.2)	(8.5)	(6.7)	0.4	(6.3)	(9.5)	(8.7)	(10.9)	(7.6)	—	—													半壙、火輪欠失。	
B1092	B34	(空)空風(火輪)	L26	—	—	(9.0)	(8.2)	(8.8)	—	—	(14.3)	(10.1)	—	—													空・火輪欠失。	
B1093	B49	空風(火輪)	N31	(16.1)	(9.4)	(6.7)	0.8	(5.9)	(12.3)	11.0	13.0	(11.4)	—	—													火輪欠失。	
B1094	B50	空風(火輪)	N31	(15.3)	(9.6)	(4.9)	0.6	(3.9)	11.2	9.5	11.9	(9.2)	—	—													火輪欠失。	
B1095	B51	空風(火輪)	N31	(15.8)	(8.8)	(7.0)	0.7	(6.3)	10.5	9.5	11.4	(10.4)	—	—													火輪欠失。	
B1096	B52	空風(火輪)	N31	(13.8)	(8.5)	(5.3)	0.7	(4.6)	(10.6)	9.9	12.0	(11.6)	—	—													火輪欠失。	
B1097	B53	空風(火輪) S.K.612	O29	(22.7)	14.7	(8.0)	0.7	(7.3)	13.6	11.9	15.1	13.1	—	—													火輪欠失。	
B1098	B55	空風(火輪) S.K.612	O29	(14.8)	(9.1)	(5.7)	0.5	(5.2)	11.3	9.6	11.8	(9.8)	—	—													火輪欠失。	
B1099	B56	空風(火輪) S.K.612	O29	(15.7)	(7.9)	(6.5)	1.0	(5.5)	(13.1)	(11.7)	(14.2)	(10.8)	—	—													火輪欠、履方向に半壙。	
B1100	B57	(空風)火輪	O29	(8.4)	(2.5)	(1.0)	0.2	(5.9)	(4.7)	—	(13.2)	—	(19.4)	—													空風輪欠失。	
B1101	B59	空風(火輪)	P28	(16.3)	(9.7)	(5.8)	0.6	(5.2)	11.1	9.7	12.3	(10.0)	—	—													火輪欠失。	
B1102	B70	空風(火輪)	N27	(17.4)	(9.8)	5.1	0.5	4.6	11.3	10.0	12.4	9.3	—	—													火輪欠失。	
空風(火輪)一石の平均値				—	13.6	4.8	0.6	4.4	11.7	10.1	12.4	9.8	—	—	部位(a)に標準値なく算出不可。カッコ内数値の平均は (36.2) cmになる。													

報告番号	採取番号	遺物名称	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名称は凡例版式図参照												備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					
B1103	B15	水地輪	N28	(20.9)	9.7	11.2	—	—	—	—	(13.7)	12.1	5.4	8.8	15.1	(13.8)	—	—									指標頭著、一石五輪等の 可能性も?	
B1104	B20	水地輪	M28	(12.7)	10.6	(2.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	水輪大半欠損。		
B1105	B23	水地輪	M28	282	14.0	14.2	3.8	7.4	4.6	15.0	19.4	14.2	8.3	12.8	19.0	18.8	14.3	3.8									水輪上部に焼造り出し。	
B1106	B44	水地輪	N30	26.0	13.8	12.2	3.5	7.6	4.6	14.0	18.4	14.4	6.8	12.2	18.0	17.0	14.0	2.0									水輪上部焼造り。	
B1107	B61	水地輪	O13	27.7	15.2	12.5	0	0	0	14.2	19.6	14.0	6.8	12.9	19.3	18.7	13.4	1.7									水輪上部に11.3×1.3の窓 及びあり。	
B1108	B71	水地輪	N27	27.9	15.3	12.6	*5.0	*9.2	*5.2	13.2	18.8	15.2	7.3	14.1	20.2	20.0	—	5.0									磨耗頭著。	
B1109	B73	水地輪	M28	24.2	12.3	11.8	2.4	7.2	3.8	13.0	18.6	15.0	6.4	11.1	19.0	18.4	12.8	2.5									水輪上部焼造り。	
B1110	B84	水地輪	N30	24.9	13.0	11.5	*4.0	*8.2	7	(2.5)	(16.4)	14.2	6.7	12.1	17.4	17.1	12.0	2.9									傾斜め方向に半壙。	
水地輪一石法量の平均値				26.8	13.0	12.3	3.2	7.4	4.3	13.9	19.0	14.0	6.8	11.7	18.0	17.9	13.2	2.8									*印の数値は病穴及び抉り穴の平均値である。	

第27表 B地区石塔計測一覧

報告番号	採取番号	遺物名	出土地区	各部位計測法量 (cm)												部位名稱は凡例様式図参照											備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t				
B1111	B-4	一石五輪塔	N27	(28.6)	—	—	7.6	9.0	12.0	—	—	—	(10.8)	(16.4)	(16.0)	5.2	1.6	15.2	5.4	16.4	(16.0)	(12.0)	20	火本地輪のみ、空瓶輪は欠失。火・地輪の一部に欠損あり。			
B1112	B10	一石五輪塔	N28	(42.6)	(9.4)	5.2	8.2	8.2	11.6	12.1	4.4	13.3	10.8	(16.8)	16.8	5.8	2.8	15.3	5.3	16.2	(15.4)	0	0	空瓶上端・地輪一部欠損あり。			
B1113	B16	一石五輪塔	N28	(46.7)	(13.0)	5.2	7.7	7.8	13.0	11.0	3.8	12.4	10.0	(16.4)	15.6	5.7	3.6	13.5	5.2	16.0	15.0	12.0	14	空瓶上端（高さ5.2×5.0）及び空瓶豆部一部欠損あり。 火・水・地輪のみ、空瓶輪欠失。			
B1114	B18	一石五輪塔	M28	(24.4)	—	—	(5.6)	8.4	9.8	—	—	—	(6.4)	(11.2)	(11.8)	3.8	1.6	11.4	4.9	11.6	10.3	6.0	0	火・水・地輪のみ、空瓶輪欠失。			
B1115	B22	一石五輪塔	M28	(27.3)	—	—	(7.6)	11.4	8.3	—	—	—	(12.4)	15.0	(15.6)	10	1.0	13.4	6.9	13.6	13.6	8.2	0	火・水・地輪のみ、空瓶輪欠失。			
B1116	B24	一石五輪塔	M28	(25.5)	—	5.1	6.1	14.3	—	—	—	(10.5)	11.4	(14.6)	17.4	(3.4)	21	(16.0)	8.8	—	—	—	—	0	空瓶上端・地輪欠失。風・火・水輪のみ、一部指標あり。		
B1117	B27	一石五輪塔	M28	(17.6)	11.8	4.7	(1.1)	—	—	9.6	3.7	10.5	(7.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	空瓶輪欠失。火・水・地輪のみ、火輪先端4×3.54cm残存。	
B1118	B32	一石五輪塔	M26	(23.1)	—	—	(5.6)	8.5	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	10.4	5.0	11.5	11.8	0	0	空瓶輪欠失、火・水・地輪のみ（火輪指標）、磨耗いちじるしい。			
B1119	B34	一石五輪塔	L26	(40.3)	(8.2)	4.6	8.3	10.3	8.9	(10.9)	3.1	(11.6)	(9.0)	(12.6)	(15.1)	(4.2)	(1.0)	13.7	4.7	14.0	13.7	10.0	0	全側縦方向に平塗。空瓶の先端欠失・底火輪一部欠損。			
B1120	B36	一石五輪塔	K25	(22.9)	—	4.5	6.0	(12.4)	—	—	11.0	9.9	—	15.0	(2.9)	1.6	(14.5)	(7.1)	—	—	—	—	—	27	底火輪に半塗。風・火・水輪のみ、地輪のみ、火輪欠損。		
B1121	B43	一石五輪塔	N30	S.K.625	(11.0)	—	—	—	9.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13.0	12.0	9.6	18	空・水輪欠失、火・水・地輪のみ残存。			
B1122	B45	一石五輪塔	N30	S.K.625	(26.9)	—	—	(5.5)	11.4	9.0	—	—	(10.8)	—	(15.6)	(3.4)	(1.6)	14.8	7.2	14.3	13.4	9.4	18	空・水輪欠失、火・水・地輪のみ、但し火輪多点欠損。			
B1123	B46	一石五輪塔	N30	S.K.625	(27.0)	—	—	(7.0)	7.6	12.4	—	—	—	(13.8)	(14.6)	(5.0)	(1.4)	13.4	4.6	15.8	15.2	10.5	27	空瓶輪欠失、火・水・地輪のみ、火輪少部分欠損。			
B1124	B47	一石五輪塔	N30	S.K.625	(27.0)	—	—	(5.6)	11.6	9.4	—	—	(11.0)	—	(16.6)	3.8	2.6	15.0	7.5	15.2	15.4	11.6	22	空・水輪欠失、火・水・地輪一部欠損。			
B1125	B54	一石五輪塔	O29	(13.0)	8.6	4.4	—	—	—	8.7	2.2	9.6	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古輪・火輪のみ、但し火輪一部輪を欠失。	
B1126	B55	一石五輪塔	O29	(14.0)	—	—	(5.9)	(8.1)	—	—	—	(6.5)	—	(12.1)	(3.9)	(2.1)	14.2	3.7	—	—	—	—	—	—	—	—	火・水輪のみ、火・水・水輪半塗。
B1127	B58	一石五輪塔	O29	S.K.612	(26.2)	—	—	(7.6)	8.0	10.6	—	—	—	(16.8)	(16.2)	4.5	1.8	13.8	5.2	14.4	13.4	9.8	26	空瓶輪欠失、火・水・地輪のみ、火輪一部欠損あり、地輪直後に根石跡。			
B1128	B63	一石五輪塔	J25	(15.0)	(10.6)	4.4	—	—	—	9.6	2.5	10.4	(8.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空・水輪のみ、火・水・地輪欠失。	
B1129	B64	一石五輪塔	N27	(30.4)	—	—	(8.6)	12.8	9.0	—	—	—	—	—	(15.8)	(4.4)	(1.0)	14.9	7.5	15.7	14.4	11.2	10	空・水輪のみ、火・水・地輪のみ、火輪欠損あり。			
B1130	B67	一石五輪塔	N27	(29.2)	—	—	(8.0)	9.2	12.0	—	—	—	(15.2)	15.0	6.2	2.0	14.0	5.4	14.8	14.4	11.2	26	空瓶輪欠失、火・水・地輪のみ、火輪欠損あり。				
B1131	B76	一石五輪塔	M28	(34.8)	(11.6)	3.8	7.6	10.2	(1.6)	10.6	3.0	11.0	8.8	(12.4)	(13.0)	3.6	1.3	13.0	6.0	—	—	—	—	—	—	空・火輪・水輪のみ、地輪欠失、空瓶・水輪に一部欠損あり。	
B1132	B78	一石五輪塔	M28	(41.2)	(9.7)	4.5	7.0	10.0	10.0	8.3	2.6	10.3	8.0	(13.8)	12.7	4.0	2.8	11.6	5.2	12.7	13.2	—	18	空・火輪一部欠損、地輪空存。			
B1133	B79	一石五輪塔	M28	(13.2)	(9.4)	3.8	—	—	—	9.4	2.0	10.7	(7.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	空・火輪のみ、火輪以下欠失、空瓶欠損あり。	
B1134	B83	一石五輪塔	N30	(45.8)	(10.9)	5.1	7.2	9.0	13.6	9.6	3.1	11.2	7.7	(13.2)	(12.7)	(3.8)	2.2	12.9	5.0	13.2	13.4	0	0	略充完存、空・火輪一部欠損あり、第56回。			
B1135	B85	一石五輪塔	N30	(31.8)	—	—	(10.2)	13.0	8.6	—	—	—	(15.8)	17.0	5.8	1.7	16.0	7.3	15.4	14.4	0	0	空瓶輪欠失、火輪欠損あり。				
B1136	B86	一石五輪塔	N30	(27.0)	—	—	(7.3)	8.6	11.1	(5.2)	—	—	(12.0)	(11.0)	—	(16.0)	—	(16.8)	—	—	—	—	—	—	—	空・火輪欠失、全体に崩壊著しい。	
B1137	B87	一石五輪塔 465号基	O28	(9.6)	—	—	—	(2.0)	7.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	現空C上面出土、空瓶～水輪欠失、水・地輪のみ崩壊初期。		

第27表 B地区石塔計測値一覧(第56図)

報告 番号	採取 番号	遺物 名称	出土 地区	各部位計測法量 (cm)													部位名称は凡例模式図参照										備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t				
B1138	B11	相輪	O28 SK606	(10.2)	—	—	(1.7)	3.0	(5.5)	(0.6)	—	—	—	—	9.7	10.6	8.7	10.7	7.3						大半損壊欠失。		
B1139	B68	相輪	N27	(34.7)	—	—	(21.2)	4.0	(6.7)	(2.8)	—	—	—	—	10.4	12.3	8.8	(11.4)	5.4						九輪（上部欠）・鷲花・伏鉢（一部欠）のみ残存。第52回		
B1140	B88	相輪	M26 461号鑑 雲満内	(24.4)	4.4	(11.6)	—	—	—	9.8	8.4	11.9	9.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	塔丘A高溝底部出土。下部に損壊あり欠失。第52回		
相輪各部位法量の平均値				39.7	7.7	4.7	14.2	4.2	8.4	5.0	9.9	8.3	11.3	8.4	9.6	12.2	9.0	11.4	6.3							A地区的相輪も入れた平均値を算出。	

報告 番号	採取 番号	遺物 名称	出土 地区	各部位計測法量 (cm)													部位名称は凡例模式図参照										備考
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t				
B1141	B33	屋根部	M26	(16.9)	—	3.0	(23.2)	—	14.8	17.8	(5.6)	(3.4)														上段形・漢飾椎墻、磨耗頭著。	
B1142	B42	屋根部	M10	25.5	(13.7)	8.8	(38.4)	(13.0)	26.0	35.0	(10.4)	(11.8)														大型品。全体に欠損多し後元計測。底部に径20.8、深さ4.4cmの龜り座みあり。 第52回	
B1143	B74	屋根部	M28	24.6	8.0	9.6	29.6	14.6	21.4	29.9	6.8	6.4														大型。欠損・剥離あり。 第52回	
B1144	B90	屋根部	L30 SK619	(27.0)	18.8	8.2	—	—	—	—	—	—														体部分欠失。隠れ跡残存。	
屋根部各部位法量の平均値				23.0	12.5	7.4	28.9	11.4	19.0	25.9	6.8	7.2														A地区的屋根部も入れた平均値である。	

注意：括弧内は欠失等による不確定数値。一は計測・算出不可を示す。また、＊印数値は柄穴及び挿り穴の平均値。

第27表 B地区石塔計測値一覧表(第52回)



写真 第1図 A地区・B地区的全体航空写真（昭和60年11月段階）



写真 第2図 (上) A地区調査前全景(南から)、(下) A・B地区全景斜め写真



写真 第3図 (上) A地区上層遺構全景 (南東から)、(下) A地区北尾根テラス状墓域



墓道(75号墓から62号墓方向)



墓道(283号墓から313号墓方向)



A地区山頂部(182号墓をのぞむ)



右183号墓、左182号墓

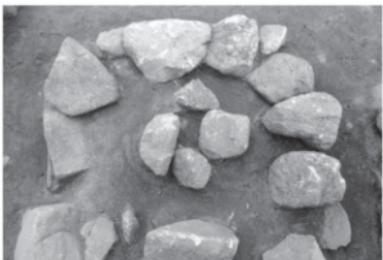


183号墓(南から)



13号墓

写真 第4図 A地区残存墓道の一部、山頂部182号墓付近、13号墓ほか



58号墓



109号墓



129～130号墓



208号墓(東から)



220号墓



351号墓(南から)



358号墓



405号墓

写真 第5図 A地区 58号墓、220号墓、351号墓ほか各種配石区画墓など



406号墓



411号墓



413号墓(東から)



414号墓



423号墓(南から)



425号墓



243号墓(西から)



243号墓(南から)

写真 第6図 A地区 406号墓、413号墓、423号墓、243号墓ほか



243号墓(方形周溝墓 南から)



SK531



SK532



SK558(南から)



SK568



461号墓(手前墳丘A)と462号墓(墳丘B)



461号墓完掘後(東から)



462号墓セクション(南東から)

写真 第7図 A地区土壤 SK531、火葬施設 SK558、B地区墳丘A・墳丘Bなど



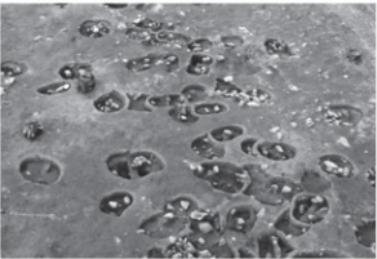
462号墓完掘後



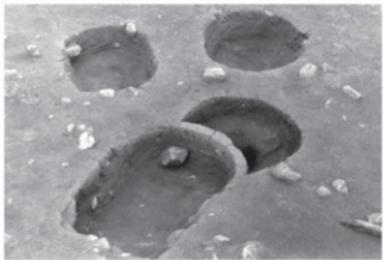
463号墓(填丘C)



463号墓完掘後



B地区土坑群



B地区 SK688～SK691



B地区からC地区をのぞむ



C地区 SK788



C地区 SK828

写真 第8図 B地区填丘C、土坑群、C地区土坑 SK788、SK828など



写真 第9図 B・C地区出土縄文遺物、A地区出土転用藏骨器など

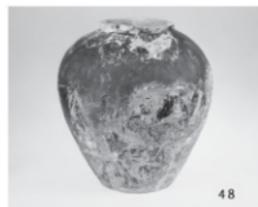


写真 第10図 A地区出土山茶碗、常滑産甕、土師器鍋、皿類など

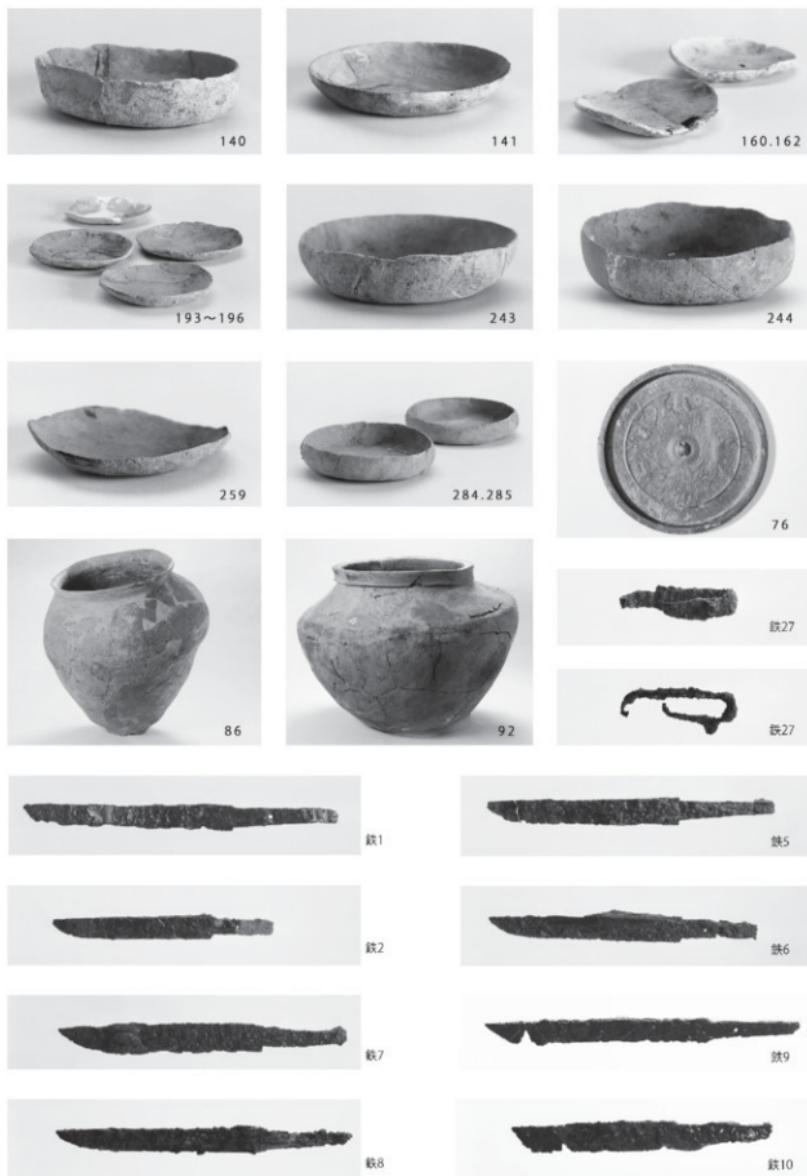


写真 第11図 A地区出土土師器皿類、和鏡、常滑大甕、刀子など

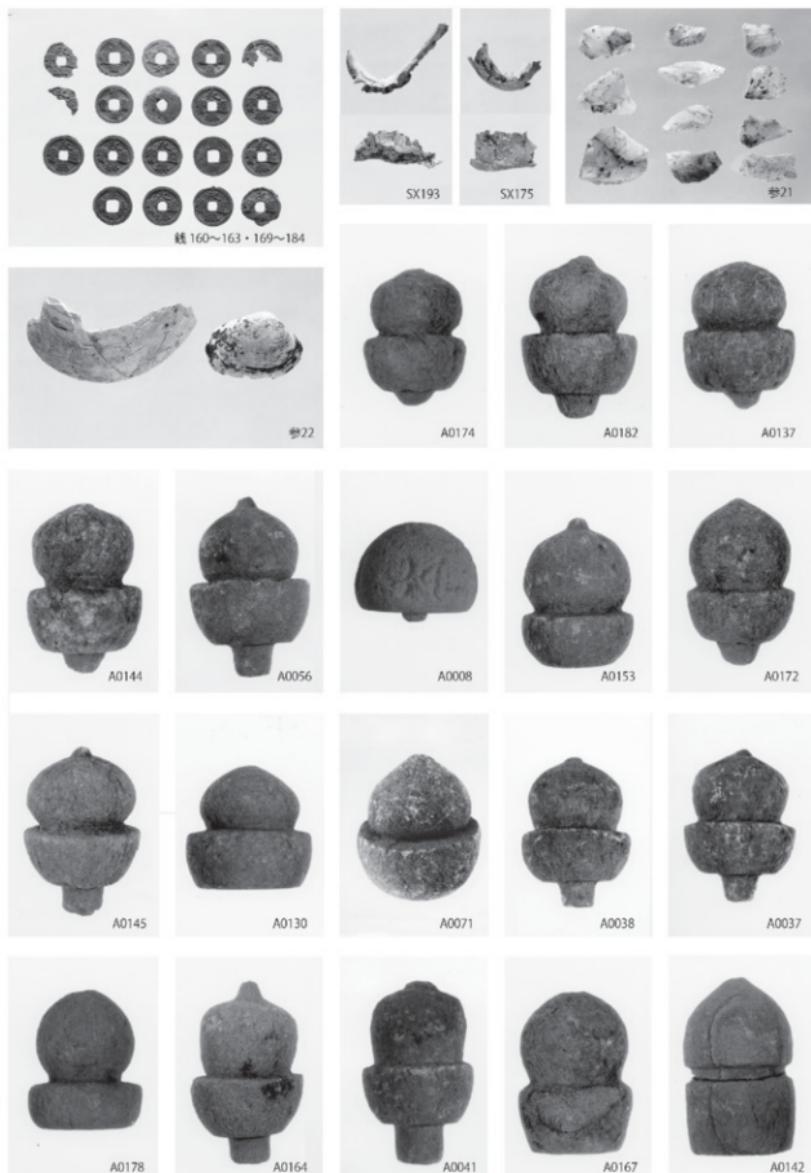


写真 第12図 古銭、人骨、石英、貝がら及び組立式五輪塔の空風輪各種

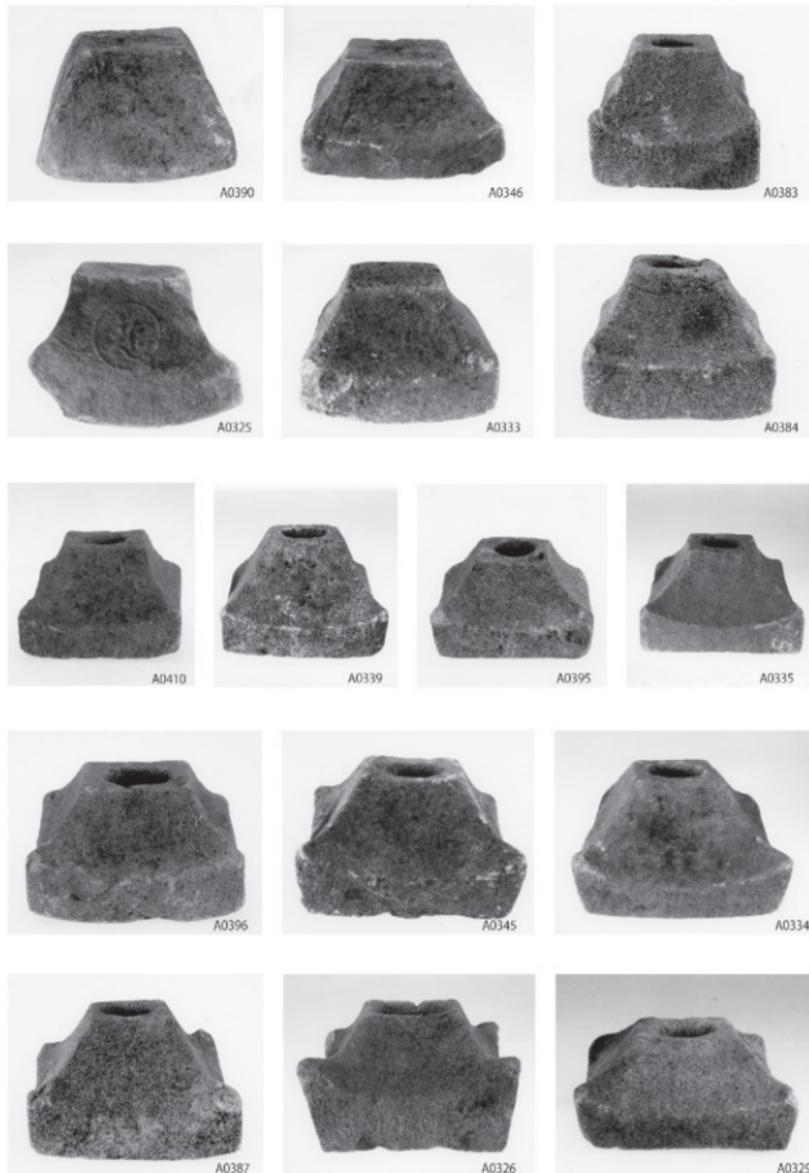


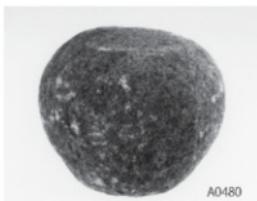
写真 第13図 組立式五輪塔の各種火輪



A0521



A0479



A0480



A0475



A0519



A0525



A0474



A0506



A0516



A0481



A0488



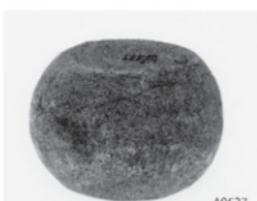
A0515



A0490



A0511



A0527

写真 第14図 組立式五輪塔の各種水輪

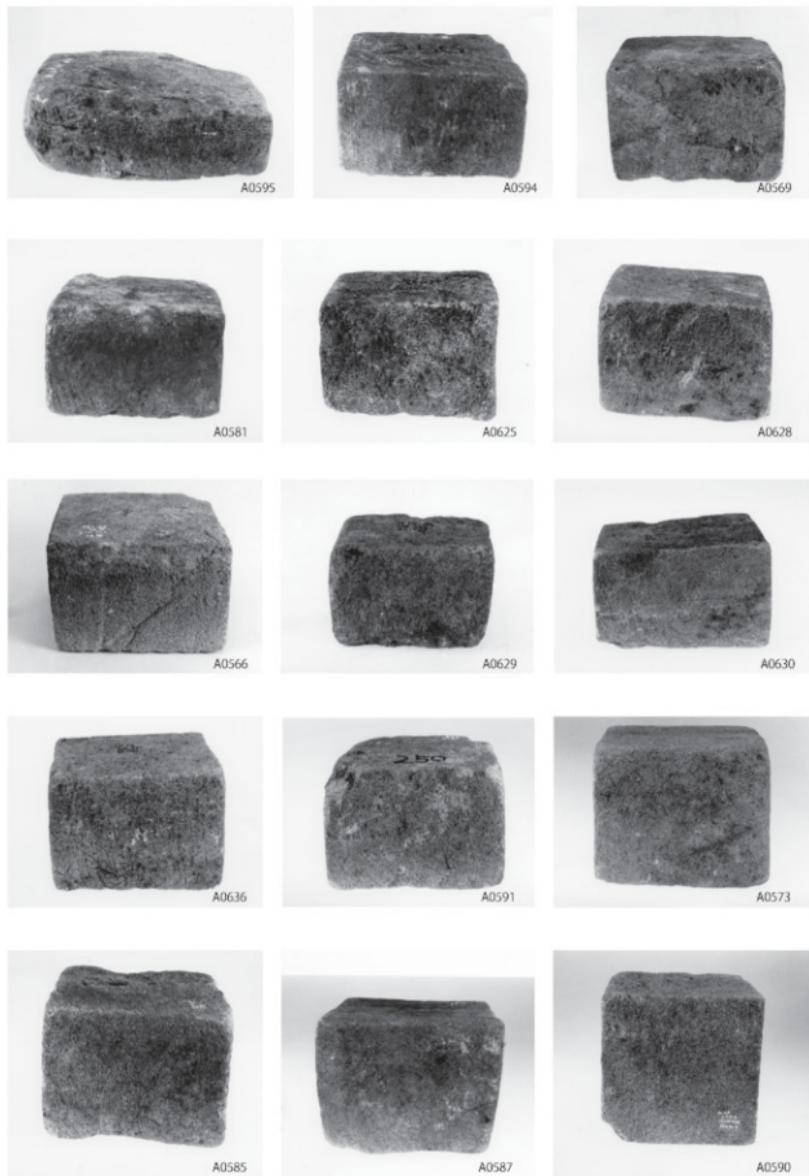


写真 第15図 組立式五輪塔の各種地輪



写真 第16図 三輪一石・二輪一石及び各種一石五輪塔



現地説明会風景（昭和60年11月16日午後）

発掘作業関係者の皆さん（昭和61年2月6日）

写真 第17図 宝筐印塔相輪部及び笠部、石仏、現地説明会風景ほか

報告書抄録

横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告

研究紀要第18－2号

2009(平成21)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社
